

# 奇譚クラス

■ 新しい風俗文献誌 ■

4  
月  
号



4

April - '68



# 待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

## 前篇続篇合編 花と蛇

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齡の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の饗宴を団先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によって八花と蛇の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四力年に亘って本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説『花と蛇』を是非お求め下さい。

### 団鬼六作「花と蛇」

収録内容見出し一覧

#### 前篇

- 第一章 発端 (静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
- 第二章 陥穽 (二度の嫌がらせ)
- 第三章 美人探偵 (落花紛々)
- 第四章 洗腸図 (強制屈伏)
- 第五章 救援者 (羞恥地獄観)
- 第六章 念の座 (京子の活躍)
- 第六章 救援の失敗 (逆転一瞬)

#### りもの

- 第七章 好餌 (京子の屈伏淫獣の餌)
- 第八章 悪魔の哄笑 (毒牙は迫る)
- 第九章 地下室 (悪鬼の饗宴)
- 第十章 翻弄 (屈辱と羞恥)
- 第十一章 蛇の執念 (裸踊り)

- 第十二章 姉妹危し (屈辱の狼ぐつわ)
- 第十三章 調教師 (遂に京子も)
- 第十四章 美津子受難 (二人の)
- 第十五章 結末 (美津子の屈伏)

#### 続篇

- 第一章 密室の秘密 (洗面)
- 第二章 脱走の失敗 (美津子の)
- 第三章 華やかな饗宴 (悪魔の)
- 第四章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
- 第五章 翻弄されるカップル (美少年と美少女)
- 第六章 一千万円の身代金 (正気づいた小夜子)
- 第七章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
- 第八章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
- 第九章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
- 第十章 奇妙な三々九度 (鬼女の嬌声)
- 第十一章 飼育される白い動物 (美しき敗北者)
- 第十二章 悪魔と悪女の悪業 (恐ろしい仕事)
- 第十三章 屈辱の地獄図絵 (猫とねずみ)
- 第十四章 逃走の恐怖と失敗 (風前の灯)
- 第十五章 悪魔達の残忍な所業 (朝の酒)
- 第十六章 落花無残の修羅場 (白いコンビ)
- 第十七章 淫らな美女の調教 (嵐の後)
- 第十八章 すさまじいシヨ (の展開)
- 第十九章 汚水にまみれた宝石 (流血)
- 第二十章 華々しき美女の屈伏 (一難去って)
- 第二十一章 対峙する美女と美女 (嵐に立つ)
- 第二十二章 あくどい陥穽 (修羅図)
- 第二十三章 羞恥図絵の展開 (復讐の生贄)

直接お申込み 定価五〇〇円 略号「花特」



限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第七集

山原清子  
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

頒価一部 一〇〇〇円(千共) 略号△美7▽

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王Ⅱ山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄じポーズ満載)

限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動!

女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開  
◎フアンの要望に依えて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版  
写真集

△美しき縛しめ▽ 第九集

〔女性刑罰拷問特集〕 △西洋篇▽

革具に拘束される女

媚態 七十二葉

頒価一〇〇〇円(送共) 略号△美9▽

モデルⅡ清楚な美木乃々子Ⅱグラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りのする革具或は褐色の牛革具によって嚴重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集▽ (日本篇) 「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へ。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・オンパレード 「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円(送50円) 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの方に提供するグラビア写真集の結集版です。発売以来数カ月、すでに残りが少なくなりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。



Osaka Japan

定價三五〇円

奇譚クラブ  
昭和四十三年三月二十日印刷 昭和四十三年四月一日発行 四月号(第二十二巻第五号)毎月一回一日発行  
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別級承認雜誌第二一〇号



☆ 今月の新しいモデルによる作品案内

「金原奈加子さん」

三月号の「奇クサロン」では、  
彼女は四月号の「ハサロン」でもそ  
の若々しい肢体を惜しげもなくフ  
ァンの前に開陳してくれました。

可憐表情全裸縛り

金原奈加子 略号 五〇〇円  
あどけない表情で憧れを抱きな  
がらも無垢の肌を始めて纏った縄  
いとまどいを感じて若々しい羞ら  
いを全身に漲らした緊縛姿態。

立縛り正面裸晒し

金原奈加子 略号 五〇〇円  
胸から足首に至るまで肌に喰い  
込むきびしい縄目を受けて正面向  
いて立たされた肢体は柔肌を赤く  
染め顔は羞らいた伏眼勝ちだ。

両手吊り全裸晒し

金原奈加子 略号 五〇〇円  
高々と吊り上げられたので全裸の  
肢体を真向うに晒して、穴があれ  
ば入りたき風情の可愛い表情。

雁字搦目後手縛り

金原奈加子 略号 五〇〇円  
肉づきのよい白桃のような臀部  
を晒して揃えた両腕両手首を、二

の腕と胸部をぐるぐると雁字搦目  
に縛り上げられた後手縛り背面。

股間縛り柔肌責め

金原奈加子 略号 五〇〇円  
始めて受けた柔肌に埋没する股  
間縛りでライトの前に転倒させられ  
羞らう開も床に転倒させられし  
表情の変化を微細に記録される。

猿ぐつわ開股責め

金原奈加子 略号 五〇〇円  
首縄の高手小手縛りで腰縄に股  
間縛り、口の間に噛ました猿ぐつ  
わという縛りスタイルで伸びやか  
な脚線を無理に開かせる責め。

豊満臀部強烈責め

金原奈加子 略号 五〇〇円  
まだ世の荒風を受けたことのな  
い豊かに息づく臀部を真正面に突  
き出せられて縄にあえぐ女体は美  
しい新鮮な果実を思わせるのだ。

強制全裸開股責め

金原奈加子 略号 五〇〇円  
二の腕の柔肌が拘束される程太  
股を開かせようとすれば僅かに観  
葉植物の葉が前を掩つてはいる。

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 五〇〇円

金原奈加子 略号 八〇〇円  
双丘に深々と喰い込む股間縛り  
で両手の自由を奪われた女体が畳  
上を転々とくわがって悶え続ける  
ありさまを俯瞰して捕捉する。

全裸縛りに羞らう

金原奈加子 略号 四〇〇円  
可愛い裸身を更に美しくする  
ように縄は女体をくびくする  
投げだした両脚と全裸を羞らうよ  
うに塵籠が僅かに陰翳している。

妊娠のお腹を見て

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八〇〇円  
妊娠して以来更に一層強い緊縛  
と露出を望むようになった彼女が  
出産までの僅かな一ときを燃えつ  
きようと激しく息づく瞬間。

縛られた妊婦横臥

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八〇〇円  
胎動する胎児をお腹に抱えなが  
ら厳しく高小手にお腹に縛られた女  
がして恍惚の境地を楽しむのだ。

被虐に燃える妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八〇〇円  
快活なMモデルとして志願した  
彼女が若い緊縛肢態と流暢な文章  
で出発し、ここに妊婦モデルとし

尚見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 五〇〇円

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八〇〇円  
縛られて尚も見せたい妊婦腹と  
という川柳の心そのままだに被虐と  
露出に限りない憧れを持つ恵子さ  
んの太鼓腹を晒した緊縛ポーズ。

◎新作カラー・フォト

八奇クサロン誌上にて度々姿を  
見せている愛知葉子さんの奇抜な  
アイデアによる新作天然色写真。

刑罰足枷開股縛り

カラー三枚一組 略号 八〇〇円  
愛知葉子 略号 八〇〇円  
グラマーな太股を八の字に高々  
と開けさせる足枷が首に連結され  
て締めつけられると、もうこれ以  
上は開けない所まで股は開く。

菱縄開股と鉄砲責

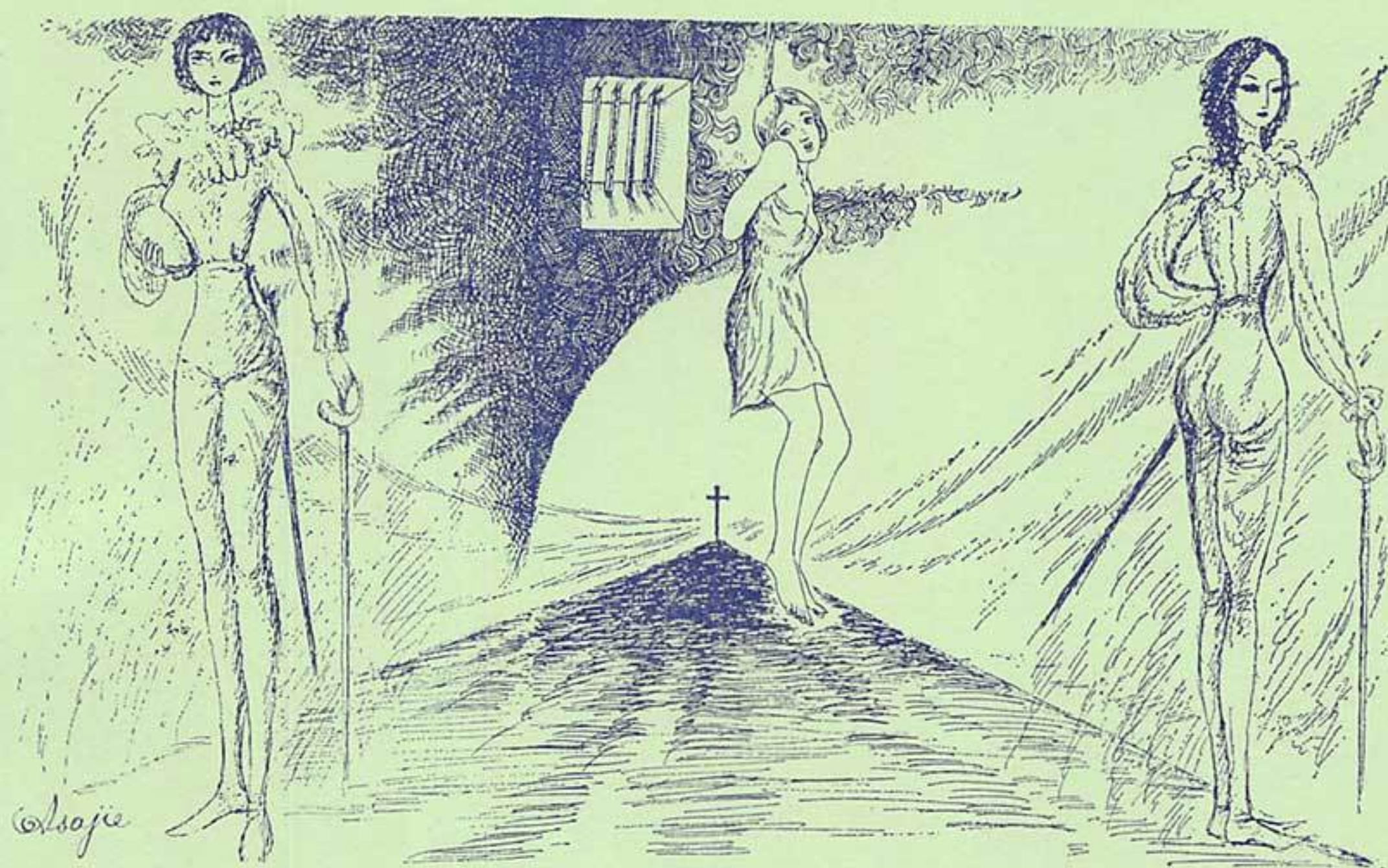
カラー三枚一組 略号 八〇〇円  
愛知葉子 略号 八〇〇円  
全裸でお白洲に引き出された女  
囚は菱縄をぎっしりと掛けられた  
開股を強制されて喘いでいる。豊  
裸身が鉄砲縛りで喘いでいる。

葉子の全裸を晒す

カラー三枚一組 略号 八〇〇円  
愛知葉子 略号 八〇〇円  
女性の羞恥を極限にまで露呈さ  
せるため全裸の女囚に思ひのま  
の姿態をとらせ、S男の視虐の楽  
しみをほしいままにしている。

◎お申込みは、すべて大阪市阿倍  
野郵便局私書箱第十四号、天星社  
箕田京二宛でお願いします。





# 奇譚クラブ

△第二二卷第五号・通刊第二三九号▽

(昭和四十三年) 四月号 目次

△本 文▽

本誌自粛の徹底……………	編集部……………(9)
贗作イーリアス……………	黒淵 嬰一……………(10)
SMきれぎれ帳△最近の刊行物より▽……………	黒井 珍平……………(31)
ビデオ・デンスケ・インタビュー……………	
『SM一〇〇問』△安井喜久子……………	塚本 記者……………(34)
あぶ・らぶす・こんと……………	水沢 登……………(41)
漫談千一夜物語Ⅱ薔薇と蜜蜂……………	田代 俊夫……………(46)
体験告白 スカタロジーに憑かれて……………	津川 博……………(56)
稿談 性風俗資料入門……………	斎藤 夜居……………(64)
風俗(特殊)雑誌のいろいろ(二) および犯罪科学の頃……………	
見果てぬ夢・マゾフォト……………	馬祖 漢……………(77)
戯文 振袖残華……………	牧 高志……………(78)
連載小説 心傷たむ遍歴……………	西条 操……………(86)



# 奇クサロン……………編集部構成(233)

生の迫力に痺れて……………遠藤百合子	サロン楽我記△第四十六回△……………辻村 隆	△詩▽『哀 唱』……………菊地 淳子	△詩▽『浣腸にみせられてうたえるうた』……………河村 操	釣り落した大魚(本文関連)……………金原奈加子	告白△縛り▽の△洗礼▽を受けて……………梶 天平	△詩▽『貧 乏』……………太田 三郎	論争を期待する……………麻生 保	紹介新聞投書欄より……………沢瀉 しの	「秘録おんな牢」を観て……………東山 映史	緊縛女優三羽鳥(美矢・辰巳・谷)……………鹿野 求二	M女性・いずこに……………編集部	編集部だより……………編集部	僕のイメージ画集……………室井亜砂路	「恋人募集」広告デザイン……………風流極道軒	小森白の「密通刑罰史」を見て……………高羽志 京	SM随想△映画△「血斗」より▽……………高羽志 京	△短信往来△……………夜乃 探郎	山上四郎氏へ……………橘 雅美	丸鬼土佐渡氏・村まり子様へ……………魔仁阿天狗	異常風俗小説とK誌の立場……………大江 武男	戸川昌子さんの奴隷になりたい……………宇都宮 宏	イメージ画・「いたぶりの歓喜」……………欲野 深志	団鬼六先生にお願い……………雪崎 京人	僕のイメージ画集……………宮城 昌子	「力斗」(女相撲)……………城野 紫門	「伸縛」(アクロ縛り)……………城野 道一	「共腹」(女性切腹)……………城野 道一	フォト通信「女と煙草」……………城野 道一
--------------------	------------------------	--------------------	------------------------------	-------------------------	--------------------------	--------------------	------------------	---------------------	-----------------------	----------------------------	------------------	----------------	--------------------	------------------------	--------------------------	---------------------------	------------------	-----------------	-------------------------	------------------------	--------------------------	---------------------------	---------------------	--------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	-----------------------

## SMカメラ・ハント△辰巳典子の巻▽

「陶醉をよぶひとの名は」……………辻村 隆……………(100)

雑話―わが琴線の響き……………原 砂土……………(122)

鬼六談義「男と女の話」……………団 鬼六……………(126)

ガンペッタ『復 讐』……………千葉 青鬼……………(136)

SM雑報 倒錯人間の世界……………丸鬼土佐渡……………(144)

マゾ・ストーリー「中立地帯」……………みはら・ひろし……………(148)

博ちゃん飲み喰べシリーズ……………津川 博……………(161)

「M的飲食物考現学」……………津川 博……………(161)

懸賞入選「白い肌のアザ」……………長井葉津子……………(164)

ピンク映画シナリオ「燃ゆる美女」……………団 鬼六……………(168)

懸賞入選「皮膚科の女囚」……………御園 京子……………(185)

S小説―痴人の糧―……………山本 一章……………(192)

告白「百合子のこと」……………滝 佐知子……………(200)

TV映画「剣」見逃した菱縄について……………河村 操……………(205)

女相撲物語 花の女斗美たち……………奮斗士好太……………(208)

濡れにぞ濡れし……………芳野 眉美……………(224)

連載S小説「花と蛇」(続篇第四十一回)……………団 鬼六……………(224)

読者通信……………編集部選……………(252)



今月のカラーフォト(天然色)新案内

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号一〇〇〇円  
出産前の僅かなチャンスを狙って待望のカラー写真の撮影ができた。縛りなしのヌードで妊孕美を天然色によって御覧頂きたい。

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号一〇〇〇円  
露出症気味の彼女にしてみても初めの妊孕で裸の腹部をカメラの前で晒すのは流石に恥づいて甘

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号一〇〇〇円  
豊満な女体に掛った縄、両足首を縛って無理矢理左右に開かせ文

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号一〇〇〇円  
棒の両端に左右の足首を思いき

全裸強烈逆エビ責

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号一〇〇〇円  
染めてしまえば、全裸の肌はピンクに

肉づきのよい女体が両手両足を背後で縛られてしまえば、全く無防備の前面が美しいカーブを描いてマニアの目を楽しませる。

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号一〇〇〇円  
全裸で何ら掩うものがない女体

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号一〇〇〇円  
後手縛りにされた両腕の間に突

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号一〇〇〇円  
両手両足を揃えて縛り女体を二

大の字と足挙げ責

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号一〇〇〇円  
両手も両足も一直線になるくら

首を高く頭の上になるまで挙げ

「安井喜久子夫人」モノクロ

カメラハントで脚光を浴びた安井夫人の、其の後の強烈縛りとマ

開股羞恥責め姿態

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
飼育よろしきを得た夫人は、誌

髪吊り強烈ムチ打

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
自慢の長髪をむざむざにも束ねて

片足引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
スベスベとした肌に喰い込む縄

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
鞭打ちの大好きな夫人のお尻を

柔肌にて炸裂する答

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
鞭打ちは奇声が室に響き渡る。

安井喜久子 略号一〇〇〇円  
高小手縛りで身動き出来ぬ夫

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
交又して縛った両足首を引

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
革製の貞操帯を股間にがっちり

痛打にもがく女体

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
革むちの痛打を盛り上った臀部

あぐら縛りの羞恥

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
安井喜久子 略号一〇〇〇円  
あぐら縛りというものは思

より女性にとつては羞恥に満ちた

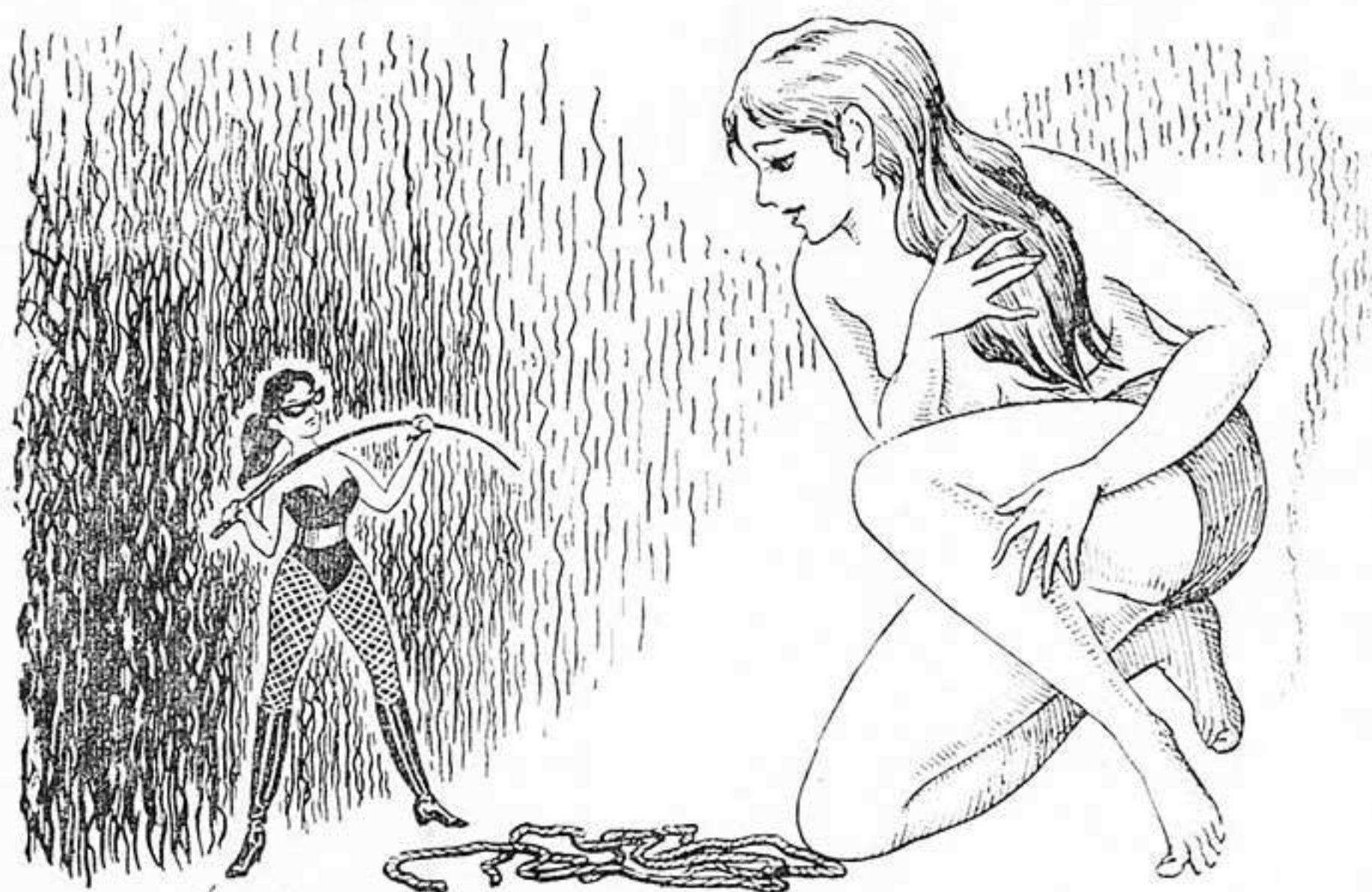
郵便局私書箱第14号 箕田京二宛



奇 譚 ク ラ ブ

昭和 43 年 4 月 号

(1968年・4月号<第22巻第5号・通刊第239号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。





# 贗作イーリアス

## 黒淵嬰

一

明治三十七年の、二月四日の日輪が、

富士の高嶺を照らす時、

高天原に風荒れて、

天の浮橋虹の橋、

『諸神集へ』と背に負へる、

いかづち太鼓打ち鳴らす。

何事ならむと月読は、銀月冠を傾けて、

夜の宮より駈け寄れば、

大綿津見は娘御の 豊玉姫を引き連れて、

海潮吹き分け登り来る。

天孫邇々芸、御妃の、木花開耶姫を連れ、

石凝度姫、豊受や、男神女神八百万。

天の安河隙も無し。

世に類例無く麗しき、大姫神の天照。

丈成す黒髪御角髪に、

結ひて雄々しく男装し、

八拳之剣、腰に佩き、千入五百入鞆負ひて、

天の波士弓振り起し、真白き御頬朱に染め、

天の磐座、踏みなづみ、玉を転す御声もて、

「聞け天津神、地津祇、 豊葦原の中津国。

瑞穂の国に危機至る。 高天原の存亡を、

賭して戦ふ時ぞ今。 我等力を一にして、

天佑神助を差し伸べむ。

此の儀如何に」と のたまへば

「然る可し」とて八百万。

我も我もと競ひ立ち、

八重たな雲を押し開き、玄海灘へ進み出づ。



天照大神は専制君主ではないようだ。日本の神々は甚だ民主的で、宣戦、媾和の如き重大事は公開討議で決定するらしい。

これは神代の昔以来の伝統である。

「お上。如何なされました。お顔の色が勝れませぬが……」

昭憲皇后が問いかけた。

「今、国交断絶を裁下して来た」

沈痛な表情の明治天皇。

「御勝算の程を承り度う存じます」

年長の皇后の方が寧ろ毅然として見えた。

「判らぬ。大山は六度勝って四度負けると申した。山本は艦隊の半分を失う覚悟だ。曾祢<sup>註3</sup>は外債募集に成功する確信を持っていない」

「併し開戦の御聖断は既に下りました。綸言汗ノ如ク、出デテ還ラズ。勝たなければ国民に相済まぬ事となりました」

「東洋平和は即位以来の悲願だったのだが。若し不首尾となった時は皇祖皇宗に何と御詫びしたらよいだろうか」

偉大な明治時代に神権を振って君臨した大帝王の姿を想像してはならない。

地図を前に戦略を練る大元帥でもない。

此の天皇こそは平和を愛しつつ保疆安民に心を砕く東洋的聖賢君主の典型だった。

註1 大山巖。参謀総長。

註2 山本権兵衛。海軍大臣。

註3 曾祢荒助。大蔵大臣。

二月五日。

遼東半島の上に拡る黒雲。

人間の眼には見えないが、雲上には三十柱の神々が居並び、下界を眺めている。

オリムポスの神々より成る遠征軍である。

中央の玉座に在る半裸の巨漢は主神。

傍に並ぶは副将兼旗手、威厳と魅力と美の完徳を兼備した神々の女王主女神。

主神の後に侍立する豪傑はヘルクレス。

主神の二輪馬車を預る馭者は暁女神。

主神の伝令、商業神。

主女神の馭者、青春女神。

主女神の伝令、虹女神。

主神の弟で海軍提督の海洋大王。

その妻、海洋女王と息子の海王子。

海洋女王の父親で海の老神は深淵神。

主神の第二夫人日月母神と、その双生児。

太陽神と狩獵女神。

蛮勇を誇る武神と、従者の暴力女神。

文武両道の軍女神と、従者の勝利女神。  
神軍の偵察兵、北風神、南風神、東風神、西風神。

此の大遠征を記録し、後代に伝える任務を以て学芸女神九柱中から選抜特派された従軍記者は歴史女神と叙事詩女神。

輜重や整備の特務兵も完備している。

神聖食糧を運ぶ農業女神。

神聖飲料を持つ葡萄酒神。

冥府を代表する閻魔女王は農業女神の娘であり、母親の任務を手伝いながら、衛生兵を兼務し、戦死者を地下に送る役も受持つ。

武器、車輛の整備を担当するは鍛冶工神。

彼は跛者である。故に工具や資材を輸送する助手が必要、という口実で従軍したのが妻の麗美女神。戦闘能力は皆無。トロイ戦争の時に主神から闘争介入を厳禁されたにも拘らず、事変と聞くと必ず駆けつける御転婆嬢。

浮気性で慌て者で気が短く、誰とでも喧嘩しては、すぐ泣かされる弱虫。

彼女の息子で未成年の愛神までが殺傷効果を欠く恋愛の矢を把って護衛を称している。

総勢の半数が女神であり、これがオリムポス軍の特徴である。

オリムポス十二神中十一神が出征した。聖



火を守る竈女神<sup>ヘスチア</sup>だけが留守を固めている。

「下界を見よ。連互する陵堡、壘濠。林立する巨砲と機関銃。そして電気鉄条網と地雷。鋼鉄の軍艦。五万の精兵。東洋の大戦は旅順の城を挟んで行われよう」

主神<sup>ゼウス</sup>は盃を把った。

「旅順の城はイリオンよりも堅く、ロシヤ軍はトロイ兵よりも強い。オリムポスの諸神。我等も高天原の軍を破って天界に名を揚げようぞ。戦は近い。今宵は大いに飲め」

愛嬌ある青春女神<sup>ヘーバー</sup>が神聖飲料<sup>ネクター</sup>を酌した。  
太陽神<sup>アポロ</sup>が豎琴<sup>ハープ</sup>を奏し、学芸女神<sup>ムーサイ</sup>が歌った。  
麗美女神<sup>ヴィーナス</sup>が舞い、神々は楯を叩いた。

註4 曉女神のギリシャ名はエオスだが、本篇ではラテン名オーロラを採用した。

註5 狩獵女神のギリシャ名はアルテミスだがラテン名ダイアナが普通女性名としてよく知られているから、これを使用した。

註6 勝利女神のギリシャ名はニーケーであるがラテン名ヴィクトリアが普遍的だから此方を採用した。

註7 麗美女神はギリシャ名アフロディテだがヴィーナスが余りに有名だから英音にしておいた。

註8 愛神のギリシャ名はエロス。ラテン

名はクピド。英音はキューピッド。

× × ×

日本は東洋の小島国であり、ロシヤは全世界陸地の六分の一を領有していた。

日本の歳入は二億五千万円。ロシヤの年間予算は二十億円だった。

日本の常備陸軍は十三箇師団。二十万人。ロシヤの常備兵二百七万。予備後備五百万。

日本海軍の合計排水量二十六万噸。ロシヤ海軍は五十一万噸。その内、極東到着済のもの十九万噸。他は続々廻航中だった。

これで果して比較になるのか。

大ロシヤ帝国の頂点に、ローマ帝国の後継者を以て任ずる皇帝<sup>ツァー</sup>が居た。ニコライ二世は敬虔、美貌、善意の君主だった。併し龐大且つ旧式な組織中で出来る事は神に祈る事だけだった。彼は平和を（より正確には家庭的団樂を）愛した。だが廷臣達からは「東洋の小国に対する譲歩は大帝国の体面を失墜する」と信じ込まされていた。

× × ×

二月六日。

高天原の戦士二十騎は瑞雲を駆り、黄海上空を北上していた。

中軍の総帥は男装の処女、天照大神。人間

なら四十才か。溢れる気品と威厳。そして端正な容姿。正しく高天原の女王。

副将は弟の月読神。

参謀長は智慮無限の老神、思兼神。

司令部衛兵は剛力無双の手力男神<sup>たちからおの</sup>。

いかづち太鼓を背負った鼓手は武御雷神<sup>たけみかづちの</sup>。

尖兵は風袋を背負った風神、科戸神<sup>しなどの</sup>。

後衛部隊の指揮官は若い天孫、邇邇芸尊<sup>ににぎの</sup>。

副官は木花開耶姫<sup>このはなさくや</sup>。人間なら二十才か。

淡路島の久しき眠りから醒め、子や曾孫の後見にと駆けつけた老祖は伊邪那岐神<sup>いざなぎの</sup>。

兵糧を担送する輜重兵は豊受姫<sup>とようけ</sup>。オリムポスの農業女神<sup>デメテル</sup>に相当する食物の神で、内宮の

天照大神と並び、外宮に鎮座する大女神。

整備兵は石凝度姫<sup>いしよりど</sup>。嘗て八咫鏡<sup>やたの</sup>を磨いた金

属加工の名手で、オリムポスの鍛冶工神<sup>ヘフェストス</sup>にも

劣らぬ女流技術者である。

前衛隊の司令は猛将須佐之男神<sup>すさのおの</sup>。

出雲一族がこれに従う。

妻の櫛名田姫<sup>くしなだ</sup>。人間に譬えれば三十五才。

正嫡大国主神。別称大黒天。

八上姫は人間なら二十五才だろう。

野性的な美少女は須佐之男の娘須勢理姫<sup>すさのおの</sup>。

道案内として先導する老神は、海の支配者

大綿津見神<sup>わたつみの</sup>。補佐するは、その娘豊玉姫<sup>とよたま</sup>。



豊玉姫は俗称乙姫様。おとひめ山幸彦に嫁し、神武

天皇の祖母となったが離婚して海に帰った。

以来気俎な独り暮らしだが時々慾求不満を起し

人間を相手に情慾を発散する。浦島太郎を竜

宮に連れ去って三年間（三百年だったか？）

困った事もある。絶世の美女だが怒り易い。

蛇にでも鰐にでも化身する女忍者でもある。

中軍の特派増援隊は強剛の二神。

真赤な顔。鼻の高さ七握。猿田彦である。

従う日本一のセクシー・グラマーは巫女の開

祖天宇受女。あめのうすめ

すべてで二十神。遼東を望んで疾駆する。

×

×

×

二月七日。

神々の眼下を一群の艦船が航行する。

戦艦六隻、装甲巡洋艦六隻、巡洋艦八隻、

駆逐艦十九隻、通報艦二隻。

日本海軍の第一、第二艦隊である。

聯合艦隊司令長官東郷平八郎は旗艦三笠の

艦橋に立つ。目指すは旅順口。

停泊艦隊に対する宣戦布告前の奇襲は昭和

十六年の真珠湾が最初ではなかった。

×

×

×

二月八日の深夜。

「高天原勢の夜討にございます」

海洋女王アマビトリテが夫の神を揺り起した。神聖飲料

に泥酔した海洋大王は戦艦ツェザレウィチの

大艦上に眠り込んで未だ醒めない。

途端にロシヤ最大の戦艦は艦底から艦頭迄

震動した。魚雷が命中したらしい。海洋大王

は結氷点の海中へ抛り出された。撥ね起きて

自慢の三叉鉾を握んだが慌てて逆に握ったの

で自分の足の甲を突き刺した。

「我は東洋の海を支配する須佐之男。黄海の

制海権は譲るまじ。海洋大王殿に見参」

十拳之剣が虚空に旋風を捲き起した。辛く

も鉾の柄で受けたが酔っているので日頃の武

勇が発揮出来ない。

「お相手仕ります。妾は海洋大王の妻」

海洋女王は終夜武装を解かずに警戒してい

た。白麻の単衣キトンに紺青の戦袍。真珠と珊瑚を

飾った金冑。小型の三叉鉾を把り延べて須佐

之男の剣を遮った。

「我も須佐之男の妻。相手に不足は有らじ」

櫛名田姫が広戈を振って打ち掛かる。黄金

山上、女神の対戦に閃々と火花が散った。

「敵襲、敵襲」

狂ったように貝の喇叭を吹き鳴らすのは少

年喇叭手海王子トリトン。その音を目標に大国主神が

斬り込んだ。海王子は忽ち遁げ出す。

綿津見神わたつみのは深淵神を相手に選んだ。これは

年寄り同志の冷水合戦。

夜を支配する狩獵女神は歴史女神を伴って

巡検中だった。白玉山を発して二〇三高地か

ら松樹山、盤竜山、鶏冠山と廻り港口に至っ

た時、須佐之男一党の夜襲に遭遇した。海水

を噴き上げて挑戦するは豊玉姫である。一跳

躍すると見る間に、大蛇と化して襲い掛る。

狩獵女神は森の処女。月光色の膚。プラチ

ナ・ブロンドの長い髪を無難作に留め、左肩

から腰迄を蔽う短い獣皮の胴着。革の編靴。

黒い外袍マント。腕も脚も露し、銀弓に短剣という

軽装だがオリムポス随一の速技を誇り月女神

にも闇黒女神にも変化する妖術師。黒い外袍

一旋するや直ちに大鴉となり暗天高く飛翔す

る。正しく女忍と魔女の一騎討。

「須佐之男の娘、須勢理姫」

振鈴の如き声が呼びかけた。挑戦された歴

史女神は従軍記者として参加した非戦闘員。

護身用の短剣しか帯びていない。突然の会敵

に一度は驚いたが相手の身長が半分にも及ば

ないのを知って武器を把り直した。

此の頃、海泡の精麗美女神は老虎尾灯台の

海辺に下り、身体を洗っていた。酔眼朦朧。

行歩蹢躅。併し化粧だけは忘れない。愛神に



キトン  
単衣を持たせ、海中に半身を沈め、丈より長い金髪を解き、香油を塗り、爪を光らせ……  
漸く岸に上って身体を拭き、膚着を巻き始めると眼の前に巨大な二神が突っ立った。猿田彦と天宇受女だ。仰天した麗美女神は逃げようとして自分の金髪を踏みつけ、港口の浅瀬へ真逆様に転倒した。

日本一のセクシーグラマーとオリムポス最高の肉体美女が水中で猛然と揉み合った。髪を掴み、乳房を締め合い、腹を蹴り上げ……人間の眼には見えないが、若し見えたら壯観を極めただろう。併し、  
あめのうずめ  
天宇受女は天孫降臨の先導を務めた戦士。麗美女神は美容体操しか知らない遊蕩女。とても勝負にならない。

「愛神。ママを助けて頂戴」  
振じ上げられた麗美女神が悲鳴をあげた。息子の愛神が無効果な鉛の矢を放つ。  
ゼウス  
「主神様を呼んで来て。早く」  
ヴィーナス  
麗美女神の柔い両腕は既に背中中で重ねられている。

豪勇猿田彦が天の逆錐を一振りした。  
エロス  
愛神は後も見ずに逃げ去った。

× × ×  
戦艦ツェザレウィチは傾斜十八度で坐礁。

戦艦レトヴィザンは港口附近に擱坐。巡洋艦パルラーダも岩に乗り上げた。

× × ×  
須佐之男は海洋大王を終始壓迫した。美少女須勢理姫は剣尖鋭く歴史女神を突き捲り、幾箇所も擦過傷を負わせた。

× × ×  
櫛名田姫と海洋女王は対等の好勝負。

× × ×  
豊玉姫と狩猟女神は互に秘術を尽し、山角上空に到る迄転々と争闘して優劣決せず。

× × ×  
「主神の娘を生捕ったり」  
あめのうずめ  
天宇受女が勝名告をあげ、高天原諸神が勝鬨を揃えた。麗美女神は膚着も失い、濡れた裸身を後ろ手に縛られて大声で泣きながら曳き立てられている。

× × ×  
二月九日。  
第二十三旅団の四箇大隊は仁川に上陸。仁川港内に封鎖されたロシヤ巡洋艦ワリヤグ、装甲砲艦コレーツは汽船スングリーと共に自沈した。(ワリヤグは戦後に日本側が浮揚し、宗谷と改名された)

× × ×  
月読神が言った。

× × ×  
「姉神。須佐之男が成功した模様です」

× × ×  
天照大神が雲を排して立ち上る。二月九日

の太陽が鏡の如き黄海を燦然と照らした。

× × ×  
三笠、朝日、富士、八島、敷島、初瀬。

× × ×  
東郷平八郎の直率する日本海軍全戦艦が晨陽を背負って旅順沖に忽然と出現した。

× × ×  
「余の娘を奪り返せ」

× × ×  
白玉山頂で酔いから醒めた主神が言った。

× × ×  
「心得ました。子供達よ、随いて来なさい」  
銀柄の長槍を把って二輪馬車に跳び乗ったのは主女神。孔雀羽の陣羽織が翻える。

× × ×  
金の八本幅。銀の車輪。馭者は青春女神。足の迅い虹女神が車の傍を遅れずに走る。暴力女神の駆る二輪馬車には武神。侵略戦争の守護神は青銅の胸甲に真鍮の兜で武装し

× × ×  
二頭の悍馬恐怖と潰走は鼻孔から火を吐く。続いて城壁の防禦者軍女神。パラスの生皮を剥いだ鎧、ゴルゴンの生首を打った丸楯。蛇桿の金槍。馬尾の冑。天馬の牽く戦車。それを操る美しい有翼天女の勝利女神。

× × ×  
東郷艦隊が砲撃を開始した。

× × ×  
黄金山砲台が撃ち返す。

× × ×  
ロシヤ艦隊は港内に遁げ込もうとするが、港口に擱坐した戦艦レトヴィザンに邪魔され



て混乱し、被弾続出している。

× × ×

天照大神が八拳之劍を抜き、主女神を邀撃した。最高女神互角の対戦。閃光は砲火か。

天に轟く音響は十二吋砲の爆声か。

武神の相手は日本一の美男子月読神。

オリムポスの常勝武將軍女神に対するは高

天原随一の猛將須佐之男。

櫛名田姫は青春女神と斬り結ぶ。

美少女須勢理姫は勝利女神に立ち向う。

八上姫は暴力女神と対戦。

大国主神は虹女神と渡り合う。

後ろ手に縛られた麗美女神が救助を求めて

大声に叫びながら暴れだした。

「賑やかだな。少し静かにして貰えないか」

猿田彦が振返った。天宇受女は苦笑する。

縄尻を曳いて金髪美女を引き倒し、咽喉を締

め、口を開くと手早く布片を詰め込んだ。更

に麗美女神の締めていた刺繍の飾帯を抜き、

唇の間へ幾重にも割り込ませる。美しい顔が

苦痛に歪み、呻吟と共に涙の雨が流れた。

× × ×

装甲巡洋艦バヤーンが炎上した。

戦艦ペトロパウフスクに爆煙が騰る。

巡洋艦ノーウイク、チャーナ相次ぎ被弾。

× × ×

美少女須勢理姫が勝利女神を突き捲った。

八上姫の劍は暴力女神の下腹部を貫いた。

九千の戦士が発する如き大叫喚は遼東の天地

に響き亘る。併し日露兩軍共、砲声に聳せら

れて気附かない。

噴出した神聖血液は天日を掩う。だが下界

からは砲煙に遮られて見えない。

× × ×

二月十一日。大連湾で機雷を撒いていた敷

設艦エニセイは自設水雷に触れて爆沈。

二月十二日。救助に赴いた巡洋艦ボヤーリ

ンも又エニセイの敷設した機雷に掛り沈没。

斯くて開戦時、戦艦七隻、装甲巡洋艦四隻

巡洋艦七隻、駆逐艦二十五隻、敷設艦二隻、

海防艦砲艦十二隻を擁し、日本海軍と対等だ

ったロシヤ太平洋艦隊は七隻を欠いて忽ち港

内に封鎖される事となった。

日本海軍は二月十七日迄に十四隻のロシヤ

船舶を捕獲している。

二月十九日。太平洋艦隊司令長官スタルク

中将は解任され、悄然と旅順を去った。

× × ×

「曲者が潜入したぞ」

主神が電光を投げた。黒麻で頭から足先迄

包んだ豊玉姫が閃光の中に浮かび上った。

狩獵女神と閻魔女王が直ちに襲い掛る。

× × ×

五隻の汽船が港口を目標に突進していた。

天津丸。報国丸。武揚丸。武州丸、仁川丸。

探照灯が船影を捉え、数百の砲門が火を吐い

た。巨弾は檣を倒し、舷側を貫く。舵器を損

傷して行動の自由を失うあり攔坐するあり。

併し決死の七十七士は屈しない。仁川丸と

報国丸の二隻は遂に港口へ達して自沈敢行。

× × ×

狩獵女神が大王蛇に変化して挑戦した。

豊玉姫は直ちに八股大蛇となって反撃。

狩獵女神は九頭大蛇に転身する。

電光閃々。雷鳴轟々。

× × ×

二月二十四日の朝が来た。

二隻の閉塞船は港口直前に沈没している。

旅順港口は全幅二百七十米。その内、巨艦通

過可能の深水道は僅か九十一米。若し五隻全

部が突入に成功すれば此の一挙で閉塞も完成

する処だった。

目的は果せなかったが士気の相違を如実に

示し、然も閉塞隊の戦死者僅か一名だった。

× × ×





干潮になると報国丸の船橋が海面に露出した。ロシヤ海軍の一将校が調査するとペンキで描かれた一連のロシヤ文字が発見された。「記憶せよ。我はタケヲ・ヒロセ」

二重菱に縛られた麗美女神は天照大神の前に曳き据えられた。  
「敵とは雖も主神の御娘たる方です。縄目は」

緊しくしても侮辱を加える事はなりませぬ」  
金髪美女は暴れた為に腰布も破れ果て、日本式の褌を締めさせられ、胸前も蔽えず、辱かしそうに身体を折り曲げ、蹲っている。

二月二十五日。日本海軍の第三戦隊はロシヤ駆逐艦ウヌシテリヌイを鳩湾で撃沈した。

三月一日。

主神「弟よ。敵を侮って不覚をとったな」

海洋大王「酔っていたからだ。尋常に立ち合えば負けはせぬ。併し人間に見られたら醜態だったろうな」

主神「我等は次元の異なる空間に立っているから、此方から人間界は見えても、向うから見られる事はない。今度は勝てよ。傷は、何うだ」

海洋大王「もうすぐ治る。それより、暴力女神の容態は何うだ」

主神「彼女も神だから死ぬ

事はあるまいが、三年は、立てないだろう。暴力女神は年中負傷しているから、それでもよい。麗美女神の方が、可哀想だ。繊弱な身体で敵に捕えられ、もう二十日間も、縛られた俤らしい」

海洋大王「復讐だ。損傷した戦艦の修理も順調に進んでいる。もう一つ、良い報らせがあるぞ。あれを見る。旅順に、急行列車が到着しただろう」

主神「白髯の老将が下りたな。何者だ」

海洋大王「クロンスタット鎮守府長官。ステパン・オシポウィッチ、マカロフ中將。ロシヤ随一の名将だ。あれが、太平洋艦隊司令長官になると、東郷も今迄のようには行かないぞ」

主神「もう一人、芸術家風の老人が居るな」  
海洋大王「学芸女神達よ。誰か知らないか」  
歴史女神「学芸神殿の記録に依ればマカロフの友人で戦争画の大家ワシリイ・ヴァレスチヤギン画伯です」

叙事詩女神「嘗て露土戦争に従軍して、プレヴナの戦を描きました。モスコイ炎上を眺めるナポレオン等の、傑作も有ります。今度は旅順要塞戦の実況を、描こうとして来たのです」



マカロフの着任で旅順港内の気風が一変した。戦艦の修理は促進され、巡洋艦は出撃に備えて常時汽釀し、駆逐艦は交替で港外を巡航した。三月十日、彼我の駆逐艦隊が衝突し、舷々相摩す接戦の結果ロシヤ側がストレンジシチーを失って敗退したが、悔り難い戦意と行動の積極化は大いに日本海軍を驚かせた。

× × ×  
麗美女神が杭に繋がれている。両手は背に廻り、足首も膝も揃えて縛られている。

剛勇猿田彦が逆鉾を持って見張っている。脱走も抵抗も出来る筈がないのだが……視線が合った。麗美女神は此の機会を待っていた。最大の武器は未だ使われていない。男性を魅惑させずにはおかない秋波。

× × ×  
猿田彦は眩暈を感じた。

恍惚、忘我、そして甘美な陶醉。

× × ×  
麗美女神の唇が割れて白い歯並が見えた。後ろ手の掌が軽く招いている。

× × ×  
猿田彦は惹きつけられるように歩み寄り、麗美女神の縄目に手を掛けた。

「解いて頂戴。好きなようにしていいから」  
途端に大きな音。

猿田彦の頬を張り飛ばした者が居る。振り

向くと妻の天宇受女が頭から湯気を立てていた。猿田彦の赤い顔が一層赤くなる。

× × ×  
麗美女神は恨めしそうに下を向いた。

× × ×  
三月十五日。

第一軍司令官黒木大将が鎮南浦に上陸し、第十二師団を掌握した。第一軍を構成する近衛師団と第二師団も進出中である。

× × ×  
智慮無限の思兼神が言った。

× × ×  
「麗美女神に惑わされたのは猿田彦の罪ではない。胸に締めている慕情帯の所為じゃない。」

革製の帯は乳房を形よく持上げるものらしい。天宇受女が帯に触れた。すると麗美女神は天地が割れる程の大声で泣きだした。

× × ×  
「慕情帯には愛情、憧憬、恋慕、手管、魅力が縫い込んである。如何なる男も逆えない」

× × ×  
麗美女神は身を揉んで暴れたが腕力が一桁違う上に手も足も縛られているので何うする事も出来ない。金糸銀糸で刺繍した革帯は忽ち奪われ、叫び続ける口腔には固く猿轡が噛まされ、魅惑の両眼は厚い布で掩われた。

× × ×  
三月二十七日午前二時三十分。

× × ×  
黄金山の探海灯が四隻の船影を捕捉した。

千代丸、福井丸、弥彦丸、米山丸。

決死の乗員六十五名。

第二次旅順港口閉塞隊は突入を開始した。

名将マカロフは此の事あるを期し、機雷を敷設し、砲台の備砲を増し、港口附近に砲艦や駆逐艦を待機させていた。奇襲は不成立。強行あるのみ。四隻は蜂巣と化しつつ進む。

千代丸先ず黄金山下に爆沈。

福井丸は水道中央部に達したが、正に自沈せんとする瞬間、駆逐艦シーリヌイの魚雷が命中して急速に着底した。

弥彦丸、米山丸が相次いで港口左半部に沈んだ。乗員は短艇に移り弾雨下を漕ぎ還る。

福井丸の短艇だけが遅れていた。半没状態の船橋に立って部下の名を呼び続ける一将校がある。砲弾は此の一点に向って集中した。

× × ×  
「又もや遊撃兵が来たぞ。今度こそ遁すな」

× × ×  
主神が電光を発して闇を照らした。黒装束の豊玉姫が黄金山の麓で発見され、これに向ってオリムポス方が四方から襲い掛った。

× × ×  
狩猟女神は闇黒女神に変身した。松明と鉤棒と蛇桿を持った三身六臂の大妖怪。

× × ×  
隠れ帽子を被った闇魔女王は地獄犬を伴って追跡する。



足の早い商業神と虹女神。更に北風神。南風神。東風神、西風神の風摩組。

忍法巧者の豊玉姫も重囲の中で悪戦苦闘。遂に、疲れた豊玉姫の上へ大勢が折重り、狩獵女神が後ろ手に振じ上げて縄を掛けた。

福井丸の舷側から短艇が離れた。艇尾に立った指揮官は降り注ぐ弾雨から部下を蔽うような姿勢で尚も福井丸の方を見ている。

俄然一発の砲弾が将校の頭部を擦過した。血漿の噴霧霽れて見れば最早人影無く、一片の肉塊を留むるのみ。

後ろ手に縛られた豊玉姫が曳き出された。主神・主女神・海洋大王等の諸神が居並ぶ。豊玉姫は少しも臆せず、自由を奪われながら雄偉な肩を揺すって主神以下を睨み返した。

三月二十七日の朝日が昇った。

マカロフは艦隊主力を率いて港外に出撃し閉塞不成功を行動で以て示した。

東郷も直ちに第一戦隊を直率して急航。

両艦隊の主将が砲戦距離に直面した。併し共に憚って軽挙せず。

東郷は相手を外洋に誘致掩撃せんと策し、

マカロフは砲台火力圏への誘導を計る。

二大名将の対陣に随って神々も総出動。

空虚な陣営内に豊玉姫が革紐で縛られ、杭に繋がれて蹲っている。

叙事詩女神と歴史女神が見張っている。

外では関の声。武具の喧騒。

豊玉姫は眼を閉じて身動きもしない。

だが忍法の巧者は二女神の隙を窺いながら爪で後ろ手の縄目を探っていた。

東郷は干潮時を利用して鳩湾に侵入した。

旅順軍港の港口は干潮時水深二十七呎に過ぎずマカロフの戦艦は出動出来なかった。此の間に第一戦隊は老鉄山を越えて市街と港に対し存分の間接射撃を加えた。

蹲っていた豊玉姫が突然縄から手を抜き、

躍り上って歴史女神の牌腹を衝いた。驚いた叙事詩女神が短刀に手を触れるより早く、豊玉姫の丈夫な腕が咽喉を締め上げた。

旅順港口に福井丸指揮官広瀬少佐の遺骸が浮かんだ。マカロフはこれを篤く埋葬した。

前線から引揚げて来た狩獵女神が異様な唸り声に気附いた。陣幕の中を見ると豊玉姫は影も無く、単衣を剥がれた芸術女神達が裸身を後ろ手に縛られ、猿轡を噛まされて呻いていた。身長も体格も同じ程度の二女神は、着衣を裂いて繋いだ布紐で首から胸、腹、腿、膝、足迄、棒の如く巻き締められ、長い髪を結び合わされて転がっていた。

三月二十八日。

北朝鮮の定州に於て日露両軍の騎兵が衝突し、最初の本格的陸戦を交えた。

作戦会議の席で豊玉姫が報告している。

「主神は白玉山上に本営を置き、主女神以下が旅順要塞を守り、日月女神の一族は金州方面を固め、海洋大王の一派は海正面を巡廻している模様です。海洋大王の巡行路には一定の規則性があり、旅順港外の某地点に伏兵を置けば奇捷を得る見込があります」

四月十二日深夜。

第二駆逐隊に護衛された特設敷設艦蛟竜丸が旅順港口に接近していた。指揮官は小田式水雷の発明者小田喜代蔵中佐。十二箇の機雷



を密かにルーチン礁附近に沈置する。

東郷は二回の対面でマカロフの戦術を観破した。ロシア艦隊は港口に自ら敷設した機雷原を避ける為に一定の航路を採らざるを得ない。其処に乗すべき隙が有る。

× × ×

須佐之男は一族を率いてルーチン礁附近の海底に潜った。櫛名田姫、大国主神、須勢理姫、豊玉姫、八上姫がこれに従う。

× × ×

四月十三日金曜日の未明。

哨戒中に僚艦と離れたロシア駆逐艦ストラスヌイは旅順港口附近で一隊の駆逐艦を認め殿艦位に入った。処がこれは蛟竜丸の護衛を終った日本の第二駆逐隊であり、ストラスヌイは忽ち包囲乱撃され、脆くも沈没した。

遙かにこれを見たマカロフは大いに怒り、直ちに戦艦ペトロパウロフスクに将旗を掲げ出動可能の全艦隊を以て追撃した。

斯く有る可しと待機していた東郷は第一戦隊を率いて暁霧中より現れる。アルゼンチンより購入の新鋭装甲巡洋艦春日、日進を加えて総勢八隻。ロシア側は損傷した二大戦艦の修理未了。交戦不利と見たマカロフは舳を廻らし、旅順口へと退却する。併し港内に直入

せず、例の如く砲台前面にて誘致運動を行いルーチン礁附近迄徐行した。東郷は敢て追わず。三笠艦橋に立ち、ツァイス製双眼鏡を以て機雷敷設の効果如何と凝視している。

(昭和の日本製光学機械は世界最優秀を誇り——それ故に電波兵器の発達を妨げたが——明治のそれはドイツ製に遠く及ばなかった)

× × ×

「マカロフを守護せよ」

ポセイドン 海洋大王が三叉の大鉾を構えて出撃した。  
アマビトリテ 海王子が随行する。更に  
ヘーラー 主女神の命を受けた武神、軍女神、勝利女神の一行が隊列に加った。

これに対し天照大神は朝日を背にして立ち武御雷、手力男、猿田彦、天宇受女の諸神が武器を連ねて左右に居並ぶ。

黄金山上には主神と主女神が立っている。

× × ×

出港に際し掃海を行わせる用心を此の日のマカロフは欠いていた。ルーチン礁附近に於て逆番号一斉回頭中の殿艦が俄然触雷爆発した。それは旗艦ペトロパウロフスクだった。続いて第二回の爆発。艦内に格納せる水雷十八箇が誘爆したのだ。

更に第三回。白煙溢出。総汽缶の破裂。

続いて第四回。最大の爆発で噴火山の如き濃煙が天に冲した。弾薬庫の引火である。

マカロフは第一回の爆発で重傷を負い、彼を抱いて海中に投ぜんとする部下を静かに制し、外套を脱いで十字を切った。

艦体両断。後尾逆立ち、スクリュウ空転。二分後に煙霧散じて見れば既に艦影見えず。

× × ×

突如として伏兵が起った。

ポセイドン 豪勇須佐之男が先ず海洋大王に一太刀。

続いて櫛名田姫が肩先に斬りつける。

敏捷な美少女須勢理姫は躍り込んで短剣を脇腹深く刺し込んだ。

爆音に和す絶叫。三叉鉾を撥ね上げ、雲を踏外した海洋大王は眼下遙かな黄海へ真逆様に墜ちて行った。

× × ×

司令長官マカロフ中將は死んだ。大芸術家ヴァレスチャギンも共に沈んだ。艦隊僧正、参謀長、艦首脳、陸軍参謀等合せて士官三十一名、下士卒六百名が戦死した。

「潜水艦だ」

驚愕が全艦隊に拡った。当時発明されなかりのホーランド式潜航艇は日露共アメリカに発注建造中で未だ実用化していなかった。



戦艦ポペーダが触雷し、大きく傾斜した。ロシヤ艦隊は水中の鰐を乱射しつつ先を争って港内へ遁入した。

× × ×

主神「余の弟が討たれた。これは一大事だ」  
主女神「総帥たる貴下が動揺なされてはなりません。今は一層の奮起を要する場合です」  
主神「心得て居る。併し海洋大王は十年は立てまいな。あの傷では」

主女神「十年経てば世界大戦が起ります。そうしたら北海で暴れて貰いましょう。それ迄は冥府で静養させるがよからうと存じます」

× × ×

マカロフ歿後の艦隊指揮は極東太守アレキセーフ海軍大将が自ら執った。併し彼は政治家ではあっても実兵指揮には適さなかった。

× × ×

思兼の神が慕情帯を示しながら言った。  
「天宇受女よ。此の帯を締めるがよい」

「戦場には無用の品と存じますが」

日本一のセクシー・グラマーは慕情帯など

必要としない程の天性を具えていた。

「よく承れ。オリムポスの神々夥多居れど、

恐るるに足るは主神のみ。雷電槌と金剛鎌を武器として力量無雙。されど一つの弱点を持

つ。それは色を好み、美女に弱い事じゃ。隙を見て忍び寄り、誑かしつつ刺す。慕情帯は屈強の具。其方の魅力でなくては動まらぬ」

天宇受女が頬を赤くした。

同席の美少女須勢理姫は口を尖らせた。

× × ×

四月二十一日。

黒木第一軍は鴨緑江岸に開進を終った。

× × ×

主女神「其方に挺身奇襲隊の編成と指揮を命じます。主神様の娘御を奪回し、我等の名誉を取り戻しなさい」

海洋女王「畏りました」

閻魔女王、商業神、虹女神、狩猟女神が此の作戦に参加した。

× × ×

四月二十五日。

ロシヤ太平洋艦隊ウラジオストック支隊の装甲巡洋艦ロシヤ・グロムボイ・リューリツクは水雷艇二隻を伴って元山港を襲い、明太魚を満載した気船五洋丸を撃沈した。

同日、萩ノ浦丸も外洋で撃沈され、船員二十一名はロシヤ艦隊に収容された。

同夜半、大阪歩兵第三十七聯隊の一箇中隊を塔載せる金州丸がウラジオ艦隊に撃沈され

乗員、兵士、人夫等二百九十六名が遭難し、五十四名は漂流中を救助されたが四十四名は戦死。百九十八名は捕虜となった。

× × ×

麗美女神が後ろ手に縛られている。縄尻を杭に繋がれ、金髪を振り乱し、顔を膝に埋めて身動きもしない。涙も涸れ果てたようだ。

見張っているのは豊受大神と石凝度姫。

神々でも生理的排泄はあるし飲食もする。

催す度に禪を外し、始末するのが石凝度姫。

朝夕の神饌を奨めるのが豊受姫。

麗美女神は縛られていても、よく食べてよく出す。食事の間だけ機嫌が良い。然も日に

三回空腹を訴える。オリムポスの習慣は肉食を主にして三回食だった。高天原の神饌は日

出と日没の二回で、それも一菜の粗食だから待ちきれないらしい。

今も豊受姫が筍皮に盛った玄米飯を与えようとしていた。副食は茸と蛤の澄汁。高天原

では最高の献立なのだが。

「こんな物しか戴けませんの。捕虜虐待よ」

途端に一本の獬矢が筍皮を貫いた。

「あ、狩猟女神の銀箭」

豊受姫の振向く背へ商業神が斬りつけた。

辛うじて外すと今度は虹女神が突き懸った。



石凝度姫が短刀を抜いて受け止めたが苦戦。豊受姫も体力は有るが本来輜重専門の非戦闘員で斬合には不適任。身を守るのが精一杯。

「これを被って早く逃げなさい」

ヴァイナス 麗美女神が何か気配を感じると同時に後ろ

手を杭に繋いでいた縄が切れた。併し声だけで姿が見えない。

「誰方です」

眼の前に影が揺れると見る間に金髪美少女

が現れた。俗称少女。閻魔女王の名に似ず、

永遠の若さと復活を象徴する農業女神の一人

娘。手には今脱いだ冥府の隠れ帽子を持つ。

「貴女の息子が待っています。急いで」

帽子を被せると姿が消えた。麗美女神は両

手を背に縛られた俣で駆け出した。

×

×

×

四月三十日。

首府ペテルスブルグに於てアレキサンドロ

ヴィチ大公は重大発表を行った。

「在旅順の艦隊を爾今太平洋第一艦隊と改名

し、本国にて準備中の増援艦隊は太平洋第二

艦隊と称する」

これは当然予想された事であり、諜報に依つても知り得たであろうが故意に発表する必要は無かった。ロシアは依然として日本を過

少評価していた。そして公表には次の内容が含まれていた。

「新艦隊は七月末にバルチック海を出発し、四箇月後に極東水域へ到着する予定」

東郷に残された時間は半歳余。旅順は単なる封鎖では足りない。強襲攻略が必要になった。然も半歳以内に。

×

×

×

ヴァイナス 麗美女神「ママよ。助けて頂戴」

愛神「見えないよ。何処にいるの」

麗美女神「冥府の隠れ帽子を被ってるのよ」

愛神「脱いでいいんだよ。敵は居ないから」

麗美女神「脱げないわよ。縛られているの」

愛神「見つけた。やっぱりママだ」

麗美女神「待って。ママ裸だもの」

愛神「ママの裸で縛られたスタイルいいね」

麗美女神「お尻を叩くわよ」

愛神「叩いて御覧。手が出せないくせに」

麗美女神「お願い。何か着る物持って来て」

×

×

×

五月一日。

鴨緑江を渡河し終った黒木第一軍は猛然と九連城に攻め掛った。ザスリツ中將の指揮するロシア極東軍東部支隊は暫時防戦したが遂に敗退。日本軍は蛤膜膽の隘路を扼して大

打撃を与えた。ロシア軍の戦死六百十四。負傷千四百十四。日本軍の死傷九百三十二。

ロシア軍は野砲二十一門、機関銃八挺、小銃千二十挺及び捕虜六百十三を遺し、摩天嶺を越えて遠く敗走した。

×

×

×

ゼウス 主神「下界が騒がしくなったな」

ヘルクレス「日本軍は全面進出と見えます」

主神「鴨緑江を渡ったのが第一軍。黄海を北上中の船団は第二軍。東郷は上陸を支援する

目的で必死に旅順口を抑えている」

ヘルクレス「主女神様の軍は鴨緑江方面へ、

日月母神様の一隊は遼東半島北部へ」

主神「旅順港口へ汽船群が接近しているぞ」

ヘルクレス「二度も失敗した閉塞を又も繰返

す心算でしょうか」

主神「日本人の悪い癖だ。同じ手を二度使っ

ても効かない。それを勇氣だけで克服しよう

としている。然も三度目だ」

ヘルクレス「海上に波が立ち始めました」

主神「海底で余の弟が呻いているのだろう」

×

×

×

東郷の優勢は僅少差に過ぎず、制海権掌握は完全ではない。斯くて第三回旅順口閉塞が計画され、十二隻の一挙突入となった。



猿田彦「主神が白玉山上に立っているぞ」  
 天宇受女「ヘルクレスが護衛していますよ」

猿田彦「俺が奴を誘い出してやる」  
 天宇受女「行く行ったらその隙にわたしが」  
 彼女は胸に慕情帯を締めていた。

五月二日深夜。旅順港外。  
 風浪荒れて波濤天を捲く。

閉塞隊指揮官林中佐は中止を命じた。併し  
 時既に遅く、連絡不達の俣八隻は慕進した。

主女神「よく戻って来られましたね」  
 麗美女神は泣くばかり。

青春女神「もう泣かなくてもよいのですよ」  
 麗美女神「わたしの大切な慕情帯を奪われて  
 しまいました。あれが無いと駄目なのです」  
 主女神「大変じゃ。誰かが主神様を狙って  
 います。こうしては居られない」

慕情帯を利用して主神を蕩す手法は三千年  
 以前に主女神自身が用いたものだった。

五月三日午前三時。  
 三河丸が先ず突入した。防材を踏み破って  
 水道中央部に爆沈。佐倉丸が続いて自沈。

火の塊と化した遠江丸が進入した。二列の  
 防材中、外側の分を押し曲げ、内側の防材に  
 触れて停止。その位置に沈没。指揮官本田少  
 佐以下大部分の乗員は水中に散乱した。

猿田彦は天逆鉾を振って挑戦した。  
 豪勇ヘルクレスは棍棒を以て応戦。  
 猿田彦は故意に山東角方面へ逃げ出した。  
 ヘルクレスは猛然とこれを追う。

三時五分。小樽丸が突入。

砲艦ギリャークの猛射に舵器を破壊されつ  
 つ水道左半部の閉塞に成功した。併し漕ぎ出  
 した短艇は悉く砲火に撃破され乗員は溺没。

三時三十分。相模丸が水道内に自沈。

三時五十分。江戸丸が港口に達した。既に  
 両舷蜂巢と化し、浸水は滝の如し。然も指揮  
 官高柳少佐は沈着冷静。

「面舵一杯」  
 港口中央部で船体を水道に直交させる。  
 「投錨用意」

探照燈の光芒は白昼に異ならず。少佐は遮蔽  
 板を額に掲げて船首方向を透し見る。途端に  
 対艦用七十五耗砲弾が少佐の右脇に命中し、  
 腹部全体を抉って海中に落ちた。

主神は背後に氣配を感じた。  
 「誰か」  
 光沢ある髪。愛嬌豊かな黒い瞳。

「東洋の女神よ。何の目的あって来たか」

美女は答えず。武器は持っていない。艶然  
 たる微笑を浮かべて数歩退ると裾が乱れた。

「待て。余は未だ其方に勝る女を知らぬ」

主神の眼尻が下った。

「主女神も、日月母神も、農業女神も、セメ  
 レーも、光明女神も、記憶女神も、法律女神  
 も、マイアも、アルクメネも、エウリュノメ  
 も、エウローペも其方に較べれば」  
 視線が半ば開いた胸に及ぶと忽ち耐え難い  
 官能の疼きに襲われた。慕情帯の魔力か。

「オリムポスの美女は物の数に入らぬぞ」  
 主神は無分別にも天宇受女を引き寄せ、強  
 く抱き締めた。柔い感触。そして熱い吐息。

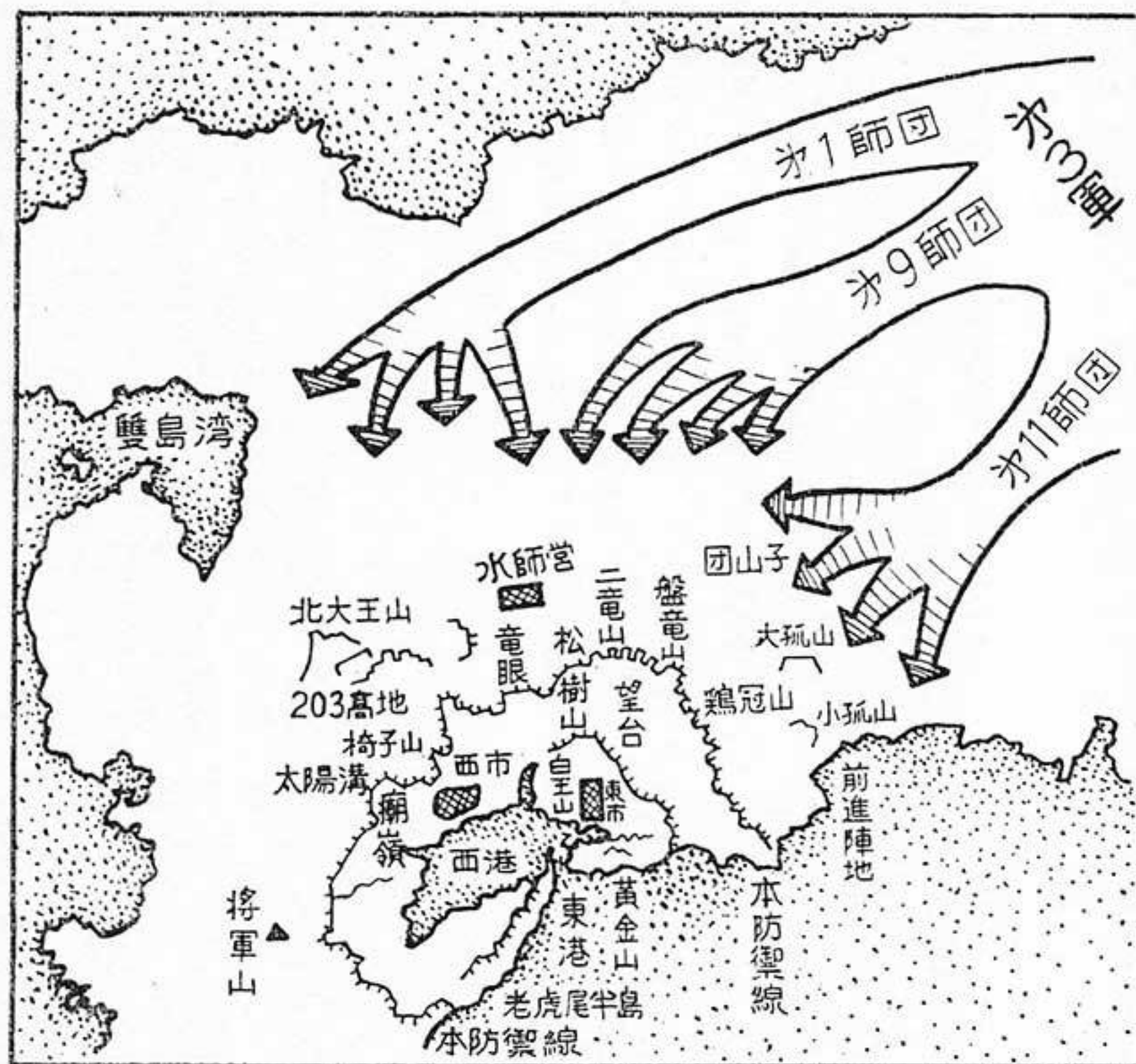
だが東洋の美女は此の時既に懐剣を握り、  
 主神の背に擬していた。

愛国丸は機雷に触れて轟沈。  
 舵器損傷の朝顔丸が港口附近に達した時は  
 既に夜も明け始めていた。ロシヤ軍の全砲火  
 は此の一隻に集中。檣は飛び、煙突は砕け、



船体見る間に微塵と化して黄金山下に沈没。  
乗員十八名。一人残らず戦死した。

「主神様。危い」  
「主女神が孔雀杖を投げた。」  
「何と」



驚いて立ち上る主神。天宇受女は短刀鋭く突き掛る。白玉山を踏み外した主神は急斜面を転って西港の水中へ落ちて行く。  
「曲者、推参なり」  
敏捷商業神が体当り。併し力量は天宇受女が勝った。腰の一振で空中に描く半旋弧。投げ飛ばされた商業神は二〇三高地の上に頭から落ち、ヘルメットも失って其の尽悶絶。

続いて虹女神が組みついた。これも忽ち白玉山から投げ落される。だが天宇受女の手から短刀が落ちた。拾う隙は無い。  
青春女神が剣を抜いて斬りつけた。東洋の女傑は素早く外して利腕を振じ上げる。  
暁女神が背後から首に腕を廻した。だが鮮やかな背負い投げで水師營の谷間へ飛んだ。  
主女神が真白な腕で突いた。天宇受女は疲れていた。

る。白玉山から片足を踏外した。其処へ青春女神が正面から掴み掛る。虹女神は下から足を引いた。其の尽、松樹山の麓へ。  
遂に青春女神が上になった。主女神は足で顔を踏みつけ、腰から革紐を解いて渡した。  
「主神様。戦時中は御慎しみあるよう」  
西港から濡れて逼り上った主神は面を伏せ頭を掻きながら、

「面目無い。今後は気をつける」  
青春女神は天宇受女を後ろ手に縛った。

吹き荒れる南風の為、閉塞隊員の收容は困難を極めた。多くの短艇が黄金山に打ち上げられた。ロシヤ兵はこれを捕えようとしたが日本兵は或は自刃し、又は刺違えて死んだ。砲台に攻め上って戦死する者も多数あった。閉塞参加総員百五十九名。生還六十三名。死体收容四名。意識不明で敵に收容された者十七名。他の七十五名は悉く行方不明。後になつて白玉山西麓墓地からロシヤ軍が埋葬した三十九遺体が発掘された。

着衣一切を剥奪された日本一の肉体美女は牛腱の革紐を以て縛りあげられ、木柱を背負って首から足先迄縛り附けられている。



「高天原勢の陣容と戦略を申せ」

主女神の鞭は果して軍事的必要か、それとも嫉妬か憎悪か。オリムポスに残酷を以て聞える軍女神と狩獵女神が加り、三方から鞭撃の連打を浴びせ、天宇受女は唇を噛んで耐える。傍には慕情帯を取戻した麗美女神が満面に喜悦を浮べて立ち愉快そうに眺めている。

× × ×

第三回閉塞戦は不完全ながら一時的にロシヤ艦隊を蟄伏させた。少くとも其の戦意が敵の出勤能力を奪ったと言える。乗船待機中の奥大將は直ちに第二軍を率いて出港した。

五月五日。第二軍は塩大澳に上陸を開始。遼東半島と満洲本土を切断する新作戦は斯くて開始された。

アテナ  
軍女神「旅順から列車が出発しました」

ゼウス  
主様「乗っているのは誰だ」

アテナ  
軍女神「極東太守アレクセーフ大將です」

ゼウス  
主神「旅順の主將が逃げ出したのか」

アテナ  
軍女神「関東軍司令官ステッセル中將が残っています。彼が旅順のプリアモスでしょう」

ゼウス  
主神「彼は臆病ではないが近代要塞戦に無知な凡將だ。真の勇氣は自信から生れる」

アテナ  
軍女神「北斗山の上に老將が見えます」

ゼウス  
主神「第七師団長コンドラテンコ少將だ。彼こそは旅順のヘクトルだ。彼を守ってやれ」

× × ×

第二軍の陸上作戦に協力する目的で掃海に従事中的の日本水雷艇第四十八号は五月十二日触雷沈没した。

五月十四日。掃海支援中の通報艦宮古が触雷して爆沈した。

東郷は僅少差の優勢を利用して旅順港内の敵艦を必死に抑えつけている。艦隊を連日出動させ、危険と困苦を冒して封鎖を続ける。陸軍が上陸展開を終り、旅順の背面攻撃態勢を完了する迄は休息は許されない。

× × ×

あめのうずめ  
天宇受女が縛られている。全身に鞭痕を留め、縄に身体を預けて柱に凭れている。併し氣力は未だ尽きていない。時々頭を上げて下界を見る。

—遼東半島に上陸した日本軍は鉄道と電信線の切断に成功したようだ。東郷は旅順の封鎖を緩めていない。併し日本艦隊は連続作戦に疲れ、且つ今迄の勝利に倣っている。これは危い。単調な哨戒航路は敵に乗ぜられる。

× × ×

アレクセーフ海軍大將が逃走したので旅順

の大艦隊には司令長官が居なくなった。ヴィトゲフト少將が臨時長官代理となったが彼は人物、力量共大海軍の指揮に不充分だった。

ロシヤ本国ではベゾブラゾフを太平洋第一艦隊司令長官に、ロジエストウエンスキーを新しく準備中の太平洋第二艦隊司令長官に任命する発令が行われた。スクリドルフは将来合同すべき両艦隊の長官に擬せられた。併しスクリドルフもベゾブラゾフも旅順に入る事が出来なかった。両將はウラジオストックに赴いた。旅順の大艦隊には長官が無く、ウラジオストックでは三隻の巡洋艦を四人の提督が指揮していた。

× × ×

ヘフェスト  
鍛冶工神が黄金の鎖を鑄造した。麗美女神の夫でもある彼は、妻の復讐を意識して入念に械具を作った。天宇受女は鎖で全身を縛られ、重い黄金の首枷と足枷を掛けられて転がされている。

「西港の砂浜に首迄埋めておきなさい」

ヘーラー  
主女神が麗美女神に命じた。

× × ×

五月十五日午前一時四十分。

最高快速力を有する巡洋艦吉野は春日に衝突され、大部分の乗員と共に沈没した。



ヘーラー × × ×  
主女神「反撃の時は来た。旅順港外に伏兵を

配して待つがよい」

アムピトリテ アレス アテナ ヴィクトリア  
海洋女王、武神、軍女神、勝利女神が海底  
に潜って待機した。

× × ×

ロシヤ人は日本の戦術を習得した。敷設艦  
エニセイの艦長イワノフ中佐は日本艦隊の常  
用哨戒航路と直角に機雷五十を撒布した。

× × ×

須佐之男は今日も一族を率いて巡視する。  
従う神々は櫛名田姫、大国主神、八上姫、須  
勢理姫。隊伍を組んで旅順港外を行進。  
「オリムポス勢の臆病者。時には出て来い」

× × ×

五月十五日午前十一時三十分。

旅順口直前で哨戒中の戦艦初瀬が突然触雷  
した。続いて戦艦八島も又機雷に掛り爆煙に  
包まれる。残余の諸艦は大混乱。

これを見たロシヤ側は駆逐艦十六隻を放っ  
て襲撃を策し、日本艦隊は辛くも阻止した。

零時三十分。初瀬は第二の水雷に触れ、弾  
薬庫誘爆の大音響と共に轟沈し去った。

八島は曳航されて二時間航行したが次第に  
浸水増大し、老鉄山南西二十哩の地点で遂に

転覆沈没した。

× × ×

海中から鉾と槍が突き出した。須佐之男は  
素早く一本を斬り払う。大国主は転って避け  
た。だが一本の槍穂は正確に八上姫の脇腹を  
貫いた。

「暴力女神の仇を討ったぞ」

鮮血滴る槍を振上げて武神が誇る。

須佐之男と須勢理姫が、剣を構え直した。

併し此の時、主女神、虹女神、青春女神等が  
一斉に駆け出し、増援に殺到する模様。

「無念だが止むを得ぬ。此の場は退け」  
櫛名田姫が八上姫を背負った。須佐之男は  
追って来る敵を阻止しつつ後退する。

二戦艦、一巡洋艦を失った日本艦隊の損害  
は重大だった。保有戦艦は僅か六隻。その三  
分の一を一時に失ったのだ。敵に打撃を与え  
る事もない一方的な喪失だった。

此の影響は相対的にはミッドウェー海戦よ  
り大きかった。昭和十七年六月に日本は航空  
母艦十二隻中四隻を失ったが国内建造能力は  
補充可能だった。明治三十七年の場合は恢復  
の見込が無かった。(装甲巡洋艦生駒、筑波  
は起工されたが交戦中遂に完成しなかった)

× × ×

× × ×

日本海軍の災禍が続く。

通報艦竜田は光禄島南東岸に擱坐した。

五月十六日。砲艦大島は赤城と衝突沈没。

五月十八日。駆逐艦曉は触雷爆沈した。

七日間に八隻を飲み、日本艦隊は開戦以来  
維持して来た優勢を一時に失った。その合計  
排水量は三万五千余噸。戦死者一千に上る。

× × ×

須佐之男「姉神。申し訳ない」

天照大神「戦争です。犠牲は覚悟の上です」

須佐之男「八上姫の分は残った者で働こう。

併し二戦艦を失った東郷は如何戦うだろう」

天照大神「三笠の艦橋を御覧なさい。東郷は  
少しも動揺していませんよ。大将というもの  
は、あのようでなければなりません」

× × ×

海軍大臣山本権兵衛と軍令部長伊東祐享は  
大損害の責任を負って辞表を奉呈し、天皇は  
即時却下された。

× × ×

「其方達は辞職に依って責任を免れる心算で  
あるか。天皇には辞職が無いぞ」

あるか。天皇には辞職が無いぞ」

あるか。天皇には辞職が無いぞ」

× × ×

武神「父神。出撃の好機です」

主神「いや。ワイトゲフトは動くまい」



バルチック海ではプロフ工廠の全設備が  
唸っていた。ボロジノ型世界最新戦艦四隻が  
刻々と全姿を現わしつつある。米国で建造中  
の戦艦オスラビヤも到着した。旧式戦艦の近  
代化改装も進行している。

鍛冶工神「人間も大仕掛になったな」

打ち続ける蒸気鉄槌。火を吐く酸素熔接。  
起重機に吊られる千ポンド装甲板。十二吋砲  
身。砲塔旋回部。砲塔固定部。

準備されつつある戦艦は新旧七隻。

東郷は僅か四隻の戦艦で旅順港内の戦艦六  
隻を封鎖している。バルチック艦隊が背後に  
出現する時こそ東郷の運命が窮まる時だ。

月読神「第二軍が上陸展開を完了したぞ」

思兼神「併し危険ですな。遼陽の極東軍は約  
十万。旅順の関東軍は五万。その中央に上陸  
した日本軍は四万。挟撃の恐れがあります」

月読神「あ、奥大將が馬を南へ向けたぞ」

思兼神「各個撃破でしょう。先ず金州南山に  
関東軍を討って南方の敵を遼東半島尖端に封  
鎖し、旅順の孤立化を計る作戦と見えます」

月読神「よし。我等も遼東半島に出陣だ」

五月十九日。日本軍の独立第十師団が大孤  
山に上陸した。これは右翼の第一軍と左翼の  
第二軍を繋ぐ行動であり、後に第五師団以下  
の増援を得て中央軍たる第四軍に成長した。

商業神「報告。敵が北方から寄せて来ます」

主女神「主神様。妾にお任せ下さいませ」

主神「御身は残れ。日月母神よ。其方征け」

日月母神「心得ました」

自慢の子供達、太陽神と狩獵女神が従う。

金州城に攻め寄せる奥大將の第二軍は、

右翼に大阪第四師団、

中央に東京第一師団、

左翼に名古屋第三師団、

掩護射撃に任ずる野戦砲兵第一旅団、

将兵三万六千四百。大砲百九十八門。

渤海湾上から支援する砲艦は筑紫、平遠、

赤城、鳥海。

遼東半島北部に展開した高天原の神々は、

月読神、邇邇芸尊、木花開耶姫、武御雷神、

手力男神・科戸神。

海上には大綿津見神と豊玉姫の父娘。

後見するは老伊邪那岐と思兼神。

遼東半島は金州南方の全幅僅か三軒半の狭  
隘部で満洲本土と繋っている。その頸部中央  
に位する高さ百十五米の高地が南山だった。

此の要地を守備するロシヤ軍はフォーク中将  
を主将とし、将兵三万五千で日本軍と対等。

大砲五十七門。軽砲十二門。機関銃十挺。塹  
壕を掘り、厚い掩体を設け、地雷を敷設し、

鉄条網を張り、砲台十六、堡壘二十を築いて  
半歳の絶対不落を誇号した。

南山上空に勢揃いしたオリムポス方は、

中央に日月母神。右に太陽神。左に狩獵女  
神。何れも誉高き名射手である。

増援の諸神は商業神。勝利女神。暁女神。

虹女神。それに豪勇ヘルクレス。

海上に在って支援するは深淵神と海王子。

五月二十五日。第四師団は金州城を攻撃。

翌二十六日午前五時二十分これを攻略。

斯くて日本軍百九十八門は南山砲撃開始。

ロシヤ軍の六十九門が猛然と撃ち返す。



月読神が月光の輻射の如き鐙矢を放った。  
日月母神等三神が返し矢を合わせる。  
武御雷神は雷鼓を連打。下界は大雷雨。

× × ×

日本の大本営は鴨緑江戦を重視する余り、保有する十二糎榴弾砲の全部を第一軍に与えていた。第二軍の装備は野砲・山砲のみ。それも日清戦争当時の青銅砲が多く、最新式の三一式速射野砲と雖も復座駐退機は無く、一発撃つ毎に砲車後退して再照準の必要あり、発射速度は毎分二発。射程僅か七千七百米。然も直接照準方式で砲体を敵前に露出しつつ射撃しなければならなかった。

これに対しロシヤ軍は百五糎榴弾砲四門。十二糎速射砲二門、十五糎カノン十門を含みクルップ式駐退機を用いて連続発射が可能。射程も大きく、照準は間接式で観測所のみを前に出し、目視不能の場所から砲撃し得た。砲戦は果然日本軍の大苦戦となった。

× × ×

邇邇芸尊、木花開耶姫、武御雷神、手力男神、科戸神が剣を抜いて駆け出した。

月読神と大綿津見神が必死に掩護射撃。

オリムポス方は楯の陰より指矢懸り。

科戸神が肩に一矢を受けたが抜き捨てた。

天孫邇邇芸尊も顔面に擦過傷を負った。  
木花開耶姫は膝に一箭を受けて歩行不能。

× × ×

三箇師団の日本軍歩兵は一斉に突撃開始。  
ロシヤ軍は掩堡中から猛然と銃砲火を注ぐ。  
マキシム式機関銃の威力は殊に絶大。日本軍には実用的機関銃が未だ装備されず、此の新兵器とは事実上の初対面。平坦地を突進する歩兵群は好目標を呈して掃射された。  
砲兵の集中射撃も機関銃座を破壊し得ず。  
小隊全滅。中隊全滅。第六聯隊半数死傷。  
午後一時。総攻撃全く停頓。前進不能。

× × ×

オリムポス方が出撃した。高天原勢は支え得ずに敗退。邇邇芸尊は妃を救出せんとするが自身も負傷し、流血に眼を犯されて危険。武御雷神が辛うじて天孫を連れ戻したが木花開耶姫は敵中に遺棄された。太陽神は直ちに駆け寄って大山津見神の娘を縛りあげる。

× × ×

午後二時。全滅を賭して総攻撃再開。  
地雷の爆発。榴霰弾と機関銃の洗礼。

第一聯隊が散乱した。一箇小隊は五十米駆ける間に全滅。鉄条網直前は死屍の山。一時は軍旗行方不明。絶好の標的となって旗手五

人が次々に斃れ、竿は三箇所で被弾折損。態勢整頓後に調査すると彼方で軍曹が旗を腹に巻き、此方で兵卒が紋章を捧持する有様。

午後五時。戦況発展せず。砲兵弾薬欲乏。

大連湾にはロシヤ艦隊が現われ第三師団に側面射撃を加えつつ陸戦隊揚陸の気配濃厚。尚金山上の第二軍司令部は憂色暗鬱。

× × ×

オリムポス方は木花開耶姫の衣服を剥ぎ、革紐で後ろ手に縛りあげ、陣前に曝し、楯を叩き鳴らして嘲笑した。

高天原の諸神烈火の如く怒り、陣容を再建して奮迅殺到。斯くと見た日月母神は虹女神に命じて捕虜を後陣に下げ、太陽神、狩獵女神、ヘルクレスと共に乱箭連射。

木花開耶姫は両手両足を縛られ、猿轡を噛まされ、眼隠しを掛けられて転がされた。

剛勇手力男神は矢を受けて蝟の如くなりつつ楯の一角を蹂躪し、太陽神と必死の交戦。

武御雷神は大剣を振ってヘルクレスと対戦。

邇邇芸尊は暁女神と渡り合う。

月読神は日月母神と刃を交え、科戸神は狩獵女神と追いつ追われつ。

遂に手力男神が太陽神の右肩を深々と斬り下げ、黒雲の中へ突き落した。併し自らも矢



傷重く、漸く後退したが遂に斃れて起たず。

× × ×

第二軍幕僚會議は漸く「攻撃一旦中止、後日再開」に傾いた。併し衆議依然決せず。

總司令官は只黙然。遂に決裁の時が来た。

奥大將は可も否も言わず。刮目して一言。

「大和魂とは何か」

× × ×

月読神「駄目か。援軍を求めねばならぬか」

科戸神「オリムポス勢が斯くも手剛いものと

始めて知りました。然も敵は主力ではない」

邇邇芸尊「第二軍を見棄てるのですか。北方

からは極東軍主力が南下しています。今、南

山を抜かなければ挟撃されて全滅です」

大綿津見神「併し残兵で攻撃の成算は無い」

豊玉姫「いや。敵も疲れている筈です」

武御雷神「第二軍右翼が前進を始めました」

月読神「何と勇敢な。併し無謀な」

伊邪那岐「我等も突撃だ。下界の人間に遅れ

ては神の資格が無いぞ」

× × ×

午後六時三十分。三度目の総攻撃発令。

日本軍砲兵は残り少い全弾を西の一角に撃

ち込んだ。折からの満潮を利用して四隻の砲

艦は南山西麓直下に接岸しつつ艦砲射撃。鳥

海艦長林中佐は砲弾を受けて戦死した。

午後七時。大阪第四師団は最後の大突撃。

南山の左翼は遂に沈黙した。一部は退却。ロ

シヤ軍も精魂尽きていたのだ。動揺は中央か

ら右翼へ伝播。急速な崩壊へと移行。

午後七時半。第八聯隊の旭日旗が折からの

夕陽を浴びて南山司令塔の上に高く翻える。

第一、第三師団も奮い立って南山に殺到。

× × ×

老伊邪那岐が先頭に立って斬り込んだ。

彼方では捕虜後送を命ぜられた暁女神が木

花開耶姫を二輪馬車に縛りつけて後退中。

虹女神、商業神、勝利女神が浮足立った。

日月母神は辛くも踏止って必死に防戦。

狩獵女神とヘルクレスが左右に従う。

× × ×

午後八時。フォーク中將は敗走軍の渦に巻

かれていた。ロシヤ軍総退却の足は最早止ら

ない。斯くて難攻不落の南山は陥ちた。

× × ×

伊邪那岐神が日月母神を斬り伏せた。

ヘルクレスが抱き上げて遁れる。

科戸神と武御雷神が急追撃。

× × ×

日没の為、日本軍は追撃殲滅を行い得なか

った。併し旅順の関門は一日で陥ちたのだ。

第二軍は後方を安固にし、旅順は孤立した。

勿論犠牲は大きかった。死傷四千三百八十七

名。日本軍は血の代償を払って近代戦第一科

を学んだのだ。而して此の教訓は余り有効に

利用されなかった。

ロシヤ軍の死傷千三百三十七名。捕虜二十三

名。遺棄した兵器は砲六十八門。機関銃十挺

小銃三百六十五挺、地雷五十、発電機一。

× × ×

狩獵女神は本来剣を把つての勇者でない。

敗戦に狼狽し、折からの闇に紛れて大連灣に

隠れた。それと察した月読神が銀月光で照破

する。慌てた狩獵女神は鳩に化けて遁走。併

し高天原にも豊玉姫が居る。直ちに鳶となっ

て飛翔した。追ひ詰められた夜の処女は遂に

正体を露わし、月読神の前に弓箭劍槍を投じ

悄然と蹲って縄目を待つ。

「オリムポスの月を生捕ったぞ」

凱歌の中に高天原諸神は群り、腕も腿も露

な野性美女を後ろ手に縛りあげた。

× × ×

南山の堅陣を過信したロシヤ軍は要衝南関

嶺にも大房身にも後方陣地設定を怠った。一

旦南山が陥ちるや大連も柳樹屯も放棄する他



はない。大房身の火薬庫は自ら爆破された。  
関東軍司令官ステッセル中将は大いに怒り  
フオーク將軍を要塞外に閉め出した。

× × ×

闇中を退却するロシヤ軍が三十里堡附近で  
交差行進を起し、大混乱となった。機を窺っ  
ていた豊玉姫は黒衣を翻えして舞い下りる。

「日本軍だ」

突然誰のものとも解らぬ絶叫。猛然と起る  
同志討の銃火。奔騰する血漿の噴霧。

修羅場の騒乱を嘲笑して豊玉姫は跡白浪。

嚴重な査問にも拘らず、叫んだ者は遂に発  
見されなかった。

× × ×

## 躍進記念◎百萬元懸賞△原稿募集▽

### ▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千元	20篇

### ▽内容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容  
にふさわしい力作を、読む雑誌としての新し  
い脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広  
く読者の間から懸賞募集いたします。  
一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフ  
ード、シチュエーション、女性切腹、男性切腹、男女性  
の嗜好、女相撲、女闘美、生首、珍奇風俗、妊  
婦、文獻紹介、同性愛、アブラブ等をはじめと  
して、その他古今東西に亘る特異風俗に關す  
る題材を広くとりあげて下さい。  
一、題材を大いに新分野の開拓による力作  
を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱って  
いない分野の傑作をお待ちします。

### ▽規定△

一、形式は創作、小説、読物などのフィク  
ションも結構です。又自らの体験による告白  
や手記、見聞記、実見談でも結構です。更  
に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、隨筆、  
シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最  
も得意のものを選び下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品  
に限り、枚数は四百字詰原稿用紙換算にて三十  
枚以上、二枚以上、四百字詰原稿用紙換算にて  
の原稿用紙を、必ず二百字詰又は四百字詰  
一、締切日は、毎月十五日です。入選作品は順次  
一、懸賞誌上発表は、他の一般原稿と区別す  
るため、第一頁に「懸賞」とお書き下さい。  
一、返信料の送付先は、大阪市住吉郵便局私書  
函第41号の送付先は、大阪市住吉郵便局私書  
一、原稿募集係宛。出版株式會社、奇巧編集部懸賞  
す。下稿募集係宛。出版株式會社、奇巧編集部懸賞  
す。採否は誌上発表を以てご承知願います。

奥第二軍南山に苦戦。死傷四千三百余。

飛報は日本中に全国的震撼を呼んだ。

床屋で「奥さんが難産で苦労した」と言っ  
た客が戸外に抛り出された。

× × ×

月読神「父神。手練の程、感嘆の極です」

伊邪那岐「煽てるな。併し未だ若い者に負け  
ないぞ。次の戦にも先頭に立って見せよう」

陣中には革胴着も破れ果てた狩獵女神が菱  
縄に縛られ、プラチナ・ブロンズを振り乱し

日本式に裸の膝を揃えて正坐させられ、豊玉  
姫に縄尻を把られ、涙を浮かべながら引き据

えられて憐れな姿を晒している。

それに引換え豊玉姫は得意満面。

× × ×

日本陸軍独自の戦略としては、

南山を要塞化し、少数の守備兵を留めて旅

順を封鎖し、他の全軍を以て遼陽方面に決戦

を求める事も可能だった。旅順の食糧は一年

で尽きるだろう。

併し海軍は要塞の自滅を待てなかった。バ

ルチック艦隊来航以前に太平洋第一艦隊を亡

ぼさなければ日本は全戦役を失うのだ。

陸海の大戦略は一致した。斯くて旅順攻囲

軍たる第三軍の戦闘序列発令となる。



五月三十一日。

第三軍司令官に乃木希典が任命された。

主神「日月母神の一族が全滅したのか」

主女神「此方も天孫の妃を捕えて来ました」

主神「比較にならぬ。敵は愈々旅順に寄せて来よう。もう誰にも委せておけない」

だが主神は横眼で捕虜の女神を眺めながら独語する。

「あれ程に緊しく縛らなくても良からうに」

木花開耶姫は革紐を以て手足を背中の一箇所に纏められ、鍛冶工神特製の金鎖で全身を隙間もなく巻き締められ、黄金の重錘を首と足に付けられて転がされている。

「あの女は余りにも若くて美しい」

主女神は故意に主神にも聞える声で言う。

「青春女神よ。あの女の為に主神様の気が動いては全軍の戦意に関ります。白玉山の下に埋めておきなさい」

主神は渋い顔をして横を向いた。

× × ×

六月六日。乃木希典は四国善通寺の第十一師団に続いて張家屯に上陸した。

第三軍は東京第一師団、善通寺第十一師団、金沢第九師団、後備歩兵第一、第四旅団、野

戦砲兵第二旅団、攻城砲兵司令部及び攻城特殊部隊、後備工兵隊、野戦電信隊、軍兵站部より成る。併し此の内、第九師団以下の諸部隊は未到着。第一師団は南山の激戦に、将校六十六名、下士卒千五百名、馬百九十頭を失って、その補充は未だ行われていなかった。

乃木は後続到着を待ちつつ旅順攻略の作戦を練っている。

× × ×

須佐之男「愈々旅順攻撃の開始ですね。姉神は乃木に功名を授ける御心算でしょう」

天照大神「一旦定めた運命は曲げる事は出来ません。あの男には人間の耐え得る極限迄の試練を科す事になっています」

× × ×

第三軍に南方を譲った奥大将の第二軍は反転して北方のロシヤ極東軍に向った。

六月六日。ロシヤ極東軍総司令官クロパトキン大将はシベリヤ第一軍団長シタケリベルク中将に半数の兵を授け、旅順救援を命令した。シタケリベルク男爵は直ちに得利寺へ前進する。

併し彼は門地が高いだけの凡将だった。その軍中には男爵夫人、その友人たる女性、二名の下婢、フランスの料理人、司令官専用の

乳牛一頭、百二十七点の個人行李が有った。

六月十二日。奥大将は先制攻撃を策し、全軍を挙げて北上、得利寺に迫った。

六月十四日。両軍の前衛が衝突。

六月十五日は終日に亘る大激戦。

シタケリベルクはクロパトキンに援兵を求めた。併し男爵夫人の特別列車が単線鉄道を閉鎖し、遼陽からの援軍は四時間延着した。

此の間に第四師団の一部が側背を衝いた。

夕刻に到り遂にロシヤ軍は大敗北。シタケリベルクは馬と共に倒れて重傷。死傷三千五百六十三名。捕虜四百名。砲十六門、小銃九百五十八挺を奪われた。日本軍の死傷は千百四十五名だった。

× × ×

乃木は南山の戦跡に駒を留めた。

山川草木転荒涼。十里風腥新戰場。

征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

彼の長男勝典中尉は此処で戦死していた。

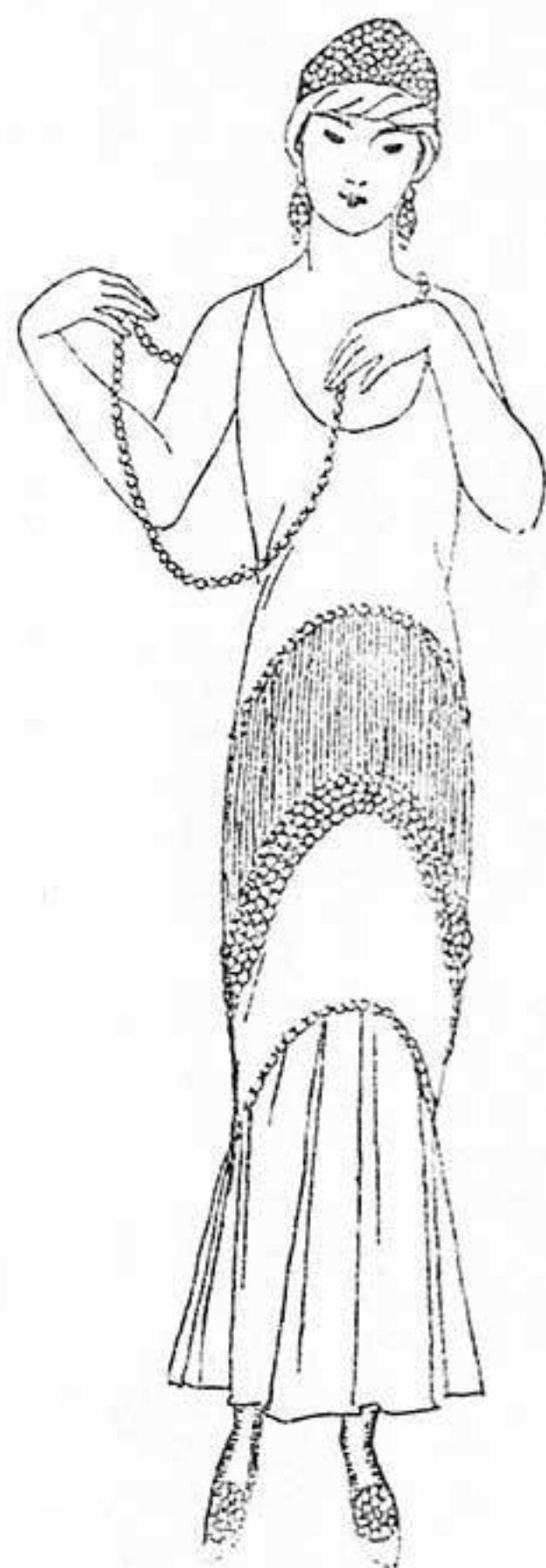
明治の人士は『転荒涼』の三字から如何なる感懐を受け取ったであろうか。

夕陽を浴びた乃木の影が南山の斜面で次第に尖端を伸ばしていた。

△後記▽

此の作品を黒井、山口両氏に捧げます。題名の意味をよく考えて読んで下さい。





# S M きれぎれ帖

△最近の刊行物より▽

年の暮に発せられた文部大臣の国防論先制パンチ。ついで、エンタープライズ入港予告のボデー一発。

ひょっこりひょうたん島ならぬ、日本島よどこへ行く。

今日一月九日、オリンピックの円谷選手の

自殺の悲報。

八日付朝日新聞朝刊。車内広告「お色気ムード」追放。国鉄は鉄道管理局長宛に通達。

公の秩序、又は善良な風俗に反するものなど、広告倫理規定により、車内パトロールも強化とか。

＝ 黒 井 珍 平 ＝

こちらがにぶいのか、電車内の広告がそんなにお色気があるとはしらなかった。しかしおひまな方がいるもので、御苦勞様と申し上げておきます。

× × ×  
平凡パンチが一月八日号から始めた劇画「パラダ」の上村一夫氏のイラスト画(?)のしぼり、つるし。仲々迫力あり。

× × ×  
婦人公論二月号は、『マゾッホの妻ヴァンダの手記』と、次の勇ましいのがのってる。

「わが愛する七つの大罪」堤玲子(作家)

× × ×  
変態性欲が悪い、ときめつけるのは誰だ。異常と呼ばれる者たちの真剣そのものの性追求を体験者として支持する。人生は、ノーマルとアブノーマルがかなでる詩である。惚れた、はれた、寝るか寝ないかのどっちかで、その寝業を天地創造して神の如き芸術的寝方をするのを、ど素人は変態性欲と呼ぶ。馬鹿奴。

変態性欲は人間の魂の首飾りであり、これこそは、一夫一妻正常位以外は邪道でござるぞの大音声に聞きあきて、退屈で死んでしまおうと想った時、さんた・まりあの福音の如



き、退屈なぞあっちへ行きやあがれの、どんとどんとどんと燃えあがる炎の地獄のうたである。皆の夢見る天国、マイホームこそ、首吊りの巨大なロープ以外、何者でもない。

(以下七章までつづく) これで変態性欲擁護論になっているかどうか怪しいが、性欲の群は人間が生きる限り、なくならないものであり、ただ言えることは、何をやっても、自身自身が傷ついて、重い十字架を背負い、責任の所在を問われるのであるから、わが命かけて生きて行くのに遠慮会釈いるものか。たかが人生二万日。一つ覚えの正常位で満足出来るほど人間は野蛮ではなからう。――

一月二十二日号週刊サンケイの野坂昭如氏の世相デザイン帖、題して『残酷がスキ!』ストリップ劇場が千円に値上りして、Sものの流行について。次に何故SMが流行するかの考察。

――「ものの本によれば宗教による性の抑圧がきびしかったヨーロッパ中世には、ムチ打ちや、加虐、被虐淫乱症的な行為が流行したし」――「二十世紀後半の日本でなにゆえ今さらかくもサド、マゾ的趣味傾向が火の手をあげているのでありましょう」――終りに

――「女房とサドマゾごっこできる夫は健康である。トルコ風呂に行つてミストルコに手を縛ってもらつて発散できる男はまだ健康である。残酷ストリップや芝居を、声一つあげずに見つめている者もまだ健康である。何もしないでいる一見紳士ふう、一見よきパパがあり、ある瞬間、残酷の鬼になるのがこわい。アメリカではすでにそういったタイプのライフル魔や殺人鬼が出てきている」――

さてと引用ばかりしているが、今回は引用に徹底しよう。

サンエス一月二十三日号、サイテイすぎて報道されなかった愛情トラブルで、救急車を呼んだサド趣味の旦那云々。その道の権威である氏家良夫氏の話として

――しかし一度この味を覚えたら必ずまでやるでしょうね。一種の中毒のようなものですからね。なにも、それが悪いことだというのはありません、節度をわきまえておればいいのです。だって男も女も大なり小なり、そのケがあるんじゃないませんか。――(以上サンエスより)

× × ×

こう色々かくと肯定論ばかりの様だが、同じ婦人公論で以前特集した「ある時突然夫をケイベツする時」などよむと(一寸、失くしてはつきり何月号の誰と言えないが)ある女性作家が、自分の亭主は何一つ申し分のない夫だが、時たまけものになるのが実にいやだと憎しみをこめて書かれていた。この世には、絶対に肉体関係をしない夫をのぞむ女性がいる事を知って、私はびっくりした。けものになると言うのは、夫婦のふつうの行為の事を指すらしい。変態無性欲とでも名づけるのか、冷感症というのか。とにかくそういう女性も一杯いて、又、こういうのをほめ上げる、おべんちゃら男性評論家がいっぱいいる。

× × ×

一九六七年六月号の新評の、ドキュメント・にっぽん「黒い雪を裁くものの正体」竹中労氏の文から

――東京母の会会長吉川政枝女史のおおせられた言の葉集。(竹中)「あなたの書くものをこれから監視しますからね」――

黒い雪をぐらんになって――答「ええ、警視庁で見た時にはものすごく驚いてしまった



んです。——これはどうしようかと思ってい  
たら、もっともっと本当に人の口から言い表  
わすことができないような——まったくあの  
一日、ご飯もいただけなかったようなわけで  
——こういう美しい社会に、こういうのがあ  
るかと思うともう。最後までではもう、目にふ  
たをしなければ見られないような場面——  
??

美術展の裸体画を青少年がみることをどう  
考えるか?——「なるだけみない方がいい、  
映画の接吻シーンはあたりまえとなったが、  
なるべくしない方がよい」——  
もう止めよう、そろそろしくなってきた。

× × ×  
梶山先生の「ミスターエロチスト」(文春  
新春特大号)について、一月九日読売夕刊の  
大衆文学時評で遠山欽五郎氏が、サマセット  
・モームの言を引いて、いかにももっともで  
あると思わせるものがないという評。同感。  
又良俗に反するということではなく、健康な快  
楽人にとって楽しくないから、この種の実験  
小説は純文学という研究室内で発表してほし  
いという評も又別の意味で私は賛同したい。  
梶先生少しく暴走。

× × ×  
日本の女流文学者でS M心理を書かれる最  
高の方は河野多恵子さんであると思う。久々  
に群像二月号に、大作二六一枚「不意の声」  
を書かれた。「幼児狩り」に始まり、「解か  
れるとき」「台にのる」新潮の同人賞受賞の  
「劇場」など。尤も、具体的な場面等をさが  
そうなどすると、せおい投げに会う。いた  
って高級な謎解きだ。第一、純文学作品から  
S M場面だけをひっぱりだすのは邪道であろ  
うし、語られない部分にひそんでいる。

37年2月号の新潮にのった「劇場」の最後  
の所の一二七頁

——「得だ、得だ、得だッ! だから、今度  
はわたしの番。ね、ケン、お願い」美女は三  
尺帯を解きはじめた。

せむし男は叶えてやった。洋装の下着姿で  
三尺帯で縛られ、後ろ手に簞笥の環に結えつ  
けられて、美女は喘いでいた。……「どうし  
たヒデ」と、せむし男は、日出子を眺めた。  
少々あって、「よしよし、お前もか——」そ  
ういって、立ちあがった。——

あえて引用させていただいたがS M心理に  
いささか通じていないと、美女の「得だ」と

× × ×  
いう叫びの意味が、ははんと判りかねる。と  
にかく、たぐいまれなる作家として敬愛して  
いる。勿論、あくまで作品の上だけの話だ。  
河野多恵子さん御自身の性向は知る由もない  
し、無関係である。

× × ×  
あ、忘れるところでした。正月に、サド劇  
「たたきと縛り」<sup>しば</sup>実演、てな広告につられて  
誇大広告かくごの上で見えました。映画館  
にはぎっしり男共が詰めかけていて、押すな  
突くなの大入りの盛況。圧力に耐えて眼を皿  
にすることついに一時間、(実演中は四百円)  
縄もひもも、言葉すらも一かけらもあらわれ  
ず、筋もまるで関係ない。

金四百円也でしづりが見られると思う私の  
馬鹿さかげんもさることながら、正にたたき  
売りで、もしお客は大事にして下さいよと  
申上げておきます。

それでも、これのおかげで、実演のない映  
画館の方がずっと楽<sup>ラク</sup>にみられるし、サービス  
もいい事が判り、安心していられることを悟  
りました。がっかりさせてくれて、ありがと  
う。



S  
M  
一  
〇  
〇  
問

## 安井喜久子夫人を訪ねて

## 塚 本 記 者

S M 1 0 0 問

ビデオテープとは御存知録画である。今度ビデオ・ダンスケと呼ばれる携帯用の録画器が発売されたので早速購入した。編集長に見せたところ、使いはじめに安井喜久子夫人にインタビューしてはどうか、彼女だったら、相当なものを撮らしてくれるさ、とそそのかされた。器械も小手しらべに使ってみたいし、安井夫人の爛熟した姿態も録画したい。それに彼女は責められたとき、相当ハッスルして声を出しやすい。テープに同時録音するのにはもってこいだ。

僕の食指は大いに動いた。かくして安井夫人訪問の臨時記者塚本鉄三が誕生したわけである。編集長から連絡して貰ってあったし、

会場の段取りも万端整えられてあったので、僕はダンスケをかついで、指定の北新地の料亭Pへ行けばよかった。時間は彼女の都合で午後二時きっかり。

渡廊下を隔てた離れの奥座敷、ひっそりとして大阪市内にも、こんな静寂なところがあるのかと驚く。初対面の挨拶のあと、先ずインタビューにうつる。

◇ ◇ ◇

第1問——何時頃から奇クを読まれましたか？

(答) そうですね、結婚して、新婚旅行から帰って数カ月目でしょうか。今から計算して八年前になるかしら。

第2問——SMという意味知ってますか？

(答) ええ知っています。Sはサディスト、Mはマゾヒストですよ。

第3問——御主人はSMに理解ある？

(答) 理解あるどころではありません。何にも知らない私を、このようにしてしまったんですから。今の私はこの世界については夫に教えられたものばかりですわ。

第4問——貴女はSですかMですか？

(答) Mだと思います。夫がSだったので夫の性格に合わせるのが妻の役目だと思って迎合しているうちMになったのだと思います。

第5問——ところで、そのMの中で貴女は何が一番好きですか？





(答) 嫌いな趣味って私SMの全部知ってるわけではないのですけれど、奇クを読んでいて私にわからないものは『切腹』でしょうか。でも新婚の時は、今の一番好きな縛りもわからなかったんですから、将来は好きになるかもしれませんわ。

第10問——はじめて

縛られた時と場所は？

(答) 新婚三日目、箱根の小涌園という旅館で夜の十二時頃だったと思います。

第11問——結婚まで処女だった？

(答) 勿論そうですわ。

第12問——その当時、SMという言葉を知っていましたか？

(答) 知りませんでした。

第13問——初めて縛られた時の感想は？

(答) 新婚旅行に出発する時、母が私の耳元で囁きました。お床へ入るときはパンティを脱いでゆきなさいって。今から考えますとノーマルな夫婦の結合について、夫のする通り

従いなさいと云われたのですが、あの時は縛りにも従わねばいけないと思いましたわ。でも、そのお蔭で夫の性向も理解できてよかったと思います。

第14問——御主人は縄を持って新婚旅行に出かけられたのですか？

(答) いいえ、途中小田急の駅前で土産物を括るのだとかいって買ったようです。まさかこの縄によって縛りの味を教えられようとは夢にも思っていないでしたわ。

第15問——その晩その縄でプレーですか。それで裸にされて？

(答) お蒲団の中ではなかったですからパンティはつけていました。

第16問——その時のパンティ、記念に残してありますか？

(答) いいえ。でも、あの頃としては最高に小さなビキニ型。最高に可愛いパンティだったことは覚えています。

第17問——古くなったパンティは、どうされますか？

(答) 何故そんなことをお聞きになるの？なんとなく、なくなってしまうすわ。

第18問——ああ勿体ない。ファンの方で貴女の着古したパンティを欲しいという人も案

(答) 縛りです。

第6問——縛りって言いますと、例えばどんな風なのか？

(答) 後手縛りですけど、時によっては前手縛りも好きなんです。(彼女この時、少し顔を赤らめる)

第7問——二番目にお好きなのは？

(答) ムチ打ちです。

第8問——三番目は？

(答) 複数プレー。いやあね、講談の森の石松みたいな尋ね方するのね。

第8問——では真面目に、一番お嫌いなプレー又は趣味は？



外多いんですよ。若し要望があれば上げる？

(答) まあ恥しいワ。私のだと分らなければ内緒に差し上げてもいいけど。でも私から貰ったと言われたら嫌だわ。

第19問——シミついてますか？

(答) まあ、貴方って最高にエッチね。

第20問——答打ちは何時頃から覚えましたか？

(答) 夫婦喧嘩の時がきっかけです。それから、いつの間にやら、覚えましてよ。丁度五年ぐらい前になるかしら。

第21問——何んで打つの？

(答) 夫が台湾で買ってきたアクリルの皮で作ったベルトで。

第22問——主に何処を打つのです。

(答) お尻です。

第23問——痛いですか？

(答) そりや痛いですわ。お尻がミミズ脹れになり所々紫色の斑点ができてしまいます。しかも片方のお尻の山だけ、でも、一方の山だけベルトの先が当たりますから、翌朝食卓の椅子に腰掛けると飛び上る位痛いんです。

第24問——縛られていて今までで一番好きなポーズは？

(答) 股間しぼりです。

第25問——何故ですか？

(答) そんなことお聞きなるもんじゃございせんわ。御存じのくせに。喰い込む感じが

何ともいえないとお答えしておきましょう。

第26問——股間しぼりのままでムチ打たれると痛いでしょう？

(答) 最高に痛いですわ。

第27問——どんな風な感じですか？

(答) 貴方のガールフレンドってMなんでは

よ。聞えてごらん遊ばせ。

第28問——編集長から聞いたのですが、貴女のフォトは修整の必要がないそうですね。

(答) それはどういう意味なんですか？

第29問——つまり、はっきり言って、有るべきところに無いんじゃないかと？

(答) まあ失礼ね。ちゃんとありますわ。でもね、夫の趣味で何時も入浴の時、カットされてしまいますのよ。

第30問——貴女のお好きな責めプレイは？

(答) ラビア責め(小声で)恥しいワ。

第31問——ラビア責めって言いますと？

(答) 先程も申し上げた様に、はじめて除毛された時、お前のは大きいというのでデパートで買物をした紐でくるるので……。

第32問——紐でくくって、どうするの？

(答) 私の専売特許、それから先は恥かしくて、申し上げられせんワ。

第33問——そんなに羞かしがらずに、私にだけ教えて下さい。

(答) 今日は駄目、そのうち告白の原稿で書いてみます。とにかく私の大好きな夫自慢のセックス・プレーとだけ申し上げておきます。

第34問——レスビアンについて興味をお持ちですか？





(答) 別に経験はございません。でもチャンスがあればしてみたいと思っています。

第35問——そんな時、男型になる？ それとも女型になりたい？

(答) そんな事あるの。でも想像によると私Mでしょ。何のことか知らない。

第36問——レンビアンって女性の同性愛のことです。どんなことするんでしょうかね。

(答) やはり私解りません。

第37問——女と女と一緒に寝るといことを、どう思いますか？

(答) また変った世界があるのではないかしら、人間って常に変った欲望を抱いているからこそ進歩するのではないでしょう。

第38問——女同志が何を思う？

(答) わからないわ、只わかってるのは何かしらSMみたいなことをするのだと思うのだけど、違うかしら。

第39問——貴女にレズの友達を紹介しましょうか。

(答) 紹介して貰えるんだったら、神妙に教えていただきます。でも、その方、貴方の彼女ではないでしょうね。

第40問——レズとSMと今だったら、どちらを選びますか？

(答) レズの味って知らないでしょう。だから、やはりSMの方ね。

第41問——エネマは好きですか？

(答) 貴方って何んでも知っておられるんですのね。まるでSMの神様みたい。本当のことを言うと二度経験あります。でも、あまり好きではありませんの。

第42問——何故ですか？

(答) 最初に失敗したんです。勿論夫でしたけれども、私の両手足を縛ってエビ責めにし、背後から注入しました。初めは一生懸命我慢していましたが、とうとう我慢が出来なくなり大きな声で許しを乞いました。しかし許してくれませんでした、とうとうその場で洩してしまい、あんな恥しいことって、なかったわ、それから恥しい方が先で……。

第43問——縛りが好きでエネマが嫌いとは女性性格によってまちまちですね。男性の教育次第ですかね。

(答) そう思います。

第44問——ご主人に内緒でこんなインタビュ——にに応じて、ヤキモチをやきませんか？

(答) 大変よ、きっと。私又縛られてムチ打たれてしまいますワ。

第45問——案外それが又嬉しいんでしょ。

(答) かもね。

第46問——話題を変えましょう。吊りは知っていますか？

(答) 知っていますわ。夫も好きなのよ。しかし、私の家近代的な建て方かしら、和室はあるんですが、鴨居というのですか、吊るところがないのです。

第47問——で、何所でやるんです？

(答) 家ではやれませんが、ホテルへ行つてやりますの。

第48問——あなたは随分背はお高いようですが、ウェイトの方は？

(答) 五十二キロです。

第49問——私は五十八キロですが、五十二キロの奥様を吊るのは大変でしょ。

(答) その趣味があれば、何キロだって平気じゃないのかしら、私は吊られる方だけ。

第50問——吊られた時の感じは？

(答) 別の世界を歩いているみたい、フワフワした感じですワ。

第51問——そこで答打たれれば——？

(答) またプラスアルファの世界っていいですか、恍惚とした、うっとりとするような。

第52問——そんなにいいものですかね。そのプラスアルファって世界？



(答) あなたのガールフレンドに教えて聞いてみたら。

第53問——僕も吊りはやったことはあるが吊られた経験がないから、何んとも言えません。次にむつかしい質問ですが、野外のSMプレー乃至は野外のSEXプレーの経験は？

(答) 夫に聞いて下さいと答えたいところですが、必ずお返事するという約束でしたね。両方とも経験はあります。

第54問——何時、何処で、どうして？

(答) 夏のことですけど、伊豆の沖合四キロばかりの小島にモーターボートで行きまして二泊しました。朝六時頃、起床して前から計画していたヌード撮影です。撮影が終了すると次は縛りのプレー、そのあとで久しぶりに青天井でノーマルな行為を楽しみました。無人島なんですけど、やはり不安感と申ししますか満足しましたわ。

第55問——その時は縛られたまま？

(答) 御想像におまかせしますわ。

第56問——一月号で辻村さんのカメラハントを見ましたが縛りばかりでしたね。いろいろと変ったファンの為にも、貴女の好みの趣向を話してみして下さい。

(答) そんなこと女の口から言えせんわ。

男がリードするのが当然でないでしょうか。

第57問——男性がリードするなら何でもOKしますか？

(答) その相手によってはね。

第58問——辻村さんの何処が好き？

(答) 好きな処は沢山あるから言わなくて、嫌いなのは浮気、そうでしょ、私の気も知らないで、お猿を見に行くと言ってガール・ハントするんですもの。

第59問——でも、あの時は仕方ないでしょう。あなた達夫婦のために気をきかしたのではないですか。

(答) 辻村さんを責める気持はありませんけれど、辻村さん、お猿とプレーすれば良かったのに、とそう思っていますのよ。

第60問——女斗美って知っていますか。また興味をお持ちですか？

(答) 残念ながら経験ありませんの。でも縛りで股間縛りのとき、六重八重にすれば、お фондシに似てないかしら。

第61問——御主人は女斗美について関心をお持ちですか？

(答) 何にも言いませんから私には判りませんが、やはり経験はないと思います。一度経験するとすぐ好きになるタチなんです。

第62問——女装については？

(答) 夫でしたら無いと思います。

第63問——貴女は何人のお子様をお持ちですか？

(答) 二人です。

第64問——妊娠中のプレーの経験は？

(答) お腹が大きくなってからは、大儀なので余り外出せず、室内での撮影が多かったです。勿論妊娠中のフォトは十カ月まで写しましたわ。

第65問——妊婦フォトは奇クへは提供されなかったのですか？

(答) なんとなく恥しくって——。

第66問——複数プレーというのは？

(答) 字の通りですよ。三人とか四人とか。

第67問——パートナーを、お世話しましたか？

(答) 是非お願いしますわ。私って二人の男性から責められるのが好き。願望があるの。貴方、出雲の神様になって——

第68問——私でよければ、どうぞ。

(答) どうせ皆んなに、そんな調子のよいことを言ってるんですよ。

第69問——今日は御主人はお留守？

(答) お得意先の招待で有馬温泉へ行ってる



んです。同好の方も一緒だ  
そうですので、きつとSM  
放談でもしてるんですよ。

第70問——お一人で留守  
番してるときは、何を願っ  
ていますか？

(答) やはり淋しいですわ  
一人寝は。

第71問——若し温泉芸者  
とかバーのホステスにSM  
女性がいて貴女のご主人を  
誘惑したらどうしますか？

(答) 夫に限って誘惑に負けるようなことは  
絶対にはないと思いますけど……

第72問——でも、男性という動物はわかり  
ませんよ。貴女よりその女性の方がよくって  
御主人を満足させたりしたら？

(答) よして下さい。夫は私に充分満足して  
いる筈です。夫は私の趣向が一致していると  
言っています。失礼ですわ、ほんとに。

第73問——ごめんなさい。つい若いもので  
すから、言い過ぎまして——。

(答) いいえ、私こそ興奮してすみません。  
夫に限って、そんな事絶対にありませんから  
御安心下さい。



第74問——あなたのお好きな体位は？

(答) タイイ？ ああ、あの時のスタイル、  
人間様並みの正常位、SMを入れれば後手縛  
りの上向きで、あれ御想像下さい。

第75問——オナニーって知ってる？

(答) もちろんイエスよ。

第76問——経験ある？

(答) 淋しい時に一人ですることですよ。

第77問——SMと関係ありますか？

(答) 私の場合は完全にありますわね。

第78問——何と結びつけるの？

(答) ムチ打ち。

第79問——どういう風に？

(答) 今ここでは教えられないわ。

第80問——私、今日は重いビデオを持参し  
ましたが、あとで撮らして下さいね。

(答) ええ、どうぞ。

第81問——お宅にもビデオテープが  
おありのことですが、何に使用されますか？

(答) 何に使用するか御存知のくせに。

第82問——一度ビデオテープのコレクショ  
ンを見せていただけませんか？

(答) ええ、機会がありましたら、どうぞ。

第83問——秋山夫妻のショーを見ました？

(答) ショーは見ないけど、でも奇クの誌上  
で見ました。実際に見るショーとは違うと思  
うけど、どうかしら。

第84問——奇クで最初に見るページは？

(答) 主人は『花と蛇』、私はハカメラ・ハ  
ントV。

第85問——SMの世界で好きな男性は？

(答) 夫以外ですよ。辻村さん、団先生、編  
集長、その他本当の意味で理解出来る、信用  
のおける奇クファン。

第86問——女性では？

(答) 関谷夫人みたいになりたい。

第87問——あなたの鼻って、恰好いいです  
ね。いじめたいですよ。



(答) 鼻なんて、どうしていじめるの? そんなこと言われたのはじめてだわ。

第88問——奴隷妻って、知っている?

(答) 夫がワンマンで妻を奴隷扱いにするこ  
とでしょ。私達夫婦もそうですわ。

第89問——貴女の場合、奴隷妻としての具  
体的な扱いは?

(答) 子供が寝てから、全裸にした私を両手  
前縛りで手首だけ自由にして黒皮の責めパン  
ティを強引にはかせます。その後は、お茶を  
出せ、ビールを持って来い、煙草に火をつけ  
ろ。不自由なので行動が思うようにいかない  
と、「遅い」と責めパンティの前に下った紐  
を引ばるの。痛いわ。でも私は一生懸命に夫  
の命令に従うわ。従わないと恐いし、また叱  
られてる時が一番愛されるみたい。

第90問——責道具は持っていますか?

(答) 持っていません。どなたかお譲りして  
下さいませんかしら。

第91問——夜、何時に寝ます?

(答) プレーをした日、夫の帰りの晚い日、  
全部違いますわ。

第92問——貴女、自分の緊縛フォト見た?

(答) 見ました。

第93問——御主人は写真の方はお得意とき

いていましたが、何枚ぐらいコレクションが  
出来ましたか?

(問) さあ、数えたことはございませんけど  
五百枚ぐらいは有ると思います。

第94問——先程のラビア責めのお話、中途  
半端でしたが、もう少し詳しくお話し下さい  
ませんか?

(答) 恥しいんだけど、告白してしまいまし  
ようかしら。私達夫婦の陰語でビラビラと申  
していますが、それをデパートの買物の紐で  
両方から括り首につけて、それからムチ打ち  
やいろいろのことをするの。もうこれくらい  
いいでしょ。

第95問——くすぐり責めは好きですか?

(答) 経験はありません。

第96問——SMプレーを8ミリで撮ったこ  
と、ありますか?

(答) あります。

第97問——どんなテーマで?

(答) 最初はやはり野外からでした。光線の  
関係で室内では無理なので、お友達の庭で撮  
ったのです。でも、今は専らビデオテープで  
SMプレーを楽しんでいます。

第98問——どんな処でプレーしてみたいと  
思いますか?

(答) スイス。遠く離れたロマンチックな異  
国で——

第99問——野外と室内では?

(答) やはり野外です。魅力のあるのは。  
第100問——最後に、私と浮気してみませ  
んか。思いきり責めてみてあげますが?

(答) 主人が許してくれればね。私は大歓迎  
よ。三人、四人の男性から責められるのが大  
好きなんですもの。

△塚本Vどうも長い間有難うございました。

☆ ☆ ☆

インタビューが終って、いよいよ本日お目  
当てのビデオ・ダンスのSM場面撮影とい  
うことになった。器械の方の準備をする間、  
喜久子夫人に入浴して貰う。

果して、どんなものが撮れるか、私は胸を  
わくわくさせながら用意を整えていった。

シミ一つないスベスベした白い肌。女盛り  
の熟れきった女体を、思いきり責めつけて、  
ビデオのアップで撮ってみたいという意欲が  
私の胸に、ふつふつと湧いてきた。

強烈なムチ打ちによる、彼女の表情の変化  
が、どのようにビデオに録画されたか、又、  
柔肌に響くムチの音、苦痛の呻き声がどの程  
度録音されたか、いずれ御報告したい。





去年の夏も終りに近づいたある一日、仕事の整理に湯の町へ出掛けたその夜、一緒にくっついて来たミニスカートの短大生を目かくし、猿ぐつわの上、縄つきで寝かしつけた。若さが匂う肌の側で原稿を書き続けながら、疲れてくると息抜きに彼女にいろいろとたわむれて深夜の無聊を慰めていた。

明け方近く甘美な眠りをむさぼっているはずの娘が、突然身もだえすると、顔をふとんにこすりつけて猿ぐつわと目かくしをはずしてしまった。一瞬、その顔は恐怖におびえた

あ

ぶ

ら

ぶ

す

こ

ん

と

水 沢

登

ようだったが、私の顔を見つけると、安心してように再び安らかな眠りに落ちていった。吐き出されたパンティは、ぐっしょりと唾液を吸っていた。

翌朝、部屋付のバスで、肌のにこった縄目の跡を揉みほぐしてやりながら「猿ぐつわがきつ過ぎたのかい」と尋ねると「そうではない」と言う。強盗に入られ、猿轡目かくし緊縛された夢を見たという。

驚いて眼が醒めると、現実そうだったのでサテはとビックリした次第だとのこと。「抵

抗できなくしておいて、強盗は君に何をしたんだい」と尋ねると、ニヤニヤするばかり。

「大いに気になるんだよ」と、しつこくあれこれ追及すると「好きね。そんなに気になるの、水沢さん、やいてるんでしょ」フフと優越感に満ちた顔で湯から上っていった。よくくびれたウエストの上で、先程まで宿の浴衣の帯に締めつけられていた乳房が、かすかに揺れた様だった。あの弾力は、私の手がはつきりと知っているものだった。

いたぶり続けていた今朝までの私は主人で



あった。ところが、強盗に襲われた娘の夢の話を聞いてからは、彼女のいうように嫉妬心から、精神的にいたぶられる側にまわってしまったらしい。主人は彼女であり、奴隷は私である。端的に言えば、私はSからMに、ミ二娘はMからSに転位したのである。

SとMは紙の表裏にたとえられる。SとMは一寸したキツカケ即ち、精神的な力のバランスのくずれで、相互に移り変り易いのである。

この関係はコントの表現によく似かよっている。いつかコントを書こうと考え始めたのは、実は、独りになった湯の中であつた。

普通、我々は他人の性的生活、アブノーマルな性癖を知らない。自身の経験を頼りに他を類推するしかない。超自我（良心）が、他との交流を拒否する傾向が強いからである。他所から得られる情報は、固く閉ざされた殻の中から、時たま洩れてくる僅かな流れにし



か過ぎない。それも経験の少なさからくる劣等感を裏返した誇張に満ちた危なげなものが多い。ところが、我々は相互に劣等感におびえ、あやふやな情報、智識でも漁り歩く共通の性格をもっていることも知っている。

人間は何らかのかたちで自己を他人と比較して、優越感をもたないことには生きていけない生物のようである。たとえ、その優越性が現実の他人という存在との比較の上に立ったものでなくてもよいらしい。ここに、昔から小咄、滑稽譚、コントの存在する理由と余地があつたに違いない。コントに登場する人物の行為を、人間なら誰でも笑うことができる。そして、この架空の人物に対しては誰しも遠慮なく優越性を誇示し得る。その結果、我々は各種の欲求不満、悩みのシコリを浄化（カタルシス）することができる。

しかし笑った後で、笑われている相

手は誰なのか、登場人物の仮面の下にある真の役者は誰なのか、と追及してゆくと、仮面の下から、おのれ自身の顔がでてくることがある。性的な笑いは一種の加虐行為である。笑われている者は被虐者である。コントの読者は、往々にしてサジストであると同時にマゾヒストとなる。

次に拙作の一例をあげて、もっと実際に考えて見よう。

### のぞき穴

マンションの夜半、秘密のノゾキ穴から、隣室の純情が売りものの独身女優に、蔭ながらおやすみの投げキッスを今夜もまたするつもりでトム。ノゾいて息をのんだ。

怪漢一人、顔はむこう向きで分らないが、女優をベッドにうつ伏せに組み伏せての落花狼藉。腕は後手に縛り上げられの、口には何やら猿轡。自由な両脚を虚空に蹴上げての抵抗。ネグリジェ、マクルーハンのパンティすっかりの絶景。

すわこそ一〇番！と逸ったが、待てし。事の次第を見届けてと落ちつけば、かの怪漢キラリと注射針を光らせて、あばれる



女のパンティをぐいと引き下げ、ブスリ。麻薬か毒薬か。女はグッタリ。

男、はじめて振り向くと、これはしたり、向い部屋の映画プロデューサー氏。彼、舌打ちすると「しょうがねえ女だ。イザってなると、いつも胃ケイレン起しやがる。人に知られたら俺達はどうなるんだい」

冗長に過ぎるが、考察する上には適当と思う。性的、アブノーマルな行為に関するコントには、何らかのかたちで背徳、非社会的な要素が含まれているが、必ず何らかのかたちで、この本能的行為に懲罰が下される。これは作者の超自我がそうさせるのだし、そうでなければ読者の超自我を満足させることができないからである。

このコントの登場者の女優とプロデューサーは、マスコミによってつくられたのかも知れないが、大衆のアイドルである女優の純情性を、共同して秘かに踏みにじろうとしている。大衆への裏切りが意図されている。トムは、自分でやりたくてもできない凌辱の欲求を、プロデューサーの行為を通して満たしたいという願望をもって、ノゾキという性的異常

行為をなしているのである。

懲罰に関して述べれば、女優とプロデューサー氏は胃ケイレンという突発事故で欲求が満たされなかったこと。この秘そかごとがトムのノゾキによって、プロデューサーの不安が現実化したことで二重に処罰されている。ピーピング・トム氏は、女優に恋人がいたことが分って失恋が決定的になったこと。プロデューサー氏の失敗によって願望の達成が挫折したことにより、やはり、二重に罰せられている。

次に作者と読者との観点から、もう一度見直してみよう。

読者が、三人の登場者を笑ったとする。その時あなたは、登場人物に対して優越感を抱いたのである。しかし、もっと深く掘り下げて、あなたは登場人物と共犯でなかったかと考えて見る必要がある。コントの筋を追う、ホンの短い時間に、トムと同じ期待を抱かなかっただろうか。とんだ結末に、全然シャクにさわらなかつただろうか。もし、そんな感情を一瞬でも心の隅にもったとしたら、トムと共犯なのである。少なくとも、あなたはこのコントを読むことによって、何時のま

にか、ノゾキを行なっているトムをノゾキという立場に立たされているのである。ノゾキを行なうものは罰せられなければならない。あなたは確かに罰せられている。それはどのようなにか。それはあなたが笑った登場人物の中に、共犯者としてのあなたが登場してくるからである。

このように考えてくると、コント作者は全く読者を罵にかけて喜ぶサジストのように思えるであろう。その通り、作者は読者が起すであろう精神的な反応を予測する。そして被虐としての読者の心の痛みを感じて、快感をおぼえるサジストなのである。しかし、作者と読者との間に共通な基盤が存在しなければ作品は生まれにくいし、読んでももらえないであろう。事実、読者は意識する、しないにかかわらず、コントの登場者に作者の姿を見るのである。作者はトムと共にノゾキ、プロデューサー氏と同じく女を拘束して、パンティをずりさげ、注射針を女の尻に突き立てたいのである。作者は露出症の登場人物として、作中の人間と共犯する。

作者がコントに登場した以上、読者に笑われているのである。作者は被虐者であること



をまぬかれない。作者も読者もコントを通じ  
て共犯者同志なのである。では真に笑ったも  
のは誰か。笑われたのは誰なのだろうか。性  
的な笑いは、このように、加虐と被虐とが作  
者と読者との間に錯綜して、転位するのであ  
る。

さて、堅い話はこれで終った。後は拙作を  
ひやかして頂くだけになった。

最初のコントだけは、アメリカの作品をア  
レンジしたものである。筆者の印象に特に強  
く焼きつけられたからである。これらのコン  
トで、あなたの笑いが買えれば幸いである。

## 加虐症

道ならぬ恋をして人妻、漸く若い恋人をホ  
テルの一室に誘い、先にベッドに入ると、も  
うかっかと燃えて、

「私はあなたのもの。好きなようにして、私  
の身につけているものを破り取って、縛ると  
も、鞭打つとも。私をめちゃくちゃにしてち  
ようだい」

そして、ウットリとこれから起るであろう  
ことを期待して眼をつぶると愛人の声が一言  
とんできた。

「僕はいやだ」

## 家風

里帰りした娘、母親にむかって

「お嫁に行く時、郷に入れば郷に従えといわ  
れましたけれど、ほんとうに家風はそれぞれ  
違っていますのね」

「違っているよ、早くそれに慣れなければい  
けませんよ。で、どんなことなの」

「私、小さい時にイタズラすると、お母さん  
からお尻を叩かれたでしょう。痛いって泣く  
と、とても叱られたでしょう。それが夫のサ  
ームは、可愛い、愛  
してるよ、ってお尻を  
打つの。その上痛みを  
こらえていると、もっ  
と叩け、もっとわめけ  
って言うの」

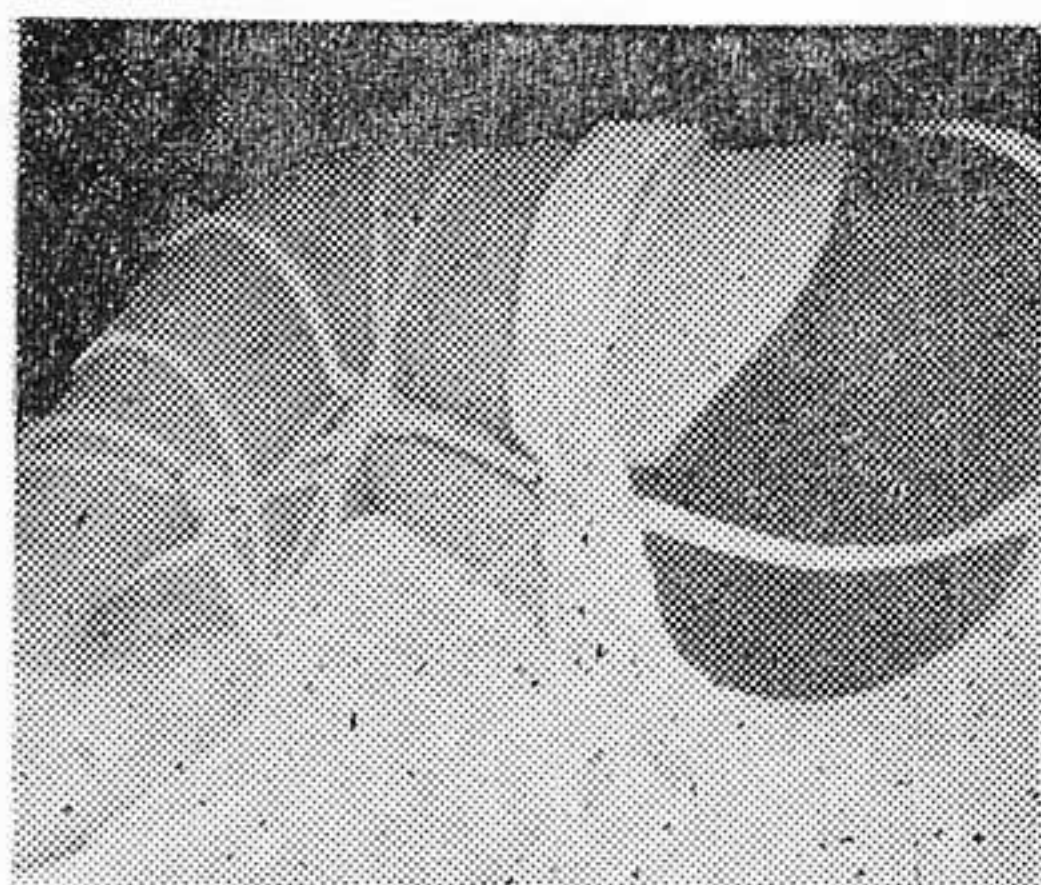
## お仕置き

女子高校の生活指導

室。個人指導している

先生

「あなたのような、イ



ケナイ生徒は尻打ちしてでも、指導しなければなりません。覚悟なさい」

「まあ、先生ったら変態ね。わたしをベッ  
ド・ルームにさそうつもり」

## おノロケ

団地奥様連のオシャベリで、新婚早々の奥  
さん

「うちのダーリンほど愛妻家はいないと思  
いますのよ。先だって、お皿を洗っていると、  
僕がやるよって、私の手足を縛ると、抱きあ  
げて、ソファに転がすじゃありませんか。そ  
んなにしなくても、私がやりま  
すわ、と言うと、ウルサイって  
口をククってしまいましたの。  
水道の水は冷たいし、荒れ性の  
私の手がササくれだつのが、と  
ってもイヤだったんでしょね  
キット」

## ギャングごっこ

子供の遊びはたわいない。

メリー「今日は何か変わったゲ  
ームやらないこと」



ジョー「ウーン、じゃ、ギャングごっこしない。僕はギャング。君は財産家の一人娘」

メリー「やろうかしら」

ジョー「一寸待って、支度してくるから」

メリー「ジョー、ロープやギャグなら心配しなくてもいいのよ。パパの寝室にママ用のが、ダンスに入ってるから、持ってくるわ」

### チャンピオン

司会者「今日の集りは、皆様の中からサジストの中のサジストを定める会です。順にサジストとしての性癖を御披露願います」

A氏「私は若い娘を緊縛の上、鞭打ちして悲鳴を聞かないと、一日の仕事が始まらない次第で……」

B氏「……で、窒息寸前まで猿轡で追いかんで、羞恥責めにして……」

C氏「私は血を見ないと……」

……

X氏「こんな会、止めてしまえってんだ。

ふざけやがって。俺のやることはみんな正常だよ。ほかに言うことはねえ」

司会者「皆さん、これで定まりました。チャンピオンはX氏です」

### プレゼント

喫茶店で中年紳士とミニスカートの少女、  
「クリスマスが近づいたから、奮発して、流行の革のスーツにブーツを買ってやろうか」  
「マア嬉しい。でもオジ様ってエッチね。私が、革のブラジャーやパンティの方がいいって言えば、もっとよろこぶんでしょう」

### 先手必勝

バーでの会話。男はウイスキーのストレートをダブルで注文している。

「君が僕との約束を破って、あいつと婚約するなんて。僕は君をガンジ、ガラメにして掠って行きたいよ。そして思い切り打ちのめしてやらなけりゃ、気が納らない」

「そんなことすれば大声で助けを呼ぶわよ」

「猿轡をはめてでも、そうするよ」

「そんな気持だったら、何故しなかったの。」

彼はそうしたのよ」

### 男 心

娘二人、ボーイ・フレンドの話。

「彼ってお金持だから、何でも買ってくれるの。でも、パンティだけは駄目。汚れたマン

マでいいって。脱いでおくと、むりやりはかせられちゃうの」

「私の彼、貧乏学生だから、何にも買ってくれないけど、パンティだけはドンドン買ってくれるの。でも、汚れてくると、むりやり脱がして、持って行っちゃうの」

### パンティ

防犯協会の、痴漢対策講話の後、奥さんの一人がしたり顔で

「……だから、パンティは重ねばきさせなくてはね」

と言うのを、若く美しい母親の傍で聞いていた女の子

「そういえば、パパも独り言言ってたわ。今夜はひとつ、ワイフに上にはかせてやるか、って」

### 荷造り

ある新婚夫婦が引越準備をしていた。

妻「そこにもロープを掛けてよ、強く」

夫「こんなに強く締めてイタまないの？」

手伝いに来ていた妹が、隣室から叫んだ。

妹「片づいてからにしてよッ！」



## 薔薇と蜜蜂

(4)

## 第二章 あいのむち△3▽

田代俊夫

17

寝室は夫婦の聖域であり、みだりに侵入することは之を許さずなどと言ってみたところで、好奇心の前には道徳・法律の壁は無力です。その上、本節は第16節の続きなのであるから、そう簡単に省略することはかえって不当でさえある。芯のない鉛筆は使いものにならない。セツカイ老も勝手に入っていったのだから、殊更に遠慮するには及ばないともいえる。よってここに、慈悲深い態度で言い聞かせたり、思いやりのある仕方では反省を求めるとはどういうことか、その一端を述べんと

するものであります。

その夜の寝室の状況をまず偵察すると、冒頭二人で何やら言い争っているようです。聞いてみるとこんなつまらない議論です。

「……ぼく、井戸の中で充分反省しましたから、あんまり痛い目に……」

「馬鹿ね、あなたは。今から始まるころじやないの。第17節が一番長いのよ」

ビールや西瓜ではない。冷やされたからといってそれで済むものではありません。天然冷房がよく効いて食べ頃になったメロンを、サファイヤは膝の上にかかえ込みました。いたずらがみつかって母親にお尻をぶたれると

きの子供とほぼ同じ恰好です。ちがうのは、丸裸にされていることと後手に縛られていることの二点です。あぐらをかいた脚の上に、うつぶせの姿勢で横抱きに押えこんだサファイヤの眼下に、ふっくらと丸味を帯びた形のいい臀部が無防備状態で露呈されています。残念なことに、サファイヤの方はちゃんとパジャマを着用しているのです。しかし、諸般の事情を考慮すれば、どちらも裸というわけにいかないことは当然です。

「言っとくけど、今夜は容赦しませんよ。腐り切った精神を、みっちり鍛え直しますからね。分った？」



物静かな口調の中に厳然たる決意が秘められ、受入態勢を完備しているメロンも身の引締まる思いです。そこで観念の眼を閉じて長嘆息しましたが、まずその態度がよろしくない。叱声が飛びました。

「あなた、いつからつんぽになったの？ 返事しなさいっ！」

「覚、覚悟できてます……」

ぱしん！ 小気味のいい音が空気を震動させました。むき出しの双丘がぶるんと揺らぎます。ぱしっ、ぱちっ、ぽん、とたちまち連打の集中です。強烈なカウンターパーンチが続けさまに見舞います。他のところとちがってどんなにきつく叩いても骨や筋に影響ないから気が楽です。壊れる心配のない肉製木魚であり、破れる虞れのない本皮製タンバリンだといってよいでしょう。

慈悲深いサファイヤは、思いやりを込め、息もつかずに打って打って打ち据えました。白丘は赤味を帯びてきます。

「あ、ああ……い、いたっ……いたいよう……」

「あたりまえじゃない、そんなこと！」

最初の覚悟はどこへやら、だらしなく悲鳴を挙げて悶えるメロンを、きびしく決めつけるサファイヤです。地域限定空爆十数回、や

っと一息入れたサファイヤは、

「レッキとした妻を持ちながらよその女と恥知らずな振舞いをするなんて、絶対に許せませんよ、わたしは」

とばかりに、内縁関係を楯にとって昼間の論議をむし返し、夫の守義務違反を激しく論難します。成程、内縁だって夫婦にはちがいないのだから、これを責められると一言もない。

「何故そんなことをしたのか、正直にお言いなさい！」

「そ、それは、ほんの出来心で……」

万引き初犯者のような、まずい言訳をするので女裁判官の心証は更に悪くなります。

「おだまり。日頃の心がけがなっていないからですっ！」

と、語気を荒げて一喝し、意思の主体性を強調して決定論者へ痛撃を与えました。論破のための痛撃は、直ちに物理的形態へと波及して、また一しきり尻たたきが始まります。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

メロンは蛸のように身体をくねらせ、尻を振り腰を動かして脚をばたつかせますが、サファイヤの片腕にしっかりかかえこまれているので、平手打ちを避けることができませ

ん。その上、運の悪いときは仕方のないもので、その蹴き暴れる身のこなしが、憎むべき女達とのあられもない戯れをサファイヤの脳裡にアリアリと連想せしめて瞋恚の炎に一層油を注ぐ結果となるのですから全く救われな

い話です。

「相手の女の名前をおっしゃい！」

「……ス、スピード、……ハート……」

「まあ、二人もだなんて！……よくもぬけぬけと、……このケダモノ！」

一際高いかんしゃく玉的炸裂音がこだましました。いくら骨には影響がないからといって、こう頻繁に過剰サービスされては身体が保ちません。

「……許して、……もうかんにんして……」

「まだ始まったばかりでしょっ！」

有難いことに、このお仕置シーンはまだまだ続きそうです。メロン君には気の毒ですが尻打ちぐらいで終りにして貰っては、折角お膳立てした甲斐がないというものです。

「も、もう二度と、二度としませんから……」

今度だけは……」

「第8節でも同じことを言ったじゃないの、あなたは」

女性はこのいうことを滅多に忘れるもので



はないのです。また強烈な平手打ちがメロンの尻へと連発されます。しかし、ようやく腕のだるくなった女ドラマーは次第に打つ力が鈍ってきました。メロンは汗びっしょりで、はあはあと苦しそうな息づかいです。するとサファイヤは、膝の上でメロンの身体を百八十度回転させ、従前の頭と足の位置をとりかえました。今までは右手で打撃したので今度は左手を使おうとする暖かい思いやりです。一方だけではやはり片手落ちのそしりを免れないからでしょう。休憩時間を利用して、サファイヤは訓戒を垂れることにしました。

「一体、自分のしたことを、どう思ってるのです、あなたは」

「本、本当に悪かったと反省してます……」

「それだけ？」

「……以後、断じて今回のような不始末を起こさないよう心がけるとともに……」

「他にはないの？」

「……」

「あなたはまだ分ってませんね。したくもないお仕置をするわたしの真意が……」

と、かさにかかって責めつけてきます。真意といっても別段どうというほどのことはないので、哀願したり泣き喚くばかりのメ

ロンには、謹んでお仕置を受ける真剣さが足りないかと認定したもののようです。サファイヤは攻撃の矛先を転じました。

「少しは、お隣りのレモンさんを見習いなさい。結婚して二十五年、一度だってそんなふしだらな……」

と、出来の悪い息子が二十五点の試験答案を持って帰ったときの教育ママのごとく、比較対象を持ち出して叱りつけます。

「私達はまだ一年しかたっていないじゃありませんか。だのに今からこんな調子ではこれから先、ガミガミ……、レモンさんの爪の垢でも煎じて飲みなさい！」

新しい紅茶の入れ方を教わったメロンは、悄然と首うなだれて、成績のいいお隣りの子と我が身を比較し、ただただ恥じ入るばかりです。レモン君は最近、やや学業不振だということを耳にしているけれど、そんなことを楯にして抗弁しようものなら、説教夫人の機嫌を損ねて大変なことになります。平均四・五以上、クラスで三番以内というのが絶対のノルマなのです。

とにかく左手をいつまでも遊ばせておくわけにはいかない。まだかまだかと左手がうずうずしています。サファイヤは呼び水を引き

ました。

「いくら浮気しても、オレに惚れてるから大丈夫だってタカをくくってるんでしょ、あんたは……」

相当打ちにくい難球です。

「……い、いえ、決してそんな……」

「わたしだけに操を立てさせるなんて不公平じゃないの。それくらいの道理は分るでしょ、あんたにも」

おもむろに網をしぼってきます。

「わ、わかります……」

「なら、わたしにもよろめく権利があるはずじゃない？ え？ その点はどうなの、その点は……」

公平の原則より出立して理路整然と間男権の正当性を確立しました。メロンはしゅんとしてベソをかいています。どう返事していいのかわからない。

「何とか言いなさいっ！」

「あ、あります……権、権利があります」

あくまで峻拒すべきところをサファイヤの気迫に押されて妻の姦通権を承認してしまいました。もう逃げられない。

「ふん。じゃ、よその男と仲良くしても文句はいわないつもりね、あんたは？」



「……は、はい。言いません……」

ぱっしーん！ 久方ぶりの快音があたりの静寂を破りました。助け舟とみえたのはその実、泥舟だった。

「まあ、何てなさないこというのっ！ そんなフヤケタ精神だから、今度のようなことも起るんです。重大なる侮辱じゃありませんか、意気地なしっ！」

ぱし、ぱし。ぱち、ぱち……。燃えて火を噴く浅間山。弾け飛び散る線香花火。サファイアは腕も折れよとばかり打ち続け叩きまわります。一分間百五十回の超スピード。パチンコのプロでもこうはいきません。

哀れ、メロンはまた、ごめんなさいの連発を始めました。懲戒作用の存在意義と、その思想的背景及貞操感覚における基本的認識を誤解したがゆえに、かような破目に陥ったといわねばなりません。

「……まだわたしの親心が分らないのっ！」

「わ、わ、わかりますっ……」

「じゃ、言ってみなさい」

「……」

「またうそをつく！」

ぴし、ぴし、ぴし……。連打に次ぐ連打です。言葉とその指示する対象とは全くちが

うのだという論理法則を理解せず、了知作用はすべて言語形態に変換しうるのだという二重の錯誤に陥っているために、サファイアはこんな無理を強いるのです。言えといったつて言える道理はない。メロンこそいい面の皮です。女は精神と肉体を区別することを知らないが、それは、女には肉体しかないからだという某大詩人の言は、この間の事情を別の観点から明らかにしたものと解さねばなりません。とはいえ、現に尻をたたかれてるメロンにとっては、論理方則も象徴派もヘチマもない。半可通の物知りぶりは何の助けにもならないのです。

かく駄弁を弄する内に、さすがのサファイアも貫めるに疲れて、ようやく尻たたきの刑は終了することとなりました。あわれにもメロンの臀部はマントヒヒのように、赤くただれて腫れ上がっています。メロンはトマトになりました。

だが、臀部打擲はお仕置第一行程にすぎない。もっと骨味に染みるヒドイ折檻が用意されていたのです。額の汗をふきとり、しばらく呼吸を整えてからサファイアは、第二次攻勢の火ぶたを切りました。これぞ、教育ママを筆頭として優しい女性各位の常日頃愛用し

て止まぬ手段です。最も得意とする専売特許であります。

「あっ、ひいーっ。いたっ、いたあーい」  
茹で蛸のようになった尻を思いつきつねりあげられて、メロンは身体をのけぞらして絶叫しました。

「何です、オーバーな。これしきのこと我慢なさい、我慢を」

自分は痛くないものだから、サファイアは平気な顔をして、メロンの忍耐力のなさをたしなめます。そして次に掌を脚の裏側から廻し、内腿の痛覚を狙います。どの部分が一番こたえるのか、女性ならだれしも先験的に認識しているものです。

と、たちまちものすごい悲鳴が空間を鋭く切り裂き、後手に縛られたメロンはスルメのように全身をくねらせました。ああ、この死の苦しみを知る者ぞ知る。

「ああ、か、かんにんして。そ、それ、それだけは許して……」

「だめよ。一旦決めたことは絶対に実行するの、わたしは。さ、おとなしくして……」

「でも、でも……つねるのだけは……」

再度攻撃をかけようとするサファイアの手を、メロンは必死になって、腿をすり合せて



防ごうとします。しばらく無言の争いが続きます。

「しぶといわねえ、ホントに。……いいかげんにしないと……」

「あ、ああ……後生です。かんにんして……」

はまぐり戦術で頑強に抵抗する息子に、手を焼いた教育ママは急転作戦を変更、一旦膝の上から床にころがしました。ごろん、とおむけにひっくりかえる。両足首を掴み、力まかせの強引な股裂き。メロンはたまらず膝を割りました。むずかる赤子のおしめ取り替え作業の要領です。素早く身体を両脚の間に割りこませ、今までどうりあぐらを組む。開かせた両膝を小わきにかかえ込み、メロンの臀部を交叉したふくらはぎの上に置く。かくて、つねられポーズの完成とはなりました。

どんなにもがいてもこのおしめ取り替え形態からは逃げられない。死刑執行人に取り押さえられた囚人のごとく、メロンは「う」うしく頭を振ってすすり泣いています。

「大層手こずらせて下さったのね。心から御礼申し上げるわ……」

ついに断頭台に乘せられてしまったメロンは、執行人の謝辞も耳に入らないかのよう、観念の眼を閉じてわなわなと唇を震わせてい

ます。それにしても悲惨且愉快な光景です。

完全に無防備状態となって、サファイアの制圧下に置かれた腿の一部に、先程試験的につねられた箇所が赤黒く変色して、見るも無惨な被虐の実態を物語っております。

サファイアは俄然語調を改めました。

「さっきからのふざけた態度は何ですか、あなた。真面目にお仕置を受けられないようなことで、反省できたといえるのですか！」

抵抗したのがけしからんというわけです。絶対優位の力関係を背景に、それからしばらく、くどくどと精神訓話が講述されます。いちいち科白に書いてられないから、その論旨を要約します。

自分が心を鬼にしてお仕置をするのも、最愛のメロンのためを思えばこそである。嫉妬などという低級な感情に基くものでは断じてない。楽しみでやっているのだろうなどとは下司のかんぐりである。他人の寝室へ侵入して悦に入っている品性下劣なる輩の存することとは遺憾に堪えぬが、これは自分の関知したことではない。

以上のごとくであるから、お仕置を受ける者は誠心誠意、心を空しうして受け入れ、懲戒権者の心情に深く思いを致して反省のよす

がとせねばならぬ。痛いから、苦しいからといって泣き喚くのは受け入れ態勢のできていない証拠である。哀願したり慈悲を求めたりしても、心根の卑しい人間を喜ばすだけで何の効果もない。いわんや、不服従や抵抗の態度を示すなどは以てのほかである。……

「……あなたはまだ反省ができてませんね。そんな不真面目なことではどうするのですっ！」東京裁判で戦勝国側の使った論理をそっくり盗用しています。米軍占領政策立案者の押しつけ論法を勝手に借用しているのです。

だが哀れなメロンとしては、自分の現に置かれていた状況を考えざるを得ません。無理が通れば道理引っ込むのたとえどおり、ポロポロ涙を流しながらそれまでの自分の態度を反省し、慈愛に満ちた善意の教育ママに服従を誓いました。

「あなたの将来のためなのですよ。分りましたね？」

「はい。……お、お受けします」

人事課長から転勤の内示を受けた俸給生活者の悲哀です。それは何という厳肅な雰囲気でしょう。いくらつねられたっていいと言っているのです。

「この処置についてはどう思っているの？」



「あ、ありがたいとフカク感謝してます」

「そう、その態度です。その心がけを忘れないようになさいね」

だれか、人権擁護局の電話番号を教えてやって下さい。

「手加減しませんよ、絶対に」

「は、はい。……おろおろ……ヒューッ！」

凄惨無比・豪華絢爛たる地獄・極楽絵巻の開演です。しばし、筆舌に尽くしがたい壮麗苛酷な情景が展開されました。信念に燃え責任感に満ちた教育ママはその情熱のかぎりを成績不良児童の矯正作業に注ぎ込みます。尻たたきとちがい、事は物理的音波を伴わずに行われるから一層不気味です。メロンは固い誓言をも忘れて悲痛な叫び声を断続的に発しました。むろん、耳を傾けるようなサファイヤではありません。

「何て声出すの！ お隣のレモンさんに聞こえるじゃありませんか。さっきのお約束は忘れたの、お約束は……」

と、教育ママ的態度を堅持してたしなめ叱るのです。だが、その慈母のつくしきも、前節でメロンの項に発見したものと同一の痕跡を対象物の上に見出したときはわずかばかり乱れます。美貌のママはぐつと唇を噛みし

め、恐ろしい形相で睨みつけました。

「ま、何よ、これは？ どうしたのっ、この跡は！」

「……そ、それは、あの、ぼそぼそ……ぼそぼそ……」

「恥しらずっ！……ふん、この身体でトボケ通すつもりだったのね、トランプみたいな女と仲良くしたことを隠して……」

「い、いえ、ちゃんと洗ってから、……ヒ、ヒューッ！」

教育ママ交じて、女特有の口惜しさがぶりかえしてきました。まわりくどい精神訓話の内容を要約してもらったことも知らず、品性下劣なる輩云々と失敬千万にも放言したサファイヤですから、嫉妬感情はみじんもないと説示したことなど、とっくに忘れているのでしよう。

「この脚をどんな風に使ったのよっ！」

「……い、いつもと、同じように……キ、キ、キ、キ……あ、ヒューッ、……ヒューッ」

敵がそうなら、こっちも約束を破る。あまりの激痛に耐えかねてメロンもまた、泣き喚き呻き悶え叫ぶ暴れるという具合に、あらゆる手段を使って対抗し、その言語に絶する苦しさを表明するのです。

やがて、白い雲に赤・黒・青・紫の虹がかかりました。膝の上から足のつけ根まであますところなくつねられひねり上げられたメロンの内腿は、白地を四色のだんだら模様染め、極彩色に織り込まれて完全に変色してしまっただけです。油汗を全身ににじませたメロンは息も絶え絶えに横たわって、もう泣き喚く気力すらありません。

これだけ痛めつけられ、もう金輪際浮気することもあるまいと思われるのに、あくまで周到であり懇切丁寧を旨とするサファイヤはすぐさま第三次攻撃に移りました。

今度はお灸です。これで止めをさそうとする心算のようです。つねられ体勢から一旦メロンを解放して、あおむけにしたまま思いきり脚を開かせ、その両足首を寝台の脚にくくりつける。両手は依然として後手に縛っておく。Y字型というわけです。

サファイヤは用意したお灸道具一式を持ってくる、メロンの前に突きつけました。

「これ、どうするものか御存知でしょうね」

慈母の意図を看破した子供は、また蒼白になって震えます。ああ、なんて優しいお母さんだろう、こんなにあまのこを心配して下さるなんて……。思わず涙が溢れます。



そのお母さんのサファイヤは、また一しきり子を思う親心の発露たることを訓示し、愛の鞭の鞭たる所以を強調するのです。あなたのためですよ——ハイ、分りましたね——ハイ、お利口さんですね——ハイ。

ゴム紐やエンピツなら断われても善意の押売りだけは辞退できません。ひたすら感涙にむせんで、メロンは暖かいお灸の押売りを拝領することにいたしました。気をよくしたサファイヤは、すました顔でメロンの腹に、逆馬乗りに跨りました。先刻のおつねりの際、思わず取り乱したことなどはケロリと忘れているようです。ずっしりと泰山の重圧が加わり、メロンの上半身は動けなくなりました。

お灸の設置箇所は鼠蹊部です。せっかくの白い肌に火傷の跡がみにくく残るのでは困ります。だからあまり目につかない箇所を選ぶ必要があります。メロンの意向を打診すると異存がありません。善は急げと、早速もぐさをその二カ所に設置しました。何ぶん場所が場所だけに細心の注意を払います。神聖な隣接地帯の聖域への類焼を避けるため、万全の予防処置を講じてから、まず一カ所に点火しました。充分慎重にやったから、火薬庫へ飛火するおそれありません。

奈良の風物詩たる若草山の草焼きです。京都の夏の夜空を焦がす大文字の送り火でもあります。ゆらゆらと立ち昇る紫煙がえもいわれぬ芳香を漂わせます。

「いいにおいだこと。どう、御気分は？」

サファイヤは自分一人で楽しんでいますが、もぐさは薫香ではない。鼻粘膜を刺激して臭覚の快感亢進を目的とするものではありません。無情な時間の経過により、やがてその正体を現わします。

「……うっ、ううん、……あ、あっ、あつつ……あつしよう……」

「涼しいお灸などありませんよ」

メロンは当然の事理を説明されても直ちには納得しかねるようで、首を左右に振りしました。委細構わずサファイヤは、もう一つのもぐさにも点火します。そちらの方がより大きい。二条の芳煙が互いに負けじと昇天競演を始めました。

「あ、あ、ああ、……もうかんにん、ゆるして、ゆるしてえ……あーん、あーん……」

「物分りの悪い人ね。わたしに謝まったってどうしようもないでしょ……」

叩いたりつねったりするのところが、純然たる物理現象なのだから、責任は負いかねる

というのです。この論法でいくと放火魔も処罰できないことになります。

間もなく火祭は最高潮に達し、まず最初に点火した球状たいまつが、人間バーベキューの仕上げに入りました。じりじりと皮膚を焦がし肉を焼く無情のともしびに、メロンは断末魔の叫びを挙げたものの、正義の味方の救いの手は現われず、どんなに悶え暴れても開脚縛りは解けず、人間白は微動だにしません。

「うるさいわねえ。子供じゃあるまいし、少しは恥を知りなさい、恥を」

忍耐力の欠如をきびしく叱責したサファイヤは、子供といたり、子供じゃないといったりする身勝手さは平然と無視しています。メロンはそれどころではない。大きい方のバーベキューが完成間近に迫っているのです。「……あっ、あっ、あつしよう……あーん、あーん、……うわあーっ、は、ひいーっ、ふへ、ほお……」

「今は国語の時間じゃありませんっ！」

メロンのしなやかな脚は強電流を受けたように硬直し、ぶるぶると小さきぎみに痙攣しています。正に失神一步手前の段階です。かすかに立ち昇る余煙を、サファイヤはふっと吹



き消しました。可哀相だからもうこれくらいにしておこう、そう思ったにわか灸術師サファイアは火傷の跡が化膿しないよう、入念に手当をしてからメロンの縛めを全部解いてやりました。両手両足の自由を回復しても、メロンは身を起こす元気すらなく、相も変わらずY字型でぐったりと伸びています。引張られていた両脚を閉じることさえできません。じつとりと汗の浮き出た腹部が、せわしく苦しげに波打っているだけです。

そのまま腕に抱き上げてベッドに寝かしつけたサファイアは、すぐメロンの胸の上に跨り乗って押さえこみました。お仕置は終わってもまだ付録がある。たださえ参っているのに、磐石の重みを加えられたメロンは息をすけるのも苦しいくらいです。両腕を両膝の下に踏みしき豊臀をどしりと胸の上に据えて、お得意のポーズで組敷いたサファイアは、お灸の間中ごぶさたしていたメロンの顔を満足そうに眺めやりました。散々痛めつけられ精

根尽き果てたメロンは、眼を閉じ顔をそむけてしゃくり上げています。

あごに手をかけ真上を向かせ、おめめを開かせてからじっと覗き込む。涙にくもる眼で慈母の温顔を拝掲したメロンは、今までの暖かい思いやりを追想して、またしくしくと泣き始めるのでした。

「よくそんなに泣けるわね、あなたは。どこから涙を補給してくるの？」

そう言っただけでハンカチで玉の露を拭きとりながら、サファイアは豊臀をゆくりずらししました。完全な形態で臀下に制圧したメロンの胸から、早鐘を打つ心臓の鼓動がどきどきと伝わってきます。サファイアはきわめて気分良好です。生きものを尻の下に隷属させて君臨するのは正に壮快そのもの。こたえられません。

——愉快、愉快。どうせ今夜は使いものにならないんだから、このまま朝まで押さえ込んでいてやろう。口実なんかいくらでも作れるんだ……。

味をしめたサファイアは人の迷惑も考えないで律動つきの波乗りを楽しんでいます。「さて背の君、お仕置も終わったから幾何の試験を始めることにしましょうね……」

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

## 手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



執念深く覚えているのです。重圧に呻吟するメロンはまた半泣きの表情に変わりました。むろん、予習なんかやってない。苦手の課目を逃げるつもりもあって、第8節で油屋のキンカーンの誘いに乗ったのに、これでは元のもくあみである。

サファイヤはそのままの体勢を維持して、口答試問を開始します。難かしい問題ばかり出す。不得手且勉強不足、その上疲労困憊、念入りのお仕置で身体は綿のようにくたくたです。もちろん、できっこなどない。

「……AとA'を結んで二つの三角形に分けると……互いに向い合う角は等しく且線分……」  
「だめだめ。そんなもの等しくありません。……この前、口が酸っぱくなるほど説明してあげたじゃないの！ その場合は、まず補助線PQを引いて……」

紙もエンピツもなしに答えさせようというのが土台無理な相談です。かといって、誤答を出すと、かみなりが落ちる。その度に鼻白んで泣きべそをかくメロンです。

「さっきから一題もできないじゃないの、あなたは。こんな易しい問題どうして分らないのよ！……とにかく解けるまではやらせますからね。さ、もう一度考えてごらん」

「お願いです、明日に、明日にして下さい」「今夜だって同じこと！」

「……でも、疲れてるし、……それに、とても重くて苦しいし、……考えようとしても、まとまらない……」

余計なことを言うからいけない。

「重いですって？ まあ何て失礼な！ 一体わたしのどこが重いよ、どこが……」

ヘビィウエイトを指摘されて女性が腹を立てるのは今も昔も変わらない。それに、内心の意図を見透されたような気がして、サファイヤはむきになりました。

「あ、……な、なにもそんな、そんな意味で言ったんじゃないくて……」

ぴしゃりと一発、横面が張られました。

「ふん、デブで悪かったわね。……折角だからどこがどんな風に重いのかジックリ鑑賞してもらいましょうよ……」

女人一流の論法でからんでくる。メロンは狼狽のきわみです。試験は一時中断となる。

「い、いえ、……ぼくはただ、単に……」  
「言訳は聞きたくないの。そら、こうしてあげるから……」

果然、臀部躍動の開始です。サファイヤは大根おろしを摩りおろす要領で腰を前後にあ

おりたてました。

「あ、あ、あ……やめて、もう言いません……重くなんかありません……」

「御期待に添えなくて残念ね。……これなら少しは重いでしょっ！」

今度は横ゆれです。保線工事を手抜きしたローカル線にオンボロ列車が走ります。

「うっ、うっ……く、くるしい……」

「急行ですから途中の駅には停まりません……曲りますので御注意願いまあす……」

汽車とバスを混同しています。だが、脱線転覆のおそれは絶対がない。急行列車のそのあとは石臼ならぬ肉臼に早変わり、ぐりぐりと体重を乗せたスピード回転ですり込みます。

メロンはひいひい悲鳴を挙げながら、狂ったように首を振り、脚をばたばたやっています。良質の小麦粉を製造すると、サファイヤは二次元から三次元の世界へ飛躍して更に餅搗きを始めました。

「あとわずか百八十日ほど寝たら、お正月でしょ？ 早い目に作るときましようね」  
「お餅きらいなんですう、ぼくは……」  
「大好物なの、わたしの」

大きな杵がどすんどすと弾みをつけて落下します。両膝でしっかと踏み敷かれたメロ



ンの両腕は、はりつけにされたのと同じことで、苦しまぎれに腰をうねらせ脚をくねらせでも何の役にも立ちません。

「わ、わっ……いやだ、いやだ……潰れるよう、死んじまうよう……許してえーっ」

「いつもは、あんなに喜んでいたじゃないの、うそつき！」

上下の位置関係という本質的差異を無視して、独断的な意思の推測を行ないます。全く乱暴な議論といわねばなりません。このようにして、ひどい餅屋にいじめられたメロンは、もう完全にグロッキー。口をパクパクさせて酸素欠亡症の金魚の様相を呈してきました。このあたりで水を換えてやらないといけません。

「どう？ どこがどんなに重いのか、御理解いただけた？」

「……完、完全に理解できました……」  
「幾何はできないけれど力学は優秀ですね、あなたは」

メロンの物理科目に関する直観力を激賞したサファイヤは、どすんどすんとやっていた循環性落下運動を、ごくゆるかで小刻みな動きに変え、第二法則の理解が充分であるかどうかを確かめます。そして、教材である運動体の美臀をもくもく弾ませながら、第一法則を習得せしめる目的を持って少しずつ前方へにじり上っていくのです。ついに、メロンのほっそりした喉首の上に跨り、その喉笛を制圧したサファイヤは、むっちり肉の締った真白い太腿をあらわに、生毛におおわれた薔薇色の頬を挟みつけてしまいました。

「とってもいい気分なこと。坐り心地といい弾み具合といい、満点ね」

## 天星社刊 〆限定版グラビア写真集 〱在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探る』 一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」  
二女緊縛『女斗緊縛競艶写真特集』 一部一〇〇〇円（送共）略号「美8」  
「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 一部一〇〇〇円（送共）略号「美9」  
M写真集 女王様に飼育される日々 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

クッションか何かと勘違いしているらしく、そのままぐいぐいと締めつけます。メロンは目玉を白黒させてしなやかな仔鹿の脚を宙に踊らせます。どんな気持でいるのか知るよしもないが、運動法則はもう一つ残っているのだから、多分その点に思いを馳せているのでしょう。それをいいことにして、サファイヤはメロンの弾性係数を調査すべく、ゲージを締めたり緩めたりして実験しているのです。

「どうです？ もっときつく締めつけてあげましょうか」  
「うっ、うっ、うーん、……も、もう結、結構です……」

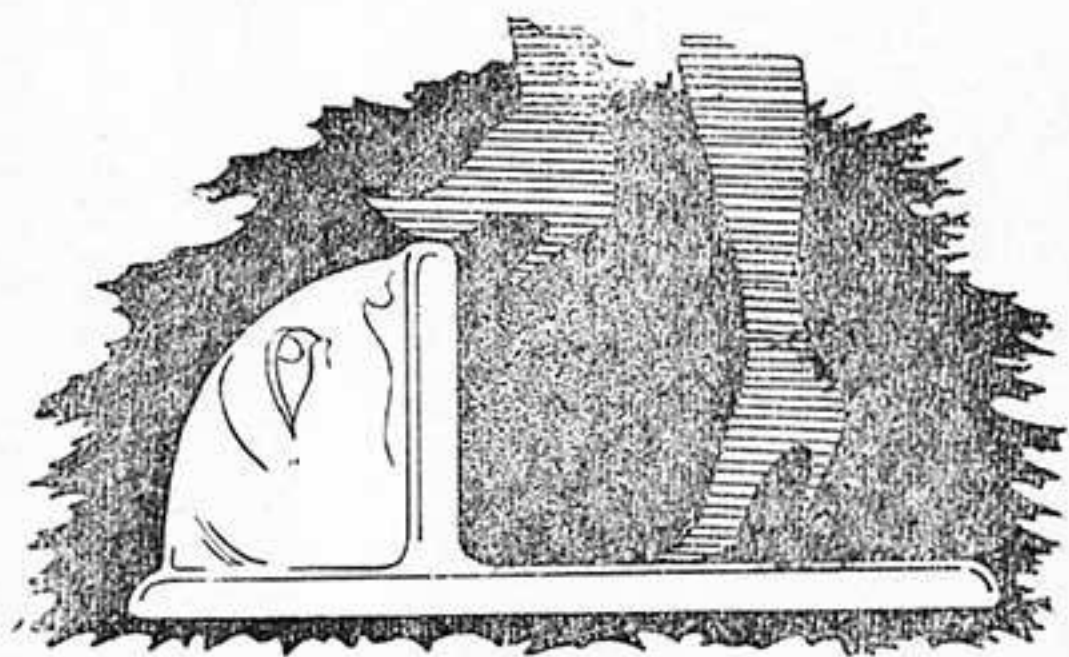
「遠慮しなくてもいいのよ、遠慮を」

メロンは息も絶え絶えです。だが、締め落とす面白くないという理由で、サファイヤは適当に力を抜き、生かさず殺さず方式で、じわじわと実験に実験を重ねます。こうしてサファイヤは弾性係数を知り、メロンは第三法則を熟知したのです。

いつまでやっていてもきりがなし。運動法則はもう充分ですから、サファイヤはまた幾何のテストを再開することにしました。

「三角形の重心はどこにあるのか言ってごらん！」  
(つづく)





—私の異常体験告白—

# スカタロジーに憑かれて

津 川 博

## チンペイ先生を訪問

十二月一日、作家としてその異質な作風をほしのままに駆使し、セクシアルな行動力で世に知られている野末陳平氏と、先生の自宅事務所で逢うことになった。

私が以前、先生宛に、きわめて変った汚物崇拜症としての体験記録の抜萃を、手紙に書いて送ったことがあるからで、先生も非常に変ったケースとして少なからず興味を抱かれたのが、引見となった理由である。

この先生との面談の記録にはアサヒ芸能社

の編集部の方が二人、担当として同席した。

自宅に於ける陳平先生は、いたって開放的なポロシャツ・スタイルの軽装で、サンングラスは相も変わらずといったところである。

陳平「俺もずい分と作家という立場上、色色な変った人を知ってるけど、津川さんの、

そのう、なんていうのかな、あれを飲んだり喰べたり実際に行っているってこと手紙で知って、まあ驚いたんですがね。今日は、一つザックバラに、その極めて変った貴重な体験記を、聞かせて頂こうと思ひましてね。編集の人、いるの具合悪かったら、席をはずし

てもらってもいいんですよ」

津川「いや、一緒にいて頂いて結構です。私って元来が明るい性格の男で、話の内容も又、非常に面白いものを持った事実ですからかえって御一緒に聞いて頂いた方がよいと思います」

陳平「ところで、そのう、あんたが始めてそういった汚物に対する興味というおうか、喰べたい、飲みたい、って考えたり思ったりしたのは、一体いつ頃からなの？」

津川「そう、そうですね。確か記憶として残っているのは、小学校の四年生の時だった



と思います。私のクラスに遠藤さんという、それはもう、今で思えば可憐というか、愛くるしいというか、ともかく、物凄く感じの良い女の子がいたんですよ。ところが、この子は金持のお嬢さんで、生意気な、男を男と思わないオテンバツ子で、顔に似合わず、平気で男の子を虐めては喜ぶといった、僕のようなタイプには、ぴったりとくる女の子だったんですよ」

陳平「へえー、で、その女の子から飲ませてもらったってわけ？」

津川「ええ、まあ、ちょっとしたチャンスからなんですがね。私って表面はとても三枚目で、いつもクラスの人気者になり、学芸会でも絶えず主役をやるぐらいで、同級の間では仲間が多かったんです。まあそれが、彼女には面白くなかったんでしょうね。私としては、当時からその女の子が陰ながら大好きで遠藤ちゃんのお馬になりたいとか、お腹の上に坐ってもらいたいとか、ほら、谷崎先生の著書にありましたね、『少年』ですか、あの中に出てくる少年のような気持をやはり持っていたんですよ。確か学芸会が終った五月末頃だったと思いますが、私はその頃、原宿に住んでいたのですが、その原宿に代々木の原

っぱがあったんですよ。今でもありますね。もっとも現在は大部分、オリンピック施設になってはありますがね。その原っぱで偶然その子と逢いましたが、相手は二人でした。私はむろん一人、原っぱの中の池に釣りに行った帰りの夕暮れ時でした。日頃から内心あこがれていた御本人に不意に逢った私としては何とかして、いじめられたいという欲望がムクムクともたげてきまして、今では何んていったか忘れましたが、ともかく悪口を相当浴びせたんですよ。そうしたら、まあ怒りましてね。二人がかりでかかってきたんですよ。私としては、いじめられるのが本来の目的ですから、とうとう仰向けに倒されて一人が足を押さえ、彼女は私の顔の上に馬乗りに腰かけましてね。その時、始めてオシッコを顔にかけられたんですよ」

陳平「へえ。で、その時、汚ないとか、生理的な嫌悪感、そういったものは全然、感じなかった？」

津川「ええ、私は今でも、はっきり記憶に残っていますが、汚いなんて思わなかったしかねがねから、その子の鼻汁なんか舐めたいななんてことも思ってましたから、嫌悪を感じるところか、もう口にはいい表わせないよ

うな素晴らしい快感が、ジーンと身体中に電撃の如く伝わりましてね。しばらくは口の中にかすかに残っている、塩辛い彼女のオシッコの味わいを噛みしめ、ボーッと倒れていましたよ」

陳平「で、それから、ずーっとその女の子にいじめられていたの？」

津川「いえ、後にも先にも、それ一回きりでした。でもね、その頃からですよ、そういう液体とか例の固形物とかに極端に嗜好を持つようになったのは」

陳平「で、その後は、あんたの好みをかなえてくれるような相手はめっただったの？」

津川「確か五年生になってからでした。当時、劇団東童という児童劇団がありました。先生も知ってるでしょ」

陳平「ああ、知ってる、知ってる。東童が出た『風の又三郎』って映画は見たよ」

津川「ええ、その東童が当時、有楽座でメーテル・リンク原作の『青い鳥』を上演してましてね。確か昭和十五年頃でした。その劇の主役をやっているのが久貝京子という女優さんで、そう、浅丘ルリ子を小形にしたような可愛い子役さんでした。そのポスターを、私は一目垣間みた時から、すっかり憧れちま



いまして、もう唯、その久貝京子ちゃんのものが欲しいという一念だけで、私は東童に入団したんですよ」

陳平「へーえ。いよいよ面白くなってくるわけだね、これからが」

津川「先生も御存知でしょうが、当時東童には宮津博団長の傘下に、キラ星の如くスターがおりました。演出部に現在の放送作家の筒井敬介、青沼三郎。照明の穴沢喜美男。女優陣には淡島千景、北村谷栄、薄田つま子。この人は俳優薄田研二さんのお嬢さんです。

男優陣には小泉忠、大泉幌（現・フリー）星野和正（現・民芸）小林旭（現・日活）等々。

私の如き存在は、その当時は研究生のペイペイで、到底めざす久貝京子ちゃんなどとは口も利いてはもらえないのが実情でして、いつも稽古場の片隅で、その可憐な楚々とした風情の可愛い子ちゃんを一心に眺めておりました。当時、東童の事務所は新宿第一劇場の四階にありまして、稽古場が松竹少女歌劇団と同じで、彼女たちの稽古のレッスンが終ると私たち劇団の立ち稽古を始めるといった按配でしたが、そうですね、日は忘れましたが、確か日曜日でした。その日、劇団の稽古が休みとは知らず、第一劇場の稽古場へきてみた

ら東童の人は誰もいないんです。少女歌劇の踊り子たちが、その時、一生懸命に洋舞のレッスンをやっていた。その中で一際目立ち色も抜けるほど白く、すらっとした長身の、優雅というか天女と表現したらよいのか、まあ、私の好みにぴったりの踊り子が、見たところ指導的立場にあるといったようで、しきりと若い踊り子たちの中心となってレッスンに励んでいるんです。あとで名前が分りましたが、小月冴子さんというんですよ」

陳平「おう、いたいた。川路竜子と彼女が松竹少女歌劇の当時の代表的スターだった」

津川「ある一定の間隔でお稽古をしたら、彼女たち休むんですがね。その休憩中に、その小月さんが鼻をかむんですよ。それも普通の白いものでなく、ピンク色の薄い鼻紙でした。チーンとかんでポイツと直ぐそばにあるくず箆へ投げ入れるんです。さあ、それを見たまいますから、もう私はそれが欲しくてしょうがない。彼女たちの稽古が終って去り、たった一人きりになった時、私はもう夢中でそのクズ箆に手をのばし、問題の小月さんの捨てた特色あるピンク色の鼻汁を含んだチリ紙を拾いまして、駆けるようにしてトイレに入り、その香ぐわしい小月さんの鼻汁のべっ

とりついたチリ紙を舐めながら、私は怪しい行為に耽りました」

陳平「そんな時も、汚いなんて、全然考えなかった？」

津川「とても、とても」

陳平「へーえ。じゃ、あんたの場合、通常の方法じゃエレクトロしないわけね。たとえばスターのプロマイドを見ながら、マスをかくとか……」

津川「駄目ですね。現在もそうですが、通常の行為ではエレクトロしません。必ず異性のオシッコとか、さっきもいった糞とかハナ汁……その対象物がないと駄目なんです」

陳平「ほう、そりゃ変ってる。で、それからどうなったの？」

津川「このことをですね、誰れ知るまいと思いの外、とんでもない人に見つかっちゃったんですよ。劇団の大幹部だった薄田つま子さんに見られちゃったんです」

陳平「見られたって。そのハナ紙を舐めているところ？」

津川「いや、その、クズ箆からそれを拾ってトイレに入るところです。二回ほど見られたんです。その二回目の時も、東童の稽古は休みだったのですが、つま子さんは何かの



用事できてたんですね。あの人、空襲で亡な  
ったということ聞きましたか……」

陳平「いや、つまちゃんは空襲では死んで  
ないよ。確か戦後、お父さんの薄田研二さん  
と劇団を作って地方へ行ったぜ」

津川「そうでしたか。そりゃ、知らなかつ  
た」

陳平「で、その、彼女に見つかって、どう  
したの？」

津川「いやあ、すっかり問いつめられまし  
てね、仕方なくボソボソとその変った性癖の  
こと話しますと、その時のつま子さんの表情  
には、侮蔑的な、私を小馬鹿にしたよう様子  
がありありとあらわれましたよ。あの方は、

とにかく、きれいな人でした。そのつま子さ  
んが、いきなり靴下をとりましてね、足先を  
私の顔の前にヌッと出して「じゃ、私の足の

指を舐めてごらん」っていうんです。今思い  
出しますと、あの人にもサディズム的な性格  
が、いく分かあったようですね。年も私の方  
がずい分と下で、私はまだ少年でしたから、  
つま子さんにしてみれば、いたぶってやろう  
という嗜虐的な考えがあったのかも知れませ  
ん。私もその時は、それでもオズオズと、つ  
ま子さんの美しい磨き光った白い足の指先を

しきりとペロペロ舐めました。そしたら、つ  
まちゃんは、いきなり私を押し倒して私のお  
腹の上にずっしりと坐って「こんなことが、  
いいの？」って笑うんです。そして、わざと  
私の腹の上で腰をグイグイってゆするんです  
よ。いや、その重いことったら。だって私は  
まだ十五才の少年で、彼女は肢体もはち切れ  
んばかりの二十五才の立派な大人だったんで  
すものね。しまいには、お腹の上に横坐りに  
なったまま、チーンと鼻をかみましてね。私  
の口の中に、その鼻汁の含んだチリ紙を押し  
込みましたが、でもそのかわり、劇団の人達  
には内緒にしてくれました」

陳平「じゃ、まだその当時は、お目当ての  
オシッコとか糞には、なかなかありつけなか  
ったわけ？」

津川「そうです。でも、それから一年半ほ  
ど後になってからでした、そのチャンスに偶  
然めぐまれるようになったのは……そう、こ  
れもぜったいに忘れることの出来ない、深い  
思い出の一つです。当時は第二次世界大戦も  
終局に近づき、日本も敗戦の色濃厚で、空襲  
も各地で激しい時でしたが、私たち劇団はそ  
の頃よく移動公演を行ったものです。それは  
宇都宮劇場で移動公演を行った折でした。先

生も知っていますか、当時、東勇作バレエ団  
があったことを？」

陳平「うん、知ってるよ」

津川「東童単独の公演では、お客が呼べな  
いので、たった一日きりの公演でしたが、東  
バレエ団と共同で公演したんです。そのバレ  
エ団には、今でこそ国際的にも有名な松山樹  
子さんですが、当時は同バレエ団の一バレリ  
ーナとして参加しておりました。それでも松  
山さんは同バレエ団の花形で、中心的存在に  
は違いなかったのですが、非常に大衆的なキ  
サクなお人で、私は宮津団長につきそわれ、  
というのは、当時、私は桐生に疎開しており  
ましたので一足おくられて楽屋入りをしたわけ  
です。で、その楽屋で松山樹子さんに紹介さ  
れました。始めて見た瞬間、先ずその美しさ  
に打たれましたね。メーキャップ前の素顔に  
接したんですけど、どちらかといえば可憐型  
で艶やかで、気品に満ちて瞳も澄み切ってい  
て齒並びも美しく、そう、お姫さまって感じ  
でしたが、私はこの時「ああ、この人のが欲  
しいなあ」って思っちゃったんです」

陳平「欲しいって、つまり松山さんのオシ  
ッコ？」

津川「全部ですね、彼女の身体から排泄さ



れるものすべて。あの、私って元来、今でもそうですが、異性であれば誰のでもよい、っていう性癖とは違うんですよ。ある特定の、つまり私の好み、嗜好にぴったりマッチする顔付きの人でない、その異常な欲望が起らないんです」

陳平「じゃ、その時、松山さんのなら、もう全部、飲んだり喰べたりってこと、思ったわけ……」

津川「ええ、で、まあ公演に入ったわけなんです、一日二回の公演で、だしものは坪田譲二原作の『虎彦、竜彦』って芝居と、東バレー団の洋舞、この二本立てでした。二回目のハネたのが夜の十時頃で、偶然のチャンスから松山さんがトイレに入るのを目撃したんです。あの劇場は戦時中のことですから常時興行しているわけではなく、月に二、三回移動演劇か映画会があれば良い方でしたからその劇場にあるトイレも、ちょいちょい汲み取り屋がくるわけもなく、昼間入った時も、大きい方は非常に汚れていて、キンかくしの上の近くまで山とたまっているんですよ。それが、まことに私には幸いしたんですね。終演後、その松山さんが、そそくさとトイレに入るのを私は見て、何故か胸がジーンと熱く

なって、もう心臓はどっきんこで、足がガタガタ震えていたのを今でも覚えておりますが、彼女が用を済ませトイレから立ち去るのを充分見きわめてから、私は人知れずそっと彼女の済ませたトイレに飛び込み、中を覗いた時は、天にもものぼる心持でした。御承知のようにバレリーナは、身体中を屈伸させて踊るのが身上ですから、彼女らはよく楽屋で物を喰べるんですよ。当時は物資も乏しく、余りうまいものはありませんでしたが、お芋だけはそれでも豊富にありました。ですから松山さんも御多分に洩れず、お芋だけは沢山いただいていたのです。目的の箇所にもっと、彼女のあの美しい体内から排泄された固形物が、まだ暖く白いチリ紙の下に埋もれているではありませんか。むろん躊躇はしません。手をのばし掴み、夢中で口に入れました。その時は、汚いとは、ちっとも考えませんでした」

陳平「匂いはどうなの、臭くないの？」

津川「そうですね。匂いはむしろあります。が不思議と不潔感が感じられないんですよ。味も変に悪くない、よく消化されているせいか、ねっとりした舌ざわりでしたが、お芋の匂いがしましたね」

陳平「農林何号の匂いってわかるわけ？」

津川「いや、そうくわしくは分かりませんよ。でも、今でもそうですが、その人の喰べたものが、ある程度分りますね」

陳平「へーえ、分かる？ 驚いたね」

津川「話が飛躍しますが、先生。私は現在白昼堂々と公然に、私の住んでいるアパートの奥さん達から、オシッコをもらっているんですよ……」

陳平「ええっ。ほん、本当かい。どうやって、どういう方法でさ」

津川「むろん、それをもらうまでは、相当の根気と努力が必要でしたが、最初申し上げた通り私ってどっちかというと、表面上はとてもユーモラスで三枚目なんです。会社においては、運動会で司会をやったり、演芸会では漫談をやったり、又、ラジオ東京ののど自慢にも出たこともありますよ」

陳平「ああ、丸石自転車をやつだろう、素人歌合戦ってのね」

津川「ええ、あれの常連でしてね、よく漫談をやってはラッパを鳴したもんです。ま、それはともかく、こうした三枚目的性格が幸いしまして、アパートでも会社でも意外と入るんですよ。よく奥さん相手にワイ談もや



りますが、その場合、相手に生理的に不快感を与えるような陰気な話しぶりでは嫌われま  
す。不潔感や羞恥心を起こさせないよう、た  
くみにユーモアを交えながら、相手をこちら  
のペースに巻き込むんです。オシッコをもら  
う方法ですが、私の場合、こうした手を用い  
ます。最初は、さりげなく努めて明るく、  
「奥さん、世の中って分かんないもんです  
ね」って切り出すんです。アパートにいる奥  
さん連なんてものは、たえず何か新鮮な話題  
はないものか、面白いニュースが落ちちゃい  
ねえかしらなんて、いつもくだらないネタ探  
しをやってるもんですから、こっちの狙いに  
ピタリと喰いつきます。「あらっ、津川さん、  
なーにその話」まずは、おもむろに「いいえ  
ね、僕の友人が大正製薬の抗生物質の新薬品  
を製造しているんだそうですよ。いや僕も  
それを聞いて驚いてるんですがね」とまあ、  
こう話してみます。ところが、意外と奥さん  
達は大抵そんなに驚かない。というのは大正  
製薬という大衆に深く滲透しているメーカー  
の研究所の内部の話であり、又、馬の尿から  
薬物がとれる話や、オシッコが火傷に効くな  
どの話を、いつもの話題の中で私が日頃から  
根気よくユーモラスに吹き込んであるからで

すよ。「へーえ、そう。じゃ、ま、うっかり  
オトイレにも流せないわね」なんておっしゃ  
ったら、こいつはうまいもんだが、どうして  
どうして、そううまくゆくもんじゃありませ  
ん」

陳平「いや、しかし、うまいもっていきか  
ただね。で、その奥さんからもらえたの？」

津川「もちろん、それから数日経ってから  
ですがね、又、奥さんに話すんですよ。今度  
は交渉ですねえ。」奥さん、実は僕、困って  
んですよ。例の大正製薬の友人から内々で頼  
まれてるんですがね。お子さんが一人いるぐ  
らいの奥さんで、それも二十才台の人じゃな  
いと駄目らしいのですがね。研究のためにど  
うしても新鮮な尿が欲しいらしいのですよ。  
牛乳びん一本ぐらいでいいらしいのですが、  
一回につき五百円の礼金が出されるそうで  
す。ねえ、内緒にしますから私に協力してく  
れませんかね」と、まあこう話しますと、最  
初は「あらあ、はずかしいわ」とか「いやだ  
ーそんなこといったって、牛乳びんの中にな  
んか……」なんていってますが、こっちとし  
ては、そんなことでは引き下りません。「奥  
さん、実は下の山本さんの奥さんにも協力し  
てもらってんですよ。これは内緒ですがね」

という、と、「あらっ、山本さんの奥さんも？  
へーえ」とまあ、ここでちょっと興味を持つ  
わけですが、話を聞いた奥さんとしちゃ、ト  
イレに入るたびに、じゃーっとオシッコを流  
しながら、ああこれが五百円、またまた五百  
円……なんて、案外とミミチック考えている  
ことと思うから、私は根気よく、しかしさり  
げなく努めて明るい表情で要求しますと、大  
抵はOKしますよ」

陳平「ふーん、これは参った。こりゃ、あ  
んたが始めてじゃないの、そういう方法で手  
に入れたのは。例の奇クの愛読者には随分と  
マゾもいるけど、あんたのように堂々と手に  
入れている人、恐らくはいないだろうね。へ  
ーえ、実はね、おれ、立川談志から誘われて  
るんだよ、例のグループが箱根に集まって浣  
腸ごっこやるんだけど、そんなものに参加す  
るのは始めてなんだ。その時、その話を皆ん  
なに聞かしてやろう」

津川「で、まあ今じゃ、一週に一度ずつ、  
その奥さんからもらってますけど、その奥さ  
ん、私がもらった途端、飲んでるなんて知っ  
たら、びっくりするでしょうね。この間なん  
か下の奥さんとカチ合っちゃって「ねえ、今  
週は大正の方へ持っていかないの？」なんて



催促されましたね。その時は、上の人のを飲んでばかりだったから、あわてて断ったりしましたね」

陳平「そりゃいいや、はっはは……で、どうなってんの、あんたは、奥さんと。例の大きい方は、ちよくちよく喰べさしてもらってるわけ？」

津川「いや、年中というんではなし。ま、月に二回ぐらいですね、大きい方は。液体の方は毎日確実にいただいてますがね。さて、話を又、元に戻しますが、ええと、さっきどこまででした」

陳平「宇都宮の劇場で、松山さんのを喰べたという……」

津川「ああ、そこまででしたか。まあ、ともかくその時始めて異性から排泄された固形物というものを口に入れたのですが、その素晴らしい味の魅力というものに痺れちまいました、その後はもう、それを求めることのみに日夜考えあぐねるようになりましてね。そうそれから数カ月たってからですが、私、宮津団長の紹介で、その頃、足利市にミチル少女舞踊研究所というアマチュアの歌舞団がありましてね、その研究所を紹介されたんですよ。というのは、その研究所で新しい公演

を発表するのに、洋舞の合間に劇をとり入れることを所長の荒井さんが考えていたんですね。ところが、ミチルには女の子ばかりで男優がいない。宮津さんとミチルの荒井さんとの関係は、深く知りませんが、宮津さんの奥さんが石井漠さんの門下生、又、荒井さんも石井さんの門下生、そういった関係からだと思うのですが、私の疎開先が桐生で足利に近い故からか、私はミチル少女舞踊団に入っただけです」

陳平「女の子が一ぱいいるんだね。で、あなたの好みにぴったりちゃんか、そこにいたの？」

津川「いましたね、なにせ全員四、五十人はいましたから、太っちゃや、細っこいや、ぷりぷり型など。その中に川合由美子って、確かその時、十八になる踊り子でしたがその子が私の好みに全然ぴったりイカス子で、さあ、この子を一目みた時から、欲しくなっちゃった。この研究所の稽古場は荒井さんの自宅の二階で、トイレは下に一箇所だけあるだけなんです、荒井さんという先生はとても潔癖な人で、トイレの中にカゴと瀬戸引きの容器が置いてあって、用を足した使用後の紙を分類して入れさせていたんです。

女性がほとんどの研究所ですから、生理中の子も多いことですので、便つぼが汚れるからでしょうね。左側の籠には、普通の使用後の紙がいつも入ってんですよ」

陳平「じゃ、その川合さんの始末したペーパーが簡単に手に入ったわけだ」

津川「ええ、相当根気がいりましたが、手に入れたのは、いつも朝でした。というのはこのミチルは、稽古がとても早いんですよ。そう、大体八時頃から始まるんですが、その川合由美ちゃんは比較的新入生の方で、いつも七時半には顔を出すんですよ。ですから、家で大きい方は済ませないで、研究所にきてから用を足す習慣がついていたんですね。最初の頃は、使用後のチリ紙についた僅かな、ほんのチョピリの糞だけで私は我慢していたんですが、何とかして彼女の排泄した糞のすべてが欲しくなりましてね。この荒井さんのトイレは、現在のような水洗式ではなく田舎式で、案外と浅いんですよ。ですから私も考えまして、彼女が入る少し前に新聞紙を下に落としておいて、さりげなく彼女が用を足しに入るのを物陰から、そっと見ていたんです」

陳平「うまくいった？」



津川「二、三回、失敗しましたよ、彼女の  
入る前に他の女の子が入っちゃったり、先生  
とこの奥さんが入っちゃったりして」

陳平「他の女の子のじゃ、駄目なわけね。  
たとえ、きれいな子でも？」

津川「きれいな人でも駄目ですね。ぜんぜ  
んイメージが違っちゃうと、欲望が起こらな  
い。たとえば、山本富士子みたいな、日本的  
代表美人でも駄目ですね。お金をもらっても  
いやですね」

陳平「へーえ、そういうもんかねえ」

津川「で、ようやく三回目か四回目に成  
功しましたね。それでも手が中に届かなくて  
弱りました。ズボンをたくし上げて、こう、  
左足をキン隠しの中に突っ込みましてね、目  
的の彼女の排泄した、こんもりと湯気の立つ  
糞便を足の指ですくいまして、たっぷり紙に  
なすりつけて口に含んだ時の快感。これはも

う、何ともいえぬ喜びでした」

陳平「誰が落としたものでもそうだけど、  
あれには大腸菌が多量に含んでいるのに、喰  
べて全然、病気にならなかったの？」

津川「私の場合、あれを喰べた直後、例の  
クレオソート丸、征露丸ともいいますが、あ  
れを必ず七、八粒ぐらい飲みます。これはも  
う永年の習慣で、あれをいつも飲んでますと  
不思議と病気にならない。でも一度だけ、あ  
いつを飲まないで喰べたら大腸カタルにかか  
ちゃって、二日ほど寝たことがある」

陳平「おや、おや、そのクレオソート丸が  
あんたの特効薬になってるわけね」

津川「医者に診てもらった時、変な顔して  
いましたよ、何で大腸カタルなんかになった  
のか知らってね。まさか、私が糞を喰べまし  
たっていえませんものね」

陳平「そりゃ、そうだ。あっははは」

〔伝言板〕○分譲品目録は作成が大変遅れ  
ておりますが予約お申し込み下さった方に  
は出来次第間違いなく発送申し上げます故  
それまでお待ち下さるようお願いいたします。○分  
譲品のお申し込みは大阪阿倍野郵便局私書  
箱第14号箕田京二宛に願います。○従来本  
誌上に広告しておりました代理分譲品は、  
ここ二年乃至三年ぐらい以前のもは在庫

しておりますから未入手の方はお申し込み  
下さい。○尚御注文はすべて△略号▽にて  
お願いいたします。○切手代用にての御送金も  
結構ですが高額切手や紙に貼りつけたもの  
はお断りいたします。○本誌旧号の在庫は  
漸次減少しておりますから、御希望の方は  
お早目をお願いいたします。第二希望品がござ  
いましたら、お書き添え下されば幸いです。

津川「それから一年ほど経って、私の家族  
は桐生を引き上げまして、母の生まれ故郷の  
千葉県旭市に引っ越しました。昭和二十二  
年の春と記憶しております。そして移ってか  
ら数日経って、隣の家に私の嗜好にぴったり  
一致する女性を発見しました」

陳平「あんたも早いね、発見するのが」

津川「ええ、もうその道に長じていますか  
らね。そして、その隣の娘さんというのが、  
現在の私の妻です、女房ですよ」

陳平「ほう、こりゃまた面白くなってきた  
ね」  
(つづく)

#### △後記▽

この第一回分は作家の野末陳平氏と対談い  
たしました内容をそっくりそのまま書いたも  
ので、あくまでも真実にもとずいた告白であ  
ります。實在の有名な人が相当登場いたします  
が、すべて私自身の独り舞台でした行為であ  
りますので、その点御諒承頂きたいと思いま  
す。陳平先生との対談後数日経って梶山先生  
の『ミスター・エロチスト』が発表されまし  
た。



# 稿談性風俗資料入門

(12)

風俗／＼特殊／＼雑誌のいろいろ (二)

および「犯罪科学」の項

齋藤夜居

『奇書』（創刊昭和三年五月——停刊昭和四年四月）文芸資料研究会発行。

この雑誌は文芸資料分裂派の主流である福山印刷所（福山福太郎）の発行である。大野卓が編輯した。当時軟派出版史上最高の大当りをとった『変態十二史』刊行のいきおいの波に乗って、更に大量の購読者を獲得しようという魂胆のたくましさから生れたもので、「本誌を単なる坊間に売っている此種の雑誌と比較して見て下さい。頁は二四頁ですが、藤沢衛彦・北野博美・佐々木指月・佐藤紅霞

と、こう雁首を並べただけでも私共の払った精神上物質上の犠牲は分って貰へる筈です。

自画自讃はこれ位にして、本誌発行の趣意は文芸資料研究会という道楽商売のシムボルとすること、会員同志の相互の連絡を計りたいというのが目的」であるとその大要を創刊号の後記で述べている。第一号、第二号は無代配布という随分思い切った商略、第三号からは会費をとるようになった。全十三冊と伝えられているが、実際は十一冊発行という。その大半は、発禁押収ということになってい

る。

創刊号 目次

近世墮胎文献考、藤沢衛彦。女人秘事、北野博美。性的小話、佐々木指月。アラビア奇書・老人若返り法、佐藤紅霞訳。

このうち北野博美の「女人秘事」は婦人のオナニーに就いて記したもの——。北野は初期の性研究家の一人で、性雑誌『性之研究』や『新生』を主宰発行し、著書に小冊子だが『性と宗教』『性的行事としての盆踊りの研究』などがあった。性から民俗学に移行した



というようなジレットタントで、先駆者ではあったがどうも影の薄い人物である。通俗性学大衆家として知られている沢田順次郎や、『性典』で有名な羽太鋭治の代作をしたり、その経歴・性行に就いては『少雨荘交遊録』（23・12梅田書房）に記載されている。戦後になって清瀬病院の施療患者として死んだというから不幸な生涯だった。その妻とも早く離婚したが、これが広瀬千香女で、書物展望社時代の斎藤昌三といいコンビで、荷風の筆蹟版『机辺の記』（青燈社刊）などの刊行に当って裏面で活躍したりした。趣味出版史ではかくれた話題のある女史だった。



『奇書』創刊号表紙

全24頁の小冊子だが無料配布した

次に、女人秘事から抄写すると、

「婦人のオナニーに就いて知ることは、決して容易なことではない。彼女等は、見えないとぼりの彼方では仮令どんなことをしていようとも、それを他人の前に公開するようなことは金輪際ない。僅かに我らが知り得たというのは、何等かの機会が彼女等にそれを打明けさせた、或る一少部分のものか、思わざる結果を生じて外科的手術を受けたことによって曝露された一少部分だけなのである。ところで今日までに、そうした外科的手術によって、膣や膀胱の中から取り出されたものにはどんな物があるかと云ったら、それこそデパートの幾階かを駆け巡らねば発見出来ないほどの種々雑多なものがある。エリスがオートエロチズムを論じた中で、次の物品を上げている。

鉛筆、封蝋の棒、糸巻、ヘアピン、キリ、編針、クロケット編針、針入、コンパス、ガラス栓、蠟燭、コップ、フォーク、楊枝、歯ブラシ、ポマード瓶……」ほかに、丸ごとの鶏卵やビールの小瓶、少女時代から二十六年間も膀胱に貯蔵されていた蝋のかたまりとか、ビールのキルクということとはつまりびんの先端を使用していたという意味、等々海外

文献からの紹介で、男性たるもの大いに意を強うして、婦人も又さかんに欲情すると知れば、それに応じた口説き方もあると知るべきである。女性自慰や同性愛に関する文献は案外に漁ってみてもすくないものだ。その意味では珍奇な読物である。

佐藤紅霞訳の「老人若返り法」は以下三号まで続く書誌解題を主としたもの。

第二号は連載物のほかは掌篇程度で、石角春之助の「劇場隠語考」が風俗語彙の参考になる。巻末に、松岡貞治『性的犯罪雑考』と村山知義『変態芸術史』、藤沢衛彦の『絵入日本艶書考』の三書を広告している。

第三号。この号から口絵も多くなり、全88頁、会費をとることになった。好色獣叢話、藤沢衛彦。性的技巧と医学的考察、浪華医人。船饅頭考、石川巖。『造化玉手箱』という明治性典の紹介、その他小篇が二三、あまり特色のある号ではない。概してこの『奇書』はしゃれたスタイルになってはいるが、内容は低調で、どうしても次前の変態資料と比較されるから「余りおもしろくない」というのが定評であった。

第四号も特にめばしい読物はない。石川巖の「江戸文芸と男色」は斯道文献の解題で、



ほかに「軟派漫談会」「性的映画凡観」「上海の江上に見る女性」などというのがある。

短章だが欧米珍書解題(2)で、独逸における軟派文献美術雑誌「紫水晶」<sup>アメチスト</sup>の書影があり

これの出版書肆はウィーンのステルン書房で、たびたび警察の手入れを食ったが、検事の意見では、「将来の文芸史家がウィーンを以ってソドム・ゴムラと思はしめない為に、ステルンを嚴罰に処すべく出版界に於ける好色本は、藥屋における毒藥の如し、と論告した」という話が出ているが、この言葉はまったく私の氣に入った——一九〇六年頃のこと。

第五号。隠号考、尾崎久弥、これは江戸期の浮世絵師のかくれたペンネームの研究。貞操帯と海老錠、佐藤紅霞。川柳絵島生島、大曲駒村。検徴法実施当時の珍文、大野卓。これは明治四年九月に娼妓の検徴を実施して朝野に好奇的話題をふりまいた頃、醉多道士の「花柳事情」所載の娼妓ノ病院ニ行クヲ送ルノ序というのを原文のまま紹介したもの。

以下各号共に大体似た内容のものであるが、七号以降に市場桜村というのが新聞記者風の筆致で、変態性慾者と刑囚の性的行為(七号)。細民の性的行為と啞女の恋(二ノ

一)。蛇身の女の恋(二ノ二)。という三篇を發表している。社会裏面探訪記事を得意とした枚崎天民流の描写だが、そのうちの一篇を紹介してみたい。

いわゆる軟派雑誌や特殊風俗雑誌の内容というのは、性風俗や性科学のよみもの、江戸文献の紹介、海外艶笑物、支那物、小咄、現代性的風俗に関する軽文章、奇人伝、性語研究、性犯罪記録物、などというので一半が占められ、これが定石となっていた。あるようで無いのが個人的な性体験記録、信頼するに足る近代性風俗の探訪記録で、この二点こそ実はこの種の雑誌を読み漁る者の主要なポイントとなっていたのだが、特に戦前の雑誌類には少く、戦後になってから資料の発掘や発表が旺んになって来ている——。そうした意味で市場桜村の書いたものは、文章は古めかしくて硬いけれども、その女の研究は耳で聞き眼でたしかめ足で調べるという実証的な記述が好ましく、嘘や与太噺では無さそうである。

変態性慾者と刑囚の性的行為——表題通りの二つを話題としたもの。私(桜村氏)の知れる娼婦が牛込の某氏に身受けされたが、こ

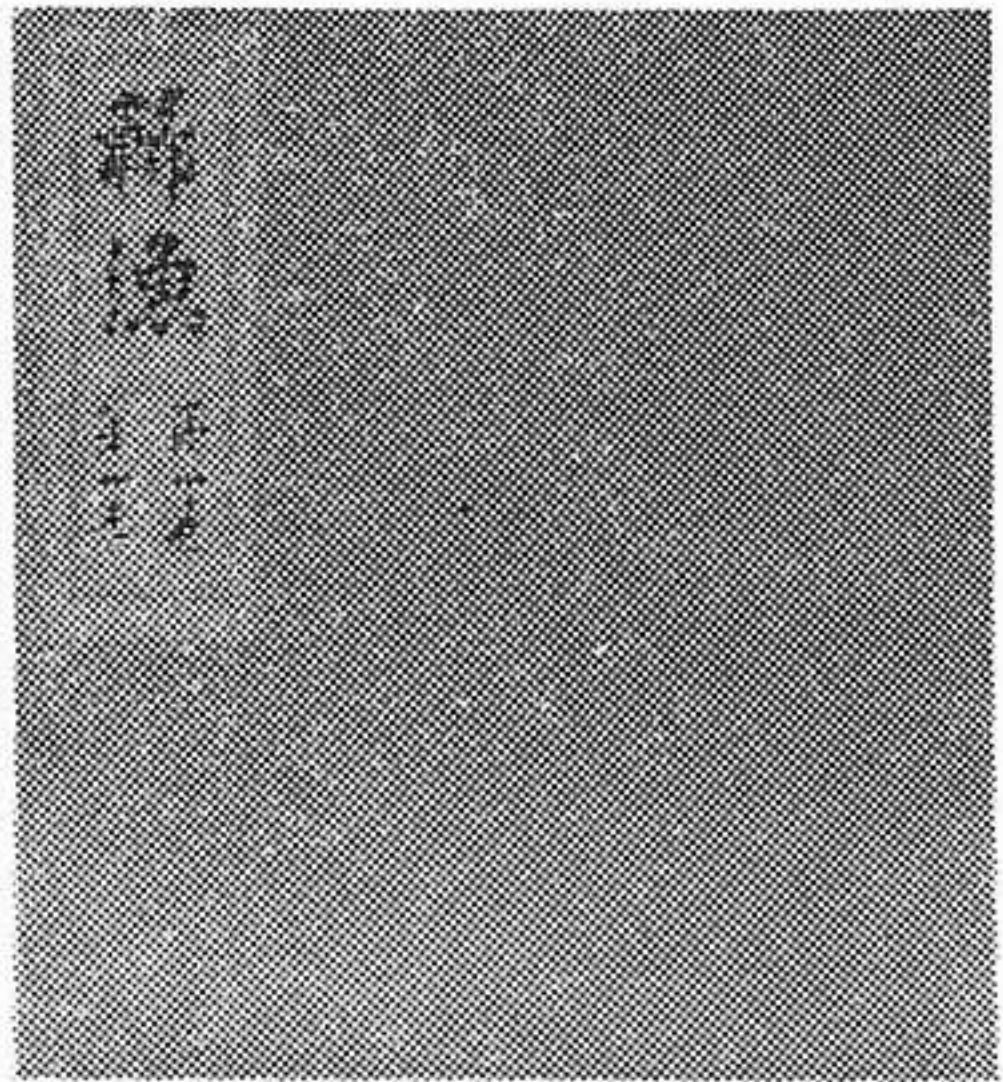
の男は性交の前後には、必ず女の局部を舐らねば承知せず、このことによって性感を覚ゆるを常としていたから、犬のような振舞も平氣の平左だった。また反対に、婦人にも男のものを口に含んで、その精の放射を啜らなければ満足感を覚えぬというのものもあるが、こうした変態的性交を好む男女も、精神に一種の変調を惹起するのは、タダその一瞬時間に止るので、この瞬間を過ぎてしまえば、まったく常態に復してケロリとしているものだ、と大要以上の如き書出しより始まる、あるマゾ男の話である。以下原文のママ。

本年(昭和3)四月区画整理によって、家は取毀され今は野原同様の有様になっているが、明治の中葉より貧民窟として有名ないろは長屋(四棟十二軒であったのでいろは四十八文字にかたどり俗称された)のあった下谷山伏町三八に私の知人添田氏が十八年六ヶ月程住んで居った。話は昨年十一月頃のことであるが、この添田氏より一軒隔てた隣家に、佐藤某という大工職人が移転して来た。家庭は夫婦きりであり、夫というのは四十の坂を一ツか二ツ出た位の働き盛りの頑丈男。女は三十位の稼ぎ盛りであるから、暮し向きにはさほど困らん様



子であったが、夫が変態性慾者で、この男は妻より非常な罵言ざんぼうと拷責とを受けることが、自身にとりてはこの上もなき快感を覚ゆるらしい。そこで、妻より苛責と拷責とを受くる下準備として、彼は一ヶ月間は一日として怠けることなく必死の努力を自己の大工職に尽すのであるから、相当地に金儲けをするのであるが、さて金銭が多少でもたまると、仕事は一時休止の状態になるは勿論、家に居て食べきれもしない天井を五人前も六人前も取り寄せて見たり、又は四畳一間の住居には不似合の家具類を注文したり、或は乗りもしない古自転車を買ってくるなど、何とかしい妻の立腹を勝ち得んものと苦心するのであるが、妻も初めのうちは世間体を憚り又病が萌して来たかといった風で相手にせず居るものの余りに氣狂じみた行為に堪え切れずして、肝癪玉を爆発するようになると、彼は待ってました言わんばかりに雀躍こぞどりするのである。そこで妻が罵声を張り上げれば、張り上げるだけ、彼は一層の快感を覚え、煙管きせるで殴られるよりは、棍棒で殴らるる方心地よきを感じ、最後は素裸にされて両手を背後に縛られ、サンザン殴打された後で、二

## 『稀漁』創刊号表紙



三日間ロクに食餌を与えられないようになると、彼はここに無上の性慾的快感を誘発し、妻のこの狂暴的行為に随喜し三拝九拝して、一夜の性交を遂げて、初めて真人間に戻り、その翌日より以前の如く、一心不乱に大工職に努力を惜まぬのである。斯くの如き行為を隔月繰り返さるので近所の迷惑一通りでなく、変態性慾者などという不思議な性交のあることを知らない連中は孰れもこの大工職の佐藤夫婦の行為に、目をみはって居ったとは添田氏の実話である。

る。

以上であるが、小説とは違った妙に実感的生々しさを感じるではないか。刑囚の性的行為のほうは例の刑務所内の男色事件を書いたもので、特別に珍しい話ではない。

◇ ◇ ◇

『稀漁』（昭和四年五月——同年十一月）。全四冊。これは珍誌である。黒ラシャ紙装幀型本縦横20センチという変型雑誌で、赤紙の貼題箋の誌名も気が利いている。当時はよく単行本につかわれたコットン紙にゆっくりと余白をとって印刷されている、愛書家好みの造本で、全四冊同型というものも今となっては好ましい。残存部数の最も少ない軟派雑誌である。勿論全冊発禁ということで、軟書趣味家でも全部その内容に眼を通した人は少ない。

編輯発行者は大木黎二。北明よりの分裂派の一人で、戦後にも秘版再刻された佐藤紅緑の作と伝えられる長篇肉慾小説『乱れ雲』を初めて活字化した男である。発行所は神田小川町の天下堂ビル内で巫山房と称していた。『稀漁』は初め『獵奇』という誌名で発足しようとしたが流産におわり、その名を逆にしたもの。各号に正誤表実は伏字表を挿入して



## 『風俗資料』創刊号表紙



いるが、第四冊には未納だった。次に全四冊の内容を概略で紹介して見よう。

## 第一冊(4・5)

性愛秘義解説(一) 巫山亭主人夢輔

雲雨秘集要略(文久二年)に拠るとなっているが、勿論果たしてそういう書があったか否や論外で、男女同衾に用らるる寝室は四畳半以上は不可。広い座敷での交合は気が散って陰陽和合のためには養生よろしからず。閨房はせまい方が精気力そとに洩れず人に恥じざる故美性の声を上げるによし。臥床の場合は東枕をよしとする。など寝室作法より説き、やがて「男、右手を上左

手を下に、南に向い、女は左手上に右手下に、北に向うを本式とす。さて男は下なる手を女の腋の下に差入れ、上なる手を女の背中に打掛けよ……暫くは無言にて心気を鎮むべし。すべて口を吸うということは舌を吸うと心得る者多し、之みな娼女などの薄情を真似たるものにして真情を知らぬ誤りなり。これ舌を吸うにあらず、男女互いに口中の唾をのみあいて陰陽の気を和合させるなり」云々。

末摘花分類・江戸期の性情(一) 笠松武夫

これは草創期の末摘花研究で、その意味では記念すべき文献の一種である。

アイヌのメノコの色話 今酋長

これは北海道艶色風流談で、メノコとはアイヌの女の総称、或は若い人妻で三十前後まで、マチカチとは娘のこと、ハボとは相当年配の人妻をいう。古潭部落へ行く途中の巡査部長と役場の吏員ふたりが山路の人影なき熊笹坂で通りかかったハボを攔えてアイヌ語をつかって、おかみさん、おかみさん、お金は沢山あげるから、いいことさせてくれんかな、と本能を満足さすべき直接交渉を開始する。ところが果して瞬時の躊躇、役人に対する恐怖心があらわれた。

然しそれが静まるとお金を下さるなら御意のままに、ということになったが、アイヌは風呂に入らずたまに谷川の水で人知れず指先で洗うこと位きりせぬハボだから、臭くて穢ならしく遂行できなかったという話。

桃色雑話 滝口紅雨——これは笑話集でつまらないもの。世界性的小咄第一篇 魯西亜篇(蛭田近二)は、戦後になって刊行し発禁となった『ヴォルが浮かれ噺』矢野目源一訳アソカ書房(昭和24・1)と同じ書の紹介である。

色慾是空 門御三郎

枕芸者の体験談を筆記したもの。雑魚寐に通がったお客、という話だけ抄写すると、「通ぶったり、いばったりするのは若いお客の通有性ね。それでもこちらで粋様だとおだてると、オホンとくるのよ鼻持がならないわ。でも、お遊びがお上手ですねと持ち上げて置くと都合がいいこともあるわ。御体上あんまりしっこくしないから、今夜は丸子も呼んで三人で色気抜きに雑魚寐とするか、などとの御意があれば、大てい床の上の商売はしなくて済むのよ。客馬鹿でよく云ったものね。なまじ通ぶっておえ



きった一件の遣りようがないなんて、ネ」  
東西艶書解題その一 大辻春人  
春情桜八景、と願する江戸末期の読和の原文紹介。

### 第二冊(4・6)

性愛秘義解説(二) 波羅門経(インド性典)

江戸時代淫薬広告抄 珍々亭淫山

末摘花分類(二)

東西艶書解題(二) 花影隔簾録

などの主要読物のほかに、ひの丸敗北物語、銭湯性的雑話、旅鳥情濡場、近世W・C文芸、女難萃(特別読物)等々でまるで春本式のものばかり。

### 第三冊(4・8)

性愛秘義解説(三) 前回の続き。古今情調鑑。猥文雑俎。末摘花分類(三)。月やく。三十六佳撰漫考。カフエー素描。雪国猥談。閨の御慎みのこと。ストーブ夜話(特別読物)。東西艶書解題その三、宝文庫。

このうち雪国猥談(猥談亭主人)は二話あるが、「青味取り師」という奇譚を全文では長いので面白い所だけ紹介する。

十八の時まで、僕は童貞だった。都会では

童貞が物を云う場合もあるそうだが、田舎ではこれ程巾のきかない荷厄介なものはない。つまり半人分の待遇しかないのだ。ところで、その荷厄介な奴を、町の女郎屋迄すてに行くには、歩くのも大儀だし、それよりも百姓息子には金の工面するのが楽なことではない。——ところが世間はよくしたものだ。こちらの田舎には、一名卵の皮はぎ師、人称して青味取り師が居ることを或る夜偶然にも聞いたものである。つまり、その女というのは四十近い後家でまだ一度も味を知らない若者つまり無経験者には教え方が上手だというのだから、こちらにとっては、もってこいの話だ。早速、善は急いで、翌日その先生のいる畑に行くと、幸いにいた。草をむしっていた。

「お母ア」

「何だね。何か恥しいことでもあるかね、お前はめんこいネ」

「あのな——俺のからを取って呉んねいからをなアお母ア」

「まだ、お前、青いのかね」

「なア、お母ア、教へて呉んろよ。俺も一人前に仕上げて呉んろよ」

「ああ、ええともさ、お前、今夜八時頃縁

側の方から来るんだよ」

とにかく真昼間に畑の中で約束したものだ。そして、夜になる。「へえりな、慄えてねえで」そんな風に先生は云って周囲を見廻しながら手を引いて、家の中に入れてくれた。

「ああ、お母ア」

「どうしてそう慄えるだね」斯う、先生はやさしく云いながら抱きしめて呉れた。所が、これいかに「どうしただね、これではまるで役に立たねえでねえか」と叱られ、「そんなじゃ、酒を飲んできな。お前の青味のついてるのは、おらアのへっぺをおっかながってやんだ、なアお前酒を飲んで元

デカメロン



『デカメロン』創刊号表紙



気をつけて来な」以下略。

#### 第四冊(4・11)

性愛秘義解説(四子種まき。東西性痴書簡集。素女経。淫夢。こんたんど道具並使用法。東西艶書解題その四。恋のみなと(石川雅望)。その他掌篇二三。



さて、この『稀漁』の如きオール発禁の無軌道風俗雑誌の発行者のように、何が何んでも面白いもの主義で、猪武者で、前後の考えがなく若さと勢いで突進して自爆してしまうと云うのは考えもので、別な視点に立脚して購読者側の立場から云えば、茶目で悪戯でそのくせ奇妙な位潔癖で、子供のような正義感と無邪気な不正を働く(軟派屋)の仕事というのとは、見ていてハラハラさせられたり、立腹させられたりで、北明流の放胆なやり方や杜撰で疎漏な計理には不満があった。この種の雑誌読者というのには実に忠実で純情な位とも云うべき正直者が多く、殆どが社会人として自営の立場にあり、文学青年程度の資力では会員誌友に参加できなかったし、続けられなかったのである。大衆娯楽雑誌のように量産しても無意味な話だが、限定されてはいっ

ても、その質から云えば堅実な読者が多かったから、これを趣味を兼ねた事業と考え、愛書や猟奇趣味でソロバンを弾く位のことはしても良い、つまり個人的な趣味に溺れない出版社の出現を待っていた——。発禁にならず地道に継続する雑誌を欲していた。一つだけのおもしろさを追って、他の有益な必ずしも性的記事でない研究や資料読物まで地下に葬ってしまうことは、発行者・読者共に不本意な事柄だったにちがいないまい。

風俗資料刊行会(竹内道之助)の事業はその意味では、危い橋も余りわたらず、おもしろさを制圧し、煮え切らぬ点があったとしても、読者対刊行者の親近感に欠ける点があったとしても、発禁も少なくて済み、経営も上手にやっていたという感じは、残された出版物に明瞭に現れている。それだけに(味)△△も薄くなっているが特色としては印刷が美しくなっていることがあった。軟派出版の印刷をきれいにするには、正規の印刷会社に依頼し、かくれた仕事にしないことで、そうなるにはもう内容が生ぬるくなっても之はまったく仕方が無い話でもあった。判り切ったことだが、軟派で一番おもしろくて正確なのは原典籍である。そして、次に複刻物で

刊行者の私意の加えられていないもの。それから原典籍の忠実な紹介である。……まずいのは中途半端な蛇の生殺し式の書き直しと云うことになるう。

風俗資料刊行会で発行した雑誌は左の三種であった。

風俗資料(昭和5・4(同年12月)全七冊増刊号を含む。

デカメロン(昭和6・2(昭和7・5)

全十六冊 うち発禁は二冊。

勾へる園(昭和7・7(昭和8・1)全五冊。

これらはいずれも瀟洒なすっきりした感じの雑誌で、特に勾へる園などはカバー附というこった趣向であった。だが内容の全般に亘って紹介する必要もないので、特殊研究読物や記事のみ以下にひろい出して見よう。

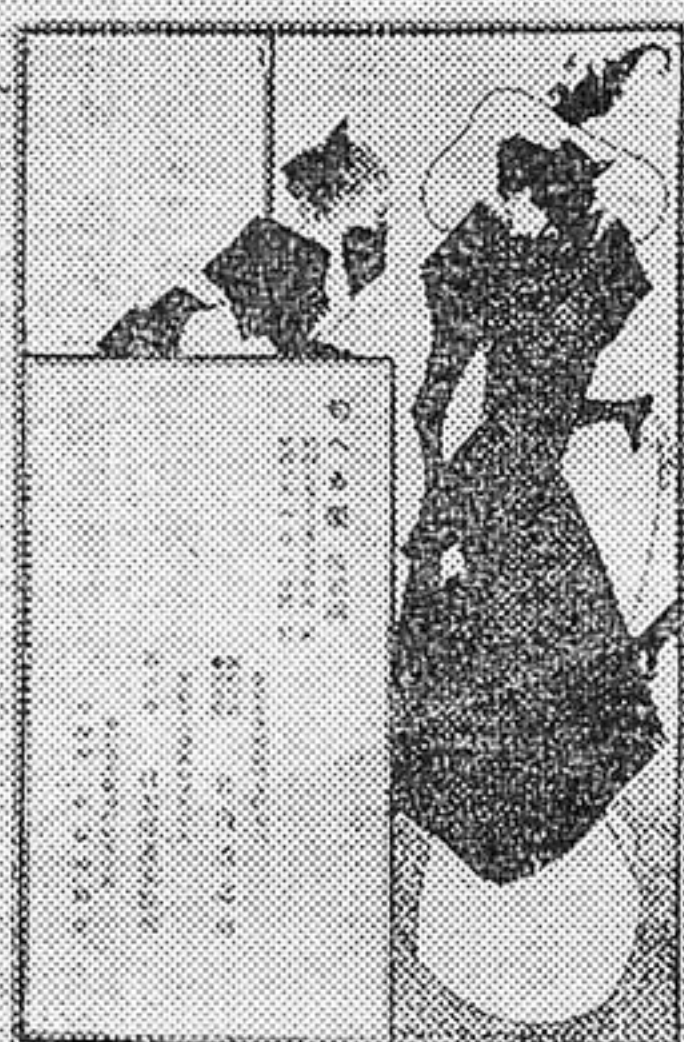
#### 風俗資料

①創成期に於ける遊女評判記 石川巖。末期会本解題 岡田甫。②ルネッサンス時代の混浴風呂 佐藤紅霞。想嫁時世粧 耽好洞人。幕末俗謡の破礼唄に就いて 秋庭太郎。③世界見世物研究号。特に研究という程につつまんだ内容ではないが、見世物



という特殊な世界をいろいろな角度から書いていて面白い。執筆者は桃源堂主人、皆川美彦、原比露志、松浦泉三郎、佐々木喜善ほか六名。④ 東西好色物語集。変態男女考 田中香涯。五日物語 佐藤紅霞。ルードラ 朝香駿一郎。回教殘虐奇譚 御堂聰

句へる園 第五冊 表紙と奥付



『句へる園』第五冊。表紙と奥付

雨。青春の泉（マゾッホ）竹内道之助訳。

#### デカメロン

① 王朝グロテスク文学研究連載 岡田甫。言語に絶せる無残な死刑 菅竹浦。琉球の遊女 金城朝永。刑罰に現れたエロティクルドルフ・クワンテル。② 擬婉に就て 巴陵宣祐。精神病者と性慾 杉田直樹。大阪笑挿話 平井蒼太。英泉と埒外絵本 尾崎久弥。警察と風紀 ロベルト・ハイマン。ソヴェトロシアの性生活 熊谷正男。③ 畜生谷（近親婚についての短文）中山太郎。女角力の話 平井蒼太。金髪のアラベスク（混血児物語）高木健夫。④ 時の流れと色街のトリック 草間ハナ雄。東京某々暗黒街分析（玉の井考現学）新井泉。ガミアニ或は歓楽の二夜に就て 酒井潔。⑤ 東西娼婦氣質 島洋之助。同性愛の女 朝香俊一郎。カフェエ作法書 伊集院斎。ある刺青師の告白 倉田啓明。村の女性占有の風習 朽木及介。屍体と民俗 中山太郎。琉球の遊里文学 金城朝永。⑥（昭和6・7）発禁。「特輯・裸体と怪異の世界」。カフェエ情痴学 村島帰之。巴里秘密淫売の家 藤岡光一。林嬢の裸体生活 高木健

夫。春の辞典（連載・エロチック百科）丸木砂土。⑦ 裏から観る売笑婦の消長 草間ハナ雄。蛇責考 大藤時彦。⑧ 英泉の画材と江戸の美人分布 尾崎久弥。⑨ 骨肉相姦 巴陵宣祐。世界珍書解題（連載）黒貞輔。⑩ 未見。⑪ 発禁（昭和6・11）邪宗門弁斥論 酒井潔。続大阪売笑挿話 平井蒼太。軟派伏字雑考 喜多槐三。⑫ 血塗られし錦画・芳年と英名二十八衆句 平井蒼太。売笑の画家ロップス 原比露志 売女哀話 草間ハナ雄。⑬ 世界デカメロン文学研究 小酒井恭二。世界珍宝蒐集奇譚 酒井潔。⑭ この号は完全な読物雑誌化して資料ものは見当らない。⑮ 大阪穴探 平井蒼太。⑯ メリケンサーカス商売 往来 光成信男。

#### 句へる園

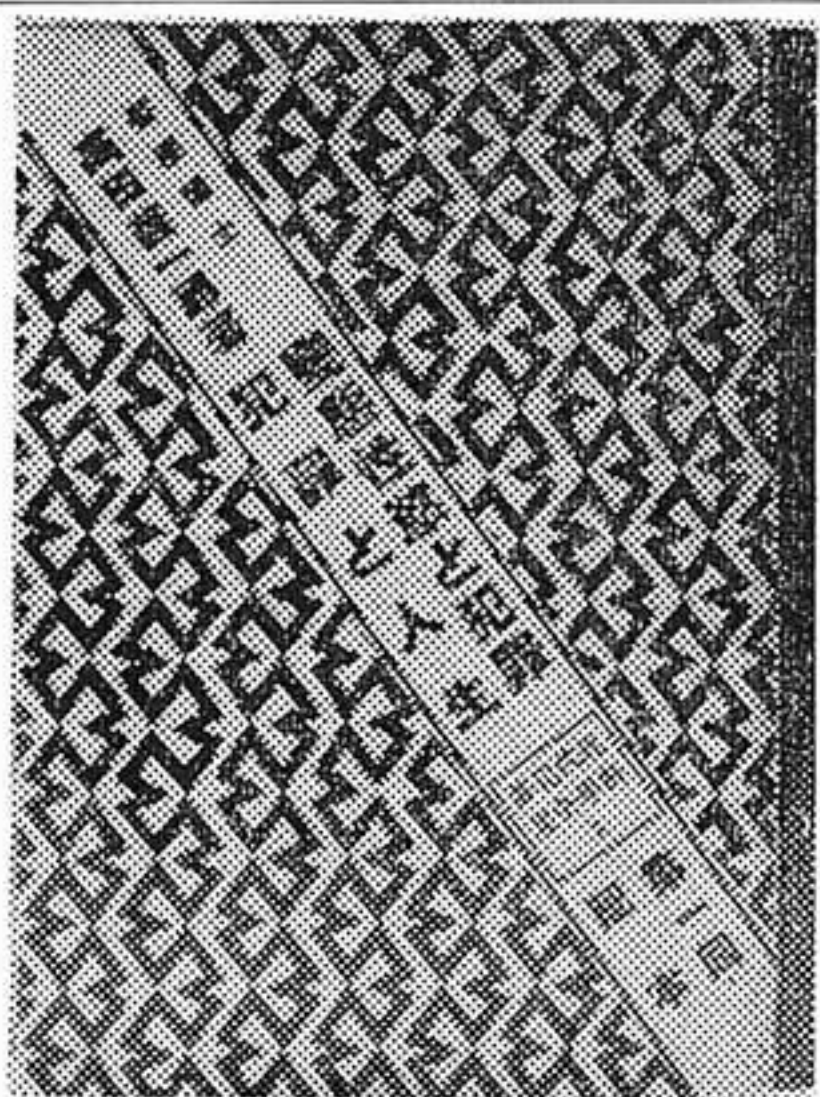
① 未見。② 現代軟派文献大年表（全誌中野栄三個人執筆）。③ 東西文芸に現れたる秘具雑考 酒井潔。日本色情芸術史資料 北野博美。房内禁日考 黒貞輔。④ 現代エロ広告考 中野栄一。埒外物関係執筆分類目録及び解説 尾崎久弥。⑤ インポテントの精神分析 エリ・フリーランド



大江洪太郎訳（120頁を占める研究というより文学的な作品）。四ツ目屋漫談 竹浦楼主人。東都性具粹薬店打診 左右津良。最近秘薬文献資料考 酒井潔。

扱て、この風俗資料刊行会の特色に就いては『デカメロン』創刊号の後記で、「一九三〇年（昭和・5）はエロチシズムとグロテスク趣味が圧倒的にジャーナリズムを支配した。その傾向は、三一年の今年に入っても衰れるどころか、却って益々猖獗を極めんとする勢である。エロ結構、グロ又結構だが、それが余りにも卑俗賤劣を極めては、畜鼻持ちがならぬとだけでは済まされない。吾々が茲に朗らかに明るきエロチシズムの旗幟を掲げて、溜々たる時流に棹ささんとするのは微力ながら此ジャーナリズムの傾向を健全ならしめんと抱負からである。吾々はエロもグロもこれを拒否しない。却ってこれを真正面より究めて昇華しようとするのである」と云っている通りで、秘密出版という匂いはまったく無かった。この刊行会はその後三笠書房と改称し文学書や翻訳物の出版社として知られている。寄稿家の一人だった平井蒼太の談話では当時の発行住所本郷坂下町七八は路地奥

## 『近代犯罪科学全集』第一巻



獄中性愛記録 ショワジ女史 酒井潔訳  
唐様でかめろん 尺仙秀訳

## 犯罪科学の項

大正十二年の梅雨時のある晩——。草間ハナ雄（東京市社会局主事、売笑婦研究家）は浮浪者視察に浅草方面に出かけた。駒止河岸の大ゴミ溜まで来ると、四五人の宿無しがまるで生ける屍のように、其処彼処と雨露を凌いでいた。フト見るとその中に女乞食が一人、寝もやらず呆然として夜露に濡れていた。彼はその顔には見覚えがあった。

「お金さんじゃないか。久しぶりだね」

と声をかけた。小柄なボロ布れのような哀れな女は、暫くキョトンとしたまま相手を確めていたが、

「なーんだ。調べもの屋の旦那ですか……その節はどうも。わたしもね段々おち目になって、今はもうこのさまでございますよ」

お金はうつろな眼で、くらくたれている夜空の一点を見つめたままそう云った。其処には星も希望もなかった。泪も涸れ果ててしまえば悲しいこともない。都会の河岸に流れ寄る塵芥のように、今日と明日を所定めずに生きていただけだった……。それも、何時ま

の棟割長屋みたいな所で、日本愛書家協会と風俗資料刊行会という木札が表札代りにぶら下げてあるだけで、社主竹内道之助は口数のすくない不愛相な男だったという。室内には書物らしいものはまったく見当らなかった——。当時よく知られた竹内道之助が刊行した単行本は次の通り、

寢室の美学（正統2冊）

原比露志

好色秘事談綺

佐藤紅霞

浮世絵と美人画

尾崎久弥

ポムペイの美術（限定版）

原 浩三

苦痛と快樂 ルノアン原著

竹内道之助訳

日本好色美術史

原 浩三



で続くことやら。

アルコール中毒のお金は、酒の気が切れると、まるで憔悴しきって元気が無かった。草間はそのまま立去るのが気の毒になって、吾妻橋の向うの小さなバーへ連れて行き、安酒を振舞ってやると、コップを重ねるうちにしだいに元気づいて、

「ネー旦那。わたしだって、昔は別嬪だったのよ……これでも、随分おとこたちに可愛がられたこともあったのサ。外の女になんかヒケを取らなかった」

と語り始めた。お金は徳川幕臣の娘で、慶応四年十月牛込横寺町に生れた。明治新政のいわゆる御一新で一家は没落して、世が世ならば武家育ちのお嬢さんでいられるのに、花も薔の十六の年には、埼玉県川越のダルマ茶屋に酌婦として売られてしまった。これが売笑生活の第一歩で、以後約四十五年間もその生涯を売笑婦と乞食で過し、後のことだがエロ・グロ・ナンセンス時代といわれた昭和七年のその師走に、下谷東盛公園のベンチにもたれたまま、不幸な星の下に生れた人生の幕を閉じた。

密売淫の前科七十九犯を累(かさ)ねたと伝えられているが、その死亡後の下谷区役所に

あった検視書によれば、——身の丈四尺二寸位——とある。当時としても余りにも小柄な女であった。草間ハナ雄の記録にある、「淫売婦の強かもの」というには当たらない。こんにち公平な眼でみれば、その罪とする大半は社会が負うべきものであった。

川越のダルマ茶屋を振出しに、群馬・栃木・千葉・神奈川と関東各地を酌婦生活で転々と流れ歩いて、夜毎にかわす枕の数と共に益々身をもち崩し、強くなったのは酒ばかりという悲しい売女生活。三十二の時、浅草のゴミ金という淫売屋に転げ込んで、白首にまで成り下ってしまった。間もなくこの親分から離れて、独立自営の密売淫婦として暮すこ

とになる……。

「それでもお金さん、ほかには縄張りがあったるさかったでしょう？」と、草間がたずねると、

「だからね、其処がつけ目なんですよ。わたしはネ夜になると吉原の遊廓の中にもぐり込んでお客を見つけました。……そういうとフシギに思うでしょうネ」

「それは当り前ですよ。私娼の縄張りからは確かに除外地ですが、吉原のなかじゃ商売にならんでしょう、それで」

「それは、こういう訳です」

お金は云う、吉原の廓内には小格子通り店から、中籬(ちゅうまがき)大籬(おおまがき)などと軒を並べ、お職の花魁から端女郎までその美をあでやかに競っている。多くの遊客が浮れ歩いている。だが、その全部が登楼する訳ではない。金の無い色餓鬼たち、つまり大半は素見ひやかしなのである。だからといって眼前の花を眺めただけで、小格子の女を買う金をも持たなくたって、男はやっぱり男である。おさえ難い性慾のはけ口に弱り切っている……。其処につけ込んでお金は袖をひく。

こうした連中の猛火のような性慾は相手が年増であろうと何であろうと、渡りに舟で、美



『犯罪科学』創刊号表紙



醜も選ばずただ△女▽であれば良かった。然かもその強い衝動を持ち合せの小遣錢で解消できるとは。

お金の計畧は図に当たった。木賃宿を泊り歩いて、朝寝朝酒朝湯をかかさず、むかしのたしなみを忘れず髪もよく結ったものだと思慢する――。だが、間もなくお金を真似て吉原廓内に入り込む街娼が矢鱈にふえ、飲んだくれのお好などという名物女も現れ、警察の取締りも厳しくなり、甘い汁が吸えなくなつた。見返り柳から奥へは入れなくなつて、日本堤から田中町・山谷附近で商売をしていたので、遂に、△土手のお金▽と異名をとるようになった。

草間ハナ雄はその後間もなく関東大震災があつて、救護事務が忙しく、浅草方面の浮浪者視察ができなかつた。大正十四年二月になつて、久しぶりに浅草公園に行くと、淡島社の境内に老いたる女乞食がいて、いろあせ肉はおち頬はこけて、もうこれ以上よごれる所がないというボロ着を身にまとつているお金を見た。その時は声をかけずに、足早やに其処を通り過ぎた。

昭和六年になつて、草間はお金が三輪の浄閑寺の床下をねぐらにして、日暮里・千住・

下谷と北寄り方面ばかり物貰いに歩いていると浮浪者から聴き出し、久しぶりに逢つた。「どうして、浅草に出て来ないの？」

彼がそう訊くと、お金は淋しそうに、「旦那、わらわないで下さい。こうまで落ちぶれては、あの盛り場に身を曝したくはありませんわ。これでも少しは人に知られた女です。もう浅草には行かれません」と云つた。

以上私が記したことは『犯罪科学』（昭和5・7）の「ゴウカイヤの強かもの土手のお金」と、『犯罪公論』（昭和8・4）の「売笑生活四十年――土手のお金遂に殞る――」という草間ハナ雄の調査に拠つた。



適当な引例ではなかつたかも知れないが、土手のお金のような浮浪淫売の哀れな生涯を一つの女性研究の対象として追究した人がいたということは、読者にも既に気付かれたと

思うが、社会の中の△性▽の位置を正しく認識しようとする、風俗と性に対する新しい解釈が普及して来たことの結果だと思われる。

この頃になると人間の性生活を甘い閨房内の戯れとのみ考えるには、背景となる社会生活の現実相はあまりにも厳しくて、もう梅原北明のような魅力ある個人の事業（出版物）や

珍書屋一派の軟派本だけでは、性の実相を知るのには不充分になつて来た。

武俠社（柳沼沢介）がそこに着眼して、△犯罪▽と△性▽を結びつけた企画として、『近代犯罪科学全集』を発行したこと、それが大当りだったということは、時代の趨勢にもよるがタイミングのよい出版だった。この犯罪科学全集の姉妹雑誌として『犯罪科学』はうまれた。昭和五年六月創刊号を発行、二二五頁で定価六十銭。編集者は田中直樹。全集のほうは第九回配本の「殺人と性的犯罪」を予告している――。当時この犯罪科学全集の予約購読者側より機関誌発行の要望が強くあつたことは、附録の月報にも見えていた。また、創刊号は六刷まで増刷していることでも、如何に、人氣があつたかということが分る。雑誌『犯罪科学』に触れる前に『近代犯罪科学全集』について記す。

近代犯罪科学全集 全十六巻 別巻二冊

1 犯罪と人生 医学博士高田義一郎

変態性慾と犯罪 (4・9)

「女性犯罪の特徴」強姦沙汰の裏と表

「変態的の犯罪」「徳川時代の墮胎業者

中条流」「本邦に於ける死刑の変遷」等



不快だから、恐ろしいからと云って、犯罪の事を知らずに居るのは賢明でない。犯罪者の為に苦しめられない様に、先ずその一通りを知って置くべきだ、と著者

は云っている。本書中の中条流の研究は著名である。

2 理科学鑑識法 金沢威重・乙葉辰三・武内光美・山口信男共著(4・12) いず

れも警視庁鑑識課員。「精液の鑑識」「毛髪の鑑識」などあり、「指紋法」が副えてある。

3 犯罪捜査法 有松清治・出口安二共著(5・6) 著者は共に警視庁特別捜査課員。性犯罪に関する記事はない。

4 変態心理と犯罪 中村古峽(5・3) この書に就いては本誌奇譚クラブ(42・9)で既に述べた。

5 女性と犯罪 野添敦義(5・11)。この書は女性と犯罪の関係を、主として性的方面から観察した諸篇を収録。「女性犯罪の心理」「暴力殺人者としての妻」「残忍性の女性犯罪者」「変態的本能」等々、本書には、出版法規上のタブーであった近親姦を、伏字沢山ではあるがその実例をも掲出している。著者は警視庁嘱託法学士。

6 暗殺・革命・動乱 喜多壮一郎(5・7)。著者は早大教授。表題の事例による残虐記事が多い。

7 犯罪鑑定余談 医学博士 浅田一(4・10)。「処女性の真相」「偽墮胎」「婦人犯罪管見」等々、ほかに大米竜雲の老尼強姦殺人事件の鑑定記事などもあ

# 『犯罪科学』の表紙。

戦前戦後を通じて特殊風俗雑誌の多くが、始めは充実した内容で出発し、終りは読物雑誌式の低調なものになって消えて行く。これらの表紙からもそれが窺えると思う。





る。

## 8 法医学短篇集 医学博士 小南又一郎

(5・1)。本書のうちで「月経時の精神異常」は一七一頁を占める鑑定実例の文献である。ほかに「婦人と犯罪」「文化と堕胎」がある。

## 9 売 淫 喜多荘一郎

掬摸・賭博 尾佐 竹猛 (4・11)

「売淫」の項のみを記す。売淫史・売淫発生理論・売淫の裏面的観察・遊里雑考・売淫婦の生理的変態現象・売淫と性的犯罪・売淫と性病・白い女奴隷——醜業婦と誘拐・世界各国の売淫警察と公娼廃止運動・男色売淫史物語。等々、広範囲に亘って世界性風俗の歴史を語って居る。

## 10 犯罪者の心理 金子準二(5・2)。

著者は警視庁医務課技師。総論篇と各論篇に分れ豊富な実例を示し論じている。口絵にサディストに責められた十七才の女の半身写真がでている。

## 11 殺人と性的犯罪 加藤寛二郎、荒木治

義(5・5)。内容は殺人の方が主となっており生々しい写真や記事であまり気持のよいものではない。著者は共に警視庁の専門家。

## 12 血液型と親子鑑定 医学博士古畑種基

指紋学 (5・12)

1413 刑罪珍書集(1)(2)原胤昭解題 (5・4)

(5・8) この全集中の圧巻で、刑罪風俗史として貴重な文献集である。「縄之伝極意」「刑罪詳説」「徳川將軍御直裁判実記」「吟味の口伝」「検使楷梯」「無冤録述」「棠陰比事」「江戸にて犯附奉行御捌之伝」「犯姦集録」「御仕置例類集抄」「牢獄秘録」。このうち犯姦集録に江戸時代末期の市井の性犯罪記録が含まれている。

## 15 演劇と犯罪 飯塚友一郎(5・9)。

主題を首尾一貫して述べた良心的著述で多くの挿話も織り混ぜ、演劇と犯罪風俗史の好著。

## 16 特異犯罪の実記 天草麟太郎(5・12)

犯罪実話読物集で、毒婦富上リュホカ、二十話を収めており、附録として「隠語集」「犯罪用語辞典」が巻末にある。

尚、別巻として発行した二冊はこの全集中に収録がむづかしい非公開資料で『刑罰変態性慾図譜』と『犯罪現場写真集』であった。二書共に発禁となった。詳しくは拙著『伝奇伊藤晴雨』に述べたことがあるので略す。

◇ ◇ ◇

『犯罪科学』学術と猟奇趣味の握手成る！  
僅か二ヶ年だ。完全に確保せよ！

生白い恋愛小説の時代は去った。欧米読書界は既に機械科学から精神科学の追求へ大旋回を開始した。犯罪科学研究は今や独米の読書界を席捲しつつある。雑誌にして而も雑誌以上の内容を占守し研究的にして而も耽奇的趣味を満喫せしむる本誌の抱負を見よ！ 人間発達史と社会文明史の背景に巢喰ふ、エロチシズムとグロテシズムの探究！ そは正しく赤裸々とした人間の研究である。されば一切の社会悪と社会善を生む人間本能の秘奥を曝露し、人生科学の諸相を究めるのが本誌の使命である。本誌は二ヶ年間に全力を尽して犯罪科学と猟奇的文献を網羅せんとするエンサイクロペディアを現出するであらう。

なかなか堂々たる創刊宣言で、極左思潮流行の時代だけに、論旨もよく整っていて、エロダグロだ猟奇だと云いながらも、時流に合致した、大衆読者の思う所にツボが当たっている。この雑誌全般をいう場合は以上の説明で納得できるものと思う。——創刊号から性風俗に関する主要記事をひろうと次の如くで、



## 見果てぬ夢……マゾフォト

## サド女性の股責競艶集

馬祖 漢

家族に関する犯罪（其一墮胎罪） 徳田彦安  
 女装の男（歌舞伎特殊考察の一） 渥美清太郎  
 罪刑古川柳 （三面子） 岡田朝太郎  
 売女の波と其汎濫の状態 草間八十雄  
 見世物女の変態的性生活 松浦泉三郎  
 姦通に対する支那人の私刑習癖 上田恭輔

などの論考が眼立つ。ほかに、大隅為三の「希臘の遊女」丸木砂土の「独逸の裸体文化運動」道家斎一郎の「ロンドンの街娼」などがあり、ずいぶん充実した内容である。この創刊号の今村寅士構成の表紙はまったくなつかしいもので、淫蕩な懺悔聴聞僧が金

髪の処女を犯そうとする図は、欺瞞偽善にみちあふれた当年の世相、社会生活の底辺に蠢いている暗い罪惡を八象徴Vしているように、たっぷり諷刺を利かせているし、何よりそのバタ臭さが読者を完全に魅了した。犯罪科学という真赤な文字も新鮮だった。

一、絹川文代女王——スパイダー・パンティ、黒革ブーツ着用。

（イ）（マゾ男は両足を投げ出して坐り、両腕を後について支え、上半身を反り返らされている）（上半身裸体）

絹川女王様は、マゾ男の首っ玉に跨って両肩口にお尻を据え、両手でマゾ男の頭髪をわしづかみにして持ち上げ、鼻と口を股で挟み、猿ぐつわを噛ませている場面を、正面よりと斜め右、又は左前より写す。

（ロ）（マゾ男は「イ」と、ほぼ同じ姿勢にて椅子を背にして首から、頭を仰向けに腰かける部分にのせられ、支えている両腕は椅子の前脚にしっかりとしばられている）

絹川女王様は、腰かけの部分に仰向けに

のせられた男の顔の上に、ドッカと跨って、口も鼻もピッタリと押さえて猿ぐつわを噛ませ椅子にもたれながら悠然と煙草をくゆらせている場面を写す。

二、花田沙登子女王——ビキニ・スタイル。

（イ）（マゾ男は上半身裸体でベッド又は長椅子の側に坐らされ、両腕を前にのばしてベツド又は長椅子につかまっている）

花田女王様は、マゾ男の顔に跨り、ピッタリ挟んで正面肩車にのっておられる場面を、正面よりと斜め右（左）前方よりと写す。

（ロ）マゾ男が、鏡台の前の坐布団の上に仰向けに頭をのせて転がされ、両手は前で縛られている）

花田女王様が、坐布団の上のマゾ男の顔の

上にドッカと馬乗りになり跨って坐り、口も鼻も股でピッタリ猿ぐつわを噛ませ、化粧しながら、手ががみで、眼だけをパチクリさせている哀れなマゾ男の顔をみせている場面を写す。

三、大塚啓子女王——女子体操選手のユニホーム。

（イ）（マゾ男は両手を後に縛られて仰向けに転がされている）。大塚女王様がマゾ男の顔をしゃがんで跨り、あごのあたりにお尻を据えている場面（ドウダ、といわんばかりに見下しながら）を正面からと斜め右（左）前方より写す。

（ロ）顔面責めのオーソドックスなスタイル。つまりマゾ男の顔の上に馬乗りになり両太股の間にしっかりと挟み込み、口と鼻を股でピッタリふさいで「サア、どうだ」といわぬばかりに腕組みをしながら見下している場面を写す。



## 振袖 残華

牧高志



冒頭から、判ったような判らないような表題をつけ、まことに無責任のようであるが、多分に供養の意味もあり、年も改まったところで、例の如く愚にもつかない一人よがりのお話を申上げてみたいと思う。

国をあげての長かった戦争が治まって、世が泰平ともなれば、街々はさながら花に戯れる蝶の如く優雅にして格調高きもの——ここでは「振袖」を取材したので、当然その振袖なるものが、これでもか、これでもかと氾濫

てしていく有様は、誠に自然の理でもあり、また一面好ましい現象のようにも思える。

そしてその振袖は、何んと云おうと今のところ総鹿子絞や手描友禅振袖模様あたりが、手の届くそのさいたるものであろうけれども私はこの豪華極まる振袖に時折、あろうことか、誠にたわいもない架空的な夢物語を、考えてみたりするのである。

私が曾つて蒐集した手持文献のなかの、森克巳著「人身売買」（至文堂発行）などに依ると現在の日本が、まだこれ程開化していない明治の初期には、多数の生娘が日本から海外に輸出されたそうである。しかもそれらがいったん「売物」となると外見は兎も角、中身がひどく物を云うから輸送に当っては今と違って、いささか胴長の日本女性は長い道中をカムフラージすることも考えのなかに入れると、筒っぽのキモノなんかの目立たない不断着のまま、石炭船の船底に積まれて行つたと云う。

もちろん海外で落ちつく処に落ちついて了うと、俄然華美な服装に身をやつし、狂喜するあまたの男達の玩具に供されたという訳であるが、筆者がその昔、外地で見聞したところに依ると、所謂振袖を着た美女なるもの



は、せいぜい料亭の客席で前座的な手踊りを踊る年若い舞妓位なもので、それ以外はお座敷着か袖の比較的短い訪問着ばかりであった。

現在日本全国に幸か不幸か——こんなもったいないことを云うとそれこそバチが当たるかも知れないが、流行している中振袖を含めた振袖類の着用は、いわば戦後の特記すべき新現象であって、裾まで届く長い袖を人波に翻がえして、勇敢に街頭をのし歩く風景は戦前には薬にしたくも絶対に見られなかったものなのである。よしんば見られたにしても、それは結婚式のお招かれとか、深窓の邸内でお茶お花やお琴に興ずる位なもので、どこまでも狭く限られた地域だけの風俗に過ぎなかった。それが戦後は民主的にどっと一般民衆の前に大っぴらに解放された（と筆者は思っているのだが本当だろうか……）。

ご承知のように振袖には本振袖（大振袖）から中振袖、それに最近では某デパートからオリジナルの小振袖まで新しく設定される盛況さで内容的には多種多彩なものとなった。しかもこの振袖はおよそ女性の年齢と結びついていて、十八才から二十三、四才位までが本、中振袖の着用期、やや高年の二十

五、六才頃、或はその逆が小振袖着用期のようである。もっとも昨今、週刊誌をしきりに賑わせている女優連の結婚式では、三十才から三十七才のいわゆる姉さん女房が一生一代の行事とあっては、訪問着に毛の生えた袖の長さでは到底満足できないものと見えてどれこれ燎原の火の如く、競ってこけおどしの超本振袖を着、精一杯の愛嬌をふりまいてスナップ写真があちこちの話題を呼んでいる。

一方こうしたことをピタリ裏付けするかのように、戦後の女性は欧米人なみに胴長から脚長へと変って来たので、さしもの大振袖も、はたでやきもき心配する程苦にもせず、またやたらに地面を曳きずったりすることがなくなったのは喜ばしい。

さてこのような振袖に、これまた特に戦後は切っても切れないのが豪華な西陣丸帯や袋帯のふくらみ結びの帯なのである。これがまた何んと猫も杓子もお正月や謝恩会ともなれば、因果なことにやつこらさと高々と背中へ背負い上げて静々とご出陣と相成る。

この総合された一連のスタイルはも早や場処による制約がなく本人さえ我慢すればいつでも、無差別に着用できるような仕組みにな

ったのだから堪らない。そのトキが深夜であろうと黎明であろうと、はたまた街頭であろうとラッシュ時の列車ホームであろうと、そのいでまは傍若無人的に全くへっちゃらとなってしまう。

だから毎年、年中行事かのように大都市で変質者が過激な液体をふりまいても、振袖の群れはあとからあとから、絶えることなく巷に氾濫する。

確かに世をあげて物資が豊かになったことは事実だが、女なら着てみたい、自分以外の人には見せたい、見られたい気持ちは男性のわれわれにも大いに判る。判るが、こうなれば本文の結論へと急ぐ前にちよいと苦言を呈しておきたいことが一、二あるのだ。

それは大事な和服の生命、キーポイントとも云うべき着付が、なべてズバリお下手であるということである。これは典型的な京の祇園の舞妓さん達もまたそうであるが、あの窮窟極まる無数の腰紐類と帯の拷問によく耐え忍ぶ傍ら、着たり脱いだり何度も何度も修練しなければ最初から出来ない相談だからである。昔と違って、総員も八分の一以上も減って僅かに三十人足らずの京某処の舞妓さんには、必らず定年オーバーの着付役が一応付き



切りと云うからいいようなものの、こちら一般大衆化した振袖群には専属のお抱え着付役とてもなく、専ら〇〇美容院、美容師まかせとは如何にも情けないではないか。

だから、どうしろツと云うんだと、いきまかれても始まらないが、男の端くれである筆者長年の観察によると、いわゆる小股の切れ上った一分のすきもない着付をした振袖女性は、まず百人に一人居るか居ないかであつて、大半の振袖居士はお尻のむずむずする何んとなくあんどん式の締らない恰好に甘んじているとみて差支えない。

そこで話の焦点はまた妙な処に戻るが、聞く処によると京の四条に「長襦袢サロン」という粋な飲み屋があるそうだが事の是否は兎も角、ナガジュバンと云う音の響からはそれこそ戦前派の国粋黨員が手放しで喜びそうな殿堂である。問題はこの殿堂のユニホーム、すなわち長襦袢なるものが実は振袖着付の基盤なのである（と申しても私の独想ではない。婦人雑誌を御覧になるとすぐ判るが）。

従つてこの「長襦袢」という代物しろものがよく呑み込まれていない処に、着崩れの原因がひそんでいると見てよい。確か戦前にはこの長襦袢にも着物同様お端折りをした筈である。そ

れが今日は無い。

で、このお端折りという奴やつが日本画の伊東深水画伯や挿絵画家の故清水三重三氏、岩田専太郎氏などと云ったエキスパートの絵描きやさんに依つて、甚だ色っぽく描かれる、とその頃ガード下にたむろした二束三文のバーのマダムでもホステスでも、競つて帯を解いて手前の長襦袢を見せたものである。脱いでみてよし、着て着崩れ防止がこのお端折りなのだ。事実さいぜんの長襦袢サロンでも、表看板の長襦袢が唯一の貸衣裳とあらば、必ず伊達巻か細帯か何んかして、きちんとお端折りしているに違いない。まさかこのままでお客と遠出は出来ないからその上から簡単に着物を着るのに至極便利な点も初めから計算に入れての相談だろう。

さて、物の順序でその次に苦言を呈したくなるのは足さばきである。これは云うべくしてなかなかむずかしい。早い話が、振袖を着て大股ないし外股歩きは、猿廻エテコわしの猿公のように徒らに赤い色をちらつかせるだけであつて優美なリズムには決してならない。着物が明治百年で表彰されるとしたら、戦後の二十年を除く八十年の長さと歴史が、着物着用の期間だったからである。つまり何事も練り

が必要だということである。

まあこんなことを書き出したら切りが無いが、さて色々な曲折を経て、ここに理想的な振袖グループがようやく完成したとする。すると今度は、妙なものでこの完全グループめがけて破壊的な活動が始まる……から人間なんてものは潜在的に勝手なものである。正に立川談志式のはめたりけなしたりである。処が、私は思うに破壊美もさることながら、その一歩手前の束縛美が何んとも堪らない。

何故しびれる程堪らないかと云うと、実はこのことについて昔某処で夜びいて議論をしたことがあるが、集まる者がきもの礼讃グループだけあつて、お互い個説を譲らないなかに在つても、一応振袖がおいらん衣裳、十二単衣など含めて晴着盛装の最上位であることに意見が一致した（これは云う迄もなくあくまで一般論としての話であるが……）。それは胸のポイントである帯揚げが、大っぴらに堂々と開陳できるからである。否、そればかりでなく、帯締めからすべての物が大げさに結集され易いのがまた振袖だからでもあるとした。つまり万艦飾の名のつく物は何んでも現代衣裳である振袖につけられる、おおよそ晴着の掃き溜めみたいなものだからである。



今、試みに世界各国の、(と少し大げさだが)民族衣裳だけをひっぱり出してあれこれ照合してみると、民族の如何を問わず、どうも人間という奴は長いしきたりのうちには、北辺のエスキモーでもモンゴリヤの奥地であろうと一年に一回か二回かは、それこそ身動きも出来ないようなゴテゴテ……とわが身を飾ってみたいという習性があるものらしい。特に女性側においてそれが甚しいことが判る。

先般もある外人とさるキモノショウを観た際、ピンクの裾除や股の割れたパンティの下着から始まった日本の花嫁着付の実演には、ひどく度胆<sup>どきも</sup>を抜かれた様子で、ただでさえ柔軟性の高い女性の肉体をまるでくぶり切るように、紐、紐、紐でギュウギュウに締めあげることの種の残酷さには終始首をかしげていたが、いよいよ完成真際になってもまだ不足と見えて、箱せこだとか、紅絹のしごきと云った装飾必需品を、これでもかこれでもか上半身に処狭ましとばかり押込み、飾りつけ出した時には Oh、Helpless と叫んだ。

日本人の筆者がこれらの現実を洩々肯定する位だから、まして異邦人の目には思わすこう叫ぶのが当然であろう。

ところで、話を本文に戻すと、本当はこれだけで、もうすっかりマニアの目的(何んの目的だなんてとぼける迄もなくお察しの通り……)が達成されているのに、この上でのよい破調風の束縛美まで欲しいなどと、虫のよいことをズケズケ抜かしなさんな……と仰言られるかも知れない。しかしどの道するとなすことが論外の沙汰であるなら、いっそのことあからさまに、それツとばかり十重<sup>とえ</sup>、二十重にある物体を緊縛してみたいと云うのが真実本音ではないだろうか。

ところが事<sup>こと</sup>晴着に關してのこの緊縛という現象は、清水の舞台から飛び降りる位の決心さを要求する。

つまり振袖は早い話が最高に値段が高いからである。筆者は呉服屋の番頭ではないから詳しいことは判らないが、昨今売出されている中振袖でも五、六万円は紙の厚さに毛の生えた絹量で、我慢が出来る最底の線だと言ふことである。

してみるとまあ振袖だけで十万、帯五万という一連のスタイルを最初から糸目をポキポキ折るつもりで、かからないと今様振袖なんてものは簡単に縛られるものではない……と云うことが判る。

だからと云う訳ではないが、これを着慣れた袖の短い訪問着か何んかで安直に行なおうとするのが初春の秘事、俗に云う昆布巻の行事であって、明治大正生れの殿方が、せつせと愛人ないし愛妻に試みてゐるのは、遅ればせながらお目出度い限りである。

ある料亭の売れっ妓に云わせると、盛装したお座敷着の上から更らに緊縛されて何されない、年が明けたような気がしないというすさまじいご女性もいるそう。そんな「素晴らしい」女性こそ、この人世の最大の幸福者といえるのですぞ。

どうも話があらぬ方向へよろめいたようであるが、折角このように金と時間をかけて勢揃いした完成品を、さっきも申上げた通り今度はわざわざある種の手ごころを加えて一挙に(あるいは除々に)崩壊させんとする行程において、ないしはその結果において、無限の執着さを求めようとするに至っては、ことの如何を問わず、言語道断であると叱責されるかも知れないが、その破壊寸前の束縛美は、ズバリ振袖において最高度に達するものと……実は恐る恐る思ひ度いのである。この手前勝手な独り判断は、心理的には振袖や訪問着がもと「仕事着」ではなくて、いわ



ゆる優雅な「遊び着」であるためでもある。遊び着である以上下手な遠慮は無用ということも当然許されよう。

そこでいよいよ歌舞伎の祇園祭礼記の雪姫ならぬ、今様振袖女性の緊縛という段取りになるのであるが、芝居に登場する雪姫は当時の最高位の娘衣裳なのだから、終始けがすまい、そして桜の木に縛りつけられて足で鼠を描きたいという、複雑な心理の下で所作事を演ずる以上、リアルな縛られ方は勢い無理である。だから歌右衛門でも福助でも梅幸でも雀右衛門でも、太い黄色い縄尻を後手のままほどよく握って、なるべく裏側を客席に見せまいとしながら優美に動いている。そのような調子だから、縄の掛け方は勢いルーズなものにならざるを得ない。もちろん豪華な衣裳は内外ともにほとんど損傷しないという寸法である。(昔は夏期公演で下着がボロボロになったというが)

ところが、これでは万事靴の底から足の裏を搔くようなもので、焦燥感云わすもがな、第一みっともなくって、しみったれていけねえ……とばかり総額十五万円の振袖姿のうしろに廻わって、心を鬼にしたと思ひ給え。

敢えて至高の無残絵とは思わぬが、何んせ最高の衣裳であるだけにその哀れさは数倍、それを身も心もない方向へ押しやっていくのが桃源境に遊ぶそもその第一歩なのである。

だからその年の暮の大晦日にあるいは成年式の前日あたりにできるだけ濃厚な化粧をしパンティなどという野暮な物はやめて純日本風の下着を順々に身につけて締めあげ、いびりあげた挙句に、ふくら雀結びの袋帯を思い切り胸高に背負いあげ、昔に返って赤い帯揚げを巾広ろに結んで出し、振袖の袖の間から燃えるような緋縮緬の長襦袢を綺麗に重ねて……これではまるで花嫁衣裳そっくりだなんて躊躇ちゆうちよする必要はありませんよ。何んでも勇敢に着てみることですよ。

折しも折、時節柄深夜に振袖が歩いたってちっともおかしくないのを大いに利用して彼氏とおもむろにお詣りなさい。日本の神社仏閣には必ず何がしかの、こんもりした樹立があるものです。どうせ他人なんてものはこちらで思う程そんなに関心は持っていないのだから、その連中が居ようと居まいと、立止ってこちらを凝視しようとしまいと、あるいは近寄って来て物珍らしそうにのぞこうとのぞ

くまいと、始めのうちは寧ろ進んで身に余る光栄と感じて、やおら振袖の両手を後方に廻わし、まずひしひしと彼氏に両手首を縛られついで胸から一縄二縄と、縄をかけられて締めあげて貰うことです。

どうです？ 少しは悲壮感が出ましたか？ 出ません？ おかしいなア……もう出る筈じやが……縄が緩るくっちゃからきし駄目です。十五万円の振袖は惜しいけど、こうして新年早々神厳な境内において暗いとは云え眼だけは光る衆人環視の中で、豪華な振袖を縛られるなんて思うだけでも素敵ではありませんか。

もう時効になったから云いますけど後手首と胸廻りを縛る時の緊縛さは、既に廃刊になったあまとりあ社の月刊雑誌「裏窓」がよい見本です。少ない紐数で最大の効果をあげています。よく見ると、どうも一本の縄で両手首から胸廻りを縛ったのではなくて、手首と胸廻りとは別々の縄で縛ったのを背中の中道で結んだらしく、双方で引っぱり合っている。で余計緊縛さが出たものと思われます。

さア……ぎゅうっと縛られましたね。あいにくここには三面鏡がないので貴女の悲しい姿はじかに見ることは出来ませんけどおおよそ



想像はできるでしょう。縄尻を取られてそのあたりを少し歩いてみませんか。

「あら、あの女、<sup>ひと</sup>どうしたンでしょう？ 縛られて、何か悪いことでもしたのか知ら？」

「でもうしろの人警察の人でもなさそうよ」とささやかれるかも知れません。

「どう見たって満洲の冬で処刑台へ行く日本婦人そっくりじゃないか」と云う声はどうやら三文作家のようです。

「何んだかよく判らないがこりゃ素張らしい絵になるぞ」と叫ぶ男は、きつと武智派好みの前衛画家かも知れません。

兎もあれ、ざわざわとこう野次馬が集り出しては万事ぶち壊しです。早々に彼氏のオーバーでもすっぽりかぶってこの場を一応立去って下さい。岡ッ引じゃあるまいしくら物好きでも後をつけてくることはまずないでしょうから……。

しかし此処はもう大丈夫です。人気がなくて少し寒いけど、今度は彼氏に手伝って貰って、手頃な立樹の幹に立ったままで縛られてみましょう。白い手拭で目かくしをされると何処かの国の射殺風景になります。

その時彼氏は何をしていますか？ フラッシュの一発位はいいじゃありませんか。のちの

ちのために撮って置くものです。

いたずらな彼氏は「愛情のかたわれ」とばかり、女竹の先か折れた枝の先きっぽで貴女の裾を少し捲くって、真赤な長襦袢を眺めたりするでしょう。それ以上は艶消しですからご安心下さい。男なンてものは案外気が弱いんですから大抵の場合それ切りで止めて了うものです。

誰も居ない処ではどなたも気分的にも大胆になれるものです。思い切り悲劇的なポーズを取ってみませんか。某婦人雑誌に若い新婚夫婦が寝具をわざわざ庭へ持ち出して青空の下で交歓を結んだという記事が載っていました。それならばあなたがたも負けずに携帯のビニールか何んかをそうっと落葉の地面に敷いて、その上に貴女が<sup>あなた</sup>仰向けに横たわるのです。両手首が固く縛られているので背中は一寸痛いと思いますが、我慢をしてカラー写真に撮られなさい。眼を閉むれば今しがた射殺された日本娘そっくりです。

それからこれは本当は少し風があった方がよいので、それこそ何処かの海岸、例えば伊勢の二見が浦とか日南海岸の鵜土<sup>うは</sup>神宮と云ったような処を選んで、参宮序でに岩山のゴツゴツしたところを、ゆっくりと彼氏に縄尻を

取られて歩いてみるのも一法です。そうでなくとも風が強いのが海辺なのです。振袖は夜明と共にさし昇る太陽に輝き<sup>へんほんひるが</sup>翻と翻えり同時に裳裾もあらわになることでしょう。

「巖頭の美女」と題してカンバスに納めれば日展や二科展で入選するかも知れません。随分と話が飛躍しましたねえ。しかしこれ位はまだ序の口です。もっともとうんと工夫をこらして、折角の振袖を存分に活躍させてみて下さい。

幸い今度は彼氏に手頃な松の木があるじゃありませんか。帯を解いて……と云っても、丸帯や袋帯を本結びにしてふくら雀などに結んだ物は解くのも大変だが、一ったん解いたら百年目です。

こう云う時には最高二万円位出すと、新装帯みたいに安直に結べる出来上り結帯のふくら雀の帯が方々のデパートに売出されていますから、あれをご利用になると男の彼氏でもたやすく着けたり脱ずしたりすることが出来ます。

その組帯を解いて脱ずすと、貴女は宛ら追剥にあった雪姫みたいに緋縮緬の（あるいは紋羽二重の）長襦袢一枚の姿になる訳ですが、問題の振袖は、枝振りのよい枝にそっと



懸けてみて下さい。訪問着よりいささか長い振袖が、心なしか風に揺れています。

その傍らで、今度は細くあらわになった貴女の緋縮緬の両腕を静かに後ろに廻わして、彼氏の手で両手首と胸から二巻き位縄をかけられて縛られるのです。

昔、吉原や洲崎の遊廓では、足抜きと称して女郎が逃亡すれば、追手に捕まったが最後、うむを云わせず赤い長襦袢のまま後手に縛りあげられ、三日三晩水も吞ませずに責め折檻されたと言いますが、そんな気分がちょっとびりでも味われたら面白いではありませんか。

ただこの場合、洋服の赤色と違ってきもの赤はかなり刺激的ですから、余り長時間に亘って真紅の長襦袢のままで居るとするのは風紀上よくないかも知れません。坐興とは云え、軽犯罪に問われるほど野暮なことはまたとありませんから……。

どうです？ 少しは満喫されましたか？

季候のよい四、五月頃ならいざ知らず、あいくの厳寒の候にとにも角にも薄い振袖の晴着をどうのこうのと云うんですから、真に受けて実演する方はさぞかし大変でしょう。くれぐれも風邪など召さぬようご用心が肝要で

す。

話は少し横道にそれるが、筆者がまだ小学生であった頃、大火で家を焼かれ、翌日見るからに派手な女の長襦袢を着込んで登校してきた背の高い男の子がいた。

この男の子とは、入学以来クラスも変わらず不思議にまるでより添う影の如く、卒業までずっと一緒だったが、どうもすることなすことが普通でないので面白い奴だと思っていたところ、破天荒な部分的女装にお目にかかったという訳で、聞くところによると女郎屋とも芸妓屋ともつかぬ駅前あいまい屋の総領だと云う。

兎に角、深夜ホースの水の下をくぐって持出した衣裳をかき集めてみると、男物の紺のきものと女達の下着類しかなかったというから悲惨だ。正式に云うと小学校でも和服を着た場合当時はハカマを着用しなければならぬが、それは今回のような緊急な出来事だから省略するとしても、袖のない筒っぽのきものに何がしの袖のある赤い女の長襦袢は、重着しようにも初めから無理な話で、それをまた勇敢に押し通した処に奇想天外さが生れたという訳だ。この男については他日別に稿を改めて記述してみたいが、ここで本論に關係

ある事項だけをひっぱり出してみると、皆んなでからかったらすぐさま抱え女の真赤な腰巻を教科書と一緒に風呂敷に包んで学校に持ってきたことと、とんでもない極彩色の春画を教室で大っぴらに見せたことであった。実はその春画の中に、問題の振袖があったという訳である。

卒直に云って、後年伊藤晴雨描く浮世絵を某書店から買い求めた際、同じアイディアだったので驚いたことがあるが、ご承知の通り伊藤晴雨のものは縛り専門であり、それなりに洗練された画であるのに引換え、彼の少年の持参する春画は同じ女（これは大家のお姫さま風）でも、ずっと品が落ちていた。何しろかびが生えた話だから私の記憶も頗る怪しいが、今で云う大振袖の豪華な衣裳を、やや誇張的にお姫らしい女にまとわせ、それを薄汚たない老婆が背負って今一人の女衞らしい商人に渡さんとする情景であった。

その姫は云うまでもなく両手を荒縄で後手に縛られ、口には豆しぼり手拭の猿轡がかまされていたが、春画だけにポーズは極めて不自然で、あり得ざる処が拡ろげられ、しかも誇張されていた。ただ振袖だけは、例えば着物の柄模様など原色そのままに秋の七草を



四馬孝妖美異色画集

女体浣腸責め図絵	大中判印画紙焼付八枚一組	略号	△かき8▽ 二〇〇〇円
女体浣腸羞恥場面(1)	大中判印画紙焼付四枚一組	略号	△かん1< 一〇〇〇円
女体浣腸羞恥場面(2)	大中判印画紙焼付四枚一組	略号	△かん2▽ 一〇〇〇円
美少女羞恥責悦虐絵巻	美しき嗜虐生賛	略号	△えつ5▽ 一二〇〇円
妊婦の美しき媚態	大中判印画紙焼付五枚一組	略号	△にん3▽ 八〇〇〇円
女学生の浣腸二態	大中判印画紙焼付三枚一組	略号	△せか2▽ 六〇〇〇円
凄絶妊婦の切腹	大中判印画紙焼付二枚一組	略号	△せつ4▽ 一〇〇〇円
女体浣腸嗜虐場面	大中判印画紙焼付四枚一組	略号	△か6▽ 一五〇〇円
サド侯爵悦虐絵巻	大中判印画紙焼付六枚一組	略号	△さ9▽ 二〇〇〇円
女体切腹時代物絵巻	大中判印画紙焼付九枚一組	略号	△しせ▽ 一〇〇〇円
浣腸美媚態の極美图	大中判印画紙焼付五枚一組	略号	△のゆ▽ 六〇〇〇円
強制浣腸場面五態	大中判印画紙焼付三枚一組	略号	△しき▽ 一〇〇〇円
大中判印画紙焼付五枚一組	略号		

散らして、まるで浮彫をみるように絢爛としていたのには、品位は別として一驚に価するものに違ねやいなかった。上等の絹紙に描かれただけに閨の宝物とするには、これ位の大胆さ

が必要だったのだろう。振袖はこんなところにも結構生きていたのである。

兎もあれ、一九六八年の新春は全国至る処大、中振袖でめでたく明けたと云ってもよか

羞恥責め絵巻五態	略号	△しい▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
浣腸責め図譜五態	略号	△しえ▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
女性切腹時代風俗画	略号	△ゆい▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
倒錯美緊縛画集	略号	△えと▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
〔花と蛇〕力作画集	略号	△えに▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
女体吊り責め画集	略号	△えほ▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
浣腸と排泄の画集	略号	△えい▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
美貌汚辱と鼻責め	略号	△えは▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
美女の責め痴態	略号	△しお▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
美少女の羞恥責め	略号	△しる▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	〇〇〇円
豊臀の下に喘ぐ悦楽	略号	△こね▽
大中判印画紙焼付五枚一組	一	五〇〇円

○お申込みは、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社宛へ――。

ろう。鎌倉の八幡宮でも、大阪の住吉神社、東京の明治神宮、その他大小さまざまな神社仏閣は文字通り絢爛たる振袖で埋まり身動き出来ない有様は、きもの党には嬉しい悲鳴に違いないが、動く文献的意味もあって、筆者は8ミリの愛機を懸命に駆使してその妖姿を撮りまくったことは云うまでもない。

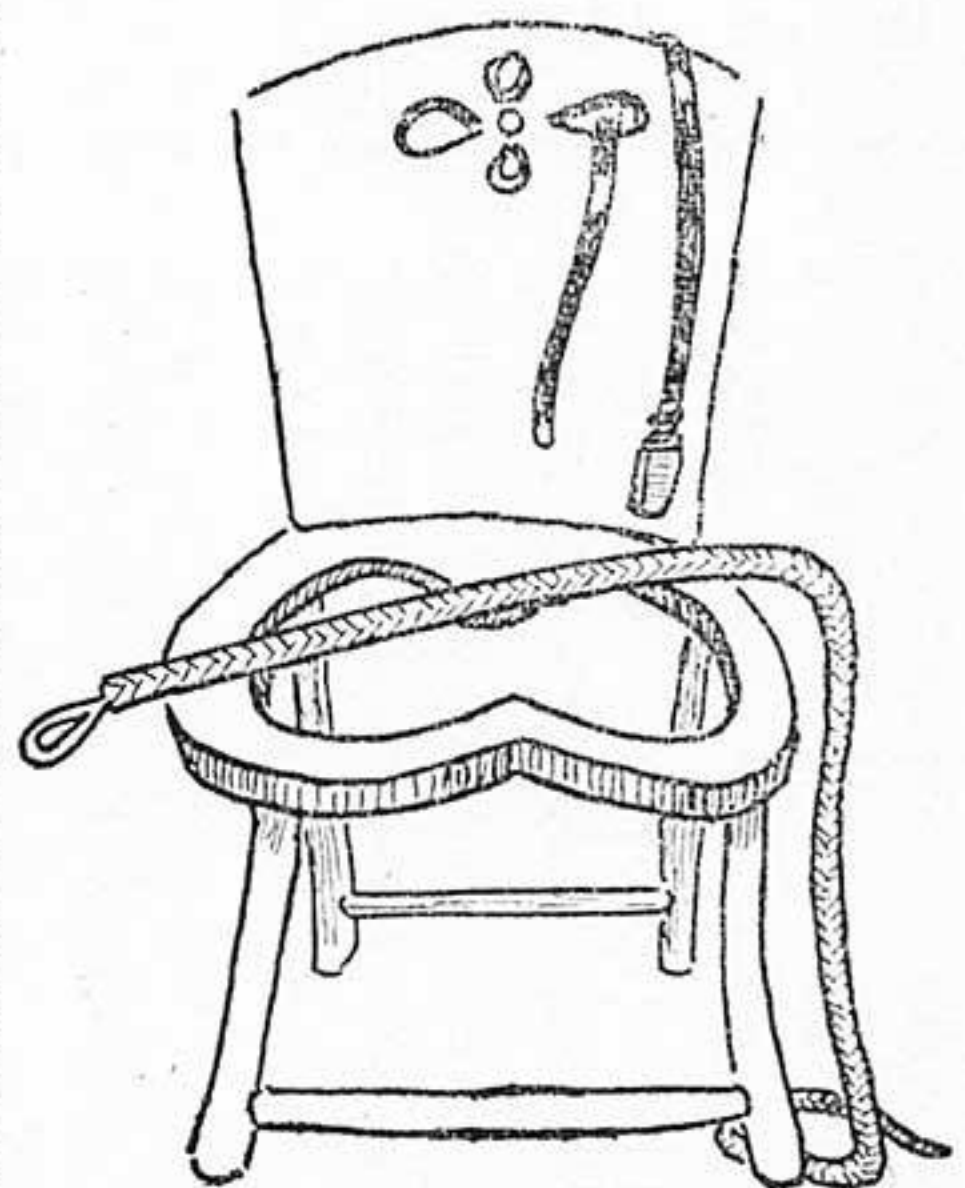
それを中間発表する訳でもないが、今年は復古調が一段と強調されて、昭和の初め頃をピークとして一たん影をひそめていた赤い帯揚げが再び台頭し始め、十人に一人の割合で、大巾に帯の外に開陳していた。そして、それに歩調を合わすかのように、真赤な長襦袢が百人に一人の割合（と云っても正確に計算した訳ではないが）で混っていたのは何んとしても嬉しい。赤は正月には欠かせない色だからである。問題はこの赤の色の嫌いな水前寺清子みたいな近代女性が、事ある毎に振袖を着て殺風景な世の中に、いかに花の如く咲き揃い、金魚の如く優美に游泳するかである。古典衣裳を追えば、果てしなきアラビアの砂漠の如く切りがないけれども、立ちとどまって愛誌奇ク好みに振袖を踊らせようとするれば多分このようになるであろうと云うのが、こんなことを書いた筆者の狙いである。



# 心<sup>こころ</sup>傷<sup>い</sup>たむ遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>

△第四十章 かりそめの自由 (二)▽

西 条 操



ミシュリーヌの仮釈放許可決定を知って、同房囚の中で最も喜んでくれたのは、意外にもヴィヴィアンヌであった。彼女は、おそらくは生きて陽の目を仰ぐ見込のない自分なのに、わが事のように心からミシュリーヌを祝福してくれた。

シモーヌやミルドレーヌやロレッタは、口でこそ喜び合ってくれるようなのだが、僻み心と冀望の念が、ともすれば顔に現われるのだった。

ミシュリーヌのMOMPEの錠は、委員会の日から解かれていた。それだけに、ミルド

レーヌは余計にみじめさを感じるのか、その錠をかけられるたびに、声を忍んで哭くのだった。

「泣いたって仕方ないじゃない？ そんなに情けないと思うんなら早く模範囚になることよ。ふむ、おポンポン、また少し引込んだわね。もう一穴締めて」

キャスリーヌ婦人看守はわざとゆっくり錠をかけ、カチリと音を立てる。

「ひと頃は、諦めてたじゃないの。どうして急にまた、そんなに切ながるようになったのかしら。胃下垂と子宮後屈に効くわよ、ウエ

ストを締めてると。ホホホ」

「——こ、こんな——」

ミルドレーヌは固いボタンを指先に、かすれた声で呟いた。

「——人権無視ですわ、こ、こんな——」

「何だって!! もう一度、云ってごらんよ。——また、そんな生意気な——。それが

いけないんだよ、お前はッ」

ビンタが二、三発、二階労役場の便器附近で激しく鳴った。

「どうしたい？」

「いえね、ベルディヌ。こいつ、人権を認



めて欲しいんだって」

「ふえー。紙をやらなかったのかい？」

「——い、いえ——使わせて頂きました。すみません。つい、口がすべりましたの。どうぞおゆるし下さいまし。悪うございました。よく反省いたしますから」

「こいつたら——」

キャスリーヌはウエストの錠を握み、手荒くゆすぶった。ベルディヌに一睨みされただけで縮みあがる癖に、この自分には不平がましいことを口走る。キャスリーヌに見れば業腹でもあろうが、そこは、音に聞えたピカルディ女との貫禄の差だ。

「こいつ、可哀相だと思うから規定外用便を許してやったのに、ほんと生意気なったら。ツケあがって——」

またしても激しいビンタが鳴り、髪を振り乱して女囚は呻いた。

「ここんところ、しばらく忘れてたセリフだったのにねえ。ふん、人権か。笑わせるんじゃないよ。いいかい？ 懲役女の人権とやらの前にはネ、いろんなことがゴマンとあるんだ。あれやこれやがぜーんぶ済んでから、やっとこさのことでお前の人権とやらを探して貰えるんだ。あるかね。まだ分からないのか

いッ。ボケナスッ」

「——す、すみません——」

「女弁護士が吹き込むのかしら？」

「いや。そうじゃないだろう。あの女はその点だけは感心だね。そんな子供みたいな寝言は云やしない。若いのに度性骨が据ってるよ。やっぱしクロウトだねえ。筋道と屁理屈とは区別してるよ」

耳にしたヴィヴィアンヌが、のろのろと封筒張りの手を休めずに頬で笑った。おだててもその手は喰わない、という皮肉な笑いだ。

彼女の看守操縦は巧みなものだった。

「こら、人権亡者のションベン垂れッ」

「——は、はい。すみません——はい」

「反省したいとホザいたわねッ」

「は、はい——」

キャスリーヌは女囚の肩を押し飛ばし、グルリと背を向けさせ、スカートの下から抜き出した手錠をば鮮やかに叩き込んだ。

不意打ちを喰ったの後手錠に、ミルドレーヌは息を詰め、そして、肩ふるわせて啜りあげる。喰い込んだ鋼鉄をばガチガチと背に確かめ、こぶしを握って首を垂れた。

「見事なお手際だね、キャスリーヌ」

「そんなでもないわよ。でも、警視庁から招

かれてんの、出張指南してくれって」

「フフフ。だけど、女岡ッ引きにだけはなるもんじゃないよ。ま、いうなれば、私たちの下請けだもんね」

「私たちのおマンマの種を探して毎日ほつき回るわけよね。でも、ミーハー族にはけっこう人気があるわ。こら、お靴を脱いでッ。不器用な女」

キャスリーヌ婦人看守は捕縄を手錠に結びつけた。いきなり首にかけて引き絞る。後ろ手が背で吊り上げられ、捕縄が首に喰い込んで、女囚はウツと呻いた。

「二時間ばかり反省するんだ。それとも、大西洋を渡る段取りを思案するかい？ あすこだったら、人権とやらも少しは探し易いだろうね。こら、膝が離れてる」

ミルドレーヌは革サンダルを口に、便器のそばの壁際で正座させられた。

「反省が済んだらお仕事させてあげる。もちろん、反省したからって、今日の割当てだけは済まさないや懲罰だよ。お前は、自分の都合で反省してるんだものね。ここがどこだか、よく思い出しなッ」

ミルドレーヌの端正な頬に涙が流れた。人間の社会から断絶されて鉄鎖に繋がれた以上



は、ミルドレーヌのような中途半端が最も損だ。トコトン体を張って耐え抜くか、それとも、徹底的に服従と屈伏を示すか、その二つに一つしかない世界であった――。

ダイアナが房に戻され、ミシュリーヌの仮釈放決定を聞いたが、そうお、と軽く云っただけだ。ミシュリーヌの仮釈はほぼ既定の事項でもあったし、女の裏街道稼業に引張り込もうとしても、いっこうに反応のない元貴婦人に対しては、既に興味を失なっているダイアナであった。

ダイアナは一週間の重屏禁明けとは見えぬ元気で、両手の手錠を絶えず音立てる。

「一週間も穴ぐらにぶち込んで、まだ足りないんだって!! 当分の間、手錠付きよ、あたし。あのキリッとしたイヴェットさまに嵌められたの。悲しいわ。でも女囚だもん」  
口とは反対に、マゾ女囚ダイアナは嬉しげに手錠をまさぐるのだった。彼女が重屑禁を喰ったのは、保安課の男性とすれ違ったときに、「手錠かけてえ」と喚いて、縋りついたからだ。

「かけてくれた相手がスカートさまじゃあ、物足りないわね。ホホホ」  
ヴィヴィアンヌが珍らしく笑った。

「あら、あんたってスゴク理解があるのね。ホントにそうなんよ、少し欲求不満。ああ、あの保安課の大目玉さんにギリギリ捕縄かけて貰えたらなあ」

「後進国へ行くことね。仏領印度支那なんかはどうお? それこそ体中ハレあがるまで縛られちゃうわよ」

ヴィヴィアンヌは、ダイアナのようなケツタイな女もちょいちょいあると知っている。地方の裁判に行くと、女性被告人を男性職員が法廷へ連れて来ることが屢々だが、そんなときに弁護人席から至近距離で観察するに、恥かしさのせいとは見えない上気加減を全身で示す女がいるものだ。手錠や腰縄や革バンド――そんなおぞましい物をば閉廷直後の衆人環境の中で身に施されるとき、唇を喘ぎ瞳をうるませ、異様な興奮を示す女性がいるのだ。もちろん、ヴィヴィアンヌには理解できない心理であった。

ミルドレーヌが壁際で吸りあげた。彼女は後手錠で床に正座だ。二時間の空白があつては、割当完遂は所詮無理だった一昨日以来、またしても彼女は房内で反省をさせられていく。ミルドレーヌは一しきり後手を悶え、どうしようもない縛しめを鳴らせて鳴咽した。

「――ミシュリーヌはいいわねえ。もう、こんなものをかけられることないんだもの。ああ――みじめだわ。死にたい――」

ミシュリーヌは黙って膝を見詰めた。

「あら、女囚が手錠入れられて不自由な思いさせられるの、あつたりまえのことじゃないかしら」

ダイアナは両手カチャつかせて双腕をもだえ、その拘束を楽しむように髪を撫でる。

「だけど、こんなんじゃないに、もっと重くてごついのを嵌めてくれたらいいのに――」。

ラ・トロープ型の頑丈なのはいいのかしら」  
まったく風変わりな女だった。これで、「ベルト」だけはイヤだというのだから、どうなっているのか。九房あたりであばずれが嘆息した。

「あーあ、毎晩々々、こうやって壁と睨めっこ。いったい、いつになったらベッドへ腰掛けさせてくれるんだろ?」

「足腰立たなくなったら、さ。だけど、こうやってるとしみじみ考えちゃうよね、癪にさわるけどさ。もう、こんどからは悪いことをするまいってね。ウ、ウウ――」

「どうしたんだい? ああ、お尻をシコタマぶたれたんだっけ。あのエディスの阿魔め、



ほんとに胸が煮える小娘だよ。だけど、どんなにここで歯ぎしりしたって勝てやしないんだよねえ、バツジとワッパを持たせてもらってやがるから」

「お前さんも此の頃メッキリ弱気だね」

「そういうお前さんこそ何だい？ もう悪いことは致しません、てのかい。馬鹿々々しいったら。もう捕まらないっていうんなら話は分かるけど。いいかい、間違っちゃあいけないよ。あたしがお行儀よくしてるのはね、何を隠そう、あのおミシュちゃんのためなんだ。あたしが懲罰喰うとねえ、あの子ったらスゴク悲しそうにしてくれるんだもの」

「ちえッ。ウヌボレもいい加減にしろ。そうだ、おミシュちゃん、もうじきにお別れだよ。ほんとにイイ女っぷりの子だった——」

「あの子がいなくなったら、うんと荒れてやるんだ。搾衣だって穴ぐらだって持って来やがれてんだ」

ミシュリーヌが聞いたらオロオロすることだろう。

「ああ、あたしゃ、ホントに心残りさ。こんなにまで想ってんのにさ、おミシュちゃんとはたったの一度だけ、お手々握り合っただけなのよオ。ちきしょう——」

「変なことしやがって見る。ただじゃおかないよッ。あたしより先に想い遂げる気？」

「あらま、なに気を回してんの？ あたしゃね、あの子の綺麗な絹肌にあやかりたいだけなんだよ」

「そうかい。そうだろうよ、お前さんはサメ肌だからねえ。だけど、そんなザラ砥石を見せつけられたら、おミシュちゃん、きつと仰天して気絶しちゃう」

「あんないい子はもう来ないやね。気立てはいいし可愛いし——それに、あの声——。ずっと居て欲しいけど、でもさ、あんな子は早くシャバへ帰してやらなきゃ」

「大きな愛情だね。泣かせるねえ。グッと来ちゃう母性愛。見直したよ、お前さん」

床に脚折るあばずれたちは口々に讃仰を惜しまなかった。

「いまからだっていいわ。十一房へ替えてくれるなら、年季が三年延びたっていいよ」

「十一房の奴等、いったいどうなってるんだろね。あんな玉と一緒に居てて、そんな気配もありやしない。連中、ダイアナの流儀かい」

「みんなアガッちゃった女なのさ。シーッ。そろそろおミシュちゃんが笑い声を聞かせてくれる頃だよ。あと何日聞けるかしら」

「フン。ナニよ——」

と、ベッドに腰掛け組の一人が鼻を鳴らせた。ミシュリーヌの美貌を嫉視している連中だっている。女の館だから、やむを得ない。

「あんなの目障りだよ。早いとこ消えとくれってんだ」

「なにィ!!」

骨太女が眼を剝いた。

「お騒ぎでない。お尻浮かせたらたちまち捕縄だよ。反省組はお静かにね。ホラホラ床から手が離れてる」

「く、くそッ。ああ、口惜しいッ。おんなじ懲役人なの——」

骨太女たちは歯がみをし、さも口惜しげに両手を床に突いた。

「いいかい？ あのおミシュなんとかって女はね、男に捨てられまいとして横領ヤラかったんだよッ。情けない話なこと。女はね、気立と器量と肌だけじゃダメなのサ」

「じゃ、何だってヌカすンだい？ あ？ ああ、そうか。イヤらしいねえ、お前さんは。お前の話はいつだってそこへ行くんだから」

「どんなにお立派だっていうんだい。こんど謹慎房へぶち込まれたら、とっくりと拝見しようじゃないか」



身検のときには懲罰房の方角にお尻向けての四つ這いだから、その気になれば謹慎房の中から、鉄格子越しに眺められる。

「フン。お前さん、そろそろ老眼鏡が要るんだろ？　いくら遠目が利くからって、あすこからじゃどれだって同じさ。それにね、いくら見たってダメよ、これだけは。試して見なくちゃねえ。フフフ。でもおミシユは駄目だよ、ありゃ」

「こんちきしょうッ!!　験しようがないからって、云いたいことヌカしやがる」

「信用して貰えなくて残念なこと。こんど喰らい込むときには証明書を持って来るわ、何百人もの男たちの署名入りのをねッ。なんなら、シャバに出たら御亭主を一晩差し向けて見たら？　あれば、の話だけど。それっきり帰って来ないわやね。なにしろ、あたしと来たら、男の魂が宙天に飛び散るんだから。氣立てもへったくれもあるもんか——」

きわどいタンカ切るベッドの女囚は、小股の切れあがった三十女で、床に正座の四名に優越を感じるのか、自分の優秀性をまくし立てる。面壁して両手をつかえるあばずれたちは齒がみをした。

「ちきしょうッ。淫売女め」

「そんなにお立派な癖に、どうして枕探しなんかやらかしたンだい？」

「そうだとも!!　だいたい、お前の唇見たって分かるんだ。ホラもいい加減にしな」

「ま、なんとでもおいしい。能あるタカはナントやら——。お前さんたちもね、腿に力こめて膝くっつけてるがいい。ちっとは具合がよくなるわ」

「くそッ。助平女め、地獄へ行きやがれ」

「へ、ヘンだ。いいかい？　今夜、耳を澄ましてよく聴いてよね。キュキュと夜泣きするから。キュキュキュのキュウさア。ああ、自分ながら勿体なくて——」

不意にマジョーリが現われた。

「何の話してたのッ。え？」

救い難い女囚たちは押し黙った。

「そう。返事出来ないってわけね、いいわ、だいたい見当はついてるのよ。三七一号ッ。ここへ来なさい。来なさいったら」

マジョーリは手錠を取り出し、小股切れあがり女囚は鉄格子に寄りながら顔しかめた。

「あ、あッ——手錠!!　カンニンしてえ」

「ダメッ。手を出しなさい。これッ」

マジョーリはガッチリと嵌めた。

「お前も壁の花よ。正座しなさいッ。おや？」

いうことをきかないつもり？」

「——でも——担当さま。いつまで？」

「当分の間ね。壁の花は交話禁止よ。分ってるわね？　交話すると、こんどは革と鉄のマスクよ。いいね？　行きなさいッ」

「だって——さっきだって、あの連中も口利いてましたのよ。なのにあたしだけが——」

「お黙りッ」

マジョーリは床を蹴った。

「は、はい——すみません」

三七一号は鼻を吸り吸り、壁の花の仲間に混って膝を折ったのだった。溜飲を下げたあばずれたちはマジョーリの処置を讃え、自称「ミミズ三千匹」を、散々に痛めつけたことであろう。

九月半ばの朝、ミシユリーヌは本館行きを言い渡された。

「四五三号。本日、お前を本館個室へ移します。仮釈放の日まで、そこでいろいろと心身の準備をしなさい。一層、規則に忠実にね」

「はい。ありがとうございます」

ミシユリーヌの胸は希望にふくらみ、天にも昇る心地だった。自由への門の三つ目が開かれたのだ。仮釈放嘆願資格を得るのが先ず最初の門、そして次には、仮釈放審査の面接



という試練——。

ミシユリーヌは婦人看守一人々々の足許に両手をつかえ、ちよっぴりは恨めしさをこめて感謝を述べた。

「もう、ここへ舞い戻って来ちゃ駄目よ」

「はい。決してそんなことは——。いろいろとありがとうございました。マリーさま」

「お前が舞い戻って来るなんて——ねえ」

と、マジョーリが楽しげに覗き込み、肩を抱いて微笑んだ。ここ一年半の間、この女囚が胸に秘めし何事かを、聞き出そうとして諦めたマジョーリであった。

そうですとも。私のミシユリーヌさまを何だと思ってるの、マリー。失礼だわ——

イヴェットはマリーを睨んだのだった。

朝食のあと、ミシユリーヌをそばに立たせ、整列した女囚全員にジョアンヌ女史が一席ぶつた。

お前たちもまじめに服役して、早くお慈悲をかけて頂くように、とのキマリ文句だ。このときの反応によって、去り行く者の真価が分かる。全女囚の九割が別れを惜しみ、そして、祝福してくれた。骨太なあばずれたちは眼に涙を湛え、喰い入るようにミシユリーヌを見詰めるのだった。ことに、エドウィージ

ユは声を放って泣いた。

ミシユリーヌは独り残され、その前にイヴェットが晴れやかに立った。

「さ、後始末しましょうね」

「はい。あの、あなたが連れてって下さいますの？」

「そうよ。さ、脱ぎなさい」

「はい」

ミシユリーヌはゆっくりと股布のボタンをはずした。こんな屈辱的アクセサリを、こんな部分にこんな風に、みじめにも哀しく締めあげて暮らすのもお仕舞いだ。モンペを脱ぎながらミシユリーヌは涙を浮かべた。裸体のときの御定法たる番号札を右肘に結びつけた。

何枚もの毛布、枕カバー、労役衣、房内衣そして下着——それらを丸裸のまま洗う。

ミシユリーヌは屋上の物干場へ運んだ。もちろん、イヴェットも後を追う。

「いいお天気。とても気持ちのいい日ですわ。」

奥さまの今日にふさわしいお日和り」

二人きりになると、イヴェットの言葉使用と物腰は一変するのだった。そんな豹変ぶりに、ミシユリーヌは幾度となくハラハラさせられたものだ。しかし、イヴェットは、いく

ら云っても頑として受け付けず、表裏両面を使い分けて押し通して来たのであった。

「お手伝いさせて頂きたいんですけど、本館から見えますから——。すみません」

「あら、法務事務官さまが何ということを」

ミシユリーヌは毛布をロープに投げ、秋の陽を浴びて動き回った。鼻歌でも飛び出すような心地で、本館の窓なんか眼に入らない。

「あらまあ!! イヴェット。今日はお化粧してるのね。道理で、さっきからまぶしいと思ってたわ。まあ、ほんとに綺麗になって」

ミシユリーヌはしばし見惚れ、イヴェットは頬を染めた。

「お気付き下さいまして? 嬉しい。だって今日は、奥さまを手許からお離し申し上げる日ですもの」

ミシユリーヌの胸は熱くなった。

「でも、久し振りのおめかしでしょ。うまく行かなくて——ホホホ」

ミシユリーヌの眸に見る見る涙が溢れた。

若い女性二年有余の日々を、このイヴェットは化粧すら捨てて尽してくれたのだ。ひとつひとつ想い返せば、その庇護の大きさと苦心のほどが胸に泌みる。

「だから何べんも云ったじゃないの、私に遠



慮するなって。バカなイヴェットね。お肌の手入れは毎日するものよ」

ミシュリーヌは泣きながら明るく云い、そして、深い感動のままにイヴェットの手を握った。冷厳な機構の中で苦心の庇護を続けてくれたその手は、若い娘とは思えぬほどに荒れていた。

「——ありがとう、イヴェット——」

あとは言葉にならなかったが、見詰める眸は千言万句にまさっていた。

イヴェットも咽喉をふるわせ、そして、ハッとして両手を振り払った。本館の窓辺に人影を見て取ったからだ。例によって、好奇心溢れる男性職員連中が、耳打ちを伝え合っている。臨時鑑賞会なのであろう。いついかなる時に於ても、美しい女性の体というものは男にとって、見れども飽きぬ対象である。

イヴェットは絶えず動いて、奥さまの肌を窓辺の視線から遮ぎった。不埒な男どもの舌打ちが聞えるようでもあった。類い稀なる真珠の肌の鑑賞を妨げられては、男どもに見ればさぞや残念なことだったろう。

千し終えて降りる途中、ミシュリーヌは二階労役場に眸を投げた。そこでは、今日を限りの同囚たちが黙々と、拷問のように単調な

作業を切々と続けていた。

ミシュリーヌは三監最後の身検を広間で受けた。謹慎監房の鉄格子二個に、女囚の姿がこちらを向いている。ミシュリーヌとイヴェットは最後の大芝居を終え、お互いに頬赤らめて微笑み合った。

「連れて行くわ。伝票切って」

イヴェットは当直デスクのエデイスにそう云い、取り出した手錠に捕縄を結んだ。

こんな不浄な物をミシュリーヌ奥さまの御手に嵌めるのも、これでもう最後だろう。思えば、泣きたい思いをこらえてのバチ当りな所業をば、いくたび繰返したことが——。

ミシュリーヌ奥さまは生まれたままの姿で腿合せて立ち、そっと両手をそろえて待っていた。いつもながらのいじらしい風情だ。

イヴェットは環を押して開き、静かに右手にからませる。左手がゆらめいて鋼鉄環を求め、ふくよかな手首が自ら捕えられた。

ミシュリーヌの眸がちらと見上げて微笑みかけ、イヴェットは静かに歯止めを鳴らす。感無量とでもいうべき心地であった。

二人はしばし沈黙したまま肩を並べて地下通路を歩んだ。ようやく二人きりになれたいま二人の脚は自然と遅くなる。イヴェットは

ミシュリーヌをこのまま手離すに忍びない衝動に駆られた。

「奥さま。私、いつまでもおそばに居たい」

「あら。じゃ、終身刑にする気？ 勘忍して頂戴な」

「——そ、そうですわね、すみません。お体にお気をつけ遊ばして——」

「バカね。私、まだここに居るのよ。出して貰えたら、それこそいつだって逢えるじゃないの」

「そ、そうですわね。私、お役に立ちませんでしたでしょ？ 申しわけなくて——。一生懸命にやっただけですけど、力が及ばなくて——すみません、ほんとに」

「バカね」ミシュリーヌは眸をあげた。

「私、イヴェットのこと一生忘れないわ。どんなに嬉しくて心強かったことか。恩に着ます、ほんとに——心配ばかりかけて——」

「——嬉しい。そうおっしゃって頂ければ、私、もう——」

「さ、行きましょう。連れっけてくれなきゃ駄目じゃないの」

「——はい」

二人は期せずして振り返った。いま曲った角の向うには、想い出多き三監の鉄格子があ



るのだ。

「イヴェットに縛って貰うのもこれでおしまいなね」

ミシュリーヌは手錠を見詰めて呟いた。

「——はい。申しわけございません。ゆるして下さいまし」

「バカねえ」

ミシュリーヌは溜息を吐いた。

「とうとうお終いまでそんなことばかり云って通しちゃったのね。でも、ほんとに仕様のない奥さまよねえ、私。悪かったと、つくづく反省してます。ここを出して貰うわけだけど、時々は来て縛ってくれない？ でないとまたぞろ悪い女になってよ、ホホホ」

「そ、そんな意地のお悪いことばっかし。そのうちにお伺いしますわ。ええ、撲って頂きにね。私、奥さまのお尻を八回、頬っぺたを五回——ああ、それから——」

「冗談じゃないわよ。よくおぼえてること。ねえ、イヴェット。あなた、これからどうなさるの？ 弟さん、もうそろそろ卒業でしょう？ 早くいいひと見付けて結婚なさいな。これはお願いよ。あなたが自分の仕合わせを掴んでくれないと、私、もう済まなくて済まなくて——。あら、すみません。私、まだこ

んな分際なのに——。生意気な女囚ね」

ミシュリーヌは手錠を鳴らせた。

「ありがとうございます、奥さま。いずれ近いうちに辞めますわ。でも——マジョーリの顔を見ると、辞めるなんて云い出せないんですの」

「人手不足なのね。私たち悪い女が多勢いるもんだから困っちゃうわよねえ。私でよければ代りに勤めるんだけど。でも、それは金輪際駄目ね。私、もう、前科女なんですもの」

ミシュリーヌの語尾は震え、イヴェットは云うべき言葉を見出せずに黙りこんだ。

「奥さま。ここをお出ましになったらどうなさいます？ お差支えなければお洩らし下さいませんか？ すみません——」

「私？ 私ね——そうねえ、ともかく働くわよ。一生懸命に働くわ。そして——」

ミシュリーヌは一瞬眉をあげて、灰色の天井を見上げた。描く幻も、今日はことのほかに愛くるしく喜んでいた。

「私、是非ともやらなきゃならないことがあるの。きつときつとやり終らせなきゃいけないことが——」

いかにも、命をかけての悲願がミシュリーヌにはあるのだ。

「奥さま。私にお手伝いさせて下さいませんかしら？ どうせお役には立ちませんけど」

「そう云ってくれるのはほんとに嬉しいわ、イヴェット。でもね、これだけは誰にも言えないことなの。独りでやらなきゃ。いえ、神さまのお力だけはお借りしなきゃいけないけどね。イヴェットも祈ってよね。あら、心配は要らないのよ。決して悪いことじゃないんだから——。それよりもねえ、イヴェット。心配かける私が居なくなったら、あなた、もっともっと綺麗になるわ、きつと」

イヴェットは世にも恨めしげな眸を力なく伏せ、握る捕縄を持ち直した。本館への階段が見えて来たからであった。

そのままの姿で刑務課長コリンヌの注意を受け、ミシュリーヌは準備室で引渡された。

「四五三号。ああ、この子だね、噂も高き名花一輪は」

本館付きの婦人看守クララは女囚を眺めて云い、穏やかな顔に好意と愛情を浮かべた。「なるほどねえ。さっき、殿方たちが四階へ集まっていたんだけど、これじゃ無理ないわねえ。あらま、御本人は知らなかったのね。ゴメンゴメン」

ミシュリーヌは屋上でのことに思い当り、



見る見る全身を染めた。

「ねえ、クララ。あんなの取締まれないの？  
窃視罪ってのがある筈だわ」

イヴェットは憤慨をぶちまけ、クララは舌を出し、そして、ミシュリーヌの手錠は、心こめて静かにはずされた。

ミシュリーヌは番号札を肘から解き、両手に持ってじっと見詰めた。本館へ移されればもうこの札をぶら下げなくてもいいと聞いている。なんでもないようだが、この番号札は悲しかった。毎日、朝晩二回、号令とともに赤裸かになるのさえ哀しいのに、最後の一枚をぐわぐわと脱ぐやいなや、我れと我が右肘に左手だけで結びつけさせられる。不器用女は結べなくて叱り飛ばされるし、締め加減がゆるくてずり落ちでもしたら大目玉だ。通称

「荷札」と蔑称されているこの番号札と、獄衣に縫いつけた番号布とは、女囚が精魂こめて扱わせて頂かねばならないとされているもので、手際よく結べないのはタルンでいる証拠だとキメつけられる。ゴム紐にしてやればいいものを、古捕縄の切れ端——それも、意地悪く短か目と来ているのだ。

コリンヌ課長着任後、しばらくして復活されたこのしきたりは、最初のうちはもとより

のこと、慣れて来ても、時にはホロリと哀しくなつて涙が出たものだ。

イヴェットが初めてミシュリーヌにビンタを見舞ったのも、この「荷札」の故だった。朝の全裸体操のとき、打ち振った右肘から床にずり落ち、それだけならまだしも、ミシュリーヌの素足が踏みつけてしまったのだ。ベルデイーヌの革ロープ鞭にくらべるならば——。

イヴェットは力萎える腕を必死にふりあげて、珠玉とも思ふかんばせに平手打ちを与えたのであった。それから既に一年と半——。「寄越しなさい。もう——お前——には用のない物なんだから」

イヴェットは静かに番号札を取りあげた。ミシュリーヌ奥さまを「お前」呼ばわりするのもこれが最後だろう。

「ボンヤリしてないで御挨拶しなさい」

「——はい。——すみません」

ミシュリーヌは床に両脚を折ろうとし、クララが腕を抱え上げた。

「いいんだよ、もう。そんなことしなくてもいいの。世話焼かせないでね」

「まあ!! あの一——よろしくお願い申しあげます。あの、クララさま——でしたわね?」  
「そうよ。私の名、いつおぼえたのかしら。ほんとにいい子だね。さ、あとはもう云わなくていいわ。これを着なさい」  
「はい。あの一——体をお改めにはなりませんの?」

哀しい習わしを身につけた女囚は、戸惑った。その眸は早やワンピース服に吸い着く。「ホホホ。そんなはしたないこととはもうお別れなのよ。そんな面倒は見切れないわよ」

ミシュリーヌは瞼を熱くしながら下着をつけ、ふるえる手でワンピースをかぶった。洗いざらしながらも、すべて清潔で爽やかだ。赤縞のない青灰色の木綿ワンピースは、ミシュリーヌにとっては夜会服のようにも思われた。身に打たれた囚人番号はまだ消えないとはいえ、まとう囚衣には、あのバカでかい番号布は既になかった。右袖の小さい数字は、十歩離れば見えないことだろう。

ミシュリーヌは灰色ズック靴の紐を結び、瞼押えつつ立ちあがり、金髪撫でつけてイヴェットに笑みかけた。

「手間取ってしまつてすみません。でも、あんまり嬉しいものですから——」



ミシュリーヌはクララに詫び、さも嬉しげにニコリ笑った。彼女の心からの笑顔を見れば、大抵の人間ならハートを柔らかく撫でられて仕舞う。クララも眼を細めた。

「——おねがいます——」

ミシュリーヌはそっと両手を差し出した。

クララは両腕をひろげて肩をすくめる。

「まあ!! じゃ、もう——嬉しいッ」

「おやおやまた泣いてる。バカナ子だね。さ  
いいから涙を拭いて笑ったらどう? ポケッ  
トを見てごらん。そらね」

たった一つの胸のポケットには、おお、真  
白なハンカチが入っていた。

「じゃ、連れて行くわね。御苦労さま」

ミシュリーヌはハンカチを手に、深々とイ  
ヴェットに頭を垂れ、凝然と見送るイヴェッ  
トの頬が一筋光ったのだった。

三階の個室の扉の前で、またもミシュリー  
ヌは眸をうるませた。鉄格子はおろか、真鍮  
のノブと蝶番以外は金属の一片すらもない檜  
の扉——屈辱的な覗き窓もなく、そして、小  
さな札に記されている文字は「ミシュリーヌ  
・ダリユー」四五三の数字ではなかった。

「ここよ。入ってごらん」

おずおずする足先を一步踏み入れて、ミシ

ュリーヌは眼をみはった。

クリーム色の壁にグリーン天井、市松模  
様の床は柔らかく光り、ベッドに机に椅子が  
一つずつ——。物入れ兼用の机の上には化粧  
鏡台があった。隅には洗面台と便器が真白く  
輝やき、純白のタオルとトイレットペーパー  
が壁から微笑んでいるではないか。

「——ここで——ここで過ごさせて頂けま  
すの!! これが私のお部屋?」

女囚は床に坐り込み、見通すわが眼を疑う  
心地だった。

話には聞いていたものの、まさかこんなに  
まで立派とは想像も出来なかったのだ。これ  
じゃ、裏通りのホテルなんかは顔負けの設備  
であった。

「そこにスリッパがあるだろう。穿き替えて  
お靴は廊下にそろえておくのよ」

「はい——」クララは机の抽出しを開けた。

「ここへ来て。これがお寝巻、これが下着の  
着替え——それから聖書。むろん、お前はカ  
トリックね? 新教徒じゃないわよね」

ミシュリーヌは、そのひとつひとつに臉を  
熱くした。

「それからね、これは日記帳よ。今日から始  
めなさい。何を書いたっていいのよ。あ、電

球、切れてたんじゃなかったかしら」

ピンクのシェードが柔らかな光を投げた。

「大丈夫ね。それから、と——。さ、ミシ  
ュリーヌ。これを使いなさい」

名を呼ばれた女囚は耳を疑い、クララ婦人  
看守が持つ物を一目見て、高鳴る胸をひしと  
抱いた。それは、化粧品を納めた小箱であっ  
た。クララは、透明な蓋を開いた。

「なにぶん予算が予算でしょ。だから、ほん  
の身だしなみ程度のものなのよ。さ、坐りな  
さい。あら、バカね、椅子に掛けるのよ」

クララは腕を抱きあげてやり、女囚は操り  
人形のように椅子へ崩折れた。

「鏡に向いて。どう? シワがふえてる?  
なあに、すぐに綺麗になるわ。さ、これ」

ミシュリーヌは我が顔を見詰め、そして、  
その鼻先に延びたクララの指を凝視した。

その指先には金色の小さな筒が、そして、  
おお、その筒の先端には、紅いルージュが鮮  
やかに覗いていた。

ミシュリーヌは感激に震える手で唇を塗っ  
た。小箱の中にはガーゼもあった。

「ひときわ可愛くなったわね。かじりたいく  
らい。さ、ひとまず口紅だけにして、あとは  
ゆっくりね。口紅だけで匂い立つようよ、ミ



「ジュリーヌは。ヘアピンも十本あるからね」

女囚はルージュを握り締めたまま鏡をひたと見詰め、打ち仰いでニコリ笑い、丁寧に小箱の蓋を閉じて起ち上がった。

「スイッチはここよ。勿体ないから消しましょうね。カーテンをあけなさい」

ミシュリーヌは窓に寄り、窓外を一目見て眸を伏せた。窓のそこには、花模様のカーテンの向うには、やっぱり、頑丈そのものの鉄格子が黒々と光っていた。

「朝は六時。ブザーが鳴るわ。用があるときにはそのボタンを押しなさい。じゃ、今日はお部屋でゆっくりね。お仕事は明日から」

「はい。あの——」

「マゴつくことないじゃないの。ここはミシュリーヌのお部屋。好きなようにおし。だけど、昼間からベッドに寝るのはお行儀がよくないわねえ」

「はい。あの——窓をもっと開きたいんですけど。いけません？」

「何度云わせる気？　ここはお前のお部屋」

「は、はい、すみません——」

「一言だけ云っとくわ、お仕事なものね」

クララはきびしい表情を浮かべた。

「扉にだけは触っちゃ駄目よ。服装はいつも

キチンとして。名を呼ばれたら、すぐに返事して立つのよ。分った？」

「はい——」

「体罰だけは加えさせないでよね。いい？」

クララは室内をひとわり見回し、廊下に出て扉を閉めた。カチリと鳴ったあたり——櫛の扉の内側には、やはりノブはなかった。

ミシュリーヌは永いこと床に坐り込み、やっと起きて椅子に掛け、おそろおそろ背もたれによりかかった。彼女は、そのまま茫然として午前中を過ごしたのだった。

カチリと扉が開き、細目に開いてからノックが聞こえた。ミシュリーヌは弾かれたように立ち上がる。

クララの制服をすり抜けて、娘が盆を運び込んだ。上目使いでじっと見詰める。

「ミシュリーヌさんね？　あたし、スジイ。」

今日はお客さま扱いよ。ま、綺麗なひと!!」

エプロン姿も甲斐々々しいスジイは素直に讃え、盆をテーブルにおいた。

「あら、まだ口紅だけなのね。アキレタ」

「ま、ホント。あたしなんか、一日中お化粧して暮したわ、ねえ、クララさま」

「妙なことを威張るんじゃないよ。ま、ミシュリーヌは口紅だけで沢山よねえ」

「ほんとにそうだわ」

ソバカスだらけのスジイは羨ましそうだった。彼女はミシュリーヌよりも背が低い。

「じゃ、ゆっくり喰べなさい。スジイも一緒に居て、いろいろ教えてあげるんだね。ベッドに腰おろしていいよ。三十分して来るわ」

スジイは個室女囚の暮らしを話した。

「やっぱり身檢はあるのね」

「そりゃあるわよ。ただ四つ這わなくていいだけよ。でも、やはりそとで働いて帰ったときにはきびしいわ。ね、ね、それ、すこしくれない？」

娘はジャガイモの塩茹をせがむ。ミシュリーヌは微笑んで、肉片を口に入れてやった。

昼食は済ましたといいつつも食欲旺盛だ。

「あら!!　じゃ、ミシュリーヌもメグレ警部さんに調べて貰ったのね。あたしもよ」

スジイは常習窃盗の娘——貧しさの故の小泥棒なのだが、度重なっては実刑も仕方がない。彼女は、かのシュザンヌ婦警が警視庁へ

着任した春、検挙コンクールに張り切ったセシリア婦警にシヨ引かれたのだった。

「あたしね、あの婦警さんを恨んだわ。でもさ、いまじゃ、よかったと感謝してるの。だって、こんな暮らしさせて貰えるなら、ずっ



とここに居たいんだもん」

「まあ!! 映画もお芝居も見られなくても? 好きなドレスを着られなくていいの? 恋人だって欲しいんじゃないかって?」

「あんたには分からないのよ。スラム街に生まれたてでなし子の醜いチビ娘ってものがどんなか。ほんとの貧乏ってものがどんな風なものなのか、腐っても鯛のミシユリーヌさんには到底分かりっこないわよ。お芝居? ドレス? 恋人だって? あーあ」

スジイは嘆息して泌々と云った。

「お水だけ飲んで暮らしたことある? あたし、ここへ連れて来られたときにはヒョロヒョロだったわ。腿なんかネギみたいだった。それがどうお、いまじゃ——ホラね」

裾まくって示すスジイの腿は小麦色にふくらみがあつた。

「お乳だって——もう、男の子が声かけてくられても逃げ出さなくていいくらい。見る?」

ミシユリーヌは深々と微笑んだ。

「見てよ、ねッ」

どうでも見せたいらしい。

「まあ!! 見惚れるわ。さ、もう納って。でも、スジイ。ここに居たんじゃ男の子と逢えないじゃないの。折角、仮釈放して頂けるん

でしょ? 有難く思って感謝しなきゃ。いくら貧乏でも、番号で呼ばれて暮らすよりずっとましよ。ここに居る間は人間じゃないわ」

「あら、あたし仮釈放じゃないわ。満期よ。あと三週間」

「そうお。なら、どうしたった追い出されるわね、ホホホ。出たくないなんて強がるのはよしましよ」

「あら、ホントよ。あたし一監に居たんだけど、スラム街の暮らしよりもなんぼましだったか。シャワーは毎日だし、朝昼晩と御馳走は出るし、お仕事だって楽なものよ。シャバに居たときには、もっともっと辛らい仕事をしたわ、小さいときから。背骨がミシミシいうくらい——。ショーウィンドウに並んでるお菓子をみて泣いたわ。靴下なんか穿いたことなかった。映画のポスターで見た女優さんが綺麗な耳飾りしてたわ。欲しくて欲しくて夜店で盗んだの。二フランの札がついてた。十七のときだったけど、それが初めてよ」

「スジイ。なぜ働かなかったの? 探せばお仕事がある筈よ」

「誰でも、そういうわ。若い検事さんもそう云ったわ。未成年のときに感化院へ入れて、勤労の尊さを教えるべきだった、少女の微罪

故に手ぬるい処置を繰返したのは本人のためによくなかった——裁判官もそう云ったわ。どう? よくおぼえてるでしょ? でもね、ふしだらな母親だけの貧相な娘よ、字も碌に書けないのよ、そんな娘にどんな勤め口があつて? 仕事らしい仕事には保証人てものが要るのよ」

スジイの身の上話は永々と続き、ミシユリーヌは暗然と聞き入った。

「あたし、小母さんが好きよ、なんだか一目見て大好きになったわ。綺麗なひとは大嫌いだけど、小母さんは別よ」

小母さんと呼ばれて、ミシユリーヌは眸を伏せた。やはり、二年余の呻吟が顔に現われているのだろうか——。

「その小母さんが折角そう云ってくれるわけだけど、でもあたし、なんならずっと監舎で暮してもいいって思ってたの。ともかく、ひもじい思いだけはしなくて済むもん。ぶたれるぐらい平気だわ」

ミシユリーヌは娘の顔を眺め、体を見やって、そぞろ胸を痛くした。貧相だった体が勿怪の幸いというか、悪い男の毒牙にかからなかっただけがせめてもの救いであろうか。

「——だけど、お陰でアバラ骨も見えなくな



「ったし、これからは以前みたいなことはないわよね。刺繍も覚えたし、ミシンだってね」  
「そうよ。元気でやり直すことね」

ミシュリーヌはそつと溜息を洩らした。前科女の烙印を捺されたことに思い及ばない娘が憫れであった。

「そうだわ、結婚してくれる男がいるかも知れないわね!! 小母さんと話してるとなんだか——。あたし、やっぱり出るわ、ここ。あら、残したの? 小母さん。頂戴ね。勿体ないわ。毎日コーヒー飲めるなんて」

貧しさの泌みついた娘は眸を輝やかせて、ミシュリーヌ飲み残しの薄いコーヒーをおいしそうに飲み干すのだった——。

ミシュリーヌとスジイは、二階の保管庫と一階の準備室との間を何回も往復した、口紅を塗れる身になってから、かれこれ二週間が過ぎていた。準備室には十二名の女囚たちが移送準備——その連中の私物運びを命じられた二人であった。

「——ね、どこへ行くの?」

ミシュリーヌは声をひそめて三五八号に訊ねた。三五八号は例の無理心中娘——ミシュリーヌを恨めしげに見て、赤裸かの胸を悲しげに抱く。身検も済み、網袋の中身の点検に

制服たちは忙がしい。

「——リヨン。あなたはいいわねえ」

三五八号は涙ぐみ、右肘の番号札を哀しくまさぐった。同じ日に面接審査を受けた二人だったが、三五八号は却下されて、あと一年半ほどを勤め上げねばならないのだ。

「美容術を習いに行くの。覚悟を決めたわ」  
無理心中娘は淋しく自嘲し、ミシュリーヌは網袋を集め始めた。

美容術習得の話はミシュリーヌも知っている。十日ほど前から希望者を調べ、適格の有無を洗っているということだった。リヨン婦人刑務所の美容術教育は、どうやら成功らしい。コリンヌの口惜しがり方は、想像に余りある次第で、おのが発案の所外就労を尻押ししてくれなかったとて、ことある度に本省に噛みついて今日此頃だった。

「そうお。やっぱり、行くのね」

と、残念そうにスジイが囁いた。こんなスジイみたいな娘にこそ、すぐに飯の種になる技術を習得させてやるべきだ。スジイは刑期が短か過ぎたのだ。もう一年ほど重くしてやった方が慈悲であったかも知れぬ。しかし、浮世のことは、すべてタイミングの運不運で決まるのだ。

コリンヌがやって来て、仏頂面でお説教した。一ダースともなれば、課長デスクの前は手狭だ。お説教は紋切型で短かく。公平に見て、意義深い門出にしては物足りなかった。「……では、覚悟を新たにしていきなさい。むこうじゃむこうの流儀があるかも知れないけど、ここで私たちが叩き込んであげた心構え——それさえ肝に銘じておれば、大過はない筈よ。やる以上は、むこうの連中に負けなようにして頂戴。いいわねッ」

丸裸かが十二個、横一例に並んで床に両手つかえたまま、一斉に「はい——」という。「折角、私のもとで罪の償いをしているお前たちだから、いまさら手離したくはありません。おしまいまで見届けたいと思ってます。しかし、お前たちのために思えばこそ、今日限り遠くへやるのです——」

ミシュリーヌたちは、保安課から運んで来た物を台上に並べた。分厚い革の腰バンド、頑丈な護送用手錠、太く長いロープ——ミシュリーヌは顔をそむけて音を忍ばせた。

しかし、床の丸裸たちは忽ち気付いた。スジイが遠慮もなく響かせるからだ。シュンとした気配が流れ、大小さまざまな乳房が揺れた。覚悟はしているものの、ひよっとしたら



と祈っていたのだろう。

「——仮釈放審査委員会とは別に、独自の観点から選出されたお前たちです。途中、不心得なことをする者はいないと信じます。ただ、私たちの立場上、やはり体に鍵をかけてあげねばなりません。大きな慈悲なのよ。長い道中、窮屈だろうし、あんまり感心しない。ザマが人目につくことだろうけど、我儘なさい。じゃ、担当さんたちの手を焼かせない」

ようにね。シャバのひとたちの前で叱られたり撲られたりは、お前たちも悲しいだろうし私たちもイヤだものね。分ったね？」

コリンヌはサッサと立ち去った。

「——あの、私たちはもう退ってもいいですかしら？」

「ちょっと待って。あとを掃除しなきゃ」

事務服の娘は、書類をそろえて整理しながらミシユリーヌに命じて、顔も向けない。

山原清子  
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

一部一〇〇〇円  
略号 八美7V

全部最近撮影の力作！

未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フオトの結集版（思わず息をのむ凄いポーズばかり満載）

このグラビア写真集の写真を撮影するため、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフオトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フオトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしております。んから直接発行所へお申込み願います。△内容▽全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

「早くするんだよッ。車が待ってんだから」

保安課の婦人看守マーゴットがきめつけ、

それでも、なんとなく御機嫌がいい。保安課の二枚目男たちが同行する筈だし、出張旅費は予想以上にタツプリ出たし、リヨンには姉夫婦もいる。化粧も念入りの彼女だった。

移送女囚たちはいそいそと身にまとい、少し哀しげにシワを引張った。ハイヒールを指でこすっていたのがマリーにお尻を叩かれ、あわてて素足を突込む。

マーゴットに比べてマリーは不機嫌であった。出張旅費なんかはどうでもいい彼女であるし、リヨン在の幼馴染みを訪ねるべく私服着用を希望してそれだけはよしてよ、とコリンヌに拒まれた故。

「誰か、私の荷物を持ってくれない？」と、マリーは包みを示す。お目当ての幼馴染みは目下独身の男、その彼と逢える場合に備えてのドレス一式が包んである。

「——あの、マリーさま。私が——はい」三五八号が上目使いに呟いた。

「そう。じゃ頼むわ。ショルダーバッグに押し込むとシワがついちゃうものね」無理心中娘のスーツケースはさらにふくれあがった。





新幹線ひかり28号は、予定より十数分おくられて東京駅に到着した。米原・関が原周辺の積雪による遅延であった。

ホームで、三号車の私を逸早く発見した賀山氏（過去数度、東京のK氏として登場されている）が手を振っている。

「とうとう引っ張り出しましたね」

S Mカメラ・ハント

緊縛映画の人気スター

辰巳典子の巻

## 陶酔をよぶひとの名は

辻村 隆

彼は嬉しそうに笑って私の手を握った。

「あなたの熱意に負けましたよ。辰巳典子さんを紹介するといわれちゃ、いくら腰の重い私でも、じっとしてはおられないものね。それでうまく連絡はついたの？」

「すべてO・Kです。だって辻村さんを東京まで引っ張り出しておいて、ハント出来なかったとなると、私の顔が立たないですよ」

新幹線のホームを歩きながら、挨拶もそこ

そこに、話は早くも主題に走っている。

「鞆、重そうですね。こちらで準備してあるんですよ。一体何が入っているんです」  
例の愛用の黒鞆に彼は眼をやって、笑いを含んで訊ねる。

「カメラ二台、ストロボ二つ、縄が二本、参考のフォトや文献、三脚、その他といったところ。家内からの土産を、この中から抜いて持っていただと軽くなるんだけど」



「おやおや、済みませんねえ」

午後五時半の東京の玄関には既に暮れなずみ、ラッシュアワーに掛けて、構内の混雑は一入激しかった。

「でも辻村さん、仲々大変でしたよ。今日一日、仕事をおっぼり出して、辰巳典子の立廻り先を追っ掛け廻し、やっと掴まえました。何しろ彼女、近頃は映画に舞台に挨拶にとす

ごく売れっ娘ですからねえ。いやもう一汗かきましたよ」

「何とお礼いっていいやら……。でも私もね私なりに辰巳典子さんのイメージを濃くするため、一昨日京都まで出掛けて行って、一人で見るのも何だから、話相手に徳永昭三を呼び出し、二人してわざわざ彼女の出演している映画を見てきたのですよ。三本立のうち、二本までに彼女、出演しているんだから、すごいハッスル振りです」

「へえ、どんな映画？」

「『密通刑罰史』と『後家ごろし』もとも『後家ごろし』はおピンク専門だから半分許り見て、あと一本は捨てました。次週も『夜の百態』というのに出演していましたよ」

私達は大声で喋りながら、人波に揉まれて駅前の広場へ出る。彼の運転する外車にのり込んで、林立するビルの谷間を小刻みに走ってゆく。鍛冶橋の畔に、SM劇で名を売出したカジバシ座が見えてくる。山田風太郎原作の『妖異金瓶梅』から潤色した、どぎついSM劇が、今宵も上演されている。車を舗道に添わせて止め、私は吸込むように、その風景を見る。出演者の名を連ねた看板の中に、一本の線を劃して、辰巳典子の名が見えてい

る。眼を凝らして見ると、一月十五日より出演とある。いよいよここへも進出したのであろうか。

「東京滞在中、お暇があったら覗いてゆかれたいですよ。辻村さんの御参考になるかも知れませんよ。しかし困っちゃったなあ。あなたにカジバシ座をお見せするために左折しちゃった。仕方がない。ぐるりと一廻りしましょう。何しろ全然右折が出来ませんのでね」

賀山芳男氏は、カジバシ座の全貌を私に見せるため、直進する筈を左折したのである。

どこをどう走っているのか、私には全然見当がつかない。ただ、ネオンとビルの灯と、車の洪水が、私の周辺をめまぐるしく取り巻いているだけである。気がつけば、車はいつの間にか、とてつもなく大きい、地下の有料駐車場に吸い込まれていた。

「銀座を歩きましょう、すぐだから」

「えッ、何が……」

「辰巳典子が実演に出ているんですよ。その実演の劇場が、ここから五分許しのところなんです」

賀山氏は着々と、既に計画通りの行動に足を運んでいた。私は唯、彼について、膨れ上





った黒靴一つを提げて、ついで行けばよかったのである。

銀座の三原橋。その橋下は、今、劇場や飲食店に変貌している。橋のもとをぐるりと降ると、恰度橋下に地球座があった。ピンク映画上映館独特のドギツイ広告が、否応なく眼に沁みわたる。

その実演の看板を私はゆっくり、脳裡にたたき込むように眺めた。

一月三日―八日 (たたきと縛り)

一月九日―十三日 (婦女暴行奇談)

一月十六日―廿一日 (残虐生娘日記)

執れも辰巳典子主演で、外に、大月礼子、磯田かおり、国分二郎、泉田洋志といったメンバーである。

では、今日は(婦女暴行奇談)の初日というわけか。

「一日二回公演で、渋谷の地球座とかけもちだから、日に四回出るらしいですが、かなりキツイスケジュールですよ」

賀山氏はチャンと調べてある。私はカメラとストロボをとり出して、辰巳典子出演のこの劇場の風景を、数枚スナップした。

「楽屋できいてきたのですが、彼女は未だ来ていません。ここですばらく待ってみましょ

うか。兎も角顔を見ないことには話になりませんからね。私だって電話ばかりの交渉なんだから」

社長稼業の彼が、私のハントの為に割いた貴重な時間、それこそ並大抵ではなかったに違いない。

銀座の舗道から十数段下った、三原橋の下、トンネルのような通路は、吹き

抜ける風でつめたかった。通路の片側は地球座が占拠し、向い側は、小さなおでん屋や、寿司屋、スタンドがひしめいて並んでいた。

実演は四、五十分らしい。併映の三本立の映画も、意欲をそそるものであった。オーバ―の襟を立て乍ら、私達二人は、待つ間の所在なさに、スチールを覗く。

『続、日本暴行暗黒史 暴虐魔』

若松孝二監督の意欲作で、小平義雄をもじった丸木戸(マルキド・サドにちなむ名か)義雄の例の婦女暴行殺人の一件である。おなじみに林美樹など使っているが、アメリカ映画の『コレクター』にヒントを得たらしい。全裸の女性六人をズラリと並べたシーンだけ



カラーになっているそうで、これらの洞くつの死体美人は、単なるピンク女優ではなく、劇団状況劇場とか、劇団発見の会などの、新劇の若い女優さんを起用しているところが、若松監督らしいミソである。

『フリーセックス』松井康子、浜村久美。

『肉風呂』泉ユリ、祝真理らと一緒に、ここにも辰巳典子が名を列ねている。時間が許すなれば、覗いてみたい番組であった。

その外私の知っているだけでも前記の『密通刑罰史』『後家ごろし』『肉風呂』『夜の百態』に加えて『ダブル・ドッキング』『悪道魔十年』『多情な乳液』『奴隷妻』『お姉ちゃん蒸発』などがある。兎も角デビュー以





物語は、現代、大正時代、江戸時代の三部に分れていて、彼女は大正時代での主役を演じていた。

肺病で臥す夫人（火鳥こずえ）のいる陸軍大尉（里見孝二）の家に奉公に上った女中（辰巳典子）が、大尉に犯されて妊娠する。従卒に相談している現場を大尉が発見して、二人を不義者ときめつける。思い余った女中は胎児を我が手で始末しようと、火箸を突き立て果ては首を吊って自から命を絶つといった、軍人が幅をきかせた当時の悲劇である。

残念乍ら辰巳典子の緊縛は、予想に反してなかったが、その最後のシーンは、それを補って余りあった。中腰になった彼女が、火桶の中の火箸を掴むと、股を抜けて、ぐざりと突き込む。どす黒い鮮血が、パツと彼女の股を濡らして飛び散る。彼女はその場に悶絶してゆく。その翌朝、庭先の大枝に首を吊った彼女の、乱れた裾から露わに現われた太腿に斑々と血がこびりついて、両足はダラリと宙にたれ下り、徐々にアップしていった画面に、恨めしげに首を溢った凄惨な屍体がうつってくる。こんなシーンがカラーではなく、例によって犯されるシーンがパトカラーになっている。辰巳典子の、被虐に堪えかねて

自から死を選んでいった、哀れな女性のラストシーンが、強烈な印象を私に植えつけた。

回想から我に還って時計を覗くと、既に午後七時半を指していた。実演の最終回は七時四十五分からの筈である。

その時、階段を下って来た、数人の芸能人らしき群が、楽屋入口に佇む私達に近づいてくる。かけもちゆえの、舞台化粧その俤の男女の中に、辰巳典子の姿はなかった。

「彼女どっしたんでしょね、おかしいな。」

楽屋入りを見落す筈はないんですがね」

賀山氏は稍々不安げな声で、それでも尚も確かめるように、楽屋口に首をつっこんで、広くもない楽屋中を見廻していた。

「可怪しいな、変ですね。彼女主演なんだから、来ない筈ないんですよ。あっ来た来た」パツと彼の声が勢いづく。

「畜生——何だい、えらく気を揉ませやがってさ」

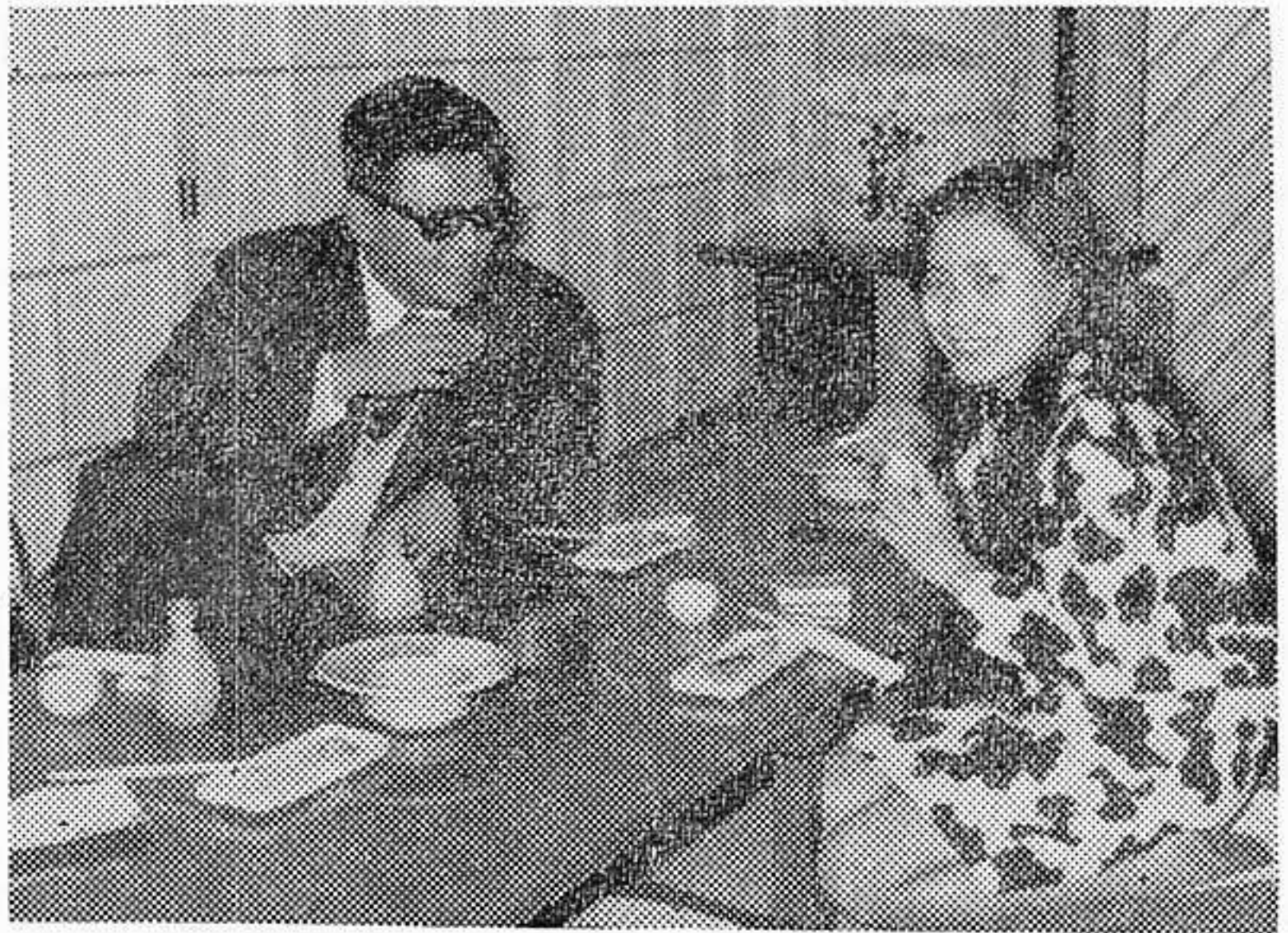
彼の視線を追って私の胸は弾み出した。その視線の彼方に、小柄な、髪を長く垂らした娘が一人、小走りに人波を縫うて近づいてくる。急がねばならぬのだろう。気がせいてくるのか、賀山氏の存在にも気がつかず、楽屋へかけこもうとしている。

来十カ月そこそこにして、この躍進ぶりは実にすさまじいものがあった。三本立を見る時必ずといってもよい程、一本ぐらいは彼女の出演をみかけるに違いない。

夜風がひしひしと体にこたえて来た。彼女を待ちももうける辛さで、暖房のよくきいた喫茶へも入れない。私以上に賀山氏は氣を使っているに違いなかった。足踏みし乍ら、巨軀をゆすって、実演の看板をにらみつけるようにしている。

『暴虐魔』の暴行のシーンにダブって一昨日見た『密通刑罰史』の一コマがありありと私の脳裡に蘇がえてきた。





「典子ちゃん」

女性向きのソフトな声で、賀山氏は彼女の背をポンと叩く。

「あらッ、賀山さん」

「すぐく待たせるじゃないの。関西から辻村さんが出てこられて、先程からお待ち兼ねだよ。この人、辻村さん」

「辻村です」

照れ気味で私は軽く会釈する。

「まあ、気がつかないで御免なさい。私、辰巳です。どうぞよろしく」

彼女はキラキラとよく光る瞳で、まじまじと私をみつめて頭を下げた。

「時間がないんだろ。じゃああとで、この場所ですってよ」

「ええ」

そそくさと彼女は駆け込んでいった。余りにも慌ただしい初の出会いであった。

「どうでしょう辻村さん。四十分少しだけど、彼女の実演を見てゆきますか」

「ええ、勿論ですとも。でないと話になりませんものね」

私達二人は、たった四十分のこのショウを見るために、一人四百円の入場料を支払って劇場の正面から入る。三本立の映画と実演なら、決して高くはない料金だが、唯、ショウのみの小一時間にしては、一寸痛い負担であった。

橋の真下の劇場らしく、地球座は鰻の寝床の様に細長くて幅がない。劇場は男の体臭が充満して、立見すらある盛況さであった。ピンク映画の隆盛さを、まざまざとこの劇場の

入りで見せつけられた思いであった。しかしこの中の何パーセントかは、辰巳典子のナマの姿見たさの観客であったかも知れない。運よく席の中位に並んで坐れて、私達は開幕前の数分を、彼女の噂をし乍ら待つ。

「彼女、実演というか、こんな舞台でのお芝居は始めてなんですよ」

「えらいですよ。何でも当って砕ける式にやってゆくんですからね」

「あのちっぽけな体の、どこにそんなファイトがあるのかと驚きますよ」

「だけど、よく識り合えたですね。どんな手蔓で？」

「私はこう見えたって、案外執念深くてね。」

この人とは思ったら、とことんまであらゆるコネをたぐってねばってゆくんですよ。ピンクスターとの交際の最初は、実は鬼六さんの『花と蛇』の静子夫人役の紫千鶴さんが最初なんです。何しろ『花と蛇』の大ファンだったものだから、もう静子夫人に会いたくて、会いたくて。それであらゆるツテを通して、やっと紫千鶴さんに対面するところまで漕ぎつけたのです。いつか一昨年の夏でしたか、辻村さんに彼女を紹介しようといった事あったでしょう。あの時なんですよ。でも彼女そ



の後映画から足を洗っちゃったので、遂々機会をなくしちゃいましたが、そんなルートで、今度も辰巳典子に会いたくてたまらなくなり遂々目的を果たしたという寸法です」

「そのコンが羨やましいですね。勿論運もあるけど——」

「鈍はないですよ。急、急ばかり、はやりにはやりますね」

人生、運、鈍、根というのが賀山氏の場合、鈍は当て嵌らない様である。

「彼女には私のこと、何んといってあるんですか」

「奇クの記者とってありますよ。奇クを数冊彼女に見せましたらね、少し辻村さんに興味もったようです」

「私の上京の目的が辰巳典子さんなんですかね。彼女をハント出来たら、もう東京に思い残すことはないんですものね。でもよかった、上京して——」

開幕のベルが鳴り始め、騒々しかった場内は静かになった。場内放送が、配役を告げている。きくともなく、私達の会話を傍聴していた隣席の若い青年が、改めて私の顔をまじまじとのぞき込むようにした。私はカメラをそっと構えた。

× × ×

(婦女暴行奇談・誘拐篇——全八景)

鳴滝三郎 演出

辰巳典子の扮するBGが、信州の山奥のある別荘に誘拐されて、捕われているという設定である。FBIまがいの女頭目(大月礼



子)と、ナポロオン・ソロならぬ、ブンガワソ・ソロという輩下の男と、その情婦が現われ、辰巳典子をパンティ一枚の裸にすると、輩下が鞭をふるう。彼女は裸をさらした俚、逃れて客席へかけ込み通路を走る。逃げ戻ってきて輩下と絡むところが、恰度私達二人の席の眼前である。彼女が私達二人の存在を承知しての演出なら心憎いが、そうではないらしく実に偶然で、賀山氏がかなりの声で、ノリちゃん! と呼んだが気がつかなかった。輩下は典子をつかまえると、サービスにキャビネ判のヌードフォトを十数枚辺りにバラ撒いていった。運よくその一枚を賀山氏が拾って私に呉れた。

この典子のBGをおとりに、外国へ出かけて、スパイしてきた同じ会社の青年をおびきよせて、フィルムを手に入れようとする魂胆である。

青年は捕えられ、典子と二人どちらも手錠をはめられて、長い鎖で二人の手と手が、つながれている。女頭目や情婦の、からみのお色気シーンが混り、典子の鞭打ちがある。やがて、青年は典子に好意を持ち始める。二人は逃げようと画策し、情婦の手からピストルを奪い、全裸の典子に衣服をつけさせる為、





情婦の服を剥いで彼女を裸にする。しかし逃走は失敗して再び捕えられ、青年と典子の二人きりの愛情の生活が始まる。裸の典子と青年の愛慾のシーン。

十数日経って、青年がスパイでなかったことが判り、女頭目は二人に眼隠しして鞆一杯の札束を謝礼において去ってゆく。このセリフのやりとりが一寸ミソである。女頭目は眼

隠した二人に向って、

女頭目「あなた達のスパイの嫌疑は晴れました。長い間監禁したお詫びのしるしにこれをあげますよ」

女頭目は青年の膝に、札束のぎっしりつまった鞆をおく。

青年「ああ、俺は助かった。典子ちゃん、これで結婚出来るよ」

典子「その鞆の中にいくら入っているのかしら」

女頭目らが去ったあと、青年は意外な事実を知った。

青年「君はボクを欺していたな。みんな最初からお芝居だったのだ」

典子「どうして、そんなこと言うの。私はあなたを愛していますわ」

青年「いや、お芝居だ。君がハダカになり、手錠をはめられたり、鞭で叩かれたのも、みんなお芝居なのだ」

ここが一寸ヒネってある。つまり、典子が眼隠しされていたにもかかわらず青年の膝に乗せられたものが鞆であることを知っていたからである。実をいうと典子が青年の愛情を得たさに一芝居うって、姉が女頭目になり、輩下と情婦は雇われた鞭使いの芸人だったと

いうオチである。とんだSMまがいの寸劇に近いものであったが、初日にもかかわらず、辰巳典子は、よく透る声で、最初から終りまで、惜しげもなく裸身を曝して熱演していた。所詮はお色気が本命で、彩どりにSMまがいの色をつけたものであるが、四十数分の劇中、あちらこちらにもかかわらず、しっかりと台詞を覚え込んでいるのがよく分った。閉幕寸前各人の紹介の挨拶あって実演は終る。私達は惜しげもなく席を立った。眼の辺り近く、辰巳典子の裸形をまざまざと見ただけでも、価値はあった。お粗末なストーリーや、装置は問題ではなかった。これから数十分後には、ハント出来得るかも知れない彼女の、なまの姿を見ておいただけでも、話題はそれなりに豊富になるのだ。

楽屋に廻ると、ぞろぞろと、たった今、熱演したメンバーが現われて、化粧もその俤に階段を昇っていったが、辰巳典子ひとり、その仲間に混ってはいなかった。猫のひたいほどの、狭い楽屋を覗くと、私達との会合を心得えてか、彼女ひとりあわただしく化粧を落しているのが見えた。

「その俤の方がかえっていいんだが……」  
呟やくように言うと、賀山氏は笑い乍ら、



「心配いりませんよ。フォトを撮るだんになると、又化粧してもらいますよ。だって、これから食事に行くのに、あの俣の顔じゃ彼女落ちつきませんよ」

それもそうだろう。それが彼女のたしなみであるのかも知れない。

「御免なさい、お待たせしちゃって」

「お疲れさま——」

私と賀山氏は期せずして言った。芸能人に対する、定石的ないたわりの挨拶であるにしても、今の熱演への感謝がこめられていた。

素顔の彼女には、誰一人として、これが辰巳典子であるとは気付かぬであろう。左程に彼女は清楚でつつましく、又平凡であった。巨軀の賀山氏と、大柄な私との中に挟まれた彼女は、私達二人がぐいと近寄れば、まるで消えてしまいそうに可憐で、小柄であった。

素顔の彼女からは、あの大胆、放恣なポーズを想像する一かけらも見当らなかった。描いた眉をとり、眸のいろどりを拭った、やや舞台疲れの見えた横顔に、私はちっぽけな娘ひとり、大都会の狂燥の渦の中で生きる、きびしい激しさをそこはかとなく感じた。

身長一五四センチ、バスト八二、ウエスト五五、ヒップ八五。これが辰巳典子の体であ

る。このちっぽけな、可憐な娘のどこにあの様な激しい斗志が秘められているのであろうか。しかも今、憧れて己まなかった彼女が、腕も組まん許りのポーズで、私と歩調を揃えて、銀座を歩いている。私の憧れの夢は今まさに、正夢となって実現しているのであった。

地下の駐車場まで数分、私は宙天に魂を飛ばして夢中で歩いた。

「随分大変だったでしょう。セリフを覚えるのに——」

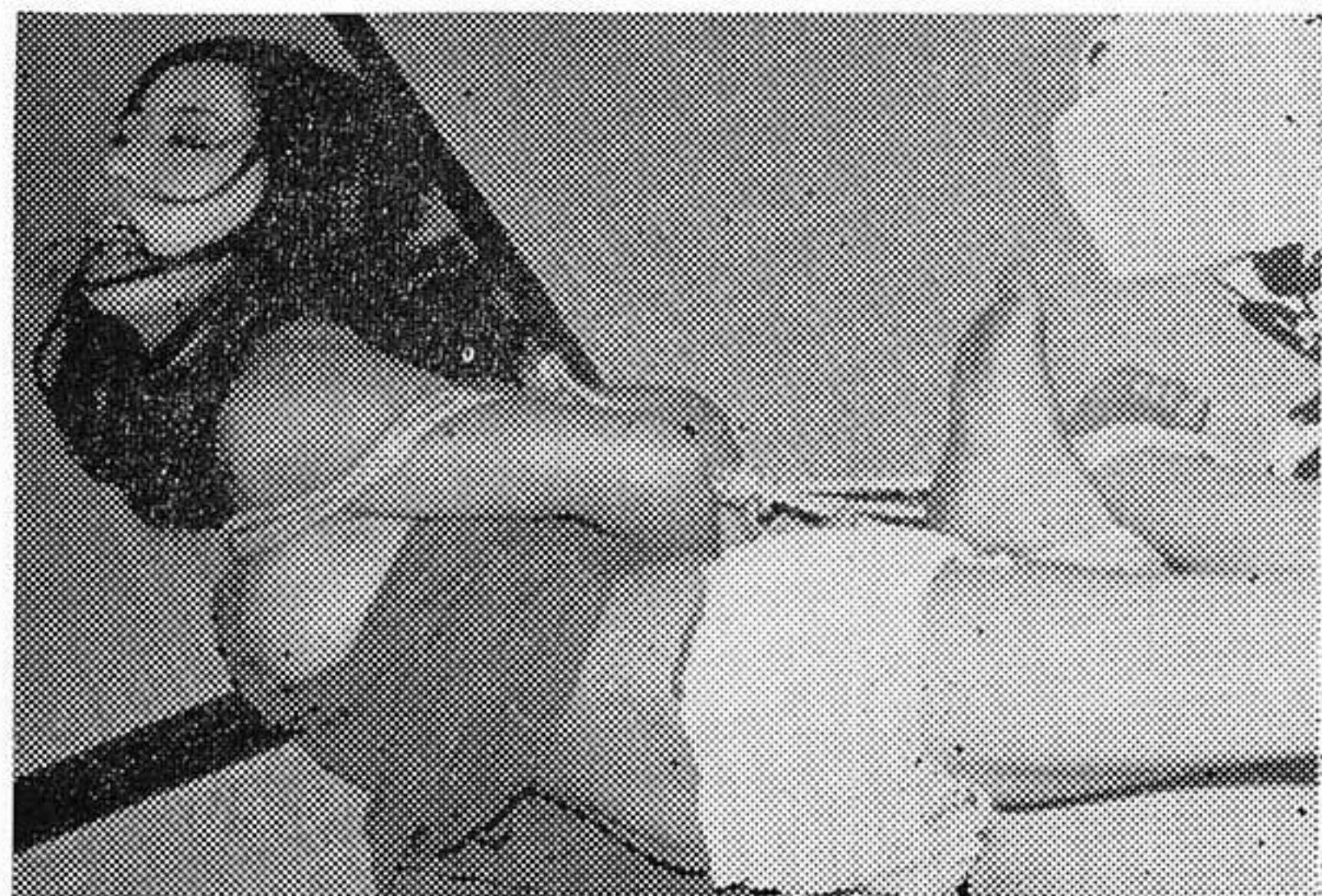
賀山氏がいたわる様にいった。

「ええ、何しろ三日間許りで覚え込んだじゅうのでしょう。だから、とてもえらくて。それに実演のお芝居なんて始めてですから……私の声聞こえていたかしら」

「少し出し過ぎですよ。あんまり出すと勿体ない。あとが続きませんよ。もっとセーブしてもいいんじゃないでしょうか」と私。

事実、体に似ず、彼女の声はよくとおりの音声も齒切れよく素晴らしかった。寸劇風のお芝居にしては、少々勿体ない様に思えたのである。

「正月は挨拶廻りだったそうだね」と賀山氏はきく。



「ええ。姫路から西宮市など廻りましたわ」

「西宮はどちら？」と私。

「たしか今津の劇場だったかしら、よく知らない。でも愉しかったわ。慌ただしい映画のお仕事もないし、久し振りに解放されたみたい。一日三回許り一寸ステージへ出て少しお喋りするだけなんですから」





であるらしい。

急に腹が減ってきた。辰巳典子のことに夢中であつたが、考えてみれば、大阪を發つ時間待ちの間、駅内の店で、イタリアン・マカロニとビール一本のんだに過ぎず、それから午後九時現在の今まで、吞まず喰わずであつたのだ。

彼女は鰯のたたきを注文し、ひらめの塩焼きをおいしそうに

平らげていった。酒も僅かずつではあるが私達の相手をしてくれた。

「足がいたくなって来たわ」といい出した。  
「もうすぐだよ。ほら、あそこなんだ」  
賀山氏の指さす彼方のビルの地下に駐車場があつた。

× × ×

車は夜の巷を六本木へ向って走っている。助手席に辰巳典子、そして後部のシートに私が深々と沈んでいる。

賀山氏ゆきつけの麻布六本木のK庵の小脇の道に車を駐車させて、三人は二階へ上る。粋をきかせたこの料亭、せいろめしが名物

いた。私の素姓を知つてい乍ら、彼女はため

らわず、快よく応答した。それは後述にまとめよう。酒の酔いは急激に廻り始め、ともすれば、このあとに控えている、最も重大なカメラ・ハントの一事すら、忘れてしまいそうな、愉しい雰囲気であつた。それとなくハントを匂わすと、彼女はころよく諒解してくれた。最早、言い難い言葉も難関もないのである。唯一つ、彼女が日に四回のお芝居で、かなり疲れているという事実だけは、言葉の端々からも窺われるのであつた。

上京を機会に団鬼六先生にも会いたいし、芳野眉美とも久濶を叙したい。又余暇があれば立川談志とも喋べりたかつた。私はそれらの人々にK庵から、食事の合間を見ては、思い立って電話をする。突然の上京に芳野眉美は驚き、喜んで明日の会合を約した。鬼六先生の住む真鶴へ電話して、現在辰巳典子と一緒に同席していることを告げる。しばしば彼のシナリオに出ているので、彼女はとくに御存知で、電話をかわる。明日、私の為に多忙のひとつきを割いて出て来られる旨、辰巳典子より伝言をうける。談志を求めて、寄席のスズモトへ電話したが、舞台が終つて帰つたあとで、これは目的果せず。しかし私の初



のハント上京を、同好の人々は実に温く歓迎してくれている様に思えた。

辰巳典子は、私との対談で、実に快く、何のてらいもなく、サバサバと話してくれた。お喋りの合間を縫って、賀山氏が私達二人をスナップしてくれていた。

.....

「お生れは大阪なんですかね」

「ええ、日本橋界隈です」

「じゃあ、大阪の中心ですよ。何年生れ？」

「昭和二十二年」

「私の長女と同じ年だ。まるで違いますよ」

「大阪で電話の交換手していたんですけど、あるつてを求めて上京したんです。その方、こうした世界に精通なさっている女性の方で（特に名を秘す）その方の紹介で、この道に入りました」

「デビューはいつ頃？」

「一昨年の十月頃でしたかしら、はっきりしたことは忘れましたが、デビュー作は『……』でした」

（この『……』彼女はつきり仰有ったが、かなり酩酊していた私、その時は憶えていたのに、今となって失念したのである。デビュー一年月も少し怪しい。私の酔いの不手際のた

めで、決して他意はない。うろ憶えで間違った題名を書くよりは『……』の方がむしろ正直でよからう）

「随分、映画に出ていらっしゃいますね。この処、三本に一本は、あなたの映画にお目にかかります。但し、正直いって単なるおピンク映画は見ませんが、鬼六先生のものや、

同好の方の噂で、縛りのあるようなものは殆んどみるようにしています。

実をいうとおととい、あ

なたの『密通刑罰史』と

『後家ごろし』というの

を京都で見ました」

「後家ごろしってどうい

うことなのかしら、私に

は、その意味分らないん

です」

「あなたが撮っていて

——」

「ええ」

「ハハ、あなたが後家じ

やないから」

（何といっても、一年前

成人式を済ませた許りの



可憐さである。こんな言葉は知らぬのが本当かも知れない。何というあどけなさよ）

「よく、最近縛られるでしょう」

「ええ、ひどい時は、朝から夜まで続くことがあります。今日なんか、一日四回、ずっと手錠かけられっ放しで、手首がこんなに擦れて傷ついてますのよ」

（さしだした彼女のかぼそい手首に、真赤な手錠の擦過痕が痛々しく残っていた）

「『密通刑罰史』は縛りはなかったけど、ラストシーンが非道いですね。あれは小森白監督じゃないでしょう」

「ええ、応援のY先生です。小森先生は、最後の江戸時代だけですが、最初のシナリオもすっかり変ったものになったそうですよ」

「あの股間に火箸を突きさすシーンね。どう思います」



「監督さんの仰有る様に動くだけですが、あれは瓶の血糊を股に流したのです。でも、上手く撮ってあるから、そうはみえないんですよね」

「首吊りの場合、足許からうつりましたが、本当に首を吊ってぶら下っていたの？ それとも何かにつかまっていたの？」

「あれは本当に首吊りでぶら下っていたのです。胸の辺りをしっかりと縄で縛って、木の枝を通して、うしろから引っ張ってしてくれたのです。でないと首を吊った紐だけでぶら下っていたら、本当に命ありませんもの。でも危険なカットでした。命がけですものネ。若し、胸の縄をにぎっている方が、うっかりそれを放したら、忽ちあの世行きですわ」

（淡々と喋っているが、撮影の裏話には、恐ろしい緊迫感が溢れていた。彼女の若さと熱意が、すべての冒険を可能にしているかに思えた）

「辰巳さんは、映画のシーンの中で、ああして縛られたり、いろいろと責められることに抵抗を感じる？」

「それが、お客さんに喜んでいただけるのなら、別段差し支えないと思います。私自身、余り分らないけど」

「御両親、余り御存知ないんでしょう」

「ええ、見ていないと思います。でも仕事で割切っています。薄々は知ってるでしょう」

「映画の方はアフレコなんですよ。あれは皆本当にあなたのお声なの？」

「ええ、全部私の声です。でも私、声が若いから、老婆の様な役の時は変ってもらいましたが、そんな役柄、あんまりありませんわ。四十代までなら、私自身の声で何とかやれそうです」

「クランクインからアップまで、大体何日位かかっています？」

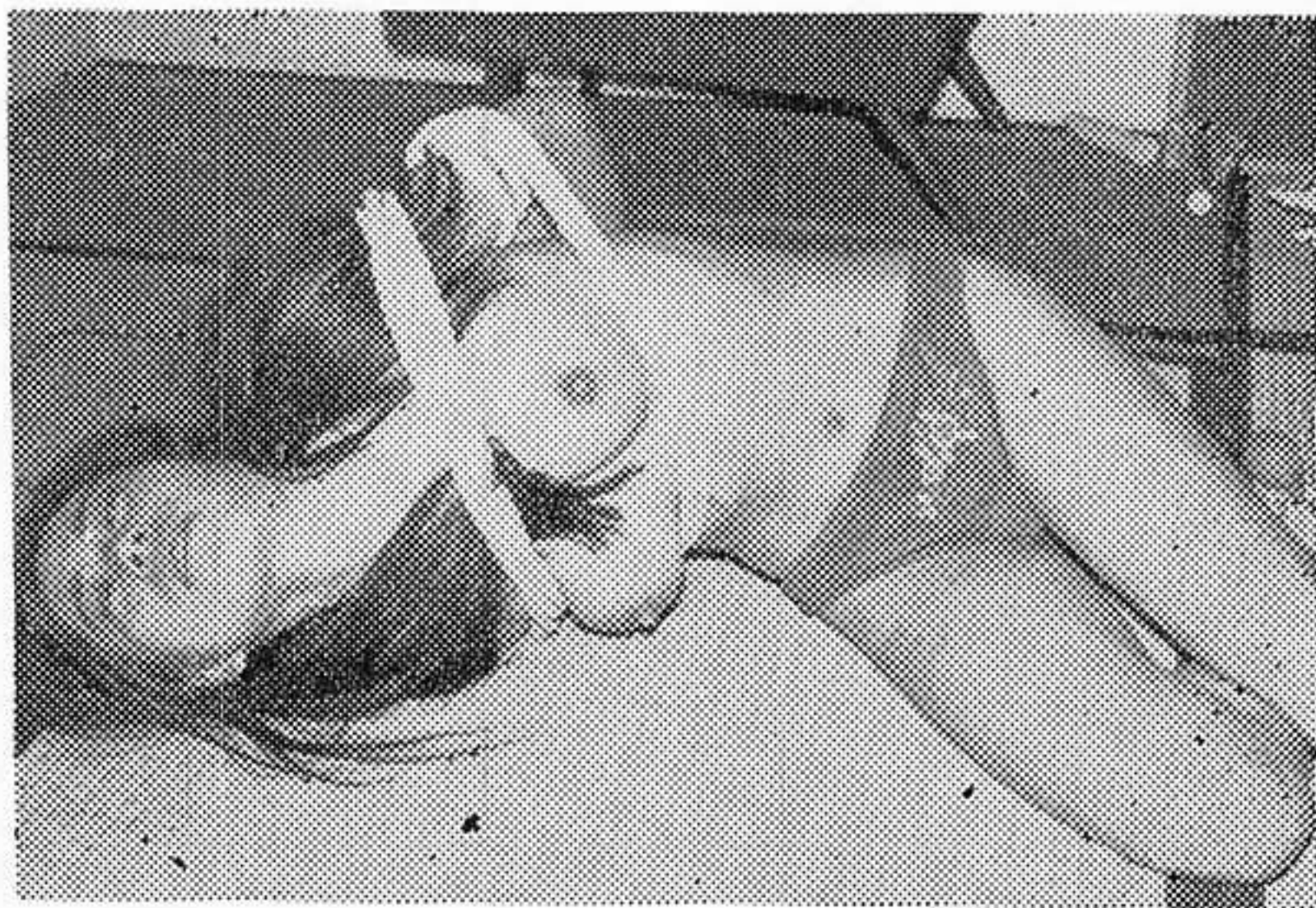
「大体普通は十五日間ぐらいですが、偶には廿日ぐらいもあります。しかし早いものになると、いつか四日位で、それこそ昼夜兼行で撮り上げてしまいました。スタッフや俳優さんのスケジュールのせいなのでしょうけど、そうなると、クタクタになります」

「毎日、都内のどこからか通っていらっしゃるの？」

「ええ。泊り込みのロケの場合には別ですけど、大抵は家から通っています。でも撮影に入ると、今夜の様な自由はききませんわ」

「ところでお住居は？」

「高円寺です。両親と一緒に住んでいます」



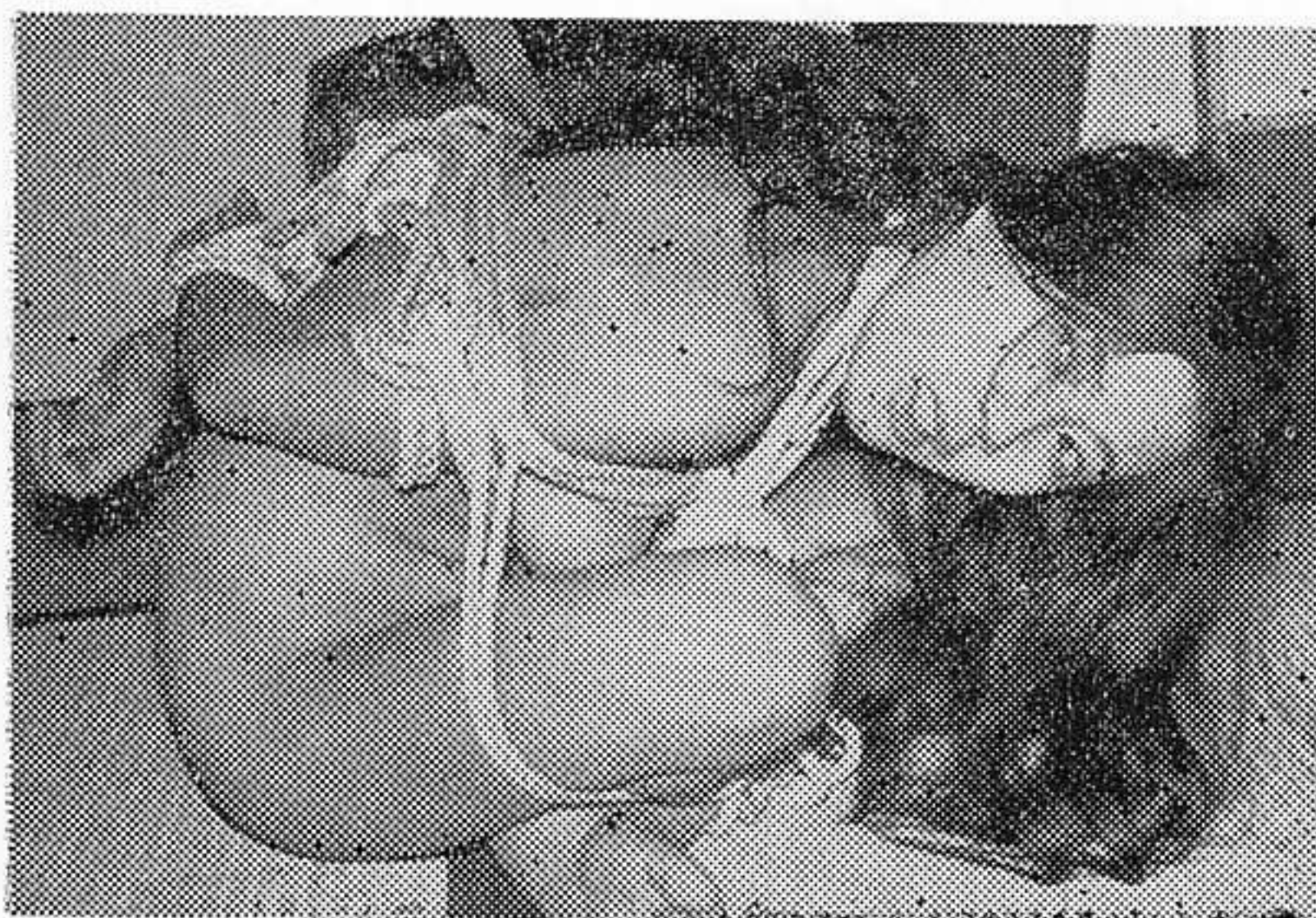
（賀山氏の註釈によると、彼女非常に親孝行で、かぼそい細腕一つで、懸命に御両親に尽しているとのことであった。）

私は奇クの一月号をとり出す。例の鬼六氏との対談の号である。）

「鬼六先生、御存知でしょう」

「ええ、いつもお世話になっております。今





度、私達で俳優クラブを結成致しましたが、先生に顧問になっていただいております」  
「奇クのような、こんな雑誌、読んだことあります？」

「今迄知りませんでした。先日賀山さんから見せて戴きました。縛ったり、責めたり、虐めたりする心理が、少し分る気がして来まし

た。私のことも時々は噂に出ていますのね」

「だからこそ、あなたに一眼会いたさに、新幹線で飛んできたのですよ。でもお会い出来て嬉しかった。私の書いてあるカメラ・ハントですがね。これに出ていただきたいと思っ  
て……。いや、これは私一人の願望じゃないんです。全国の奇クファンの願いかも知れませんよ」

「私、映画を離れての、そんなお仕事始めてなんです。とても……」

（彼女は、ハントをも、仕事ととっているらしい。しかしここで、そうですかと引退っては、わざわざ上京した甲斐がない。私は尚も喰い下る）

「映画で縛られるか、カメラの前で縛られるかの違いですよ。映画人口も相当なものだけど、又奇クの読者人口だって莫迦になりません。既にあなたに対しては、ピンク女優というより、緊縛女優というイメージが強いのです。鬼六さんのシナリオも、随分そうした効果を強めていますが、あなたの、あの縛られた、被虐にのたうつシーンを見るために、わざわざ、同じ映画を毎日、それだけのために見にゆく大ファンだっているのです。無理なお願いとは思いますが……」

（私は必死であった。何とか彼女の心を傾斜させねばならない）

「舞台で疲れているんですよ本当は。でも、わざわざ出て来られた目的がその為なら、少しの時間、構いませんわ。でも余りヘンなこと、お書きにならないでね」

「勿論ですとも。ああよかった、本当によかった。心から感謝しますよ」

事実、私は嬉しかった。急に安堵と共に酔いが再び発して来た。

もういつときも早く、ハントに掛りたかった。食事に一時間半ばかりの時間が費されていた。私達の貴重な、前戯のお喋りがあったとはいえ、急にそれらの時間が惜しくなってきた。現金なものである。腕時計の針は十時半を指している。

× × ×

プレイの場所は青山に在った。賀山氏がその目的の折々のために、彼の友人と共同で借りているマンションの一室である。ドアを開けば、すぐ眼前にバスとトイレがあり、キッチンをついた洋間は八帖ぐらいの広さがあってソファがおいてある。襖を隔てて奥の間は、和室になっていた。生活のゆとりがでて出来ることだが、こうしたマンションでプ





レイするならば、多人数の場合でも、ホテルの門を潜る気恥かしさはなかったし、人目にもつかなかった。何よりいいことは、ハントの対象の女性が、ためらいなく来られることではなかったろうか。

人気のない部屋の空気は冷えきっていた。大急ぎで賀山氏はガストーブに点火し、キッチン用のガスレンジにも無駄火をつけた。「どう典子ちゃん、先にお風呂に入る？」

賀山氏は優しく訊ねる。その気なら、すぐにもガス風呂を沸かさねばならない。

「いいですわ、あとで……。お部屋が少し暖まるまで顔をつくりますわ」

辰巳典子は淡々として、ソファに坐ると、机上に大きな化粧箱の蓋を開いた。メーキャップにかかる間、私達は襖を開いて、隣室のホームごたつに足をいれる。緊縛のプレイに對する何の説明もくどきも要らない。それが私をラクな気持ちにさせた。

「紫千鶴さんの時は流れましたが、今度はいいよ本ものになりましたね。何だかぞくぞくして来ましたよ」

「あの時だって、辻村さんがすぐ上京なさったら確実にハント出来たのですよ。でもあなたお尻が重いでしょう。関西まで連れてきてくれなんて仰有るものだから、遂々チャンス逃しましたよ。彼女映画界から消えちゃったのです。でも今回は大乗気でしたね」

「そりやもう、今度逃がしたらもう駄目だっでそんな気持ちで……。この世界は消長が激しいでしょう。鉄は熱いうちに打っておかないとね。ところで、どの程度まで大丈夫なんですか？」

「大抵の緊縛はいいと思いますが、何しろ売

れっ子ですから、余り極端な露出ポーズは駄目でしょう。しかし素直ないい子だから、求めたら多分応じてくれますよ」

「諒解済みだから、緊縛の前戯は不要でしよう。いきなりかなり強烈なものをもって行きますか。縄は二本許り持ってきたのですけど、賀山さんのがあれば貸して下さいよ」

「ええ、いいですとも。そのつもりです」とここに置いてあります」

彼は押入れを開くと、太いロープや長いロープをどさりとたたみへ投出した。私の脳裡には、緊縛の様々の構図が渦を巻いて流れた。あれもこれとも思いつながら、いざとなると、案外平凡になるかも知れなかったが、この手がじかに、辰巳典子の肌に触れることが出来るのだという欲びは、私の胸をジーンと熱く疼かせ、はげしくときめかせていた。

「そろそろ準備しましょう。私はビデオもとりたいです。まるでそのため買ったようなものですから」

「いいの撮って下さい。私はあなたから、そのことを聞いて、神戸の会長に連絡したら、ビデオテープの交換をしたいなど仰有っていましたよ。じゃあ、こちらはカメラ二台でゆ



きますよ」

電動式のカメラは据付けておいて、レリーズで適宜スナップし、もう一台で、あらゆる観点から撮ることにした。

辰巳典子は立上った。私達のものものしい支度を、笑顔を含んで眺めている。

「辻村さん、ひとつお願いがあるのですが、ビデオ向きに、最初は、典子ちゃんを襲って服を剥ぎとり、縛っていてももらいたいのです。よろしいでしょうか？」

賀山氏はビデオを構えながら、真剣な緊張した顔付になっていた。

「いいですとも、じゃあ始めましょう」

私はサングラスに嵌め変えると、小柄な辰巳典子の体を抱きすくめるようにする。

「御免なさい、構いませんか」

「ええ、なるべくお手柔らかにね」

彼女は私を見上げて、ニッと笑った。素顔は消えて、メイキャップの施された匂う笑顔は、びっくりするほど妖艶であった。

「悲鳴をあげて、苦痛の表情を少しオーバーにやって下さい。その方が効果的ですから」  
彼女はうなずいた。私はさりげなく抱きすくめた俤、彼女の手首をかたく握りしめていた。二米ばかり離しておいてあるモニターテ

レビに、私達二人の姿が揺れ動いてうつり始め、次第に安定してきた。

「どういう風に動けば、いいんですの？」

彼女は少し不安げに訊ねる。

「私にも分らない。ブツツケ本番だから、私があなたを縛り終るまで、激しく抵抗して下さい。何もかもビデオに入っちゃうから、その間何も申しませんから」

「抵抗すればいいんですね。何だかおっかないわ」

彼女は私の胸にそっと手をおいて、体を寄せて来た。嵐の前の静けさであった。

「辻村さん、いいですよ。いつでも始めて下さい」

「それじゃ」

私も電動カメラのレリーズ球を、足で踏みやすい個所に置いて構えた。

前触れなく、いきなり動作は始まった。私は寄り添っていた彼女を力強く押し倒す。

「あッ、あッ、誰か——」

辰巳典子は、お芝居とも思えない恐怖の叫



びを挙げて、私の手から逃れようとする。ぐいと羽搔じめにして、彼女の服を引ちぎるように脱がして行く。暴れ廻る彼女の上に馬乗りになって、兎も角後手に手首を素早く縛り上げる。ついで靴下をくるくるとぬがせ、絶え間なく悲鳴をあげる彼女に、容赦なく襲い掛って、真赤なシュミーズの胸許に手を差し入れ悶える胸からブラジャーを引きはがす。フト、モニターテレビの方をみやると、私のこの激しい暴行シーンが、そっくりその俤画面にうつっている。

私の心は弾みきってきた。打伏す典子の胸に手早く縄をかけ、ぐいぐい引き絞って、二の腕に深々と縄がくい込むぐらいに締め上げ



ると後手で一旦結び、馬乗りになった俛、逆海老に両足を結んで、えいと力任せに引上げてしぼり、俄破と長く垂れる黒髪を掴んだ。

「ヒィー、やめてえー」

喘ぐ半開きの唇から絶叫がもれる。私はもう夢中になっている。シュミーズの隙間からポツチり洩れた乳首の赤に、激情は更に募っていった。賀山氏は息を弾ませ乍ら、この強烈なシーンに、カメラを向けている。うまく位置が定まっているかいないか分らぬが、私は思い出してはリリースを踏みつける。閃光が忘れた頃にパツ、パツと私達二人に光っている。

私はズボンのバンドを抜きとった。革バンドの鞭打ちに、どれまで耐えられるか、それは未知数だ。思い切って、さっと一振り、彼女の腰の辺りにふるう。

「あッ、ヒィーッ」

仰天したように、彼女は虚空にのけぞる。苦しまぎれに呟えた数条の黒髪のはしをキリキリ噛んで、呻き、もだえる。五度、六度、ピシリ、ピシリと、私の革バンドは容赦なく彼女の豊かな胸を、背を、真白な太腿をはげしく撃った。私の動きにつれてバンドの除去されたズボンがずり下ってくる。私はパツと



ぬぎ捨て、彼女を横転させて、その肌にぐいぐいと爪を立ててゆく。

私の息使いは激しい。無言で執拗に彼女の肌を撫でさすり、もみしだくように両手で肉をつまんでゆく。

「あッ、よしてえ、うーん、いやッ」

きれぎれに喘ぎながら、彼女は逆海老に縛られた体を、ねじらせよじらせて、さけよう

とする果敢ない抵抗をこころみる。憧憬してやまぬこの女体を、心ゆくまで責め続ける私は、すべてのことを忘れて、只管に没入していった。

真赤なシュミーズが邪魔になる。かたく白いガーターが目障りだ。私は辰巳典子を全裸にしたい欲望にかられていた。

ホッと一息ついて体を起した時、賀山氏はビデオを離れた。僅か十数分そこその連続の行為であったが、私の鼓動は躍り、ひたいに汗がにじんでいた。パントマイムの真剣さが、それを如実に示していたのだ。

ビデオから解放されて、私はそっと、打伏している辰巳典子のかたわらに坐り込んだ。

「叩いたの痛かった？」

眸を挙げた彼女の顔には、若やいだ笑顔があった。紅唇がゆれて、

「痛くないといえば嘘になりますけど、本当は大して痛くなかったわ。映画の方がもっとつらいことありますわ」

「じゃあ、あの悲鳴や絶叫は演技？」

笑った俛、彼女は軽くうなづく。私は呀っと思った。流石に女優さんである。ツボを心得て、ここぞというところで喘ぎ、真実苦悶していたと思ったのは、その実、彼女のやや



オーバーな演技であったとは——。キラキラとまたたく瞳孔の奥が澄んで、いたずらっぽく笑っていた。

「すっかり欺されちゃった」

私は愉しい微苦笑を洩らす。

「だってテレビにうつしているんでしょ。少しは演技しなくっちゃ。それに辻村さんそう仰有ったもの」

「違う。じゃあ、今度は本当に泣かしてあげるよ。緊縛も手加減しないから」

「こんなかわい体、あんまり虐めないで」  
冗談とも真剣ともつかず、辰巳典子はペロツと舌を出す。

私は一番太い縄をとり上げると、彼女に近よる。壁にかかっているヌードフォトを見るときもなく眺めていた彼女は、一瞬笑顔が消して、一寸身構えたポーズになった。

首縄の輪をつくって、すっぽり首にはめると、かなりの時間をかけて菱型縛りにしめていった。

「もしも、縄に皮膚が挟まったりして痛かったらいつてね。ところで少しきつい？」

「いいえ、辛抱出来ますわ。これが本格的な縛り方なの？」

「さあ、本格的といわれると返事に困るが、

少なくとも映画でよくみかけるような、まやかしかしいないね。なにを指して本格的というかという定義になると困るけど——」

「私、映画でも最近よく縛られますけど、時によると、もっとしっかり強く縛ってくれないかなあと思うことがあるんです」

「どうして、君がMだから」

「Mって。ああ虐められて欲ぶことなのね。そうじゃないんです。お芝居だから、多少オーバーに演技するでしょう。そうすると縄がゆるんじやって困るんです。無理に体にまとわりつかせようと努力することがあるんです。いっそ少々あばれても解けないように縛ってある方が、演技がラクなんです」

「テレビやお芝居に、そうした非道いのをよく見掛けますよ。演技している役者が、一生懸命ダラダラになった縄を、纏いつけようと苦心しているが、あんなことなら、何も縛るシーンなど入れなきゃいいんですよ。やる以上は逃げないよう、又捕えたのだからしっかりと縛るべきですね。外のシーンはリアルなくせに、緊縛シーンとなると所作ごとみたいななんです」

「よく、縛られてる女の人を助けにくるシーンありますけど、時代ものでも現代ものでも

助けにきて、刀で縄を切るとパツととけるでしょう。今みたいに、こんなに犇々としばられちゃ、あんなにあっさり解けないわね」

辰巳典子はうつむいて、自分の肌をぐいぐいと締めつけて、纏わりついて行く縄の行方をみつめていた。後手もきつく縛ってある。

更に一本のロープを腰でつぎ足すと、股縛





りにして太腿へ巻きつける。縄は長いので、未だ未だスペースがある。一挙に股から首までかけ上げると、唇を開かせて縄をくい込ませ二巻きして猿轡にする。長く乱れた黒髪は縄と一緒に巻き込まれて乱れて、妖しく辰巳典子の頬を蔽っていた。

カメラを構えると、刹那、彼女の表情は悲愴になり、苦悶をまざまざと浮び上らせた。

緊縛の効果は、彼女の無惨な表情とマッチして満点である。微かな呻きすら、くびられた口中の奥から発しているではないか。カメラを撮る手を休めても、緊縛にふさわしい表情は続いていた。乳房は心なしか喘ぎ、肩が微かに揺れている。迫真の被虐のポーズをそこにみて、私は辰巳典子の心には、或いは被虐を愉悦にかえてゆく何ものかが潜んでいるのではないかとすら思え出したのである。

私は思わず、たたみに投げ出された俤の、革バンドを握り、かなりの力をこめて、彼女のむき出しの臀部の辺りに一鞭ち、発止とくられた。

「グエーッ」とのけぞって、息を吸い込むように彼女は激しく喘ぎ、カタカタと奥歯がなった。やめてとは叫ばなかった。

更にもう一振り、私は激情のおもむく尽に

鞭を乳房へ振った。

「あゝ、ムーウ」呻いて、のけぞると、苦悶の様相が走り、鼻孔がピクピクとけいれんしている。豊かな黒髪は藻と乱れて、のたうつように、辰巳典子は頭を畳にこすりつけて腰を振った。演技とは思えぬ苦悶が彼女の顔を一杯にしめた。眉をしかめ、眼をつぶり、彼



女は私の鞭を、痛みを歓びに変えて、尚も心待ちに待ちうけているように思えた。

私は革バンドを握ったまま、彼女の顔すれすれに口をよせ、低く囁やくようにきく。

「痛い？」

パチッと眼を開いて、彼女はマジマジと私をみる。

「少し——」

「あなたの被虐のポーズをながめていると無性に叩きたくなる」

「あの程度なら……」

いいというのだろうか。私は立上ると、改めて尾錠の方をしっかりと手に巻きつけた。

パシリ、パシリと激しい音が、部屋の空気を無慚に震わせた。

「あッ、あッ、ウーッ」

のけぞり、足の爪先がたたみをかいて、彼女は呻いた。うっすらと数条のバンドの痕が肋骨の辺りを桃色に染めて流れた。

絶えまなく、このシーンを、電動カメラはうつしとり、閃光は瞬間、瞬間に部屋中を白くしていた。

私は抱きかかえるようにして、辰巳典子を起すと、素早く縄をといていった。

「御免、御免、つい昂奮しちゃって」



「少し痛かったわ。辻村さんって、本当にこんなこと好きな人なのね」

彼女は乱れ放題の髪をかき上げようともせず、探ぐるような眼付で、じっと私を優しくにらんだ。

「ここで一服しませんか。典子ちゃん、熱いお茶一杯どう？」

ねぎらうように、賀山氏が、洋間の方で茶を漉れていた。時計は午前零時を五分許り廻っている。真夜中のプレイはまだまだ続きそうである。

× × ×

水色のパンティに真紅な花の縫い通りのあるそれを、私は脱がしてみたい欲望にかられていた。夜も更けてきたし、もうそう長くプレイも続けられないだろう。私は辰巳典子の肩を押すようにして、小憩後、再び和室の方へと引返す、胸の隆起を強調するようにして太縄で、この腕をしめつけて縛り上げ、忽ち前後左右より数枚をものにする。

私はものもいわず、パツとひきめくるように、水色のパンティをはがした。

「呀ッ、だめッ」

羞恥の声が走ったが、委細かまわず、坐り直させて、両足をあぐらくませ、縄をかけ

てゆく。犇々と次から次へと、太い縄が、幾重にも、かぼそい彼女の体を雁字搦目にしめつけていった。

強烈な海老縛りがそこに現出した。ウンウンと、彼女は肩で息をしながら、私のこの縄を敢えて陶酔したように甘受していた。

全裸の辰巳典子の太腿に、たゆとう両の乳房がピッタリと密接して、二の腕は力づくでしめたためか、既に色が少し変っていた。

最早演技とは思えぬ、凄まじい苦悶の形相が、次第に濃く彼女の表情を変えていった。

唇をダラリと開き、ハッハッと荒い息使いで喘ぎ乍ら、彼女は必死に、この海老責めの緊縛にたえようとしていた。

背後に廻って、体を起しにかかる。両脚が宙に浮く羞恥から逃れようとして、辛うじて重心を保ちながら、たたみに足をつけた。組んでよじれた足首の、交叉した縄の痛みを懸命にこらえて、彼女はきつく唇をかみしめていた。頬が赤く染まってくる。

やめてくれ、解いてくれとは叫ばず、思わず唇について出る呻きを殺して、一心に私達のカメラに協力しているのだ。

ゴロンと横倒しにすると、巧みに縛られた右足が、全裸の羞恥を遮るるように、爪先が

伸びた。どうしても、如何ようにしても、尚且被虐にたえしのぶいじらしい姿が、一層私のSの血をかき立てる。これでもか、これでもかという行為がしたくなるのだ。海老縛りで自分の意志では身動きひとつ出来ない彼女を、私はもっともっと虐めたくなった。

黒髪をがばと掴むと、横倒しの体を、黒髪を引っ張って起そうと試みる。

「あッ、イタ……ウーン」

恨めしげに、艶な、うっすら涙のにじんだ双眼が、無情な私の行為をなじるように光った。ズルズルと数十センチ、私は髪を掴んで引きずる。それでも辰巳典子はされるが俚になつて、絶えず呻き声を発しながら、この残酷な試練にたえようと、必死の努力をつづけていた。

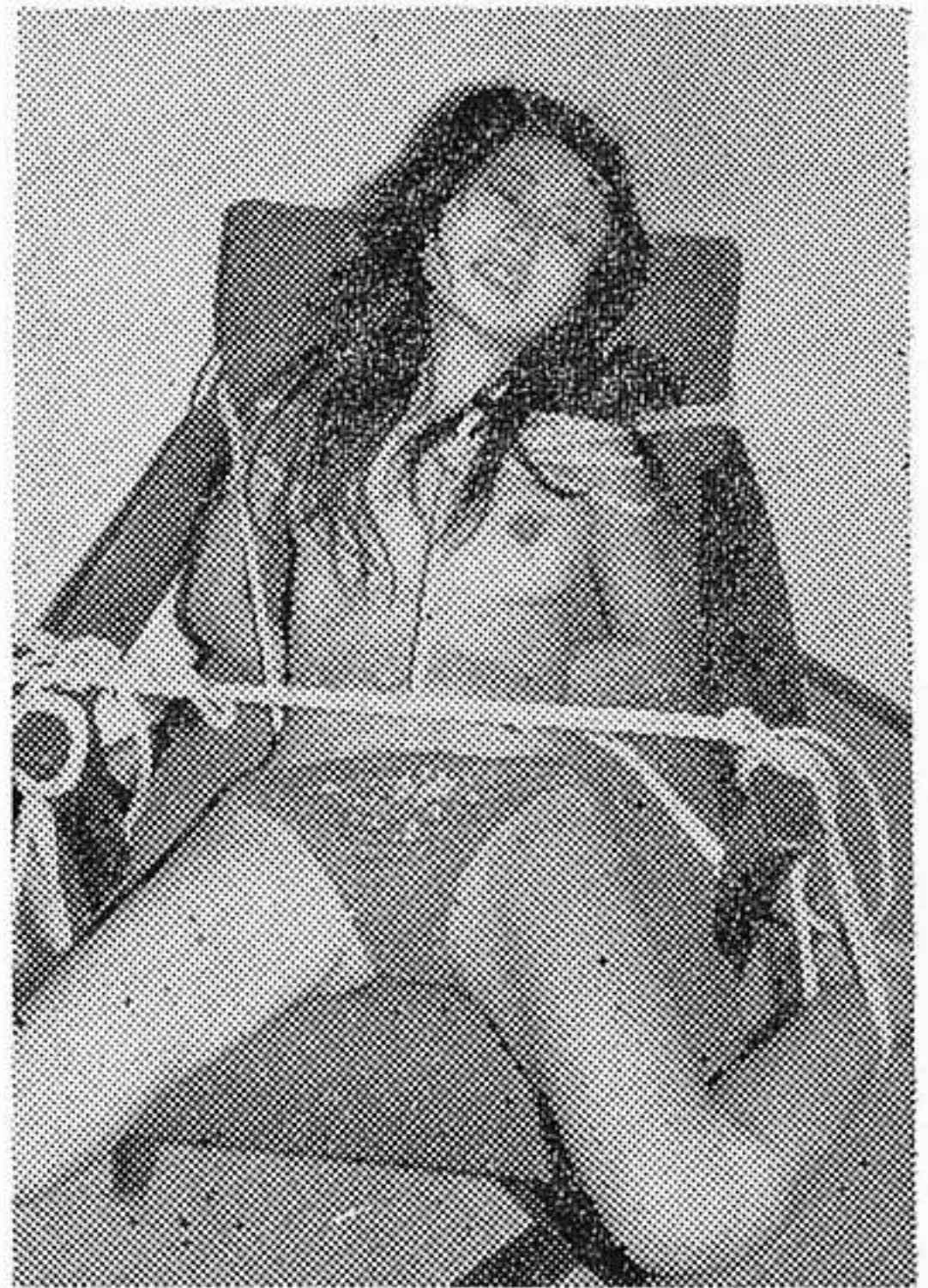
「解いてあげようか——」

彼女はかすかにうなずいたようであった。抱き起こして、解き易い態勢にして急掬、縄をときほぐしてゆく。

「横倒しの時、右腕がたたみにこすれて、それに体重がかかって、かなりきつかったわ」

くっきりついた縄目の痕をさすりながら、彼女は呟やくようにいう。この小柄な、あどけない彼女の、どこにこんな素晴らしい根性





「プレイって行為で割切っていらっしやるのね。でもこれだけ縛られると、反ってすがすがしいわ。縛るのもあれやこれやとダラダラやらず、テキパキ縛ってゆくだけに、むしろその方がいいかも知れないのネ。とも角早いわ、縛るのが——」

「時間も大分経ったけど、サービスにもう一寸つき合って下さい。それでやめましょう」

「いいわ、もうどうなとして頂戴——」

を吊り下げる。一寸刻みに体が前へせり出してきて、縄が肩の方へと上ってゆく。

「ビデオとっていいかしら」

賀山氏が、上ずった声で呼びかける。いいも悪いも、いいようにして下さいという私の気持。

「辻村さん、彼女に一寸寄っかかって、何かして下さいな」

「何をやりますか？」

「ネチネチと、胸なり、体なり責めてもらったらいいんだけど……」

私はいいけれど、辰巳典子はどうかだろう。

「構わない？」

「いいわ、何でもやって頂戴」

がひそんでいるのだろうか。この根性が、単身大阪より上京して、忽ちスイ星の如く、僅々半年足らずで、ここまでのし上ってきたのではなからうか。

「辻村さんも大分アイだわ」

笑いを含んで腕をさすり乍ら彼女はいう。

「アイ？ 何のこと」

「エッチの上、ダブル・エッチかな」

「ふふ、エッチなんてのはね、お尻をそっと撫でてみたり、体に触ってみたりする程度。私なんかいうなれば、エッチに二乗してシンニウかけたみたい人間だ。でもプレイが終れば、指一本触れないつもりだけど」

辰巳典子は、S人種の私達をチャンと心得て扱っていた。ニコツと流しめを送られると思わずブルブルと来そうな、なまめかしさを彼女は身につけていた。

「少し寒くなったわ」

先程縄を解いた瞬間、パツと身をひるがえしてパンティだけはつけたが、その俣の裸の姿で、私達は喋べっていたのである。

私は部屋の片隅に肘掛椅子を運んでくるとそこへ彼女を坐らせ、まず後手に縛った上、ぐるぐる巻きにして、股縄をしめ上げた。閉じている両脚を開かせて、椅子の左右で足首

案外、彼女は平然としている。ピンク映画なら、ベッドシーンや抱擁シーンはつきものだから、接触はさして意に介せぬのだろう。或いはこれが最後だからというので、賀山氏がビデオにかこつけての、温かい配慮であったかも知れない。もう幾許もなくして、この愛すべき佳人とは別れを告げねばならないのだ。それは永久になるかも知れない。

私はときめき始めた胸の騒ぎを押えて、カメラをあきらめると、椅子の肘掛に腰を降した。



私の手は、辰巳典子の胸に伸びて行く。撫でさすり、揉みほぐし、それにくちづけして私の心は疼きに疼いた。

「ああ、ああ……」

苦悶とはうらはらな、歓喜の愉悅の忍び音が洩れ、彼女は身を震わし陶酔に悶え縛られた体をよじらせた。私の唇が彼女の頬を撫で唇に唇が近づき、微かな接触があった。頬は熱っぽく、瞳はうるんで濡れている。

「ああ、ダメ、よして……」

それは、正にピンク映画の一コマである。映画と違うのは、緊縛した裸身を、身動きもならすのたうたせている彼女が、今ここに紛れもなく実在していることであった。

逸る私の心は、吊り下げた両脚首の縄をとくと、ぐいと股一杯に拡げて、肘掛に両脚を高々と掛けさせた。羞恥と屈辱の姿が、近々とそこにある。

今こそ、私は辰巳典子を、この手で思う存分に縛り得た喜びに、ひたひたとひたっていた。

私はそのポーズにのしかかってゆく。

ヒソと声をひそめて囁やく。

「有難う、本当に有難う。恐らくあなたのことは一生忘れないだろう。関西へ来たなら是非

電話して下さい。せめてもう一度会いたい。

思いつ切り御馳走しますよ。ネ」

「ええ、きっと、お電話しますわ。忘れないでね」

彼女の声も小さかった。

この窈窕の美女、果して又逢えるや否や。しかし関西は大阪生れの彼女なら、いつの日か帰阪するに違いない。

名残り惜しさに時を忘れ、私はしかしその俤のポーズで、辰巳典子を抱きしめるようにしていた。そこには最早、賀山芳男の眼も、ビデオレビの存在もなかった。許されるならば、いつ迄もこうしていたかった。

× × ×

バスで使う湯の音が微かに伝わってくる。夜更けのしじまを破る様に湯音は響いた。

満ちたりた幸福感で、

私はしばし放心状態にあった。



「すごく気に入ったようですね」

「ああ、まったく」

「いい娘でしょう」

「素晴らしいですよ」

賀山氏の語りもわずらわしい程に、私は辰巳典子の残像をかみしめていた。被虐の表情は天下一品だった。私の過去のハントの女性

を思い浮べても、彼女程の被虐に對する協力はなかった。関谷富佐子さんが、真実の鞭の痛みに、あの恍惚の表情を泛べていたぐらいのものか。それは過去の数多くのハントした女性に對する失言であるかも知れない。しかし、真夜中のこのプレイの一幕は、終生忘れ得ぬ思い出となって、強烈に私の脳裡の片隅を占めるに違いなかった。

バスタオルだけを裸身に巻きつけた俤の彼女が、全身を赤くほてらせ乍らカーテンの蔭から現われた。

「ああ、すっとしちゃった。今何時？」

「午前一時十分——」





「いけない。家で心配しているわ」

時間をきいて、彼女は慌て出した。無理もあるまい。これから支度して、高円寺まで帰るのだから。私は裸身のニンフの美をパチリと一枚うつす。

「明日の舞台ねむいわ。渋谷とかけもちで、一日四回でしょう。大変なの……」

素顔に戻った彼女は、ローションをハタハタと叩いただけで、服をつけ始めた。

「賀山さんのビデオいいな。お芝居の勉強に時々使わしていただけないかしら」

「ああ、いいとも。何時でも歓迎だよ。何な

らお芝居の相手してあげるよ」

「それが怖いわ。私一人っ切りで研究してみたいのよ」

「典子ちゃんの頼みだもの、いいよいいよ」

「賀山さん送ってくれる？」

「送りたいけど。ウイスキーのみ乍らやったので、すっかり酔っ払っちゃった。すぐ車を探してくるよ」

賀山氏は、車を拾うために出て行く。

あとに私と二人。

物悲しく私は黙々と煙草をふかしている。

「どうなさったの、急に元気がなくなったのね」

「別れが淋しいからさ」

辰巳典子はフツと笑った。

「又、東京へ出ていらっしやいよ。映画のお仕事なかったら、いつでも会えますわ」

「そうもゆかないし」

成行き上、彼女もしばし佇立していた。フト気を変えるように、

「車拾えたかも知れないわ。表の通りまで一緒に出ませんか？」

「ああ」

私は物懶く立上る。

「いやだわ、元氣お出しになって……。さあ握手——」

彼女はしなやかな右手を差し出した。万魁の想いをこめて私は握る。

「あなたに会いたい一心で飛んできたものの、目的を果すと急にガックリしたんだよ」

「又会いましょうね」

その言葉は儀礼的なものかも知れなかったが、にこやかに微笑みながら、彼女はほんの三十分にもみたくない以前の、あの激しいプレイのことは、ケロリと忘れたかのように私をうながした。

青山界限のこのマンションの辺り、真夜中の道路に人影はなかった。肩を並べて二人、青山一丁目の交叉点へ出る。

サンドリアの喫茶の前で、賀山氏が手を振っている。タクシーが一台、

線路を渡って私達は小走りに走る。

ちっぽけな彼女一人、深々とシートに沈んで、あつという間に車は走り去っていった。

× × ×

翌朝、泥のように眠っている私を、電話のベルが起した。マンションのあのプレイの部屋である。ここには私一人。賀山氏は鍵を預



けて自宅に帰っている。腕時計を眺めると、午前十時半。早くもない時間だ。

やっと受話器をとる。団鬼六氏からであった。

「辰巳典子、どう？」

「無事撮れました。大感激——」

「そりゃ、よかった。折角上京した辻村氏のために、今日は私が一人紹介しようと思うんだが、どう？」

「えッ、誰を？」

「谷なおみ。知っているでしょ」

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	三五〇円（送20円）
三月分	3冊	一〇五〇円（送共）
半年分	6冊	二一〇〇円（送共）
一年分	12冊	四二〇〇円（送共）

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

「谷なおみ——。うーん、えーと、どんな人だったかなあ」

「『密通刑罰史』みたでしょ。あの江戸時代に出ていた、ホラ、医者の方で悪女役。もっぱら縛られて許りいたけど……」

「ああ、思い出した。あの人。そりゃまた素晴らしい。所詮は高嶺の花と思ってたけど、本当？」

「今夜ね。くわしくは会って話すよ。午後八時、六本木のドン・ルーチョというクラブへ来て下さいよ」

私は一ぺんに眼がさめた。ドカンとびっくりする様な、とてつもない大きいハントが転がり込んで来たのだ。まるで夢想だにしまった夢が——。

正に文字通り、果報は寝ているところへとび込んできた。

谷なおみ、谷なおみ、谷なおみ——

私は彼女を知るために、午後八時までの時間を、最大限に有効に使わねばならない。

正に私は幸福の絶頂にあった。

（次回、谷なおみの巻）

大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会  
社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円（切手可）の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本誌にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりにならない方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。



## 雑話

## わが琴線の響き



原砂土

## 通信八話

これがフィクションであつたならばつまらないお話に終るだろう。が、ドキュメンタリーであれば一読の価値はあろう。書く者は、読む人に読ませることの責任があることを知る必要がある。文献誌には文献的価値ある報告を載せることにより、文献誌の名目が成り立つ。

話の一。クリスマスにはサンタクロースがプレゼントを届けてくれる。サンタクロースは本当にいるのか。いるとすれば誰か。最近の子供は、それは父や母がするのだ、と答える。サンタクロース專業の實在がソリに乗ってやってこようとは信じない。誰がプレゼントの贈主であるかを知っている。これで問題はない。

ところが、贈主の不明なプレゼントには手放して喜べない。誰が、何故に、私にプレゼントしたのか、そして、その物の処置に頭を傷める。そして、遂に、遺失物としてお上の世話を受けることになる。せつかくのプレゼントは贈主の心遣いに拘ず、期限の到来によって国庫に帰属する。プレゼントの品目は、女性用下着一式。パンティ、ブラジャー、ガールドル、ストッキング、スリッパ。以上五点。色もピンク系の艶かしいものばかり。サンタクロースの存在を信じ切れない受贈者は着用済の「価値」ある品物を遂に法規範の命ずる処分に委ねた。

話の二。近所の公園に散歩する。公園の一角に便所在り。ドア附の部屋二つ。その一方に入る。用足すべく姿勢をとる。壁には、例に洩れず落書が一杯。その中の一つに奇妙なのが あつた。

刻明な図は、女性の仰臥した姿を下半身の側から眺めたところを描いていた。しかもその図の焦点は、通例の一般的狙いにあるので



はない。この点が奇妙なのだ。仰臥女性にはこれまた細部まで心を配って描かれた、エネマが添えられていた。図の傍には、幼児の用語めいた言葉が、大人の文字で二、三行書かれていた。

○

話の三。慶応大学の社会思想を専攻する学者が、私が学生の頃、私の大学の講師として講義を受持たれていた時、戦争中の思想犯に対する拷問の話に関して話された。

その中で、いくら加虐に及んでも口を割らない被疑者に就いて、取調べに当った係官は、加虐行為に対して、その狙いとする効果に反して、うっとりしたような表情を表わす被疑者のことを、あれはマゾヒストではないか、と話合ったという。

マゾヒストと聞いて、あの戦争中を考えれば、フロムの「自由からの逃走」中のナチス・ドイツの心理学的分析を憶い出す。ドイツ国民のマゾ的傾向が、独裁者ヒトラーを生み出したのだという。社会・経済的条件が手伝ったこととはいえ、ナチスの行動と結末をみると、フロムがフロイドを援用して説くように、というのは、このようなSとMと

の分析的主張もあるということにより、歴史

的な文化の成果を無にするような悲惨な結果を、再び招来しないように、一般の国民はSとMとに就いて知識を持つ必要がある。

この意味で、この奇くは、社会的に意義を大にする文献誌だといえる。決して悪書呼ばわりすることはできない。優等生的白痴宣言などして、悪書追放など叫んだ、単細胞諸氏こそ、ヒトラーを英雄と崇め、文明史を歪めた一時期のドイツ大衆に基盤を同じくする不逞の輩だと思えなければならぬ。

○

話の四。本誌の二月号には載っていなかったが、一月号までは毎月掲載されていた、原由貴子氏のイメージ画。そのほとんどが「おしめ」着用のものだが、受難の女性の顔をみると、私は、かつて見知った女性のことを憶い出す。

似ているのだ。姓が同じく原であることから、現実には添い合えない願いを夢に託して共通の姓の原と考えて、自分を慰めている男がいる。としたら、これも事実上の被虐の例の報告ということとなる。原由貴子氏の絵の載らない月の奇くを開いては、やはり淋しい気持ちになる。原さん、もっと続けて描いて下さい。

○

話の五。週刊誌「女性自身」の八月二八日号の、人間シリーズと銘打ったシリーズの中に、高木彬光氏が最高の評価を与えたという刺青を背面一杯に持つ女性の記事があった。グラビアにはカラーの写真まで載せてあり、記事中の物語も読み応えのあるものだった。昨年十一月号の奇くサロンに、愛知葉子さんが少し触れておられたが、編集部あたり、カメラ・ハントの企画を試みられては如何。見逃してはあまりに惜しまれる。カラーで観た刺青の美しさは今なお脳裡から離れない。

○

話の六。最近の広告合戦は、すさまじいの一語に尽きる。先頃の朝刊を開いて、ニッコリと微笑したのは、読者中で私一人ではあるまい。

「おじいちゃんも、おばあちゃんも、パパ、ママ、おにいちゃん、お姉さん、わたし、うちじゅうみんな、イチジクカンチョウを愛用しています」といったような文句が、かなりに紙面をとって載せられていた。文章が正確でなく恐縮だが、原文はもっとリズムミカルなキャッチフレーズだった。この分でいくと、都会生活の神経症増大傾向と相まって、浣腸



マニアはますます増えていきそうですぞ。

○

話の七。古本屋を漁って奇クの旧刊を探す努力は、今では徒労に近い。偶に巡り会えても、その値段は、定価の五倍を覚悟しても足りないほどだ。私の知人が、かなりの切り取りページのある旧刊を売りに行ったところ、古本屋の主人、小言をいいながらも、決して買わないとはいわなかったという。古本屋の主人が奇クのファンであって秘蔵する為のことでなければ、商品として何処かの店頭に並ぶのだろう。

注意せよとはいわないが、奇クの値上がり傾向は目を瞠らせる。日月の経る毎に、このような動きであれば、後日振り返るときを想って、奇クの内容の一層の充実を図らねばなるまい。奇クのこのような動きは、SとMを地でゆく思いである。つまり、読者を店頭で加虐し、身受けの後は、被虐の運命にある。

○

話の八。『性倒錯の世界』と云う題に「異常性犯罪の研究」と云う副題の付けられた本が、荒地出版社から出ている。

この書物は、「性愛は単純な本能ではなく本能としての性欲に人間理性の創造の手がふ

んだんに加えられ、高次の精神的価値が結びつけられることによって、感覚的な面でも、本能的性の全く知らない深遠にして甘美な世界を創りあげたものだ」という立場によって書かれ、「現代の誤れる性愛観を正すべく、貞操の古い皮袋に精神的性愛技巧の新しい酒を盛る試みで」とあるとされている。

八頁に亘って載せられた巻頭の写真は奇ク読者必見の資料だと信ずる。

### S M 三題

正月五日、新聞の案内欄をみると、T座で『密通刑罰史』とともに八実演、たたきと縛りVが興行されているというので、即座にT座のある渋谷に飛んで行った。

館内は満員の盛況で、座席を占めることはおろか、ドアの外に押し出されないように努力を要するほどだった。『たたきと縛り』の実演がおめ当てであることは、周囲の客が、押し潰されそうな中で、「実演まで、あとどの位時間があるのか」と訴えるように話していたのでも分る。やがて、映画館の通常の造りに洩れぬ、スクリーンの前のわずかの舞台上で芝居ははじまった。

一時間も続いたろうか。芝居は終わった。題

名にある『たたき』も『縛り』も観ることはできなかった。いや、ほんの少し『たたき』の場面はあった。男が舞台を数回ズボンのベルトを抜いて叩いた。勿論、人を叩くのに擬してのことであったが。しかし、全場面を通じて題名につながる箇所はこの時だけ。終わって、腑に落ちないのは私一人ではあるまい。まことにお粗末。帰途に就く心の割切れなさ。

五人位の『俳優』が新しく一座を編成したとか口上に述べていた。サド座とか劇団サドとか、言っていたが、一杯食わされたような気持は消えない。芝居を演るならやるでいい。しかし、内容のお粗末なのは、芝居人の道義に反しよう。看板に偽りの類は、信用失墜をこそ来たせ、人々の支持を得られないものであることを知るべきだ。新年早々、憤慨させられた。

併映の『密通刑罰史』はよかった。画面が美しく、諸種の刑罰の方法と、その刑罰を加える者の心理、又刑罰を受ける人の被虐の様子がよく描かれており、観る者に、いかめしい刑罰論の粹を出て、もっと人倫上からの密通に対する加罰を納得させずにはおかぬ。道義的説得力と了解の上に立って、観る者は



S M双方の喜びを感じることが出来る。そういう点からこの映画は、全編が美しく思われる。

事実、画面はその一つ一つが一幅の名画のように思われた。

○

雑誌『現代』二月号に興味ある記事があった。判決のドラマ「死を招いた女房孝行——不感症に悩む若妻の要求に応じた銀行マンの誤算——」という題のつけられたレポートであるが、不感症の女房が「首をしめて性交すれば性感が増進し、また妊娠するかも知れない」といって、ときどき旦那に性交時、自分の首をしめてくれるよう懇願するようになり、誤ってしめすぎて、死の結果を招いた、というのである。

レポーターは次のように結んでいる。「女性の不感症は、肉体的な欠陥からくるものほかに、ときとして男性に対する不信や嫌悪感など、精神的なものが遠因となることがあるという。病弱からくる厭世感に加えて、婚約中に貞操を奪われた女の憎しみ、恋人を裏切ったことへの自責の念があつた首をしめられているさなかに、ふっとあふれ出たとしたらどうだろう。ひょっとしたら、志都子はあ

一本の紐に復讐を託したのではあるまいか。  
——（以下略）——

ここで復讐というのは、女房（被害者）が独身の頃、婚約者があつたのに、上司たる加害者（夫）が酒にまかせて関係を結び、結婚したことに對していう。

ここにはレポーターの推論としての結びにいう復讐ということとを推論のままに受けとるとき、SとMとの入れ替りの態様が演ぜられているのが判る。加害者の夫が判決の断により被虐の位置に替る。立場を換えてみれば、被虐的に結婚に踏み切った女の復讐的な夫に對する加虐。しかも、この場合、肉体と精神との双方を駆使しての加虐と被虐のパターンが存在する。

このように、この物語を興味的に面白いといつてはみても、よくよく考えさせられるのは、S Mがいかに真剣に行爲せられても、SとMとの双方の主体に、契約または約束あつての、即ち合意の上でのプレイでなければならぬということであろう。プレイはつまるところ『楽しむこと』である。暗黙裡にも合意がない場合、この例のような反社会的、違法の結果を招いてしまう。S Mプレイは人間の愛憎に基因するのでなく、その一方、愛情

の顕現であることに思いをいたすことが必要であろう。

○

一月十一日のNHKTVを観ていたところ△絆Vという題のドラマの中で、市原悦子の演ずる婦人が、ハンドバッグからヒモを出すシーンがあつた。

ストーリーではそのヒモは、手品用の物なのだが、市原が「とりいだしましたるこれなる一本のヒモ——」と科白を言いながら、おもむろに手にしたヒモのシーンは、思わず私の胸をドキリとさせた。ごくたわいのないストーリーの中、ホンのちょっとした演技なり科白の中にすら、私の琴線を震わすものがあるのを自身、不思議な感情を以てみつめている。

かつて奇ク誌上で、多くの人々が、ロープの類を街で見たりするだけで心中に或る感情が芽ばえたと述べておられた。私も、愛読するようになって久しくなるが、近頃では、テレビの画面や言葉によつても、奇クの愛読者たる所以のものに動かされるようになった。病コーモウというべきか、我意をえたりと喜ぶべきか。





## —鬼 六 談 義—

男  
と  
女  
の  
話団  
鬼  
六

忘年会、そして新年宴会と、暮から正月にかけて、東京と熱海の間を行ったり来たりした。年の瀬に始める忘年会は、やはり、押しつまって、行き交う人も皆、忙しげな街の中の小料理屋など選び、大騒ぎをやらかすのが面白い。人が精出して働き、追いかみにかかっているのを見ながら、何をまだまごついていのかと笑うような馬鹿騒ぎでもあり、今となってはもう俺は手おくれで、どうしようもないのだというような自棄<sup>やけ</sup>っパチの馬鹿騒ぎであったりして、結構、調子が出て騒げるもののような。忘年会とは実にいい言葉で、自分を頼敗させた不出来な一年の過去を今年も酒を飲んで忘れようという酒盛りだから一

種悲壮感がある。二次会、三次会と、しまいには二、三人のへべれけに酔っ払った仲間と、どこかの露路裏のおでん屋にたどりつき、そこで意地汚なくまたコップ酒を握りしめながら、それでも馬鹿騒ぎから解放されたほっとしたような落着きを得て、朦朧とした頭を指で揉みつつ、その年一年を振り返ってみて、一体、何をしてきたのやらわけがわからず、助平な事だけしか手繰り得ないというのも毎年の事だ。

こうした不健康な飲み方に耽溺して、いささかセンチメンタルになる忘年会とは違い、新年会という事になると、やはり、海の見える熱海、山の見える湯河原などが何とはなし

に爽快だ。脂粉の香りをプンプン匂わせるような日本髪に稲の穂を垂らした芸者が、裾をひいた華美で豪華な衣装で現れ、皆様、おめでとうございます、と指をつき、床の間にはやはりお餅などが型通り供えてあって正月気分。芸者を見た途端、まだ酒も入っていない、ようよう、と声を出す不粋な客がいて、それは幹事にたしなめられ、しかし、忘年会のようにこうした場にストリップパーなんかの出演を希望するのはあまりいいないようだ。

今年は湯河原のある旅館で、古い仲間達五、六人揃って新年会をやった。K君というのが世話役で、この男、東京から紋付に袴姿でやって来、一同、座敷に揃ったところで、



下座の方で威厳を正し、「諸君、あけましておめでとう」と口を真一文字に結んでいい、「今年も我々の友情を暖めていこうじゃないか」という意味の事をいって、どうしてもそれは忘年会の時、一物をさらけ出して奇妙な踊りをやった男には見えなかった。さっきいった日本髪に稲穂をつけた芸者が現れて、客の一人一人に金杯を廻してお屠蘇を注ぎ、おめでとうございますとニーと笑って見せるのだが、何だかといってつけたみたいで、いや、おめでとう、と挨拶を返す男も、どこか間が抜けていて、ただ酒を飲むためにわざわざ湯河原までしんどい思いをしてやって来た連中が、芸者に、あんたおめでたい人ね、とからかわれ、そうさ、俺はおめでたい人間だ、と自嘲的につぶやいているように聞こえるのである。

関西の方はどうか知らないが、熱海、湯河原、箱根など、元旦をここで迎えようとしたり新年会をやらかそうとしたりすれば、一カ月前から予約しておかないと、駄目だそうで、普段なら、小田急沿線の各駅の構内に、六人泊れば一人ただになる、てな、みみちい宣伝ビラを積み重ねて、遊山客を引っ張ろうと温泉町は必死だが、というより氣息奄々と

するほどまでに不景気なのだが、さすがに正月だけは違うらしい。旅館の方では、正月の泊り客を断るのに一生懸命で、正月ばかりは雑魚なんか相手にしていられないと眼をつりあげている。

五、六人の客に裾をひいた芸者が二人ついたという事は真に運が良かったといわねばならぬ方で、彼女達は次の約束の場所に行かねばならぬ時間を気にして幹事に相談し出し、それでは何か一曲踊ってもらってからという事になり、一人の男が、ドンドンパッパを唄おうとしたが、今日は正月だからと幹事にまた叱られ、結局、二人の芸者は、おめでたい舞いを一さしなよなよと舞ってずらかってしまった。歩いてる暇もない程の忙がしさで、彼女達は表へ出たら、次の料亭へ裾をからげて、マラソンして行くのではないかとあとで皆は笑い合ったが、どうも味気なく、そのあと、不景気にボソボソしゃべり合いながら、酒をくみ合ったが、あの威勢の良かった忘年会にくらべて、どうしてこう調子が出ないのだらうと、新年早々大きな放屁をする奴まで現れて、何だか阿呆くさくなって来た。

旅館のサービスが気に喰わないという事もあったし、忘年会の飲み疲れという事もあったが、やはり、忘年会と新年会の気分の差であろう。どうやら嫌な年も終りに近づいたというほっとした気分とまた嫌な年を迎えるのかと、うんざりした気分の差であるらしい。新年を迎えるに当たって、そういう皮肉な情ない気分には陥るとは全く救われない話だが、以前、私達のグループに加わっていたRという泥棒の思出話が誰の口からともなく出て、そんな気分にはみんなは浸り出したのである。この泥棒は、今はもうふん捕まって、小管か府中かで服役しているらしいが、昔、物好きな男が私達グループの中にいて、その筋からこの泥棒をかくまうという阿呆な事をやってた。

Tという男で、つまり、閑人だが本人は粹人のつもりでいたらしい。嘘か本当か知らないがTの先祖は京都にあって勤皇の志士を新選組からかくまい、またTの父親は戦前、共産党員をその筋からかくまったという。逃亡者をかくまうという事に遺伝があるのかどうか知らないが、とにかく彼はその筋に迫いかけられている泥棒をかくまっていたわけだ。逃亡者をかくまうという事に何か甘い感傷みたいなものを抱いていたらしい。その頃、私達のグループは何やかやと理由をつけては飲



む会合を開いていたが、Tはそうした会合にこの泥棒を家来みたいに連れてやって来るので閉口であった。

その泥棒も始めのうちは、借りて来た猫みたいにおとなしく、またネズミみたいにコンソして恐縮して皆んなに頭を下げつづけ、如何にもコンソ泥らしかったが、そのうち段々と厚釜しくなり、私達の会合へ自分の女を連れて列席するようになった。勿論、何時の場合でもT君のあとについて来るわけだが、相撲取りや役者を最腹にして、あちこち連れて廻る人は数多いだろうけれど、泥棒を最腹にして連れ歩くとは聞いた事もなく、悪趣味もはなはだしいと眉をしかめる者もいたが、全くそういう阿呆な事をする男がいるかと思うと中にはその阿呆に輪をかけるような阿呆な事をする奴がいるもので、私達のグループの中で、泥棒R君の逃亡を助ける会を結成しようじゃないかといひ出す奴が出た。実際、何人かで、この泥棒を助ける会に入会したらしい。彼等にも、もっともらしい理屈があった、今ここで泥棒Rを我等の手から離せば泥棒Rは更にこの上悪事を重ね、前科をふやす事になり兼ねない。というのである。社会奉仕でもしているような気分になっているので

あった。キリストのように愛の精神にのっとり、罪を憎んで人を憎まず、などともいっていたが、キリストの精神に非ずして、それは幡随院長兵衛の精神らしい。泥棒Rは白井権八みたいにいい気なものであった。やはり、こういう風な奇妙な泰平ムードになって来ると、若くて、おかしい奴達は、フーテン族とかゴーゴー族とかを発生させ、中年男のおかしな奴等は、幡随院や白柄組みみたいな阿呆集団を誕生させる事になるのかも知れない。

この厚釜しい白井権八は小紫でも連れこんで来るような調子で、その後も、私達の集会にアベックで仲良くやって来ていたが、何時か忘年会に来た時に、どうだ、新年会を来年は伊東でやろうと思うから来ないかと、泥棒R君を助ける会のメンバーが聞いた時、珍らしく彼は辞退したのである。そして、こんな事をいった。

——忘年会の時には、今年もようやく逮捕を免れたというほっとした気分楽しく酒が飲めるが新年会は今年も大いに逃げ廻らなければならぬのかという憂うつな気分で、どうも酒がうまくない——

案の状、泥棒Rは、次の年の正月気分も覚めやらぬ時に逮捕され、彼を庇護していた連

中は罪人を助けたという理由で引っ張られるのではないかと揃って青ざめていたが、この方は幸い参考人程度で大した事はなかったらしい。

そうした出来事は、もう六、七年も以前の事だが、その時の愉快な仲間達も今は散り散りとなり、或者は出世し、或者は没落し、消息も途だえてしまったのもいる。そうして残った五、六人の仲間だけが、このように性懲りもなく何だかんだと理屈を作っては飲む会を持っている。

どうして我々だけがこうして友情を持続しているのだろうか、とメンバーの一人がいい出し、一人が、その理由は簡単で、揃って酒が好きで助平だからだ、と言って笑ったが、たしかに友達付き合いというものは、そのように単純なものかも知れない。

友達付き合いというものは、徒然草の中にもあるように、年月経ても「つゆ忘れるにあらねど去る者は日々にくとし」の言葉通り、空間があまりに空いてしまうと、つい交際も途だえてしまう事になるようだ。仲間があまりに出世しすぎると、こっちも逢うのが何だかケムたく、気兼ねもし、反対に仲間があまりにひどい落目になってしまうと、これもま



た相手の気持をおもんばかって妙に逢い難くなる。

さっきいった泥棒Rをかくまい、俺のやる事は一寸並の人間とは違うぞ、と鼻をピクピク動かしていたTも、肝心の泥棒がその筋にあげられてしまうと意気消沈し、同時に自分のやっていた事の下らなさを思い知ったらしく、急に分別わきまえたむつかしい顔つきになって、我々のグループから離脱してしまつた。彼に見習うように仲間は一入減り、二人減り、やがて大半は、去る者は日々にうとし、の人々になってしまつた。

やくざの足を洗うと、やくざをやっている奴が馬鹿に見えて仕方がない、というのと同じで、離脱していった仲間達は、何だかんだと無責任な理屈を作って寄り合いをやっている私達を遠くの方から阿呆かいなといった風に眺めているようであつた。

我々から離れていった昔の仲間の消息を語り合いながら、今年もこうして、何人かの助平仲間とわけのわからぬ新年会をやったわけだが、友情というものは、お互に近い所にて交流する事が具体的な根拠になるのと同時に、共通した趣味を持つ事によって、大いに効力を発揮するものらしい。また、年令によ

って友情は変化もするようだ。恋愛にしたって、十代の恋、二十代の恋、三十代の恋は、それぞれ違った色彩を持っている。十代では何だか雲の上に乗ったようなフワフワした気分であつたり、胸がキューンと痛むような切ないものであつたりするが、二十代になれば、計算がともない、整理された冷静な気分。三十代ともなれば、肉体にまで計算が及び、いやらしくなつたり、ずるくなつたりする。友情でも、年令によって友を見る眼が違つてくる。若い頃には随分といい友人に思え肝胆相照らすという交際までしていた男が、中年になって来て案外つまらない男に思われ出し、逆に、若い頃には、つまらない男に思っていた男が、中年になってから無二の親友になつたりする事があるようだ。何の事はない。共に酒を飲めば気分よく酔えるし、負けず劣らずの助平などという、浅ましい趣味の共通点で気が合っている事が多いものなのだ。それは親友ではなく悪友という部類に入るのだろうけれど、私なんぞは悪友の方を信用している。

肉体関係のある男女とない男女とでは、どちらが気が合うかといえ、勿論、ある方にきまつているが、同性の友情でも——(同性

愛ではない)——肉体関係のある方が気が合う。というよりそれは友情の極点だと思える。同性愛ではない同性の肉体関係といういは方は変だが、肉体の秘密を共有し合っている友情という事で、ゴルフ仲間、マージャン仲間、と色々な形で付き合っている中で、セックス仲間というのが一番親近感を持ち合っているのではないかと私は考えるのだ。親近感といえば、宴会の席やなんぞで、自分が飲んだ盃を友人に渡してそれに酒を満たして飲ませ、いわゆる盃のやりとりという不衛生極まる風習があるが、あんな事までして親密感を出したいのなら、一人の芸者に二人がかりでからみつき、何とか兄弟の契りを行なつた方が結構、親密感が増すと思われるのである。肉体関係のある友情とはつまりこうした事をいうわけで、何もそこまでして肝胆相照らす必要はないといつてしまえばそれまでだが、一つ釜を食つた仲という言葉があるのだから、一つ穴を楽しんだ仲という友情もあつておかしくはない。

それと似たりよつたりの方法で親しい交際をやっているのが、よくKK誌上に登場する交換夫婦プレイというやつだろう。女房を交換してプレイをするのか、それぞれの夫婦プ



レイの見せっこをするのかわからないが、どっちにしても女房が一丁噛んでくるという事になれば、それはもう芸者などを媒介として一つ穴のむじな兄弟になるような生っちょろさではない。身も心も女房も捧げつくしての交際だ。最初、そうした夫婦プレイの記事がKK誌の片隅に出た時、世の中には、どれくらい夫婦がいるものだと度胆を抜かれたが、これ程、親愛感の増す交際はなく、これ程、呼吸のあった夫婦も珍らしいと、うらやましくなってきたりした。

桃色遊戯を若い奴等の暴挙と見て、不道德だ、不倫理だと大人が騒ぎ立て、週刊誌も冷笑的に彼等の行動を記事にし、果ては悪書追放などと肅正委員会はケチな事を考え出したが、フーテン的若者達は、そんな事をしたとて、びくともするもんじゃない。取締ろうとすれば、それは自分達のように簡単に女を抱く事の出来ない大人のひがみだという風に解釈していやがるのである。フーテン族なんかは自分達の悪名が週刊誌で高くなれば俺もえらくなつたもんだという風に威張り出す。こんなものを相手にするのも馬鹿げた事で、時勢の一つの産物なんだから、大人達は何も眉をひそめる事はないのである。不良息子、娘

を持った親達が、子供達の桃色遊戯を何とか取締りたければ、毒を以って毒を制す、というやり方で、彼等が顔負けするような桃色遊戯を親がやって示してやったらどうだろう。

女郎屋の息子に堅物が多いというのはたしかで、また親父やお袋が無軌道な事をやっている所の息子は案外物の分別を心得ているのが多い。ピンク映画の撮影なんかでライトマンの助手なんかやって動き廻っているのは十八十九の若者が多いが、この連中はベッドシーンに食傷している故か、自分達がそれを演じる事に全く不熱心である。お前等がそんな事ばかりしとるなら、わい等かてこんな事してこましたるぞ、と親父とお袋が、不良息子に当てつけて、それこそ夫婦交換プレイなんかやってみろ。馬鹿息子、娘は、度胆を抜かれもうやめてくれ、わし等が悪かった、と降参し出すかも知れない。親にもそれ位の根性がないと現代のふてぶてしい不良分子を押さえる事は出来ないだろう。肅正委員会も主婦連合も、悪書追放とか何とか、そんなみみちい事してがんばってみたって、奴等はせせら笑うだけで屁とも思っちゃいないんだぜ。

また脱線してしまった。友情の話へ戻るけれど、友達付き合いなんてのも、お互に仮面

をかぶりつづけてばかりいると、それはそれなりの友情へ発展するかも知れないが、やっぱり、肝胆相照らす仲とはならないだろう。相手の一癖が、たとえ、それが盗癖みたいなものであったにせよ、赤裸々にこっちへぶちまけて来、こっちも自分の一癖を相手に認識させるような仲になった時、そこに親愛感が生じる事になる。

私には、どここの組に籍を置くというやぐざの知合いが割りと多いが、彼等の面白い所は、本人にとっては大変に不名誉な過去の経歴をむしろ得意げに相手に話して聞かせ、そんなケチな事ばかりしている野郎ですが、どうぞよろしく、と交際を求めて来る所である。それでこっちも気が許せ、どここの野郎が気に喰わねえので片腕をたたっ斬り、殺人未遂罪で七年も臭い飯を喰った阿呆な男なんです、と過去をさらけ出して、よろしく、という事になる。自分のいい所を隠し、悪い事だけを相手に認識させるという事は何でもない事のようにだが、なかなか出来る芸ではない。欠点をさらけ出して親和を計るという事は易しいようでむつかしいものだが、女の場合にしても、何時頃、何処で、どういう理由のもと、処女を吹っ飛ばしてしまった、



という事を最初から説明してくれると男の方だって、急に親愛感を増し、肩のはらない気楽な交際が出来るように思うんだが――。

また、学校でカンニングなどやらかし、共に見つかつて停学処分を受けたという友人というものは妙に親しみがわくもので、十年、二十年たった今でも懐かしく思い出したりするものだ。つまり、人間的阿呆さ加減を暴露し合った仲間というものは親愛感がわくという事で、柄にもなく新年会なる催しを企画し酒を飲んでる仲間をぐるりと見廻して、どうして、こいつらとこううまが合うのだろうと私もちと考えてみたが、ふと思ひ当たったのは、以前、乱交パーティなる阿呆な遊びを前衛的な屁理屈を作って企画したという事に端を発したのかも知れない。つまり互に一物ををさらけ出し合った仲であり、同じ穴を掘った<sup>むじな</sup>烙の仲間であるのだ。

KK誌を通じて知り合った仲というのが、これに似ているようだ。あいつも同じ穴の<sup>むじな</sup>烙かといった親和感であろう。私自身、何人かの人と共にKK誌の愛読者という事で親しくなったが、妙なもので何か遠い親戚にでも逢ったような親和感を覚えるのだ。その相手が落語家なれば彼の落語が好きになり、相手が

小説家なれば新刊される度にその本を買うようになり、相手が政治家であるなれば、彼のいう政見が日本のために正しいと思ってしまう。長つづきする友情と長つづきしない友情があるが、共通の趣味、というか共通の秘密というか、つまり、同じ穴の<sup>むじな</sup>烙の関係にある者との友情は、十年、二十年と長つづきするようである。

今年の新年会に集った仲間を見て、それはどいつもこいつも揃って、ど助平で、勝負事好きというあんまり感心出来ない共通の趣味を持合わせている者の集りである事はたしかだが、それが友情へと発展していく原動力となったのであり、中には年がら年中、金を融通し合っているものもあるし、共同である事業を起したのもいる。肉体関係のある友人同志であるだけに、なかなかしつかりした交情の根を持っているようだ。

三文シナリオを書く関係で、私は、同じ職業にたずさわる人々と随分と付き合うようになったけれど、こういう職業にあるのに、酒も飲まず、煙草も肺ガンになるのを恐れてやめ、勝負事は嫌い、SMなんて、てんで興味がなく、セックスの話題ともなれば嫌な顔つきをするという何のため生きとるのかわけの

わからんような人も案外と多い。阿呆くさくて、こんな人とは一緒に仕事をする気になれないし、そうするとおかしい事に、彼の仕事の内容が大変立派なものであるにせよ、何だか中身の無いごまかしのよう思えてくるのだ。

そんな事を新年会の酒盛りの中で、仲間達と話し合っていた時、仲間の一人が、小紫、つまり、泥棒Rのかつての彼女が、ここからそう遠くもないO市の小さな酒場で働いているからのぞきに行ってみないか、といい出した。

泥棒Rと別れた彼女は何人かの男の間を転々としたようで、どこをどう流れて来たのかO市に現在、住みついてしまっているらしい。冷やかしがてら、そこへ飲みに行こうと仲間の一人が言い出したのだ。相手が堅気の奥さんにおさまっているなら、昔を知る我々が押しかけるわけにはいかないが、水商売やってるんだから別にどうって事はない。さめた料理をつつき、冷えた日本酒を吸って、つまらない新年会に閉口していた不良仲間達は夕方になるのを待ってタクシーを呼び、O市へ飛ばす事にした。

O市は湯河原からタクシーで約一時間ばかり



りの距離である。泥棒Rと一緒にいた頃の彼女は二十四、五才だったから、もう三十を幾つか越している事になる。ポツチャリした美人であったが、現在、どのように変貌したかと一寸楽しみであった。

一度、その酒場で飲んだ事があるという仲間の中の一人の案内で、狭く苦しい裏町のトタン屋根の傾いた家がゴチャゴチャ並んだ一帯を通り過ぎると、その小さな酒場はあった。恐しいばかりに薄汚ない酒場で、看板の文字も剥げ落ち、レンガの壁もボロボロで、ベニヤ板をはり合わせて作ったような入口のドアにトリスいくら、ニッカいくらとメニューが張りつけられ、その下に正月は五日より開店、と張り紙がしてあった。

何やこりゃと私達はオーバーの襟を立てて苦笑し合ったが、せっかくここまで来たんだから一眼彼女に逢っていけよ、とここへ我々を案内した仲間は店からそう遠くもない彼女のアパートへ訪ねて行き、間もなく、夜風にブルブル震えて待っている私達の所へ、少しびっこを引いたエプロン姿のおばはんを連れて戻って来た。そのおばはんがかつての小紫であった。あまりに醜い変りように、私達は一瞬、ギョツとした。

六、七年に見た彼女の印象は、小柄だが、一寸したグラマーで容貌も十人並以上であった筈だが、今は空気がどこからか洩れ出てしまったように痩せこけ、肌は乾き、眼のまわりに隈まで出来て、醜悪というより、何か哀れさを感じさせる。

しかし、彼女は私達に気づくや顔中の筋肉をゆるめて、「まあ、懐かしい」と笑顔をつくって口を開き、忽ち齒が二本欠けている事を私達に暴露させてしまったが、すぐに立てつけの悪い酒場のドアをがたびしいわせて開けると、「今夜は休みなんだけど貴方達のため、特別に開店するわ」と私達一同を中へ入れてくれたのである。

何か興覚めしてしまった思いで、こんな所で気分よく酔えるとは思えなかったが、とにかく彼女とは七年ぶりで逢ったわけだ。「あれから一体何年になるかねえ」などといいながら私達はその五坪あまりの狭苦しい酒場の中へドヤドヤと入りこみ、埃っぽいスタンドに並んで坐った。

彼女はカウンターの中へ入って、ニコニコして私達の酒の注文を聞くのであった。といっても彼女は店のマダムではなく、日給いくらか雇われている女給だそうで、しかし

マダムには大変に信用され、仕入れから、接待から、ほとんど店の事は自分が切り廻しているようなものだと言慢するのである。

「不景気だね。このお正月はずっと家で寝ていたわ」

今日も恐らく朝から寝ていたのだろう。そこをだしぬけに襲われて、引っぱり出されて来たらしく、彼女は化粧もせず、それだけに一層、醜く見えるのだろう。土人形がベソをかいたような顔つきで、かなり荒んだ生活をくり返して来た事が想像出来た。

泥にまみれて人生を流転すると、こうも醜く女は変貌するらしい。すると彼女が一番きれいに見えたのは二十三、四の頃で、その花の盛りを泥棒Rに捧げ尽した事になる。泥棒Rは、美しい時期の花の蜜を吸い、この早枯れする花といい時期に別れたわけである。考えれば仲々うまいやり方であった。

大体において、女性には、おかめ型はんこやと般若型とがあり、おかめ型、つまり丸顔の女性は若い時の美貌が中年になってガタ落ちする場合が多いが、般若型、つまり瓜実顔の方は、若い時は大した事はなかったも、中年になって美しく変貌する場合が多く、生命の長い舞台女優なんかは大抵、般若型の女優が多い、



という事をその道の研究家に昔聞かされた事があり、そういえば若い時にパツとしなかった木暮実千代なんかが中年になって美しさに磨きがかかり、若い頃百万ドルのえくぼなどともてはやされ、その美貌を賞讃されていた乙羽信子が、中年に入って、けったいなおばはんみたいになってしまったのを見て、成程、そんなもんかいな、と思った事もあったけれど、昔、小紫なんていう呼び方をしてもそう不自然ではなかった泥棒Rの彼女の場合などは完全に空気が抜けて、栄養不良のキツネみたいになってしまっているのである。

人によって違ふのだろうけれど、こんな風に女性というものが年令と共に美しく変化したり、醜く変化したりするのなら、何時かえらい学者のいった、男は二度結婚すべきである、との話も成程とうなずける。

二十代にしろ、三十代にしろ、美人を美人として見る眼には差はないだろうけれど、女を見る眼にはかなり差がついてくる。本当に女を読む眼が出来て来るのは四十代じゃないだろうか。誇張なしに女性あつての人生であり、男性にとって女性は永遠に人生そのものであるが、それだけに実に不可解な謎を含んだ生物だ。二十代で女性を知ったような顔つ

きをするのは危険であり、容貌だけではなく精神面においても女性は年令と共に急激な変化を見せるようだ。男が十年かかって知る人生の断面を女は一年で見極めてしまう事だつてある。あの女と一緒にしなければ俺は死ぬとまで思いつめて、やっと結婚したのはよかったが、結婚後三年にもならぬのにその恋愛房と別れてしまった二十代の男は実に数多いようだが、その離婚の理由を聞くと性格の不一致などと曖昧な事をいってごまかしているけれど、女房の方が進歩向上していくのに亭主の方はちっとも上らず、女房に馬鹿にされ、馬鹿にされた事がやはり真実で、急にそれが腹立たしくなり、冴え出した女房が恐ろしくなってきたりして別れる事になってしまふようだ。だから、美人で頭の切れる女は悪妻になりやすく、どうせ女房にもらうなら、女学校時代の成績がケツから二三番といったところぐらいの知能程度のお粗末なのを選ぶ方が無難だが、どういうわけか知能の低い女は、年とともに不細工さが急に目立ち出すようで、帯に短かし、たすきに長し、とにかく女というものはむつかしいものだ。

強妻家グループなどという言葉があるが、あれだって、最初から、Mの人は別としても女房のケツに敷かれる事を望んで結婚したわけではあるまい。年令と共に猫から豹へ女性に変身していく可能性があるわけだ。

この女は、ババアになれば、なかなか上品で、美しいババアになるだろうと、そうした事まで計算にいれ、大局的に女性を判断して安全な結婚生活に入る事が出来るのは、身と心がしっくり均衡を保つ事になった四十才代で、情熱と強行力で押し進んでいく青春期には女性に対して、読み違いを生じる事があり年令と共に心に変化が生じ、ものの見方も変わってくると、どうしてこんなつまらん女と俺は結婚してしまったか、とキョトンとする事になるのである。本当に愛すべき女とは、こういう女性だと四十近くになって眼覚めたような気分になり、新しく出来た女と結婚し、古い女房を捨てられちゃいいが、男は二度結婚すべきだとの説を唱えた学者はそれを実行にうつしたけれど、厄介な事にその頃の年令に至ると若い時の強行力は段々と稀薄になり思いこんでも、おいそれと、それに身を任されない分別とか寛容とかいうものが出来てくる。女房に対する不平不満もあまり顔に出さ



ず、理想の恋人と人眼をはばかり情交を結ぶだけとなってしまうのだ。

友情も恋愛も同じ事で、一生を通じて一つの友情が、一つの恋愛が、持続されるという事はむづかしい。年令と共に同性の見方、異性の感じ方が変わってくるのだから。

醜く変貌した小紫の動きを私はスタンドに坐って観察しながら、女の年令という事をしみじみ考え、何年か前に別れた愛人達の顔を一つ一つ思い出してみる。

飼育して完全なMに育てあげた女もいたしこっちの趣味に一生懸命協力してくれた女もいた。つい二、三年ばかり前に別れたM子などは、寝室に花を飾りつけ、夜具の枕元には水差し、灰皿などに加えて、猿轡に使う日本手拭、それにしごきをつなぎ合わせて作ったプレイ用の縄まで配置し、枕からシーツに至るまで香水をふりまいて、プレイの楽しみをより一層、効果的にするために、鏡台を夜具に近づけ、その前で長襦袢姿で化粧しつつ、私のやって来るのを待つといった気のくばりようで、こっちを有頂天にさせたものだが、それも現在は人妻、最近、妊娠したという事も風の便りで聞いた。

十年前に別れた女、七年前に別れた女、そ

うした彼女達の面影が安ウイスキーで朦朧となっていく脳裡に次々と浮かび上っては消えていく。どの女性も皆若かった。そして、私の記憶には若い時代の彼女達の面影しかとどまっていなかった。しかし、ふと思いつけば、彼女達は花の盛りを過ぎ、充分に年をとっているのだ。十二年前に別れたT子は、ピンク色のワンピースを着て、にじんだような眉をした細面の女で、たしか年は二十二であり、みつ豆が好物であったが、勘定してみると今年で彼女は三十四才になる。まさか、ピンクのワンピースを今でも着ている筈はあるまい。こっちから捨てたのもあったし、向こうから捨てやがったのもあったが、別れて一年ばかり過ぎた頃では、何だか惜しい事した気分になって別れるんじゃないかと後悔めいた気分になってきて、彼女が誰かと結婚するという事にでもなれば、いよいよ腹立たしくこれまで彼女のために使った金が惜しくなってきたりして馬鹿馬鹿しく、急に彼女が上等の女に思われ出して来て、手紙でも書いて彼女の神経をもう一度揺さぶってやろうか、などと浅ましい事を考えたりしたものだが——こうした長い空間をおいた現在では、何だか救われたような気分になっている。去る者は

日々にうとしというのではなく、こっちは年をとって、女性に対する見方が変わって来た故であろう。あの頃はあれでいいと思うもの、実につまらない女とチヨネチヨネしていたものだ。当時の自分が阿呆みたいに思えるのである。

恋愛ごっこのような事をしていただけならいいが結婚なんかすれば、どうしようもないような悪妻になるに決まっている女がいる。また、一寸、年を喰えば、忽ち老けこんで、人相が歪んでしまうような女もいるが、そんな所まで読む力は若い時にある筈はないが、家庭的にはゼロの女の方が遊ぶ時には面白いもので、つまり、恋愛と結婚という事はやはり別に切離して考えるべきだと思われる。

昔、私と別れて、他の男のもとへ女が走った時、とにかく、あの使いなれてる女の体を他人が抱擁するのだと思うと、若気の至りというやつで、無性に腹が立ちヤケ酒を飲んで彼女の家の前で立小便などしてやった事があったが、今となれば、あんな家庭的にはカスミみたいな女と結婚した男が哀れに思えるばかりで、いい時にあの女と切れる事が出来たものだと思こんでいる。それにこっちは、彼女達の花の盛りを満喫したのだ。泥棒Rにし



たつて、いい時に小紫と別れたもので、どうせ女とくつつき、別れるのなれば、女が美しいうちにくつついて、女が美しいうちに別れてやるべきだろう。それを花の盛りから番茶のでがらしになるまで自分の手もとに引き寄せておき、新鮮な恋人が出現したというので、まるで中古品を売りに出すように古女房と別れる野球選手や芸能人などがいるが、女と切れるにも、そこにエチケットがあつてよさそうだ。かと思うと、結婚した途端、しまった、と気がついたのに、気が弱いため、離婚などという人騒がせな事がどうしても出来ず、みすみす悪妻とわかっていながら、暗い運命的なものを背負いこんだ思いで、これと

## 女性写真モデル募集

### 分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。  
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。  
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

一生共に暮してしまふような人がある。くされ玉や引かされ玉を何時までも抱えている下手くその相場師みたいなもので、相場でも人生でも見切りが肝心だ。

女の年令についてしゃべっているうち、変な方へ脱線してしまつたが、何度もうように、女は花の盛りの時、それを賞味すべしである。また、花の盛りの短いのが、女の哀れさである。KK誌にこれまで随分と色々なモデルが登場したが、彼女達のモデルとしての生命が短かかった事にふと感慨を催したりする。何か女の命のはかなさといったものを感じるのだ。

次々と仲間の者達に注がれる安ウイスキー

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。  
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

を飲んでいるうち、次第に私は足と腰をとられて来たが、醜い人の良さそうなおばはんに変貌したかつての小紫は、何か匂いでも嗅ぐように私の顔の前に鼻を近づけて来て、いった。

「こんなにおばあちゃんになつちまつたら、女って駄目ね。だけど、貴方達男性はちつとも変っちゃいないみたい。うらやましいわ」そして、彼女は、しきりにあの頃を懐かしがって当時の話をくり返すのであった。泥棒であつたとはいえ、Rはあの頃、真剣にこの女を愛していたようである。彼女もまた、彼女の仕事は何であるかということより、日々のRの愛にこたえるべく、若い、花盛りの総てを捧げて、ささやかな幸福を追い求める気持の方が強かつたのではなからうか。

「花の色はうつりにけりないたずらに――」

私はニヤニヤとして、百人一首の小野小町の唄を口吟さもうとしたのだが、おばはんは、途中からその歌を横どりし、勘違いして林芙美子の歌を口ずさむのである。

「花の命は短かくて、苦しきことのみ多かりき」

(おわり)



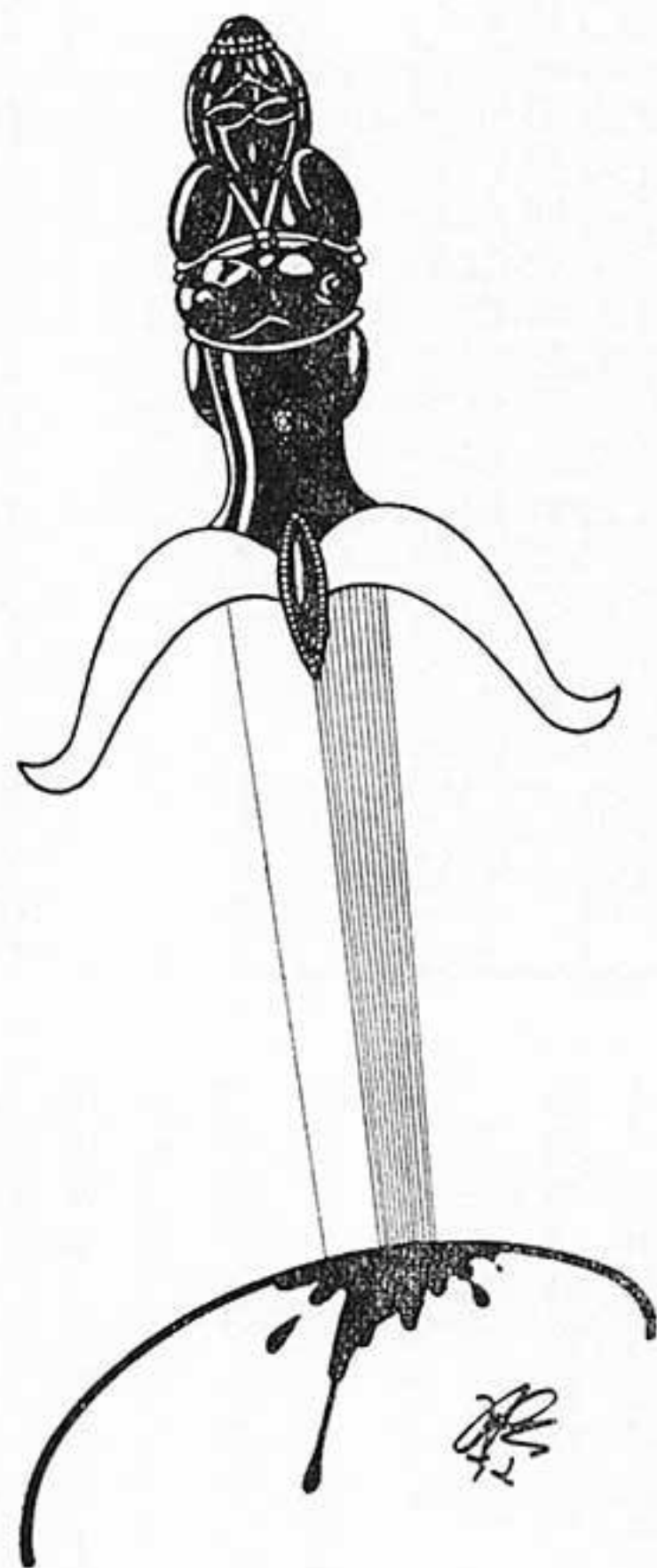
## 【ガンペッタ】

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

復

讐

(その8)



千葉青鬼

## 紹興酒

新藤が持って来たのはジョニーウォーカーのような酒壘だった。それを、緋沙絵夫人の鼻先きで得意そうに振って見せるのである。紹興酒と書いた壘の中には、コハク色の液体が入っていて、揺れるたびに小さな泡を作っていた。

「一本だけは税関も無条件で通してくれる。ごく珍らしい酒で、他では絶対、手に入らんものだ。おまえの最初のヤツを精製したんだ

からな。これを必ず三島に飲ませるんだぞ。臭みもとってあるから気付かれるようなことはない。ウイスキーに混ぜても何でもいい。勘くとも一日二ccは飲ませてくれ。異性ホルモンが高単位詰め込んであるから、ひと月も続けると、あいつの身体に変調がくるはずだ。うまくいくと、男から女に転換しはじめるかも知れない」

知識のない緋沙絵夫人に、新藤の説明の真疑はわからない。ただ、この男はどんな事でも、やってやれないことのない怖い人間だ

ということだけは骨身に徹していた。新藤にとっては、さして重要でない一つの嫌がらせに過ぎなかったかも知れないが、壘を持って帰る緋沙絵夫人の身になれば、正体を明かされただけに、言いようもない程恥かしく、又、情ない土産物だった。

二重三重に張り廻された罫を一身に負い、自分ばかりか、夫も地位も財産も、一切を投げ出すために、それもこれも代金はたった一つ、恵利香、愛娘の自由を贖うという、ただ一つの目的に向かって、緋沙絵夫人は特攻隊



員になったような気持で帰って行かなければならぬのである。今はもう、夫である三島正義を抹殺するために、復讐の鬼の手から発射された人間爆弾そのものであると言ってもいいであろう。

緋沙絵夫人の胸中に去来するものは、底知れぬ自己嫌悪以外の何物でもなかった。すべてが自らに起因し、自らの業(ごう)となつて、めぐりめぐって来たことだったからである。

「出掛ける前に約束してもらふことと、少しばかりの準備が要る」

強く半身に纏いつけられたテグス系の不快感に、身をふるわせて坐っている緋沙絵夫人を、相変らず冷酷な目つきで見下しながら新藤が言った。

「これから、車で数百キロ、それから飛行機で台北まで運んでやる。飛行機は普通の商業航空だから、おまえは変装して行かなければならない。そこで、しばらくの間、啞でつぶでめくらになつてもらふ。台北にいたらすべて、もと通りにしてやる。そこから、東京へは一人で帰るんだ。航空券もパスポートも全部調っている。台北につくまでは、云う

までもないが私の妻として行動して貰う。目も耳も使えないのだから、私の手が唯一つの頼りだ。お前は都合通りに動けばいい。従順に行動しなければ、直ちにその場でお前を殺す。いいか、そうなれば恵利香は永遠に帰れないんだぞ」

常に繰返される最後の殺し文句が、緋沙絵夫人の反逆を許さない。彼女にとっては、かずかずの縛しめよりはるかに恐ろしい効果をもつ責め具なのだ。

最初に奪われたのは視力だった。白濁したコンタクト・レンズが、緋沙絵夫人の両眼にはめこまれたのである。そして、おろおろするこの哀れな、にわかめくらに対して初步的な盲導訓練が施こされるのだ。「坐れ」「立て」「あるけ」「階段昇れ」「右」「左」等の合図について、覚えこむまで徹底的なリハールが繰返される。後手錠の無防備な裸身が、目を喪ったために、一層頼りなく、ただどしく揺れ動くのであった。その上、使命を果すまで脱却することの出来ないプラスチック棒が、又、それを固定しているテグス系が、おぞましい感触となって緋沙絵夫人を責めさいなむ。

そして、正確に新藤の狙い通りの効果を挙げるテグスの刺戟は、緋沙絵夫人に、ある大切な事柄を思い出させたのである。

「あのウ、途中で、御不浄へ行きたくなったときは……。」

と口ごもるのに、

「ほんの数時間だから辛抱するんだね。少しは昨日までに訓練してある筈だろう」と冷い返事がハネ返ってくる。

「しかし、そそうでもされると私の方が困るから、これを穿いてもらつつもりで、整えてあるんだ」あらかじめ用意されていたのは、薄いラバーパンティであった。

いやがる緋沙絵夫人を、婦人科へ行ったときのよ様な恰好にさせた新藤は「暫くの間、用を足せなくなるから、完全に済ませておくんだぜ」

いやもおうもなくカテーテルが使われ、ポンプで完全にカラッポにされてしまう。それから浣腸。緋沙絵夫人の羞恥心は、とことんまで踏みこじられ、その意思も全く無視されてしまったのである。おぞましい器の中に、Aリングをくぐり抜けるようにして、恥辱の固りが落ちた。

綺麗に拭い、熱いタオルに包み、カブレ止



めのクリームを塗りこむ作業も、邪怪な新藤の手で行なわれたのである。緋沙絵夫人は、死ぬほどの気分で、これらの凌辱にも耐えねばならなかった。

ナプキンが貼りつき、その上にオシメのようなラバーパンティがピッタリと密着してしまふ。

「ようし、一丁あがりだ。これで用足しの方は心配ない」

笑いを含んだ新藤の声が緋沙絵夫人の耳に入った。カテールに見舞われたあとが幽かに痛む。それが、かえって堪えねばならぬものが意識されるような気さえするのである。あわてて、首をふって、そんな気持を追い払おうとする。

二番目に奪われたのは、緋沙絵夫人の声であった。

喉の奥の方に、何やら差し込まれると、不思議なことに声帯が全く働かなくなってしまう。ただ、ハア、ハアと息が洩れるばかりで、何かしゃべろうとしても金魚のように唇をパクパクさせるだけにすぎない。読唇術師にでも会わない限り、緋沙絵夫人は、その言葉を使える術を失ってしまったというべきで

あろう。

新藤が冷酷な手付で三番目に奪おうとしたのは、緋沙絵夫人の夫人の聴力であった。脱脂綿を外耳道の奥に押し込み、耳壁に特殊な糊を厚目に塗りつけ、耳道を型どった柔いゴム栓を押し込むと、耳の穴は完全に密閉されてしまうのである。

右耳を、そんな風に念を入れて封印したあとで、左の耳にかろうとした新藤は、急に思い出したという風に、さも重要なことだからという口調で、最後の聴覚をおびやかすのであった。

「そうそう、言いわすれていた。アノ、おまえの抱いている例の棒にはな。プラスチック爆薬を仕込んであるんだ。やわらかい粘土のような爆弾さ。そのままにしているうちは心配ないが、ただ脱走そうとすると信管が働いて爆発する仕掛けになっている。おまえばかりか、それを引っぱったやつまで吹き飛ばしてしまうだろう。もしそれが三島だったら、もっけの幸いともいおうかね」

「悪魔！ 悪魔！」

心の中でそう叫びながら、緋沙絵夫人は総身から血が抜け去って行くような気がしてい

た。自分の意識の中心部に、氷のような感触を伴って、ドッカーリと胡坐をかいている爆薬。身体が凍ってしまいそうな恐怖が渦巻いていた。

最後の知覚である左耳にゴム栓をはめられながら、緋沙絵夫人は、次第に遠のいて行く意識をどうすることも出来なかった。

## 帰 国

気がつくと、緋沙絵夫人は自動車らしい動きに揺られていた。目も耳も役に立たないで、ただ身体に伝わってくる振動だけが、それと判断させたのであった。

支那服のようなものを着せられ、靴もはかされていた。有難いことに両手も自由になっている。

無意識で眼をこすろうとする。その手がピシャリと払われた。太腿を、いやというほどツネリ上げられる。絶対、やってはいけないという合図だった。忽ち、一切の記憶が蘇えってくる。可愛い恵利香を救けるためには如何なる苦痛であろうとも甘んじてこらえて行くこうと、改めて思い定めるまでもなく、事は既に始まっているのだった。



そうこうしているうちに、

車が停まった。今度は車椅子

のようなものに乘せられて、

長い長い廊下のようなところ

を運ばれて行く。途中、何回

か立ちどまって待たされた

が、結局、タラップのような

ところを昇って、すぐ近くのクッションに腰

かけさせられると、腰にベルトがしめつけら

れる。これで旅客機に乗ったのだということ

が緋沙絵夫人に諒解された。

やがて、エレベーターが昇るような感じが

伝わってくる。きつと、飛び上ったのであろ

う。隣に坐っているらしい新藤の手が、小ま

めに動いて、彼女をくつろがせようとしてい

るのがよくわかる。素晴らしいワインが唇を割

って注ぎこまれた。身体中がポカポカして、

いい気持になる。つい、うとうと眠ってしま

ったらしい。

やがて、肩を叩かれて、立ち上れという合

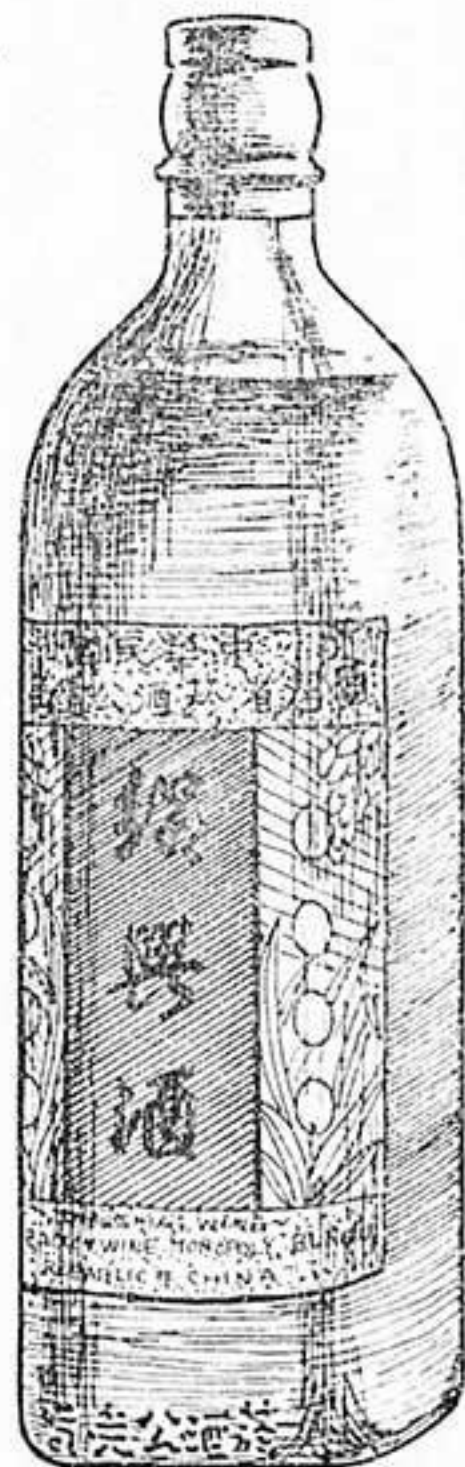
図がある。再び、抱きかかえられるようにし

てタラップを降りる。車椅子に掛けさせられ

る。さっきとは逆の順序で、やがて自動車に

揺られて暫く走ると、今度はフカフカしたカ

ーペットのの上を歩かされる。きつとホテルへ



入ったのだらうと推察する。確かにそうだ。

エレベーターが何階か上に緋沙絵夫人を運び

上げてくれた。再び、カーペットの廊下らし

いところをたどって、やっと目的の部屋に到

着したらしい。

—— いたいっ。——

思わず叫んだ積りが声にならなかった。両

耳をピタリ塞いでいたゴム栓が、思い切り

引っぱられて抜かれたのである。

「さあ、着いたぜ。ここは台北、アスター・

ホテルだ」

新藤の声が、隔絶を解かれたばかりの耳に

痛いように響く。

「今は四月二十六日の夜だ。明朝八時発のC

AT三〇便にお前の席が予約してある。東京

へは十二時半に着く予定になっている。ボー

イが五時半に起すから、その後は自分で帰っ

てくれ。命令を忘れるんじゃないぜ。いい

な」

緋沙絵夫人は小さくうなずいた。

「よろしい。それでは明朝までぐっすり眠っ

てもらおう。これは安全な睡眠薬だから心配

ない」

何やら錠剤のようなものが口におし込まれ

る。与えられた水と一緒にゴクリと呑み込ん

でしまふ。もう、ここまでくればと、ホッと

した気持がしないでもない緋沙絵夫人の立場

だった。

むしろ、やさしい手付で支那服を脱がせる

新藤の腕の中で、甘えるような姿勢のまま、

緋沙絵夫人は久しぶりに拘束のない身を横た

えて、安らかな、そして深い寝息を立てはじ

めたのであった。

モーニングコールされるより大分前に、緋

沙絵夫人は目を醒した。熟睡したあとの頭は

サッパリと冴えわたっていた。眼も口も一切

がもとに戻されていた。腰下の不快さがなけ

れば。苦しみぬいた昨日、おとといが悪夢に

すぎなかったのではないかと思われる程、爽

快であった。

ベッドに起き上って、久方ぶりに自分の意

志でスタンドをつける。外はまだ暗かった。



正面の鏡に映った緋沙絵夫人は、も早、いやらしい金髪ではなかった。

——嬉しい。——

裸であることも忘れて、元に戻った自分を写す鏡に見とれていた緋沙絵夫人は、ハッとわれに戻ると、幾分あわてたような足どりでバスルームに入った。

全裸であるというのは正確ではなかった。まっ黒なラバーパンティが腰のあたりを蔽っていたからである。

大鏡に写ったソノものが何とも言えずいやらしかったので、急いで脱ぎ棄てる。その途端、ああ、忘れようとしても忘れ得ない屈辱の封印、縦横に喰い込むテグス糸が、汗と分泌にむされて心持ちふくれたような臀部をクリ上げ、細い溝を刻んで鈍い光沢をはなっているではないか。嫌でも、いまわしい記憶が戻ってくる。

重くのしかかるのは、これから実行しなければならぬ不愉快な使命だった。しかし物は考え様で、若しこの苛酷な使命が与えられてなかったとしたら、又、三島正義に対する嫉妬心が惹起されていなかったとしたら、あれ程の凌辱を蒙った以上、自暴自棄になった緋沙絵夫人は、われとわが命を断ってしまった

ていたかも知れないのである。人間の感受性は、あくまで比較的、相対的なものである。

だから、現在の緋沙絵夫人には暗黒の将来を考えるよりも、テグス縛りの屈辱を忍ぶよりも、久しぶりに勝手に動かせる両手が、行動の自由が、より価値があるように思われたのであろう。

けがされた肉体だが、まるで、そうしたらもどおりになるかと思われる程熱心に洗った。長々とバスに浸っていると、思ひなしか心の痛みさえ、多少軽くなるようであった。

部屋には、緋沙絵夫人の衣服や持物が、家を出て来たときの俤揃えられていた。僅かに増えたものとしては、悲しい思い出の紹興酒の一壺と、これは又何を意味するのか、新藤が使っていた「新藤かね」ソックリの火傷マスクだった。

丁度、身仕度が終わったときに、ボーイがやって来て、車の用意が出来たと知らせた。CAT三〇便は、予定通り台北の松山空港を離陸して正午過ぎ羽田へ安着する。

ろくに荷物を持っていない緋沙絵夫人に、税関の検査は問題のある筈もなかったけれども、検査官が何気なく例の紹興酒をとりあげたとき、顔が火のようにほてってくるのを、

どうすることも出来なかった。

## トシ子

警察も夢中になって捜索を続けていた。しかし、国際犯罪は仲々効果があがらないのが通例である。恵利香の失踪が迷宮入りに近くなってしまう上に、緋沙絵夫人が行方不明になってしまったという届け出があった。人間蒸発が尠くない昨今ではあっても、これには符節を合わせたように香港がカランでいる。H・MISHIMAなる女性が二十四日羽田発のPAA一便に塔乗し、香港に出国したことを警察は確認していた。連れはなく、単身だった。

何故、急に出掛けなければならなかったかという理由は判らないにしても、これでは誘拐は成り立たない。したがって、このことは公表されず、厳秘が保たれることになった。

インターポール及び香港政庁に向けて照会の手続もとられたけれど、香港の警察が行動を開始したときには、H・MISHIMAは既に台湾に出国してしまっていたのである。こんな連絡をやりとりしているうちに、捜査の裏をかくようにして緋沙絵夫人は帰国してしまったことになる。このことを警察が知っ



たときは、もう後の祭りだった。

帰国直後に緋沙絵夫人がした行動は、確かに異常だった。普通なら夫に電話をかけるか警察に連絡するかしたかも知れないのが、恵利香救出に憑かれた彼女は、夫の私行に関する疑惑が加わって、一層かたくなになり陰険になってしまっていたのである。

真直に車を走らせたのは四谷にあるホテル<sup>オー</sup>Oであった。羽田空港の直通電話でリザーブした名前は何と「新藤かね」であった。更に近くのデパートへ行って買い求めたスポーツテイな黒のセーター、黒のスラックス等に着替えて、ちょっと髪型を変えサングラスをつけると、全く見違えるような容姿になってしまっていた。

り存外スマートな漁色家として顔が効いた。

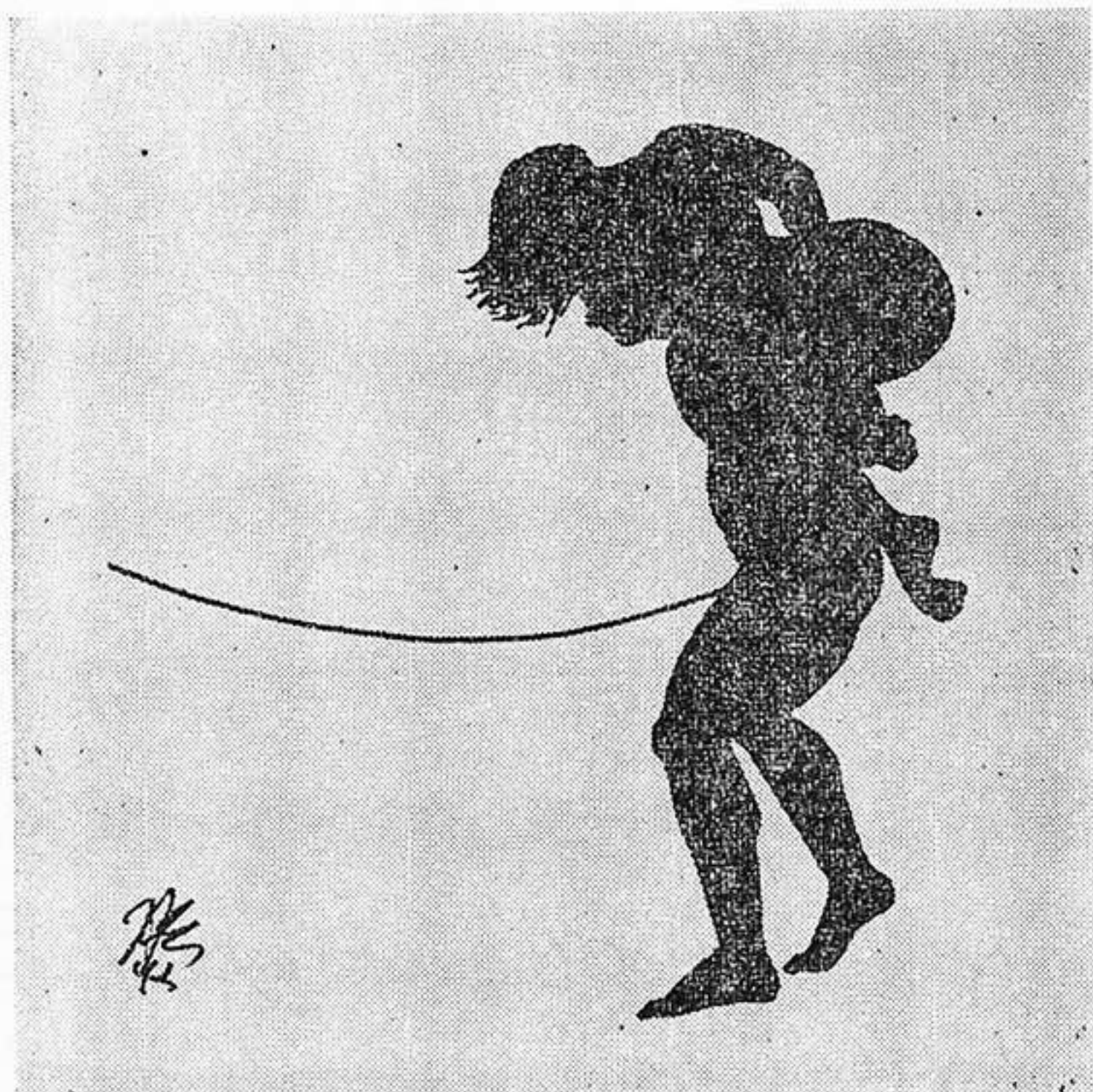
小淵トシ子、二十二才、可憐で男好きのする肢体の持主だった。入社して半年も経たないうちに三島社長目の目にとまった。慎重な配慮の下に秘書課に転属が決り、社長室を受持つことになった。

あまり豊かでない家庭に育って、苦勞して大学を出た彼女は、よい意味でも悪い意味でも野心に燃えていた。未知の経験に対する強い好奇心があった。それが又、彼女のウィークポイントであることすら気付かなかった。

社長の側近にあつて、痺れる程豪華な生活を見聞きするにつけ、虚榮とも知らずに、そうした状態を自分のものにしたいと憧れるようになる。

三島正義には、熟れた柿が落ちるように思われた。若干の経緯があつて、トシ子は、その実り多い処女性を、彼のために捧げるようになった。

やがて、彼女は家を出て、都心のマンションに、ひっそりと暮す女になった。三島が一軒のバーに支払う金額で、彼女は結構満足して日を送っていた。



張

三島正義は事業家としても、又、一個の人間としても非常な精力家だった。家庭的には養子であつたし、莫大な財産が依然として殆ど緋沙絵夫人の名義であつたということから、夫人に對しては頭が上らなかつた。そのくせ、世間的には尊大で我儘な男として通っていた。家の中で我慢させられた鬱憤を、外で晴らそうというところが多分に見られた。異性関係にしても、緋沙絵夫人の世間知らずなのをいいことにして、巧妙な手口で欲望を満たすのに不自由しなかつた。夜の社会では、資力もあ



一カ月前に恵利香が消え、その行方もわからないうちに、今度は緋沙絵夫人が突然香港へ飛んでしまったと聞いて、三島にはその動機が理解出来なかった。何やら無性に腹だたくしくさえ思われた。それが、彼を反撥させることになる。

二十四、二十五日の両夜をイライラしながら過したあとで、事もあるうにトシ子を自宅へ呼び寄せたのである。お手伝いは適当な口実をつけて田舎へ帰ってしまった。別棟に住まわせている爺や、婆やは、そんな事には全く関心はない。

トシ子も今は大胆になっていた。自分の夢が実現したかのような錯覚に陥っていたからである。緋沙絵夫人のいなくなったことは、彼女には、チャンスのように思われるのだった。夫婦気取りで、トシ子は本宅に乗りこんで来た。

三島は、先年渡米したとき、フットしたことでLSDをたしなむようになっていた。勿論緋沙絵夫人には、その事をひたかくしにしていたけれど、外で遊ぶときには、女と一緒によくこれを常用していたのである。

それで、二十六日の夜も、三島とトシ子は

LSDに酔い痴れていた。二人共素裸になって、居間のゴージャスな絨毯の上に、ごろごろ転りながら、この世ならぬ陶醉感に夢幻の境地にひたっていたのである。

そんなときに、不幸にも、緋沙絵夫人が忍び込んで来たのである。忍び込んだといっても、勝手を知った我が家である。鍵も持っている。忽ち、一切が緋沙絵夫人の前にあからさまになってしまった。新藤が言ったことは矢張り本当だったのである。このときはじめて緋沙絵夫人は般若のような表情になった。新藤と立場は違うが、又一人の復讐の鬼が生まれたといえよう。

新藤かねに似た火傷マスクの用途が、緋沙絵夫人には明瞭になった。夫人はそれを顔に はめて、わざと髪をふり乱した。納戸から長いネグリジェを出して来て身につける。幽鬼のように凄愴な姿だった。

「誰だ？」

夢うつつの中に、白い人影を認めて三島が叫んだ。人影はそれに答えず、スッと顔を近づけて来た。忘れようとしても忘られない顔がそこにあった。髪を乱し、火傷でひきつれ

ていたが、三島にはそれが誰であるかハッキリわかったのである。生きているはずのない相手だったにも拘らず、幻覚剤は三島に対して想像以上の効果を示した。彼は一足飛びに二十年前の状態に戻ってしまったのである。必死で逃れようともがくが、手足が痺れて思うようにならない。大の男が、不甲斐なくも女の細腕に縛り上げられてしまった。

一方、トシ子の方は、事の真相を理解出来なかったのも当然であろう。薬のために夢と現実とを判別し得ない状態におかれていた彼女は、三島が後手に縛られている光景を見ても、助けようとするどころか、かえってエキサイトするような始末だったのである。したがって、緋沙絵夫人が彼女を高手小手に縛り上げてしまうことも、赤子の手をねじるより容易なことであった。

二人が幻覚剤に酔っていたことが、どのくらい緋沙絵夫人の助けになったか知れなかったのだった。運命の皮肉さは、二人の快楽の追求が、そのまま、同時に、二人を破滅に導く因縁となってしまうわけである。

二人の自由を奪ってしまった以上、緋沙絵夫人の優位は正に決定的であった。女夜叉の



本性をむき出しにした緋沙絵夫人は、全裸の三島をひき倒して、急所を力いっぱいひねりあげたものである。昼間、オフィスで威張っている彼を見馴れた社員たちに、この光景を見せたら呆れる前にフキ出してしまったかも知れない程であった。全く、三島正義ともあらうものが、赤裸にひきむかれた上に、哀れな悲鳴をあげて、ぶざまにノタうち廻っているではないか。

してやったりと内心でほくそ笑んだ緋沙絵夫人は、二人の口に猿轡を、はめてしまう。三島はトシ子のパンティを、トシ子は三島の下帯を、夫々に相手の下着を喉の奥まで押しこまれて目を白黒させていた。

嫌応なく現実にはききもどされた三島は、薬の効き目もどこへやら、両眼を三角に見ひらいて、恐怖の表情をありありと見せながら、それでも、夢中でいざって逃げようとする。緋沙絵夫人の手が、フト伸びた。もう一度掴まれてしまった三島は、急所であるだけに、もう逃げるも退くも出来ぬ。ぜいぜい息をはずませて、屈辱と苦痛に耐えるのがせい一ぱいのことであった。緋沙絵夫人は容赦なく、腰紐で力一ぱいククリ上げてしまった。その紐を引張られては、立てといえは立たねばな

らず、歩けといえは歩かねばならない。少しでも逡巡を示そうとするだけで、たちまち激痛にひきさかれんばかりになってしまふからであった。

緋沙絵夫人の沈黙は、二人の犠牲者を余計萎縮させていた。手まねで三島をしゃがませた上で、その後手縛りの内側にトシ子の両足を入れるように命じる。おそろしさのあまりに痴呆のようになったトシ子は、ノロノロと言われた通りにするのだった。紐を引かれて三島が立上がりかけると、足を浮かせたトシ子の上半体が、グラリと倒れかかる。三島の後手縛りが作った輪の中では、豊かなトシ子の臀部が通るはずもない。僅かに太腿の中程がはまったあたりで止まってしまふ。そこで、三島のズボンのバンドを引き抜いて、トシ子の細腰に廻し、三島の首にひっかけて尾錠をしめあげてしまふ。つまり、トシ子は三島に背負われるような姿勢をとらされてしまったわけである。よろめきながら辛うじて立ち止った三島は、余程うまく重心をとらないと、自分の首が締まってしまふのだということを覚った。も早、うちひしがれて観念する他はなかったのである。

邪慳に紐が引かれた。トシ子を背負った三

島は、昔の渡し場人足のような恰好で、しかし凡そそれには及ぶべくもない危っかしい足どりで、緋沙絵夫人の命ずるままに歩かされて行くのだった。

この、いささか滑稽な道行きの終点は、事もあろうに、例の土蔵だった。二十年前、新藤かねが奇禍に会い、血涙を吞んだ修羅場だったのである。

プーンと鼻をつく土蔵特有の湿気。

不気味さを暗黒の中に包みこんだ妖気。

突然目の前に、苦痛に歪んだかねの顔が、大きく浮かび上るのではないかとも思えるような気味悪さ。

どこからか、吸りなくような恨みをこめた悲鳴が聞こえて来る幻覚。

それらの奇現象に、身に覚えのある者ならきっと悩やまされるであろう場所に、その本人の緋沙絵夫人が、囚虜二人を引立てようとするのである。

三島邸の大きな庭は、ひっそりと静まりかえって、中天にかかった月が囚われ人達の裸身を白々と照らしていた。芝生を踏む三島の素足が夜露で濡れた。

(未完)



----- 雑 ----- 報 -----

# 倒錯人間の世界

## 丸 鬼 土 佐 渡

### 映 画 評

立体映画というふれ込みの「変態魔」の見どころは、清水世津がさんざん責められるところで、裸でタルの上に乗せられ、両手は後手で天井に吊られ、両足はタルの左右に分けられ、夫々の足首がうしろからロープでひっぱられ、いやでも両足が裂かれるような姿勢を強要されるシーンと、渚マリが俵編みの道具に後手でまたがらされて木馬責めの恰好にされるシーンがよい。

○ 「惨奇、生体実験」は小森白のもので、女の悲鳴など、どうも惨酷ばかり強調されて、優雅さがなく、私の趣味に合わない。

○ 山本晋也監督の「変質者」は谷ナオミの魅力を最大限に生かした傑作といえよう。ナオミの踊りもセクシーで、大きくて美しい乳房がクローズアップされている点、撮影も洗練されている。ナオミが縛られて責められる場面もあるが、谷ナオミの魅力あるポーズが観たい方はこれを見られるといいと思う。

○ 「札つき処女」もスチール写真には谷ナオミが責められるシーンが出ていたが、予期した程でなかった。女三人がかりでおさえつけられて、内股をローソクで焼かれるとか、共演

の美矢かほるが縛られてさんざん責められる場面はあったが……。

奇ク一月号で、団さんと辻村さんが左近麻里子を縛りながら色々対談されていた中に、団さんが、左近さんに映画に出演してもらってはといっておられたが。小生も賛成です。左近さんが、ギャラの多少で奇クを去られるようなことがないという保証で、左近さんが映画に出るといふ見返りに、他のピンク女優を奇クモデルになってもらうという約束が成り立つならばです。

ピンク映画で物足りないのは股間縛りが無いということだ。映倫にふれる危惧があるのかも知れませんが。今まで見た映画の中の股間縛りといえば「甘い暴力」のエルケ・ソマーで、肩、乳房の上、下、胴、腰、膝をロープできつく縛られ、胴のロープは食いこんでいる。そして後手の手首と足首が連結されて逆エビにされ、肩から、臍を通ったロープはGパンに食い込んで、横臥させられている。その前で多くの若い男女が踊っている。乱痴気パーティーの犠牲にされているソマーは縛られたままからかわれる。これは帆船の中のパーティーである。ところがその船が火事になり縛られたソマーを残して小舟で皆逃げてしまう。後で彼女に気がついて二人の男が帆船にひきかえす。船室では煙にまかれながら、不自由な体をいも虫のようにくねらせな



がらソマーが絶叫している。逆エビにされている手足を解こうと必死でロープをひっぱっている。二人の男が彼女をみつめて甲板にかついでくる。気が狂ったように泣きわめく。もがいたために縛ったロープが一層食い込んでいる。なかなかそのロープがほどけないためにビールビンを割ってそれで切る。

ヌーベルバーグ作品で、この本式の股間縛りを参考にすべきである。

ウソなしのこの縛りにあったエルケ・ソマーは、どういう気でいたろうか。このようなグラマーな彼女が結婚して浮名もたたず、他の俳優のように離婚さわぎもないのは、このあたりに秘密がありそうだ。

「蒙古の嵐」もすばらしかった。ジンギスカンには何人かの子がいたが、彼は末っ子のテムジンに自分の跡を嗣がせようとしていたが兄はそれが気に入らず、その妻にそそのかされて兇暴の限りを尽すという筋で、その妻にアニタ・エグバークがなり、サドの限りをつくす。西欧からの若い女性を捕えて、拷問をする。全裸にした女の両手首を天井から下がっているロープに左右別々につるし、二人の兵士が左右でぐっとロープをひき、彼女の足が床につくかつかないかの状態にする。そして、アニタ・エグバークがそのむき出しになっている女の乳房を何回も強く鞭うち、失神

させてしまう。

また、三角状に棒を組みあわせた上に、男女共股を開かれて縛られ、火焙りに合うシーン。皆ぐったりしたり、悶えたり。このようなオーソドックスな、有無をいわせぬ責め場は今後出て来ることはないだろう。私はこの映画は三回観た。日本拷問刑罰史六回に次ぐ記録。甘い暴力は二回観た。

イタリア作品だったと思うが「髑髏砦の決闘」で美しい女が水車式の機械で、歯車がまわるにつれて、女の両手をまとめてその手首を縛っているロープが、段々天井に上がっていった、女は徐々にぶらさげられていき、ついに足が床をはなれて完全に吊り上げられてしまう。すると彼女の足下の床がパツクリと口を開け、鋭いトゲが幾本も彼女を待ちうけている。彼女はおそろおそろ下を見てそれを知ると悲鳴をあげる。トリックなしで、完全に吊りあげられるまでの過程は、吊り責めの最高傑作と思う。

もう一つ、同じ女性がX字の礫台に架けられ、背中の着衣を裂いて、さらされた肌を鞭うたれるシーンもよかった。

「吸血鬼」などの一連のものに、美女を鎖で地下につないで置いて一人ずつ、せむしの男がクロロホルムをかがせてから実験台に縛り

つけるシーンで、あばれまわるところを無理矢理クロロホルムをかがされてぐったりなるところがすばらしかった。

「白い肌に狂う鞭」では女性が背中にみみずばれを幾筋もつけられるマゾ的シーンがあるが、タイトルから想像する程ではなかった。

「悲しい奴」では、いろいろの責め道具と、女性が、鞭うたれ、鎖でつりあげられるシーンがよかったが、他には期待した程のものはなかった。

## 書籍紹介

「スター二十四時間」四十三年一月号

この中の特選・世界のマル秘ショーの圧巻は、ヴィヴィアン嬢とロレッタ嬢の凄絶な鞭打ちショーで、ロンドンのある特殊地下劇場で、病的なまで白く、しかも豊富な肉体を持ったロレッタ嬢は、全裸の素肌を家畜のように鎖でいましめられ、恐怖と恥辱に身をふるわせてうずくまっている。悪魔の化身のようなヴィヴィアン嬢が、情容赦もなく、そんな彼女のうえにムチをふるう。すでに真白なロレッタ嬢の肌は破れ、みみずがのたうっているようにハレあがっている。というもので、写真は四葉。

黒光りする皮服をつけたり、特殊な皮のマ



スクをつけたり、あるいは全裸でマスクだけをつけ、サド的な目をランランと光らせたヴィヴィアン嬢に、ロレッタ嬢がいずれも全裸で全身をさらけ出して磔にされ、あるいは鎖の手錠と首カセを入れられ、あるいはうつぶせで尻を、あるいはあおむけの無防備の状態、乳房といわず、胴といわず、太股といわず臀部、背中と所きらず、太い鞭でうたれて、みみずばれが幾筋も、白い肌に出来ている。その悲鳴をあげながらも、マゾ的な目を光らせている、実に日本では作れないような光景に、思わずゾクツとした。同じ嬢達の異った写真が二月号「beauty」にも三葉でいた。ロレッタ嬢が衣服を着てるのもあったから、多分ヴィヴィアン嬢に着衣をむかえたのだろう。すばらしいの一語。

同じ、「スター二十四時間」に、0次元の<sup>ゼロ</sup>世代の事がのっている。それには、猿轡をされ、手足を縛られ、あるいは皮の猿轡に穴をあけて、そこから火のついた煙草をのまされている美女等がいた。実話雑誌二月号にも、同じ関係の記事があった。女達が前手で縛られ、目だけ見える皮マスクを顔一杯かぶせられたり、貞操帯様のものをされたり、足を吊り上げられたり、手を高々と吊りあげられたりした写真がのっていた。実は去年秋頃、テレビで日曜の圭三訪問の時間にとりあげられ

たもので、銀座のど真中をガンジガラメにしまった女をマッパ様のものに乗せて男達が引きずっていき、デパートに入る。そこで、浅いプールの中で女を水づけにしながらぐるぐる回ったり、縛られ、目隠しされて座っている女に鳥の丸焼を食わせたりする。女は三人いたが、いずれも美人揃いで、その異様な雰囲気酔っているようだった。

サド、マゾパーティを宗教化したようなもののように思えた。

そういえば最近、秋山夫妻、青木順子さん等に刺激されてか、ストリップの中に、サド劇を加えるようになってきた。これも時代の流れだろう。曰く夜光ヌード、火焙りヌード、アンジー炎一行の残酷劇、レズ、等々

「ヘンな雑誌」一月号には秋山夫妻のサド・マゾシーンがあった。ローズ秋山の乳房と股間を縛っての擦り責め、ローソク責めをするところがあった。場所は東京新宿の実験小劇場・モダンアートとのこと。週刊誌「サンエス」十二月二十六日号にはもっとリアルに夫妻のプレイを写していた。

新聞にも面白い読み物がある。ちょっと前大阪日日新聞の週間読み物、「にしきへび」(池田一彦)では

……縁側の上から、おわんがあごをしゃくろ

と、二人のお末番は荒なわで錦を後手にしぱり上げた。「腰巻きもとれ」というおわんの命令で、二七才の錦は一糸まとわぬ丸裸になった。「さ、やれ、ばばが検分いたす」との号令で、一人のお末番が錦の頭髮を後ろからつかんで自分のひざもとに引きつけ、動かないようにすると、片手で、錦ののどをぐっとしめ上げる。息ができないので、口をひらくと、とたんに用意した竹刀の先がいきなり五寸もぐいと突っ込まれてきて、のどの奥へはいる。竹刀の女中はそれをぐいぐいとこねまわしたのでたまらない。錦のノドの肉が破れて、やがて鮮血がタラタラ。

縁の上ではおわんがさもころよさそうにそれを眺めて「もっとやれ」。

竹刀の先はのどの肉を突き破っただけでなく、ものの一尺も遠慮なく突込まれたので、竹刀の先は錦の胃袋にまで達し、呼吸もできない。彼女は苦しさのあまり、目を白黒させた。庭に投げ出した両足と腰とは上体の苦しさを受けとめる唯一つの場所として、へびのようにのた打った。

## TV 紹介

TV十二月二十七日の「風」絵姿五人小町では、江戸の五人小町といわれる美女が次つぎと誘拐される。美女が、縛られ、猿轡をされて、多くの男にかつがれて行くシーンがよ



い。これらの女性には西尾三枝子、真理明美等がある。顔の大笑しで、齒の間にグツとタオルをおしこまれるところがある。

○ 十二月二十九日TVザ・ガードマン「マッチ売りの少女は大晦日に死ぬ」で、マッチ売りに扮した梓英子が、インド魔術団がやっているように、胴を真つ二つに切られるところがある。シッポをつかまれて麻薬密売団につかまった梓等はなぐさみものとして本当に胴切りにして殺されようとする。まず梓が両手を胴と一緒にしばられてひたたてられ、胴切り台の上に縛りつけられ、丸鋸を押しあてられて、切られかける。油汗をだしてこらえている梓の顔が、鋸の切り込む震動でガクガクゆれるシーンが圧巻。

○ 正月から三田佳子が縛られる。三日、半七捕物帳で、おいらんになった三田が帯で乳房の下をきつく縛られる。そして弓恵子も半七に捕えられてこれもやはり乳房の下を、ロープできつく縛られてひたたてられていく。

○ 初姿銭形平次では、扇千景が船の柱に縛られて太綱でぐるぐるまきにされる。(四二・三・五)

○ 朝日テレビ逃亡者で美女が本格的な後手猿

轡をギョツとかまされて「ウツ」とうめき、顔が変形するくらい。(四二・三・四)

○ 三人の侍で三条江梨子が屋形舟の中で後手に縛られ女将にあごを手であおむかされるシーン。また、その女将が三匹の侍の一人に猿轡をされ、後手で舟の中にころがされもがくシーンがあった。(四二・二・三)

○ 毎日テレビ、旗本退屈男「謎の南蛮太鼓」の清朝の曲芸の場面で、かどわかされてつれてこられたお姫様(山東昭子)を箱にとじこめ、外から大太刀をさし込んで殺そうとするシーンあり。皮製のサルグツワを顔一杯にかまされて、箱の中にとじ込まれ、外からジワジワと大太刀の先が猿轡された彼女のおのく目の前へせまってくる。(四二・四・二五)

○ 「富士に立つ影」(毎日)では葉山葉子が誘拐されて来て、胸の上を縛られて床の間にながれている。縛って猿轡を布で大きくされて駕籠で運ばれる。更には眠り薬で眠らされて、白い腕をまくり上げられ、そこへ刺青をされるシーンあり。(四二・四・二五)

○ 追加を一つ。何新聞の切り抜きか不明になったが、鈴木一郎作「黒指の踊り」の中に、

次のようなものがある。

何をされても、白人娘は全く気付かない。

やがて、一人の妻が台所から一枚の薄い木皮を水に浸してもって来た。

残った二人の妻が白人娘の四肢に、自分の全体重をかけて抑えつける。

その薄い紙のような木皮が、ぴたりと白人娘の鼻口を塞いだ。

そのまま、顔の上に一人の妻がまたがって白人娘の豊かな乳房を圧した。「ぐっ、ぐっ……」意識が戻ったのか、この時、白人娘のどが鳴った。が、二人の妻は全重量をかけて、それを防いだ。「……」ソンサリカが低く叫んだ。と、白人娘の顔の上に乗っかってる妻が、奇妙な声をあげて笑った。

その太腿を奔流のように液体がほとばしった。白人娘の顔が、僅かに左右に振られた。

体内から奔流をほとばしらせている一人の妻の、白人娘の乳房を弄んでいる双手に、ぐっと、力がこめられる。

根元からつかまれた乳房が、そのまま胸の中にめり込んでいくかのように、圧力を受けてきしんだ。

そして数分、びしょ濡れの寝台の上に横たわっているものは、すでに白人娘ではなく、一個の物体で、呼吸は全く絶えていた。



マ  
ゾ  
ヒ  
ス  
チ  
ツ  
ク  
||||  
ス  
ト  
ー  
リ  
ーニ  
ュ  
ー  
ト  
ラ  
ル  
・  
ゾ  
ー  
ン

中

立

地

帯

み

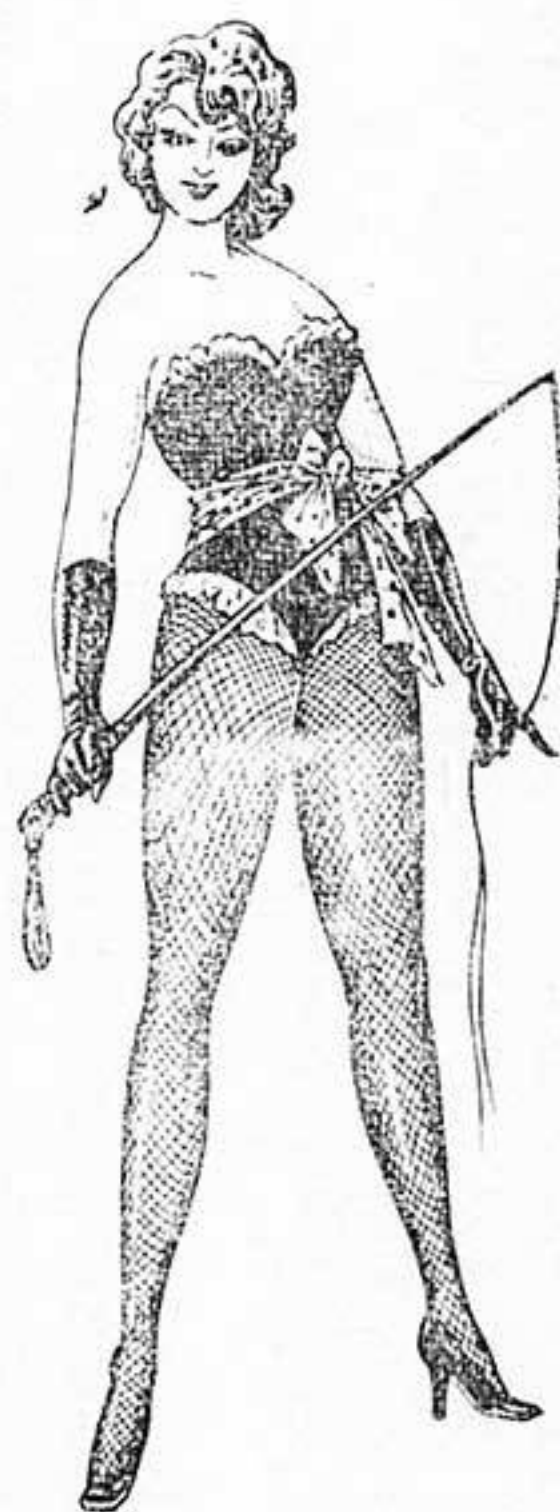
は

ら

ひ

ろ

し



午後二時四十五分、熱帯地方特有の強烈な日光が窓の<sup>シャッター</sup>鎧戸を通して、壁に縞模様を作っていた。

ベッドに横になったまま腕<sup>ローレックス</sup>時計を覗いた淳は、枕許のシガレット・ケースに手を延ばした。カチリとスターリング・シルヴァのダンヒルを鳴らして、ゆっくりと紫色の煙を天井に吹き上げる。

「You're awaken, davin —— 起きていたのね。」

リンダが、小麦色の腕を褐色の淳の胴に廻してくる。

二人ともベッドの上で全裸だった。

「we've only 5 minutes to set us ready —— 五分しかないぜ——」

淳はベッドの上に半身を起し、吸いかけのケントをリンダの半開きの唇にさし込んだ。リンダはケントを口にくわえて、ベッドに横になったまま未練たらしく手をのばして、ベッドに腰をかけて靴下<sup>ソックス</sup>を穿いている淳の背

中を撫で廻した。

淳は立ち上ってリンネルのワイシャツを素肌につっかけ、部屋の隅の洋箆笥の扉の裏側についた鏡の前でネクタイを結び始めた。リンダのプレゼントしたクリスチアンディオールシルクである。

リンダは起き上ってきて、全裸のまま下着類をひとまとめに抱えこんで浴室<sup>バスルーム</sup>に入っていく。全身みごとに小麦色に焼け、ビキニの胸と腰の水着のあとだけが、目にしみるよう



にくつきりと白い。

「さあ、急いでくれよ」

淳がすっかり身仕度を終って、ベッドに腰を下ろして二本目のケントに火をつけた時、白いブラウスにグリーンのスラックス姿のリンダは、鏡の前で顔を直しているところだった。

すばらしく均整のとれた、みごとな肢体である。

「Don't beso nervous, darling, — そんなにいわないで——」

リンダが困ったように眉をひそめて振り向く。澄んだ秋空のように青い目だった。金色の髪はボーイッシュに短く刈り込み<sup>カット</sup>されている。首筋が芸術的に美しかった。

彼女は、いつも困ったときのような表情をしていた。悪戯<sup>いたずら</sup>っぽく反り気味の鼻、小さくシャクレタ顎、そして困ったようにひそめた眉が、彼女の表情にいかにも可愛らしい印象を与えていた。

二人は揃って淳の部屋を出た。淳が扉<sup>ドア</sup>に鍵をかけた。淳が先に立って薄暗い階段を下りてゆく。

フランス人の経営する居酒屋<sup>ラ・タヴェルン</sup>の二階が淳のねぐらだった。

外は午後の陽差しがまぶしく、目が痛かった。並木のココナツ椰子の葉がガラガラと金色に先っていた。淳は胸のポケットからサングラスを取り出した。

二人は、居酒屋の前の小さな広場を横切った。向う側はP・T・T（郵便局）である。木蔭に駐めてあるブジョー・四〇三の扉を鍵で開いて淳はハンドルの下に滑り込み、片手を延ばして、もう一方の扉のロックを外して押し開いた。車の前を廻ってリンダが助手席に乗り込む。淳は車をスタートさせた。

☆ ☆ ☆

午後三時五分、U・S・O・Mの白い建物にリンダを送り込んだ淳は、車を廻して、ねむたげなミモザの並木道をとばし、中田商事駐在員事務所の前に激しいタイヤのきしみと砂煙りを上げて車を駐めた。

事務所は市の目抜き街にある五階建のビルで、地下の一角を中田商事の駐在員事務所が占めていた。

慌ててとび出してきた現地人の運転手に車の鍵を渡した淳は、大股に事務所の中に入っていた。

冷房のきいた事務所の中は、外の強烈な日光に慣れた目には薄暗く、淳はサングラスを

外してガラスを張った机の上に置いた。それから廻り込んで机の後のひじかけ椅子にどっかと坐り込み、机の上の冷えかけたお茶の入った湯呑みに手を延ばした。

「お楽しみだったのかい？」

部屋の奥の巾の広い机から、金縁眼鏡をかけた青白い中年男が声をかけた。支店長の沢井だった。

沢井は、糊のきいて白いワイシャツの袖をずらして、腕時計に目を落とした。淳はそれに答えずに、なまぬるくなったお茶を喉に流し込んだ。

事務所は午前中、八時から正午まで。午後三時から六時までである。

淳の机は、入って左手の入口に近い側にあった。入って右側には、淳と向い合って現地事務員の机が三つ並んでいる。

三つ並んだ机の一番奥側に席を占めたチーフ・クラーク<sup>しゅう</sup>の周は、所在なげに煙草を喫<sup>ふ</sup>かしながら、華字紙にぼんやりと目を落としていた。

周は福建省出身の中国人で、英語と片言の日本語が出来た。結局、商売の大半をしめる繊維<sup>テキスタイル</sup>の市場は殆んど華僑の手に握られているため、どうしても中国語を話せるクラーク



が必要なのだった。

真中の席の陳は外廻りに出かけてしまったらしく空席で、末席では現地人のクラークのホックがしきりに手廻しの計算機と取り組んでいた。

部屋の奥の支店長席の沢井の傍の机では、ベトナム人の秘書<sup>セクレタリー</sup>のニュエンがインヴォイスのタイプを叩いていた。彼女は沢井にとらず青白い顔をして、薄いレースのアオザイの腹は妊娠してまんまるく膨んでいた。彼女は亭主持ちで、亭主はブラブラ遊び廻って女房の稼ぎをバクチに注ぎ込んでいた。タイピストにしても日本商社の雇員は、現地では高給取りに属した。

「芳村君、僕はこれからデニ・フレに顔を出してくるからね」

淳に相手にされず渋い顔をしていた沢井は不意に立ち上ると、椅子にかけてあった上衣に袖を通しながら言った。

「どうぞ、どうぞ。まことに結構なアイデアですな」

淳は、机の上のコットン・ヤーンの柄<sup>パターン・サンプル</sup>を見本を鉛筆でめくりながら、今度は調子よく答えた。

デニス兄弟商会は、この国も含めて旧仏

領印度支那地域には、今でも隠然とした勢力があり、大口の客筋を掴んでいる、フランスの商社で、現地法人組織になっていた。

このデニ・フレールのマネージャーであるピエール・モルガンとは、淳がデニス・クラブで知り合ったのだ。それ以来、セメント、板ガラス、建材、等大口の取り引きが続いていた。

ピエールにしてみれば、距離的關係もあって高い運賃をかけてフランス本国のものを入れなくとも、安い日本の品を自分の握っている大手問屋筋に流して、口<sup>コミッション</sup>銭を稼いだ方が楽でもあった。

デニス兄弟商会は中田商事の大事な顧客<sup>バイヤー</sup>の一つであり、沢井としては是非とも自分でも口をきいて自分の手で取り引きをまとめてみたいのだった。

淳は別に気にしてなかったが、デニス兄弟商会との今までの取り引きはすべて淳を通して持ち込まれたものばかりで、彼のいうデニフレに顔を出しているのだった。

沢井は、クラークの周を後に従えて出て行った。支店長の沢井の専用車は冷房付きのシボレーである。しかも運転手つきである。社宅も、費用は会社負担で、豪勢な邸宅を構え

ている。平社員の淳とは待遇に格段の差があった。

淳はガラス扉ごしに、運転手の開いたドアから威厳をつけてシボレーに乗り込む沢井を見やって薄ら笑った。

淳と沢井が一緒に顔を揃えて外廻りをする機会は滅多にないのだが、沢井を連れて行って、初めてピエールに引き合わせた時はケツサクだった。

沢井は「ザット・イズ・ノット・ハイ」という「HAT」を、「まあ、ざっとこんな具合に」のざっとと同じように発音した。それをクラークの周が、英語で通訳した。沢井の英語は、慣れた周にしか理解できないので、それを周がもう一度、英語で通訳するのだ。後で淳がピエールに会った時「ムッシュ・サワイのしゃべってるあれは何語かね？ 日本語でもないようだが？」と皮肉られた。ピエールに値段が高いようだが、と言われて「ザット・イズ・ノット・ハイ・ユー・シー？ ユー・シー？」と繰り返して、それに対して相手は何か言うと、もう周の片言の日本語の説明でも判らなくなり「アイ・シー・アイ・シー」と答えて帰ってくるのだった。

恐らく今日も事務所に帰ってきたら、沢井



は淳に向って「大体のところは話をつけてきたからね。後こまかいところは、芳村君、君いって打ち合わせてきたまえ！」と、くるにきまっているのだ。それで淳が行ってみるとピエールは一体、沢井が何を話しにやってきたかも判ってない始末なのだ。

ピエールは、本当は英語より自国語のフランス語の方を好むので、淳はピエールとはフランス語で話した。

リンダとつき合う前、フランス人の女教師と一年間、同棲していた淳のフランス語は完璧だった。「君は、ホテルからいいねえ」と嫌味とも羨望ともつかぬ調子で時々沢井が淳に言った。そういう時、淳は薄ら笑いを続けるだけだった。

☆ ☆ ☆

午後三時五十分、沢井がハンカチで大げさに首筋の汗を拭きながら、事務所に帰ってくる。淳は机デスクに向って、本社建材部に通信文を書いていた。

近頃、チェコ製の板ガラスが日本の板ガラスの六割程度の値段で流れているのだ。採算を無視した共産圏からの政治的な攻勢には泣かされるが、放っておけば市場マーケットが完全に押さえられてしまうので、何等かの対策が必要

だった。

支店長席の立派な肘掛椅子にだらしなくもたれて、ネクタイをゆるめてくつろげたワイシャツの胸から、セルロイドの下敷きでせわしく風を送り込んでいる沢井の前に、淳は、丁度書き上げた本社建材部に対する意見書を差し出した。

沢井は金縁の眼鏡に手をかけて、ちらっと覗き込むようにしたが、ポイと机の上の整理籠に放り込んだ。

「支店長、今日のメールに間に合わせたいんですがね。板硝子ミッションが来週末、到着するんで、その前にこれを本社の連中に読ませておきたいのでね」

「あ、そうかね。あれは来週だったか。ふむどれどれ……」

沢井は、机に貧弱な身体をもたせかけるようにして、ふんぞり返って淳のレターを両手で目の前にかざして、ふむふむ……と形だけは読むふりをして、それから、抽出ひきだしをあげて、通信文の第一頁目の駐在員事務所のゴム印の捺してある直ぐ下、淳の認め印の直ぐ上の所に重々しく捺印した。

「まあ、こんなとこだらうな。ときに結論はどういうことでしたかな？」

「ですから、ミッションが来るまでに検討して、結論を出してくれるように依頼してるんじゃないのですか」

「ふむ、ふむ、それは判るが……要するに結論がハッキリしてないんだね。結論のないレターを出すのは賛成ではないんですがねえ。まあ、今回はいいでしょう」

内容も判らずメクラ判を捺すにしては、いつも勿体をつけるのが沢井のくせだった。

「それはそうと、今ピエールに会って話してきたら、大口の取り引きが出来そうなんだ。細かいところを打ち合わせのため、今から出かけてみてくれないかね」

「大口の話といっても、セメントのライセンスは先月締め切りだし、タイヤはミシュランが最近どっと出廻ったときだし、何があるんですかなあ？　いくこたないでしょう、わざわざ。気になるなら電話してみますわ」

電話器に手を延ばす淳を、沢井はいまいましげに横目で睨んだ。

「アロー、ピエール、どうだい？　時に、今うちの大将が訪ねて行ったらしいが、何かいい話があるんだって？」

「やあ、淳か。ムシユー・サワイがそういつてるのかい？　お宅からはセメントを買った



ばかりじゃないか。そうそう続かないよ。ムシュー・サワイは、ここへ来てオレンジジュースを飲んで帰ったが、仕事の話は出なかったように思うぜ！」

「いや、有難う、そんなこったろうと思ったよ。では、又な……」

淳は両肩をすくめて受話器を置いた。

「どうだね、いい話があったかい？」

「それは、こっちが聞きたいことで……。ピエールは、何も仕事の話はしなかったといっていますかね」

「それはおかしいな、何かありそうな口ぶりだったが……。まあ、いいでしょう。君がそういうなら……」

支店長の沢井実は、仕事以外でも芳村淳に尻尾を押さえられていて、いまいまでもこれはどうにもならなかった。

沢井は、淳がこの国の駐在員として赴任してきたから約半年遅れて支店長として着任したのだった。まだ支店長の社宅が設営されてなく、到着したばかりの沢井を、淳がとりあえずホテルに送り込んで、ひと落ちつきしたとき、沢井が金縁眼鏡を光らせて切り出したのだ。

「芳村君、僕は君イ、子供の学校の関係でね」

え、家族を連れてこれられないんだがねえ。それでその、君もなんだが、他の商社でも単身赴任者は大勢いるだろうが、どうやってるのかねえ。つまり、その、これの方がね」

そこで沢井は卑屈にからだをすくめて、小指を突き出してみせた。

「さあ、その辺のことは判りませんなあ。適当にやってるんじゃないのですかな」

淳は警戒して答えた。

「適当にねえ。僕はどうもその、つまりそういう方面に苦手なんでねえ。君イ、よろしく頼みますよ」

沢井はもう一度、卑屈に肩をすくめて、揉み手をしたのだ。

その夜、沢井とレストランで夕食を共にした淳は、ワインで顔を赤くした沢井を河畔のナイトクラブに伴った。

その時まで新任の支店長、沢井とは一面識もなかった淳だが、あらかじめ本社の同僚からの私信で、沢井がムツツリ助平であることを知っていた。だから淳は、それまでつき合っていて、そろそろ嫌や気のさしていたホステスの一人に、因果を含めてあった。この女達は金で片がつくのだ。

そのホステスは、長いサラサラした髪を腰

の辺りまで垂らした、小柄な広東人<sup>カントン</sup>だった。美芬<sup>メイリン</sup>といって、小柄ながら筋肉の発達した引きしまった肢体をしたおき・やんな女だった。

今度くるのが支店長で、俺なんかよりも収入もずっと多いし、紹介してやるから彼のオンリーにならないか。俺ではオンリーにするほどの収入もないし……という淳の話に二もなく承知したのである。

「君イ、大丈夫なんだね？ 話がついてるんだね？ いい娘がいるのかね？」

と沢井はレストランで食事をしているときから、もう気もそぞろだったが、ナイトクラブで席<sup>テーブル</sup>について美芬<sup>メイリン</sup>がやって来た時には、相好がゆるんでしまった。

「どうです、支店長。この娘<sup>こ</sup>では？」

と問いかける淳に、

「いや、なに、内地ではその、ホステスも、きれいな娘<sup>こ</sup>を沢山知ってたが、その、つまりまあ、この娘<sup>こ</sup>もなんだねえ。いや、僕は構いませんよ……」

と、しどろもどろで、彼女が沢井のケースからシガレットを一本抜きとるのを目を丸くして見ていたが、慌ててライター<sup>ライター</sup>の火を差し出すのだった。そして、ライターを握った沢井の手は震えていた。



「彼女は今夜、大丈夫なんですね？　つまりその、話がついてるんですね？」

椅子に腰をかけて高々と足を組んだ美芬の中国服の裾が割れて、太腿まで白い肌がチラチラするのを見せつけられて、早くも沢井は呼吸を荒くはすませていた。

美芬は席を立て、沢井の横にピッタリと寄り添って坐った。

今にも両耳から真赤な湯気が吹き出してきそうに興奮していながら、なすすべも知らず固くなっている沢井は、頬つぺたをつまんで引っぱられたり、鼻をつままれたり、扇子で叩かれたり、大きな態度の美芬に散々からかわれ罵られても、ただオロオロして火のように興奮をつのらせていたのだ。

沢井と美芬は同棲するようになった。豪華な支店長宅にである。沢井は、すっかり美芬の手玉にとられ、法外な金を巻き上げられるようになっていた。

美芬への月々の手当は、淳が經理の帳簿を誤魔化して、家の修理費とか、自動車の修理代、女中の給料の水増し等、色々の名目や方法を考えて捻出することを沢井にすすめてやったのである。

同棲するようになってからも、美芬は夜の

ホステス商売を続けた。沢井は反対なのだが莫大な手当を払っていながら、それ以上、強く主張できないでいるのだ。美芬は金にはきびしかった。酒にもダンスにも趣味のない沢井に対しては、そんな金があるぐらいなら自分に貢ぎなさい、と美芬は、彼が彼女の勤めているナイト・クラブに来ることを固く禁じていた。それでも気になる沢井は、時々ナイト・クラブの周りをうろついて、中を覗き込むらしかった。

美芬の勤めるナイト・クラブは河畔にあつて、河岸に面した側は、そのまま河の上の水上レストランに下りて行けるよう、低い柵になっていて、外側からクラブの内部が覗けるのである。

沢井が覗いてるのを知った時の美芬は、余計に客にしなだれかかり、濃厚なチーク・ダンスを見せつけるのだった。そして沢井の欲情を燃えるだけかき立てておいてから、帰って彼にお預けを喰わせたまま、小遣いをせびりとった。

又、美芬はクラブの帰りに時々客につき合っているらしかった。

沢井と同棲するようになってからも、淳は一度クラブ帰りの美芬を飯店の一室で抱いた

ことがある。浮気をして帰ると、必ず沢井は感づくそうである。「だから……」と美芬は続ける。

「そんな時は、じゃ、別れてもいいのねって言ってやるのよ。あたしに棄てられたくなかったら何でもいいなりになるわねって……」美芬は、にんまりと唇をほころばして足を指さす。

「ここを舐めさしてやるのよ。あのがんけんがうに自分の立場を思い知らすためにね。捨てないでって、泣きながら舐めるわね。……今夜もいじめてやるのよ」

美芬は、沢井のことをいぬと呼んでいた。眼鏡をかけているからめがねいぬである。

或る日、一人事務所に残って残業していた淳が、遅く電報が入り支店長の沢井の社宅をおとずれたことがあった。それは沢井の担当していた繊維取引きに関してのもので、翌朝一番に銀行にかけつけて処理せねばならぬ問題だった。

門を入れて広い芝生の庭を横切り、テラスの硝子窓越しに覗くと、緋色のカーテンが下っていて中は見えなかったが、荒い息遣いと「快的、快的！　早く、早く！」という美芬の掛け声と、ピシリピシリという音が聞こえ



てきた。入口に廻ると扉には鍵がかかってなく、淳は扉を押して中を覗いた。

美芬は四つん這いになった沢井の背中に馬乗りに跨って、逆手に持ったハタキの柄で沢井の尻をピシリ、ピシリと笞打っていた。沢井はパンツひとつの裸で、床の上を美芬を背中に乗せて這い廻っているのだった。

不図、淳と目の合った沢井は、驚愕の表情を浮かべて立ち上ろうとした。

「駄目よ！ もう一回！ 行け、早く！」

美芬は沢井の背中中で大きく腰をシャクリ、ぴしりと一きわ強く笞をきめつけると沢井は泣きそうな顔になり、淳と目を合わせぬように顔をそむけながら、よたよたと広間を一廻りするのだった。

「あたしが、これからお勤めに出かけるっていうのに、しつこいから、ちょっとお仕置きをしてたのよ」

美芬は淳の方を向いてけらけらと笑った。そして床の上にへたり込んだまま息を切らし

ている沢井に向き直った。

「お前、これで判ったわね！ 判ったらお礼のキスしなさい！」

ツと視線を走らせ、不貞腐れたように動かない。

「気にすることないじゃない！ いつも随喜の涙を流して舐めるくせに！ それとも、いやなの？ あたしに棄てられていいのね？ だったら、いつものように拜我——お願いしてごらん」

淳は、ちょっと沢井が気の毒になって、沢井の目に入らぬよう柱の陰に身をひそめた。

沢井は床に跪ずいて両手を合わせて頭の上で合掌し、額を床に摺りつけて美芬を拝んだ。

それから美芬の突き出した足を押し戴くように両手で受けて、ハイヒールの底から爪先にかけてペチャペチャと舐めはじめた。

オレンジ色のぴったりと身にはりついた中国服の裾の割れ目から覗いた美芬の真白な太腿がなまめかしかった。

「このめがねいぬめ、あたしのいいつけだったら、何んでもいいなりだわね。おトイレの後始末までするわよ。オシッコだけじゃないのよ」

彼女は淳の方を振り向いて、けらけらとけたたましく笑って出て行った。淳は、持ってきた電報を黙ってテーブルの上に置いて、早々に引き返したことがあった。それからしばらく

く淳は、頭がカッと熱くなって、熱病にかかったような気がした。

女中の話では、沢井は毎夜、美芬の帰りを起きて待って、美芬の足をお湯で洗ってやるのだそうである。食事は、いつも美芬の分だけ用意し、テーブルの上には一人分の食器だけを並べるのだという。そして沢井は、裸で背中に「美芬的狗」と赤いマジックで書かれて床の上に坐らされ、美芬の食べ残しを一緒にくた、ごっちゃまぜに床の上のどんぶりに流し込んだものを、いぬのようにかぶりつくのだそうである。

淳は、昼間もっともらしい顔をして支店長席に坐っている沢井が滑稽であると同時に、ひどく後悔していた。美芬がこんな性格の娘とは全く気がつかなかったのだ。たしかに、よくはしゃいだりふざけたりする、おきやんな娘だとは思ったが、淳とつき合ってる頃は淳の靴の紐まで結ぶような女で、淳が嫌や気がさしたのも、彼女が余りに淳にかしずくからでもあった。

淳は沢井に対して、激しい羨望の念と憎悪の念をすら感じ、そしてこのことで、ひどい自己嫌悪に陥っているのだった。

☆ ☆ ☆



淳とフランス人の女教師との交際は、沢井メイリンに美芬をとりもった頃からじまった。

彼女——パトリシアは、プラチナ・プロンドの小柄なおとなしい娘だった。淳の好みではなかったが、この国でフランス人が多いとはいっても、そうそう日本人の彼により好みした相手が見つかるわけのものでもなかったし、それに中国人かヴェトナム人の女、それともこの国の現地女しか相手にできないでいる他の日本人仲間からは、この国に駐在する日本人で唯一人、白人の女を恋人にしている淳に対しては、激しい羨望の目が集ったものだった。

淳は一人で退屈していた。こんなことならメイリン美芬を沢井に譲るんではなかった。それからありきたりの恋物語が始まった。

夏の夜の空港ビルのロビーで、南十字星の下、流れるハワイアン・メロディ、強いジャスミンの芳香が生暖い風に漂い、パトリシアは淳の厚い胸にひしとしがみついて、ビイ玉のような、澄みとおった青い目に、一杯、涙を浮かべていた。

別れの日がやってきたのである。

彼女の任期が切れたのだ。

想い出はあった。海岸へのドライブ、ナイ

ト・クラブで踊ったタンゴ、彼女の泊っていた名前だけ立派なホテル・リヴィエラの汚い一室で二人で過した夜。レストランでは彼女が可愛く小首をかしげながらフランス語で書かれたメニューを説明してくれた。メニューとカルテの違い、ぶどう酒の種類、チーズの名称等。二人は安くておいしいレストランを食歩いた。

そしてパトリシアは、エア・フランスでパリに帰った。お互いに文通はしないことにしていた。どうせ救いのない悲しみは早く忘れた方がいい。飛行場で見送る淳の手には、赤いリボンのかかった小さな紙包みだけが、パトリシアの残り香を移して押しつけられていた。

ピエール・カルダンのネクタイ、ハンケチとカフス、ネクタイピンのセット（シャンソンの流れるパリの裏街）——胸の痛くなるような懐しさは残るが月並みでしかなかった。淳の空虚な心を癒やすのは、精力的に行動的で陽気で快活で、タフな淳の暗い一つの秘密に繋がった。その秘密はリンダには求められなかった。

リンダはきわめて明るく、てきぱきした実用的なヤンキー娘に過ぎない。リンダは毎

日のように午後やってきた。正午から三時までの昼休みを、淳の安下宿で二人の怠惰で享乐的な時間として過した。それは一種のスポートであった。きわめて爽快で健康的で、そして怠惰だった。

そして、だんだん怠惰だけが鼻についてきて、これに反比例して濃度を強めたリンダの愛情を、当惑とわずらわしさとして感じはじめていた。淳の秘密の存在のみがクローズ・アップしてくる。

☆ ☆ ☆

午後六時十分、事務所を出た淳は、P・T・T（郵便局）の前の広場まで運転してきたプジョー・四〇三を隅に駐車し、薄暗いP・T・Tのビルに大股に入っていった。

これは毎月末、淳の慣例だった。郵便局の窓口の並んだカウンターを通り抜け暗い細い廊下の奥に突き当たって曲り込むと、そこは小学校の下駄箱のように、私書函が並んでいた。淳はポケットから鍵をとり出して、七六四号の金属製の扉を開いた。淳は私書函の中から、薄茶色のハトロン紙の包みを取り出して、又扉を閉じて鍵をかけ、巻物のようになったハトロン紙の梱包を尻のポケットに突っ込んで口笛を吹きながらP・T・Tの入口か



ら出てきた。

駐車したプジョー・四〇三はそのままに、淳は広場を横切り、下宿屋の階段を二段ずつ駆け上り、自分の部屋の扉に鍵をさし込む。ガチャリと扉を押して部屋の中に入った淳はハترون紙の巻物をベッドの上に放り出してネクタイを外しワイシャツをむしり取った。ルーム・クローラーのスイッチを入れ上半身裸のまま淳はベッドに寝ころんでハترون紙の包装をといた。

白い表紙の雑誌が出てくる。これこそ、淳の秘密につながるものだった。

淳はナイフを巧みに動かして雑誌の綴じ金具を外して頁をバラバラに外ずした。それから一頁一頁、丹念に目を走らせて、バラバラになった頁を二つの山に分けた。一方の山になった頁を取り上げ、各頁を両手を使って小さく千切って、それをまるめてハترون紙の包装と一緒に、ベッドの脇の塵箱に投げ込んだ。手を延ばしてベッドの枕頭のまくらもと小机の引き出しから厚紙のファイルを取り出して、もう一方の山になった頁を集めて丁寧に挟み込む。ファイルは、既に前々から挟み込まれた分でかなりの厚さになっていた。ファイルの厚紙の表紙の指の当る所は黒くなっていた。

淳はベッドに仰向けになって頁を繰りはじめたが、途中で思い直したようにファイルひきを小机の抽出しに戻し、起き上って濃緑のスポートイナシャツにジャージのジャケットを引っ掛けルーム・クローラーのスイッチを切ったから部屋を出て、扉に鍵をかけ、そのまま階下の居酒屋ラ・タヴェルンに下りて行った。

ラ・タヴェルンは、入口に近い所にニスの剥げ落ちたような、くすんだカウンターがあるって、止り木の椅子が五つ。カウンターの後の棚には、ウイスキー、コニャック、ジン、ウォッカ等の壺が並び、そのカウンターの入口に一番近い所には、この店のマダムである五十年配の脂肪の塊りのように肥えふとったフランス女が坐っていた。店の中にはテーブルが十ほど並べられ、それらのテーブルを白っぽく色あせた藤椅子が囲んでいる。まだ時間が早い所為で、テーブルの間に、白い詰襟の制服を着せられたインド人の給仕が手持無沙汰に突っ立っている。

淳は、カウンターの入口に近い方の止り木を選んで腰をかけ、レミ・マルタンを注文した。

カウンターの奥の方の止り木で、栗色の髪を肩に波打たせた女が、じっと淳が入ってきた

時から淳の方を見つめていた。淳も気がついたのである。彼女は、カウンターの奥から豹のように光る眼で、吟味するような視線を淳に釘づけにしていたのだ。長く伸びた脚は黒く光る革長靴に包まれ、短いスカートで太腿まで露わにした肌には、黒い網目のタイツがはりついていていた。そして、その短いスカートも黒光りする革製だった。

彼女は左手に紫色の液体の入ったカクテル・グラスを傾けていたが、垂らした右手にはこれも黒々と光る鞭を握っていた。淳は彼女を、息を呑んで見つめた。淳は目の錯覚ではないかと思った。

この姿こそ、淳が求めに求め、絶えず探し続けた秘密シークレットにつながる、そのものに外ならないのである。

彼女は立ち上った。すばらしい均齊美だが、背の高い淳より更にひとまわり大柄である。彼女はカウンターに金を置いて、つかつかと入口の方へやってくる。そして淳の前に一瞬立ち止まった。淳の目の中を彼女の鋭い目が覗き込む。薄緑の眸が光を反射して金色に光る。残忍そうな薄い唇。

彼女はじっと淳の目を見つめたまま、入口の方に僅かながら顎をしゃくった。それから



何事もなかったように、知らぬ顔をして出て行った。淳は、まるで魔法にでもかかったように、代金を慌ててカウンタに放り出し、彼女の後を追った。

外は既に暗くなっていた。街灯の下で彼女はこちらに向き直り、革長靴の両脚を広げて立って、淳の出てくるのを待っていた。

「夕食をするから、ついてらっしゃい」

命令調の英語だった。淳は黙ってうなずいた。彼女は直ぐ横に駐車してあった車のドアを開けてハンドルの下に滑り込んだ。黒塗りのプリストル・四一〇、五二一CC、二五〇bhp、最高時速一二五マイル、二ドアの高性能車である。二万弗ちかくするだろう。

「さあ！」

うながされて、淳は車の後を廻り、助手席の扉を開けてシートについた。

物凄い加速度で車はスタートし、淳はシートの上で大きくのけぞった。

☆ ☆ ☆

午後八時二十分、アスター・ホテルの中二階のレストランで、淳は革長靴の女とテーブルをへだてて向かい合っていた。

彼女は白っぽくマニキュアされた細長い指で、狐色に焼いたトーストを裂き、ナイフを

使ってフォア・グラをたっぷり塗りつけ、それから、そのフォア・グラを塗りつけたトーストで皿の上の銀色に光る大粒のキャビアをすくって、これも白っぽく塗られた彼女の唇に運んでいた。それから白く艶のある腕をのばしてグラスを取り上げ、ワインを流し込むのだ。

淳は、よだれが垂れそうだった。

「そこで待っててね。勘定は払わして上げるわ」

と彼女は淳には注文する隙を与えず、さつさと自分の分を注文してしまったのだ。

注文をとりよってきた給仕長が不思議そうに首をかしげて引き下った。

「後で、ちょっと話があるの。待ってらっしゃい」

そして後は、彼女は淳の存在など忘れたように知らぬ顔で、たっぷりと時間をかけ、ゆっくりと味覚の楽しみを享受しているのだった。

普段の淳だったら、こんな時、何とか口の悪い科白が飛び出してくるのだが、彼女の何か気軽に出られない雰囲気と、圧倒されるような尊大さが、淳を萎縮させていた。

クロマージュにケーキ、コーヒ。ようや

く彼女の夕食が終り、彼女はナフキンをテーブルの上に置いた。淳は慌てて給仕を呼び勘定を言いつける。チップも含めて三十五弗を淳はテーブルに置いた。

革長靴の女は無言で、すっと席を立てて出口に向う。淳は小走りに後を追った。再び彼女はプリストル・四一〇に乗り込み、淳は助手席にくぐり込んだ。彼女は無言のままハンドルを握り、淳も口をきくきっかけが掴めず押し黙ったままだ。

車は空港へ向う。アメリカ援助資金によるハイウェイを物凄いスピードで飛ばしたが、空港に着く前に右に折れ、ソ連の寄贈した広大な工科大学の敷地を廻って、人通りのない暗い路地を抜けて進み、竹垣で囲まれた白壁の平家の前に止まった。

竹垣には雑草や蔦類がからみつき、何の花か夜目にも白く、黒々とした葉の茂りの間に浮き出していた。

車を降りた彼女は、雑草を革長靴で踏み分けて中へ入って行く。淳が後に続いた。周囲には全く人氣がなかった。扉の鍵を彼女がカチリと鳴らして内側に押し開く。家の中も真暗で、人の住んでいる気配はなかった。

明りがついた。応接間になっていて、床に



は薄い絨氈が敷いてあり、厚ガラスの低いテーブルを囲んでソファと肘掛椅子が二つ。テーブルの上の灰皿は埃で白くなっていた。

部屋には今入ってきた入口の外に、扉が三つについていた。一つが寝室で、一つが台所、もう一つが浴室だ。だ。と淳は思ったが扉はみんな閉っていた。窓にはクリーム色のカーテンが引かれている。

「坐ったら！」

彼女に顎をしゃくられて、淳はソファの上に腰を下す。

「これ、何だか判るわね？」

ソファに背をもたせかけた淳の前に、革長靴の両脚を大きく開いて仁王立ちになった彼女の突き出した左手には、番号札のついた鍵が握られている。

七六四号の番号札——淳の私書函の鍵である。淳は慌ててズボンのポケットを手探りした。

あった、淳の私書函の鍵は確かに彼のポケットの中に入っていた。

「ふふ、バカね、合鍵を作っているのさ」突然、彼女は足を上げて革長靴で淳の胸をソファに踏みつけた。

「こうされたいんだろ？ お前の好みは、ち

ゃんと調べてあるのさ！」

彼女は足にぐいっと力を入れた。淳は気が転倒していた。胸を革長靴で踏みつけられて息をつめて呻いた。

「あたしの名は、イザベル。よく覚えておおき！」

☆ ☆ ☆

午後十時五十分。淳は素っ裸で絨氈の上に転がっていた。息も絶えだえだった。

淳のゴムマリのような腹の上を、イザベルの革長靴が情容赦もなく踏みつけた。淳の両手首は背中の下で縛り合わされていた。踏まれて芋虫のように、のたうつ淳の胴体を革長靴の足がぐいっと押し転がして、淳は俯伏せになる。赤紫のみみず腫れの背中に、ピュッと空を切ったイザベルの鞭が、びゅすんつと音を立て、淳がひいっと悲鳴を上げる。

「これぐらいで音を上げるなんて、あたしのお相手は勤まらないよ。それ！」

又、鞭が淳の背中にはじける。

「も、もう……イザベル様、もう……お、お許し下さい……ひいっ」

イザベルで酷薄な唇が、にんまりとゆがんだ。

「うふふ、女王様とおいい！」

又、鞭がとんだ。

「ハ、ハイ、女王様……女王様……」

「ハッハッハハ、もっと速く、速くと頼んでるのかい。それなら、ほれ！」

淳の背中を、イザベルの鞭が激しく往復する。

「ひーっ、ひーっ、ちがいます。ひーっ、女王様、あっ……」

「ふふん、速くてはいやなんだね。じゃあ、ゆっくりと、じっくり力をこめたやつが欲しいのかい？」

イザベルは淳を鞭で支配し、思うさま玩弄した。

「これ、もっと鞭打って下さいと、お願いおしよ。ほら、聞こえないのかいっ！」

「ひいっ、も、もう、おゆ、お許しを……ひいっ、も、もっと、鞭、鞭打って……」

「そうかい、まだ欲しいのかい。それでは、お情けで、それ、どうだっ！ これでもか」

「ひいっ、ひいっ」

「お礼をおいいよ。どうした、いわないか。お礼っ！ それ、お礼っ！」

「ひいっ、ひいっ、あり、ありっ、ひいっ、ありがとう……ごさいます……」

「そんなに嬉しいかい。では、お慈悲で、そ



れっ！」

既に、淳の背中もお尻も皮膚が裂け、血みどろである。

「大分、参ったようだね。それでは、この辺で少しだけいい目に遭わせてあげよう」

ぼろ屑のように床の上に打ち伏している淳は、朦朧とした意識のうちにイザベルの革長靴が、彼のうつ伏せの尻の上をぐりぐりと踏みつけるのを感じた。

イザベルは淳のお尻の上に両足で立って、鞭の柄を彼の股に押し立て、こじり廻した。

「うふふふ、鞭打ちの後のこの快楽は、お前も一度味わったら、もう忘れられなくなるのさ。そのうちに床を這いずり廻って、あたしの鞭を哀願するようになるさ……」

イザベルの声を遠くかすかに聞きながら、淳は身体が火のように熱くなるのを感じた。

「どれ、喉が乾いたろ、口をおあけ！」

彼女の白い豊満なお尻が革の匂いと共に淳の上に巨大にのしかかってくる。ほとぼしる噴流を、ぐくりぐくりと淳が喉を鳴らすたびに飛沫が目と鼻にしぶきとなって散り、溺死せんばかりにむせた。イザベルの体内を濾過してきた液体が、渴ききった淳の全身に浸み渡るような気がした。

☆  
「ザッツイナフ  
それまでだ」

☆

☆

突然、男の声がして、扉が乱暴に開かれ、誰かが部屋に入ってきた。そして淳は仰向きの頭を短靴の先で蹴とばされた。

やられた！ まんまと引っかかった！

よくある手である。美人局！ 古臭い手だが素裸で後手に縛られていては、どうにもならない。淳は力を振り絞って半身を起した。

目つきの鋭い、がっしりした体格の中年の男が立っていた。焦茶色の背広を着ている。淳は興奮からさめ、落ち着きを取り戻した。

「大分、俺のことを調べたらしいが、俺に金がなくて年中びいびいしていることに調べが廻らなかったのが不思議なぐらいだ。肝心のこただろうぜ。俺の安月給じゃあ、この御大層な茶番劇、こっちの方が出演料、戴きたいぐらいだ」

淳は、いつものふてぶてしい調子に戻って中年男を見上げた。男は淳を、もう一度、足を上げて蹴りつけた。靴の先が、後手に縛られて不自由な淳のよけたはずの顎に当り、唇が切れて血が流れた。

「偉そうな口をきける立場じゃないと思うが黙って話を聞いたらどうだ。金を要求するの

ではない」

男は煙草を出して火をつけた。

「判った。金が目当てでなくて、こんなに凝った細工をするとは腑におちぬが、金でなければ俺には外に大事なものは心当りが無い。何でも話を聞こう。だが、この恰好じゃあ、俺だって人並みに恥かしくって、まともに話も聞けない。先ず手を解いて、ズボンを穿かしてくれ」

「よかろう。恥かしいのは、いい具合だが、話は聞いて貰わねばならん。イザベル、解いてやってくれ」

男は煙草を口にくわえ、ポケットからナイフを取り出してイザベルに投げた。そしてポケットに片手をつっこんだまま、肘掛椅子の背にもたれた。

イザベルは淳の後に廻って、手首を縛り合わせたロープを切った。ロープが切れた途端に、淳は後手のままイザベルの手首を掴み、ナイフをもぎ取った。

淳の背中から銀線を描いたナイフは、一旦出しかけた手を又、ポケットに滑り込ませかけた男の掌の甲に突き刺さった。悲鳴をあげてうずくまる男にとびかかった淳は、男のポケットの中のものを掴み出した。婦人持ちのベ



レッタ・オートマチックである。

淳は安全装置を外した。ピストルを向けながら淳は命令した。

「イザベル、この男のネクタイを外すんだ。そうさ。そして、そのネクタイで、この男を後手に縛るんだ」

淳は男の後に廻って、男の両手首がしっかりと縛り合わされているかどうか、注意深く調べた。そして、だしぬけに振り上げたベレッタの柄をイザベルの後頭部に叩きつけた。昏倒したイザベルは、床の上に転がった。

男は掌の傷口から血を滴らせて、真青な顔に脂汗を浮かべて呻いた。淳は男の胸倉を掴んで、ソファの上に突きとばした。男はソファの上によろめき倒れる。男の吸いかけの煙草が床に落ちて絨氈を焦がしている。火のついた煙草を拾い上げた淳は、それをソファでうめいている男の唇に押しつけた。

ぎゃあっ、と男は魂消るような悲鳴を上げる。男の唇が火ぶくれになって腫れ上った。淳は煙草を灰皿でもみ消した。

「うっかりしてた。一寸、待ってくれ」

淳は、まだまだ素裸のままだったのだ。苦笑しながらズボンを着き、シャツに上衣を引っかけた淳は、自分のポケットにベレッタ

をおとし込み、それから胸のケースから煙草を一本抜き出して、ライターで火をつけた。

「さあ、話を聞くには、この方がいい。ゆっくり聞かせて貰おうか。もっとも、しゃべりたくなけりゃ黙っててもいいが、その代り、今度は目玉焼きとゆくか！」

淳は、吸いかけの煙草の火を男の鼻先に突きつけた。

男は泥を吐いた。

男の名はスタルコフ。ソ連大使館の二等書記官。イザベルも秘書名義で、同じ大使館勤務である。

スタルコフは、淳がU・S・O・Mの女と親しいのに目をつけたのだ。そこで調べてみると、淳がマゾヒストであることが判った。淳の私書函を怪しんで合いかぎを作って調べ又、淳の留守中に部屋に入り込んで例のファイルも調べたのだ。そこで本国からイザベルを呼び寄せることになった。

イザベルは、ソ連の秘密警察国際情報局の諜報部員で、マゾ男相手専門のサディストとして仕込まれていたのだ。仕込まれたというより、もともとサドの気のある女性を見つけ出して、それに、マゾに対するあらゆる責めを、囚人を使って実地にみっちり訓練した

のだ。

今夜の淳の痴態醜態は一部始終、八ミリとテープにレコードしてあるという。これをネタに淳を脅迫して、米側の情報を探らせようとしたのだった。

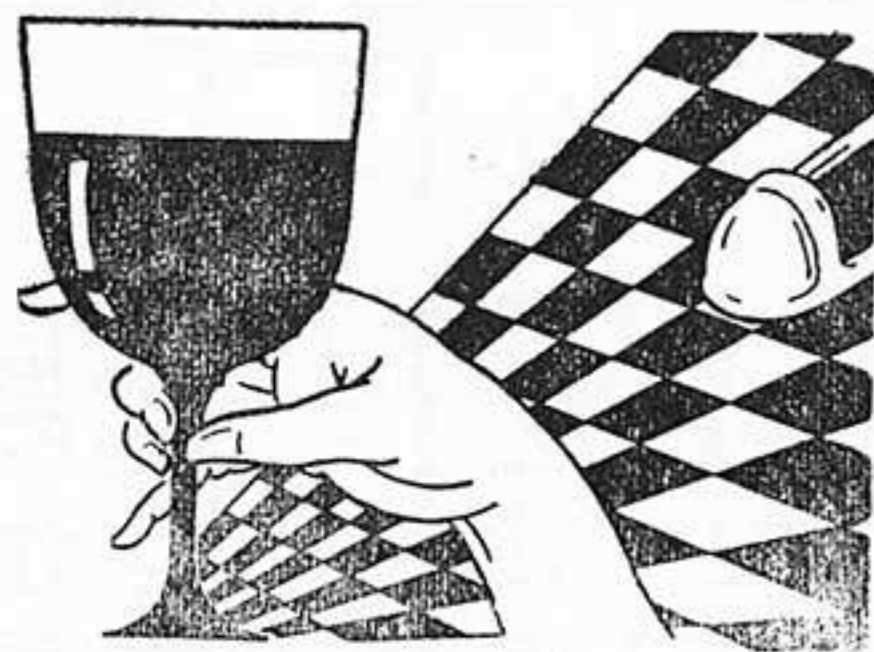
「これは結構なものを作って戴いて、お礼の言葉もない」

淳は、隣室に装置してあった映写機とレコーダーから、フィルムとテープを取り外ずしてポケットにおさめた。

「こんなフィルムやテープをどこに持ち出したところで、俺自身も含めてのことだが、喜ぶやつもないようだし、第一、俺は脅迫されて人の走り使いをするのは性に合わないんだ。だが、がっかりしないでくれ。話には持ちかけ方があるのではないかね。お前さんは間違えたようだがね。こういう取り引きではどうだ。俺にイザベルとの交際を続けさせてくれ。その代りに俺は、リンダの方からそちらさんの欲しい情報を引っぱり出してみることにする。はじめから、こういうお話しならお互いにバカなことをしなくても済んだんだが、こういうことで手を打ってはどうか」

淳は、煙草の煙をスタルコフの頭に吹きつけた。





# M 的 飲 食 物 考 現 学

博ちゃん飲み食べシリーズ

津 川 博

## 一、トルコにて

同好の志？ 馬場さん、三原さん、トヤマさん等々の、お好みのお相手は、たいていが豊満で、大柄で、圧倒的に美人が多いということであるが、私の場合、陳平先生との対談においても書いたと記憶するが、ちっこののが好みに合っている。いわゆるトランジスタ型の可愛い子ちゃんである。

川崎の南町にほど近い映画街の裏側に八キヤロールVというネオン文字を輝かす個人トルコがある。

もう私などは、常連中の常連で、柴田という、苗字みたいな名を持つ女の子？ が、私

のいつもの相手である。

御主人もちで、ハキハキした明るいトルコ嬢である。サディストっていうほどの性格ではないのだが、私の種々変った要求を、いつも満たしてくれる。指定の時間をあらかじめ教えておくと、かならずオトイレに行かず、オソバのこってりしたのをいっぱい食べて待っていてくれるのである。なんとうれしい限りではないか。

「きょうも飲んでくの？」

「ああ。それが楽しみで、ワザワザ来るんだもの、ワカッてるくせに！」

「ふふ、毎度のことだけど、へんな趣味だね。きょうはうんとよ。ずっと我慢してたん

だもん」

「いいとも、全部、戴くよ。大きい方はだめかい？」

「朝じゃないとだめよ」

「今度、どっかへ泊ってさ、ぜひ食べさせてもらいたいな」

「そうねえ。でも泊るとなるとうちの人が、うんっていうかしら。うちの人が一緒ならいいんだけど」

「あんたの御主人って、俺に飲ませてること知ってるの？」

「云っちゃった！ でもさ、そんなことうそだろうって信用しないのよ」

「ふーん、ノーマルなんだな、君のいい人っ



て。まあそのことはどうでもいいや、さ、早くくれよ」

「この前みたいに、顔に坐ってやんの？」

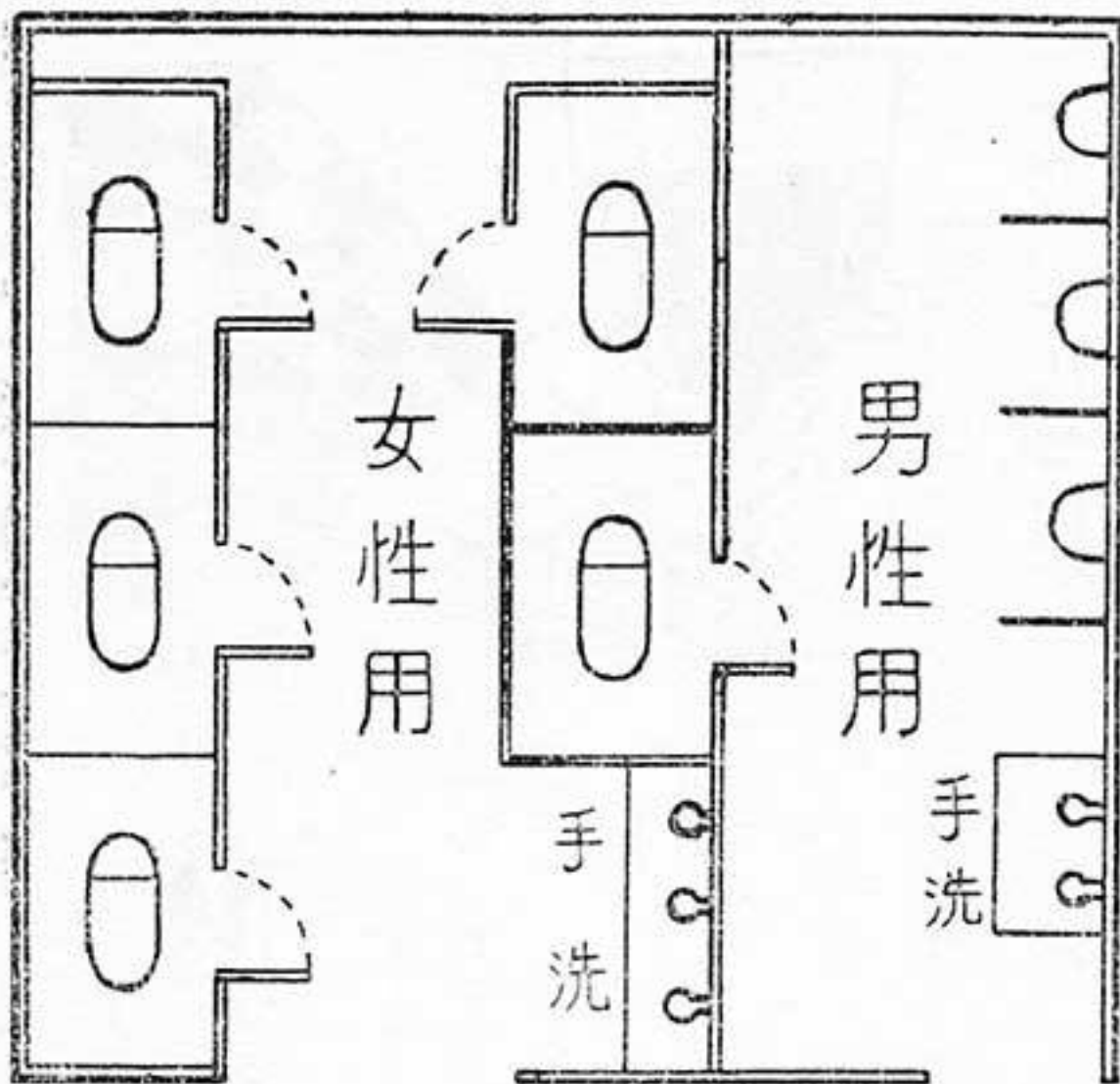
「ああ、あのやり方が一番いい」

「じゃ、そこにねてよ。とにかく一ぱい溜ってるから、じゃーって出ちゃうわよ。いいこと？」

「もってえねえな、こぼれちゃう、じゃねえか、小出しには出来ない？」

「やだあ、途中でブレーキかけるなんて。止めるといたいもん」

そんな、こんなの会話のやりとりがあつて



私はタイルの上に仰向けに横たわる。眼は開いたまんまである。

つぶっているのは彼女の方だ。

激しいしぶきが口一ぱいにほとばしって、もう夢中になって咽喉を鳴らす。うまい、実によい味わいである。例によって、おそばの香りが口中一ぱいに快く拡がって、まったく素晴らしい。ひきつづき、顔の上にどつかと坐らせる。

一時間後、別れ際に参千円也のチップを渡す。安いお遊びである。

やっぱりあの子が一番よい。もし機会があつて、三原氏にお逢いする折があつたら、是非、あの子を紹介しよう。きっと喜んでもらえるだろう。

## 二、駅のトイレで

私がいつも利用する駅は、向ヶ丘遊園である。小田急線にある。通勤時間は、いつも朝の七時頃で、必らず駅のトイレを利用することになっている。

この駅のトイレは、我々フェチストにとって、まことに都合よく設計されている。

図に表わすと、カットのようになる。

つまり、男性用の大きい方の個室は一箇所

しかないのだが、それがうまい工合に、女性用のそれと向い合せになっているのである。

下側に隙間があつて、それも十センチ程開いていて、ぐっと頭を下にさげて向いつ側をのぞくと、これはもう、女性用トイレがまる見えである。

このトイレを、毎朝利用してるOL嬢がいる。七時二十一分の箱根湯本行の急行で、いつも一緒にいる可愛い子ちゃんである。原色が好みとみえて、いつもハデなスタイルで通勤している。

この娘さん、かならず朝七時十分頃このトイレに入る。運がよいと、例の真向いのトイレに飛びこんでくれる。特色のある靴をはいているから入った時は、下からのぞくとすぐわかる。

まだ、そんなに寒さはきびしくなく、二月が待ち遠しい。

何故かと云えば、氷が張りつめる、厳しい寒期になると、よく水洗装置が、だめになるからである。

昨年のも二月、この可愛い子ちゃんの暖かい例のものを充分味わったことがある。

十数分は待機していただろうか、コツコツという軽やかな靴音が隣のトイレにひびく。



パタンという扉の閉まる音、あつ真向いに入  
った。あの子だ。赤い色の靴を履いている。  
先端に花模様のアクセサリーがしらってあ  
って、彼女独特の可愛い靴である。色のよい  
健康色のそれが、次から次へと真白い陶器に  
落されていく。

やがて――。

水洗のひもを引く音、だが、水は出ない。  
ためらっている様子が足先に感じられ、しば  
らくは戸惑っているようだったが、チリ紙を  
五、六枚、そっとあれの上に覆い、やがて彼  
女は静かに出て行った。

まさにチャンス。

急いで私は男用を飛び出し、一たんは階段  
のあたりまで戻り、再び引返す。ホームか  
らはトイレは見えない。線路脇に大きく、い  
くつもの立看板が障害の役目を果たしてくれ  
ているからだ。

女性用の、彼女のトイレに入る。

この喜び。この感激。ぞくぞくする快感。  
心臓の高なり。身体中が、熱っぽくなっ  
てくる。すぐ眼の下、真っ白なチリ紙の下に、  
彼女のまだまだぬくもりをもつ、憧れの置土  
産がある。

夢中になってそれを戴く。多少の匂いは感

じられたが、味はまさに満点。よく消化され  
ていて実にうまい。ポケットの正露丸をたし  
かめながら、私は充分に味わった。

### 三、人妻と――

会社で、組合の文化部長という肩書をもつ  
せいか、よく労連関係のダンスパーティーに  
招待される。そのおかげで先年知り合った女  
性が居る。この人はある映画館経営者の奥さ  
んで、まだ二十七才の美貌の若妻だ。ダンス  
を教えたのが縁で、よく新宿のステレオホー  
ルへ行く。

御主人は職業柄、帰りが遅く、また、よく  
浮気をするらしい。そこで私は、持ち前のプ  
レイボーイ？　ぶりを大いに発揮して、とう  
とうこの若妻を射落すことに成功した。

よく逢い引き場所として池袋の旅館を利用  
する。御主人というのがフェチストらしく、  
足の指をしゃぶってもらうのが大好きとのこ  
と。こりゃまた大いに結構、存分にしゃぶっ  
てあげる。一、二分もたつと、うっとうめく  
ように身をのけぞらせて恍惚とした表情にな  
る。それが、また一段と美しく映える。もと  
もと眼の美しい人で黒くキラキラと瞳が光っ  
て、妖しいまでの魅力がある。

馬乗りも好物のうち。背中に跨がる方法で  
はなく、お腹の方にどっかと跨がることに興  
味をしめず。しかし、あいにくとハイそれま  
でよってやつで、なかなかと神酒の方は戴く  
ことが出来ない。病気になるたらどうすんの  
の、一点張りである。

仕方がねえから、奇譚クラブのマゾ的シー  
ンのスクラップを存分にみせることにする。  
正露丸の話もした。

半年位たってから、始めて戴く事に成功し  
た。下田のあるホテルに泊った夜のことで。

神酒の方は全量拝受したのだけれど、大き  
い方が駄目である。

聞いてみたら、ずっと便秘症で困っている  
とのこと。その夜はあきらめて、大学芋を菓  
子屋から大量に仕入れて、どんどんすすめて  
食べさせる。

次の朝、ベッドの下で、私の顔に跨がらせ  
る。やたらと彼女力むんだけど、出てくるも  
のはオナラだけ、やたらと噴射するんで、そ  
の臭いこと臭いこと。それでも、少し、やっ  
と小さい奴が落ちてきた。

非常に味が悪い。やっぱし便秘症の女は戴  
けない。

そんな時、つくづくと感じた。



# 白い肌のアザ

長 井 葉 津 子

白 い 肌 の ア ザ

私の通っております洋裁学校は駅から歩いて十分ばかりのところにあります、生徒数が千数百人もありますので、登校時間になりますと適齢期の女性で思わぬ賑わいを見せるのです。その道すがら、一軒のかなり大きな和漢薬を専門に扱った薬局があります。

夕方なんか、白いアゴヒゲをたらした仙人のような老人が、まむしの蒸焼にしたものを客の目の前で粉こなにしていることがあります。

三、四人の人達が見ているので私もそのうしろに立って眺めたことがあります。とぐろを巻いたまま蒸焼きになって固くなったまむしを金槌で叩いてバラバラにすると、そのかけらを粉ひき器に入れて、手まわしで粉にする

のです。グロテスクな姿に似ず、蛇のカラカラになった体は、案外きれいな黄色味を帯びた粉となってガラス板の上にのります。

皺だらけの老人の指が巧みに動いて、忽ちのうちに一匹の蛇は、一握りの粉となって袋に入れられ、客の手に渡されるのです。見ていた客の一人が注文しますと、老人は瓶の中から一匹のまむしを取り出して目方を計り、前と同じように金槌で割ってゆきます。

仙人のような気味の悪い老人に、自分自身が丸裸にされて、沢山の人達の見ているなかで、手から足からポリポリ折られて粉にされている奇妙な幻想にかられて、思わず身ぶるいして私はその場を立ち去りました。

その薬局は実際、妖しい雰囲気でした。ウインドーの一番目のつき易いところに、猿の頭蓋骨が飾ってあります。ラベルには、たしかに「スマトラ産手長猿」と書いてあります。が、私にはその頭の骨が人間のもののように思えてならないのです。自分の頭があんなにして人目に飾られたら、そんなことを考えると、くらくらとするような衝撃で居たたまれなくなるのです。

通りすがりの道だからといって、見なくてもいいのですが、私はいつも見てしまうのです。ホコリをかぶったワニの剥製のうしろにはガラスの罎に入った類人猿の胎児というのがアルコール漬になってプカプカと浮いてい





ます。ぶよぶよになった肉質が奇妙に気味わるく、背すじがぞくぞくするようですが、それでも私は見たいのです。

「ハツコ、待っててくれたの？」

友達に声を掛けられて、私の妖しい夢は打ち破られました。私は白髪 of 仙人に拐われて人身御供にされている夢を見ていたのです。

友達は映画を見に行くんだといって、駅の方へ駆けてゆきました。

こんな妖しい夢を見るのは、私だけでしょか。すくなくとも、こんな薄汚ない薬局に關心を持っている娘はいないようです。それとなく大人しそうなお友達を連れてきて、

「どう、あれ、ちょっと変ってるじゃない？」

と、瓶詰めの標本を見せても、全然興味を示さないどころか、「気味悪いワ」と、さっさと見向きもしないで行ってしまうのです。

ほんとうに私は小さい時から変った性格を持った子供でした。少女時代でも、至って怖がりでありながら、蛙が殺されて口の中から、蛙が殺されて口の中から舌のようなのを（或はハラワタであったかもしれない）出して道端にころがっているのを見ても、逃げだすどころか、悪戯小僧のうしろからじっと見ているのでした。

年頃になると、私は自分でもびっくりするくらい色が白くなってきました。白いというより、何かガラスのような透明さを持った肌に静脈が青く沈んでみえるのです。

洋裁学校に通うようになってから、やはり仲良しどうしのグループが出来ました。私のグループの友達は、私のことを、ハツコ、ハツコと呼びすてにして追いかけるのです。校庭でぼんやりしているときなど、急にドンと

体当たりをしてつき当り、よろける私を見て、キャッキャッと笑いあうのです。

色が白くて、どことなくきゃしゃで、それに手足がちっちゃくて、おもちゃにするのに丁度よいのでしょう。いつも私はみんなから狙われて、擦られたり、抓られたり、ひどいときは、襟元から手を胸の中へ差し込まれたりますのです。

抓られたとき、それがほんの軽い抓りであっても、私の肌はすぐ青いアザがついてしまうのです。無意識に肌に物を当てたとき、余り痛くもないのに、大きなアザがついてしまうことは、物心ついたときから、私は自覚していました。その頃は別に自分だけではなく、みんながそうだと気にもかけていなかったのです。それが洋裁学校でお友達に冗談で抓られたとき、みるみるうちに大きなアザがついてしまつて、かくすのに困ってしまったことがあります。

青さがとれると、薄黒くぼけたアザが次第に黄色味を帯びて、そして暫くすると消えてゆくのです。ほんのりとした鈍痛、押したときだけ鈍いうずくような痛さが快く響いてくるのも、私は好きでした。

「見てごらん、ハツコのアザよ」





私が大切にしていた二の腕のアザを悪友の一人に見つけられてからは、太股や胸、脛、腕などに故意にアザをつけられ、次の日にどんな変化をしたか、みんなに調べられるというような日々が続きました。学校には平常は余り使わないのですが、お茶のお稽古のときなどに使う畳の部屋があります。この畳の部屋が私の身体のアザを調べるのによく用いられました。誰がつけたのか、このことを『着せ替え』と名づけていました。

丁度お人形の着物を着せ替えるように、みんなに寄ってたかって、私の洋服を脱がしにかかるのです。「ハツコの着せ替え、やっち

やおうか」と言うだけで、私たちのグループでは、どんなことをやるか直ぐ諒解してしまうのです。小柄な私は、両脇を双方から持たれるだけで、もうどうすることも出来ず、彼女たちの意のままになってしまうのです。

それよりも、「着せ替えされる」と聞いただけで、私の頬は紅く染まり、そのときの羞らいを思うだけで、胸がドキドキして思わず脇に手を差し入れる友達の身体に寄りかかってしまうのです。そんな私を「食べてしまいたいように可愛い」と言って、畳の部屋へ連れて行って押さえつけてしまうのです。

撥られたり、抓られたりは日常朝飯事にな

っていましたが、この前はグループの一人が私の胸に唇を当てて吸い、キスマークをつけてしまいました。そんなに強く吸ったのでもないでしょうに、真赤に充血したその部分の皮膚が、まるで血をにじませたように、むしろ薄気味悪いくらいでした。抓ったり叩いたりした痕と違って、少しも痛くないのですが、肌につ

いた赤いアザは中々消えず、私は家族の目に触れはしないかと、気が気でなりませんでした。

その頃より、私は自分の白い肌についたアザに、異様なまでの執着を持つようになったのです。水蜜桃のいたんだような黒ずんだアザを見ていると、何んだか妙な気持になってくるのです。

夜——一人で部屋にいるとき、自分の肌についたアザをしげしげと見るのです。グループの人達に、無理矢理に入着せ替えVをされるとき、やはり羞かしいのとみじめなもので嫌なのですが、不思議とそのときのことを、あとになって思い出してみると、甘美な思いが胸にたかまってくるのです。そして、一人で自分の肌のアザを眺めていると、何んだかもっともつとアザをつけて貰いたいような、変な気持がしてくるのです。

電車の中などで、同性の肌にアザがあるのを見つけると、なんとなく親しみがもてて、思わずじっと見つめてしまいます。勿論、衣服にかくれたところなどは、見える筈はありませんが、二の腕や太股、お腹や胸あたりにアザがあるのを見ることが出来たら、どんなに素晴らしいだろうと思ったりします。



家に浴室がありますので、銭湯へ行ってみたいと思わぬこともないのですが、今のところ家のお風呂は毎日沸かしますから、その機会はありません。もし、家族が全部外出してしまうようなことがあったら、そのときは銭湯へ出かけて同性の肌にあるアザを見てみようと思います。

今のところ、自分が縄で縛られてみたいとは思ってもみませんが、ちょっと好奇心もあります。縛られたらどんなだろうか、或はすぐ縛られることが好きになってしまいそうで、心もとない気持もあります。

雑誌で拝見していますと、勇敢に誌上に名のりをあげておられる同性の方々のことを知り、羨ましいような嫉ましいような気持ちにかけられました。特に親しくしているケイコに、そのことを話してみたら、ハツコも出してみなさいナとしきりにすすめるのです。それで勇気をふるって、二枚のお写真と一緒に、こんな文章を書いてみました。お差支えなければ、この二枚の写真は誌上に載せて下さっても構いません。

私は今、同性のお友達から追いかけてまわされて、いじめられたり恥かしい目にあわされたりしていますが、本当は男性の手で、これ

と同じような事をされてみたいのです。でも只今のところ、ボーイフレンドも男友達もありません。私達のグループのお友達も、みんな一緒にお好み焼を食べに行ったり、ボーリングをしたりしますが、ボーイフレンドの有るような人もないようです。みんな、お友達どうしで無邪気にさわいでいるのです。

それに、私だけが男のお友達がほしいと思うのは、特に早熟なのでしょう。身つきは私はみんなの中で一番小柄なのです。それで私がもし好奇心で縛られてみたい、と考えたら、編集部の方かどなたか、男性の方の手で縛っていただけるでしょうか。こんなことを考えるだけでも、私は変っているのだ、と自分でも思うのですけれど、そんな気持ちが出てくると、もうどうしようもなくなってしまふのです。

もうしばらくで洋裁学校も卒えてしまいます。研究科へ残る人もありますが、私はお家の事情でお勤めに出ることになっています。そうなれば、今のグループも解消です。卒業してしまつと、毎日のように通っていたこの道ともお別れかと、今日もいつものあの和漢薬を専門に売っている薬局の前に佇んで、怪しげな瓶詰でブヨブヨとアルコールの中に浮

かんでいる肉塊を眺めてきました。

風はまだ冷たいのですが、差す日ざしはなんとなく春めいて明るく、いつもは陰気に沈んでいる店内も、長い冬をやっと過したという気配が漂っています。でも、私をはじめてこの洋裁学校に通い出した時に、驚きの目でしげしげと眺めた陳列の瓶は、あれから二年になろうとしているのに、埃をかぶったまま、その位置も変わっていません。

しかし、私の身体の中には、いつの間にか春が宿ってきたのでしょうか。同性のお友達の手で／＼着せ替え人形Vになっているだけでは物足りなくなってきたのです。

あかりをつけましょ、ぼんぼりに……

なつかしいお雛祭りの歌が、楽器店の店頭から流れてきます。私は駅前に通じる歩道の雑踏を人にもまれて小走りに歩いてゆきながら「もう春ですよ」と心の中で口ずさんで、今年は自分の身の上に大きな変化が起るような予感がするのです。

プラットホームは吹きさらしの風が真正面から小柄な私を包むように吹きつけてきてオーバーを通して肌にしみ渡ってきます。そんな風をはねかえすように、私の肌は若々しく弾んで息づいているのです。



☆ ピンク映画シナリオ ☆

製作 ヤマベ・プロダクション

燃 ゆ る 美 女

(上映題名「肉魔」)

提供・団 鬼 六

1 工場の塀にそった道

電柱の下で、辰雄、煙草を神経質に吸っている。

寒々しい背中、そわそわした眼つき。

ペツと唾をはき、煙草を捨てて足で踏み消

した時、向こうの方から人の足音。

辰雄、緊張して電柱に身を隠す。

ハンドバッグを抱えたBG風の女、姿を見せる。

辰雄、獲物を狙う眼つきになる。女のあと

ス タ ッ フ

企 画	岸 信太郎
製 作	山 辺 信雄
脚 本	団 鬼六
監 督	岸 信太郎
〃	三 樹 英樹
撮 影	川 村 健二
照 明	弘 明

キ ャ ス ト

京 子	葉 子	木 原	辰 雄	清 次	B G
桂 奈美	辰 巳 典子	二階堂 弘	港 雄一	山 本 昌平	山 吹 ゆかり

について歩き出す。

後の気配に気づいて、女の足が段々と早くなる。

辰雄の足もそれに合わせて早くなる。

女、走り出す。辰雄も走り出す。





女、悲鳴をあげる。

辰雄、躍りかかって、女の口を手で覆う。

二人、からみ合い、顛倒する。

女、激しく抵抗する。女の手が地面に落ちて、レンガをつかむ。

のしかかる辰雄の頭部を女が一撃する。

あっと両手で頭をかかえる辰雄。額から血がしたたり落ちる。

その隙に女は飛び起き一目散に走り出す。

女 誰か、誰か、助けて！

辰雄、うろたえて、逆の方向に逃げ出す。

女の声 誰か来て、助けて。

## タイトル——キャスト

### 2 旅館・松原荘の二室

ベッドの上で激しく抱擁し合っている木原と京子。

京子を愛撫していた木原、ふと腕時計を見て、

木原 京子、もう九時だよ、そろそろ起きなきゃ。

京子、木原の体にしがみつき、

京子 ねえ、今夜もここへ泊って。お宅へは帰らないで、ね、お願い。

木原 そうはいかないよ。女房の奴、薄々

感じ出して来たらしいんだ。

如何にも気の弱そうな感じの木原、まといつく京子の手を振り払うようにし立ち上る。

京子 (すねて) 奥様がそんなに怖い。

木原 胫に傷もつ男なら誰だって女房は怖いよ。さ、会社におくれるぞ。

木原、京子の下着をつかんでベッドの上へほうり投げる。

### 3 旅館・松原荘の前

タクシーが止まっている。

玄関を出て来た木原と京子。顔を隠すようにしながらタクシーに乗り込む。

その近くを青いソフトをかぶった如何にもやくざ風な男(清次)が通りすがり口笛を吹いて揶揄する。

タクシー、走り出す。

清次 へっ、いい気なもんだぜ。

### 4 辰雄のアパート

六畳一間の薄汚ない部屋。

吸殻の一杯つまった丼皿、牛乳びん、三流週刊誌類が、乱雑に散らかっている。

せんべい布団にもぐりこんでいる辰雄。窓から、朝の光がさしこんでいる。

布団の中から辰雄が亀の子のようにそっと首を出す。昨夜、BGになぐられた額のあたりが痣になっている。

辰雄、そっと灰皿をひき寄せ、煙草に火をつける。ふーと煙を吐く。如何にもつまらなそうである。

壁にはりつけてあるヌード写真に辰雄、眼をそそぐ。煙草をそっとヌード写真に近づけ、乳房のあたりに押しつける。

焼けこげていくヌード写真を辰雄、血走った眼つきになってじっと見つめる。



ドアをノックする音。

ハッと我に返った辰雄、あわてて煙草を灰皿の中へ突っこむ。

辰雄 誰だ！

清次の声 お前のお兄様だよ。まだ寝てるのかい。

辰雄、起き上って、ドアの内鍵を外す。

清次、ニヤニヤしながら入って来る。

清次 どうしたんだよ。おでこに大きな痣なんか作っちゃって？

辰雄、黙って布団をたたみ、押入れの中へ投げこむ。

清次、机の上に坐り、ガムを噛みながら、

清次 どうだね、景気は？ え、辰雄。

辰雄 （冷めたく）用は何だよ、兄さん。

清次 ああ、一寸、いい難い事なんだがよ。

（卑屈に笑って）借金取立業の仕事が、この所思わしくねえんだ。

辰雄 それで――。

清次 ほんの二、三日でいいんだ。少しばかり借してくれねえか。

辰雄、黙って机の引出しを開け、ノートにはさんであつた一万円札を清次に差し出す。

清次 へえ、豪勢だね。こんなに借りていいのかい。

辰雄 バイトで貯めた授業料だけど、もう

いららないんだ。

清次 ええ？

辰雄 先月で大学はやめたんだよ。

清次 ど、どうしてだ。やくざの兄貴がついてるって事が、大学で問題になったのか。

辰雄 何いってるんだ。

辰雄、坐って、煙草を口にする。

辰雄 馬鹿馬鹿しくなつて来たんだよ。本やノートに噛りつくだけで、自分の

性欲の満足も得られず、青春を浪費していくなんてナンセンスだよ。無理して大学を出たところで、自分の

好む快樂が得られるかどうか、わからないもんな。

清次

（眼をパチパチさせて）ま、俺はあまりむつかしい事はわかんねえけどよ。

清次、辰雄が口にした煙草にライターの火をつけてやる。

清次 そりゃ学校をやめるのはお前の勝手だけどよ。俺は仲間に弟が大学へ行

ってる事を自慢していたんだぜ。

辰雄、畳の上にごろりと横になる。

辰雄 ああ、退屈だな。な、兄さん。あん

た今、何が楽しみで生きてるんだ。

清次 ええ？ そりゃ、ま、色々楽しみ

はあらあな。バクチを打ったりよ、女をたらしこんだりよ。

辰雄 羨しいよ。俺にやそういう刺戟が何もないんだからな。自分の好きな事が一度だけでもいい本当に出来たら

俺は死んでもいいと思ってるんだ。

清次 お前のやりたい事てのは、一体何だよ。

辰雄 （眼を閉じて）どういったらいいのかな。そう、表面をきれいに飾り、

すましこんでいる女をズタズタに引裂いてやりたいんだ。女の仮面性を剥ぎ取って、一皮むけば一匹の雌犬

に等しいって事を女自身に認識させてやりたいんだよ。

清次 随分とむつかしいんだな。ハハハ、

つまり、お前は欲求不満なんだよ。ま、待ちな。俺がそのうち、いい女

を世話してやるぜ。

辰雄 兄さんが世話してくれるような女じゃ俺の欲求を満たす事は出来ないよ

妥協する女には興味がないんだ。



清次、小首をかしげるようにしていたが、清次（ニヤリとして）素人娘がいいって

んだろ。よし、わかった。可愛い弟の為だ。俺が一肌脱いでやるぜ。

## 5 酒場あざみ

辰雄、スタンドに坐って飲んでいる。ホステスの町子、後からやって来て、ビールを取り、どうぞ、と辰雄にすすめる。

町子 今夜は随分と冷えますね。

辰雄 ——。

町子 この店は、始めていらっしやったんですか。

辰雄、それに答えず、ピーナツをポイポイ口に投げこみながら、じろじろ町子のバスト、ヒップなどに眼を向ける。

町子、ぞっとした気分になり、辰雄のもとを離れ、ボックスの方へ行く。

ボックスにいるのは、今朝、松原荘から出て来た日東工業の営業部長・木原とタイプピストの京子だ。二人、沈みきっている。

町子、ソファの隅に腰をおろして、ビールをとり、

町子 さ、どうぞ。

と、木原に向ける。

木原、憂うつな表情で煙草を吸っている。

町子 如何ですか。さ。

と、京子に向けるが、京子、ハンカチで眼頭を押さえている。

町子、とりつく島がない。

木原 いいんだ。ほっとしてくれ給え。

町子 はい。

町子、そわそわと立ち上り、他のボックスへ歩いて行く。

スタンドに坐っている辰雄、ビールを口に当てながら、木原と京子の方に、じっと視線を向けている。京子、眼頭を押さえていたハンカチを、オーバーのポケットにしまくと、自棄になったよう、ビールを一息に飲む。

京子 ひどいわ。今になって、そんな——。

木原 だって、仕方がないじゃないか。これ以上、社内でうわさが立てば僕も困る。君だって、同じだろ。

京子 私、帰りたくないわ。ここにいます。

木原 明日、幹部会議があるんで調べものをしなきゃならないんだ。帰るけどいいね。

木原、立ち上り、ドアの方へ行く。

町子 お帰りですか。有難うございました。

木原、ドアを開けて出て行くと入れ違いに

清次が入って来る。ふと、木原の横顔を見て、どこかで見た男だ、という風に小首をかしげたが、スタンドの辰雄を見て、すぐニヤリと笑う。

清次 やっぱりここにいたのか。

清次、辰雄の横に坐り、バーテンのついたビールを一息に飲んで、

清次 不景気だね。全く。友人に車を借り

て、府中まで手形の取立てに行ったんだが、相手の野郎は夜逃げしちまってやがるんだよ。

辰雄、それに答えず、じっとボックスの京子に眼をそそいでいる。

京子、思いつめた表情で、一人、カクテルを飲んでいる。

清次 （ニヤニヤして）割といい女だな。

あんなのがお前の好みか。

辰雄 （相交らず、じっと京子に視線を向けている）

清次 あの女は紐つきだぜ。今朝、ホテルから男と出て来やがった。へへへ。

ねっとりした瞳を京子に向けつづけている辰雄を清次、不思議そうに見て、

清次 大分、お気に召したようだな。（辰雄の耳に口を寄せる）乗るかそるか、



一丁やってみるか、辰雄。  
6 酒場・あさみの近く

自動車の運転席に乗っている清次と辰雄、じつと酒場の方を監視している。

ドアが開いて、京子、ふらつきながら出て来る。あとから、バーテンが出て来て、

バーテン 大丈夫ですか。タクシーを呼んだ方が。

京子 大丈夫よ、バイバイ。

バーテン それじゃ、お気をつけになって。有難うございました。

バーテン、店の中へ入る。

清次、車を動かし、千鳥足で歩く京子の横へつける。

清次 (車の窓から首を出し)

大分、酔ってますね。ど

こまで帰るんですか。

京子 あんた、白タクなの。

清次 そう。安くしときますよ。

京子 じゃ、笹塚まで。お願いね。

辰雄、車のドアを開ける。

京子、フラフラしながら車に乗りこむ。

車、走り出す。



7 辰雄のアパート

ドアを閉め、内鍵をかける清次、ホッと息をつく。

清次 全くついてるぜ。誰にも気づかれなかったんだからな。

狭い部屋の一隅に投げ出されている京子。後ろ手に縛られ口にきびしく猿轡をかまされて

いる。

辰雄、そんな京子の傍に突っ立っている。

手首のあたりをグルグル震わせている辰雄を見た清次。

清次 お前のために手を貸してやったんだ

ぜ。慄えるんじゃない。だらしがねえぞ。

辰雄 怖いんじゃないよ。嬉しくて体が慄えるんだ。

清次 ハハハ、さすが、俺の弟だ。

京子、必死な眼を二人の男に向けている。

清次、京子の傍へ腰をかがめ、

清次 よ、ここは野中の一軒家じゃねえんだ。ガタガタ騒ぎやがると(ポケット

トからジャックナイフを出し、畳の上にごさりと突き立てる)命はねえ

からな。

京子、恐怖に眼をつり上げる。

清次 (辰雄に) さ、あとは手前の番だ。煮るなと焼くなと好きなように料理

しな。

清次、机の上に腰をかけ、ポケットからウイスキーの小瓶を出して飲み始める。

辰雄、何かにとり憑かれたように眼をギラギラさせ、京子に近づく。

ぞっとして、畳の上をいざるように後退する京子。

辰雄 いいな。これからお前を素っ裸にしてやる。

京子 (哀願の色を眼に浮かべ必死に首を



振る)

辰雄 それから、明け方まで、なぶり者に  
してやるんだ。(狂ったように笑い  
出す)

清次 そう、ブツブツいってねえで、早く  
やっつけなよ。

辰雄、京子につかみかかる。

京子、畳の上を転げ廻り必死に抵抗する。  
ブラウスが破れ、スカートがはね返るが、  
狂乱したように暴れて、辰雄の手を振りほ  
どく。

たじたじとなっている辰雄を見て、清次、  
舌打ちする。

清次 だらしがねえぜ、辰雄。<sup>スケ</sup>女をものに  
するにやな、こういう具合にするん  
だ。俺が見本を示してやる。

清次、辰雄にかわって、京子に襲いかかる  
と、京子の髪の毛をつかんで、上体を引き  
こし、いきなり京子の頬を平手打ちする。  
二発、三発と頬をぶたれた京子、猿轡の中  
で声にならない悲鳴をあげる。

清次、京子の肩先に足を当て、うしろへ蹴  
り飛ばす。後頭部を激しく畳の上に打ちつ  
けた京子、全身から力が抜けたようになる。

清次 俺は、カッとなると何をするかわか

らねえぜ。じたばたするんじゃない。

清次、京子の衿首をつかんで、再び、強引  
に上体を起こさせる。

京子、ぐったりと首を前に垂れ、抵抗の気  
力を喪失している。

清次 さ、おとなしく丸裸になるんだ。辰  
雄、手を貸せ。

清次と辰雄、京子の縄を解き、猿轡を外す  
と、二人がかりで京子の衣類を剥ぎ取り出  
す。

スリップが脱がされ、ブラジャーが外し取  
られると、京子、乳房を両手で覆い、嗚咽  
し始める。

清次 へへへ、ま、災難だと思って、あき  
らめるんだな。

辰雄、血走った眼つきをし、最後の一枚に  
手をかける。ハッとして、両手でゴム紐を  
押さえる京子。

京子 お、お願い、勘忍してっ。

辰雄 兄さん。こいつをも一度縛るんだ。

清次 よしきた。

辰雄、京子の両腕をうしろへねじ曲げ、麻  
縄でキリキリ縛り上げる。

深く首を垂れ、すすり上げている京子の横  
顔を辰雄、妖気めいた喜色を顔に浮かべ、

凝視している。

辰雄 も一度、猿轡を——兄さん。

清次 OK。

京子の口に清次、再び猿轡をかませる。

美しい芸術品でも眺めるように、辰雄、陶  
然として、屈辱と羞恥にあえぐ京子の肢態  
を見つめている。

清次 (京子の頬を指でついて) へへへ、  
こうなりや<sup>まいた</sup>蛆の上の鯉だな。こい  
つはこういう方法で女と遊ぶ事が好  
きだそうだ。いい玩具になっ<sup>おもちゃ</sup>てやっ  
てくん。

清次、立ち上り、ドアの方へ行く。

清次 俺がここにいと二人とも遊びにく  
いだろ。気をきかしてやるぜ。

清次、ドアを開ける。

京子のうめく声、最後の一枚が部屋の隅に  
飛ぶ。

それを見て、ニヤリとした清次。

清次 ま、たっぷり楽しみな。

ボタンとドアが閉まる。

## 8 木原の家・寝室

木原、夜具の中で煙草をくゆらしながら本  
を読んでいる。

鏡台の前で、妻の葉子が長襦袢姿のまま化



粧している。

葉子 昨夜は何処へお泊りになったの。

木原 ああ、取引先の課長にマージャンを誘われてね。とうとう徹夜さ。連中はしつこくて困るよ。

葉子 (皮肉な口調で) しつこいのは女の人じゃないんですか。

木原 ——ええ？(本を伏せて葉子を見る)

葉子 女の感<sup>かん</sup>で、馬鹿にならないものよ。念のためにいっときますけど、私、貴方とは絶対に別れないわよ。

木原 (酸っぱい表情になる)

葉子 どうしても別れたいとおっしゃるのなら、そうね——手切金は三千万円。

木原 何て事をいうんだ。葉子。

葉子 つまり、それ程、私は貴方を愛しているという事なのよ。

葉子、木原に近づくと、夜具の上から覆いかぶさるようにして、木原を抱きしめる。

葉子 ねえ、貴方、私の一体どこが気に入らないの。悪い所があるなら直しますわ。ねえ、おっしゃって。

葉子、とってつけたような娼婦的技巧で木原にまといつく。

木原 葉子、今夜は俺、疲れてるんだ。

葉子 嫌々、ねえ、しっかり抱いて。

やがて、葉子に巻き込まれていく木原。

## 9 銀座通りの俯瞰

## 10 日東商事・部長室

木原、書類にペンを走らせている。

ノックの音。

木原 どうぞ。

書類を手にした京子が入って来る。

精彩のない表情で、木原の前に書類を置く。

木原 ああ、御苦労。

ペラペラと書類に眼を通し、ふと京子の顔を見て、

木原 どうしたんだ。ここ二、三日、顔色がすぐれないようだね。

京子 ——。

木原 どこか体の具合が悪いのかね。

京子 はあ、一寸、頭痛が——。

木原 そりゃいかな。あまり無理をしない方がいいよ。

京子、一礼して、出て行こうとする。

木原 あ、一寸、君。

京子、振向く。

木原、煙草に火をつけて椅子から立ち上り窓の外を見ながら、

木原 なかなか女房に切出せず弱ったよ。

こっちがその気配を見せると向こうが先手をうってくるんだ。

京子 ——。

木原 僕は意気地なしだよ。どうしても女房には勝てない。

京子 勝てないじゃなくて、結局、部長さんは奥さんを愛していらっしゃるんですわ。

木原 君にそういわれても仕方がないな。木原の煮えきらない態度に京子口惜しげに唇をかむ。

木原 僕に愛想がつきたのなら、僕から離れて行ってくれてもいいんだよ。君の自由を束縛する権利は今の僕にはないんだからね。自分の事はよく自分で考えるべきだと思うんだ。

京子、憤怒の表情で出て行こうとする。「あ、君」と、木原、内ポケットから封筒を取り出し、京子に渡す。

木原 少ないが服でも買ってくれ給え。小切手で十万円入っている。

京子 これ手切金のつもりなんですか。

木原 何云うんだ。僕が云ってるのは。京子、かっとして、封筒を破り捨てる。

木原 な、何をするんだ。





京子 貴方のような意気地のない男を愛してしまった自分が口惜しいのよ。

京子、ドアを開け、飛び出して行く。

木原 待<sup>ま</sup>、待ち給え。

11 辰雄のアパート

辰雄と清次、部屋でゴロゴロしている。

怠惰と不潔が充満した部屋の中。

辰雄は、手枕をして、ぼんやり天井を見上げ、清次は、センベイをポリポリ噛みながら、新聞を読んでいる。

清次 よ、辰雄。あの女<sup>スケ</sup>、警察にはとうとうたれこまなかったようだな。あれ

からもう三日になるが、新聞にも出てねえよ。

辰雄 (何か考えている)

清次 やれやれだ。実際の

所、俺は、まずい事しちゃったと思

ってよ。ここ二

三日、ビクビクし

てたんだ。

清次、新聞を投げて、煙

草を口にする。

清次 俺も二、三度、こ

の前みてえな事をしたが、女って奴は、滅多にたれこまねえもんだな。

世間に知られるのが羞しいんでほと

んどが泣き寝入りよ。そこがこちと

らのつけ目なんだが――。

辰雄、シャツのポケットから一枚の名刺を

出して、ぼんやり眺める。

辰雄 日東商事、営業部、川瀬京子――か

清次 何だ。あの女<sup>スケ</sup>の名刺か。

辰雄 ハンドバッグから抜いたんだ。

清次 俺は財布の方を失敬しといたぜ。二万ぐらい入っていたかな。悪銭身に

つかずだ。競馬で一ぺんに吹っとなじったよ。

清次、もの思いにふけっている辰雄の横顔を見て、

清次 どうしたんだよ、辰雄。やに元気が

ないじゃないか。ははあ、おめえ、

あの女<sup>スケ</sup>の事が忘れられねえんだな。

辰雄 (そっぽを向く)

清次 なぶりものにした女に惚れるなんて

人が好すぎるぜ。ああいう事はあれ

で、二度と思ひ出さねえ事だ。

辰雄、俯つ伏せになって思いつめた表情。

辰雄 兄さん、俺、あの女に電話してみよ

うと思うんだ。

清次 冗、冗談じゃねえぜ。悪い事ってのはな。腹八分目にしておくもんだ。

つけ上るとひどい目に合うぜ。

辰雄 兄さん、あんた、相変らずしけてる

んだろ。あの女に小づかいをせびっ

たらどうだ。

清次 ええ？ (果然とした顔つき)

辰雄 俺みたいなアルバイト学生の小銭を

たかるより、あの女にたかった方が

かしこいといってるんだよ。日東商事といえは一流会社だぜ。そのB



Gなら金廻りもいい筈だ。

清次 なるほどな。お前は大学へ行っただけあって頭がいいよ。賜<sup>なづ</sup>りものにしたら女から銭まで吐き出させる。さすがは、俺の弟だ。ハハハ。

辰雄、ゆっくりと煙草の煙を吐きながら、

辰雄 そんな事より、俺はも一度、どうしてもあの女に逢いたいんだ。金を持って来させるといふのは口実だよ。

清次 ま、いいや。あの女は、たしかにいい金づるになるかも知れねえぜ。この際、当ってくだけろだ。ハハハ。

## 12 日東商事・営業部

京子、青白い表情で事務をとっている。机の電話が鳴る。

隣の席のBG、受話器をとる。

BG はい、もしもし、こちら、日東商事営業部でございます。はあ？一寸お待ち下さいまし。

BG、京子に受話器を向ける。

京子、有難う、と受話器をとって、京子 もしもし、川瀬でございますが。はあ？（急に硬化した表情）

## 13 煙草屋の赤電話

辰雄、受話器を耳に当てている。その近く

に清次、ガムを噛みながら突立っている。

辰雄 （電話）一寸、君と話がしてみたいんだ。別にああいう事を種にして、君をゆすろうってのじゃない。とにかく、もう一度、顔を見せてくれ。な、いいだろう。

辰雄の齒切れの悪さに清次、苦り切った表情をし、横から受話器を取りあげる。

清次 （受話器を片手で押さえながら）なっちゃねえなア。恐喝<sup>かつあげ</sup>ってのはな、こういう調子でやるんだ。

清次、受話器を耳に当てる。

清次 よっ、おめえ、松原荘っていう旅館知ってんだろう。何時か、どっかの男としけこんでたじゃねえか。

そこへ今日の五時に来てもらいてえんだ。悪いけど二、三万ばかりの小づかいを持って来てくんない。

来ねえとどういう事になるか知ってんだらうな。

あの時のおめえの丸裸を俺はすっかりカメラにおさめてあるんだぜ。まさか、そいつをあっちこっちバラまいてもらいたくはねえだろ。

硬化した表情で受話器を持つ京子。

受話器からの声 よっ、聞こえてんのか。何とかいえよ。

京子 わかったわ。

ガチャリと電話を切った京子、唇を噛みしめる。

隣のBGが、京子の表情を気にして、

BG どうしたの。顔色が悪いわ。

京子 ううん。何でもないのよ。

京子、ハンカチを出して額の汗を拭う。

## 15 旅館、松原荘・その一室

卓の前に坐り、コップにビールを注いでいる辰雄。

清次、そわそわとして、しきりに窓から外の方を見つめている。

辰雄 少し落着いたらどうだよ、兄さん。

清次 だってよ、もしあの女が警察<sup>スケ</sup>にたれこみやがったら――。

辰雄 その時はその時だよ。悪あがきはやめようじゃないか。

清次、ぺたりと卓の前に坐り、コップのビールを一口飲み、

清次 おめえって奴は、いざとなると妙に胆が坐るんだな。

辰雄 段々と面白くなってきたよ。

## 14 日東商事・営業部



清次 ええ？——何をのんきな事いってやる。乗るかそるかの勝負をはってらんだぜ。

辰雄 たった二、三万でかい？

清次 そりゃ、オケラよりいいじゃねえか……。

女中の声 あの、お連れ様がいらっしやいました。

辰雄と清次、緊張する。

襖が開いて、京子が入って来る。

京子の冷たい視線が二人の男の視線とからみ合う。

清次 へへへ、よく来てくれたな。ま、そこへ坐んなよ。

京子、静かに卓の前に坐る。

清次、コップを京子の前に置いて、

清次 どうだい。一杯、やらねえか。

清次、コップにビールを注ぐ。

清次 この前は、随分と手荒な真似をしちまったな。こいつがお前さんに一眼惚れしちまったんでよ。つい、あんな事になっちまったんだ。悪く思わねえでくれよな。

京子、冷酷な眼を清次に注ぎながら、コップを取り、ビールを飲む。



辰雄、そんな京子の横顔を、射るような眼差しで見つめている。

京子 貴方達の用件をすますわ。

京子、ハンドバッグを開ける。

清次 (ニヤリとして) すまねえな。ここんとこ、ちっとしけこんでるんだ。悪く思わねえでくれよ。

京子、卓の上に三万円を置く。

清次、ニヤリとして、辰雄の顔を見る。

辰雄は、ただ、じっと京子の表情を見ている。次に、京子の胸のあたり腰、太腿あたりに辰雄の視線が移向し始める。

清次 すまねえな。じゃ、有難く頂戴しとくぜ。(卓の上の金に手をのばす)

京子 たったそれっぽっちでいいの清次 ええ？

清次、頓狂な顔つきになって京子を見る。

京子 悪党にしては一寸、欲が無さ過ぎるじゃない。

清次 (眼をパチパチさせる) 京子 無理矢理犯した女をゆするなんて、ケチな事をするより、

悪党ならもう少し大きな仕事に手を出したらどうなの——私と組んで。

清次、威圧された形になり、京子の手にしたコップにビールを注ぐ。

京子、辰雄の眼を見ながら、京子 あんたの変な趣味を十分に満足させる事が出来て、しかも、かなりのお金になる仕事なのよ。

清次 一体、何だよ、その仕事ってのは。



京子 ある人妻を誘拐してほしいの。

清次 誘拐？

京子 そう。そして、あんた達が私にしたような方法で、うんと痛めつけてやってほしいのよ。それだけで、五十万の謝礼を払うわ。

清次 五十万だと。

京子 そう、私の貯金全部よ。

清次 五十万とは豪勢だが——どうして、おめえ、そんな事を。

京子 憎い男に復讐するのよ。

京子、立ち上って、窓の外を眺める。

清次 辰雄、おめえどうする、俺は今どう

してもまとまった金が欲しいんだ。

辰雄 俺はその人妻ってのが気に入ったよ面白いじゃないか、兄さん。

京子、振返って、微笑する。

京子 じゃ、商談は成立ね。それじゃ、五十万の半金、明日ここで支払うわ。その時、作戦を立て合いましょ。

清次 よしわかった。間違いなく頼むぜ。

京子、次の間に布団が敷かれ、麻縄などが用意してあるのに気づく。

京子 段どりがいいわね。フフフ。

京子、辰雄の顔に眼を向けながら、

京子 貴方にも手付を払わなくちゃいけないわね。いいわ。

京子、服を脱ぎ始める。

清次、三万円をポケットに入れ立ち上る。

清次 じゃ、明日の五時、俺はも一度ここへ来るからな。よろしくやんな。

清次、辰雄の肩をたたいて出て行く。

辰雄、ギラギラする眼を京子に向けながら立ち上る。

京子、スリップの紐を肩から外しながら、

京子 今日私からお願ひするわ。うんといじめて。息がつまる位。

全裸になった京子、乳房を両手で押さえながら、ねっとりした瞳を辰雄に向ける。

京子 馬鹿な自分に腹が立つのよ。自分を思いきり折檻してやりたいの。ねえお願い——。

お願い——。

辰雄、京子の肩をうしろから抱きしめるようにし、肩や首筋に接吻の雨をふらす。

京子 (甘えるように) ねえ、縛って。

京子、くずれるようにその場に身をかがめ両手を背中に廻す。

麻縄をとり、血走った眼つきで、キリキリ

京子を縛りあげる辰雄。

京子 ねえ、ぶって。お願い、思いきりぶ

って頂戴。

辰雄、ズボンのバンドを引き抜き、力一杯京子をぶち始める。

悲鳴をあげて、京子、のたうち廻るが、喜悅と苦痛の混ったすすり泣きをして、もっと、もっと、と、うめきつづける。

脂汗を流して、京子を狂ったようにぶちつづける辰雄。やがて、バンドを捨てると、のしかかり、太腿あたりに喰らいつく。

うっと眉を寄せ、のけぞる京子、齒を噛み鳴らしながら、

京子 もっと、もっと、いじめて頂戴！

16 日東商事・営業部

算盤をはじいている京子。

隣のBG、ふと、柱時計を見て

BG ね、そろそろお食事に行かない。

京子 この仕事をすませてからにするわ。

BG そう。じゃお先に食堂へ行くわね。

BG、出て行く。

京子、顔を上げて、部屋を出て行くBGを見、電話を引寄せ、ダイヤルを廻す。

京子 (電話) こちら、日東商事でござい

ますが、木原部長のお宅ですか。あ奥様でいらっしゃいますか。

17 木原の家



立関近くの電話に葉子が出ている。

葉子 え、主人が貧血を——会社で倒れたのですか。まあ、はい、はい、すぐに参ります。は、自動車を、こちらへ。それはどうも。はい、わかりました。

葉子、電話を切り、あわてて、奥へ入る。

## 18 木原の家、近く

清次と辰雄の乗った車が止まっている。

二人、木原の家の立関先を監視している。

清次 来たぜ。

立関から和服姿の葉子が、そわそわと出て来る。

清次、車を動かし、葉子の傍へ止める。

清次、車から飛び出し、

清次 日東商事から参りました。（車のドアを開ける）

葉子 それは、どうも——。

葉子、恐縮したように車の中へ入る。

ドアを閉めた清次、助手席に坐っている辰雄を見て、ニヤリとして片眼をつぶる。

## 19 日東商事・営業部

京子、思いつめた表情で、算盤の珠を指ではじいている。眼の前の電話が鳴る。

ハッとして受話器をとる。

京子 はい、もしもし。（硬化した表情）

## 20 公衆電話ボックス

清次、電話をかけている。

清次 うまくいったぜ。おめえのくれたクロロホルムってやつで簡単にお寝んねしちまったよ。これから例の場所に連れこんで、辰雄と二人、たっぷり楽しませてもらうからな。

## 21 日東商事・営業部

青ざめた表情で京子、受話器を耳に当てている。

京子 （電話）——そう。あとは、あんた達に任せるわ。

ガチャリと電話を切った京子、鉛筆を手にして、帳簿に向うが、手が震えている。

木原の声 江崎君。

ギョッとして京子、振向く。

木原、ドアの前に立っている。室内に人のいないのを見定めて近づいて来る。

木原 一寸、君に話があるんだ。今夜、黒バラへ来てくれないか。

京子 ——。

木原 いいだろ。——どうしたんだ。顔が真っ青だよ。

京子 そうですか。（わざと笑ってみせる）

## 22 納屋の中

長襦袢姿のまま麻縄で縛られている葉子、必死な眼を辰雄に向けながら後退して行く獲物を狙う眼つきで、じわじわ葉子に迫る辰雄。

外から誰かが納屋の戸を開けようとする。葉子すがりつく思いで戸の方へ走り出す。

葉子 助けてっ、助けて下さいっ。

戸が開き、入って来たのは清次だ。手に食料品などを一杯かかえている。

清次 お眼ざめになったのかい。へへへ、じたばたしたって駄目だぜ。ここは

千葉県の子田舎さ。人里離れた山の

中にお前さんは来ているんだぜ。

葉子 私を一体どうしようっていうの。

清次 どうとも好きなようにしろ、というボスの命令さ。

たっぷりおめえの体を楽しませてもらうぜ。

葉子、納屋の戸が半開きになっているのに気づき、素早く、外へ走り出す。

清次 あっ、畜生。

## 23 林の中

縛られたままの姿で、必死に逃げる葉子。必死に追う辰雄と清次。



葉子（呼ぶ）誰か、誰か来てっ、助けてっ。

葉子を縛った縄尻が木の幹にひっかかる。裾の間から太腿まで露出させて身悶える葉子。

追って来た二人に忽ち取り押さえられる。

清次 畜生、往生際の悪い女だ。

辰雄、葉子の頬を激しく平手打ちする。

清次 あきらめがつくよう素っ裸にしてやるぜ。さ、来い。

清次と辰雄、激しく身を揉む葉子を横抱きにして運び出す。

## 24 納屋の中

腰巻一つにされた葉子、辰雄と清次に柱に縛りつけられている。

ほっと息をついた清次、葉子の体をしげしげと見て、

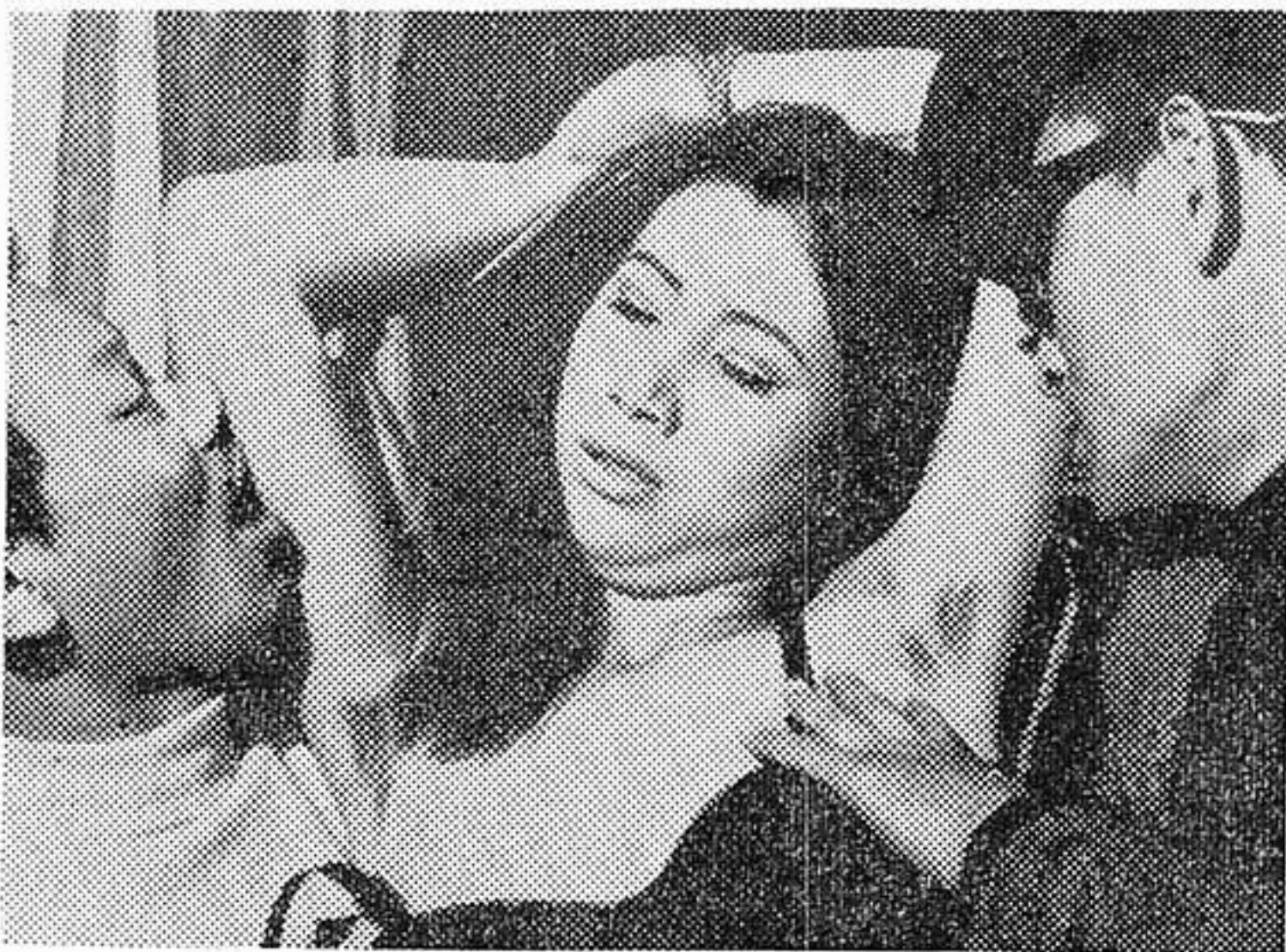
清次 へえーいい体してやがんな。辰雄、

今度は俺にも楽しませろよ。

辰雄、屈辱にすすり泣く葉子の顎に手をかけ、ぐっと顔を正面にこじあげる。

辰雄 口惜しいか、泣け、もっと泣け。

辰雄、変質者めいた仕草で、葉子の耳を力一杯ひっぱり、鼻を指でつまみ上げる。葉子、悲鳴をあげて身を揉む。



そんな葉子を楽しみながら、辰雄、身をかめ、腰巻の紐をゆっくりと解き始める。

葉子（逆上して）な、何をするんです。

やめて！

納屋の隅に腰巻が飛ぶ。

羞恥に歪んだ顔を横へそむける葉子。

## 25 酒場・黒バラ

木原と京子、ボックスに坐っている。

京子 お話って、何ですか。

木原 京子。家内と話がついたよ。

京子 話がついた？（不思議そうに木原を見る）

木原 僕の優柔不断を君は長い間恨んでいたろうけど、昨夜、やっと、別れ話がついたんだよ。

京子（啞然とする）

木原 これを見給え。

木原、ポケットから何通かの封書を出す。

木原 差出人は女の名前になっているが、男からの手紙なんだ。家内には、男がいたんだよ。つまり、姦通さ。

京子 まあ。

木原 家内の部屋で偶然に見つけたんだ。

こういう事実がある限り、今更、離婚を嫌とはいわせない。僕は、むしろ、救われた思いだよ。

京子（複雑な表情）

木原（京子の手を握って）ね、京子、今夜いいだろ。

京子 木原さん。私——（顔を伏せる）

木原 もう僕は君を離さないよ。

## 26 納屋の中

清次、ウイスキーを飲んでニヤニヤする。



ピシリッと肉を打つ音。

天井の梁から垂れたロープに縄尻をつなぎ止められ爪先で立っている葉子。腰の周囲を手拭で覆われただけの屈辱の姿。

そんな葉子の尻を辰雄が力一杯、青竹でぶち続けているのだ。

青竹がうなる度、葉子、悲鳴をあげて大きくのけぞる。

清次（ニヤニヤして）いい加減にしろよ

辰雄。女を泣かすにやもっと面白い方法があるじゃねえか。

辰雄、ようやく青竹の拷問を止め、肩で大きく息をしながら、脂汗を流して苦しげにあえぎつづける葉子の顔を見る。

妖気を含んだ笑いを眼と口に浮かべた辰雄煙草を口にして、火をつけ、煙を葉子の顔へ吹きかける。葉子、煙にむせて咳こみ、息もたええといった風に、

葉子———お願いです。もう、もう許して私、死んでしまおう。

辰雄 俺は今、最高の感激を味わってるんだ。そっちが死のうと生きようと、そんな事どうだっていい。

葉子、声を震わせて泣きじゃくる。  
辰雄、煙草の火を葉子の胸元へ近づける。

葉子、眼をつりあげる。

辰雄いきなり、火を押しつける。

葉子、ギャーと悲鳴をあげる。

辰雄、葉子の足元へ身をかかめると、青竹を持って、

清次の方を見る。

辰雄 手伝ってくれ。面白い事してやるんだ。

辰雄、青竹を葉子の足の関節あたりに当てがう。

辰雄 開きな。

葉子 な、なにをするんですっ。

辰雄 肢を開けといってるんだよ。

清次も手伝い、青竹と縄をつかって葉子に足枷をつける。

清次 いい恰好だぜ。奥さん、ハハハ。

辰雄 こいつで細工してやるんだよ。

辰雄、ポケットからナイフを出す。

清次 成程。そいつは面白えや。（葉子に）一寸、羞しいだろうが辛抱するんだぜ。奥さん。

葉子（狼狽して）馬、馬鹿な事はやめて

っ、嫌っ、嫌よ。

清次 いいから、いいから。こっちに任しておきな。

腰の手拭の結目をとき始める清次と辰雄。狂ったように身悶えし、わめきつづける葉子。

## 27 旅館・松原荘（朝）

ベッドの上で激しく抱擁し合う京子と木原やがて——。京子、深い溜息をつき、余韻に耽るよう木原の裸の背に頬を当てる。

京子 木原さん。私、とうとう貴方の奥さんになれるのね。

木原 随分と長い間、辛い思いをさせたね京子。

京子 もう一日早くその言葉が聞きたかったわ。

木原 ええ？

京子（淋しく微笑して）ううん、いいのよ。私、幸せだわ。

木原、京子に接吻する。

京子 ねえ、私、お願いがあるんだけど。

木原 なんだ？

京子 今日一日、私、会社を休ませてほしいの。

木原 何だ、そんな事か。だがどうして。

京子 誰もいない静かな所で、私、この幸福を噛みしめてみたいの。

木原 ハハハ、随分と君は、ロマンチスト



なんだな。

木原、再び、激しく京子を抱きしめる。

## 28 納屋の中

土間に全裸の葉子が投げ出されている。

精も根も尽き果てたよう身動きもしない。

それを眺めながら、辰雄と清次、ソーセー

ジを噛り、ウイスキーを飲んでいる。

清次　ハハハ、のびちまいやがったぜ。男

二人に一晚中可愛がられたんだ。無

理もねえや。

清次、ウイスキー瓶をラッパ飲みして、

清次　辰雄、おめえも堪能したようだな。

辰雄　（葉子に眼を注ぎながら）胸のつか

えが降りたような気分だ。

辰雄、のっそり起き上って、葉子の背中を

足で踏みつける。

小さくうめく葉子。

清次　な、辰雄、ここでもう一勝負やって

みようじゃないか。

辰雄　――。

清次　この奥様の身代金を亭主に吐き出さ

せるんだよ。

辰雄　ええ？　身代金――。

清次　相手は日東商事の部長さんだぜ。ま

二百万ぐらいってところだろ。

辰雄　そりゃ、やばいよ兄さん。あまり欲

を出すなといったのは、そっちじゃ

ないか。

清次　だがよ。俺達は今ついてるんだぜ。

ここは一番、大きな欲を出す時だと

思うんだ。

辰雄　（気がすすまない）

清次　（辰雄の肩をたたいて）男は度胸だ

大穴を当てようじゃねえか。

清次、俯伏している葉子の肩に手をかけひ

っぺ返すようにして上体を起きさせる。

清次　辰雄、縄をかせ。こうなりゃいよい

よ大事な人質だ。

清次と辰雄、葉子を縛り上げ、猿轡をかま

せる。

清次　おとなしくしてるんだぜ。仕事が終

ったら、また、たっぷり可愛がって

やるからな。

## 29 日東商事 部長室

木原、書類に眼を通している。

書類を隅へ押しやり、煙草を口にする。

机上の電話が鳴る。

木原　はい。もしもし。はあ、営業部の木

原ですが、貴方は――（急に表情が

硬張る）な、なんだと、（受話器を

耳に当てたまま立上る）

## 30 公衆電話ボックス

清次が電話している。

辰雄は周囲を見張っている。

清次　（電話）どうだい。二百万で手を打

とうじゃないか。あんたも部長さん

だ。それ位の金、今すぐに都合がつ

けられるだろ。何せ、部長の席がか

かってるんだからな。金は、三時き

っかり新宿の駐車場に持って来ても

## 31 日東商事 部長室

木原、青ざめた表情で、受話器を耳に当て

ている。

木原　――うん、うん、わかった。それで

今、葉子は、葉子はどこにいるんだ

（電話向うから切れる）もしもし、

もしもし。

木原、受話器を置き、力が抜けたように椅子に坐りこむ。

ふと、気を取直したように電話のダイヤル

を廻し始める。

木原　（電話）もしもし、警察ですか。

## 32 新宿の駐車場





と辰雄に鋭い視線を向けている。そわそわと動き廻る辰雄、ふと、電柱に隠れている刑事に気づく。

辰雄 兄さん、刑事だ。

清次、ギョツとして、電柱の方を見る。

清次 (大声で) 辰雄っ、逃げろっ。

辰雄と清次、走り出す。

それに気づいて追う刑事。

清次、刑事の一人にうしろから羽交締めにされる。

清次 辰雄っ、逃げるんだ、早くっ。

辰雄、振向いて、兄さんと呼ぶが、刑事の一人に追われ、再び走り出す。

辰雄、石につまづいて顛倒する。刑事のしかかる。

刑事と激しく争う清次と辰雄。——やがて手錠をかけられ、引きずられるようにして連行されて行く。

### 33 納屋の中

柱にがんじがらめに縛りつけられている葉子、猿轡の中で、すすり泣いている。

納屋の戸が静かに開き始める。

ハッとして、前方を見つめる葉子。

サングラスをした女がそっと入って来る。

京子だ。

京子、葉子に近づく猿轡を外してやる。

葉子 (必死に) 助けて、お願い、助けて下さい！

京子 (笑い出す)

葉子 (啞然とする)

京子 (サングラスをとって) 奥様、私、木原部長と三年もの間、関係をつづけていた日東商事のBGですよ。

葉子 えっ。

葉子、京子に憎悪のこもった瞳を向ける。

葉子 私を、私をこんな目に合わたのはあ、あなたなのね。

京子 そうなの。女ってこわいものね。そう思いませんか、奥様。

葉子 鬼よ。あなたは人間の皮をかぶった悪魔だわ。

京子 (平然としてその辺を歩きながら) 昨日、私、木原部長から結婚を申込まれたわ。皮肉なものね。もう一日木原さんの申し出が早かったら、私こんな大それた犯罪は犯さなかった

辰雄と清次、駐車場の中で、落着きなく歩き廻っている。

清次 (腕時計を見て) 畜生、嫌に待たせやがるな。

辰雄 兄さん。戻ろうよ。俺、何だか胸騒ぎがするんだ。

清次 もう少し待ちな。これが最後の大バクチなんだからな。

駐車場入口の電柱あたりに刑事二人、清次



のに。

葉子（嗚咽する）

京子 運が悪かったとあきらめてよ奥様。

こうなれば、もう奥様に死んでもらうより仕方がないわ。

京子、ハンドバッグから小瓶を取出す。

葉子、恐怖に顔をひきつらせる。

京子 青酸カリよ。すぐにあの世へたどりつけるわ。

土間に散らばっている男達の食べ残したもののの中から、コップとウイスキーを持った京子。

葉子 やめて！ お願い、殺さないでっ。

コップに注いだウイスキーの中に毒薬を投入した京子、ゆっくりと葉子に近づく。

葉子 嫌っ、嫌っ。お願い、助けて。

葉子、泣きわめき、必死に首を振る。

京子 もう手おくれよ。さ、飲んで頂戴。

京子、コップを葉子の口に押し当てる。

髪を振り乱し、かたく口を結んで、必死に抵抗する葉子。

京子、鬼女のような形相になって、ウイスキーを強引に葉子へ飲ませようとする。

京子、かっとなって、葉子の頬を二発三発ぶち始める。

葉子の頭髮をつかんで、ぐいと顔を上げさせた京子、激しい息をしながら、

京子 三年もの間、私はあんたを恨みつけていたんだ。今、その恨みをはらしてやる。さっ、お飲み。

再び、コップを葉子の口へ。

遂に葉子の口へ、ウイスキーが流れこむ。

### 34 納屋の近く

車が止る。

木原、二人の刑事と車から飛び出す。

刑事A （納屋の方を指さして）あそこだ。

刑事B （木原に）さ、早く。

### 35 納屋の中

京子、狂ったように笑いつづけている。

柱に緊縛されている葉子、深く首を垂れるようにして絶命している。

笑っていた京子、葉子の死体を見ているうち、段々と顔が悲痛に歪み始める。泣き出す。

葉子の死体に額を押しつけ、

京子 許して、許して、奥さん。

納屋の戸がガラリと開く。

京子、ハッとして顔を上げる。

入って来たのは刑事二人と木原である。

中の異様な光景に、三人、ギョツとする。

木原（悲痛な表情で）京子っ。

京子（哀切的に）木原さん。

木原（半分ベソをかきながら）京子、お前、な、なんて事を――。

京子 どうしても、どうしても貴方と一緒にになりたかったのよ。

刑事二人、京子に近づく。

京子、手にしていたコップを口に当て、残っているウイスキーを一気に飲む。

刑事A あっ。

と、京子の手から、コップをたたき落す。

刑事A 薬を飲んだんだ。

刑事A、刑事B、あわてて、京子を外へ連れ出そうとする。

木原 京子っ。

刑事に担ぎ上げられる京子、木原の手を握りしめる。

木原――京子――。

京子、がっくり首を落す。京子の手、滑り落ちるように木原の手から離れる。

刑事二人に運び出されていく京子を呆然として見送る木原。

（終）



# 皮膚科の女囚

御園京子

高校時代のクラスメート、洋子と三恵、それに私の三人で過した志賀高原の三日間は、単調なOL生活にあきあきした私にとって、久しぶりの快い休暇でした。スキーに、宿でのトランプゲームに、高校時代にかえった思いの三人は、三日間をフルに遊びまわったのでした。

けれど、楽しい思い出を胸いっぱいになが家へ帰り、「さて明日からは又会社だわ」と

床に入った時は、まだ顔が少しほてる程度で私は雪やけのせいとばかり思っていたのですが、あくる朝、目をさましてびっくりしてしまいました。顔中がカッカカッカと熱く、ヒリヒリと痛がゆいのです。慌てて鏡を見た私は、思わず驚きの声を出しました。

顔中が真赤に腫れ上り、その上、小さいブツブツがいっぱい出来ているのです。

どうして急にこんなことになったのか、わ

けが分りません。とに角お医者さまへ行かなくてはということで、会社に欠勤の電話をするとすぐ、いつか近所のお姉さんが顔に火傷をしてかよったという、とてもいいお医者さまを教えてくださいだき、少し遠くですけど電車で行ったのです。

その病院は皮膚科専門で、東京では一流だそうです。私が行った時も、顔中に白い薬をつけた人や、手や足に繃帯をいっぱい巻いた人が大勢来ていました。

三、四十分も待たされた末、やっと呼ばれて診察室へ入りました。この病院は、大きな診察室に看護婦さんが大勢いて、呼ばれた患者一人に看護婦さん一人がつき、先生に診ていただくようになっていたのです。

私は、ついて下さった看護婦さんに

「はじめです。お顔ですか、どうなさいました？」

ときかれて

「ハア。それがよく分らないのですけど、痛くて……」

と話している所へ担当の先生がおいでになって、私の顔をジーンとごらんになるなり云われました。

「何かつけたとか、どこかへ行ったとかしま



せんでしたか？」

「ハア、スキーへ行っていました。お友達の持って行った日ヤケ止めクリームをつけましたけど……」

「なるほど。恐らくそのクリームにかぶれたんですね」

とおっしゃりながら、カルテにいろいろと書きこまれていました。

「お通じは？」

「ハア、少々欠かしています……」

先生は看護婦さんに指示されました。

「じゃ君、赤外線をかけて、チンク油、湿布それにお面繃帯、それから……」

最後の方は、私にはわからない専門語？

でしたが、看護婦さんに

「こちらへどうぞ」

と連れて行かれたのは、ベッドのある個室のような部屋でした。

「そこへ横になって下さい」

と云われた通り、ベッドの上に私があおむけになりますと、看護婦さんは私の顔の上へ妙な器械を近づけ、スイッチを入れました。すると顔にまっ赤な光線が当たりました。さっき先生のおっしゃっていらした、赤外線をあてているのでしょうか。

「熱くないですね」

私がうなずくと、看護婦さんはそのままにして出て行きました。顔中ホカホカとあたたかくなった頃、看護婦さんが戻って来てスイッチを切り、起してくれました。

看護婦さんは何やらドロドロした白い薬の入った小さな缶と脱脂綿を持っています。

「お薬をつけますからお顔を上げて下さい」

私は思わず訊ねました。

「まア、こんなまっ白いお薬を顔につけるんですか？」

「ええ、おいやかも知れませんが、あなたのような症状には、このお薬が一番いいんですよ。ハイ、目に入るといけませんからつぶって下さいね」

云われた通り目をとじた私の額から、まぶた、鼻、頬、口、顎、そして首にまで看護婦さんは、その真白いチンク油とかいう油薬をベツタリと塗ってくれました。顔がほてっていたのでヒヤツとしていい気持でした。

全部塗り終ると、看護婦さんは大きなガーズと鉄を持って来て、私の顔にそっとあててシルシをつけ、目と鼻と口の所に鉄で穴をあけるのです。

「あのオ、それどうするんですか？」

薬をまっ白に塗られた顔で私がききますと「お顔をさわったり、汚い物がついたり、日光に当たったりしないようにお顔にあてておくのですよ」

「まーア、そんなことするんですか？」

「ええ、おいやかも知れませんが、こうしておいた方がなおりがいいんですよ」

こう云われては仕方ありません。私も覚悟して看護婦さんのおっしゃる通りにすることにしました。

看護婦さんは私の薬だらけの顔に、今の穴を切り抜いたガーズをあてると

「一寸オ、お手すきの方来てくれませんか？」

と他の看護婦さんに応援を頼みました。すぐやって来たもう一人の看護婦さんが、ガーズをおさえてくれました。

その間にさっきの看護婦さんが何か薬に浸したガーズを持って、それをやや厚目にたたむと、顔にあてたガーズの上から両頬、額、顎、そして首にもあて、その上に油紙でガサゴソと音をさせながら覆うと、縦横十文字にグルグル手ぎわよく繃帯を巻き始めました。顔をすっかり巻き終ると今度は頸にも同じように巻きます。

「ハイ、よろしいですよ」



と云われた時には、私の頸から上は繃帯ですっかり埋められてしまっていました。

「さ、今度はお浣腸しますから」

「エー？ お浣腸？」

「そうです。お通じが滞ったりするとお顔のブツブツがなかなか消えませんのよ。お浣腸といっても、ウチの病院のは遅効性になっていて二十四時間以内にジワジワと排泄されるんですよ。さ、とに角、横になって下さい」

看護婦さんはそういうと私をベッドに寝かし、容赦もなく用意を進めて行くのでした。生れてはじめての浣腸に、私はどうしていいか分らず、ただ固くなるばかりでした。

「おなかに力を入れないで。ハイ、ハーツと息を抜いて下さい」

云われた通りにするより仕方ありません。

私は急に羞しさが激しくなって逃げ出したいなりました。

「ム、ムーツ！」

「一寸の我慢ですから動かないで。……ハイすみましたよ」

「ハーツ」

大きく息をついてほっとする間もなく

「このお浣腸は一度に出ません。もし粗相でもするといけませんから、おむつをあててお

きましようね」

というではありませんか。私はびっくりしました。看護婦さんはごく当り前のことのように私の足を上げさせ、赤ちゃんのようにおむつをあてると、淡いピンクのナイロン地にビニールを張ったおむつカバーでつつんできました。

「このおむつは明日おいでになる時までとらないで下さいね。便を調べますから、絶対にはずしたりしないように」

と、看護婦さんはおむつカバーの上から絆創膏でとめてしまいました。

「ハイ、これで全部終わりましたよ。大きな赤ちゃん！」

といって笑いながらポンポンと私の腰のまわりを叩くのでした。

「あちらでお薬を上げますから、お家でガ―ゼを浸してお顔の湿布を取換えて下さいね。

あとは又、明日いらして下さい」

「どうもありがとうございます」

お礼を云ったものの、顔中繃帯で包まれているので、声もこもりがちです。

診察室を出ると、待合室の視線が一斉に私に集中したようでした。若い娘が目と鼻と口だけ出した繃帯だらけの顔で出て来たのです

からみんなが見るのは当然かも知れません。待合室の鏡でこわごわ覗いた私の顔は、自分でも誰だか分らないような、真白けの雪だるまのお化けみたいでした。

お薬を貰って帰ろうとした時、入口ですれ違ったのは、火傷でしゅうかやはり私と同じように顔中をグルグルと繃帯で包み、その上両手両足も純白の繃帯を巻かれた娘さんらしい人でした。この人に比べると、私なんか顔だけですからまだいい方かも知れません。

外へ出ましたが、馴れないおむつなんかを当てられたせいか、何となく腰のまわりがゴワゴワした感じで歩きにくいったらありません。どうやら駅に着きました。ここでも人々の視線は私に集まります。中には

「マア、あの人凄い！ お化けみたい」

とお友達とつつきあってこちらを指さしている女学生もいます。私は、カッとなりました。ヒドイ、何も好きこのんでこんな繃帯で顔を包んでいるのではないのに。

電車の中でも、人に見られるのが恥かしくて、ドアの所に立って外を見ていましたが、わざわざのぞきに來る子供がいたりして、困りました。

家へ帰ると母は、私の異様な繃帯姿を見て



びっくりし、オロオロするばかりでした。

「大丈夫よお母さん。こうしておいた方がなおりがいいんですって。心配しないでもいいのよ」

と病人？ の私の方が慰める有様でした。

こんな大ゲサなど、内心すこし病院を恨みましたが、やはり繃帯と薬と湿布のせいか、痛みもかゆみもいくらか薄らいだ感じですが、でもこの恰好では外へ出るわけにもゆかず、仕方がないのでテレビの前でヒマをつぶしました。

テレビを見る位なら別にどうということもなかったのですが、困ったのはお食事の時です。口のまわりもガーゼで覆われていますし、顎も繃帯でおさえられているので大きな口を開けることも出来ず、まるでお姫様のようにお上品に少しづつしか食べられません。いつもより二倍も三倍も時間が掛ってしまいました。

お風呂へも行きたかったのですが、まさかこのスタイルでは銭湯へも行けません。湯槽から繃帯だらけの顔が出ていたりしてはみんな驚いてしまいますものね。そこで母に体を拭いて貰うことにしましたが、下着を取った私の腰を包む大きな病人用のおむつカバー

に、母は又びっくりした様子です。私が説明しますと

「そうかねえ。ずい分と大ゲサな治療だね。そんなに迄しなくちゃいけないのかしら」

と半信半疑のようでしたが、おむつカバーに包まれていない部分を拭いてくれました。

どうやら少しさっぱりしましたが、今度は顔の湿布を取換えなくてはなりません。解く時は簡単でしたが、薬をつけて、さて上から油紙をあてて繃帯となると、上手には行きません。母と一時間掛りの大仕事でしたが、何かグズグズした感じになってしまいました。

丁度そんな時、洋子と三恵が訪ねて来ました。勿論、私がこんなことになっているなんて知りません。上って来た二人は

「マア、京子！ どうしたの？ その顔」と、あっけにとられたようでした。

「あんた達何ともなかった？ ホラ、志賀で日ヤケ止めクリームつけたでしょう、あれにかぶれたらしいのよ。今日お医者さんに行ってきたの」

「あらそう。私達何ともなかったわ。京子は育ちがいいから皮膚が弱いからね」

なんて事情がわかれば、たちまち二人はかikai半分です。

「でもその繃帯じゃ気の毒ね。明日映画にでも行こうかと思って誘いに来たんだけど……」

「とてもだめよ、これじゃあ。折角だけど、やめとくわ」

「そりゃそうね。怪獣映画のミイラみたいだもんね」

「でも一寸、可愛いじゃない」

「そう、ありがとう。今、母に湿布取りかえて貰ったんだけど、繃帯が少しゆるいのよ」

「フーン、じゃ私が巻き直してあげようか、私ってワリカシ上手なのよ。こういうこと」

「そうオ、じゃやってくれる」

「ウン、いいワ」

三恵はこういうとクルクルと繃帯をほどきました。やがて目と鼻と口だけ穴のあいたガーゼを手にとると

「まア、こんなのをあててるわけね。どう？ こわい？」

などと自分の顔にあててみたりしてフザケているんです。

「だめよ。うつるわよ」

と洋子までが失礼な冗談を云います。

「さ、患者さん、お顔を出して。そうそう、ハイ、ガーゼをあてますよ。そして湿布をして、それから油紙ね。洋子、おさえてて。ハ



「伊繃帯を巻きますよ」

と意外と器用にグルグルと、それでも看護婦さんと同じようにはゆきませんでした。でも母よりは上手に巻いてくれました。

「アラ、京子。腰の辺が何かいやにふくらんでいるじゃない」

洋子がこんなことを云うので、三恵も

「ホントだ。それも繃帯してんの？」

「ウウン、おむつ」

と、うっかり私は云ってしまいました。

「エー、おむつ？ まア!! あんた赤ちゃんみたいにそんなものしてるの？」

私の一生懸命の説明に、二人は納得したようです。今度は

「ネエ、ネエ、一寸見せて。おねがい！」

なんていうんです。

「いやよ。恥かしいわ」

といやがる私を、二人で無理やり抑えつけるとスカートをまくり、ピンクのおむつカバーを露出させて、

「まーア、かわいいじゃない！」

「ほんとだ。京子、いいわね。私もこんなのでみたいわ」

なんて云い出す始末です。

「これはダメよ。検査があるんだから、いじ

らないでね」

黙っていたら、おむつカバーもはがしかねない二人のフザケ方です。私がそう云うと、三恵は何か残念そうな顔をしました。

どうやら賑やかな二人も帰って部屋に一人になった私は、クリスマスに買った、新しいネグリジェを着てみたのですが、折角の新しいネグリジェも、この繃帯に埋った哀れな顔ではカタなしです。

それにもう一つ気持の悪いのは、腰を包むおむつカバーです。遅効性のお浣腸が少しずつ効いて来たのか、おむつカバーの中にはジワジワとその実証が現われ始めて来たようです。でも絶対にと念を押されているので、わけにもゆかず、そのまま寝なくてはなりません。顔中、繃帯に包まれ、腰をピンクのおむつカバーでくるまれたネグリジェ姿の私はこうして眠れそうにない床につきました。

翌朝になると、完全にお浣腸の効果を知らされました。腰のまわりは湿っぽく、気持が悪いったらありません。早く病院へ行って取換えて貰わなくてはとてまたりません。それに顔の繃帯も湿布が乾いてゴワゴワです。私は大急ぎで病院へ行く準備はしましたが、大急ぎという訳に行かないのは朝食でした。

例の繃帯でしばられた口では思うままに食べられません。

「ごはんの時ぐらい、繃帯をとったら？」

と母は云いますが

「ウウン。ちゃんとしておいた方が早くよくなる」と云われたから、我慢するわ」

と私は繃帯のまま、食べました。

どうにかお食事も終って、私は大急ぎで病院へ行きました。顔帯をジロジロと見られるのも気になりますけれど、それより電車の中でおむつが匂ったりしないかと、その方が心配でした。

ようやく病院に着いて待合室に入ると、やはり相当に混んでいました。診察券を窓口に出して腰かけると、隣りに丁度私と同じように目と鼻と口だけ出して、顔中をグルグル巻きに繃帯した若い方が来て腰を降しましたので、びっくりしてしまいました。

手や足には繃帯していないので、昨日帰りにすれ違った人とは違うようです。

訊いてみますと、その人は顔にプツンとニキビのようなものが出来たのでありあわせの薬をつけたところ、それが却っていけなかったらしく、みるみる顔中が腫れ上ってしまったのだそうで、もう一週間もこの病院へ通っ



ているそうです。そう聞いて私はウンザリしました。一週間も通って来てまだお面のような繃帯がとれないのですから、私も当分のこの哀れな繃帯の顔で過さなくてはならないかも知れないと思ったからです。でも、その心の底に別の楽しみに似た気持があったようで、さほど落胆もしなかったのです。

その人の方が私より先に呼ばれて診察室へ入りました。やがて私も呼ばれてお部屋に入った時、その方は丁度、真白い薬をつけ終って、お面繃帯をされているところでした。

「アラ、お面繃帯の鉢合せねえ」

などと看護婦さんは軽く云います。

「さ、お通じの方はどうかしら？ おむつ取り換えましょね」

とすぐに云われました。私も早く取ってほしいのですが、前日の個室と違って、その方がいらっしゃるので、思わずモジモジしてしまいました。でも、あまりの気持悪さに、恥かしいのも押さえて私はベッドに横になりまして。赤ちゃんのようにされるがままになりました。おむつを取ってもらい、やっとスーッとしました。

「どうやらいよいよね。あとで分析しておきますわ」

そういいながら、看護婦さんはシツカロールをはたくと

「念の為、もう一日だけおむつをしておきましょね」

と、又々おむつをあてビニールのおむつカバーで包むのでした。

腰がすむと今度は顔です。まず顔中をきつく縛っていた繃帯がほどかれ、お面のようなガーゼがとられますとブツブツだらけの顔に白いチンク油をつけられた、奇妙な私の顔が現われます。すっかりほどき終ると、看護婦さんはオリブを脱脂綿にしめして乾いたチンク油をふきとってくれます。かゆくたまらない顔がこすられてとてもいい気持です。

さっきの人は手当てを終えたらしく、私に向って繃帯の奥の目ではほえんで診察室を出て行きました。

顔のチンク油がすっかりふきとられた時、先生がいらしてカルテと私の顔を見比べていらっしゃいましたが

「ウーム、赤外線をあてて、それからチンクは昨日より濃い目に、湿布も厚目にしてお面繃帯。浣腸は今日はいいでしょう。その代り注射しましょう」

と云って、出て行かれました。

薬をふきとられた顔を赤外線にあてている間に、看護婦さんはホウ酸水に浸したガーゼを厚目に重ねたのを持ってくる。昨日のように、目、鼻、口に缺で穴をあけて顔にあて、更に昨日よりも厚目のガーゼで額、頬、顎、頸に湿布し、油紙をあてるとグルグルと新しい繃帯で巻き始めました。はてっている皮膚に冷たい湿布がピタッとあたって、とってもいい気持です。

「これだとお食事の時なんか大変でしょう」「ええ。それに、みんなにジロジロ見られちゃって……」

「早くとれるといいわね」

こんなことを話しながら、看護婦さんは手ぎわよく繃帯を巻いてゆきます。すっかり巻き終ると

「注射しますから横になって下さい」

と云って私の腕をゴム管で縛ると、浮き上がった血管にブスリと静脈注射です。

腰をおむつカバーで包まれ、顔はわずかに目と鼻と口の小さな穴のほかは一面に真白い繃帯で埋められた若い娘が、ベッドに横にされ、腕をゴム管で絞り上げられて太い注射をされているなんて、一寸した残酷物語です。

こうしてその日の治療もどうにか終って診



寢室を出ますと、さっきのお面縋帯の娘さんがまだ待合室にいました。そして、私がお薬をいただくのを待っていたようで、私達は、一緒に外へ出ました。年頃の娘が二人、同じように変な縋帯で顔を包まれて歩いているのですから異様な光景に違いありません。すれ違う人が同情と好奇の目で一斉にふり返ります。でも一人より二人の方が心強い感じで、私達は強いて平静を装い、話しながら駅へ急ぎました。

「あのオ、あなたも最初おむつなんかされました？」

私が思いきって訊きますと

「ええ、最初の三日間ほど……でも……」

「でも？……」

「私、今でもしていますのよ。おむつを」

「まだ便の検査をしているんですか？」

「いいえ、私……あれ以来おむつにとりつかれて手放せなくなってしまうましたの。今もおむつを厚目にあてた総ゴムのおしめカバーでピッタリと締めつけていますのよ」

とその方は腰のまわりに手をやります。縋帯でかくされているので表情はよく分かりませんが、何となくうっとりとしているような感じに私には思えました。

それをきいて私はハッとしました。昨日はじめてされた時、私はおむつとおむつカバーの圧迫感になじめず、うとましい感じを抱いていたのですが、今日看護婦さんに取換えられた時から何となく愛着感のようなものが湧いてきていたのです。その方の言葉をきいて自分の心にも、それがあてはまるような気がしてきたのです。

おむつで腰を包まれる。まるで赤ちゃんみたい。縋帯で顔中を縛られ、街ゆく人にジロジロ見られる。同情の目、好奇の目、いずれにせよ見られることによって感じる被虐的な羞恥。

「私は顔中真白に薬を塗られているのよ。ガーゼで厚く湿布をしているのよ。顔中グルグル巻きに縋帯されているのよ。そして腰には赤ちゃんのようにおむつが分厚くあてられておむつカバーでくるまれているのよ。まるで囚人のようでしょう。そうよ私は女囚だわ。手こそ自由だけど縋帯とガーゼという編笠をかぶせられ、おむつという腰縄を打たれた女囚だわ。みんな見て！」

こう云って叫びたいような衝動に私はかられるのでした。今まで眠っていた、私の気づかなかった奇妙な気持が、縋帯とおむつカバー

ーで呼びさまされたようです。これがきっとマゾ性というものだと思います。

どうか顔の湿疹よ。いつまでもなおらないで。いえ、なるべくゆっくりとなおってほしい。いつまでもいつまでも、おむつと縋帯でがんじがらめにされていた、などと思いつつ、皮膚科の病院通いを続けるのでした。

………

## ☆誌上传言板☆

○読者からの編集部に対しての電話にての連絡又は直接訪問の求めには現在のところ一切応じておりません。御用件はすべて文書にてお願い致します。

○応募原稿は原則として、返戻の求めには応じかねます故悪しからず御諒承願います。

○読者通信の転送斡旋並に寄稿家、投稿者の住所氏名の照会についての御返事などは原則として取扱っておりません。但し御本人の承諾のある場合は、この限りではありません。

○水沢登氏へ。封筒に書いてありました宛名にて原稿料をお送りしましたところ、返戻になってきました。お差支えなければ連絡先お知らせ下さい。瀬沼四郎氏へ。御指定の局留にてお便りを差出しております。

○『分譲品目録』の作成が大変遅れておりますが、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。



痴<sup>ち</sup>

人<sup>じん</sup>

の

糧<sup>かて</sup>

山 本 一 章

—百合子の初日—

百合子が住み慣れた大山の家から鄭に引取られて去って行ったのは夕方近くだった。鉛色の空は嘘のように拭い去られ、春の訪れを前触れするかのような碧い空に夕陽がまぶしかった。

「じゃ元気だな。近い内に逢いに行くから」  
大山がそっと握った百合子の手は冷たく柔らかかった。

「大山さんもお達者でね。それからたまにはわたしのことを思い出してね」

気性の烈しい彼女だっただけに、その改まった口調は大山の胸にうずきを残したようだった。門の外まで見送りに出ていたアケミと



セツコは思わず目を押えたが、大山はそっと視線をそらして残照に映える山並を見つめていた。しかしその目からキラリと輝きながらこぼれた一筋を百合子は見逃さなかった。その大山の一滴で、彼女は彼のすべてを許すことができるように思った。もうどうなっても構わない——その満足感は感傷というよりは女の天性であろうか。彼女もまた男の涙に弱



い一人の女であった。こうして百合子は従順に非情な宿命の中に身を投じて行った。

○

自動車は明石フェリーで夜の海峡を渡り、快適なドライブで島を南下した。その間、紳士的に振舞い、大山との取引についても一言も触れなかった鄭の態度に、百合子は張りつめた気持がはぐらかされ助手席のクッションに背を凭れさせてウトウトとした。昨夜からの疲れが彼女をそうさせたのである。やがて車が鄭の別荘に着くと、七十近い老女が二人を出迎えた。しかし鄭はその女を一瞥しただけで百合子の手を引いて倉庫のような建物へ連れ込んだ。かつてアケミやセツコが激しい責めを受けた一戸建である。タイル張りの床や天井や壁に嵌め込まれた金具は変らなかったが、部屋の奥に三畳程の板の間を区切った檻のように鉄格子が取りつけられてあるのが無気味さを増していた。その板の間の片隅には数枚の毛布が上に枕を載せてきちんと積まれ、反対側の隅に白い瑠璃の簡易便器が置かれて監獄を連想させた。それらは百合子のために用意されたのであろうかすべて真新しく、檻の外に置かれてある古びた台や椅子と対照的だった。しかし明る過ぎる程の照明と

暑い位の暖房がこの部屋の陰気を減殺していた。

重い音をさせて厚い扉を閉めた鄭は、背当てのない椅子に腰を降ろすと百合子の方を向いて云った。

「さあ体を見せて貰おうか」

「……」

「早く脱いで！」

覚悟はしていたものの、いざ初めての男の前で裸になることは辛かった。百合子は男に背を向けて服のボタンを外した。下着が落ち白い裸身がむき出しになる。羞恥の一瞬である。鄭はそんな感慨に無関心なのか、さっさと彼女が脱いだ衣類を一まとめにして部屋の隅へ抛り投げた。

「もうこれを着ることはないから焼き捨てるよ。その方が諦めがつくだらうからな。裸で貰うって約束だったしな」

胸を押さえて立ちすくんでいる百合子の傍に近づいた鄭は、彼女の両手首に別々に縄を巻きつけた。

「わたし、もう帰して貰えないの？」

「まあそういうことだね。いずれそのうち大山君も逢いに来てくれるだろうから、そう淋しがることはないさ。それにここで暮すのも

そう悪くないと思うがな。尤も今までとは変った生活をして貰うことにはなるが」

縄尻が天井の鉤に引掛けられて引上げられたので、百合子の片腕が上る。もう一方の腕も同じように引上げられ、万歳をしたような姿になる。鄭は縄を固定すると再び椅子に腰を降ろして、無抵抗になった裸身を正面から眺めた。百合子は目を閉じていた。

「うん、なかなかいい」

鄭はそうつぶやいただけでゆっくりと煙草をくゆらせた。成熟したその女体は挑発的な量感と曲線を誇示しているようである。熟れた果実のように、その白い肌の下には甘い蜜が一ぱい詰っているような錯覚にさえ襲われる。鄭はその裸女が完全に自分の支配下に置かれることになったのに満悦であった。彼はやおら立つと、彼女の背後に廻わる。滑らかな脂ののった皮膚の起伏は、秀れた彫像を見ようであった。特にそのぶ厚い腰の盛り上りは、逞しい女の生命を発散して圧倒する。鄭は思わずその曲線に手を伸ばす。

「丈夫そうだな。病気なんかしたことがないんじゃないかな。結構、結構」

彼は独り頷ずいて、その裸身を軽く追い続けた。彼の観賞と点検は気に入った玩具をも



て遊ぶ子供のように執拗だった。

やっと彼の手が彼女から離れる。しかしそれも解放を意味するのではなくて、次の魂胆のためであった。彼の手に西洋剃刀が握られ丹念な作業が再開される。一本のうぶ毛も残さないような念の入れようだったが、両手を吊り上げられたままの百合子にはどうしようもなかった。三カ所のアクセントが剃り落されて作業は終わった。彼女の体はセツコと同じようにされてしまったのである。

「さあ、さっぱりしたところで少し踊って貰おうか。それに声も聞かして貰いたいしね」

鄭の云う踊りというのが何を意味するのか百合子には分らなかったが、上に伸ばしたままの腕が肩のあたりから、だるかった。

「腕がだるいから、一度解いて下さらない？ 少しの間でいいから」

「駄目だね」

鄭は一言のもとに撥ねつけると、一米四方位の鉄板の載った低い台を運んできた。百合子の体がその上に載せられる。それで少し腕に自由が出来て楽になった。しかしその休息もほんの一、二分で直ぐに手首が引き上げられた。伸ばした指先が天井の金具に触れそうになるまで引き上げられると、百合子の体は

鉄板の上で直立した。台から伸びているコードが部屋の隅のソケットに差し込まれる。ピチピチと電熱に熱の加わる音がし始めた。鄭は椅子に腰を降ろすと、大きく煙草の煙を吐き出しながら素裸のヒロインの演技が始まるのを待った。電熱が徐々に、鉄板に熱を伝える始める。足をあぶって、踊らそうというのである。鄭はニヤツと笑うと呟いた。

「ここは泣いたって喚いたって外には聞こえないから、うんという声を出すんだな。辛抱していると体に良くないんだからね」

鉄板はやがて百合子に足踏みを強要する。じっとしていると足の裏が熱いので足踏みを止めることができない。歩調が駆足に移る。

「熱いわ。早く電気を消して！」

「……」

返事はなく、残忍な笑みを浮かべた男の顔が目の前にあった。鉄板は、もう五秒と足を静止させて置けない程灼けてきていた。足を交互に、ピョンピョンと跳ね上げるように足踏みをする姿は滑稽で、しかも悲惨だった。全裸のみじめな踊りは休息を許されない。体の上下動につれて、豊かな乳房がブルンブルンと揺れ腹部の肉がキュッキュッと締る。

「アツツ、足が……。助けてえー。ああ、

もう駄目！ もう駄目！ アツツツ」

奇妙な運動を自分の意志で止めることができない。全身に汗を滲み出して苦斗している百合子の踊りと悲鳴を、鄭は凝視していた。

「アアツ、足が……。焼けて……。アツツツツツツ！ もう許してえー！」

両手に全体重を掛けて両足を曲げてみる。

もう手首も腕も痺れているのだが、足の裏の熱さの前には構っていらなかった。しかしその懸垂もものの二分とは保たず、再び体重が鉄板にかかり踊りが強制される。顔から首から肩から、汗がキラキラ光りながら流れ始め、激しい運動に呼吸がはずんでくる。

「アアア、助けてー。もうかんにん！ ツツツ！ アアーン！ アアアーン！」

百合子は泣き喚いた。流れ落ちる汗と涙が焼けた鉄板の上で、ジュジュジュツと音を立てて蒸発する。鄭は百合子の苦悶の表情が限界に達したのを見定めると、電熱器のコードを抜いた。しかし直ぐには鉄板はさめてはくれずに踊りの継続を要求するのだった。

「少しはこたえただろう？ これからももし云うことを聞かなければ、踊ってもらうからよく覚えて置くことだな。もうラストだから泣き止むんだ」



鄭はまだ泣きながらピョンピョン跳ねている女の傍に近づく、涙と汗でベトベトになっている乳房を両手で掴んだ。女の跳躍動は手の中の乳房を自分から揉むような結果となった。

やがて跳躍が止まり両手が解かれる。ぐったりと体力も気力も使い果した百合子は、その濡れた裸身を鄭の体に預ける。男はその女体をそっと床に横たえた。胸が激しく喘ぎ、腿から下が疼れんしているように細かい震えを残している。

「参ったか？」

仰向けになった百合子を見降ろしながら鄭が呟く。勿論答えはなく、胸郭の大きな喘ぎと共に、半ば開いた唇の間から呼吸音が洩れるだけだった。男はその上下に動く乳房の上に、足を載せてにじらせる。しかし、気力を失ったのか、腕が痺れ切っているのか、百合子はその足を払い除けようとしなかった。男の足が腰を押して裸女を俯伏せにする。両手が後に振られて金属製の手錠がガキッと音を立てて両手首を連結した。

「今日はこれまでや。当分歩けないな」

鄭は人ごとのよう云いながら、赤くなった女の足の裏を眺めた。その色から間もなく彼

女の足の裏は腫れ上ってくるように思えた。後手錠のまま百合子は抱きかかえられ、部屋の奥の檻の中へ運び込まれた。板の間に寝かされた体の上に毛布が無造作に掛けられるとガキーンと冷たい金属音を響かせて檻の扉が閉められ、次いで錠がカチッと音を立てる。明りが消され暗闇になったこの獄舎に、今度はギギギツときしんだ音が響いて入口の扉が開けられそして閉められた。天井に取りつけられた電気ストーブの赤い火だけが闇の中で怪しく浮び上り、音は去ってしまった。一人の囚女の惨めな生活の第一夜が始まったのである。体力も気力も思考力も失ってしまった百合子は、やがて深い眠りに陥って行った。

○

朝であろうか。入口の扉が開いてまぶしいような光が差し込んでいた。百合子は毛布にくるまったまま目を覚まして、老婆が入って来るのを見た。老婆は雑炊の入った大きな椀と水の入った紙コップを檻の間から板の間の上に置いた。

「可哀想にのう。じゃが、旦那はんの好みじやで仕方あるまいのう。わしも廓におった頃じゃ、たとえ若いおなごを折檻したもんじやが、おそこはんでそれを見物するちゅうてき

かん人も少のうなかったもんじゃ。死ぬ程ぶったんじゃから、ろくで行く筈はないわ。この年になってこの有様じゃで。さあ、ぬくいうちに食べな」

老婆は一人で喋べると再び部屋を暗闇に戻して出て行った。百合子は後手錠のまま苦心して体を起して坐った。毛布がずり落ちて上半身がむき出しになったがどうしようもない彼女は老婆の置いて行った椀ににじり寄ると体を曲げて雑炊をじかにすすった。昨日の昼から食事をしていなかったため、空腹が彼女に惨めな姿での食事を厭わせたのであつた。犬のように椀に顔を突っ込んで食べた雑炊は意外と美味であつた。しかし紙コップの水を飲むことは簡単にはできなかった。手が使えないためコップを傾けるのが難しく、彼女はほんの一口の水を飲んだだけでコップを倒してしまつたのである。食事を終つた百合子は、いざりのように膝で這つて毛布の所に戻つた。足に力を入れると腫れ上つた足の裏がズキズキと痛み、とても歩ける状態ではなかった。足の裏を焼いて逃走を防ぐという原始的な仕置きを鄭が意識していたかどうか分らなかったが、事実と同じような結果を百合子に体験させたのである。彼女は再び毛布に



くるまって体を横にした。彼女には妙に悲哀感がなかった。大山の家を出た時の感傷も遠ざかり、予期していたことが予期していたように訪れてきたという感慨だけであった。それよりも腫れた足の裏がいつ治るだろうかというの方が気になっていた。

何時間経ったかわからない。老婆が再び入って来た。

「ああ、みんな食べたんだな。それでいい。人間食わなきゃ駄目になっちゃうんだ。さあ、風呂に入れてやれてことだから起きなよ。その前に出して置くんじゃよ。そこに便器があるからのう」

「駄目だわ。とてもできないわ」

「じゃこれを使うかね」

老婆はいちじく型の容器を見せる。百合子は顔をしかめてイヤイヤをした。

「そう手数をかけさせるもんじゃないわ。自分でやれないんなら、わしが手伝うてやるがな」

「結構だわ。じゃ自分でするから」

諦めた百合子は便器の傍ににじり寄り、蓋を足で落してその上を膝でまたいだ。

「おばあちゃん、見ないで」

「こんなに暗くて見えるもんかよ。すっかり

出して置くんだよ。旦那はんの命令じゃで」  
ザアと水の流れる音が聞こえ始める。

「お前さんもなんでこんなところへ来たんかのう。売られたんかい？　じゃが女も若いいうちが花じゃで。年をとったら男は薄情なものよ男が女をお仕置きして喜ぶんも若い女じゃからのう。ばばあになつたらおしまいじゃ」  
生ぐさい臭いが立ちこめてくる。

「おばあちゃん、外で待っててよ」

「恥しがることはないよ。人間はみんな同じようなもんを食って、同じものしか出さんのじゃから。病人の糞にくらべたらいい臭いじゃで、ゆっくりやるんじゃ」

「おばあちゃんは、そんなに女の人を折檻したの？」

暗闇が羞恥心をカバーしていてくれたのと黙っていて音を聞かれるのが辛かったので、百合子は奇妙な姿勢のまま話しかけた。

「ああ。もう昔のことじゃで」

「なぜ折檻したの？」

「逃げたり拒んだりするからじゃ。廊下でこは女を働かす所じゃで、働かん女は働くようにされたもんじゃ。見せしめてこともあったがな」

「どんな折檻したの？」

「いろいろじゃな。ひどいこともあったわ。死んじまった娘もいたわな」

「責める時は裸にしたの？」

「大抵は素っ裸じゃ。お前さんのようにな。藁縄で縛り上げてぶら下げたこともあるわ。檣の棒で打つんじゃ。尻も背中もぶち廻わされて血を吐きよった。殺生なことをしたもんじゃで、悪いこっちゃ、悪いこっちゃ」

老婆は頭を振って手を合わせた。彼女がどんな経験をして来たのか、もっと具体的に聞きたかったが、老婆の話は独り合点以上に進展しそうになかった。それに百合子の所用は終ろうとしていた。

「もういいんだけど……」

「そうかい。じゃわたしが拭いてやるか」

「いいわ。紙を持たせてくれれば自分でするから」

檻の扉が開かれ、老婆が入って来て百合子の後手に紙を渡す。

「ざっとでいいわ。どうせ風呂に入るんじから洗ってやるで」

立上ろうとした百合子は、思わずよろめいて膝をついた。足の裏に刺すような痛みが走ったからである。

「歩けないわ」



「わしじゃとてもお前さんを背負えんわな。どうするか」

「手錠を外して下さいな。這って行くから」  
「そりゃ駄目や。わしは鍵を持っとらんからのう」

「お風呂って遠いの？」

「ついそこじゃが。少し位歩けんかのう。入って置かんと旦那はんが怒るで」

「じゃおばあちゃん、後から少し体を支えてくれる？ 踵でなら歩けるかもしれないから」

後手錠の裸の百合子を先頭にした二人の奇妙な行進が始った。幼児の歩みに似た歩調である。その行進は檻を出て、部屋の出口に向う。建物の外は暗闇に慣れた百合子の目にはまぶし過ぎたが、それよりも肌を刺す寒気に百合子は思わず悲鳴を上げてしまった。

「ヒャア。うううっ、寒い！」

「早う行くんじゃ。風邪をひいたら困るで」

素裸の女が、老婆に押されて寒空の下を小刻みに歩く姿は滑稽でさえあった。

「お前さん、一体どうした？」

「剃られちゃったの」

「旦那はんかい？」

「ええ」

裸を同性に見られているという羞しさよりも、早く浴室に着きたいという願いが彼女を完全に支配していたのである。母屋の横にある浴室に着いた時、彼女の肌は紫色に鳥肌立っていた。

余り広くない浴室で彼女は老婆に全身を丹念に洗われた。しかし温い湯は彼女を蘇生の思いで一ぱいにしてくれた。

「女は綺麗にしとくもんじゃで。若い女程無頓着じゃが、それが男に嫌われるもことになるんだわ。わしも廓におった頃にゃ新人の娘にいつも教えたもんだで。お前さん位の年になりゃわかつてると思うがな」

人に自分の体を洗って貰うのはくすぐったかったが、一面幼児に戻ったような感じで気持ちも良かった。

「おばあちゃんって、とても親切ね」

「仕事じゃでな。旦那はんからきつう云われとるんじゃ」

湯槽に浸った百合子は元気を回復した。

○

「よく眠ったようだな」

鄭が部屋の真中に置かれた台の横に立って口を開いた。台の上の女は返事をしない。返事しようにも縄を噛まされた口から声は出な

いのである。木製のその台は、仰向きに大の字になった女体を載せている。脚から伸びた四本の黒革のベルトが手首足首をしっかりと引張って身動きを許さない。入浴を済ませた百合子は、そのまま鄭に担がれて部屋に戻され、この大の字にされたのであった。ベルトだけで四肢が拡げられ、その胴体に縄の掛かっているのが反って危機感を強めていた。いわば解剖される蛙の姿である。しかもその目かくしが変っていた。両眼の上に大きな硬貨が一枚ずつ置かれ、それを白い絆創膏がしっかりと顔に押しつけているのである。ギャング映画で見られるような完全な目かくしの方法である。

鄭は百合子の横に腰を掛けると、そのぽつぽつとした胸に掌を当てがう。

「いい体してるな。これから初夜ってわけだが、覚悟してるだろうな。ゆっくり喜ばしてやるから楽しむんだ。お前位の年になりや女の喜びを体が知っているだろうよ」

餅をこねるように、ゆっくりと男の手が動く。胸のボタンが軽くつまみ上げられる。百合子は僅かに胸を左右に振りながら、時々慄えを見せる。男の手は急がず休まず、徐々に眠るものと呼び起して行く。やがて顔が胸に



近づく。二つの固くなったボタンが交互にその口に隠される。手がその位置を替える。次第にその慄えが激しくなり、胸郭の上下が速度を早める。悶えるように全身が動く。

「どうだ？」

鄭は微妙な変化をその感触で覚ったのか、ニヤツと笑う。ここまで来れば、求めるのは獲物の方だということを彼は百も承知していたし、もし彼女の口が自由なら、その一瞬の休止に対しても沈黙を守る筈のないことも知っていた。鄭は再びその顔を滑らかな肌に近づけて作業を始める。乳房から腋へ、腋から首へ、彼の唇は味うように移動して行く。首から耳へ、耳から頬へ、一分の間隙も残さないような丹念さが続く。手の指も臍窩も足の指さえもそのなま温い烙印から逃がれることができなかった。獲物は恍惚の淵へ引きずり込まれて行った。やがて二人だけの世界が烈しく燃えて、そして消えて行った。

「どうだい、気に入っただろう？ いい恰好だからしばらくそのまま休んでるんだな。楽あれば苦ありってことを教えてやるからな」鄭は服装を直しながら、縛りつけられたままの百合子を見降ろす。激しく燃え落ちた美しい獲物は、今はしどけなく喘いでいた。鄭

は百合子をそのまま放置して建物から出て行き、入れ違いに老婆が入って来た。

「おやおや、あられないことじゃのう。気持が悪いかえ。お前も処女じゃなからうが、こんなままでのう。けったいな二号はんじゃて」

老婆は鄭から言い渡されているのか、百合子のいましめを解こうとはせず、そのまま赤子の世話をする時のように優しく丹念に彼女の体を拭い始めた。百合子はけだるい疲れの中で幼児のように身を委ねていた。

老婆が去り、二、三十分して鄭が戻って来た。彼は黙って彼女の手足のベルトを解く。しかし顔の目かくしも、口の縄もそのままである。鄭の手が彼女の赤く腫れた足の裏を押える。電気に触れたように足が曲がる。少し水腫が見られて、到底立てそうにないのを確かめてから、鄭はその足を揃えさせて縄で固く縛った。天井から下げられた鎖の先の鉤がその足首の縄に引掛けられる。直ぐにガラガラと鎖が巻き上げられる。チェンブロックは、女の体を簡単に台の上で倒立させた。百合子は自由な両手で体重を支える。しかし、その努力も下の台が取り払われてしまっただろうしようもなくなって、完全な逆吊りの姿とな

ってしまった。彼女は両腕で胸をかかえた。バーン！ 突然の打撃が臀部を襲い、その力で女体がゆっくりと廻転する。

バチーン！ ビーン！ 鄭が手にした縄の束が連続して打つ。白い肌にみるみる赤い筋が浮び出す。胸をかかえた百合子は芋虫のように体をしゃくりながらゆっくりと廻転を続ける。背中も腰も腿も腹部もその打撃は場所を選ばないかのように音を響かせた。

ウウウウッ！ ムムムッ！

噛まされた縄の奥で呻きが洩れる。

「どうだ、参ったか？」

腿をつねりながら鄭が口を開く。

ムムムッ！

（許して！ もう許して！）百合子はそう叫んでいるのだが声にはなってくれない。

縄の束の打撃が再開される。容赦のないその打ち方は、彼がその女に特別な憎しみを持った。滅多打ちという形容そのままである。

無残な逆吊りの女に対する鞭打ちは、肌の鳴る音と苦痛の呻きを部屋に溢れさせながら、やがて彼女の意識を消し去ろうとしていた。胸をかかえていた腕がだらりと垂れる。しかし打撃は直ぐには止められなかった。

顔が熱くなり、目の前の闇が鮮かなピンク



に変わるのを百合子は意識した。(わたしは殺されるのかしら?) ピンクの色が濃い赤色に変わり渦巻き始めると、百合子は意識を失って

しまった。

逆吊りから降ろされた裸身は、ベツトリと全身を冷汗で濡らして身動きしなかった。足

## 〔実話〕と体験〕懸賞原稿募集

### ▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変わった蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

### ▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお待ちいたします。

一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。

一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト(或はMフォト)を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。

一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。

一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

首の縄が解かれ、直ぐ手が後手にされて手錠をかけられる。鄭はそのぐんなりとした裸身を抱き上げると、部屋奥の檻の中に運んで寝かせ毛布を掛けた。そしてパチンと頬を打つ。

「どうや、気がついたか？」

百合子は動かない。再び頬が前よりも強く平手で打たれた。体が僅かに動く。鄭は女の目かくしと口の縄をはずす。

「どうや、大丈夫か？」

百合子の顔が僅かに肯ずく。

「死なれたらことだからな。明日までゆっくり休んで置くん。婆さんに世話をさせるから好きにしたらいい」

鄭は百合子に意識が戻ったらしいのを見届けると出て行った。

百合子のこの獄舎での第一日は終わった。初日にしては余りにも残酷で徹底した責めである。百合子は覚悟して来たものの、果してこの囚われの生活に耐えられるかどうか。大山のようなデリカシーを持ち合わない鄭のことである。

外は前日と打って変って寒波が襲い、細い雪が風に煽られて舞っていた。

(つづく)





——告白——

# 百合子のこと

滝 佐知子

私はもう今夜で四日間、百合子のいない淋しい孤独な夜を過しているのです。一カ月経つと再び私のもとへかえってくる百合子なのですが、それでも私には、もう百合子が永久に私のもとにかえってこないのではないかと、いう気さえして、気が気ではないのです。これがよくいう恋どころとかいうものでしょうか……。でもあたしは恋なんてしらない。恋なんかまだ一度もしたことないんですもの……第一、男の方とおつきあひしたこともないし、仕事のこと以外あまり話したこともないので、

でも、いまあたしが百合子に対して抱いて

いる気持は、恋なのではないかしら……。あたしはいま、百合子がもしもう再び私のところへかえってこないとしたら、自殺するかもしれない程、百合子が恋しくて恋しくてならないのです。

百合子の部屋は、あたしの隣の部屋なのです。百合子の部屋のキイは私が預っています。百合子は実家に用があつて一カ月の休暇をとって帰っているのです。

百合子も私も昨年四月このお店に入社したのですが、ともにおなじ部所で働いているうちに、どちらかともなくよく話しかけるようになり、徐々に親しくなつて部屋(寮のこと)

も百合子が工作して、私の隣りに住むようになったのです。

百合子の快活な性でよく笑う癖があり、またちよつと低音ですが歌がとってもうまいんです。色は白く背は高からず低くからず、難といえちよつと太っていることでしょうか……。でも——貌は十人並以上だし、それは何よりも百合子の長所は健康的で、肌が美しく色が白いので、どうかすれば血管が皮膚によく青く透いて浮きでる程美しいのです。そして私が百合子にいまこの上なく惹きつけられるのは、あの百合子の健康で明るく美しいそのすべての条件を生み出している、あのボ



リウムなのです。

女性のボリウムというのはあまりいただけないのですが、あたしは自分が痩せっポチだからか、どういうわけか百合子のあのハツラツとした躍動的なボリウムのまえに、あたしのすべてが圧倒されてしまうのです。百合子のあの白いボリウムが私を捉えて、私を百合子のイケニエにしてしまうようなことがあると、あたしは悦びとかなしみにうち顫え乍らよよと泣き崩れたりするのです。

私と百合子は、はやお気づきでしょうが只の関係ではありません。女と女が只の関係ではなくなるというのはおかしいかもしれませんが、私達の場合は実際そうなのですからなんとでもいいようなのです。——そうですレスビアンという言葉があります。まあそのような関係とでもおもって頂くよりしかたがありません。まあそのような関係などとアイマイにいわなくてもハッキリいえるのではないのか……と注意されそうですが、私達は決してそれだけの関係ではないのです。と申し上げると——ハテ、とお考えになる方もおいでになるかもしれませんが、それはこれから私が徐々に説明しながらお話ししていくことにいたします。

——そうなのです。私と百合子の関係がハッキリと普通のお友達の関係ではなくなったのは、それはたしか去年の夏頃でした。

私達がお店に入社したのは四月ですから、それから二ヶ月半ばかり経った六月中頃の、梅雨湿りの氣候時分のことでした。

その頃百合子はまだ私の隣の部屋には来ていませんでしたが、夜、寮に帰ると、百合子はちょいちょいあたしの部屋に遊びに来るようになりました。

その夜、百合子は私の部屋にやって来ました。

私達の寮は神戸の山手に最近建てられた鉄筋の美しい寮で、夜は百万ドルの夜景に接することができ、昼は裏には六甲がみどりの美容を誇っていたのです。

いいそびれていましたが、あたし達の勤め先は全国的にネットストアをもつ有名な洋菓子のベーカリーなのです。

その夜はイヤに蒸暑い、風のない湿気の多い夜でした。雨こそ降っていませんでしたがなんとなくいまにも降りそうな、星一つないうっとうしい夜でした。それになにより閉口するのは、山の傍ですので蚊が多いことなのです。窓に嵌め込む蚊帖枠があるのですが、

それを嵌めるとよけいに暑くなるので嵌めていなかったのです。寝む<sup>やす</sup>ときに嵌めさえすればよいと私は考えていたのです。

私はぼんやりと無気力に、窓際の机に頬杖を突いて外をながめていました。スモッグに滲んだ市街のネオンと海に浮ぶ船の灯が、妖しい程の幽美さをもって私の瞳に映っていました。それは、私がちいさいとき、田舎でみたキツネ火のような美しさなのです。私は、しばらく暑さも忘れてじっとその灯をながめていました。

百合子があたしの部屋をノックして入ってきたのはそのときでした。

「……どうぞ」と

あたしはノックに応えませんでした。あたしの部屋にくるのは百合子以外にいないのでノックの主が百合子であることはきかずともわかっていました。

「なにをしてるの？ そんなところで、ポヤンと……。また佐知子のおセンチ？」

百合子は部屋に入るとすぐ私の様子をみてそんなことをいうのです。あたしは百合子のいうように決して感傷主義者ではないのですが、あたしがこういうふうにしてよく物おもいにふけるのを、百合子はセンチメンタルだ



と受け取るのです。

「センチなんかじゃないわ。百合子ったらあたしのことすぐそういうの。しらない……」

「おこったの？ ゴメンアソバセ。佐知子妃殿下のごきげんそこねました。オオ！ ミステイク……」

百合子はそういいながらベッドの端に腰をおろしました。あたしはどうしたわけか、その日にかぎり、いつものようにすぐと百合子に話しかける気になりませんでした。あたしはなおも頬杖を突いたまま外をながめていたのです。

いえ、ながめていたというより、只ぼんやりと考えていたのでしょう。なにがいったいあたしにそのような変化を与えたのかよくわかりません。

「イヤよ佐知子、蚊が入ってくるじゃないのほれ、噛まれちゃったわ……」

背後で、百合子がいつているのです。

「窓、閉めてよ。窓蚊帖あるんでしょ？」

あたしはなおも強情に黙っていました。すると百合子が立ってきて勝手に蚊帖を入れました。

「佐知子ったら、今夜はほんとにキゲンがわるいのね。あたしに怒ってるの？……」

そういつて百合子は私の肩を抱くようにしました。

「こんなところで考えごとをしているから気が滅入ってくるのよ。ね、キゲンを直して話して……」

それでもあたしは黙っていました。百合子はそのつぎにどう出るか、こんなあたしにととう腹を立てて出ていくだろうか……。私は百合子の気持を試したかったのです。

「——ね。佐知子、なんとかいわないの……あなたとケンカしてもしかたないわ。あたし佐知子好きよ。ね、そんなところにいないでこっちへおいでなさい——」

と百合子は私をまるで子供をあしらうように軽々と抱き上げてベッドまで運びました。そして百合子も私も同時にベッドに倒れました。あたしは百合子を跳ねのけて起き上がるうとしました。けれども百合子はそのボリウムにものをいわせて、あたしを上からしっかりと押えつけてしまったのです。そうしておいて、百合子は巧みに私から着ているものを取り除いていったのです。私はとうとう一糸まとうぬぬかしい姿にされてしまいました。けうされるまで私はもちろん抵抗しました。けれども徒に足をバタバタさせるだけで、私の

上体は百合子の体重でしっかり押えられていたのでどうすることもできなかったのです。私はいたずらに喘ぐのみで、所詮こうなっては百合子の敵ではないと悟りました。私がぐったり眼を閉じると、百合子は私に馬乗りになりました。

そのときは百合子の両手が空いていますから、なんとかして私は百合子を跳ね返してやろうとおもいましたが、百合子のあの太い両腿があたしの<sup>おとが</sup>頤を締めつけるようにして、あたしの両の腕をしっかりと押えつけていてこれもくやしかったけれど、私にはどうすることもできなかったのです。それだけならまだよかったのです。私はそのとき生れて初めて他人に裸にされたという情なさ屈辱でくやし涙がこぼれました。大声を立てて人を呼ぶということは私のプライドがゆるしませんでしたし、それに百合子がどういう考えでこんな行為をしているのか、私には大体わかっていたのです。

けれども私はまさか、私と百合子がこんなことを……と裸にされながらも考えたことなのです。

しかし現実には百合子の一方的な行動で、ど



んどん展開しはじめたのでした。まるで私の存在など無視したような百合子のやりかたがくやしくてくやしくてならなかったのです。

それが私の羞恥心を一層掻き立てていたのです。私の涙は、きつとそういう意味の涙だったのです。閉じている眼から熱い液体があたしの耳朵を伝って項へ流れ落ちました。

百合子は両の太腿でピッタリとあたしの、<sup>おとがい</sup>頤を締め、それを更にぐいぐいと締めながら、百合子はついに自分の一糸まとわぬ姿をあたしのまのあたりにちかづけました。

その絶望的な屈辱に、あたしは軀を顫わせながら再び臉をきつく閉じました。百合子たすけて……と、あたしはそのとき声にならない声で叫びました。そして、悲しさといっしよに、口ではいえない不可思議な感情が一度に込み上げ、あたしはよよと泣いたのです。

「佐知子——泣くのみっともないわ、声を出すのおよし！ でないところするわ」

と百合子はイキナリあたしの顔の上にでんとまたがったのです。そして暫くしてすぐまたもとの姿勢に戻りました。そりゃそのままでは声を立てるところか、チツソクしてしまわなければならぬのですから……。

あたしはもう声を出して泣きませんでした

百合子のあまりといえはあまりの行動に、もうなにがなんだかわからなくなり、屈辱もプライドも影をひそめ涙も出なくなりました。

あたしは暫く、じっと息を殺して眼を閉じてこの現実の意味について考えはじめました。

するとあたしの項と頤の、百合子の太腿の圧迫がずっと消え、百合子はガバと姿勢を変えてこんどは全身であたしに重なってききました。そして

「わるかったわ佐知子。ごめんね……。でも以前から一度佐知子をこんなふうイジメてみたいと考えていたの。佐知子が好きだから……」

と変な理屈をいいながら、百合子はあたしの臉に唇吻けし、あたしが流した涙の痕を吸いとるように唇を移動させ、やがてその唇であたしの唇をゆっくりと塞いだのです。

——その夜からの私は、私でない私になり私のところは私のところではなくなり、私の軀は私の軀ではなくなった、といえば云いすぎでしょうか……。いえ、決して決して云いすぎではありません。なぜなれば、私はその夜以来、百合子のものであり、百合子の行為と行動、百合子の意志と希望はすべて私に向けられて発生しはじめていたからなのです。

あたしはそのような百合子を、いつのまにかあなた、と呼ぶようになっていました。百合子はそしてあたしを、あたしはそして百合子を、その無言の承認のうちに、でき上がった<sup>セクシュアル</sup>特種な関係において、愛し合うようになっていったのです。

百合子は私をまるで家畜でも飼いなすようにして、自分の意志に順応させていききました。私がそれに対して不順の色を示すようなことがあると、その夜は、私は肉体的な苦痛をとまなうお仕置で、私が音を上げるまで虐まれることになるのでした。

百合子が示すあたしへの愛の表現は、たとえば、そんなふうにして行われるのでした。ある日曜の休みの日に、あたしはいまもって忘れることができない、きついお仕置をされたことがありました。

その日、あたしは百合子に全身マッサージをさせられていました。百合子はあたしに日に一度はそうして全身マッサージをさせるようになっていました。こういうことは、あたしと百合子の間に特殊な関係ができた頃から続けられるようになってしまったのです。それは百合子の弁を借りると、スタイルをよくするための美容法の一つだということです。



そんなことは常識であたしだってわかっています。それより、あたしがときどき腹が立つのは、こうしてあたしを使うだけ使っておいて、あとはしらん顔であたしに冷たく振舞ってポイと自分の部屋に帰ってしまった（百合子はその頃あたしの隣の部屋に住むようになっていました）一人で外出してしまったりするようになっていたことなのです。そんな思惑があるので、あたしはその日、いつもなら三十分ばかりさせられるところを十分程して、

「今日はあたしちょっと気分がわるいから、もうやすわ——」

とやってやめてしまったのです。すると百合子は、

「もうやすわって、そんな口を、あたしにきいていいの……佐知子……。あたしがいいっていうまでちゃんとおし」

といいながら、まだその白い豊かな肉体をベッドの上に横たえていました。いつものことながら、その豊かな美しい肉体を見るたびに、あたしは百合子が羨しくて悲しくなるのです。スタイルという点ではあたしの方が痩せているということもあって一段と勝っているのですが、肌の美しさと容貌の点では百

合子に太刀打ちできなかったのです。といって、あたしが別に不器量な女だというのはありません。自分でいっておかしいですが、これで十人並の器量をもっているとおもっているのです。

余談になりましたが、あたしが百合子の言葉に返事をせず、ボサッと百合子の軀に見とれていると、百合子はすっと身を起こし、あたしの片方の手首を掴み、

「——さ、ゆっくり揉むの」

とその見事な胸の丸みへあたしの手をもっていきましました。あたしはそのときどうした訳か反動的にさっと手を引っ込めたのです。百合子の顔色がさっと変りました。

「あたしの愛情がまだ足りないのね、佐知子には——」

そういうと百合子は意味ありげに微笑しました。

「佐知子、あてましようか？」

「……？」

「あたしの愛情を欲しいと思いつながら、さっきのように逃げようとするのは——」

と百合子は、ジリジリと私の方へにじり寄りながらいいました。

「いつかのようにイジメてほしいのでしょ」

とたんにあたしの頭はカーツとしました。

それからのあたしは惨めでした。あたしは百合子に裸かにされ、仰向けにベッドに縛りつけられました。そして猿轡を嵌められ、背中とところきらずバンドで擲たれ、火のついたロウソクでいじめられたり、そして百合子は最後に、此の世で最も惨虐な屈辱をあたしに与えたのでした。百合子はあたしに「じょうご」を啜えさせ、自らの体内に必要でなくなった液体をのませたのです。

——百合子とあたしの関係がどのようにして生じ、どのようにして進展していったか、これ以上説明するにしのびません。あたしにとってはそれはあまりにも許しがたい屈辱の歴史だからです。

——けれども、それはまた、喜びの歴史でもあったのです。あたしはそうして、百合子のために、この不可思議な異次元の世界に引き込まれていったのです。あたしはそこに新たな生の喜びを見出し、生活の充実を求めていくようになったのです。

あたしはいま、百合子のいない寂寥を全身に感じながら、涙をながして夜の灯をみつめているのです。



早木夢二氏へ

## ＜見逃した菱縄＞について

テレビ【剣】首斬り浅右衛門・小川真由美の女囚断罪

河村操

早木夢二さん。あなたの日頃の投稿は、本誌の中で私の一番好きなものです。菱縄へのあこがれも同感できますし、K子さんとのやりとりも理想的でうらやましい限りです。

ところで、三月号にお書きになった『見逃した菱縄』を読んで思わずニヤニヤしてしまいました。よくお氣持が分りすぎて、同好者とはこんなものかと、つい失礼ながら笑ってしまっただのです。実は『剣・首斬り浅右衛門』については、私も地団駄ふんだ経験をしているので、お話ししたいと思ってこれを書きました。

私は、あなたと違い、幸いにしてこのテレビは見たのです。むしろ私は、十月十六日のこの放送を一カ月以上も前から秘そかに期待と興奮をもって、待ちつづけていたのです。というのは九月はじめ頃と記憶しますが、『スポーツニッポン』の芸能短信欄に二、三行の記事で「監督の岡本愛彦が剣・首斬り浅右衛門の撮影で時代考証を重ね凝りに凝っている」ということ

が載っていたのです。同好者である早木さんには十分お分りになるでしょうが、これを読んだとたん、私の想像は夏雲の如くひろがりました。

右の放送が十月十六日に行なわれるということは書いてありましたが、しかし、どんなストーリーで、誰が主演するのか、かんじんの斬られる囚人が、男なのか女なのかわかりません。

しかし私は「女囚」に違いないという、奇妙なカンを感じました。そしてそれを前提にしてあらゆる期待の夢をふくらませたものです。

私は、それからは毎週月曜日の『剣』を欠かさず見ることにしました。それは、予告篇でもひょっとして、一カ月以上も先のことだが『浅右衛門』のことにふれてくれないだろうかという、はかない期待からだったのです。

しかし残念乍ら、毎週毎週の願いを秘めたこの期待はずれました。来週のものも予告してもこんな先のものを予告する筈はないのです。芸能欄にも、もう全然記事は載りません。



期待の中に一まつのおそれがありました。ひょっとして男囚の斬罪かも知れないな、という事と、更に何よりも私の仕事の関係で十月十六日に、どんな突発事故が起ってこの時間にテレビを見られないかも知れないという不安です。

後者については、諸方からの会合の申入れが二つ来たのを、体よく理由をつけて断ってしまいました。

ところが九月末になって突然、私がどうしても面倒をみなければならぬある人が胃ガンでたおれ、家族にたよられて病院につめたりいろいろ手配を要するようになりました。まことに意地の悪いタイミングです。しかも十月中旬があぶないという状況なのです。これには弱りました。

しかし、事は人命に関する事です。私は燃えるほむらを押さえつけて出来る限りの世話をしたのですが、とうとうこの人は十月十四日になくなったのです。そして十四日、十五日とお通夜をして十六日葬儀になりました。私は葬儀をとどこおりなく終り、遺族と別れて早々に帰宅し、ようやくにしてこのテレビを見たのです。

十六日の一週間前、即ち九日の『剣』も、期待に終始して見ました。そしてこの時の予告篇で、はじめて囚人が女囚であり、小川真由美が出演するという事を知ったのでしたがそれだけにこの日の私の気持は、まことに複雑だったのです。

だが、予告の画面にあった小川真由美は、囚衣の上から菱縄をかけられ真正面を向いて坐っていました。ところが両手は後手には縛られず、膝の上においているのです。これは大きな失望でした。いよいよそれやこれやで待ちに待った十六日になったわけです。

実は私はその以前からテレビの画面をカメラで撮る事に興味をおぼえていて、実際に二三、試みてきたのですが、あまり成功していないのです。しかし、この小川真由美の女囚菱形縄姿だけはどうしても撮りたいと熱望していたので、その点からも、絶対に家で見る必要があったのです。

ところで十六日の朝、私は秘そかな期待をもって、購読している毎日新聞とスポーツニッポンのテレビ欄を見ました。するとスポーツニッポンの方に、目指すスチール写真が載せられてあったのです。これは早木さんが週

刊誌でみられたというのと多分同じものと思います。

菱縄に縛られ、正坐している小川真由美の傍に立って、浅右衛門（三国連太郎）が刀をさしのべているところです。この写真は小さいばかりでなく、新聞のことですから縄目もボンヤリしていましたが、それでも、ここでは明らかに小川真由美の両手は後手に縛られているのが分りました。

やっぱり期待はうらぎられなかった！私は益々今後への望みを大きくしたわけです。

さて、こんな経過で、『剣・首斬り浅右衛門』を見ました。小川真由美はすでに捕えられ、お白州で裁きを受けていますが、事件の内容は役人の口から浅右衛門に語られるという形式でドラマは進みました。

小川は予告篇にあったように菱縄こそ打たれていますが、両手は膝の上に置いて正座しているのです。この姿を正面から、あるいは背後から、数回カメラは写します。背後からのものは首縄につながり、二条の縄が腰まで下りて腰を幾重かに縛って居り、緊迫度は十分ありました。

そしていよいよ最後の場面、首斬り場のシ



ーンです。私は後手、菱縄姿の小川真由美が縄尻をとられて処刑場に追いたてられるところを期待していたのですが、それはなかったのが残念です。

ここでのシーンは一カ所だけなのです。定法通り紙と藁で目かくしをされ、菱縄後手縛りの小川が画面に斜め背を向けて坐り、断首の宣告を受けています。

両手は高々といってよい程背中にまわされて、囚衣からむき出して重ねられた両手首をしっかりと括りあわされて縄尻は画面の外の者にとられていました。断首の宣告を受けた彼女は、深く頭を下げて「ありがとうございます」と言います。

このシーンは全く見事で、胸が痛くなる程でした。映画『拷問』の釜ゆでシーンに匹敵するものです。このあと、浅右衛門が刀をふるって数度斬り損ずるのですが、ここでは浅右衛門の大笑しだけで、お目当の菱縄女囚の姿は写りません。最後に遠景シーンで、処刑場に立つ浅右衛門と倒れている女囚の姿が見えますが、それとたしかめられないくらいの遠写しです。

さて、ごらんになれなかったという早木さ

んのためにだらだらと内容を書きましたが、私が地団駄ふんだというのは、この後日談なのです。

実はカメラを用意しながら素人のかなしさと、女房が横からジロジロ見ているのに気がさして、右のうち最後の後手背面の宣告シーンを二枚とっただけに終わりました。

それでも心浮き浮き致しまして、早くこれを現像してみたいものと思ったのですが、これまで数本とり乍らいつも失敗しているのにこりて、このフィルムだけはD・P屋に頼んでやろうと決心したのです。（私は女房の縛りなどはいつも自分でやります）それで家から離れたある駅前のお店（D・P専門でなく、いろいろの物を扱っています）に持って行きましたところ、店の女の子がなかなかの美人なのです。小川真由美に似ているという大層ですが、そんな感じもする小股のきれ上がった感じの娘さんなので余計に気をよくして多少の冒険心も働いて頼みました。白黒なので事は簡単です。美人の娘さんの「明日出来ます」の声に楽しい気分になったものでした。

さて、翌日心躍らせ乍ら出かけたところ、その子は休んでいて別の太った娘が「ハイ」

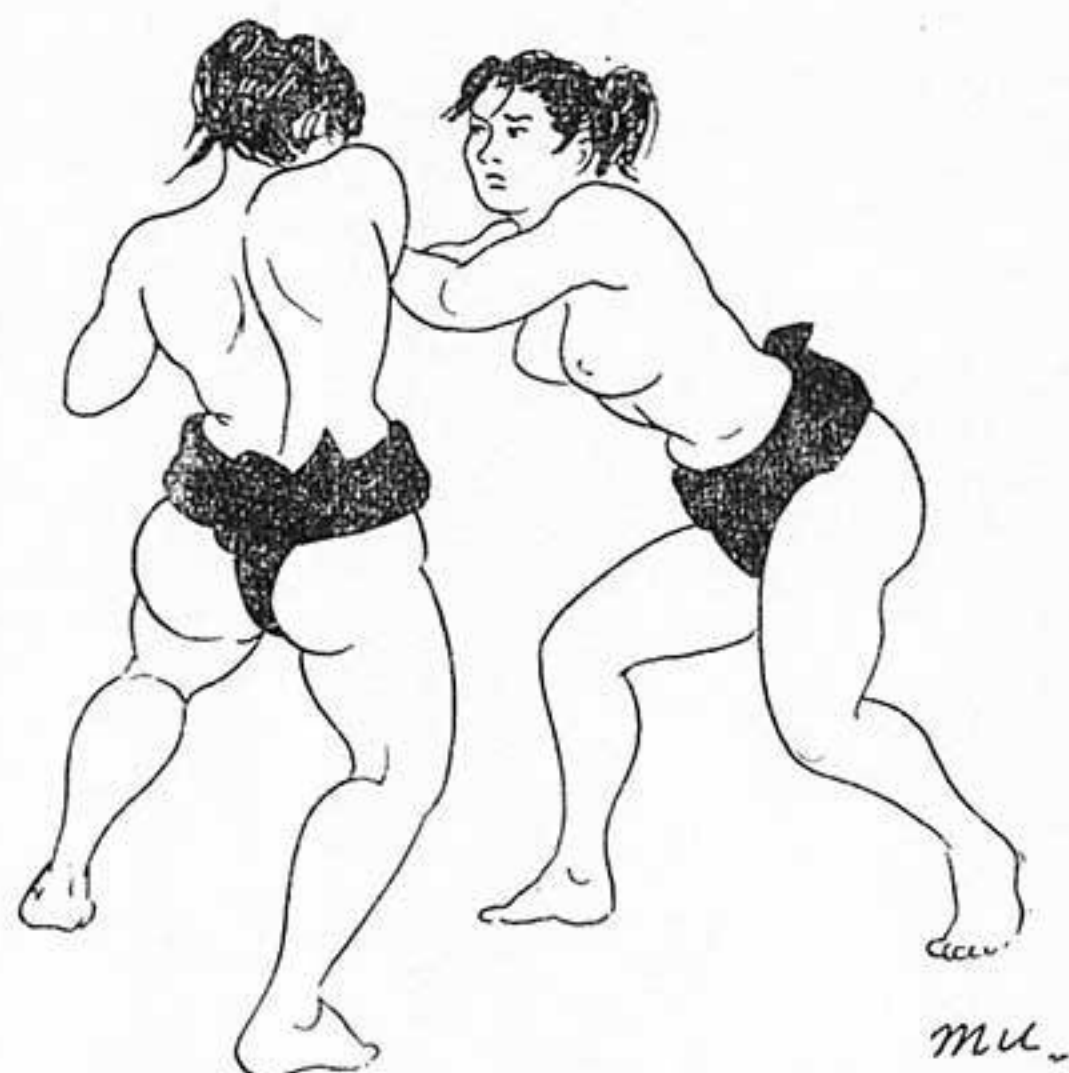
と何の興味もないように紙袋を渡して呉れました。私は少々失望したのですが、それよりも先ず写真をと、店を出てから大急ぎで取り出して見て、今度は大いに失望しなければならなかったのです。

ああ何んたる事か、ネガの上に太線で消してあるのです。露出不足で印画にならないからということで、光線を入れてしまったのです。しかもそれが、無情にもちょうど小川真由美の後手が縛られている、その肝心の目標部分が消えてしまっているのです。

まったく泣いても泣ききれぬというのはこの事でした。私は印画をやりますので、例え露出不足でもなんとか恰好のつく印画を作る自信はありますが、ネガに光線を当てられてしまっただけはおしまいです。それとも、このような写真は扱えないというつもりだったのでしょうか？ こんな事なら最初から自分でフィルム現像をやっていたらよかったものを、大事をふんだばかりに、とんだ事になりました。全く掌中の玉を失ったとはこの事かと、地団駄ふんでも追いつきません。

私は『剣』がもう一度、深夜放送か何かで再映される事を心から祈って居ります。





## △女相撲物語▽

# 花の女斗美たち

(14)

奮闘士 好太

挿入画・雪崎京人提供

体育の秋、さわやかな秋。

しかし、今の私にとっては、さわやかな秋どころの話ではありませんでした。

あの情けない敗戦の日以来、ゆううつな日が続いていたのでした。

あの日、新人対抗戦の終わったあとで、笠原さんから励まされ、そしてほかのみんなからも慰められて、気をとり直したはずの私ですけれど、家へ帰ってひとりになると、またみじめな負け方が思い起されて、ふとんのえりを噛みながら枕をぬらしてしまったのでした。

「どうしてあんな受けかたをしちゃったのか

しら——いや、あの時は受けて立つつもりなんかつともなかったんだわ。それなのにあの審判はあんな不公平な立ち合いをさせて黙ってるなんて……」

くやしさは一層つのります。

目を閉じると、あの時の情景が頭の中をクルクルと回転しながら、次から次へと浮かんでくるのです。

控え室でマワシをつけて、落ちつきはないながら、それぞれにファイトを燃やして、会場へ向かった私たち。

キツチリと締め込んだ緊張感と、おなかの下から腰のまわりを力強く支えてくれるマワ

シの圧迫感に助けられて、校舎から土俵のある中庭へと足を踏み出した私たちでしたが、マワシひとつを身につけただけの裸身を初めて、大ぜいの人の目にさらす……その全身にトリ肌の立つ思いの一瞬だったのです。

恥かしいうちにも、誇らしさを抱いて、頬をピンクに染めながら、一步一步足もとを確かめるように歩を運んだ私たち……。でもその足もとも、破裂しそうな胸の鼓動と、ふくれ上がる興奮とで、ひどく頼りなく感じたのでしたけれど……。

その時のことを思うと、また胸を締めつけられるようなくやしさと悲しさで、また唇を



噛みしめるのでした。

目を閉じます……。すると、ヒロちゃんが丸いおモチのような白いおシリを見せて仕切っています。

その、二つの白いおモチの真ん中を割ってキリリと締め込まれた青いマワシ……。そしてその白いおシリが土俵での控えからもハッキリわかるくらいブルブルふるえていたヒロちゃん……。

でもヒロちゃんは、苦戦しながらも、見事に勝って、先陣の大役を果たしたのでした。

真つ赤な顔……。力斗のあとの荒い息づかに、あのポリウムのある胸もとを波打たせながら、土俵を下りてきたヒロちゃんの嬉しそうな表情。

汗まみれの顔……。のどもとから美しい輝きを見せる汗の筋が、胸の谷間の真ん中を流れ下って行きます。

その筋の流れる先に、かわいいおヘソの深いくぼみが、マワシの上の端から半分くらいのぞいています。左のお乳の直ぐ下が激しく脈打っているのがよくわかります。

控えのみんなに祝福されて、ヒロちゃんはいかにも、とくいそうでした。

あの時、私もみんなといっしょに祝福して勝利を喜んであげたのに。幻想のなかのヒロちゃんは、私の顔を見て、ニヤリと笑ったりするのでした。

小憎らしいその顔。私のくやしさを一層かき立てて、誇らしげに笑うその顔。私の目尻から涙が流れます。

思わずすすり上げて、だれも傍にいないのに、あわててふとんに顔をかくしたりするのでした。

そして、それが消えると、次には津野さんが取り組んでいます。

やわらかそうな起伏に富んだ津野さんの美しい体……。その丸味のある腰にキリッと締め込んだ青いマワシは、津野さんの女らしさを一層魅力的にしているのです。

立ち上がりから低く突っ込んで行く津野さんのしなやかな肢体。獲物をねらう猟犬のようなキビキビした動きでした。でも、あまりに頭を下げるすぎたためでしょうか、逃げながら腕をとった相手のひと——相手チームの中ではいちばんの重量級でしたけれど、ただそれだけで、動きもにぶく、津野さんには軽い相手だと思っていたのでした——の代わり身とも云えないくらいの動きに、目標をはずされたのでした。前のめりになりながら両手を伸ばして、後退して行く相手のひとの前マワシを懸命にさぐる津野さん……。けれどもほんのわずかというところで、とうとう、足が追いきれず、泳ぐような体勢になっていたからだが、伸びきったそのままの形で、どっと土俵に落ちます。

腹ばいになってしまった津野さんが、体いっぱいにくやしさを表わしながら立ち上がります。

両ももからおなかのあたり、そして形のいい二つの胸のふくらみまで砂にまみれて、くやしげにそれを払い落としながら控えにもどる津野さん。

その津野さんをなぐさめる間もなく、私の出番でした。息苦しくなるくらいに緊張して……ドキドキと、ふだんの三倍もの早さで高鳴る胸の鼓動を、はっきり思い出すことができるのでした。

相手の人の浅黒い肌と緑色のマワシ。呼ばれて立ち上がってから、前マワシを押し下げたり、中腰になって、おシリのためみつを直したり、トントンと足ぶみをしたり……落ちつきのないひと。そしてまるで猛獣みたいなすごい目つきをして、相手かまわずに突っかけてきたり……。

あんなメチャメチャな仕切りってあるかしら。それにあの審判のひとだって、あんならんぼうな仕切りを許して、知らん顔をしているなんて……あんなの、相撲を知らない人がすることなんだワ。

突っ張りを受けた両方の肩のあたりがズキズキとほてって、あの時のショックを思い出させます。

土俵を転げ落ちながら耳に入ってきた観衆



の笑い声（私にはそう聞こえてきたのです）がそのまま耳の奥にこびりついていきます。

一回転して背中を打った、砂の一粒一粒、その感触までがはっきりとよみがえってくるのです。

せめてこちらのひとつきでも相手のからだに当たったのなら、またあきらめもつくのかもしれませんが、指一本ふれないうちに転げ落ちるなんて……。

みんなが張り切って声援をおくっている傍で、マワシ姿のまま泣いていた自分を思うとこのうえなくみじめで、たまらなくなったのでした。そしてその夜はとうとうひと晩を泣き明かしてしまったのでした。泣き明かしたからといって一向に気持が晴れません。自分で自分が情なくなつて完全に自信をなくしてしまい、とても、またマワシをつける気になれず、そのままズルズルと練習を休む日が続いてしまいました。

時々廊下で顔を合わせる松田さんや津野さんに

「どうしたの？」

とか

「みんな待ってるのよ」

などと、声をかけられるのでしたが、それがまたかえって辛くなって、よい練習場へ足が向きません。廊下を通る時など、なるべく顔を合わせないように、遠くに部員のだれ

かの姿の見た時など、まわり道したりするしまつです。

ヒロちゃんにも放課後

「ネエ、いつまでネバるの？ もういいじゃない、今日は行こうよ」

と誘われても

「今日はちょっと用事があるの」

とウソを言ったり、

「ネエ、こんどおもしろい練習を始めたの。」

だからあんたも来なさいよ」

と手を引っぱられても

「じゃ、明日から行くわ」

と一時のがれを云って逃げるのでした。

こんなことでとうとう二十日くらいも経ってしまったある日曜日、母から用事をたのまれて、バスで二十分ばかりかかるところにある伯母の家へ使いに行きました。

ところが、せっかく行つた伯母の家は、どこかへ出掛けたあとと見え、玄関には錠がかかっている仕末です。

「こんなことにならないように、先に電話でも連絡しておけばよいのに。せっかくの日曜日にムダ足させるなんて……」

と、ムシャクシャしながらまた大通りの方へ引き返しました。

バス停の近くにある八百屋さんの前を通りかかりますと、私と同じ年令くらいの子が店先を片づけていました。キビキビしたからだ

のこなしに、思わずその方を見とれながら、その横を通り過ぎようとした時、その人は、ちょうど一段落したらしく腰を伸ばしたところでしたが、なにげなく上げた眸でチラリと私の顔を見たとき、ハッと顔つきになつて向き直りました。

そして、一瞬ためらいの色を浮かべたようでしたが、すぐ思い切つたような様子で声をかけました。

「あの……あなた、花岡高校の方でなかったかしら」

そう云われた時、私の方も、もう気がついていました。カーッと顔に血がのぼってきました。

色の浅黒い、引き締まったからだつき……このひとをどうして忘れることができるでしょう。

私が憂うつな気持で毎日を送っている、その情けない気持を味わせたひと——私が突きとばされて土俵を転げ落ちたあの惨めな新人戦での出来ごと——その時の相手のひとだったのです。

声をかけられて、私の方も何か返事をしようと思うのですけれど、そのひとことが出てこず、ただ胸がドキドキするばかりで、私は顔をこわばらせたまま、棒のように突っ立っていました。

そんな私にその人はいきなり



「あたし、あなたにあやまらなければいけないと思ってたんです」

と、思いがけないことを言い出しました。

「このひとは何を言うのかしら……自分が勝手なことをして、ひとに恥をかかせて……そしてあやまるなんて……」

私は、頬へ血の上って来るのを感じながらまだ黙っていました。

「すみません。いきなり、こんなことを言ったりして」

そのひとは、ちょっとはずかしそうにして私の顔をうかがうように、

「ちょっとお話ししたいんだけど、いいかしら」

「ええ」

私はやっと、のどにからまったような声で答えました。

「どうせ時間があまったところですから」

「ああよかった」

そのひとはニッコリして、  
「じゃちょっと待っててね、家のひとに言うてくるから」

と奥へ駆け込んで行きました。

ピッターとはりついたようなGパンにつつまれた形のいいおシリがプリプリとおどっていました。

戻ってくるのを待つ間、私はぼんやりと見るでもなくあの人のお家の店先を眺めていま

した。

あまり大きな構えの店ではありませんけれど何となく活気があって、食料品を扱う店に必要な新鮮さも感じられるお店でした。

待つほどのこともなく、あの人の元気のいい声で何か言うのが聞こえて、直ぐにまたとび出してきました。

そして、

「すぐそこに喫茶店があるから、そこへ行きましよ」

と誘ってから、

「あ、そうそう、まだ名前を言ってなかったワ。あたし吉永ユリ子って言うの」

「あたしは石山テル子」

私は言いながら、少しブツキラボウだったかしらと思ったりしました。

向かい合って腰を下ろし、注文の品が運ばれてくる間、二人は黙ったまま坐っていました。

日曜日ですが、まだ時間が早いので店内はすいていました。

間もなくコーヒーが運ばれてきて、吉永さんは、シュガーを入れながら、

「あの時は、ほんとうにすみませんでした」と、伏し目になってつぶやくようにわびるのです。

私は、かえって古い傷口にさわられるような気持ちになって胸の奥が痛みましたが、

「いいのよ、あの時は、あたしがだらしなかったんですもん」

と、わざと乱ぼうな口調で答えました。

「でも……」

と吉永さんは、

「あたし、猛烈にアガっちゃって夢中であんなことしちゃったんですけど……あとからほんとうに悪いことしちゃったと思って、気にかかって仕方なかったんです」

と、うつむいたまま言うのです。

私はうまい返事が思いつかないまま、胸の中で、

「いいわ、いいのよ、もうすんじやったから」

と、半分は自分自身に言い聞かせながらつぶやいていました。

でも、何だか、それまでのくやしさが少しずつ消えて行くのを感じ出していました。

吉永さんはコーヒーをひと口のんでからようやく顔を上げて、

「花岡高のことしの新人のひとってみんな強いて聞かされていたんです。ですから、あたしたちみんなスゴク緊張してたの。それにあなたがたの出て来たのを見ると、みんな悠々としているし、青いマワシなんかしてまるでベテランばかりみたいに見えたものでしょう。あたしたちなんか、もうビクビクだったの」

「そりゃ、あたしたちだっておんなじだわ」



私は、やっと落ちつきをとり戻して言葉も出るようになりました。

「自分の学校にいる方だってそんなんだから、あたしたちなんかおさらよ、上級生から注意されたってうわのそらみたいで……」

「じゃア、どっちも同じだったわけネ」

私と吉永さんはようやく顔を見合わせて、いっしょに笑いました。

「でも、あなたが出て来たとき、すぐわかったワ、あの元気のいいひと、あのひととっても張り切ってたから」

「ああ、ヒロちゃんのことネ、あのひと、張り切ってたんじゃないくて、のぼせてワクワクしてたんだワ」

「あなたは落ちついてた」

「反対よ、ボーッとしてただけ」

ほんとはおシッコが出たいような気持で困ってたんだワと胸の中でつぶやいて、私はクスツと笑いました。

「あたし、あなたと当たらなければいいなあと思ってたワ」

「あら、どうして？」

「だって、あなたって背が高いでしょ、背の高いひとは、たいてい突っ張りが強いって言うし、あたしって突っ張りがニガ手だから、もしあなたと当たったらとてもじゃないと思っただの」

私は、何だかおだてられたような感じにな

ってくすぐったくなりましたが、黙ってコーヒーをすすりました。

「そう思ってるのに相手がきまるとあなたでしよう。もうダメだワと思ってヒザがガクガクしちゃった」

吉永さんはそう言って、あの時のことを思い出こすように視線を遠くしました。

私も名前を呼ばれた時を思い出して、全身の肌が鳥肌立つような緊張の瞬間を思い浮かべましたが、すぐにそれはあのみじめな敗戦へつながって、またくやしさがこみ上げるのでした。

吉永さんは、そんな私に気づかず、

「土俵へ上がってくる時なんか、石山さんスゴク落ち着いてたでしょう、マワシの締め方を見ると、そのひとの力がわかるなんて言われてたけど、石山さんのマワシってとてもキリッとしてちょっとの乱れもないし、もうとてもかなわないから、止めて逃げ出そうかなんて考えたワ」

私の方から見た吉永さんは、まるで逆で、いかにも自信ありげに見えたのですけれど、本人の言うことは全く弱気なのです。

「でも、仕切ってる時のあなたの目つき、スゴかった」

私は、あの時のまるで噛みつきそうに見えた吉永さんの視線を思いました。

「どんな目つきをしてたかわからないワ。た

だ、思い切ってぶつかっちゃおうと思ってただけよ」

吉永さんは少し恥かしそうに言いました。つまり、私たちは両方とも同じようにならない相手だと思ったのでした。

けれども、そのあとは、私の方はあきらめてしまい、吉永さんの方は、思い切ってぶつかろうと考え、そしてその気持の差がそのまま勝敗を分けたのでした。

「でも……あんなことしちゃって……」

と吉永さんはいかにもすまなさそうに「あのあとで上級生にも叱られたし、あたしもあやまろうと思って、あなたの学校のそばまで行ったりしたんだけど……見つからなくて」

「いいのよ」

私は、やっと心の底から光を見つけたような気持になりました。

あのみじめな敗戦は、全部私自身のせいだったのです。

早く突っかけてきた吉永さんが悪いのでもなく、黙って止めなかった審判のひとのせいでもないのです。

私の無気力なあきらめ、そしてあいまいな受けかたが、すべての原因なのでした。

私と同じように、とてもかなわない相手だと思っても、私とは逆に、思い切ってぶつかっていいこうと考えた吉永さんは、それだけで



もう勝負に勝ったのでした。

「あたしたちって、ふたりともおんなじことを考えていたわけね」

私は、あの日以来ずっと胸の奥につかえていたものが、やっと動き出して、それとともに私の気持も重苦しいところからぬけ出しかけたように感じ始めました。

「あの勝負は、どっちみちあたしの負けだったんだワ」

「どっちみち……?」

吉永さんがふしぎそうな顔をするのへ

「そう。気合い敗けてところネ」

「なんだかよくわからないワ、だけど、あのことは許してもらえるワケね」

「許すも許さないもないワ。完全に負けマシタ。あたしの完敗」

私は明るい調子で言うのでしたけれど、やはり胸の奥には、チクリとしたものが残ります。けれども、それを押し戻すように

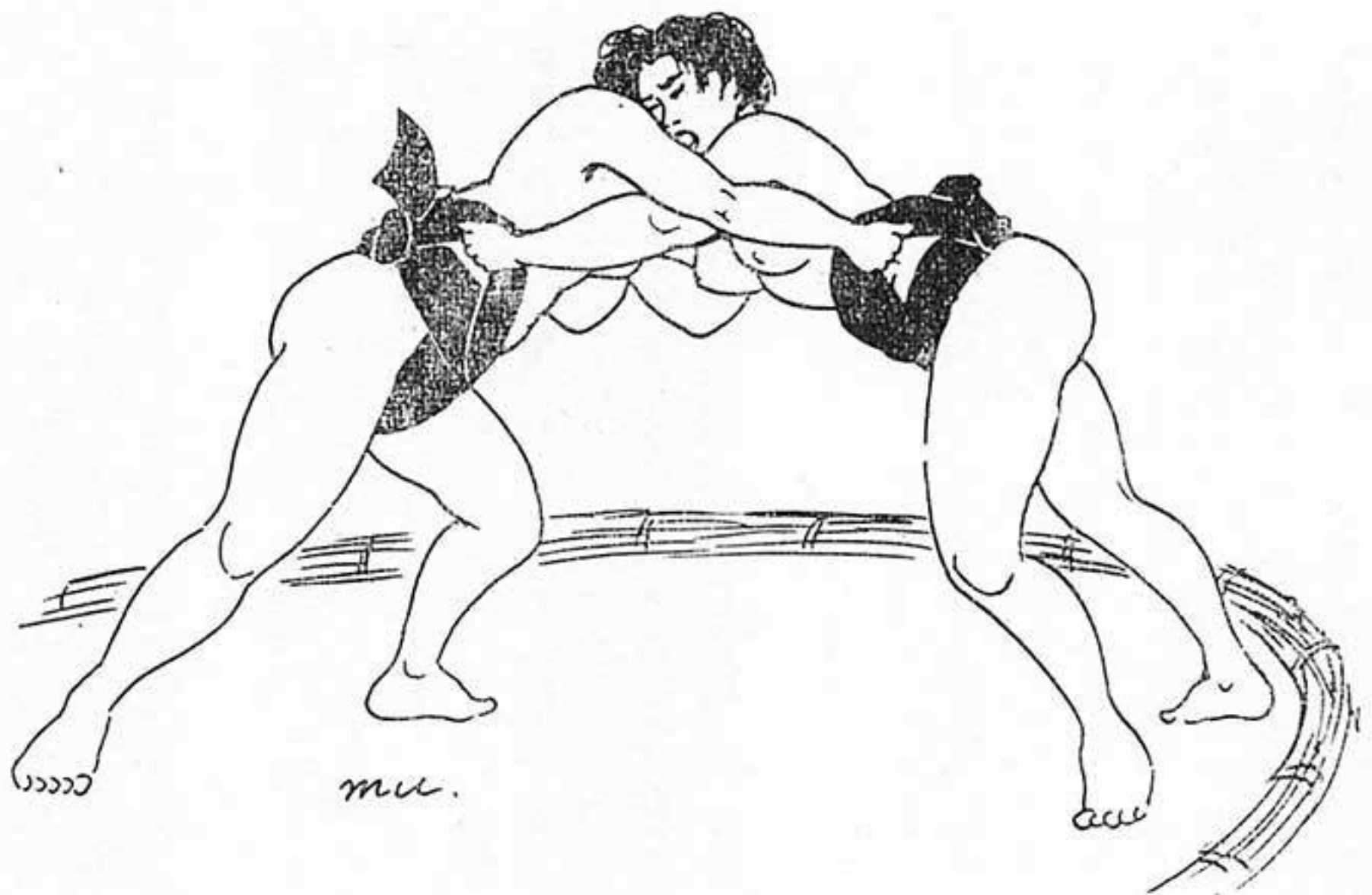
「でも、この次は敗けないわヨ。こんどは、アベコベにあなたを突きとばしてあげるから覚悟してらっしゃい」

と、吉永さんをニラミます。

「ハイハイ、覚悟してます。でもあたしだってそうかんとんには敗けないわヨ」

吉永さんもニコニコしながら言い返すのでした。

「失敗したのは仕方ないワ。自分のせいなん



だから……。でも、もうあんなヘンテコな敗けかたをしないようにすればいいんだワ」

私は、そう自分自身に言い聞かせながら、冷えたコーヒーをとり上げました。

「ネエ」

吉永さんが、コーヒーをすすする私の顔をのぞき込むようにして言いました。

「これから仲よしになってもらえるかしら」私はコーヒーをゴクツと飲み込み、そしてだまって、その顔を見返しました。吉永さんが、また心配そうな目になりました。

私はそんな吉永さんの素直なところがすっかり好きになって

「いいワ。どうぞ、あたしの方からおねがいするワ」

吉永さんの顔がパツと明かるくなって「アアよかった。また、あなたの気を悪くさせたのかと思って……」

そう言うのと、吉永さんは、ようやく肩の荷をおろしたみたいにフーツと大きな息をつき残りのコーヒーに口をつけるのでした。

「あたしって、おっちょこちょいだって言われるの」

コーヒーを飲み終わった吉永さんは、そう話し出しました。

「ひとにおだてられると、すぐ図に乗っちゃって……。だから母にもう少し落ちついて女の子らしくしなさいって、しょっちゅうごごとをもらうワ。だいたいあたしの家の商売があんなでしょ。だからよけい落ちつきがなくなつてガラガラしちゃうのネ」

吉永さんはちょっと首をすくめてニコツと笑いました。



「そんなことないでしょ」

私は吉永さんを初めて見た汽車の中のことを思い出しながら、

「落ち着きがないなんてことないワ。動作がキビキビしてるって言うのよ」

「よく言えばネ」

吉永さんはいたずらっぽく受けて

「あたし、小さい時から男の子たちとばかり遊んでいたの。ままごとなんかしてたっていう記憶がないみたいなの。考えてみると、いつでも球なげだとか、駆けっこだとか、お相撲だとか……」

「そんなときから相撲が好きだったわけ？」

「好きだっていうより、要するに負けたくないかったのネ。だから、だんだん負けられないようになって……。そのうち、男の子の方がいやがってしないようになってしまった」

「敗けるから？」

「それもあるけど、女の子と相撲をとるなんて恥ずかしくなったんでしょ」

「裸になって？」

「まさか。その頃は遊びだから裸になったりマワシを締めたりはしないわヨ」

吉永さんは、真顔でうち消して

「高校へ入ったら、柔道をやろうかって考えてたのヨ。でも柔道って苦しいんでしょ。首を締められたり、押さえ込みなんてされたりして……。剣道はたたかれると痛いし……」

それにちょうど相撲部があったから、それにしちゃおうと……」

「自信もあったし」

「まアネ」

吉永さんは、またニヤツと笑って

「でも、上級生にぶつかって行ったら、自信なんてものは、ふっとんじやったワ。ぜんぜん通じないんだもの。あたし、力の方だって毎日重いものを運んだりしてるから、まんざらじゃないって思ってたんだけど、そんなこと恥ずかしくって言えなくなっちゃった」

「力だけじゃないのヨ。あたしたち、まだ技を知らないから」

「それも確かにあるわネ。けど、一日に一度は真っ裸になって、思いっきり運動をするって、とてもすばらしいと思うワ……真っ裸って言うてもマワシはつけてるんだけど」

「あんまりイカさないスタイルだけど」

私が言う

「アラ、そんなことないワ。女の子がふんどし——アラいけない、マワシだったわネ——マワシをつけていたって、ちっともおかしくないと思うワ。だいいち、素っ裸になって伸び伸びした気持ちのときにマワシを締めるわけでしょ。からだ中が緊張して、何だかファイトが湧いてくるようだよ。お店へくる男のひとたちが、よく「ふんどしを締めてかからなくちゃア」なんて言うのを聞いて、以前はへ

んなことを言ってるなって思ってたんだけどこんどはよくわかるようになったワ。石山さんはどう？」

吉永さんに聞かれるまでもなく、あのズッシリしたマワシを身につけた時のころよい緊張感がよくわかります。

「こないだのあなただって、とっても魅力的だったワ。石山さんは、背が高いし、それからからだの線がスッキリしてるから、青い色なんか似合うのネ」

吉永さんは、そう言いながら、あらためて私のからだを眺めまわすような目つきをするのです。

からだの線がスッキリしてるなんて言われて、私たちの中でいちばん細いからだを悲観している私は、くすぐったくなり

「おだてが上手なこと」

「アラ、おだてじゃないワ、ほんとヨ」

「イヤだワ、そんな目つきをして」

私はなんだか、マワシひとつのからだを見つめられているような気がして、思わず顔が赤くなりました。

「でも青い色の似合うひとって好きヨ。あたしたちのもあんないい色のマワシだといいんだけど」

「ア—ラ。あの緑色のだって、なかなかいいわヨ」

「でも何だかはっきりしない感じだワ。肌に



つけるそばやけちゃうのかしら。もっと濃い色の方がいいのヨ。あなたたちがうらやましいワ」

吉永さんは、口をとがらせました。

「でもあのマワシは選手用なのヨ。ふだん使ってるのはふつうの白いのだワ。だいいちあたしたちふんどしかつぎなんか、あんな時でもないと使わせてもらえないのヨ。それに……あのマワシは堅くて締めにくいのヨ」

「そう。あたしたちは、ふだんの練習の時も同じマワシなんだけど、すべりやすくて、じきにゆるんじゅうの。しょっちゅう締め直してばかりなくちゃ。それにあたしたちの練習場って戸外でしょ、あまりだらしない恰好をしてられないし、マワシを締めてるところなんか、ひとに見られるイヤでしょ。だからいちいち部屋へ戻って締め直してるもんだから練習の能率が上がらないワ。そのうちにちがうマワシにするって話だけだ」

「あたしたちは室内の練習場だから……」

「そう。じゃいいワネ。あたしたち同士なら素ッ裸になったってどうってことないから」

「だって……やっぱり恥かしいワ。……でもそんなにしょっちゅう締め直してばかりなくちゃならないなんてたいへんだわネ」

「そうなのよ。気分がこわれちゃうワ。締め直す時はたいいあたしたち新人がお手伝いでしょ。ホントのふんどしかつぎヨ。ひとの

ワマシを締めてやるばかりで、ろくろく練習もできやしない……」

吉永さんは、大げさに眉を寄せてみせるのです。

「だって、あなただって手伝ってもらうこともあるんでしょ？」

「ウウン」

吉永さんは首を振りました。

「そんなことないの」

「どうして？」

「だって、あたしたちの練習って押し合いだとか、運び足だとか……ほとんど型ばかりでしょ。だから、マワシが乱れるなんてことないのヨ。だいいち、マワシをひくことなかまださせられてないの」

「ぶつかりげいこはしないの？」

「ええ、するワ。ぶつかりげいこなんかやると、やっぱりマワシが乱れたりするわネ。でも、そのあとは四股ふみかなんかやってすぐ終りだから……。そのぶつかりげいこの時だって、せっかく次は自分だって張り切ってるのに、呼ばれることがあるのヨ。気ぬけしちゃうし、戻って行くと、自分の番をとばされたりしてるでしょ、クサるワ。……でも、仕方ないわネ新人なんですもの、先輩のマワシのお世をするのも練習のうちだと思えば……」

「ろくろく練習もできないようじゃ困っちゃうわネ」

「ウン。……ろくろく練習もできないってほどじゃないけど……。でもこんど別のマワシを注文するって話だワ」

「じゃこんどは、やたらにゆるまない……」

「キニツと気持よく締まるのに……」

吉永さんはニコリと人なつこそうな笑顔をみせましたが

「初めてお話するってのに、ふんどしの話ばかりなんて、あたしたちどうかしてるワネもっとほかのお話しましょう」

「そうネ」

私が、合づちを打つのへ吉永さんは続けて「でも……ふんどしってーアラまたふんどしって言っちゃった……マワシって言わなくちゃ上のひとたちに叱られちゃうーあたしたちところってウルサイの……」

吉永さんは目をクルクルさせて

「マワシなんて、すぐく日本的だわネ、だって、そうでしょ？ スポーツのユニホームのうちじゃいちばん小さくって単純な形で……そのくせキチンとからだにつけるにはスゴクむづかしい……むづかしくしてるのヨね、何んでもないのをワザワザめんどくさい規則をつくるのが日本人の趣味だなんて何かの本に書いてあったワ。でも、ただ細長い布を広げたり、細く折りたたんだりして巻きつけるだけで、どんなからだつきのひとでもピッタリと身についた感じになるんだから実さい感心し



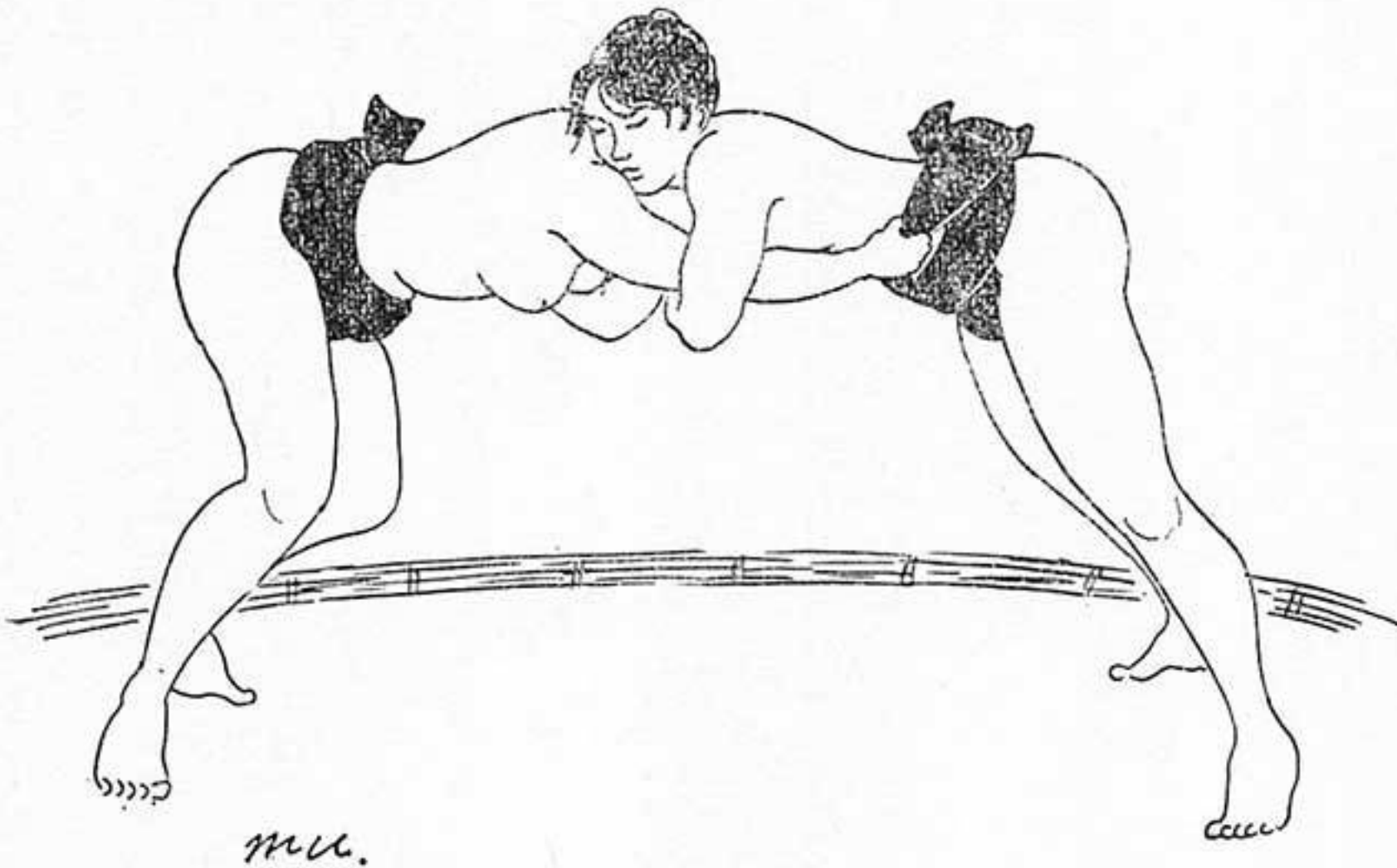
ちゃうワ。一種の芸術だワネ。いったい誰が考えたのか知らないけど：もちろん、長い間に大ぜいの人が考えてきたんでしょけど：今のマワシなんか、ユニホームとしちゃ完成されすぎちゃって、装飾的になってるんじゃないかしら。だから、あたしたち女の子だってハダカになってマワシをつけたって、チットモ野蠻じゃないし、毎日そんな恰好で練習していったって、そのために行儀が悪くなるわけでもないでしょ」

確かに吉永さんの云うとおり、相撲をするようになってから、ぎょうぎが悪くなったなんて叱られた覚えありません。

ピチッと逆三角を描いた前ブクロから、キリッと細くおしりを締め上げたタテミツなどからだの形にムダなく合わせた美しさがあると思います。それだけに、マワシにおおわれるところは、ホントのギリギリの部分で、セクシーだなどとさわがれているビキニなんかよりも、もっとずっと小さいのです。

最初恥かしかったハダカにも、そして抵抗を感じたマワシにも、しぜんとなれてきて、それが当たりまえなのですから—みんながマワシをつけているのに、私だけがパンツをはいていたりしたらかえって恥かしくなるでしょう—別にそんなことを考えたこともなかったのですけれど、吉永さんに改めてそんなことを云われたりしますと、急にまたマワシひ

とつの素っパダカの姿が気になり出して、それにしばらくの間練習を休んでごぶさたしていた、マワシの、あのズッシリした分厚い肌ざわりが生々しくよみがえってきて、なんだか腰のあたりがムズムズしてくるのです。そして頬が熱くなってくるのを感じ、店のひ



とに見つめられたりしてはいないかしら：と横目であうかがってみたりするのでした。幸いに薄暗い照明のなかなのでそんな心配もなく、音楽にさえぎられて私たちの話も聞かえないようでした。

吉永さんも、そんな私のソワソワした態度にも気づかないようすで、話を続けます。

「でも、相撲ってホントにおもしろいわネ。アツという間に勝負がつくかと思うと、取り組んでるさい中に、マワシがゆるんで、締め直すんだからなんてひと休みしたり、全くノンビリしてるワ。あれもひとつの演出じゃないかしら。あんなに力を入れて何回も何回も巻いていても、取り組んで力がいっていると、直きに乱れたり、ゆるんだり：でもマワシが乱れた姿なんてちょっとエロチックな魅力みたいなものがあるんじゃないかしらネ、つまり浮き世絵のようなタイハイ的な美しさ：」

私は吉永さんが、なんの苦もなく演出だとか、タイハイ的だとかという程度の高い言葉をスラスラと口にするのに感心するよりも、そんなことを思い及ばない自分に情けなくなってくるのでした。相撲だけでなくて、頭の出来もちがうのかしら、もっと勉強しなくちゃ：などと考えさせられます。吉永さんはそんな私の気持ちに気づかず

「でも、取り組んだまんまでマワシを締め直してる形なんてユーモラスだワネ。その間何



もしないでじっとしてゐるわけでしょ、つまり時間の進行を止めてしまふのと同じでしょ。だから見てゐるひとは、その時間の止まつてゐる状態を見てゐるんだけど、ほんとにはそんなこと出来っこないんだから、見ていながら見ていないことになる：なんて面白いじゃない。何か映画の新らしい演出みたいだワ」

吉永さんは、自分で自分の言葉に興奮してゐるようでした。

私たちは最初のうちはヒソヒソと小声で話してゐたのですが、だんだん声が高くなつてゐました。

「じゃ今度は、あなたの方のお話も聞かせてちょうだい」

うながされたものの、吉永さんの大演説に圧倒された私は、ちょっと言葉が出てこないのでした。

「あなたのお話聞いてたら、あたしなんかなんにも言えなくなっちゃった」

私がそう言いますと、吉永さんが急におかしそうに笑い出しました。

「…?」

妙な顔をした私に吉永さんは

「大演説にビックリしたでしょ。でも、あれはみんな上級生から聞いたことの受け売りなの、あたしの考えなんか五分の一ぐらいしかはいつてないワ」

「なアンだ」

私もちょっとひょうし抜けしていっしょに笑い出し、そして首をすくめてまわりを見まわした。

「でも、あんなことがスラスラと言えるなんてやっぱりえらいワ」

「おホメにあずかりまして恐しゅくです」

吉永さんはピョコリと頭を下げて

「さあ、あなたの番よ」

：それから私たちはまた、長いおしゃべりを続けました。

私たちの仲良しグループのこと—みんなのアダ名、おかしなクセのこと、そして毎日の練習のこと—私はウサギとびがいちばん辛いと言い、吉永さんは、両足を開いてからだを前に倒す柔軟運動が苦しいと言います。

「まるで足のうしろ側の筋がち切れるんじゃないかと思うワ、それだつてのに背中を押して前へ倒すんだから：ゴモンみたい」

そのマタワリと呼ばれてゐる柔軟運動には私も悲鳴を上げたのでしたが、それでも、ほかのひとたちよりは割に早く上達したようでした。

そして、ぶつかりげいや、申し合いや、夏の合宿のことなど、カラのカップを並べながら二人の話はなかなか尽きませんでした。ふと時計に目をやりますと、この店へはいつてきてからも二時間も過ぎようとしてゐるのでした。

「アラたいへん、もうこんなになつちやうて」  
吉永さんもびっくり

「出ましようか」

と言いかけて、急に気がついたように「ネエ：あたしたち同志で練習できないかしら：」

と、思いがけないことを言うのでした。

「あたしたち同志の：?」

考え込む私に

「マワシくらいは持つて行くワヨ。ひとのふんどしで相撲はとらないワ」

吉永さんのとんきような言葉に、私も思わず吹き出しましたが

「じゃあ、上級生に聞いてみようかしら」

「おねがいよ。そうそう、さっきのお話のあなたの親友も呼びなさいよ」

吉永さんはそう言って

「もしよかったらお電話してちょうだいね」

と念を押すのでした。

ドアを押して外へ出ますと、それまで薄暗い店内になれた目に、澄み切った秋の空がまぶしくて、思わず目を細めます。

でも、さっきここへはいる時の気持とくらべますと、なんとというちがひなのでしよう。暗い国から光りの国へ、私はなんだかすがすがしい朝を迎えたような気持になったのでした。

(未完)





# 濡れにぞ濡れし

芳野眉美

## △辻村さんと団さんと▽

あの腰の重い辻村さんが、まさか上京して  
いられるとは思わなかった。カメラハントの  
取材のよし。オニ六先生と一緒にだから来ない  
か、とバーに電話があった。

とたんによれしくなったが、いつもは閑古  
鳥が遊びに来ているだけなのが、運が悪く、  
常連の悪童どもがいれかわりたちかわり、ガ  
ヤガヤワァワァ、まさか揃ってオランダスわけ  
にもいかず、前に連絡あれば、店を休んで待

っていたものをと悔まれた。

辻村さんも突然の上京とかで二日ぐらいし  
か東京にいられず、辻村さんには会いたいし  
再三の電話にすっかり恐縮、そわそわして落  
ち着かないことおびただしい。

午前零時。珍客有りこれにて閉店。また追  
い出すのと、不平たらたら十人ばかりの悪  
童どもを追っばらった。こっちの気持にもな  
ってくれよ。いつもじゃない。

その前、六日(土)は、私の精神科の主治  
医である沢井和雄ドクター。八日(月)は、

M派の闘将三原寛氏。その道の先輩Y氏にN  
氏と四人。それぞれ新年会でバーを休んだば  
かりなのである。

ヤッケと赤いセーターというヒデェいでた  
ちで、ネクタイをつけていないことわられ  
るクラブに、お呼び出しとあらば、失礼して  
入らせてもらった。

零時半、ようやく会えた。まるで恋人みた  
い。これ、辻村さんの一面である。一月号の  
オニ六先生との対談ではないが「非道い方」  
では決してない。念のため。女性には特に優



しい。

辻村さんから団先生を紹介され、それから三時間余、場所をあらためて、大人二人の間にチョコナンとはさまって、種々とお話をうかがったわけだが、オニ六先生のイメージがどうしても「花と蛇」の作者とあわないのである。こんなはずじゃなかった。

「こんなえげつないものを書く男だから、どんなにいやらしい顔した男だと（中略）作者を想像したらしいが、私が思ったよりハンサム紳士ーいや、ほんとであるー気ぬけした気分になったらしい」（四十二年二月号三文羞恥論）

とあるが、右に同じく、柔和で優しい方なのに驚いた。モテモテオジサンの如く、沢山のピンク女優さんに惚れられて困っているんじゃないか、俺にもわけろ、そんなことはいません。

作品から作者を想像するものじゃない。作品と作者は違うものである。

団先生には申し訳ないが、私は「花と蛇」を全部読むほどの読者ではない。サワリ中のサワリをさがしだして、コーフンするという経済的、かつ、モノグサを代表するような読

者である。

従って、「花と蛇」を批評した皆さんには失礼だが、すべての批評を読んだとはいえない。

私が「花と蛇」は読物で、小説じゃない、とかなんとか、「濡れにぞ」で一言いったことが、受けて立った方々がいらして、ケンケンガクガクの批評のはじまりと記憶しているが、火をつけた本人が、今頃こんなことを白状しているのだから、まったくいい気なものである。

やたらに批評するものではないということがあっただけでも「花と蛇」論争の価値があったと考えるのは暴論かしら。的はずれもはなはだしいトンチンカンな批評が多くてさぞかし団先生、迷惑だったと思うのである。まったく、

「誰かがいい出した小説や読物の、馬鹿げた話」（四十一年十一月号三文マニヤ文士）なのである。

団先生にお会いして、次の三点を確認できたことは、私にとってはうれしいことであつた。

（一）「私は客を大事に扱うという、大げさ

に言えば信念というもので、いささか過剰すぎる位のサービスをもって、延々と花と蛇を語りつづけてきたつもりでいる」（三文マニヤ文士）

（二）「類型的、常識的なものにしなければこの種のSM小説（Y本でもいい）は成功しないと思っている。——（中略）——花と蛇を書くに当って、一番骨の折れる仕事は、この常識的、類型的に書かねばならぬという事である」（四十二年六月号三文SM人生論）

（三）「私は小説でもシナリオでも、十行でいう所を、三行でいい現すという方を好む性質である」（三文SM人生論）

私にとっては、読物であろうと、芸術小説であろうと、名前なんてどうでもいいのである。

コーフンしながら、「花と蛇」のすばらしい筆力の秘密を、その創作態度の心得を、私なりにまなべばそれで十分なのである。こんなことをいうと、また馬鹿げたことをとしかられるかもしれないが。

「鬼六談義」は面白いから好きですが、「花と蛇」はつまらないからあまり読みませんなどと、オニ六先生の前でズケズケというぐら



い、あまりピンとこないほうなのだけど、ここにこしながら聞いて下さっているのを助かった。

これは辻村さんも同じで、「SMカメラハント」サワリが少くてつまらねえとかなんとか文句ばかりいっても、別に怒るようなことはしないから、勝手気儘にしゃべっても助かるのである。

とにかく、オニ六先生と辻村さん、奇クの二本柱なんだから、これからもどしどし書き続けていただかないと困るのである。

「SMカメラハント」の取材で、辻村さん、美女たちに囲まれて疲労困憊のテイだったが、団先生もすすめておいでようだったし、腰を軽くしてたびたび上京すれば、在京のファンとしても有難いと思うのだが。お仕事の都合でそうもいかないのは残念だ。

再会を楽しみに、帰宅したのは午前四時半頃だった。

## ／久人プレー日記余聞＼

「のませてみようかしら」

と志麻がいうから、

「のませてくれよ」

「いやよ」

「どうして」

「知りすぎているから、いや」

やはり恥ずかしいらしい。知りすぎはいけない。おかしくて、だって。

「のむ話ばかりするのですもの。その気になっってしまうわよ」

「そこが、つけめ」

「誰か、いないかしら」

「俺じゃ、だめか」

「だめ」

くどいね。そこで、呻なった。志麻の初体験を、むざむざ他人わたすのか。無念。

さて、誰を、実験台にしよう。

てなことを考えていると、匂いをかぎつけたのか、にこやかな顔があらわれた。高岡久人氏。上京されるとかならずオンボロバーに寄って下さるのは有難い。

四十二年十一月号「久人プレー日記」に、

（「その前に、もっとビールを飲んで置ななくちゃ」

「たんと召し上って、たんと、吞ませて下さい」

湯上りにビールは良くまわる。ビール二本

が空になると、彼女は立上って浴衣を脱ぎ捨てた。下はブラジャーにビキニの悩ましい姿である。全く以ていつ見ても素晴らしいグラマー振りである。ビキニもとった。

「一寸此処へ来て、口を開けるのよ」  
とある。

久人氏、十九貫なら、十五貫のグラマーな志麻が、顔にちんまりと坐ったとしても、別にヘコミもすまい。高岡氏は、いつでも物腰が低く、丁寧で人柄は最高。志麻もいやといふまい。

「すみませんけど、実験台になって下さいませんか」

「芳野さんは、もうのんだのですか」

「それが、のませてくれないんですよ」

「私が先にいただくとは悪いですね」

「なにせ、なんにも知らないのですから、よろしく」

自分の娘をとつがせるみたい。

翌日、喫茶店で待ち合わせて、志麻のところへ。高岡氏、いそいそとビールを二本買ってきた。日記の通りである。

「久人プレー日記」に、春川ナミオ画伯の男の顔に坐ってタバコをふかしているグラマー



な女王の絵がある。ちょうどいい。

「こんなぐあいにしてさ、のませればいいんだよ」

と耳打ちして、このまま二人きりにするのはしゃくだから、買ってきた二本のビールのうち一本をラッパ飲みして、

「女王さま、なんてスットンキョウな声をだしても驚くな」

ちよっぴりやきもちを焼き、

「ごゆっくり」

たいこもち（幫間）になろうとは。

恋人の処女を横から奪われたような、妻の浮気の相手をさがしてきたようなMの夫の気持を味わったしだい。

かくて、禪問答。

「味如何」

「美味也」

嗚呼。

## △夜乃探郎氏の「水中花メモ」

に就いて▽

「水中花」の御丁寧な解説と批評、有難う御座居ました。

バーに集まる仲間たちからも悪評さくさく

だったので、編集長からお手紙をいただいて夜乃さんが「水中花メモ」を発表なさると聞き、覚悟して待ちかまえていたのですが、御好意あふれた解説に接して、かえって恐縮している始末です。

皆さんが「濡れ」のマユミサンを望んでおいでのようですが、シンコウホウセイの私といたしましては、書くことがなくて困っている次第です。

第一回を書いて休載したのは、二回目を書いて破ったからです。

「水中花」は、鬼頭老人と寿美麗夫人、そして牧二郎の三角関係にしばって書くつもりでおりました。登場人物は三人のみ。頭の中で考えていたのは、

（不能になりつつある老人）のSEXから、交合だけがSEXではないことを書いて見よう。

（二）寿美麗夫人に思慕した二郎が、夫婦生活を観き、浴室といわず、便所といわず、夫人の秘所をうかがい、夫人にたえずまとわりつき、童貞の男が、M的に、F的に、年上の女をいかに崇拜するかを書いてみたい。これが主題。

（三）夫のなすがままになっている貞淑な夫人でも、二郎の童貞を奪い、夫の目を盗んで姦通する。そんな肉感的な夫人を書くことにするか。

ということだったのです。

ところが、書いていて、十代後半に書いた「硝子便所」を思い出しまして、自分を必要以上に露出し、さらけ出すことに、苦痛を感じてしまったのです。急にイヤになってしまった。

それに加えて、頭痛が一月ほど続いて、考える余裕がなかったこともあります。原因不明。学生の頃、頭痛が二カ月続いて、首をひねった経験があります。

従って、休載。原作放棄。

老人、寿美麗夫人、香葉夫人たちのグループで古風なストーリーを展開させ、エマ、リリ、二郎たちのグループで現代的なストーリーを展開させる、とおおざっぱに考えて、複雑な人間関係をいじくったわけです。

十一回目で、どうやら終のマークをつけましたが、途中で再び休んだり、迷ったり、あまり調子のいい物語でもありません。

こまかいことは別にしても、「メモ」にあ



りましたとおり「不調音」であり「雑音」の連続的效果をねらったとお考えになって結構です。「和洋折衷のアンバランス」です。

外に、だいそれた意味はありません。

読みづらかったことはたしかで、仲間の批評は甘んじて受けました。

川端康成の「掌短編集」が好きだった私です。で、卅枚ばかりまでの短編を書くのが好きで、私のタイプに合っているように思われます。長編はニガテですね。

Sだ、Mだといったって、所詮はSM混合で、そうキッパリ割り切れるものじゃありません。SMの割合が少し違うだけのことで、SM遊戯にすぎない。

ですから、登場人物の性格も、アイマイモコとしているのに気づかれたでしょう。老人はまあS的にしましたけど、寿美麗夫人にだって香葉夫人にしたって、二郎にしてもリにしても、S的だかM的だかよくわからない。

レスボスのエマをスポンサーにするリリが特に好きだといったら、意外に思われるでしょう。フーテン仲間でもあるリリに、最終回「インスタントフーテンよ」といわせたのも

リリに好意を持ったからですよ。

現実にリリみたいな奇妙な女の子がいたら惚れますね。

要するに、「耽美派」としても、一人で楽しみすぎたようです。サービス精神ゼロなのは申し訳ないことでした。

### △濡れない▽

読ませて下さい、というから、彼女に雑誌を見せた。

「これどういう意味でしょうか」

Urineである。

「英和、ありませんか」

「ございます」

「じゃ、ひいて下さい」

「そうします」

素直である。書棚から辞典を取り出して、目の前でひろげた。みつけた。

「あら」

わかったらしい。

「あのう……」

いいにくそうである。

「なんでしょう」

「お飲みになるのでしょうか」

「お飲みになりますよ」

「まあ」

言葉も丁寧だが仕草もおっとりしている。

「おかしいですか」

「でも」

「きたない、とおっしゃりたいのでしょうか」

こちらまで丁寧になってしまう。

「ええ」

「きたないですよ。さっきあなたとキスしたとき、あなたの唾液を沢山飲<sup>つば</sup>んでしまった」

「知りません」

「同じことですよ」

お茶をもう一杯、と彼女にいった。

「失礼しました。気がつきませんで」

「こちらこそ、ちゃっかりあがりこんでしまつて。すぐ帰ります」

女一人の部屋を見た。女くさかった。男の匂いはない。

生活の匂いもない。はなやかな色どりの洋掛けがベッドにまばゆい。昨夜寝た気配が感じられないベッドであった。

「御自分では、食事の仕度はなさらないのですか」



遠まわしにさぐりをいれた。

「外食が多いものですから」

この部屋は、時たまに利用する、特別の部屋なのかもしれない。どうも彼女がよくわからない。

玉露であった。小さな茶碗は、豊満な彼女の手にかくれた。

「おいしいものでしょうか」

「けっこうな御福かげんです」

「いえ、あのう……」

「ああ Urine」

「はい」

彼女は真面目である。人柄だろう。

「おいしいですよ、とても」

「そうでしょうか」

「趣味には個人差がありますから、おすめはできませんけど」

「わかりませんわ。とても」

のんびりした会話。腹の虫が鳴った。

「食事にいきましようか」

「お化粧をしていますんから」

外に出たくない、という。彼女の化粧は長いのに違いない。それまで、とうてい腹がもたない。

「出前は」

「まずくて」

さて、弱った。

「何か、ありませんか。腹がへった」  
そろそろ地金がでた。

「フランスパンとコンビーフならありますけど」

「それでけっこう。少し、下さい」

図う図うしい。

綺麗な箸に、ステッキのような長いフランスパンを切って並べ、別の大皿に、コンビーフとピクルスを美しく盛ってくれた。

「お紅茶にブランデーをおいれますか」

サントリーの V S O P とは有難い。

そうして下さいと、パンをほうばりながら口の中でごちゃごちゃいった。

彼女はたべない。

ふと立ち上り、トイレに入った。カギをかけた。室内にトイレがある。

「カギをかけなくても、侵入はしませんよ」  
意味がわからなかったらしい。紅茶のカップから顔をあげた。

「あなたのを飲むときは、そういいます」

「あら」

わかったらしい。

「よろしいでしょうか」

「いやです」

きっぱり拒絶された。  
ソワサントヌッフをした仲なのになあ。だめかしら。

つりの道具があり、彼女の趣味の一つと知れた。彼といくのかな。

「鮎並（あいなめ）、知っていますか」

「ええ」

「照り焼きにするとおいしい」

「塩焼きのほうが好きですわ」

「二人の間は、鮎並の仲なのですよ」

「――」

「それでも、飲ませていただけませんか」

「知りません」

「ねえ」

「だめです」

「どうしても？」

「……………」

再び、きっぱり拒絶された。

関係を持つ前に飲んだほうが、飲み易い、と思うのだが、どうでしょうか、先輩。



はなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへびはなとへび

## 連載小説

はな

と

へび

団 鬼 六

### 続篇（第四十一回）

## 珍 芸

強烈な、そして官能的な刺戟に、美しいシヨ一のスターをぎっしりと取囲む男達は、完全に酔い痺れたようである。

十人あまりのやくざ達が、次から次と交代しながら、前後より面白がって押しつけてくる果物を、静子夫人はその美しい柔軟な白い肢態をくねらせ、優雅にくびれた綺麗な曲線を描く腰を悩ましげに揺すりながら一つ一つ切って落すのであった。

美しい富士額や肩から乳房に至るまで、ねっとりとした脂汗を浮かべながらも、甘美なすす

り泣きをおり混ぜて、「ねえ」とか「ああ」とか鼻を鳴らしつつ、うっとりとした眼を閉ざしたり、耐えられなくなったように首を急に振ったりしながら、ようやく、十本の果物を処理してしまった静子夫人に対し、見物人達はふっと熱い吐息を洩らして、一せいに拍手し始めた。

ようやく、仕事を終え、張りつめていた力が砕け散ったように、がっくり首を落とし、さも羞しげにシクシクすすり泣く、そうした静子夫人の姿は、見物人達の心を切ないばかりにうずかせ、と同時に、もっと、この美女を汚し、泣きわめかせたい、といったような変質的な闘魂がわき出し、更に夢中になり出

すのだ。

美女が汚辱に泣き、羞恥にのたうてば、彼等にしても、火に油が注がれたような気分がむしように煽られていくようだ。

「畜生、いい——してやがんな」

と、遊びを終えた男達は、その場より立ち去り難く、なおも未練げに夫人の周囲に寄りたかって、腰をかがめて、喰い入るように眺めたり、指で突いたり、さすったりするのだったが、夫人は、美しい顔を横へそらせ、眼を固く閉ざしたまま、男達のするがままに身を任せている。苦痛と快感を同時に走らせたよう切なげに眉を曇らせている静子夫人を横から眺めていた鬼源は、一つ咳ばらいすると



「一寸、交代して頂きやしょうか」

と、夫人の周囲に寄りたかっているやくざ達を押しよけるようにした。

「さ、次は、御婦人方のお相手をしてみな」

男達を一通り楽しませたあと、岩崎親分の妾二人の機嫌をとれ、と静子夫人は鬼源に幾度も念を押されている。しかし、生も死も、こうした汚辱の中に投じこみ、狼共の自由に任せてしまっている静子夫人も、自分と同年配位の同性二人を前にしては、さすがに狼狽の色を示した。さも悲しげに、夫人は唇を噛み、さっと顔を横へそらせたのである。

「よ、何をモタモタしてやがんだ」

鬼源は鋭い声を出し、静子夫人の顎に手をかけ、ぐいと持ち上げると、岩崎の妾である葉子と和枝の方へ、夫人の顔を向けさせた。

何時の間にか、この場の雰囲気にもなれ、何か低い声を出してペチャペチャしゃべり合っていて笑い合い、酒を飲み合っている二人の妾の方へ、静子夫人は悲しげな視線を向ける。今にもハラハラ涙をこぼしそうな美しい二つの瞳を向けていた夫人は、やっと決心したように小さく唇を開くのだった。

「——奥様、およろしければ、お遊びになつて下さいまし」

そう眼の前の美しいスターに誘いをかけられた和枝と葉子は、「まあ」と呆れた顔つきになって、顔を見合わせた。

鬼源は得意そうに鼻をピクピク動かして、岩崎の顔と二人の妾の顔を見る。

「たまにや御婦人方も男達になったつもりでお遊びになっちゃ如何です。今夜の恥は、かきすてって事にしようじゃありませんか」  
そう鬼源がいうと、岩崎も面白そうにうなずいて云った。

「そや。酒の余興として面白い。お前達、一寸、その美人にからみついて遊んでみる」  
和枝と葉子は、二人とも仲良く、いい機嫌に酔っぱらっていたが、岩崎にそう云われると、何か挑戦的に、フンといった顔つきになって、

「そんなにいうなら遊んでみるわ。面白そうじゃない」

と、酒に足と腰をとられている二人は助け合うようにしながら、ふらふら立ち上った。よう待ってました、と場内から拍手と哄笑がわき起る。

実際に二人の女が立ち上ったのを見ると、静子夫人は、ひどく狼狽したように、さっと顔をそむけ、それを見た千代は、せせら笑っ

て川田に差し出される銚子の酒を盃で受けている。

静子夫人が今度は岩崎の妾二人、つまり、外部から来た同性の二人のなぶりものになると思うと千代は痛快な気分であつた。酒がうまくなってきたのだ。

「しっかりお相手するのよ、奥様」  
と、千代は夫人の美しい横顔に向つて黄色い声を張りあげ、ざまを見ろといった表情になった。

「さ、静子、次は御婦人方がお遊びになる番だ。そんなにすましこんでいちゃ愛想がないとお客に叱られるぜ」

鬼源は、わあわあど囃し立てる男達と一緒に笑ひながら、夫人の背後に近寄つてそう云った。

何か自分達も余興を演じるような調子で、照れ臭そうに笑いながら、静子夫人の傍へ立った和枝と葉子は、鬼源の手から二本の果物を渡されたが「こんなの、つまらないわ」とそれを鬼源に突っ返したのである。

「果物遊びは、お嫌ですか」

と、鬼源が眼をパチパチさせて云うと「生たまごを二、三個持つて来てよ」と葉子が云った。



葉子も和枝も、こういう怪しげなショーを演じる場所へは男友達なんか連れられて、これまで何度も出入りしたので、こうしたスターの演じる珍芸の種類も知っている。

別段、大して照れもせず、そんな事をいい出した二人の妾に対し、鬼源は、

「いやはや、これはお見それ申しました」

とおどけて見せ、うしろの方で突ったっている悦子に、

「おい、生たまごを二、三個、台所へ行って持って来な」

悦子は、静子夫人が次から次と、野卑な男や女の手でなぶりものにされているのを気が気ではないといった顔色で、先程から遠目に見ていたのであった。

「何をぐずついてやがる。早く持って来るんだ。なるだけ大きいめのやつをな」

鬼源に叱咤され、悦子が部屋から出て行くと、鬼源は舌打ちして、

「あの女、全く近頃変だぜ。ショーのスターに何だかんだと下らねえ氣を使いやがる。静子夫人に惚れちまいやがったのかな」

と、川田の方を見て、ニヤリと笑うのだった。

和枝と葉子は、紫のしごきで緊縛され一本

のロープにつながれて立つ、静子夫人の伸びのある見事な肉体の左右に立ち、不思議そうに小首をかしげるのだった。

「どうしても信じられないわ。あんたのような美人がこんな実演をするスターだなんて」そして、和枝は鬼源の方を見て、

「今、静子夫人だなんて云ったけど、この女人妻なの」

と云ったので、鬼源は、いささかうろたえ気味になって、無理に笑顔を作るのだった。

「奥様方、ま、この女の身元の事は、そう根掘り葉掘り聞かねえで下さい。へへへ、実演スターが、こんな風な美人だって、別に不思議じゃないじゃありませんか」

「そりゃそうだけど、こんな美人がねえ」それでもやっぱり信じられぬといった風に和枝は再びしげしげと、静子夫人の抒情的なまでに白い優雅な横顔に見入るのだった。

何か犯し難い高貴さを静子夫人の容姿に感じてしまったような二人の妾に対し、鬼源は

「とにかくこうしたショウのスターになんたくて、俺達の所へやって来た女なんですよ。普通と違って、これだけの美人ですからね。

どうしても五百万ばかりの金が必要だというので田代社長がポンと出してこの女にやり、

こういうショーに出演させているんですが、ま、かなり資本はかかったけれど、それだけの価値は充分ありますね」

などと出鱈目の話を得意そうに話し出し、消え入るように顔を下げている静子夫人の頬を指で突いた鬼源は、

「な、そうだな、別嬪さん」

と、念を押すように云うのだった。

静子夫人は、そっと眼を開き、美しくうろんだ瞳を鬼源に向け、小さくうなずくのだった。そして、左右に立って全身をじろじろと見つめている和枝と葉子に向って、

「こういう実演のスターにして下さるよう、私の口から、森田組の皆様にお願ひしたのですわ。どうぞ、お好きなように静子をなぶって下さいまし」

小さいがはっきりした声で夫人がそう云った時、悦子が生たまごを二つ入れた箆を持ってやって来る。

「なんだ。けちりやがって。もっと沢山持って来ねえか」

と鬼源が叱ったが、

「いいわよ。二つで結構」

と、和枝はその箆を受け取って、葉子と顔を見合わせ、くすぐったそうに笑った。



「静子夫人のものの悲しげにうるんだ瞳が、悦子の眼と触れ合う。夫人は、線の綺麗な端正な頬を上気させて、悦子から羞しげに視線をそらせた。」

「一体、そいつで何をするんだ」

と、岩崎が盃を重ねながら、面白そうに二人の妾に云う。

「そら、以前、親分と一緒に浅草で見たじゃありませんか」

「ああ、コケコッコか」

岩崎は腹を揺すって笑い出した。

美女にたまごを生ませる遊びを、この二人の悪女は企画したのである。

その珍芸を、脂汗を流してのたうちながら夫人は一、二度鬼源の調教を受けた事があったが、気が遠くなる程の屈辱的な芸当であった。鶏の鳴真似をしながら、たまごを生み落すのである。

二人の妾の考えついた遊びに対し、周囲を埋め尽している男達は、わっと喚声をあげて喜び出す。

「いいわね。じゃ、お腹へ入れるわよ」

葉子が手にしたたまごを夫人の鼻先へ近づけて、一応、実演スターの了解を求めようとする。

静子夫人は、これから二人の同性のいたぶりを受けるという、恐しさと口惜しさを必死にこらえながら、「ハ、ハイ」と、うなずいて見せた。

「じゃあ、旅の恥はかき捨てといきましょう。さ、葉子さんからお先へどうぞ」

と和枝がクスクス笑いながら、葉子の肩を突く。

任しといて、と葉子が静子夫人の足元に身をかがめた。

「ああ、嫌、嫌っ」

それが触れると、静子夫人は、心をそり立てる程に優美な線を描く太腿と官能味を持った腰をもじもじ動かせ始める。見物人達の官能をうずかせるためのポーズかも知れなかったが、たしかに男達は煽られ出し、また、急にゲラゲラ笑い出したりした。

ひどい近視である葉子が夫人に……こませようとしているため、事がうまく運ばないのである。

静子夫人は、さも切なげに眉を寄せ、もどかしげに腰を揺すり、

「うん、そ、そこじゃないわ。いや、いや、ああ、じらさないで——」

熱い吐息を混えて、すすり泣きつつ夫人は

悶え抜いている。

そんな風に外部から来た同性にいたぶられ羞恥と苦悩にのたうち廻る静子夫人を見て、千代と川田はたまらなくなったように笑いこける。自分達にとっては、昔、一尺先へも近寄る事の出来なかったような気高さを持った御主人様であり、美貌と教養を持って上流社会に君臨した遠山財閥の令夫人が、今、満座の中で野卑なやくざ親分の妾にいたぶられ、その位置を教えようとして泣きじゃくっているのだ。

「まだうまくいかないの。しっかりしなさいよ」

和枝が、いやらしく口を歪めて笑いながら汗を流して仕事にかかっている葉子の背を叩き、自分も葉子と並んで手伝い始める。

「待って」

懊悩し、のたうっていた静子夫人は、二人のがむしゃらな行為を一旦、停止させ、白い脂肪のしぶきで輝やくように光る優美な太腿を大きく……して、何とかそれを……よくと自分も必死に努力するのだった。

「どうやら今度はうまくいきそうよ」

深い暗い沼の底に引きずりこまれて行くよう、それは二人の女の手で徐々に沈められて



いく。

「ああ。うう——」

静子夫人は、心もとろけるような甘いうめきをくり返しつつ、ゆるやかに豊満な腰をくねらせながら……げ始めた。

そして、ようやく自分のものになると、火のような熱い吐息をつきながら、ゆっくりと腿を閉じ合わせ

「静子の、静子のものになったわ」

と、あえぐように云った。

「駄目駄目。まだ少し、白い頭がのぞいているわよ」

千代が両手に口を当てて、美しい元の主人に向かい、すっかり腹の中へ入れるように命令する。

再び、和枝と葉子が手を差し伸べ、完全にそれを夫人の腹中に埋めてしまうと、周囲の見物人達から拍手がまき起った。

影も形も残さず、それは信じられない位あざやかに姿を消してしまったのである。

「こんな奥行のある美しい女とたっぷり楽しみ合ってみてえもんだ」

と、呆然として眼をこらしながら、見物する男達は云う。

きらめくように美しい全身に、べっとり脂

汗を浮かべ、云いようなない悲しげな表情で虚脱したように、うるんだ瞳をじっと前方に向いている静子夫人。

「まあ、実に見事に呑みこんじゃったわ」

二人の悪女が、急に吹き出し、笑いこけると、もう一人の悪女、千代が、もうどうにもじっとしていられなくなったのか、フラフラと立ち上り出した。

今にも大粒の涙がどつとあふれ出そうな、ひきつった表情を見せている静子夫人の、紫のしごきで緊縛されている豊かな美しい乳房を、千代は指ではじき、和枝と葉子に向かって云う。

「ね、この女、虫も殺さぬおとなしい顔をしているのに相当なものでしょう。こういう浅ましい芸当をお客様に見て頂くのが楽しくて仕様がないうですってさ。生まれつきの素質なんですよ」

すると、鬼源が、ニヤニヤしながら、

「そろそろ、この雌鳥めんどりにたまごを生ましてみちゃどうです」

と声をかける。

そうね、と和枝と葉子が二人して箆を持ち丁度、その下あたりに持ち添えるのだった。

「さ、雌鳥めんどりらしく、上手に鳴きながら、たま

ごを生み落すんだよ」

千代が、静子夫人の透き通るように白い、美しい横顔を睨むように見すえながら命令した。

「早く鳴かねえか」

鬼源もだみだみ声をはり上げる。

静子夫人は、戦慄めいた屈辱感に一瞬、緊縛された美しい裸身を慄わせたが、見物の男達からもわいわい揶揄され、遂に、唇をわなわな慄わせながら開いたのである。

「コ、コ、コケッココ」

どつと哄笑がわき上る。

「よ、よ、早く生まねえか」

やくざ達は調子に乗って、がなり立てるのだった。

「コ、コ、コケッココ」

静子夫人は、白い頬をいつしか真っ赤に染めて、もどかしげに腰をくねくね揺らし始める。白いものが小さく頭をのぞかせ、次第にそれは大きくなって、遂にポトリと箆の中へ——。

再び、見物人のどよめきが起り、つづいて一せいに拍手が起った。

息の根も止るような屈辱感と同時に夫人の全身に心地よい痺れのようなものが奇妙にも



じわじわとこみ上って来る。

もっと、もっと、静子をいじめて笑いまくるがいいわ、と静子夫人はやくざ達の喝采と悪女達の哄笑に挑戦するかのよう、破れかぶれになり出した。

男達の拍手が鳴り止まぬうち、再び、和枝と葉子の手で第二弾が押しこまれる。

積極的に腰をくねらせ、それを受入れようと努力する静子夫人。それを見て、快心の微笑を口元に浮かべる鬼源と千代。

「今度はそれを、お腹の中で割ってごらん」  
葉子が全身を火のように燃えたたせてしまっている静子夫人に、クスクス笑いながら命令した。

静子夫人は、その繊細な頬の線に、さっと上気の色を見せたが、薄く眼を閉ざしたままかすかにうなずき、見物人達の心をそそり立てるような官能味を湛えた豊かなヒップをくねらせ努力し始める。

美女のたまご割りダンス、などと誰かが云って大笑い。しかそれは、野卑なやくざ連中にとつては、すばらしい酒の肴であった。

こうこうと輝く部屋の灯明りをはね返すように艶々とした夫人のミルク色の肌はきらめき、腰を揺する毎、ブルブル慄える豊満な乳

房、ふっくらとしたなめらかな白い腹部も激しく息ずき、緊め上げるように収縮する優美でたくましい太腿。静子夫人はますます上気し始め、全身、脂汗にまみれて、上ずった声を出し始めた。

「——ああ、口、口惜しいわ。割れない。割れないんですっ」

優雅で、しかも狂おしいばかりの涕泣を夫人は口から発しながら、さも、もどかしげにブルブル左右へ激しく腰をひねったりした。「そんな事でどうするんだ。しっかりやれ」と見物人達は、どっと笑い立て、弥次り出した。

「仕様がねえな。そんな事が出来ねえようじや、俺の面目、丸潰れじゃねえか」

鬼源は、舌打ちして、静子夫人に近づく。すると、川田も近づいて来て、鬼源に云った。

「これじゃ、おさまりがつかねえぜ。かわりに客達の手で浣腸責めにでもさせてみるか」  
わざと静子夫人に聞こえるように川田は楽しげに、そんな事を云ったのだが、

「嫌っ、お願い、も、もう少し、待って、待って頂戴！」

静子夫人は、ひどく狼狽して、ハアハアと

熱い息を吐きながら云い、再び、汗みどろの全身を必死に悶えさせるのである。

夫人の最も恐れ、忌み嫌う浣腸責めを持ち出し、夫人にハッパをかけた川田は、なおも意地悪く、必死に戦う夫人の前に洗面器や浣腸器を並べ、夫人の眼に示そうとするのである。

「——ああ、川田さん。待って、待って下さい」

夫人はたまらなくなったよう激しく首を振り、一層、身悶えをばげしくするのだったがそれにつれて、激しい涕泣をくり返すのだ。「それ程、努力しても出来ねえものは仕方がねえ。さ、浣腸責めに切換えようぜ」

川田と鬼源が、夫人のふくよかな肩に左右から手をかけた時、奇妙な音がし、夫人が待ちに待っていた事が起ったのだ。

その瞬間、あっと夫人は小さく声をあげ、優美な太腿をピタと閉じ合わせ、身動きを止めた。

「割、割ったわ」

夫人はそういうと、がっくり首を前に落し薄絹を撫でるような甘美で繊細なすすり泣きを始める。

「ほんとなんだな。え、奥さん」



元、運転手であった川田は、かつての女主角の美しい優雅な身体の線を手でさすりながら云った。

消え入るように小さくうなだれて、身をすくませる静子夫人を見た川田と鬼源は、満ち足りてうなずいて、洗面器を取り上げ、ぴたりと当てがった。

「じゃ、皆様に証拠をお見せするんだ」

美女のそれに対する鬼源達の徹底したいたづらを見て、さすがのやくざ達も異様な息苦しさを感じ出すのである。

静子夫人は、次々と吐き出しながら、すーと気が遠くなっていった。

## 俎の上

珍芸を披露すると同時に、失心してしまった静子夫人は、何もかも、まるで命まで下げてしまったかのように、開かされようが片肢を持ち上げられようが身じろぎもせず、川田や千代達の後始末を受けている。

「何もかもこちら任せで楽なものね」と千代は笑い、ピシヤリと夫人の尻をたたいた。

ふと、静子夫人は正気づき、空虚な眼を見

開いて、周囲を見廻した。

卑劣な男達の好色に光る貪るような眼、悪女達の好奇にギラつく瞳などが依然として周囲を埋め尽くしている。

「途中で気を失うなんて、だらしがねえぞ。しっかりしろい」

と鬼源のガラガラ声が横から響いた。

足元に散らばっていた果物の皮、たまごの殻などとは何時の間にかきれいに後片づけされていたが、今、眼の前では、川田と捨太郎が大きなマットレスを敷き、次のショーの支度にかかっている。

——いよいよ、これから捨太郎と——そう思うと静子夫人は、今まで言語に絶するいたづらを受けた身ではあるが、毛穴から血が吹き出そうなる思いになり、今更、動揺はすまいと思っても、膝頭はガタガタ慄えるのだ。

そんな静子夫人の額に浮かんだ汗や乳房にじんだ汗などを、千代はハンカチで拭きながら、夫人の耳元に口を寄せ、楽しそうに云った。

「ホホホ、奥様。泣いても笑っても、とうとう今から捨太郎と結ばれる事になったわね。ここですっかり夫婦の契りを結んだら、明日は捨太郎と奥様のために盛大なお祝いパーティー

を開いてあげますわ」

千代は、ほくほくした顔つきで、静子夫人の乱れた頭髮を櫛ですき上げる。

「そら、何時までも口をつぐんでいちゃ駄目じゃないか。岩崎親分に、今の芸の御批評など聞いてみる」

固く口をつぐみ、端正な美しい頬を横にそむけている静子夫人が気に入らないのか、鬼源は口をとがらせるようにして云った。

「——はい」

と、夫人は二重瞼の美しい瞳をそっと開き、すすり上げるようにうなずくと、濡れ濡れとした瞳を正面に坐っている岩崎の方へ向けたのである。

岩崎は、テカテカ光る額をしきりに手でさすりながら、酒を飲み、好色にギラついた視線を夫人に向けている。

「——岩崎様、静子の只今の芸は、お気に召しましたでしょうか」

悲しげな影の射す濡れた瞳を岩崎の視線と合わせて夫人はそう云うと

「ああ気に入った。バナナもたまごも気に入ったが、わいが一番気に入ったのは、お前が一寸やそっとじゃお眼にかかれん美人ということこっちゃ。生弁天のお姿を拝見しながら、こ



うして酒を飲むだけでも結構。あんまり体に  
こたえるような芸当はせんでもかめへん」  
と、ちよっぴり寛容を示すと、鬼源があわ

### 総天然色美女緊縛極鮮明写真

柱縛り強烈ムチ打ち	三枚	略号△みあ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みこ▽
臀部に炸裂するムチ	三枚	略号△みけ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みて▽
ムチにのけぞる女体	三枚	略号△みひ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みひ▽
苦悶する女の表情	三枚	略号△みひ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みひ▽
鞭に泣く美貌の女	三枚	略号△みひ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みひ▽
転がり回って泣く女	三枚	略号△みひ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みひ▽
鞭に喘ぐ全身の表情	三枚	略号△みひ▽
関谷富佐子	三枚	略号△みひ▽
高手小手の全裸身	三枚	略号△みひ▽
中河 恵子	三枚	略号△みひ▽
豆絞りに輝く美貌	三枚	略号△みひ▽
中河 恵子	三枚	略号△みひ▽
赤い絨氈に悶える	三枚	略号△みひ▽
中河 恵子	三枚	略号△みひ▽
豊満な臀部を晒す	三枚	略号△みひ▽
中河 恵子	三枚	略号△みひ▽
美しき緊縛の立像	三枚	略号△みひ▽
左近麻里子	三枚	略号△みひ▽
転落寸前の緊縛女体	三枚	略号△みひ▽
左近麻里子	三枚	略号△みひ▽
椅子に羞らう美女	三枚	略号△みひ▽
左近麻里子	三枚	略号△みひ▽

てて、

「そりゃいけませんよ親分。この女は、どう  
しても岩崎親分に色々な芸をお見せしたいと

緊縛裸身を横たえる	三枚	略号△なえ▽
左近麻里子	三枚	略号△なえ▽
湖畔砂上の四つ相撲	六枚	略号△うに▽
大塚・東浦	六枚	略号△うに▽
大自然の中で取組む	六枚	略号△うに▽
大塚・東浦	六枚	略号△うに▽
吊りと投げの応酬	六枚	略号△うに▽
大塚・東浦	六枚	略号△うに▽
砂まみれの大相撲	六枚	略号△うに▽
大塚・東浦	六枚	略号△うに▽
極彩色の刺青女体	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
華麗な刺青絵模様	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
全裸の刺青女体	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
刺青女体の奔放姿態	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
三面鏡に映す刺青肌	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
化粧中の全裸刺青女	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
刺青の豊臀をさらす	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
大鏡に写す刺青全裸	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
刺青女性前面の魅力	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽
刺青女性の全貌を曝く	三枚	略号△ゆき▽
山原 清子	三枚	略号△ゆき▽

今日の日を楽しみにしていたんですからね。

ま、どんなものが飛び出すか、今夜は明方ま  
で、ごゆっくり見物してやって下さい」

「うん。そんなら、こっちも胆をすえて、と  
っくり拝見させてもらいまひよか」

岩崎は泥えびすのような顔になっとうなず  
くと、コップの中になみなみと酒を注ぎ

「今の珍芸を見せて貰ったお礼に、この酒を  
飲ませてやってくれ。たしかその別嬪さん、

いける口やと思うが」

へい、とそのコップ酒を川田が受け取り、  
「そら、岩崎親分のお流れだ。有難く頂戴し

な」

と、夫人の口元へもっていく。

見物人の誰かが、別の口で飲ましてみる、  
などとふざけて叫んだので爆笑が起った。

「成程、そいつも一興だ」

と、川田は笑いながら見物人達の弥次を受  
取り、夫人の足元に身をかがませると、そっ

と、コップ酒を当てがった。

「さ、お客人の云いつけだ。景気よく飲んで  
みな」

和枝も葉子も千代も、ぷっと吹き出して、  
口元を手で押さえた。

そうした川田の陰湿なからかいに、静子夫



人は、初々しい羞恥を見せて、わざとらしく反応を示す。鬼源に教育された、こうした場合におけるスターのお色気というやつであるう。

「嫌、嫌、そんな事出来ないわ。ねえ、勘忍して——」

鼻を鳴らし、もじもじ尻をゆすって、見物人達を楽しませようと夫人は振舞っているようであった。

「ストローでチューチューと吸ってみるか」

「ひ、ひどい。お願い、もういじめないで」

静子夫人が川田のからかいに呼応して、見物人達をわくわくさせているのに気を良くした鬼源が云う。

「ハハハ、さすがの俺も、そんな酒を飲ますって事だけは仕込めねえよ」

見物人の一人が立ち上り、一本のストローを川田に渡したので、場内にまた笑いがまき起った。

川田が客に受ける事を狙い、それをコップ酒の中に突っこむと、その先端をわざとつなぎ始める。見物人達は大喜びだ。

「さ、吸ってみな」

「そ、そんな——ああ、嫌っ、嫌よ」

静子夫人は息苦しいばかりに官能的な腰を

くねらせ、舌足らずの悲鳴をあげつつ羞恥に悶え、周囲をぎっしり埋めた観客を楽しませるのだった。

「何してやがる。早く吸い上げねえか」

川田の横へ鬼源も腰をかがめ、夫人の量感のある見事な尻を平手打したり、揺さぶったりして、笠にかかったように夫人を泣かせつづけるのだ。

「——許して、ああ、そんな事、出、出来る筈がないわ」

遂に夫人は、堪え切れなくなったよう顔をねじ曲げるようにして号泣し始めた。

「仕様がねえな。じゃ、こいつが出来なかったお仕置は、捨太郎と床入りがすんでからゆっくり考える事にしようぜ」

と、鬼源と川田は、ようやくストローを捨てて、立ち上った。

これからマットの上で醜惡な捨太郎とからみ合い、明方まで男達の酒の肴にならねばならぬ静子夫人であるのに、鬼源達は一種の前置芝居でも演じさせるかのような男客女客を使つて、徹底的ないたぶりを夫人の身に加えるのであった。

「じゃ、上の方で飲ませてやる。有難く頂戴しな」

川田にコップ酒を唇に押しつけられると静子夫人は、ほっと救われたよう眼を閉じ合わせ、強引に注ぎこまれる日本酒をゴクゴク喉を鳴らして飲み始めた。

夫人の紅唇から、したたり落ちる酒の滴が暖かそうな白い首筋を伝わって、紫のしごきに緊め上げられた豊満な乳房のあたりにまで流れていく。

「ほう。いい飲みっぷりだ」

見物人達は、一杯のコップ酒をすっかり飲み乾して、ふっと熱い息を吐いた静子夫人を頼もしげにニヤニヤして見守っているのだ。

美しい静子夫人の容貌が酒の力で忽ち桜色に染まり出した。

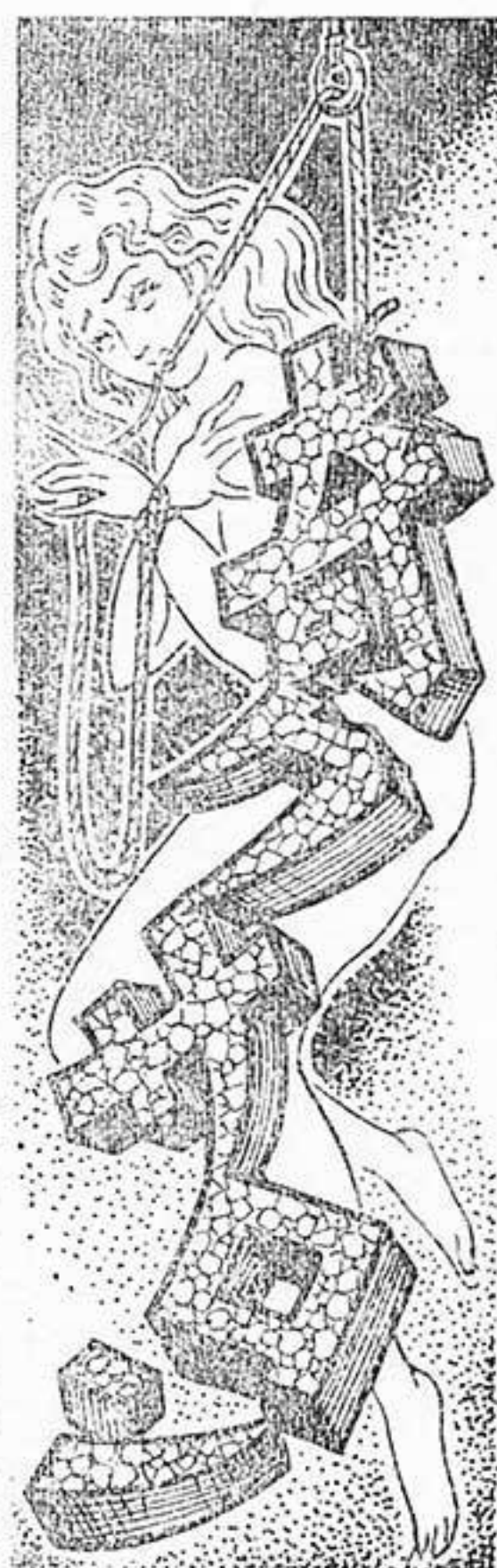
「素っ裸の別嬪さんにとっちゃ酒は寒さしのごに何よりの妙薬だ。さ、いい色になった所で堂々とおっ始めて貰おうか」

鬼源は、そう云って、静子夫人のしごきの縄尻をロープから切り離した。

「さ、皆さん。この女をそのマットの上に乗せ上げるんです。手伝って下せえ」

鬼源がそう云うと、よしきた、とばかりに何人かのやくざ連が立ち上り、わらわらと近寄って来た。





## 生の迫力に痺れて

遠藤百合子

映画『日本拷問刑罰史』のあの凄惨な責地獄。例えば棒で打たれる女。逆エビに呻き、脂汗を流して苦痛に耐える女、蛇責め、又は木馬責めや石抱きの拷問にさいなまれ血を吐く囚われの女。その他吊責め、胴絞め、そして極刑の数々や拷問の最高峰駿河責めまでのあの壮絶な責め場面を見たいため映画館に三度も通った私でした。

それでも一週間も経つと、女囚の表情は、どんな様子だったのかしらと、忘れてしまうことが多いのでした。私は血の噴き出す殺戮を伴う責めや刑罰は好みません。磔や鋸引きの刑には、美しさ、Vよりもむしろ、人恐怖しさ、Vや人いやらしさ、Vの方が先に立つのでした。『拷問』という映画では、女スパ

イが捕われて槍の穂先の出た台の上に吊られているときの、あの縛り方は真に迫っていて素晴しかったです。美しい女優さんの肩先を三本の縄でガッチリと締めつけ、真剣そのものの縛り方で、乳房がニュッと張り切って突き出ていました。本当に責められているといった呻く表情は真剣ですさまじい迫力にしばれてしまいました。

でも、これも見ている時だけのもので、さてその場面は、と思いつき見てても漠然としていて、はつきりと掴めないのです。

それにひきかえ、私は本誌にのった、あの秋山夫妻の素晴らしい舞台に感心しました。ポスターで見て鶴見劇場を訪れました。手に汗を握ってローズ秋山の責められる

表情、身の動き、力の限りの演技を見ました。「責め」とはこれだと思いました。終わった時は夢からさめたようにホッと吐息が出て我にかえりました。

後手に縛られ、胸に巻きつけられた、あの冷たい感触のビニールロープが、ローズ秋山の柔肌に喰い込みます。ギュッと力いっぱい締めつけられて、ウウウと息をつめるひととき。続いて素早いロープさばきが胴を細く細く、くびる

ように締めつけます。声も出ません。本誌には声を出さないと書いてありましたが、あれでは出ないのが、あたりまえのように思います。痛みをこらえるのが、やっとで、股間を通して背中までひきしぼられて、力いっぱい高々と吊りあげられた後手のきびしさ。肌に喰い込むビニールロープのむごたらしさ。のけぞり、痛みに身体をふるわせて、口をかすかに開け、吐息をもらして喘ぐローズ秋山の鼻翼が大きくふくらんだり、すぼんだりしています。

真実の責苦の表情とは、このようなものでしょうか。自分が本当に舞台の上で責められているような錯覚を起すほどでした。這いずり逃げようとする片足を背中に力

まかせにつながれ、不自由な姿でもがきまわるのに、銀色に光るムチがローズ秋山の肌をなめるようにまといつきます。床板を打つだけだと思って見ていた私は、最初の一撃が打ちおろされたとき、ビシッとまるで自分の肌を打たれた以上に驚かされて、思わず手が汗ばみました。

肌を打つムチにのけぞり、痛みを身をよじらせるローズ秋山の表情は忘れることが出来ません。片足だけで本当に逃げまどう裸身に打ち下ろされるムチの鋭い音。そして続く擦り責め。見ている私は身体がしびれ、ローズ秋山と同じように体をもだえさせました。やがて最後の見せ場の蠟涙責めがはじまりました。「ギャー」と魂ぎるような恐ろしい悲鳴に、のたうちまわるローズ秋山、その表情は責めの真ずいを味っている恍惚境をさまよっているようでした。

苦悶の中の悦びを知っている幸福な人、小鼻をひくひく動かして苦痛を耐えている表情は本当に素晴らしく、真に迫っています。

ああ誰か、ミスター秋山のような人はいないかしら。私を思いきり責めて責めて、責め抜いて下さる方って、いないかしら。





(第四十六回)

辻 村 隆

東京のK氏の招聘で、ピンク映画の昨年度後半の人気スター、辰巳典子さんをハントする機会に恵まれた。翌日思い掛けなくも、団鬼六氏の好意でこれ又ピンク映画スターで、大活躍の、谷なおみさんをハントすることが出来、二重の喜びで、上京三日間あったという間に経ってしまった。鬼六氏と芳野眉美と三人、六本木の穴ぐらのスナックバーで、午前三時頃までSM談義に口角泡を飛ばし、歯に衣をさせず喋べったのは愉しかった。友あり遠方より来るといっ

た親しみと懐かしさで、各人各様に御親切をうけ、執れ上阪の折恩返しすることと再会を約して別れたが、今年は春から縁起がよさそうである。

私の帰阪を追うように、今度は団鬼六氏が来阪し、編集長が一席もうけて歓談。曾根崎新地の蘆月という紙なべの店、確かテレビでも紹介されていたが、四十一種の野菜と九種の魚介の水だきは酒の味も又一入で、思わず過ぎてしまった。この夜私宅に一泊された鬼六氏と、翌日恰度来阪中の青木順子ショウを覗きにゆき、彼、そのミュージックの特出スターの凄さに一驚する。彼との交友更に厚くなる思いで、お互いに資料、文献など交歓することを約して別れた。

中一日おいて、約束通り、青木順子さん、向一也氏と出会った。恰度奈良のSミュージック公演中であつたが、現在一年間で三カ月の興行をうっているらしく、専ら休養の傍らホンを書いていけるとの事だった。二年前の盆前に、青木順子さんから速達をもらって以来の再会だが、ちっとも変わっていない

い。御兩人共風邪をひいて少し元気なかったが意欲は旺盛である。或いは今回の巡業を最後にして、底辺の劇場から消えるかも知れないと仄めかしていた。名古屋の日劇ミュージックが、最近SM劇専門との事で、その演出構成一切をやっている、深井俊彦氏の招聘でそこへ納まるかも知れないとのことだった。あたらしい派な芸術の持主達である。こゝろで一華咲かせて欲しいものだ。向氏は秋山ショウの噂をきき、わざわざ、大阪の鶴見ミュージックへ観にゆかれたとの事。秋山夫妻を支援して、ますます淡々としておられた。秋山夫妻が、私の書いた第一回のハント青木順子のショウを読んで、この道に入られたことを思うと、転た感慨無量である。お二人の幸福と大成を祈ってお別れしたが、いか又名古屋辺りでお目にかかれるかも知れない。

同好の人に教えられて、文芸春秋の新春特大号を購入。梶山季之氏の『ミスター・エロチスト』三〇〇枚を読む。末尾に奇くや風奇や高橋氏のアブ・ラブを参考にしましたと断書があるが、さながらSMやアブの世界の集大成であ

詩 「哀唱」

あいしょう

菊池 淳子

△浣腸に魅せられた

女のうたえるうた▽

一、白衣のあゆみ おごそかに  
仕置あわれと 告ぐその掌  
百目ローソク ゆらぐ日の  
女恥かし 便秘症

二、検温というひと声に  
はやまた憂き目 日々なれど  
呼び名もつらき アヌスとて  
枷はめらるる 冷たくも

三、当直看護 どなたやら  
灯ともる このゆうべ  
恥らう友へ いたわりの  
言葉かけつつ 刻すすむ

四、朝のお勤め ふたつゆえ  
身もみうくる やわ紙は  
おマル双球 つぎつぎと  
まるめ揉まれぬ か細くも

五、五分の遠さ 身に沁みて  
烙印うけし 昨夜よと  
浣腸日記 うらめしく  
縄目にまさる 効き目かよ



る。あれもこれも盛り込んで、御都合主義のきらいがあるが、流石に面白く読ませる。唯、アブの世界の経糸が光って、産業スパイを扱った緯糸と遊離してしまっている。この種の読物が、堂々と別冊文芸春秋のトップを飾る時代である。S・Mが大衆に如何に滲透し

ていったか、これはその一つの証左でもあろうか。

× × ×

向一也氏と会ったついでに、最初に会ったその日を日記で調べてみたら、昭和三十九年七月廿九日。この時、カメラ・ハントという、フォトを主にした随筆風な読

物を思い立って書き出してから、延々三年半の歳月が流れた。二回許り休載したが、よくぞ続いたもので、はや四十人に近い人を廻上にのせたことになる。あの人、この人の思い出は尽きず、いつか機会あれば、ハントの後日譚なり、懷古談なりを書いてみたい。

## 釣り落した大魚

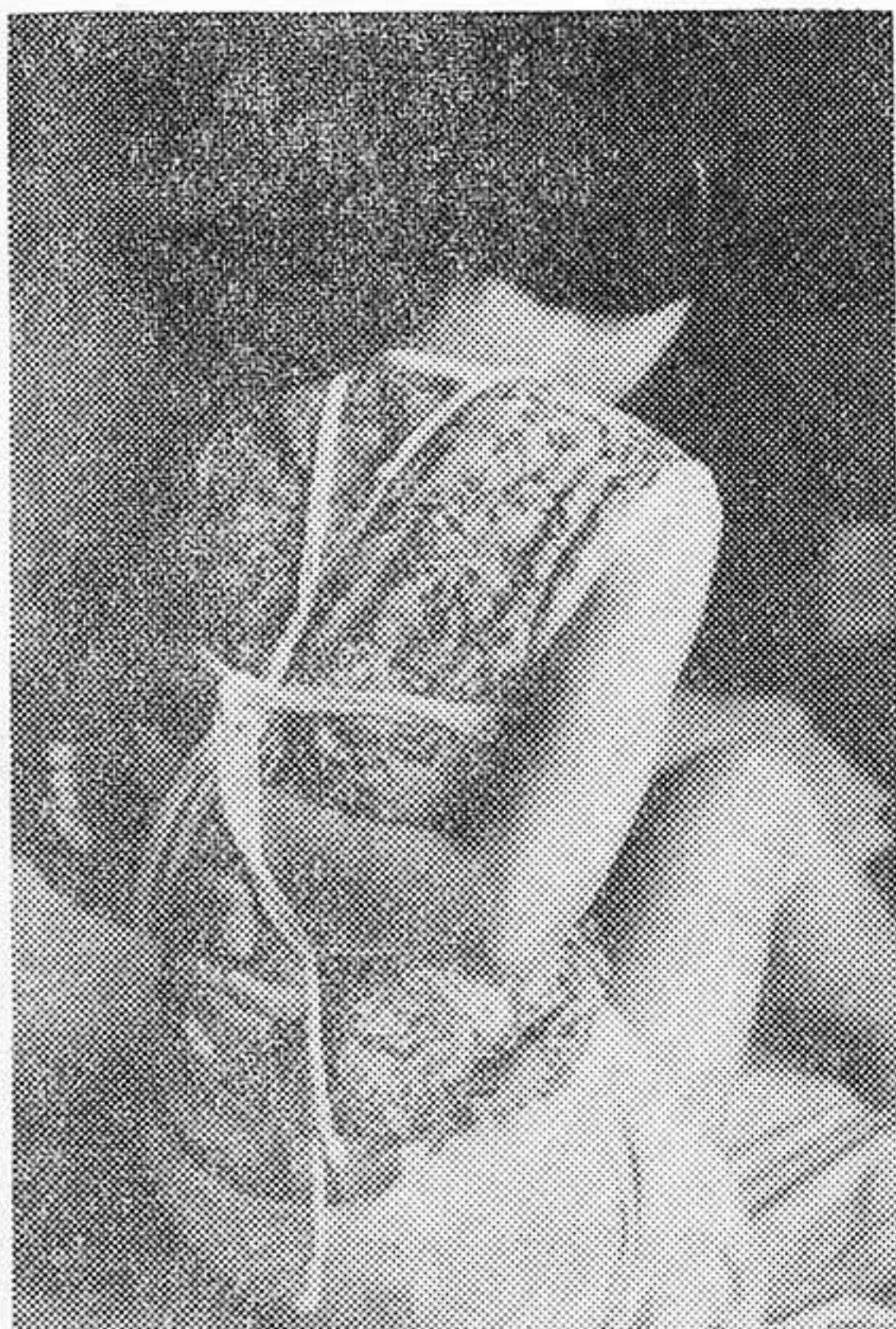
河村 操

別便にて大失敗の顛末（二〇五頁）見逃した菱縄Vについて）を投稿しましたが、私のD・P・E技術もまんざら捨てたものでもないと自負するだけに、返すがえすも残念。まあ一度、この写真をご覧下さい。これはもちろんTVではありません。私のプレイの記録です。

ナニタかTV用映画じゃないか。茶の間用の画面に、それほど入念な縛りが出るワケはない。それに、それほどタイミングよくシャッターを切ったかどうか……なんて、自らを慰めています。

この写真についてどうこうというつもりではなく、この程度なら自分で十分に出来るのです。それを、より良きものを……と大事をとったのが禍いのもととなったのですから、いくら考えても肚がたちます。

いくらボヤいても仕方ないとはわかっていますが、釣り落した魚



六、手術を受ける さだめとか  
黒きゴム管 目にしみて  
踝そろえ 伸ばしつつ  
アヌスにひやり 器具触れぬ

七、その故言われ 恥らいて  
まるめ剃られし はかなさに  
ためらい怯え 指こばみ  
身ゆすりかなし 涼し身や

八、けなげに耐えて 受けし処置  
手厚き看護 護送車に  
あわき身眠く 横たえて  
括らるる胸 いまかなし

九、お尻にムツキ 深かければ  
慈悲とてあらぬ 導尿に  
ささやき笑まる 剃毛の  
隠しもならぬ 白き肌

十、やわきベッドに 仰ぎ臥し  
おマルの世話に 目をつむり  
高鳴る胸を 押さえつつ  
浣腸の果 耐えかねる

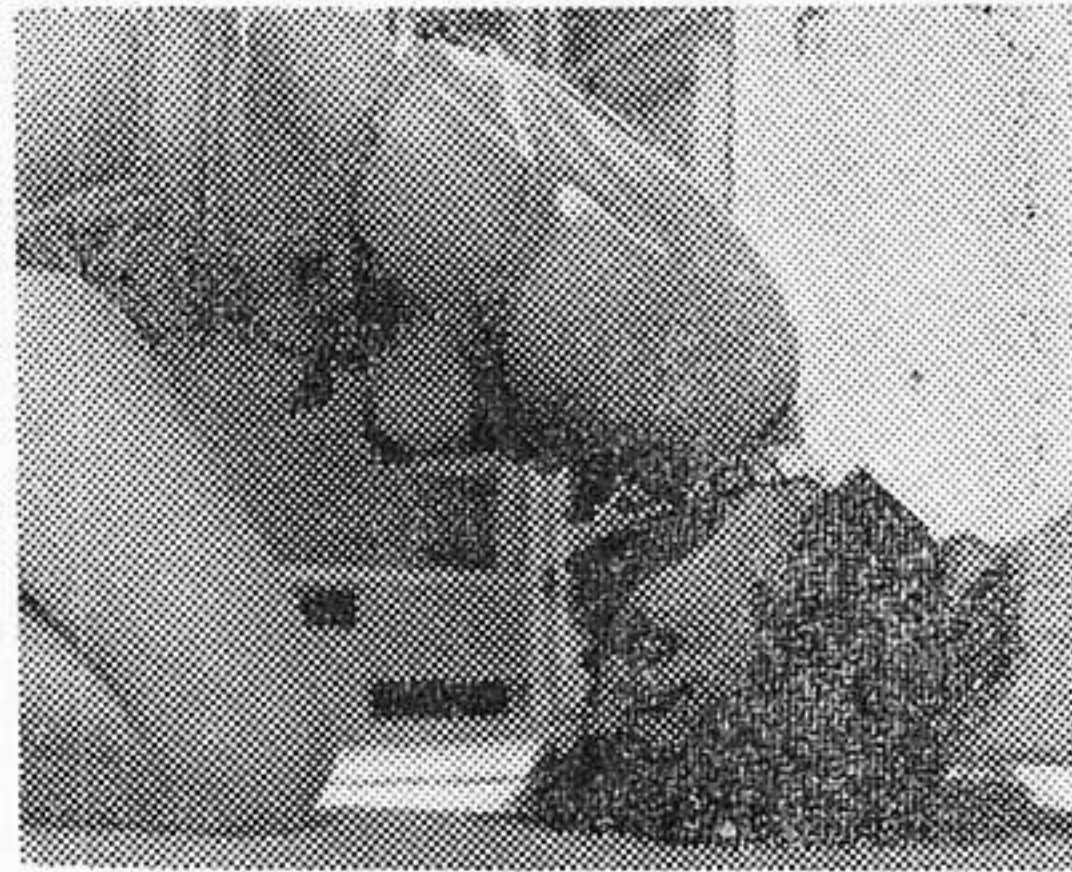
十一、すがる瞳に 思い込め  
洗滌うれし アンネの日  
しばし甘えて 退院の  
日を数えつつ 目を閉じぬ



告白

＜縛り＞の＜洗礼＞を受けて

金原奈加子



テレビや映画を見て空想している方がよいのではないですかとさとされて、参考までにと見せてもらったグラビヤ写真の美しさに、思わずみとれてしまいました。こんな美しい女の方が、こんなに美しいポーズで縛られているというおどろきが私の胸をとどろかせてしまいました。

もう矢もたてもたまらず、なんとしてでも、自分もこのように縛られて写真をとってもらいたいのも三〇円でホラ かわいそうね縄でくびれて、まるで……

近ごろ肥ったな 水ぶくれじゃないかいや

ネ、おしっこ行きたい  
ネ、貧乏って

ねえねえ、白菜がやすいのよ

好きよ

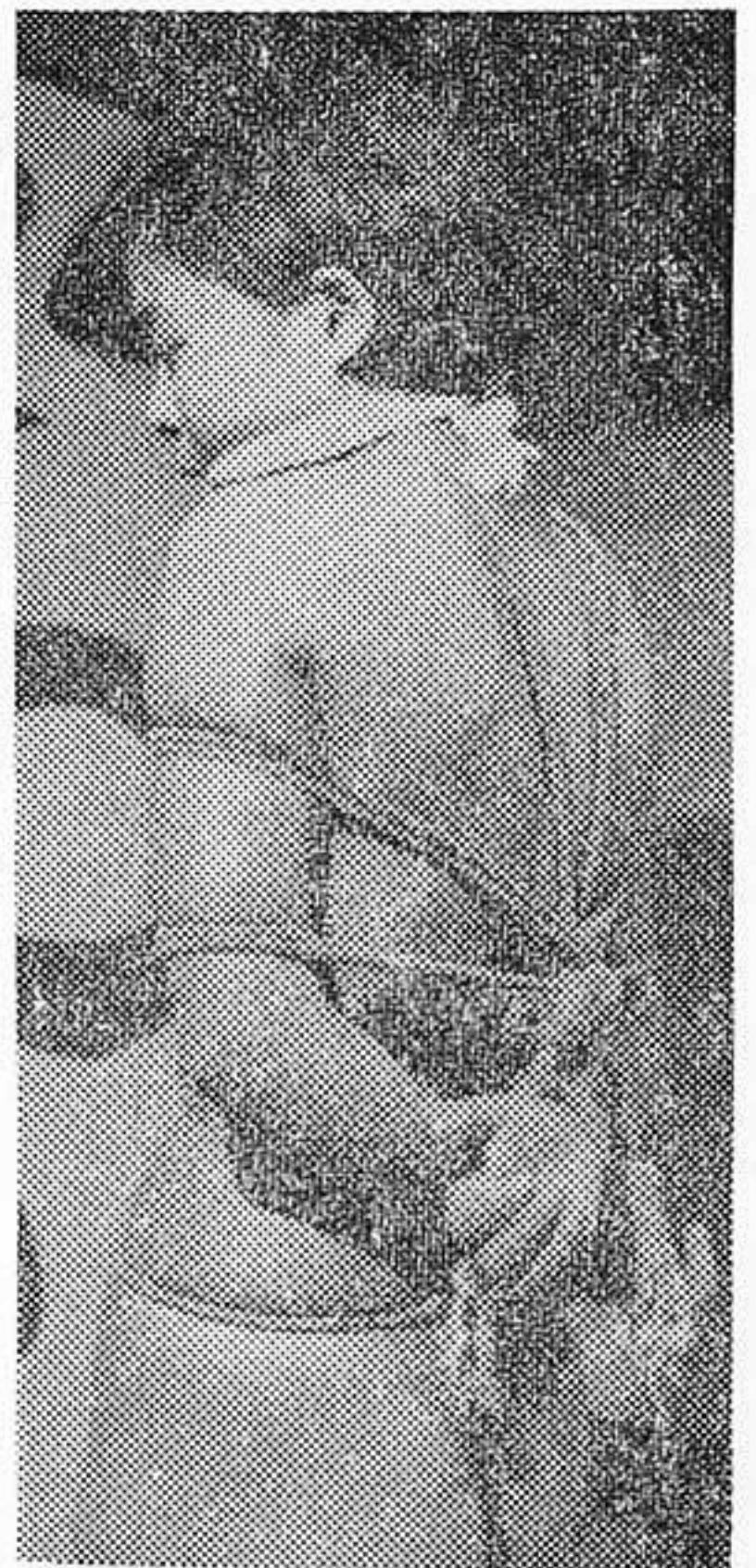
貧

乏

梶 天平

昼、なんだ  
インスタントらあめん

ふん



のだと思うようになりました。それでも一応ことわられてみると、それを押してという勇気もわいてこず、その日は心残りの気持をいだいたまま帰りました。

いざ家へ帰ってみると、自分の口ではよう頼めないことも、手紙でだったら、思いのままに書けるということに気づきました。早速ペンを持って思いのたけを書き綴って送りました。自分でもあの時見せていただいたグラビヤ写真の感激に心が昂ぶって、少しオーバーなぐらいにペンが走ったように思いましたが、一度投函してしまいうと、もうどうしようもありません。それでは、お逢いしましょうと返事をもらってみると、今度は言葉をかわすのがそら恐ろしいよううで、一層無口になってしまいう

でした。

その日は風の寒い日で駅前の広場へ下りたとき、思わず、お寒むと身ぶるいしたのですが、あっと気がついたときには、さつと黒い車が通り魔のように目の前に停ったかと思うと、私を引っさらうように後の座席にのせていました。外の寒さにひきかえ、車内はむっとする春のような暖かさで高速道路から眺める北摂の山々の雪の白さが印象的でした。

誘拐されて暴力団の本拠へつれ込まれる私。という気持で私はうっとり車の振動に身をゆだねていました。初めての縛りにしては緊縛感のあるものがとれた、と言われたときは、ほっとした気持と一緒に、しみじみとした満足感を味わいました。



## 論争を期待する 太田三郎

私は一月号に「奇譚クラブにシヨック受ける」を投書したものですが、それは本誌の今後の方向、特に、論壇について「憎縄の記」

「奇譚クラブを斬る」の、投げた波紋の行方を期待したからです。

前者については、活潑な意見もみえましたが、三月号の「私達の甘い秘密」安井喜久子夫人の告白にあるように、憎より甘に至って論壇も先が見えたように思えるのです。しかし「不発」？と案じられていた後者について三月号に角度は違うが、山上四郎氏「新年

号を読んで」の登場で、その活潑化の兆しを感じました。これは本誌に、よい小説が続々と生れる意味で大変にケッコウなことです。

一般大衆小説（大分、近頃はSM的要素が入ってきた）と、本誌に発表される小説との比較とか、明日のKK向き小説はどうあるべきか——など、話のタネは尽きないようです。

このような読者の声は、創作を志す投稿家にもよい刺激となるでしょうし、K誌の充実には当然の課題でしょう。

## 新聞投書欄にみる

麻生 保

一月十八日付、読売新聞神奈川版「わたしの席」欄、紹介。見出しは「おとめ心を傷つけないで」——横浜市神奈川区在住の主婦、松崎操（46）さんの

投書されたもの。

ある著名な大病院のできごとです。カーテンで仕切られた七人部屋。入り口に近い私の足元にチラッと姿を見せ、二人の看護婦さんが隣の区画にはいった。とたんに筒抜けの大声が飛んできた。「××さん、便秘が続くからかん腸よ」「でも、飲むお薬を……」——私はいつか見た色白の女高生

私は改めて「KK的小説及び論争起きよ」と期待するものです。

山本氏のおっしゃるように「奇クが生き残るには、やはり小説などの読物を充実させる」ことは、当然のことですが、更に、注目に価いする論争の捲き上ることも、重要な必要事ではないでしょうか。

その意味に於て、三月号、奇クサロンの冒頭、陸月笛一郎氏「フエチ小説の虚構と真実」本文の夜乃探郎氏「作者は不在？」等々、内蔵される何ものかを嗅ぎとり、ペンを走らせられた各氏の意図がよくわかる気がします。

いずれにしても「論壇」に活気がほしいと思います。

らしい人を思い浮かべた。

「何ですって、私たちは先生の指示通り動くだけだわ。忙しいんだからさっさとして……」石ケン液濃すぎたかな——その後は荒々しいぬのずれの音とすすり泣き。医療上の必要や病院の忙しさはわかるが、おとめ心を傷つけないよう、もう少しやさしく他人に知れないようにやって上げられなかったものか。しみじみ考えました。

## 「秘録おんな牢」を観て 沢瀉しの

一番の傑作は終り近く、遠島になるお松が興奮してもがくと両手首が縄からぬけ、両手を振回してあばれるところ。

うれしかったのは主人公役の女囚があたしと同名だった事。

よかったのは水からあがったおしの伊藤晴雨好みの凄艶な姿。

拷問も刑罰も適度に出て来ますけれども、此の映画は拷問刑罰映画ではなく、一風変わった題材の色気女体観賞映画です。

したがって、いつものような私流のアラさがはいりません。

とは申すものの、日本映画のセツトの木部、この映画で申せば牢格子や羽目板などが、機械削りの波目のままなのは非常に目ざわりです。

外国映画では、テレビ用の西部劇でも一応手で引いたらしく仕上げてあります。

感心したのは同時上映の「関東女賭博師」で、賭博奨励映画に

かなりようがなさそうなお話

が何時の間にやら芸道修行と師弟愛の物語りに化けてしまった脚本のうまさ。





## 緊縛女優三羽鳥

カラス

△美矢、辰巳、谷▽

### 東 山 映 史

大映の『秘録おんな牢』で、安田道代が女囚役で股裂木馬責などのリンチを受ける。又『眠狂四郎無頼控・女地獄』では高田美和が男装姿で、緊縛姿を見せる。

五社作品でも緊縛シーンが多くなり、大いにS的な興奮を盛りたてようとしている。エロダクシヨンが奮起しエロ・グロでかせごうとするのも当然といえよう。

一九六八年、今年の独立プロの緊縛スターは誰だろうか。新高恵子が舞台に上り、松井康子が大増になった現在、何といってもホープは美矢かほる、辰巳典子、そ

れに谷ナオミが緊縛女優三羽鳥というところか。

最近の作品から、これらのスター達の縛られぶりを見よう。

正月作品、小森白監督の『密通刑罰史』では、美矢かほる、谷ナオミ、それに辰巳典子、林美樹らが仲よく揃って出演。現代、大正それに江戸時代と、オムニバス形式になり、現代では重役夫人と自動車教習所の指導員。大正末期は将校と女中。江戸時代は与力の妻と医者。などとなっている。

何といっても庄巻は、お定書百カ条で、密通は死罪、どのような

リンチでも行われた江戸時代だからであろう。美矢かほるが与力の妻、谷ナオミが医者竹庵の妻で、医者の竹庵は妻の不義をみつめ、「男の名を白状せよ」と妻を責め折檻する。この密通妻に対するリンチは、どのような残酷な死を伴う折檻でも認められるのである。半裸で腰巻一枚にされ、後手に緊

縛されて天井から吊られた後、物置小屋に横たえられた竹庵の妻は白状しないので遂にヤクザ者に縛られたまま犯される。そしてハリツケ柱に手足を縛られたまま、いたぶられるが、なかなか白状しない。このリンチの残酷さが、当の相手の与力にまで聞こえる。与力は遂に竹庵の所へ乗り込み、逆エ



ビ縛りの竹庵の妻の上にかぶさり「この姿に見覚えはないか」と竹庵にいう。「さては？」と、いう竹庵に「この女は買い取った。解き放してやれ」という。残念がる竹庵。毒婦的な竹庵の妻（谷ナオミ）は、仕返しに「与力の妻を犯してやれ、私が連れてきてやる」と、竹庵にせん動する。ここに与力の妻（美矢かほる）の悲劇が始まる。子供の出来ぬ与力の妻は、子供を生ませる良い医者がいる、と誘いにきた竹庵の妻（ナオミ）の甘言にのせられ、竹庵の所を訪れ、竹庵に犯されよう





とする。竹庵の妻の密告で妻の密通？を知った与力は「わしの武士もすたれたか」といって妻（美矢かほる）を折檻する。美矢かほるは裸にされ、豊満な乳房の上に荒縄を三巻きされ、天井から吊り下げられてムチで乱打される。美しい顔が、苦痛でゆがみ、ムチを秘部に突きさされ、血がタラタラ

と股を伝わって流れる。カラーだけに凄惨である。そして同性の裏切者のナオミにも折檻される。豊艷な美矢かほるの緊縛シーンは美しい。最後は舌を噛んで死んでいく。

辰巳典子は、大正末期の軍人の家の女中。暴力で軍人に犯され、妊娠する。最後は自ら秘部に火バ

シを突きさし胎児を殺し、庭前の木に首を吊り死ぬ。哀しき女の宿命である。しかし何と云っても、辰巳典子の傑作は『悪道魔十年』だろう。僧侶生活の戒律に縛られた里見孝二が、師の妻（美矢かほる）を恋いしたい、遂には彼女を犯し殺す。このダイコク（僧の女房）の美矢かほるが夫の僧に責められるシーンも交っていた。足を数珠で縛られ責められる。そして歓喜の声をあげる。それを覗く里見孝二。そして彼は責絵師になる。その責絵のモデルが辰巳典子である。そこへ未亡人の



松井康子が絵の依頼にくる。そして女の悲鳴を聞き、土蔵の二階へソロソロと上っていく。そこには半裸で乳房の上をがっちりした後手に緊縛され、天井から吊り下げられムチ打たれる辰巳典子。これまでの吊り責中の最高。快心の絵が書けぬと、逆エビ縛りにされて部屋中を引きずり廻わされたりするが、あらゆる責めにもほえんでいる彼女、辰巳典子はマゾ女優だろうか。この作品では未亡人の松井康子も、手足を延ばして緊縛され、最後は殺される。一寸、面白い作品だった。辰巳典子は、本誌にも掲載された『お姉ちゃん蒸発（ダブル・ドッキング）』のラストシーンで半裸にされ縛られ責められ、首つりにあうところを助けられる女を演じたり、『多情な乳液』では、天井から吊り下げられて恥毛を焼かれ絶叫したりベッド

の上であぐら縛りにされるなど、受難の女と、殺される金持の女の二役を演じたりしている。

谷ナオミは『女体残虐図』で、風呂場で毛吊りにされ、氷の上に立たされる。これも変わった責めの一つだった。ニュー・ホープの井上幸子は、『性犯』で責め写真のモデルとして種々の責めポーズを見せてくれた。

林美樹も、モデルで後手に緊縛されて蛇責めにあい、もたえる。彼女も必ずといっていいほど縛られる受難女優の一人である。今年活躍を期待される一人。

その他、『女体国際市場』など期待される作品が多い。『変態魔』では清水世津が、凄じい吊し責め、両足引きのばし責めを見せ、渚マリが大きなオッパイを荒縄で縛り上げられていた。



## M女性いずこに

鹿野求二

夫婦のSMプレイを誌上で拝見しながら、やっぱり僕もMの女性と結婚したいもの、思っている近頃です。しかしどうしたらそういう女性と巡り会えるか。これはなかなか難しい問題で、色々考えた末に、思い切って投稿させていただきます。

僕は、五才か六才の頃、ある絵を見たことが記憶として残っているのです。その絵はペン画風で五コマか六コマの続き絵でして、若い人妻らしい女性が牢から出され刑場へ連れてゆかれ、そこで火焙りの刑に処せられるものでした。この女性の顔が凄く美しく、観念して静かに目を閉じた表情が、残酷な刑罰とは対照的に崇高な神神しい美しさをにじませているようでした。

かと思われま。

学校へ入って字が読める様になると、漫画や絵物語等で、女性が拷問されたり処刑されたりする場面を何回も繰返し読んでしました。特に僕がS的興味を覚えるのは、処刑される女性が無実の罪だった、又は人間性から考えて軽い罪、例えば家宝の皿を割ってしまったとか。切支丹であるが為に死罪にされるとか。それに神の生贄として捧げられるという様な場合です。

これらの女性が、自分の運命と諦めて刑場で静かに処刑を待っている姿や顔の表情を空想している、残酷美とか悲壮美とか、のか、あといくばくもなく生命を断たれる時になって、その女性全体が、落日の残照のように持てる美しさを結集し、それを最大限に發揮して輝いているように思えてくるのです。

でも近頃は空想だけでは物足りなくなり、実際にプレイとしてやってみたくまりました。処刑劇みたいなのを想定して、先ず容疑

者として捕えて、自白を強要して拷問する。責めはやはり、羞恥責めが一番だと思います。肉体的苦痛よりも精神的苦痛の方が、女性にとって耐え難いものでしょうか。それに女性の美しい肌をあまり痛めたくありません。なるべく肌を傷つけない効果的で色気のある責め方を、工夫したいと思っています。

拷問が繰返されてやがて自白すると、お白州で刑の判決を言渡します。刑が確定すると執行まで牢に入れておき、処刑の時間が近づくと牢から出して刑場まで引廻しをし、刑場に着くときしばらく晒しものにして最後に処刑する。と言ったストーリーで、色々な刑罰をプレイとしてやれたらと思います。

女性が拷問されたり処刑されたりするのを想像したり、プレイとしてやりたいと思っている男を、さぞ残酷人間とお思いでしょう。しかし実際には殺生は嫌いだし、女性に対してもむしろ優しい方じゃないかと自分では思います。空想、フィクションの中でのみ、興味を感じるのかも知れません。仕事もまじめだし信用も得ているのですが、心の中では此様な矛盾に

## 編集部だより

○本月号の『陶酔をよぶひとの名は』で誌上掲載した通り、辻村隆氏による女優辰巳典子嬢のカメラ・ハントが行われた。映画化された『花と蛇』で静子夫人役を演じた紫千鶴のカメラ・ハントが流れになって以来、初の緊縛人気スターの誌上紹介である。尚、引続のスター谷なおみ嬢が登場する予定なので次号をお楽しみ頂きたい。

○団鬼六先生が一月になって来阪された。『鬼六談義』と『小説花と蛇』の原稿を持参されるということだったのだが、急用の電話があつて急拠帰京されたため、ゆっくり会談出来ず残念だった。

○『読む雑誌』として成長を遂げるべく努力し続けてきた成果がここ、このところ、ようやく実を結びはじめ、牛歩のあゆみながら月毎に増刷することが出来た。本年は更に『読みごたえのある』『後世に残して価値のある文献性を持つ』雑誌にするよう努力したい。

○そのため、手はじめに東京駐在編集員、地方都市駐在編集員、探



## —僕のイメージ画集—

「恋人募集広告」デザイン 室井亜砂路



# 求む 恋人

応募者多数の場合には先着10名  
宛先編集部 亜砂路恋人募集係  
締切 6月31日 当日消印有効  
年齢 15~40才 容姿端麗の方

※ 応募する時は応募カードをはって出そう。

※ カードを回収めると素的な亜砂路のサイン入りフロマイドが当たる。

悩んでいる訳で、この悩みを理解して時々プレイに協力してくれる女性と結婚出来たら、一生を愛情で繋いでゆけそうな気がします。勿論結婚ともなると単にこれだけの条件で良いという訳にはまい

りませんが、理解ある女性の方の出現を、一縷の希望を持って待っているのです。ほのかな期待をこめて自己紹介をします。二十七才。一六二C。五十五K。サラリマン。大学卒。性格は温和でロ

マンチスト。寛容力あり。趣味は音楽（唄い聞き演奏する）特に声のきれいな女性に弱く、しかも唄がうまかったら最も弱い。スポーツ、柔道。  
ああ、M女性よ、いずこに……

訪記者を募集したい。採用の方には取材費、旅費、日当等を支給し主として編集取材を担当して貰うことにする。ご希望の方は、履歴書、最近の作品に特技を添記の上、お申込み頂きたい。

○先月号のこの欄で言及した臨時増刊号並に単行本用として使用できる長篇物の原稿は、現在まで送られてきたものの中には、発表に耐えるものはなかった。懸賞募集原稿ともども、これはと注目に値する作品は、どしどし活字化する考えなので御送稿ありたい。

○安井喜久子夫人より、ハ夫婦プレイの緊縛のアイデアVを募るという便りあり、応募者全員に同夫人より緊縛フォトを贈呈する由。編集部気付にて、通信ありたい。

○編集参考資料提供のお申出があとを絶たず大いに感謝している。出来る限り高価にて購入したい故お手放し可能の方は内容の詳細と希望価格を附し、お便りを乞う。

○先月号に掲載した『秋山夫妻シヨ』の予定表は事実と違う旨、読者の方から御注意を頂いた。公演日程について編集部に於ても不明なので御諒承願いたい。先月号は八責了Vの過程でミスがあり誤植の多かったことをお詫びする。



## 小森白の

## 「密通刑罰史」を見て

風流極道軒

『日本拷問刑罰史』を思い出して入った私は、がっかりしました。

三話にわかれており、

第一話は、昭和——密通した女は、自家用車で自殺。第二話、大正——陸軍大尉のもてあそび者になった女中は縊死……全然縛りシーンなし。第三話（全上映時間一

時間二十分中の内約四十分）に、のぞみをつないだものの、期待はずれ。

でも、大方の参考までに。第三話の前半（約二十分）やぶ医者の子が密通したと責められる。まず半裸、天井から縄一本、後手。よた者とあんまに自由にされる。乳

## SM随想

—映画・「血斗」より—

高羽志京

男と女で成り立つ社会組織において、当然に男女同権であるべきところ。男が暴虐であれば苦しむのは女であり、女が驕慢であれば被害を受けるのは男の側で、兎角、浮き世における男女の関係はままたらぬ。

さてSM小説等の読物は、それらを芸術的に作品化しているの面白いのだが、近頃は映画の中にも、ままた秀逸なのが見られる。

例えば「苛め抜かれる女」のサブタイトルをつけても恥ずかしくない様なのに、舛田監督の日活映画「血斗」がある。

所は三州の滑川町、折しも新興やくざの山辰一家と、昔からの福吉一家が、お定まりの縄張り争い。然し落ち目の福吉一家には乾分も少く、頼りとすべき身内の高橋英樹は、今や堅気の船大工。

さていよいよ喧嘩出入りの当日満洲の政と名乗る流れ者小林旭の加勢で、勝利の軍配は意外にも劣勢の福吉一家に挙るが、卑怯者揃いの山辰一家はその夜の中に闇討をかけて、親分始め福吉一家を皆殺しにする。

そして親分の娘、松尾嘉子も無

房豊満。脚立(?)に、両手上縛り——全裸の場面、よし。

次に、旗本の妻が、世嗣をのぞんで、その医者と通じ発覚。夫の私刑に逢う。女優は、美矢かほる——鼻の大きいのが気になるが、湯文字一枚の立縛りを五、六分見せてくれる。小森流縄さばきで乳首は見えぬが、中腰で、猿ぐつわなし。

『拷問』も『美女拷問』もそうであつたが、どうして小森氏は「血

## 短信 庄来

山上四郎氏へ

夜乃探郎

三月号であなたの「新年号を読んで」を拝見。そこで一言。

「水中花については、この程度の小説ならば普通の大衆雑誌にものっているのではないだろうか」と

あなたはいわれている。それは皮肉にも私の「水中花礼讃」ともいえるものと同居してしまった。そして私は「水中花」を「つまらない」とはいいない。あの作品は読者各位、どのようにも受取れ

を好むのか。もっと、プレイとしての「縛り」を堪能させて欲しいもの。例えば「リンチと縛り」の若妻の立縛り、「肉刑」にほんの瞬間であつたが、美矢かほるの緊縛シーン（これは垂涎もの、ただし正面からのものはカットされていた）……『日本拷問刑罰史』における江戸時代の強盗夫婦の拷問シーンを再現（天然色で）して貰いたいと願うのは私ひとりではあるまい。

るのであなたが「そんなものだ」とキメツケられるなら言葉もないが、あえて私が評価したポイントを上げてご参考の一助にしたい。

成程、いまの一般大衆雑誌はSM、異常風俗作品の花盛りだ。ただし、これらは、作家がSMなどを単に現代風俗の一断面として小説の中にとり入れたもので、それは「手段」であり、全部とはいわないが、おおむね底が浅く、迫力という点に欠けている。

「水中花」は、作者の十数年にわたる実体験と、彼なりの神酒による人生哲学が創作というジャンルで、より美的に開花されたもので作者にとって「神酒」的なモチーフが、手段ではなくすべてである





……迫る刺板の恐怖……  
幻 幸三郎

残、親殺しの張本人によって犯される。尚あられもない長襦袢姿を曝したまま次々輪姦されそうになるが、政から急を聞いて駆けつけた英樹の出現で、乱闘の果てに身柄を拉致される。

それから数年後、英樹は、文字通り恋敵の情婦兼売春宿の女将に納まっている嘉子と再会するが、

どこまでも不運な嘉子は脱出の途中で兇刃に倒れる。

が、それらはすべて表面の出来事で、隠された真実は、体を奪った心までは奪えなかったという次第。「体を殺しても、心を殺し得ぬ者共を恐れるな」の文句もある通り、女を苛め抜く事もけだし至難の業だと思った。

という点で、普通誌には見られない、独自の、マニアなりの作風を結実させた。

面白いという点では「花と蛇」などだろうが、長い年月をかけて生み育てた芳野眉美氏の作風について、もっとご理解ある評を、私はあなたにお願いしたい。K誌がマニア共通の広場でもある故に。

(1) 丸鬼土佐渡様へ

橘 雅美より

貴殿の文章には、毎月のようにお目に掛っていますが、毎回、書籍、映画、TV等、幅広い守備範囲を持ちながら、アリーピキ迷さぬ見事なフットワークで、サラッとまとめあげる手腕には、時折り私が送る「映画通信」など、全く寄せつけない横綱の貫録を感じてしまうのです。

書籍など、限定版の機関誌までも手を伸ばしていただけるし、映画・TVも、よくぞ目が通り記録出来るものと驚きます。

ヒマとカネのない私どもには全くありがたい贈り物です。いつまでも、新らしいそれらの紹介をお願いします。

二月号の文面から、映画の場合にスナップされているように受け

とったのですが？ もし出来得れば載せて、ホーム・ムービーを誕生させていただけませんか。

(2) 村まり子様へ

二月号の「告白」拝見。私の告白も偶然、貴女の文の前頁に載せて頂いたのですが、まるでツツリ方で、読んでみて、我ながら、こいつバツカじゃなからうかと思っただけです。

その直後に「恥かしめて」などという文字です。驚きました。ズバリといわれる大胆さ。私のそれとは童謡とゴーゴーくらいの差を感じさせられました。

ですが、貴女の文のラストが私には大変気になります。生意気な方ですが、貴女の願いが果たされたとして、それがはたして充実した夫婦生活「縄のある蜜月」につながるものでしょうか。

もっとも、夢の世界のこととわかっての呼びかけとは思いますが、あなたの初夜の夢が叶うことが、現実の幸せに通じる道でしょうか。私は、M性の強いあなたでも、実際には誰でもが通る道を同じように歩み、その生活の中にSMという一つのアクセントを置かれるのではないかと思います。失礼お許し下さい。お元気で。



## 異常風俗小説と……

## ……K誌の立場

魔 仁 阿 天 狗

すでに本誌上でもマニアの声が現われているが、近頃は一般大衆雑誌に「異常風俗小説」が登場するのがめだってきたようだ。

たまたま私は、三月号に掲載されたように梶山季之氏の「ミスター・エロチスト」を通してその背景を眺めようとしたが、偶然にも同月号に睦月笛一郎氏が「フェチ小説の虚構と真実」なる一文を発表され、私の意見が裏付けされた思いで嬉しかった。ただ睦月氏の「産業スパイ事件もフェチを包むオブラートでしかなく」といわれる点が、私の考えとは一寸、違ふようである。

現在の世情は、ある意味では異常風俗全盛期ともいえるのではないだろうか。うわさに聞くようなマニア向きトルコ嬢の出現などもその一例であろうか。

時代の風潮に敏感なる作家達がこれを見逃す筈はなく、マスコミも読者も興味を以てSMを眺める

というわけ。

しかし、そのような只、単なる興味本位なSM応用のものと、それ一筋に追及し既に二百号を越す誌歴を有する本誌とは、その取り上げ方の違ふのは当然であろう。小説としての価値判断より、筆者の思想が問題なのだ。

ここに、睦月氏の「ことフェチに関する限り、類型的な表現の範疇を出ず」といわれる言葉が生れてくるのであろう。これは「ミスター……」ばかりでなく、他のSM的要素を含んだ小説類にもいえると思う。

本誌の編集子は「原稿募集」に当っていわれている……「どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を……平常抱かれています夢を……」と。

睦月氏のいわれるように「この種の小説は表現描写に限界があり……」で、すべてをさらけ出すことは不可能に近いといえよう。小

説そのものが、真実を打出そうとすればする程、虚構が目立つのではないだろうか。これはSM小説に限らず創作を志す者の宿命でもある。

しかしそこに、安易な流行を追う付焼刃的应用売文と、およそ未熟ではあるが、日陰を意識しながら懸命にペンをとるマニアの訴えとの違いがあり、その目的はおのずから別個の評価価値が生じてくるものと信じる。

三文作家を自称される団鬼六氏でさえ、「花と蛇」執筆の際は、感興にまかせて一気に書かれるという。その孤独な作業は、あくまでも「趣味」とわりきっておられるようだ。

たしかに本誌は素人作家の集団といえるだろう。そして、その故に欠点も長所もあるが、それなるとが故にこの独自のカラーが維持出来るのではないだろうか。山上四郎氏は「新年号を読んで」の文中で「今は奇クにとって過渡期にあたる」と述べられた。まことにその通りだと思う。たしかに本誌は、新しい局面に遭遇しているようだ。

三十年前後の全盛期直前には類似誌の続出をみた。現在は、前に

悪書ときめつける制約が立ち上がり、後ろに大衆雑誌の異常風俗小説の流行をみる。しかしその中で発展の約束される道としては、奇クの誌歴をもう一度振り返り、そこに通る一本の太い芯を守り続け、その上に立って、更に「新分野の開拓」をすることこそ必要なことと思うのだ。

今後、マスコミはますます作家のジャーナリスト化を要求するだろう。K誌に対しての風当たりも弱まることはないだろう。かつてマニアの中で育った探偵小説が、戦後推理小説と衣替えされ全盛を誇り一般化された。その当時、専門誌「宝石」の廃刊を予想していた者が幾人居ただろうか。現在は推理小説の不調を聞く。

奇譚クラブには、絶対にその二の舞いだけは踏んでくれるなといいたいのだ。

あまり美味なれば飽きも早く来るのではなからうか。あまり味気なくても食指は動かないだろう。噛みしめて、しつとりとした味わいこそ、絶対に必要なもの……というごく常識的な姿勢を、奇クに改めてとって貰いたいときだと思ふのである。

K誌よ健在なれ。



## 戸川昌子さんの

## 奴隷になりたい

大江 武 男

若くて美人の才女、小説家戸川昌子さんについて、去年12月21日号の『週刊現代』にインタビューした記者が結婚についての質問に彼女は「結婚しないのは、したくないからよ。それ以外に、まったく理由なし。私が結婚したいと思うのは、ドレイのごとくふるまってくれる男性ね。わがままなのよ私は……。レスビアン？ べつにとくに好きじゃないけど、私のまわりにそういう人が、なんとなく集まっちゃうのよ。いいじゃないべつに……」と言っています。

以上から判断しますと、多分彼女はサジスチンだと思います。

それこそ、ユニインでもコットでも、（亭主になれば）思う存分大きなお尻を顔の上にのせて、十分飲まして貰うことも可能です。

尚12月号パンチ（月刊）には、イルストレーターと戸川さんのセックス問答の中に「私は、とても毛深いのよ。胸毛こそないけど」

とありましたが、嘸かし女性自身の周囲のジャンルも凄いらしいです。また同嬢は、有名な乗馬趣味だと聞いています。宝石別冊九月号に、よく太った彼女が正面から颯爽と馬に跨った凛々しい写真が載っていました。

戸川昌子さんこそ、私達マゾ男性の憧れの的ですよ。私は彼女の亭主になれるような甲斐性はありませんが、せめて奴隷として一生を飼育殺しにしてほしいと願っています。月収は九百万円からあるといい、ゴージャスな東渋谷のマンションに秘書の女の子を置いて住んでいる彼女。私のような奴隷が一匹ぐらい飼われていてもいいではありませんか。

今度、渋谷区二の八の三号朝日ビル一階に八青い部屋Vというバーを姉に開かせ、時には自分でシヤンソンを唄ってきかせると、同じ週刊現代にあります。

## 僕のイメージ画集

## 『いたぶりの歓喜』

宇都宮 宏

キヨミさんは何を思いついたのか知らないが、急にキラキラと美しい眸を輝かしてヤスエさんにささやきかけた。僕をじっと見詰めながら聞いていたヤスエさんの顔にニンマリと笑みが浮んだ。相談はまとまらなかった。二人は揃って近づいてくるなり、四本の手が伸びてきた。





# 団先生にお願い

—「花と蛇」について—

慾 野 深 志

絶えて久しく御無沙汰いたしました。貴誌は毎号欠かすことなく二十五日を待ち焦れながら愛読いたしております。

特に最近「花と蛇」の完全なる「とりこ」になって、暇さえあれば夢中で熟読しています。

団先生の麗筆、益々冴え、殊に静子令夫人に対する羞恥責めは「書道責め」に見られるごとく、まさに完璧にして、私ごときが言を差しはさむ余地は全くなく、ただただ、私を無限の陶醉境へ没入させるのみ。

次号に予想される秘密シヨウにおける静子令夫人の、言語を絶する羞辱の演技強制場面は、いまから一日千秋の思いです。

女が女を責める悦虐秘図に、最大の性癖嗜好をもつ私のこれからに岩崎の妾である二人の嗜虐的な淫婦が加ったこと。やがて、この二人の妾と元女中の千代とが、醜い下賤な女がもつ共通の本能的な

感情（美しい同性や、気品の高い貴婦人に対する劣等感と嫉妬心など）から意気投合して（ことに妾の二人はあまりにも美しい静子夫人に岩崎を寝取られるのではないかとという不安と自己防衛から）静子令夫人を徹底的に、それこそ想像も及ばないほど淫虐な羞辱の責め折檻で罵り辱しめるのではないかと予想されるからです。

飽くことを知らぬ嗜虐好色な毒婦や淫婦達に、死ぬより辛い淫らな羞恥責めに翻弄されて、悩乱羞悶する豊艶な絶世の肉体美女静子令夫人……そう思っただけで、早くも胸が高鳴ります。

この際、次のような場面の現出を団先生に切願してやみません。自分も全裸になり、合成樹脂の道具を装着。静子令夫人に同性愛を強要する千代。

「そりゃ、奥様。千代がその気になつてやるならば、京子や桂子や小夜子達の時のように、奥様をそのようにして、縛ったままなら事

はかんたんで、わけのないことよ。でも、それじゃあ興がないわ。やっぱり、奥様も、千代と同じ気分になつていただいて、心から千代の愛を受け入れてくださるなけりゃね。フフフ……」

拒絶し泣き悶える静子令夫人。「そう、そうなの。奥様——そんなにこの千代が憎いの。いいわ、そんなら、もう二度とお願いしないわ。でも、ね、奥様、たとえ昔はどうであらうと、いまはれっきとした遠山財閥の千代夫人であり奴隷女静子の御主人様よ。その私が恥も外聞も忘れ、こんなに恥しい姿にまでなつて、優しく口説いてあげたというのに、よくもまあ赤恥をかかせてくれたわね。畜生にも劣る卑しい秘密シヨウの奴隷スターの分際で、最も大事な御主人様の命令に背き、お慈悲を踏みにじつて、赤恥までかかせたからには、静子！ どんなお仕置が用意されているか覚悟の上なんだろうね。とにかく、今度はお前が自分から、お願い、千代子奥様、静子を愛して——と言ひ出すまで、徹底的に仕込み直してあげるから……フフフ……そのため、明日からは私もこの邸に泊り込みで、四六時中、お前を私の傍に置いて、

骨の随から叩き直してやるからね。そのつもりで、たのしみにして待っているといいわ。フフフ……」

そして、その翌日。結び玉つきの股間縛りにされ、豊満なお尻からたれ下っている縄尻を銀子に意地悪されながら、千代の前に引き立てられてきた静子夫人。

千代と銀子の邪悪な密談。

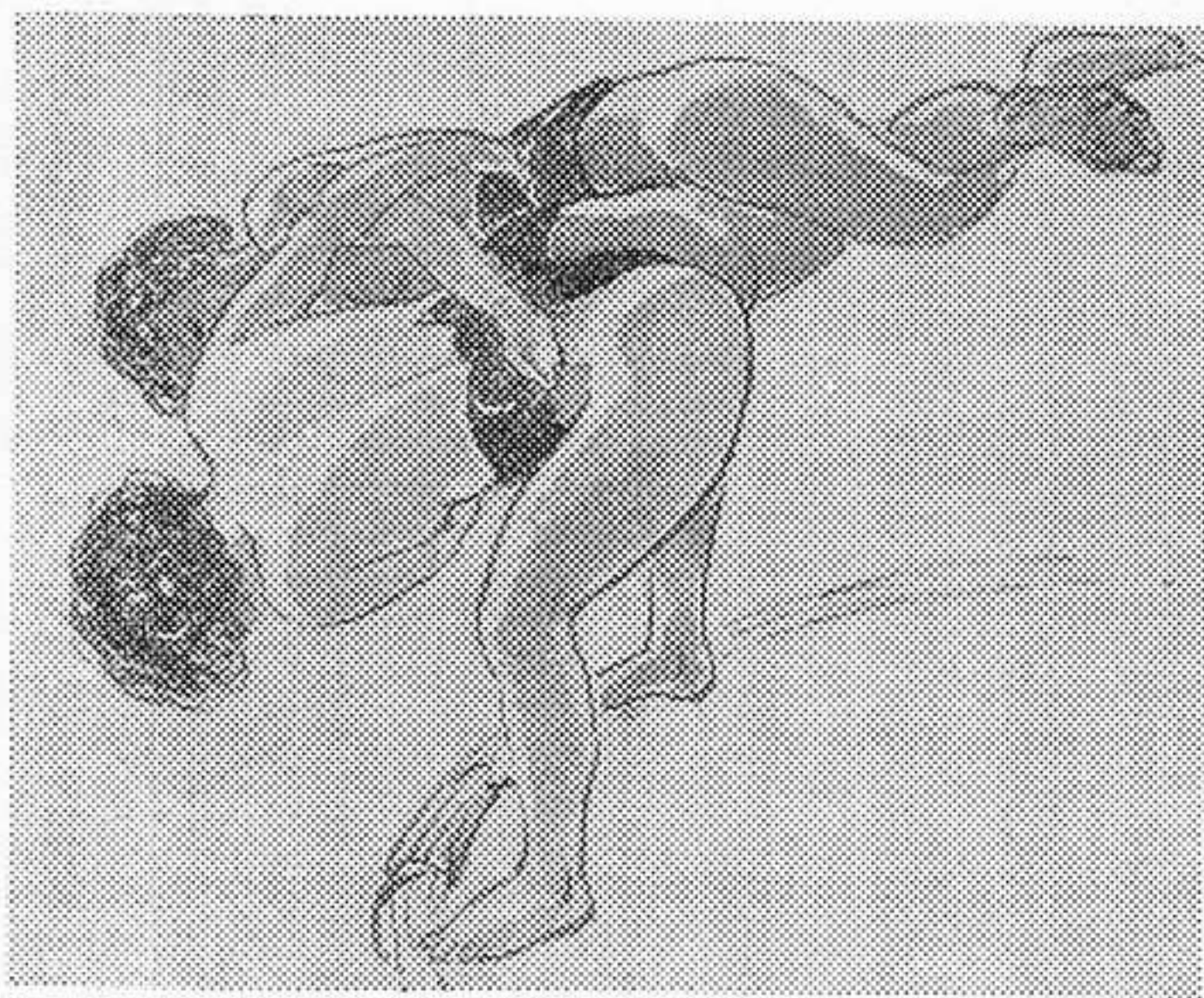
「フフフ、そうなさいませ、千代夫人。畜生より浅ましい奴隷女の分際で、まだ、昔のぜいたくな深窓のご令嬢だった夢や、上流階級の令夫人だった時代のこと忘れられずに、御主人様の恩を仇で返すような人非人の静子奥様には、名実共に牝犬になつていただくことが、一番よろしいですわ」

首に犬の首輪を嵌められ、太くて長い曳鎖を毒婦達に握られての言語を絶する淫虐な調教に羞恥苦悶する静子令夫人。その名も「エロ」と名付けられて……。

夜……千代の横臥する豪華なベッドの脚に四つん這いのまま監禁された牝犬令夫人。尻尾の代りにつけられた台湾産の太いバナナ。天女のような美しい顔のところどころにこびりついてる飯粒。プツクリと膨れ上って激しく波打つ



僕のイメージ画集



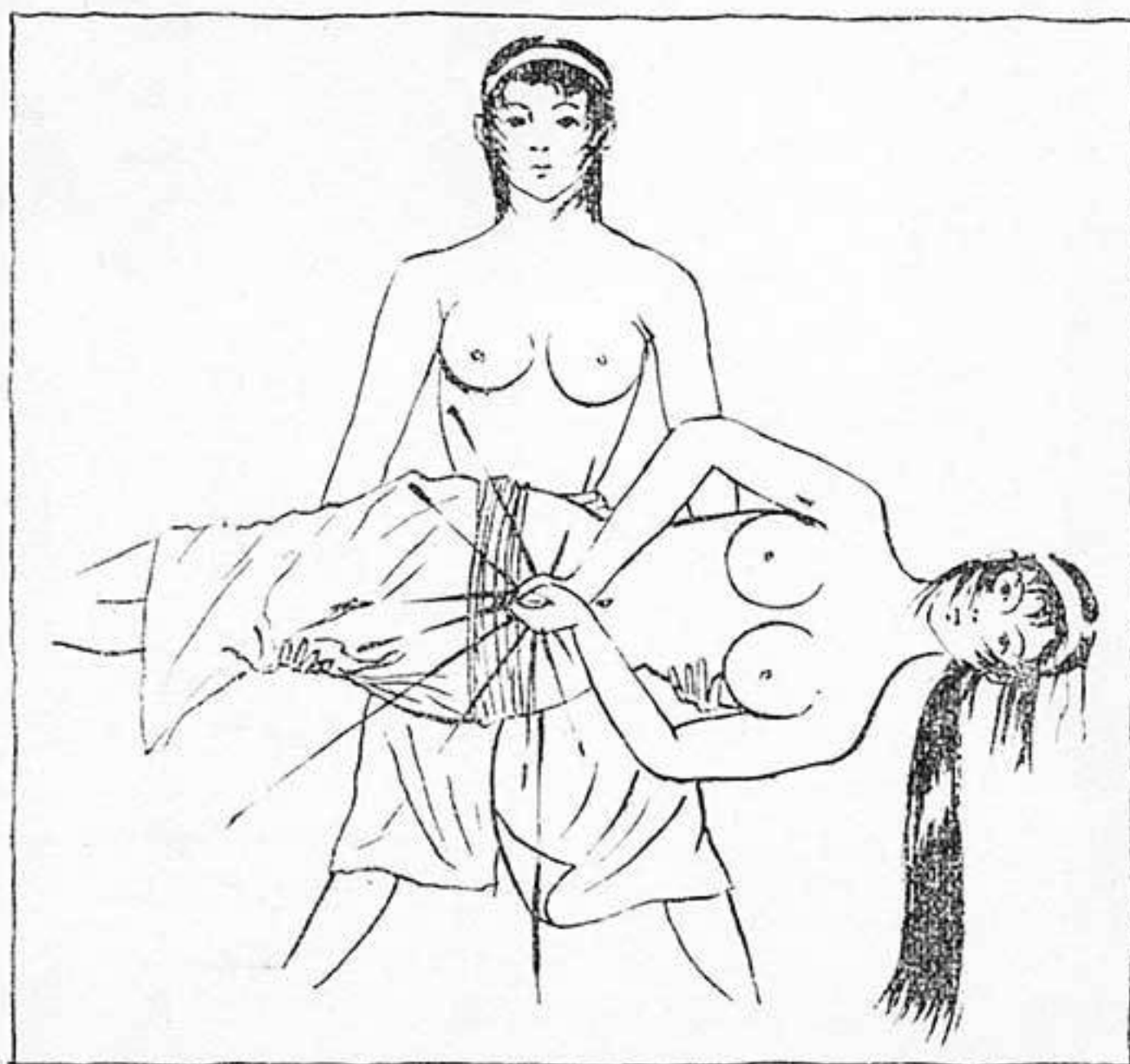
『力 斗』：雪崎京人

☆

『伸 縛』：宮城昌子

☆

『共 腹』：桐原紫門



腹部。濡れて光る口唇はタラ腹の  
まされた塩水のせいだ。

時がたち、耐え難い激しい尿意  
をこらえきれず、思わず洩れる羞  
恥の呻き、あざ笑う千代。羞辱に  
みちみちた生理の哀願。

千代の寝室に、呼び出されて入  
ってきた銀子達毒婦の群れ。妾二  
人をお客として招待される。運動

不足で汗のかきようが足りないか  
らだといわれて、豊満なお尻を鞭  
打たれ、華々しく展開される四つ  
ん這いの凌辱。

運び込まれる砂の入った小箱。  
牝犬の放尿シヨウ。

白昼、庭での牝犬の散歩。飼犬  
との仲間の紹介。

それからの食事は、皿に大盛り

され、芋や豆や、ゴボウなどが沢  
山まじっている皿を、舐めるよう  
にきれいに食べさせられる。勿論  
手などを使うことは一切許されな  
い。それなのに静子夫人は、すで  
にまる二日近くも排便を許されて  
いない。

排便の哀願。放屁の強要。

砂箱に四つん這いのままの牝犬

排便。まだ残っているとっての  
浣腸責め。

再び起る便意と排便とさらに放  
尿。床の上にひろがる洪水のよう  
な尿水。舌での床掃除。秘薬によ  
る屈伏。

千代の姦淫。

等々、書き出すと際限がありま  
せんので、今日はこの辺で。





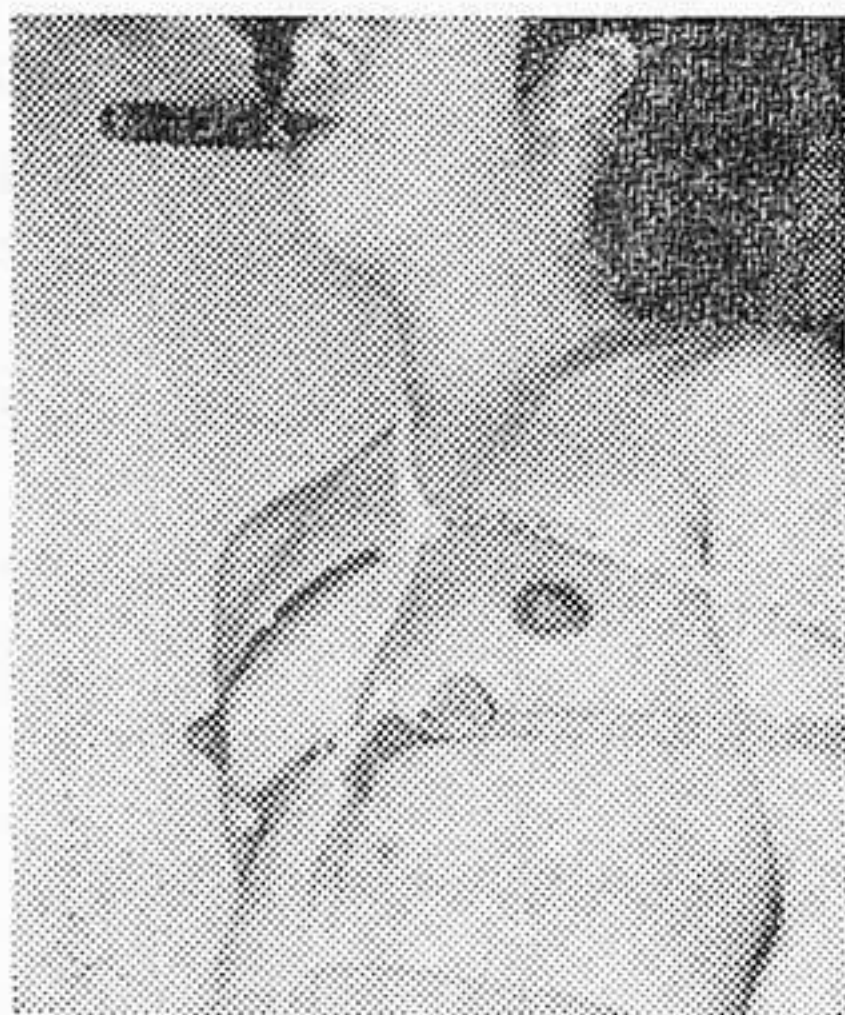
フォト通信

## 女と煙草

城野道一

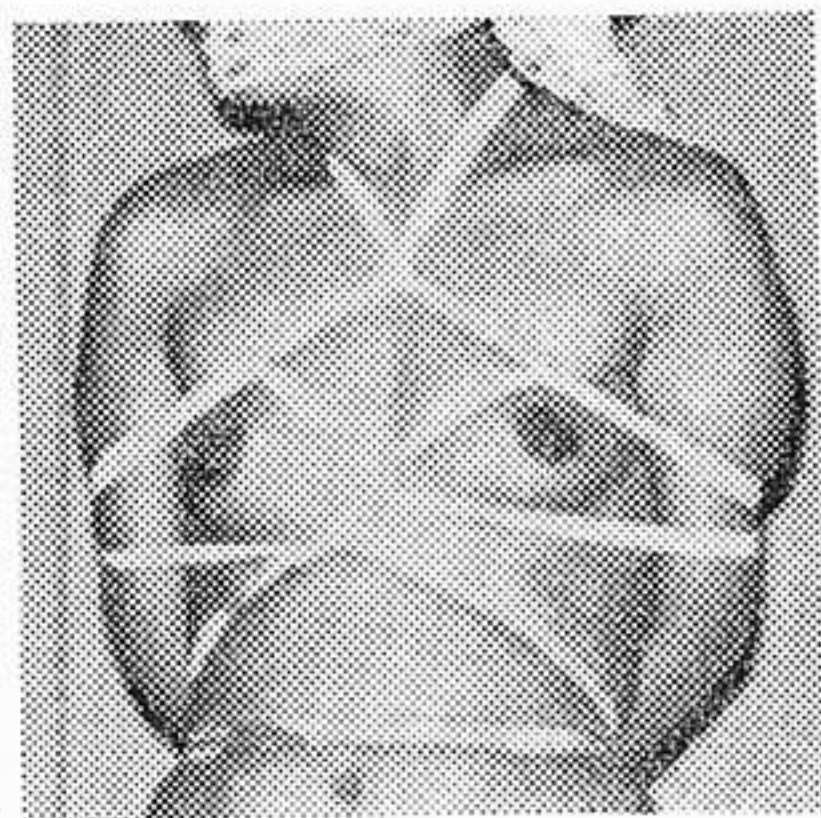
辻村先生。毎月のカメラ・ハント、何よりの楽しみです。

私も何かと忙しく、近頃はプレイもさぼりがちになってきました。が、先日、知合いのBGが来まして「友人が喫茶店で煙草を吸っていた。イイ、カッコなので、私も練習したい」といい出し、私にコツを教えるというのです。



彼女は、私の例のクセを知っている筈ですから、この申し出は、意味あるものに違いないと私は解釈しました。

持ち前のSが湧き上り、多少ワクワクしながら、「初めて煙草を吸うのなら、いっそのこと、うんとつよいもので、煙をふかすことから始めた方がよい」とか「唾えるコツを覚えるためには、手を使わない方がよい」などと、好き勝手なデタラメを並べて、まことしやかに指導？してやりました。葉巻を少々ばかりふかせ、キセルやマドロスパイプを啜えさせ、更に紙巻煙草を、というふうな、一切手を使わずに三十分余りも喫煙させてやりました。彼女は、本当に喫煙を希



望していたのかどうかは知りませんが、とにかく申し出の手前、はじめての煙草をプカプカやってはいました。

しかし、その三十分ぐらいの間中、大変な苦しみ？ようです。涙をポロポロ流しながら、まっ

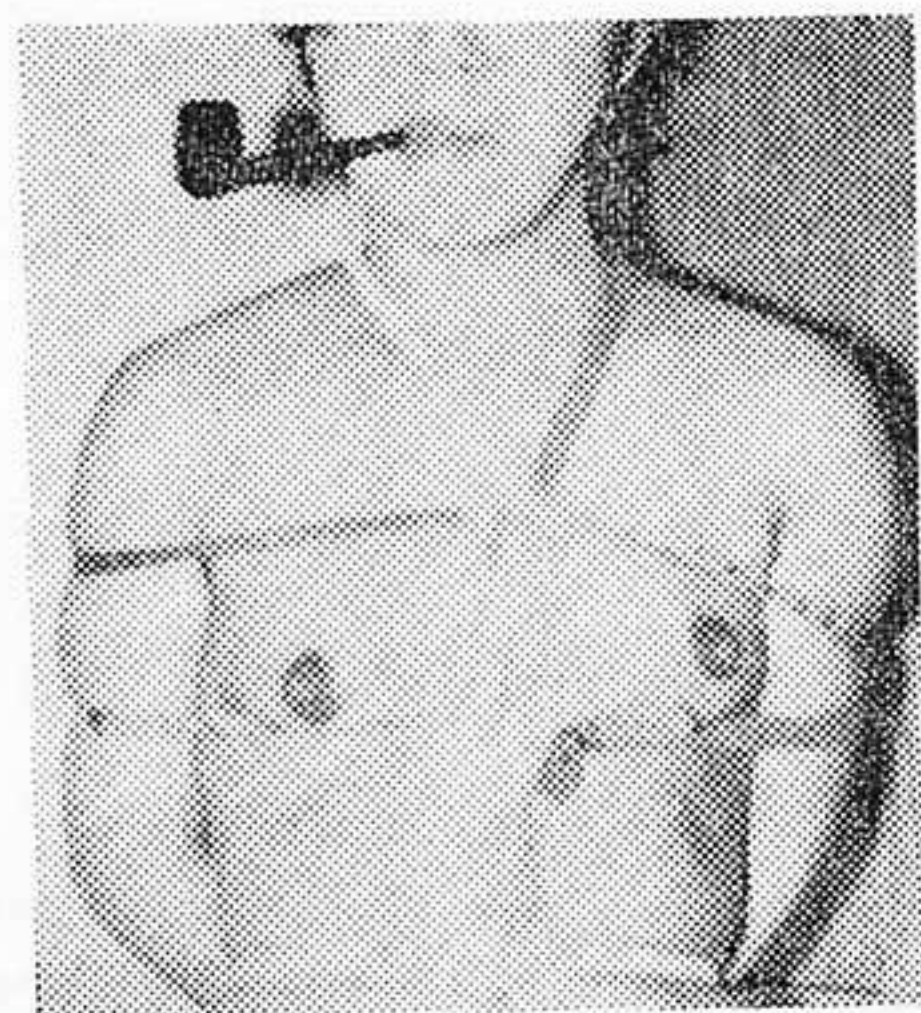
赤になってせき込んだり、ここここにツバを吐き出したり、水を飲んだりウガイをしたりで、実にそのニギヤカなこと。

無理はありません。初めての煙草をブツツケ本番でしかも手を一切使わないで吸うのですから……。

苦斗三十分余りの後、ついに彼女は音を挙げました。そして「こんなに苦しまなければ吸えない煙草な

ら、もうヤメタツ」と、ほうほうの態で逃げるようにして帰ったのでした。

ことわっておきますが、このBGの喫煙教授？ではプレイをしたわけではありません。正直いって内心、縛った上で吸わせてやりたかったのですが、いくら私のクセを知っているだろうと推察できても、すぐにプレイに引き込むだけの勇氣はなく、この場合は、ただ手を使わせなかっただけです。同封の写真は、よい出来ではありませんが、先生にご批評願えれば嬉しいです。カメラ・ハントに「煙草で責められる女学生」が登場することを心から切望し、お願い致します。





印画紙焼付極鮮明写真

## 〔美人モデル緊縛フォト〕

鞭打ちによる感涙の表情

大手札四枚一組 略号 (めち) 五〇〇円

股裂縛りで痛打する

大手札四枚一組 略号 (めの) 五〇〇円

海老縛りの鞭打地獄

大手札四枚一組 略号 (めぬ) 五〇〇円

尻立縛りで強打に泣く

大手札四枚一組 略号 (めし) 五〇〇円

ムチは臀部の双丘に炸裂

大手札四枚一組 略号 (めけ) 五〇〇円

鞭に悶える鉄砲責め女体

大手札四枚一組 略号 (めま) 五〇〇円

逆手吊りで晒す臀部

大手札四枚一組 略号 (めむ) 五〇〇円

鞭の縛りに夢心地表情

大手札四枚一組 略号 (めり) 五〇〇円

鞭は美体からみつく

大手札四枚一組 略号 (めも) 五〇〇円

狂う鞭に狂い泣く女体

大手札四枚一組 略号 (める) 五〇〇円

両手吊りの女体に強打

大手札四枚一組 略号 (めさ) 五〇〇円

鉄砲縛りに鞭打の雨

大手札四枚一組 略号 (めせ) 五〇〇円

鞭打ちに示す感涙の極致

大手札四枚一組 略号 (めて) 五〇〇円

逆海老開股縛りに鞭打ち

大手札四枚一組 略号 (めひ) 五〇〇円

ムチに悶絶した美夫人

大手札四枚一組 略号 (めへ) 五〇〇円

のけぞる悦虐表情の露呈

大手札四枚一組 略号 (めふ) 五〇〇円

責めによる美的法悦表情

大手札四枚一組 略号 (めら) 五〇〇円

妊婦開股縛り哀歎

大手札四枚一組 略号 (わう) 五〇〇円

八力月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 略号 (わの) 五〇〇円

妊婦太鼓腹開股縛り

大手札四枚一組 略号 (わえ) 五〇〇円

妊孕美人媚態の立像

大手札四枚一組 略号 (わお) 五〇〇円

妊孕美人媚態坐像

大手札四枚一組 略号 (わき) 五〇〇円

両手吊り片足挙げ妊婦

大手札四枚一組 略号 (わく) 五〇〇円

八力月の妊婦両手吊り

大手札四枚一組 略号 (わさ) 五〇〇円

突き出た腹部の妊孕美

大手札四枚一組 略号 (わし) 五〇〇円

両手吊りの妊婦正面

大手札四枚一組 略号 (わす) 五〇〇円

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 略号 (わせ) 五〇〇円

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 略号 (わち) 五〇〇円

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号 (おに) 五〇〇円

初妊娠の太鼓腹の美

大手札四枚一組 略号 (おぬ) 五〇〇円

裸身縛りの妊孕美

大手札四枚一組 略号 (おす) 五〇〇円

身籠った裸身責め

大手札四枚一組 略号 (おも) 五〇〇円

麗わしの妊婦縛り

大手札四枚一組 略号 (おひ) 五〇〇円

膨満の腹部緊縛美

大手札四枚一組 略号 (おみ) 五〇〇円

立縛り髪責め引回し

大手札四枚一組 略号 (おけ) 五〇〇円

猿轡の裸身を晒す

大手札四枚一組 略号 (おふ) 五〇〇円

後手縛りで引回す

大手札四枚一組 略号 (おく) 五〇〇円

片足吊り上げ責め

大手札四枚一組 略号 (おて) 五〇〇円

憂愁夫人の菱縄縛り

大手札四枚一組 略号 (おや) 五〇〇円

柱対向立ち縛りの夫人

大手札四枚一組 略号 (おあ) 五〇〇円

片足吊り股裂き責め

大手札四枚一組 略号 (およ) 五〇〇円

逆エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 略号 (おわ) 五〇〇円

柱正面立ち縛り媚態

大手札四枚一組 略号 (おの) 五〇〇円

股間縛りにもかく女体

大手札四枚一組 略号 (おう) 五〇〇円

豊満の女体をくびる

大手札四枚一組 略号 (おれ) 五〇〇円

開股前屈愛撫責め

大手札三枚一組 略号 (おね) 四〇〇円

逆エビ縛りの愛撫

大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円



## 「最近作緊縛傑作フオト」

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」  
中河 恵子

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」  
中河 恵子

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」  
中河 恵子

鼻責めと鼻孔大寫し

大手札三枚一組 略号「ねけ」  
中河 恵子

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」  
中河 恵子

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」  
中河 恵子

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」  
中河 恵子

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」  
大島 照代

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」  
大島 照代

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」  
大島 照代

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」  
大島 照代

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」  
大島 照代

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」  
大島 照代

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」  
大島 照代

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」  
中河 恵子

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「その」  
中河 恵子

八の字開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」  
中河 恵子

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」  
中河 恵子

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」  
木村 洋子

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」  
木村 洋子

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 略号「きみ」  
木村 洋子

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」  
木村 洋子

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」  
木村 洋子

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」  
大島 照代

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」  
大島 照代

竹棒開股苔打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」  
関谷富佐子

後手吊りにもかく女体

大手札四枚一組 略号「くて」  
川越美佐子

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」  
愛知 葉子

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号「つよ」  
愛知 葉子

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つお」  
愛知 葉子

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号「つや」  
左近麻里子

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つく」  
左近麻里子

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つの」  
左近麻里子

麻里子の裸身をあばく

大手札四枚一組 略号「つね」  
左近麻里子

柱に立縛りの全裸身

大手札四枚一組 略号「つな」  
左近麻里子

絶妙の鞭打ちポーズ

大手札四枚一組 略号「つに」  
左近麻里子

悶える白肌を俯瞰する

大手札四枚一組 略号「つね」  
左近麻里子

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号「くち」  
中河 恵子

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」  
中河 恵子

両手吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号「くい」  
中河 恵子

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」  
中河 恵子

両手万歳吊りにもかく

大手札四枚一組 略号「くむ」  
中河 恵子

静子夫人への羞恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」  
中河 恵子

雁字搦目縛りにうめく

大手札四枚一組 略号「くと」  
川越美佐子

八力月の妊婦に革具責め

大手札四枚一組 略号「へぬ」  
増田みゆき

九力月の妊婦に首枷責め

大手札四枚一組 略号「への」  
増田みゆき

激痛に耐える鞭打ち表情

大手札四枚一組 略号「わつ」  
関谷富佐子



印画紙焼付極鮮明写真

## 〔新しいモデル強烈縛り〕

## Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちね V

開股逆さ吊り姿態  
大手札三枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちて V

強烈菱縄柔肌縛り  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちや V

豊満な臀部への責め  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちみ V

猪吊りの滑車責め  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちつ V

悶々たる尻立て縛り  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちな V

股間立縛りの表情  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちす V

全裸立縛りの表情  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちさ V

豊満女体緊縛のあえぎ  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちに V

緊縛と柔肌の交錯  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちこ V

投げ出された裸女  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちく V

禪美表と裏の二態

大手札二枚一組 三〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちけ V

美女の鼻をもてあそぶ  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちる V

美女の鼻孔を鑑賞する  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちれ V

開孔器で美女の鼻腔検査  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八ちき V

開股拷問椅子正面縛り  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八なた V

甘美な椅子縛りプレイ  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八なあ V

のけぞる痛打の果て  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八なち V

臀部に炸烈するムチ  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八なつ V

痛打による絶妙表情  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八なて V

絶妙なるバック姿態  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八せき V

強烈猿ぐつわ哀歓  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八せか V

息づくポリウムを縛る  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八せも V

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八せみ V

ゴムカバの猿ぐつわ  
大手札三枚一組 四〇〇円  
左近麻里子 略号 八せな V

羞恥椅子開股縛り  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八せけ V

黒布の猿ぐつわと緊縛  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八せこ V

甘美なる開股椅子プレイ  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
木村 洋子 略号 八せま V

開股吊り縛りの極致  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
木村 洋子 略号 八せむ V

菱縄雁字搦目縛り  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
木村 洋子 略号 八せえ V

私を虐めて下さい  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八せろ V

豆絞りの猿轡縛り  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八せれ V

悶える全裸の表情  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八せり V

麗身の裏と表の表情  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八せと V

竹棒と猿轡と縄と  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八せて V

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八せゆ V

陽光に映える亀甲裸身  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
左近麻里子 略号 八せい V

縄で弄ぶ豊満緊縛女体  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八せた V

後手縛りに狂い泣く  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八せの V

逞ましき臀部責め  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八せね V

強烈縛りに喘ぐ裸身  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八せに V

大の字笞打ちの悶え  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八わり V

絶妙の尻立て鞭打姿態  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八わも V

鞭打ちの女王昇天す  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八わめ V

狂い咲く鞭打の妖花  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八わみ V

大の字ハリツケで鞭打  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八わま V

蒲団に狂いまわる女王  
大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 略号 八わと V





女性の方で男奴隷を御求めの方  
いませんか。女王様は僕を人間と  
してあつかう必要はありません。  
何か機嫌の悪いときには僕を打っ  
て下さい。もし僕が逃げるよう  
でしたら、手足をしばって存分  
に打てばよろしいと思います。又  
口から声を出すようでしたら、女  
王様のいらなくなったパンティで  
僕の口をおおって下さい。僕は女  
王様のやさしい思いやりに感謝し  
て苦痛に堪えます。昼間は御仕え  
できませんが、夜か日曜日でした

ら女王様のために御奉仕すること  
ができます。僕はアパートの一人  
住いのです。ここで飼育して下  
さっても結構です。女王様の御命  
令にはもちろん絶対服従します。  
身長は一七八センチ、体重五九キ  
ロ、顔は十人並以上と自負してお  
ります。甚だぶしつけで恐しゅう  
ですが、女王様の御命令を待ち  
しております。(東京・前田修)

○ 先日、買い求めた世界発禁文学  
選書の「打ちのめされた女」とい  
う本の冒頭に「序文に代えて」と  
いう文章がありました。これを  
紹介したいと思えます。「鎖で縛  
られ全裸にされ天井から吊るされ  
その丸やかな肉づきのよい背を血  
にまみれるほど鞭で打たれる時、  
女は一体、何を考えるであろうか  
……たしかに、それは苦痛であり  
屈辱である。これが全く見も知ら  
ぬ他人によって行われたのなら、  
悲しみのため身も世もあらぬ思い  
に打たれるであろう。だが、それ  
が恋人であったなら、打たれても  
苦痛にむせぶ女は、この世ならぬ  
喜こびの中で、もだえ泣くであろ  
う。ただ惜むらくは、打ち手であ  
る者……それが男性であれ女性で  
あれ……が、この打ちのめされる

女の、喜びの状態を正しく把握し  
ていないことである。彼等は、女  
性に喜びを与えている現在の自分  
を理解せず、単に女を縛りつけて  
打っているという野蛮な征服心を  
満足させていることが多いが、こ  
れは甚だ困ったことなのである。  
本来、縛って打つ方も、また打た  
れる方も、人間としては同等であ  
り、一つの悦びに向かって、それ  
ぞれが別な役目を受けもっている  
に、すぎないのである。それは、  
打たれる方と打つ方の立場を交換  
して試みることによって分かる。  
いずれが奴隷で、いずれが主人で  
あるか。一見して奴隷に見える、  
血まみれの背中をむき出しにして  
苦痛に泣く女の方が、鞭という労  
力を提供する、男に対しての主人  
であることが、その場合に初めて  
分かってくる。あらゆる悦楽の、  
最高の限界は苦痛である。そして  
その苦痛に耐えて最高の愛情の消  
化の中に生き得る女性こそ、神に  
近いすぐれた存在であるともいえ  
るだろう。この文を読んで皆さん  
はどう考えるでしょうか。辻村、  
山本各氏を初め皆さんが主人であ  
り奴隷であるといえるのではない  
だろうか。又、本文では、異性の  
前で同性の責めが行われ、責めら

れる女性の姿は全裸でなく、その  
下着は根元に美しい刺しゅうがし  
てあるストッキング。それを吊る  
すガーターベルトもレースの模様  
のついたもの、ブラジャーも乳房  
を全部隠してしまうものではなく  
寸法をうんと狭くして、下から持  
ち上げ、乳首だけは十分、露出す  
るような形をし、女体の美しさを  
最大限に表わしていて、男性が女  
性の体で一番見たい所を見えるよ  
うに、触りたい所を触りやすいよ  
うに工夫され、この姿で鞭打ちさ  
れ、叫び悶える女は肉体的、精神  
的苦痛を喜び、これを見る男は何  
と幸福であろう。私も近い将来、  
こういう身分になって見たいと思  
う。  
(瀬川菊男)

○ 年の暮、テレビでハッとさせら  
れたことをお知らせいたします。  
始めて見た「なかよし」というド  
ラマのセリフの一節です。以下、  
記憶不完全ですが御紹介いたしま  
す。汚いアパートの一室で栗原小  
巻、倍賞千恵子、中村たつの三人  
が佐藤オリエを批判していたとこ  
ろです。佐藤が栗原に向かって「  
……あなたたちはマゾだわ」栗原は  
驚きの表情をみせるが沈黙したま  
まで。佐藤は続けて「マゾヒズ



ム、知っているでしょう。……病理で習ったでしょう。しいたげられて喜ぶマゾだわ」といいます。まあ、こんな具合だったのです。しかし私の勝手な想像ですが、栗原が佐藤にマゾだわといわれた時うっとりとして頷き「そうです、私は、マゾです。どうか私をいじめて下さい。思いきり恥かしめて！」と叫びながら足元にひれ伏します。こういう女性がもしおられましたら、プレイをしたいと思えます。私の住んでいる広島にはM女性がおられないのでしょうか。私が奇クを知って三年目が近づきますが、未だお便りがありません。でも私は、現われもしないM女性のために拘束具や責具を少しずつ作っているのです。広島のM女性の方、どうか遠慮せずにお便り下さい。

(広島・竹口正)

んだ。お前の望み通り、お前の豊かな腹とオッパイを思いきりいじめてやる。私は、お前を裸にして浣腸をし、その上、お前の大きな腹の上に跨ってやる。お前は苦しんでもがくだろうが私は容赦はしない。お前はこらえ切れず排泄するだろう。そしてお前は罰として私の牝馬となり、私を背中に乗せて室内を泣きながら這いずり廻るのだ。又、風呂場では、お前を仰向けにして私はお前の腹の上に立ち湯を浴びる。するとお前は口や鼻に湯が入り苦しむ。私は、お前の腹を足で踏みつけ水を吐かすのだ。お前は私に徹底的にいたぶられ悲鳴をあげながら私に屈服するのだ。芙美子、もしこのように責めてほしいと思うのなら、返事をするように。私は、きっと期待に答えて存分に責めてやろう。

(横浜市・北一輝)

美川芙美子、二月号の通信を読

## ◎分譲品総目録◎

多数の方々から御予約を頂いておりますが作成が大変おくれいて申訳ありません。完成次第必ずお送りいたしますから、今しばらくお待ち願います。尚予約お申込

一月号にてお呼びかけ下さいました東京の佐藤喜久子女王様に申し上げます。私は生れつきの典型的なM男性で、貴女様のおん前で土下座でもなんでもやりたくてたまらなく思っている男です。貴女様が椅子に坐られて足を組まれているおん前で、土下座して跪き足で踏んずけていたきたいのです。私は使用人を五、六人使う商人ですが、使用人達には威張りながら、外出して電車やバスに乗った場合、若い美しい女の人が入前でも平然と足を大きく開いて足を組んで太腿を露わにしているのを見ると途端に体を小さくして顔を赤くしてしまいます。そして、その美しい女の人に思いきりいじめてもらったら、どんなに本望かと思えます。私は身長一六二センチ体重六五キロ、容姿は、ゴツイので困るほどですが、根は正直で、いたって気の弱い男です。貴女様にピッタリの男犬だと思います。何卒、佐藤女王様のおん前で頭を深く下げ跪きける日の早くくるのを夢に見ながら、女王様の御命令をお待ちしております。

(東京都・宮谷生男)

奇ク、いつも楽しく読ませてい

ただいています。今回、私の体験手記を送らせていただきました。もし採用していただけたら望外の喜びです。又、挿画を入れていただければ嬉しいと思います。でも、こんな拙い文章、貧しい手記、載せていただけるかどうかかわかりませんね。なお私の本誌への希望としてオシメ関係の記事を、もっと多く載せてほしいと思います。では、今後の御発展を祈ります。

(東京・御園京子)

初めてお便りさせていただきました。奇クの皆様お元気でいらっしゃいますか。私は二十八才になります。マゾの女性です。私の好きな責めは、恥ずかしいのですが股間縛り、浣腸責めです。三味線か日本舞踊に興味のある男の方がおられましたら、お友達になつていただきたいと思えます。そして私の好きな恥ずかしい責めを行って下さい。では、お手紙お待ちしております。

(大阪・山本広子)

読者通信をかかさず読んでいます。者ですが、長野県に住んでいる人からのお便りが非常に少く思います。もう少し多くなることを望ん



でおります。私は奇クを知ってから六年ぐらいいになります、何分にも地方です。奇クを手に入れることが困難であり、奇クに通じる人が非常に少ないように思われます。私の身辺にも、もっとSMの世界を理解してくれる人がいはいかなあ、と毎日思っているわけです。しかし私自身、奇クの精神は十分理解しておるつもりです。空虚になりがちな毎日の生活にとり入れ、より充実した日々を過しております。とかく理性を失いがちな自分を、SMの世界を通して見つめることも出来るようになりました。まあ、とに角、私にとって奇クは、毎日の生活に決して欠くことのできないものになりました。こんな私も近頃、実際にプレイ出来る相手はいないものかと探しております。この通信を通して呼びかけたとしても、おそらく相手は現われないだろうし、こんな地方では、あらゆることが不可能に近いわけです。でも私には十九才になる恋人(?)がいますので彼女をM女性として、飼育したいと思っているわけです。しかし、この世界のことを話そうとすればするほど彼女を失いそうで、口には出せません。そのくせ、彼女の

美しさをSMの世界の美しさとして見たいし空想(S・Mの世界)をする時は、直ぐに彼女の体をつかって、私のSを満足させているのです。Mの女性の方、私の彼女にMのすばらしさを話してやり理解させて頂けないでしょうか。同性の方ならば彼女も抵抗もなく、このすばらしい世界のあることを知ることができると思いますし、自分にもM性のあることに気づくと思えます。そうしていただければ、後は私がM女性の女王にもしてみせます。勝手なことばかりつらつら書きましたが、M女性のみなさん、よろしく御協力をおねがいします。(長野・笠原生)

私はS・Mに関することが大好きで、長年奇クを愛読しておりますが、同種の雑誌の中で一番永く続いており又従って記事内容も洗練されておるので安心して読んでゆくことが出来ます。最近読んだ内容が益々充実してくるようなので大変うれしく思っております。一月号ではトップを飾って、鬼六先生と辻村先生の「オニ六先生大いにシバる」が殊に面白かった。左近麻里子さんをはじめ諸先生の写真を挿入されたので一層親しみ

最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てきV

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てかV

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てくV

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこV

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てまV

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てみV

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てむV

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てめV

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てもV

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てんV

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てるV

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うおV

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うてV

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこV

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむV

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るのV

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るおV

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るまV

羞らしい真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけV

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふV

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るやV



が持てた。対談の文中でのオニ六先生の発言も我々SMファンにとっては、嬉しいものだった。きっとこれから何年か経ったあとで、この雑誌が残っていたら貴重な文献となることと思う。一度我々ズブの素人のマニアばかりを集めてこのような企画を樹てられては如何？ 私のような熱心なファンは先ず第一番に出席を希望する。それと共に私は二月号の巻頭の「哀縄の記」のような理屈っぽい文章も愛する。といってファンの会合で議論をふっかけるといいうのではないが。奇クを読んでいると、編集者の心憎いばかりのマニアをつるテクニクが感じられて、知らず知らずのうちにひきつけられてしまっている自分を発見する。でも月に一冊の奇クは、読むにしても余りにも短かすぎる。そして、そのあとは私の果てしない空想が続いてゆく。それを書くとうとして私は思わず絶句する。ああ、私は何にも経験はしていないんだなあ。

(神戸・久米明)

貴誌がいつ見ても新鮮で、それでいて月を追う毎に充実してゆくを見て心からおよろこび申し上げます。一月号を買って読みました

が大変面白く、これで自分もすっかりファンになったのだなあと心強く思いました。来月号もきつと買うつもりです。「花と蛇」は愛交らず迫力があって、何度読みかえしても、そのよさを感じさせる値うちがあります。この一作でも毎月買う楽しみがありますが、今月は又、何か新しいものが載っていないかという期待と心のときめきは、私の生活にはりを持たせてくれます。どうか一層の充実をはかって下さい。

(石川県・羽生登)

二月号の六角京之介先生の女性切腹随想「女月形半平太」の麗筆は誠に立派です。ただ写真が不鮮明なのは甚だ残念で、写真だけでも三月号或は四月号に再掲するよう御願います。私は奇クの永年の愛読者ですが、殊に女切腹について興味を持っております。他にも女月形の色々なポーズがあるとあります。是非次々と載せて下さるようお願いします。

(東京都新宿区・東京の愛読者)

村まり子さん。二月号の告白拝見しました。何カ月か前、貴女が始めてためらいがちに読者通信を

#### 股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れよ▽

#### 羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れに▽

#### 双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△れや▽

#### 双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△れゆ▽

#### 臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号△れえ▽

#### 黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河 恵子 略号△れぬ▽

#### 立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れぬ▽

#### 開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れの▽

#### 豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村 洋子 略号△れむ▽

#### 柱縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やか▽

#### 高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やき▽

#### 緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やく▽

#### 脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やも▽

#### 縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やし▽

#### 腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△やみ▽

#### 女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号△なる▽

寄せられたのを見て、早速次号へ感想文を書き送った私でしたから二月号の目次をみた瞬間「ああ、貴女もかつて中河恵子さんがそうだったように、いよいよ奇クの読者が注目する検舞台に脚光を浴びて登場するようになったのだな」と感じ、一気に読み上げたのでし

たが、貴女は何カ月も美しい胸に思い悩みながら、結局やはり、きびしい縄目の羞恥責め的情景も観念とムードの中でだけ存在していて、現実へ今一步というところで諦め踏みとどまってしまっているのを知って、実のところ歯がゆく落胆の気持を、隠せません。貴女



が思いきって歩き出すのを妨げて  
いる邪魔物は、セックスの結果へ  
の不安と怖れのようなです。「何を  
つまらない！」とそのことを嘲笑  
う気持ちには私はなれません。貴女  
は、SMの華—緊縛責めがセック  
スのための刺激的な花道であるこ  
とを十分に知っており、そしてそ  
れを内心求めているからこそ、逆  
に不能者との安全でそれだけに徹  
底的なプレーを想い、あるいはま  
だ見ぬ最愛のフィアンセとの初夜  
の悦縛のしびれるような陶醉を夢  
みているのですもの——そしてそ  
うした心理になると同様に素晴ら  
しいことだと思えます。ただ、私  
がそうした貴女のために是非知っ  
ていただきたいと思うのは——女  
体緊縛ということは、最高の手段  
でありうると同時に、緊縛美の言  
葉が意味するとおりそれ自体セッ  
クスと離れて独立の美でもあると  
いうこと、緊縛により女体の造形  
美を創造する努力は十分に芸術で  
ありうるということなのです。貴  
女を受縛の現実の機会から遠ざけ  
ているのが、男性への不信である  
としたら大変残念なことです。辻  
村隆さんが「読者通信で呼びかけ  
てくる男性は、体のことは保証で  
きないかも知れない」といわれた

とか、そう語ることは紳士の淑女  
に対する一般的な礼儀でしょうが  
そのことから、男性がすべて無責  
任なセックスの強奪者だと思われ  
ては困ってしまいます。縄と言葉  
の責め具だけで彼女を身も世もあ  
らぬ法悦の世界に誘ない、自分は  
そこに創り出した女性美の極致に  
純粋に傾倒できる男性だっている  
ことを理解していただきたいので  
す。貴女は初めての受縛を女性か  
ら得たからといってもレスビアン  
のタイプの方ではないのです。き  
びしく、しかし責任ある男性から  
の縛しめと責めの実現を切ない心  
で願っているのですから、安心し  
て自らをその縄目に委ねることの  
できる男性の友人を今すぐにでも  
求められることを信じてもう一度  
この誌上で、呼びかけて下さい。  
今度こそは思いきって、「皆さん  
早く私を、縛って責めて！ そし  
て愛して！」と。

（東京・中野・北畠二）

一月号、大変楽しく拝見しまし  
た。特に辻村氏と団氏との対談に  
左近嬢が花を添えた企画には、た  
だただ頭が下る思いでした。この  
対談に挿入されている写真を見て  
感じたことですが、フレームの中

に責める人が入っていることは如  
何にその写真により多くの迫力を  
与えるか驚きました。そこで小生  
の意見として貴社分譲写真、限定  
写真集にも、このことを考慮して  
ほしいと思います。神戸の田中氏  
が、とても嬉しいことを書きまし  
たが残念ながら氏の条件からほど  
遠く参加できません。そこで提案  
があります。私達もS・Mの同好  
会を作ってはいかがでしょうか。  
会員の条件は立派な社会人である  
こと。その他詳細は、会が成立す  
るときに、決めれば良いかと思ひ  
ます。小生の傾向から見てもS男性  
とM女性の会にしたいと思ってお  
ります。M女性がはたして入会し  
てくれるかどうか心配なので、S  
男性が色々な面で援助してはいか  
がでしょうか。もちろん奇ク誌が  
テキストであり、会の成果は誌を  
通じて皆さんにお知らせしたいと  
思います。さあ、同好会を結成し  
SMの真髓を、探求していこうで  
はありませんか。御賛同の方は意  
見と共に読者通信を通してお知ら  
せ下さい。お待ちしております。

（東京・一ノ瀬英雄）

K誌愛読者の御夫婦の皆さん、  
又、大阪の長本居一郎御夫妻様、

私は三十三才夫は三十一才です。  
今回、思いきって通信に投稿いた  
しました。私はK誌愛読五年余に  
なりますが、主人と共に楽しくプ  
レイしております。私は夫の前で  
第三者の男性に恥ずかしめられ、  
いじめられました。（眼帯をされ  
て）夫も私も何とも表現できない  
ほど、強い刺激を感じました。夫  
は、そのような御夫婦と文通し旦  
那さんの見ている前で、奥さんを  
いじめたいと申ししております。拙  
い文で申しわけございませんが愛  
読者の御夫婦の方の、お便りお待  
ちしております。

（長野県・野田和江）

小生四十代を中ほどにきた男や  
もめで、若い頃、早くも妻を亡く  
し化粧品のセールスをやっていた  
頃、ある中年の奥様や大年増の土  
方女にMの奴隷犬にされ、とうと  
う今ではそんな性癖になってしま  
いました。しかし、年令と一官庁  
のサラリーマンの今、世間体もあ  
りますれば、無謀無法なことや、  
血を見ることのマゾを好みません  
ので、私の好むMは次のような、  
あわれなぶざまな縛られ方、フェ  
チ、汚物、といっても下着の汚れ  
た個所で猿ぐつわされたり、そん



な下着をはかされて縛られて辱かしめられることです。それと露出となめとです。そんなことなら、どんな奉仕でもします。もしそんな女性がおられたら、女性のいうままになり、したがいいます。その方は、できるだけ中年か老年に近

い女性、又は肥えた無教養な醜女の方がよろしいんです。こんなあわれな性癖をお笑い下さい。もしそんな資料でもありましたら、おねがいします。

○ (福岡市・久能守)

### 秋山夫妻残酷ショー写真

逆エビに狂い泣く女

大手札四枚一組 略号 (たな) 五〇〇円

髪吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号 (たに) 五〇〇円

黒髪をふり乱して

大手札四枚一組 略号 (たぬ) 五〇〇円

股間縛りを熱演する

大手札四枚一組 略号 (たの) 五〇〇円

女馬を調教する男

大手札四枚一組 略号 (たか) 五〇〇円

尻帆立て縛りの実演

大手札四枚一組 略号 (たき) 五〇〇円

秋山式縛りに喘ぐ女

大手札四枚一組 略号 (たけ) 五〇〇円

熱帯は柔肌を焦す

大手札四枚一組 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たあ) 五〇〇円

鞭と羽毛の操り責め

大手札四枚一組 略号 (たら) 五〇〇円

早縄術を披露する

大手札四枚一組 略号 (たお) 五〇〇円

急所縄に慟哭する女

大手札四枚一組 略号 (たそ) 五〇〇円

熱気を帯びた実演

大手札四枚一組 略号 (たさ) 五〇〇円

強烈な緊縛プレイ

大手札四枚一組 略号 (たし) 五〇〇円

弄られる緊縛女体

大手札四枚一組 略号 (たす) 五〇〇円

鞭と縄に追われて

大手札四枚一組 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たむ) 五〇〇円

◎お申込みは、大阪市阿部野局私書箱第14号 箕田京二へ

金原さん、あなたの若々しいポートレート三葉の写真にひきつけられて、お便りします。あの三枚目の写真の表情は、うっとして縛られた時に出す女性の表情そっくりでした。私はまだ一度もプレイをしたことはありませんが、写真の方は普通のカメラ、8ミリ撮影と長くやっています。お友だちになれたら、プレイをしていいのをとってあげたいと思います。もしおよろしければ、お友だちになってください。私はまじめな国家公務員で秘密はもらしたりはいたしません。お便りください。

○ (四国・山端寿美男)

初めてお便りします。私、数年前、出張先の本屋で偶然奇クを買って以来、他の雑誌には見られない異端的な内容に心をひかれ、出張するたびに本屋に立ち寄り、奇クがあると買って読んでいる者です。私の出張も毎月一定した日に限っているわけではないので、私の出張した日と奇クの発売される日が一致しないと買えない月もあります。ですが、それでも年に九冊か十冊は手に入ります。その為、毎月二十五、六日頃に出張できることを望んで楽しみにしています。今

まで静かに奇クの一愛読者としての位置に安定していて、只読むとだけで楽しんでおりましたが、誌上では多くの方々が活発に通信を寄せられたり意見を述べられたりしているのを見て、羨ましくなり自分もと初めてお便りを出した次第です。今後共、末永く発刊されることと、愛読者の方々の御健康をお祈りいたします。

○ (千葉市・時田生)

奇クを永らく愛読し、常に無限の楽しみを人生に味わっております。夫婦でのプレイは五、六年前頃よりやっております。目下のところは妻とのプレイを8ミリでとり、二人で写して見て、又次のプレイのやり方など話しております。が大体サド的なものが多いです。できましたら同好の方々と楽しみを共にしたく思います。遠方の方でしたら、お互いのプレイの8ミリを交換して技術?の向上に努めたく考えますが如何ですか? お便り下さい。(松山市・榎本)

○ 愛読者の一人です。どうぞよろしくおねがいします。昨年三月号を求めて書店廻りをし、ついに無事入手いたしました。それと同時に



に九月号も入手出来、我れながら今日はついていると満足、帰宅そうそうページを追う目は異様なくらいだったことでしょう。早速ですが私はゴムマニアです。オムツカバー、浣腸、下着などです。いづか貴通信欄をお借りしてと、思いつきながら、なかなか勇氣とチャンスにめぐまれず、今日までに至りました。九月号の神戸の山下和子様、私も兵庫区に住む船関係のエンジニアです。私と貴女様は、家に帰ると、なさることが共通するところがあります。私は心から敬意を表します。私も現在、生ゴムのカバー、バンド、黒のエネマ、生ゴム張りズロース（自作改造）浣腸器、B・S・P下着などのようなマニアです。時々浣腸してオムツカバーをつけ、上からズロースを着用して新開地などを歩きます。その時の気分、感触、スリルは、いいですね。又、家にて一人浣腸プレーなど大いに楽しんでおります。誌面によれば貴女様の現在御使用中の物、お譲り下さることですが、よろしかったらカバー、おむつ、等お譲り下さいませんか、お願いします。

（神戸市兵庫区・渡部和男）

愛読者の皆様、今日は。小生もこの欄に仲間入りさせて下さい。昨年つとめに出たはやはやです。で、毎日毎日がたのしくご機嫌です。愛読の若き淑女の皆さん、ぜひお便り下さい。奇くは非常にお願いします。小生の未知のことが山積していて、人生勉強の一つとして愛読しています。女性の方の御意見御感想などをお聞かせねがえれば幸いです。どんどん語り合い周囲の環境にも屈せず一層充実した奇くを、我々で育てあげようではありませんか。申しおくれましたが、小生は大手町に勤める二十四才の一青年です。

（東京都・加藤ひろし）

私は先月号のサロンに出させて頂いた東京の藤原育男です。皆様いかがお過しのことですか。又、今年も各プレイにお忙しいことでしょうか。蔭ながら健斗をお祈りいたします。通信サロンに出して間もないのに又、手紙を出して、ずい分せっかちな奴だと皆様は思われちゃいますね。実は私は、度々奇くの夫婦プレイで拝見する愛知葉子様が忘れられません。その理由は、前月号のサロンでも書いたように、中年の肉づきの良い方

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もえ

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もゆ

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もよ

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もす

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もせ

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もれ

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もる

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もて

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もな

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もね

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もむ

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もう

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もき

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もこ

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷富佐子 略号 八もみ

浴後の剥玉子縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八はゆ

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 八はよ

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 八はて

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八はお

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 八はの

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 略号 八はひ



とフォトを見て思いました。私は貴女様のような方を見ていると体の中から血が騒ぐ思いです。葉子様、私は、こういう性癖を持っているSの男です。それは、貴女様のような肉づきの良い丸い大きなお尻に、六尺褌をかけて、更に豊満な尻部にしたいと蔭ながら思っても、所詮は無理ですね。そこで私のお尻マニアと同時に、女性に褌をかけることを、ひそかに願う者のために、又愛知ご夫婦のファンとして、私のできないことを私に変わって実行してみて下さい。その結果をフォトでも又、サロンでも良ろしいから発表して下さい。東京に住む読者のご夫婦の方で私の悩みを解決してくれるご主人、並びに奥様、よろしく。お手紙待ちます。(東京・岸尾盛男)

六尺フンドシ・マニヤの皆様、いかがお過ごしでしょうか。私は四年前から六尺ふんどしを着用いたしております。三月号の通信で私と同じ愛媛県内に住む川江芳子さん、貴女の通信、私は嬉しく読ませて頂きました。芳子さん貴女からのお便りお待ちしております。奇くは二年前から私一人の秘密として私書函を通じて受け取ってお

ります。三十二年から三十九年までの古い本お持ちの方、私におゆずり下さいませんか。本誌を送り下さいました方々には、私が持つております美しき縛りフォト写真百二十数枚、又は男性の方にはご希望によりましては、私の着用のふんどし数十本ありますので差し上げます。同性ふんどしマニアの皆様からのお便り、楽しみにお待ちしております。どうかよろしくおねがいいたします。(川の江局・越智かおり)

大阪の金原奈加子様、貴女の告白、大変たのしく読ませて頂きました。我々S男性にとって、貴女のような人がどしどし現われるのは、とても嬉しいことです。貴女が日夜なやまされ、色々と妙な空想がおこるのは、やはりMの血が騒ぐのではないのでしょうか。私は三十二才になる、平凡な会社員です。奇くとのつきあいは十五年ぐらいになります。私も以前からM女性とプレイをしてみたいと、この欄をお借りして呼びかけたこともございましたが果さず、最近では妻をMに飼育中です。しかし私どもには幼い子供がおりまして、どうしても十分なプレイができま

## 開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号△はわ▽ 五〇〇円

## 全裸の女体立ち縛り

中河 恵子 略号△はわ▽ 四〇〇円  
大手札三枚一組 略号△はふ▽ 四〇〇円

## 黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほ▽ 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はほ▽ 四〇〇円

## 悦慮に身もだえる美女

大手札四枚一組 略号△はあ▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はあ▽ 五〇〇円

## 菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はう▽ 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はう▽ 四〇〇円

## 柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさ▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はさ▽ 五〇〇円

## 卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめ▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はめ▽ 五〇〇円

## 無防備の女体を開隙

大手札四枚一組 略号△はし▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はし▽ 五〇〇円

## 遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はも▽ 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はも▽ 五〇〇円

## 若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむ▽ 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はむ▽ 四〇〇円

## 後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめ▽ 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はめ▽ 四〇〇円

## 悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はも▽ 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はも▽ 四〇〇円

## ムチ打ちの陶醉境

大手札三枚一組 略号△はさ▽ 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はさ▽ 四〇〇円

## 両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△はし▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はし▽ 五〇〇円

## 後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はす▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はす▽ 五〇〇円

## 強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせ▽ 四〇〇円  
大島 照代 略号△はせ▽ 四〇〇円

## 両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆ▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はゆ▽ 五〇〇円

## 竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はた▽ 四〇〇円  
大島 照代 略号△はた▽ 四〇〇円

## 厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はち▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はち▽ 五〇〇円

## 責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつ▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はつ▽ 五〇〇円

## 竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はて▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はて▽ 五〇〇円

## 竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はと▽ 五〇〇円  
大島 照代 略号△はと▽ 五〇〇円



せん。やはり貴女のような若い女性と十分なプレイをしたく、貴女のような人の現われるのを待っておりまして。貴女は、私好みの仲々可愛い方だし、肉づきもかなり良さそうです。私は貴女をこの手で丸裸にし、縄でひしひしと縛り上げる。そして口にはパンティをつめ込み、丸裸のお尻を平手打ちします。私は貴女の空想を実現させて上げます。

○ (尼崎市・松岡生)

瀬沼四郎さん、あなたはハラミ女だけに興味をお持ちで、私のように妊娠してなくてもハラミでるようなお腹してる女には何とも思わないのですか。世の中には私のような女もいることを知って下さい。私は妊娠こそしてませんが、普通の女性の七カ月ぐらいのお腹はしてるつもりです。けれど私は体全体が、そんなに明るくはないほど肥満してるのではありません。ほとんどの肥った女性は、身体全体が肥満していて、そのお腹は幾重にも段になりブヨブヨとした感じの人が多いのです。私は体重は現在六十キロですが、そんなに顔や手足は肥ってません。ただお乳だけ異常なぐらい大きく、最近はい

少し垂れてますが、決して張がないわけではありません。バストを計りますと百八センチはあるでしょう。私ぐらいのお乳はそうザラにないと思います。又、私のお腹は、お乳の下、胃のあたりからおへそのあたりまで大きく出て、おへそから下までは一段と前へつき出てます。私のおへそは恥ずかしいぐらい深い溝になってます。私は時々ですが、お腹にサラシの薄いのを巻く時があります。立ったり坐ったりする時、すぐ大儀ですが、私はこのサラシを取る時が素晴らしいので、巻くだけなのです。食事の前にサラシを巻き、食事をして腹が大きくなるときつくなります。私は姿見の前で裸になり、このサラシを少しずつほどくのです。このサラシが最後の一卷ぐらいの時に、私はお腹をいきなりふくらませますとサラシは一人でにほどけ、大きなお腹が丸々と突き出、すぐく私は嬉しくなるのです。私は、鏡の前でお腹を見ながら両手でなで廻し、脇腹からおへその方へとマッサージをしたり下腹を両手で軽く持ち上げたり、腹づつみを打ったりいたします。瀬沼さんも、この私のお腹を見れば妊婦だけがどうのこうのと言わ

中河恵子新趣向写真

大手札印画紙極鮮明焼付フオート

片脚挙げて晒す裸身

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

のにも困るぐらいになってもよいとまで考えています。

○ (仙台・美川美美子)

奇クファンの方々お元気ですか小生は二十八才になる、独身男です。今日こうして皆様の仲間に入れて頂いたのは、他でもありません。私も奇クファンになってか



ら早いもので、六年目を迎えました。でも残念ながらまだ一度も女性の方とプレイを行ったことがなく、それに呼びかけの方も仲々むずかしいのではと、小々弱気になつてしまう時もあるのです。でもむずかしいからやめてしまうことは中途半端なことだし、それに後悔のもとにもなります。でも私にはファンの方がたくさんいる、そう考えると、どうしてもペンをとらずにはいられなかったのです。

読者通信のページを拝見しても、女性の方が少なくて残念で仕方がないので、でもきつと世の中には沢山の女性のファンの方がいると思うのです。どうか私のよきプレイ相手になってくれませんか。秘密は絶対に守ります。私は余りハンサムな男でもありませんが、きつと貴女の求めるM性を引き出して楽しくプレイ出来ることをお約束します。もちろん貴女の思うように縛りにも気をつけながら演出します。でも、もし縛りを私にまかしておくとおっしゃれば、それに越したことはありませんが、私は普通の縛りではなく、例えば両手を出来るだけ背後に吊り上げます。吊り上げるといっても、組み合わせた両手首は平常よりやや

上の方にという意味なのです。海老責めの縛りなどは、女体が一層美しく見える一つのコツですからとにかく私が自分であれこれ想像しても貴女に相手になつてもらえなければ、どうすることも出来ませんので、こんな私の気持ちをよく理解して頂ければ幸いです。一日も早く貴女が現われることを信じて、今日はお別れします。グラマ—な美女よ、ぜひ、ぜひ、ネ！

(東京・山田信一)

○ 美川芙美子様へ。屋外は小雪混りの北風が吹いているが、室内にはストーブが赤々と燃え、二人の額には薄っすらと汗さえにじんでいる。貴女は私の顔を豊かな双丘の谷間に押しつけ、両ほほに柔らかな感触を感じつつも、息の出来ない苦しさに顔を真赤にして逃れようとしている私。次に私が、豊かな双丘が、より盛り上がるようにロープで締めつけた乳房を横目に腹部のそれも、臍の上を蜂の胴のそのように締めつけます。上から見ると完全に体内に入り込んだロープは、ほとんど見えません。ロープで二分された腹部を強く押してみました。上部は胃があるためか多分に弾力性がありますが、

下部は殆んどなく、張り切った皮膚はパチンと音をたてて今にも破れ裂けそう。その腹部を鋭利な西洋カミソリで、スーッと縦に引いた。「しまった、大変なことをした」自分のその声に目が覚めましたが、体は汗でびっしょり。これは貴女の手記を読んだ夜のことでした。女性の体はバストやヒップも美しいですが、何といってもウエストが一番だと思います。それも細いそれではなく、大きければ大きいほど、ポッテリふくらんだ腹部、高圧浣腸や妊娠を含めて、最高だと思います。このように書いて、仮りにそのようなチャンスにめぐり合わせても恐らく興奮と恥かしさで顔を挙げられない私でしょう。末筆ながら健康に充分注意されました我々「女性腹部礼賛者」のアイドルとして、ますます御活躍下さい。

(奈良・橋本一美)

○ 二月号は三日ほど買うのを忘れていましたのですが、もし売り切れてはいないかと心配して本屋にいきましたところ、二冊だけ残っていました。やれやれと思いい、まるで宝物でも探しにいったように思いながら買い求めました。早速

家に帰ってページをめくりましたが、私の期待していたナオミ様の画が、どのページにも出ていませんので、残念でたまりませんでした。しかし中の文面は益々充実しました。特に留美様のポーズは気に入りました。もう少し下部の方を見られたら、もっと良かったと思います。下部はカットされていることはわかりますが、ショーツか生ゴムを着用したら写せると思います。私の希望ですが、留美様の丰满な尻に縦縄がきつく入っているアップの写真を次号にお願いします。夫婦プレイ・レポの画はよく画けて魅力的でした。最近長靴をはいた女性や、皮の上衣を着た女性をよく見かけますが、あの女性の人の大きな尻の下に敷かれギューギュー押さえられて息も絶え絶えにされ、最後には生暖い小便を飲まされたり、皮の上衣を頭からかぶせられて縄で巻きにされてその上を大きな尻で押さえられて見たかと思つています。そのことは私の夢と思いますが、編集部様におねがいします。もう少しだけいたんに、画や写真を大きくのせて下さい。又、M男性のものを大きくねがいします。留美様と一度で



# 次号(五月号)は三月二十五日に発売します。

もよいのですが、一しよに私はM男性としてモデルにでもしていただきたいと思えます。又、留美様の下着類の古いものもゆずって下さらないものでしょうか。一度お話し下さい。次号にはぜひ、ナオミ様の画とM男性の画や文章を沢山のせて下さい。勝手なおねがいですが、私の思ったことを、かくさずに申し上げました。

(大阪・岸和田生)

○

忘れもしない十二月三日、妻の気持が少しは好転するかと、是非にといった読んでもらった「憎縄の記」その他に対する妻の反応は奇クには最早、そのことを知らせる気力も失せるほど冷いあしらいでありました。それは皆さんに不快を与えるに違いないのですから省きます。心から愛をつくしても判ってくれない女性は何詮、不可解な存在であると、シャルドンヌ先生は書いておられますが、妻いわく「妻なのだから義務として縛られて上げる」と。けれど願ひ下げにしたい。愛に燃えているからこそ縛りたいのだ。義務なんか

で縛られていただきたくない。瘦せても枯れても、私は人間性を持つてゐるつもり。動物ではない。人情、愛情なくして何の縛りぞや義務で縛られて上げるんだよといわれながら、縛って喜ぶほど私の神経は、にぶくない。最早、妻を縛りたいと思うことは、何としても諦めます。ただ奇クある限り、それを読むだけでなぐさめられます。本当のことをいえば、妻が嬉しがってくれてこそ縛りは楽しいのだ。義務で縛られてくれるんだと思うだけで、百年の恋も覚めてしまう。第一「妻だから嫌だ」で縛られて上げる」などというが夫にそんな権利はない。

(山形市・丸出だめ夫)

○

私は「花と蛇」の愛読者です。私は、この連載物を途中から読んだのですが、今度特集号が出ましたので早速、入手して通読しました。全篇、息づまるような迫力あるシーンの連続で、一気に読み終えました。特に感銘をおぼえたのは、これが女性改造の物語だということ。上流社会の貴婦人で

あった静子夫人が、きびしい調教によって全く新しい女性として開花し甦生していく過程が、実に鮮やかに描かれています。そういう意味では「O嬢の物語」以上の傑作だと思えます。今後ますます彼女は魅力あふれる女性として磨き上げられていくことでしょう。京子達四人の女性も当然、静子の歩いた道をたどって成長していかねばなりません。今後の展開が楽しみです。同好の士の御意見をうかがえれば幸いです。

(横浜市・島田きよし)

○

始めて投稿させていただきましたが、私は奇クを愛読して三年になります。今まで理想の女性を求めてまいりましたが奇持が小さいせいか、めぐり逢いませんでした。めぐり逢えなかったというよりも逢おうとしなかったのです。でも今はちがいます。本を読むだけでは自らを慰めきれません。S・Mプレーをしたいのです。私はS・M半半ぐらいです。プレーをしたことはありません。どなた様でも良いのですがプレーを教育して下さる方はおりませんでしょうか。当方は二十才、一七〇センチ、六五キロ、中年の女の方に凄く興味

があります。お互いの秘密は絶対に守ります。私のような男性を可愛がってくれる中年の女性からの御返事がありますことを神に祈る気持です。仙台の美川美子様、貴女のような方が仙台におられたことは夢にも思っておりませんでした。貴女様といつかプレイのできる日を楽しみに待っています。私もプレイについて大いに勉強して、貴女様のなっとくの行くプレイをしたいと思えます。

(仙台・村越宣夫)

○

二月号にて誌上発表なさった中野様、あなた様の文面、嬉しく拝見いたしました。しかもその内容の一字一句まで強く興奮と魅惑を感じられてなりませんでした。それは私が強烈なマゾ趣味だからだと思えます。中野様は趣向で今までに十三人もの体格のよくピチピチした水着姿の少女を背に跨がらせ、尻責めにされたそうで、羨ましくてなりません。私は誰一人として相手にして下さる人もなく、そのため日夜、苦悩しています。ことに水着姿の潑刺とした肉付きのよい太腿、大きなヒップの下敷きになれたら、どれほど私も生きがいがあるか分りません。そのよ



うに日夜想い悩むばかりで、現実  
は飢えと渴きで想いを遂げること  
はできません。中野様、私を憐れ  
んで、せめて今までに撮された写  
真でも頂戴できませんか。

（大阪・犬男馬男）

奇ク一月号で全国のM男性ども  
に呼びかけの東京、佐藤喜久子  
様、久しぶりに海外より帰朝して  
参りました途端、生れながらの典  
型的なS女性とおっしゃる峻厳な  
クイーンのお言葉に圧倒されまし  
た。ぜひお目にかかって色々とお  
話承りたく何分の御指示のほど伏  
してお待ち申し上げます。

（東京・三原寛）

○

皆様ご機嫌いかがですか。早い  
もので奇クを愛読するようになり  
まして早や一年たちました。毎号  
興味深く読ませて頂き、発売日  
待ち遠しい思いをしています。そ  
の間、懸賞告白のつたない作品を  
掲載して頂いたこともございまし  
た。愛読しはじめて一年間、今で  
は片時も離せぬものとなってしま  
いました。そして愛読者の方々と  
ご交際して頂ければ、こんな幸せ  
はないと思います。でも私は家庭  
の主婦でありますので時間的に余  
裕がなく残念ですが、月に一回ぐ  
らい、それも昼間の数時間、ご交  
際して頂ければと思っています。

私は浣腸や鞭には興味ありません  
ので、ご遠慮ねがって、その他の  
ことなら、どんなご要望でもお答  
えしようと思っています。三十二  
才の平凡な主婦ですが秘密を守っ  
て、おつき合ひして頂ける方がご  
ざいましたら、こんな嬉しいこと  
はございません。

（名古屋・川村順子）

一寸、文面で無沙汰しておりま  
したところ、三月号に突然「京都  
美恵子様」のお便りで、小生の名  
が出てお誘い？の文を拝見して早  
速、筆をとりました次第。今更告  
白するまでありませんが、小生の  
肥満女性愛好病？は重症のよう

で、各種雑誌のグラビア（印刷物）  
より集めた大小の写真約百五十枚  
ほど特製アルバムをつくって保存  
しておりますが直接カメラで撮影  
はなかなかできなく数枚程度で、  
止むなく毎日見ている女房の着衣  
セミ・ヌード、ヌードを写してお  
茶を濁している現在、天にも昇る  
心持で、ぜひ「信用できる同好者  
ならば……」云々に合格すれば誠  
々に、ご交際ねがいたいと思いま  
す。最近見たイタリア映画「ナポ  
リと女と泥棒たち」でバックにナ  
ポリ市民の肥満中年女性がワンサ  
と登場、楽しい映画でした。

（滋賀・赤畑修造）

# 本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通  
り在庫しておりますが、39年に発  
行のものについては在庫の僅少な  
ものもありますから、お早い目に  
御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負  
担しておりますが、今後は三カ  
月以上予約注文以外（既刊号は  
含まず）は一部につき送料二〇円  
の御負担を願います。多数一括し  
てお求めの際は八小包Vにて発送

申し上げます。

昭和40年5月号	昭和40年4月号	昭和40年3月号	昭和40年2月号	昭和39年12月号	昭和39年11月号	昭和39年10月号	昭和39年9月号	昭和39年8月号	昭和39年7月号	既刊雑誌在庫案内
（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	（送共三二〇円）	



# ☆編集後記☆

○久しぶりに執筆して下さった黒淵嬰一氏の『贗作イーリアス』は野心作として味読して頂きたい。始めて投稿された津川博氏の告白ハスカタロジに憑かれては往年の芳野眉美氏を思わせるものがある軽妙な作品。  
○今月号の呼び物はなんとといっても、緊縛の人氣スター辰巳典子をハントした辻村隆氏の「陶酔をよぶひとの名は」であろう。Mストリーとしては、好評のみはら・ひろし氏のハ中立地帯Vがエキゾチックな妖しいムードを漂わせた力作。Mファン必読の作ならん。  
○着々と確実な読者を獲得している斎藤夜居氏の『稿談性風俗資料入門』は興味津々としてオールドファンには懐かしい文献の紹介である。

る。水沢登氏のハあぶらぶす・こんとVはまことに軽快洒脱、今後の氏の健筆を大いに期待したい。安井喜久子夫人の理解ある態度に甘えてインタビューに出席して貰った。  
○繁忙な仕事の合間を縫って団鬼六氏を煩して「鬼六談義・男と女の話」をものして頂いた。人生の機微を味って頂ければ幸である。  
○最近のモデル志願者に混って、割合しっかした文章を書く長井葉津子氏の作を入選とした。短いのが難点だが、これに勇を得て更に長い文を書かれるよう要望したい。  
○芳野眉美氏の『濡れにぞ濡れし』は久方ぶりの快作。牧高志氏ハ振袖残華Vは終始一貫氏の持味を活かしての粘著性のあるなつかしい風俗断片。読む雑誌としての内容を充実するため努力することを誓ってペンをおく。

## ◎懸賞原稿募集

### △体験、告白、手記V

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

### △創作、小説、物語V

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限りません。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

### △感想、論評、批判V

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのままとめて下さい。採用篇

には賞金二千円以上を贈呈いたします。

### △(映画、雑誌)通信V

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

## ☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円ハ送20円V  
三月分(3冊)一〇五〇円ハ送共V  
半年分(6冊)二一〇〇円ハ送共V

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

## 奇譚クラブ 定価 三五〇円

四月号 〔第二十二巻第五号〕  
昭和四十三年三月二十日 印刷  
昭和四十三年四月一日 発行

編集人 箕田 京二  
発行人 吉田 稔  
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

## 発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番V  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等にとめ、青少年の健全なる育成に因する各条例に指定されないうち、本来成人向として編集いたしておりましたが、本誌の趣向として、十八才未満の方には絶対販売下されません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。